芭蕉発句全講

II

阿部正美著

明治書院

目次

凡　例

一、句の排列は成立年代順とし、年代の明らかでないものは、推定時期の下限を以て排列の基準とした。概ね拙著『芭蕉伝記考説』作品篇の年代考定に準拠したが、その後の私見によって修正したものもある。

一、注釈は最初に発句の本文を掲げ、以下、季語、語釈、大意、考の各項にわたって細説する。句形は諸種あるうち、最初に掲げるものを本位句とし、年代の古い最も信頼し得る俳書或いは資料の本文を掲出して、他の同句形のものは書名・資料名を挙げるにとどめた。本文の下の括弧内が本文の拠った書名・資料名である。本位句には句頭に番号を付した。

一、本位句の次に、順次異形を挙げた。掲出の要領は本位句と同じである。これら凡て濁点を加へ、底本にある濁点は右傍に（ママ）と注記した。

一、異形のうち、年代の降る書に見える小異などは、本文として掲げなかったものもある。

一、句の前書に関する語釈は、本位句の前書についてのみ記し、他は省略した。異形句の前書も含め、本文として挙げなかったものは、「考」の条の初めにまとめて掲げた。

一、「考」の条では、成立年代、推敲過程、解釈鑑賞上の要点等、多岐にわたる問題を扱った。

貞享三年

253

幾霜に心ばせをの松かざり

（貞享三年其角歳旦帳）

あつめ句・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・栞集

春季（松かざり）。

語釈　○**幾霜**　「イクシモ」。何度もの霜、何年もの歳月。「霜」は「星霜」と同じく歳月を意味する。「幾年（とせ）」「幾代（よ）」も同じ。○**心ばせを**　「心ばせ（こころ）」と「芭蕉」の掛詞。「心ばせ」は、心の働きをいい、ここでは「心意気」といった意に用いられている。「蕉」の字音、正しくは「セウ」であるが、古くから「せを」と書く慣用があり、芭蕉自身も号を仮名書きする場合は「はせを」と書くのが例であった。なお〔考〕の条にいう『古今集』の歌を参照されたい。「おれもちつくり心ばせを見せべいとおもつて」（『雑兵物語』下）。○**松かざり**　「松飾り（まつかざ）」。正月に家々に立てる門松のこと。「松かざり伊勢が家買人は誰　其角」（『あら野』巻二）。

大意　この芭蕉庵の松飾りは、幾年月の霜にもめげない庵主の心意気を示すものだ。

考　貞享四年秋の真蹟「あつめ句」とその摸刻『栞集』には、貞享二年の歳旦吟「たがむこぞ」の句の次に、「またのはるは、あむにありて」と前書があり、貞享三年の其角歳旦帳にあることと相俟って、三年の歳旦吟たることを証している。また、『蕉翁句集草稿』には、前記「めでたき人の」の前書と句を記した後に「さればこそ」と前書して「幾霜に」の句を出し、「此歳暮・歳旦、自筆に見ゆ。瓢竹に有」とあり、二句を記した真蹟が伊賀上野の瓢竹庵

（岡本苔蘇亭）に所蔵されていたことが分る。これで見ても「めでたき人の」と「幾霜に」の二句は一連の作とすべきものであった。門人の喜捨に頼る草庵の隠者生活に安んずる自得の心境を詠んだ句の後に「さればこそ」とあるのだから、この句に示された「心ばせ」は、安定した心境に住して、自ら信ずる俳諧の道に邁進しようとする心意気でなければなるまい。幾年の霜にも緑の色を変えない「松」にかけて、歳旦吟に相応しく自分の意気と信念を述べたのである。「心ばせを」の掛詞については、『古今集』巻十、物名に見える「いさゝめに時まつまにぞ日はへぬる心ばせをば人に見えつゝ」（紀乳母）という歌と全く同じ技巧であり、この歌には「松」の語も隠されている。この句を作る時、芭蕉の脳裡には必ずやこの古歌があったであろう。

三月廿日即興

254 花咲て七日靏見る麓哉　（ひとつ橋）

華ざかり七日鶴見る麓かな　（水の友）

あつめ句・真蹟十句懐紙・芭蕉翁記念館蔵真蹟五句懐紙・続蕉影余韻所収真蹟懐紙・蕉影余韻所収真蹟懐紙・観魚荘蒐集展観図録所収真蹟扇面画賛・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・宝の槌・花声・栞集

春季（花）。

語釈 ○**即興**「ソクキョウ」。その場の興で作った句の意。「是は即興感偶にて、ほ句たる事うたがひなし」（『去来抄』先師評）。○**花咲て**「花咲きて」。この表記では「花咲いて」と音便によんでもよいが、真蹟の「あつめ句」に「花さきて」（「き」は「支」の草体）と仮名書きしているのに従うべきである。「花咲かば告げんといひし山里の使は来たり馬に鞍」（謡曲「鞍馬天狗」）「**Fanaga saqu.**」（『日葡辞書』）。○**七日靏見る麓**「七日靏見る麓」。俗に「花七日」といって花の盛りの短さをいう諺があり、鶴は下りると一箇所に七日とどまるとも言われる。それに基づいて、ここで花と鶴を結びつけて趣向としたのである。挨拶の句として、鶴には鈴木清風が擬せられていよう。〔考〕参照。「靏」は、「鶴」の俗字。「麓」は、詠作の場所を示す。「その場所が、山の麓だったのである。おそらく清風の江戸の仮寓だから、山と言っても待乳山か愛宕山か、上野東叡山あたりの麓なのであろう。市中の丘だか

ら、麓というのは誇張だが、誇張することでこの句の情景を田園化するのである」（山本健吉氏『芭蕉全発句』）「見あげしがふもとに成ぬ花の滝津島俊似」（『あら野』巻二）「Fumoto.」（『日葡辞書』）。

大意 花が咲いて見事な眺めだ。「花七日」というが、鶴も下りて来て花を賞するかのように、七日の間この麓のあたりに見えることだ。

考 「あつめ句」と『栞集』に「華」と前書があり、出羽尾花沢の鈴木清風の撰した『ひとつ橋』（貞享三年九月友静序）に初出する。同書にはこの発句を始めに、清風・挙白・曾良・コ斎・其角・嵐雪らの連衆による歌仙が収められており、顔触れからして江戸での興行と推定される。清風は尾花沢の特産紅花を商った豪商で、『おくのほそ道』の旅の途次芭蕉もその家に滞在しているが、商用で京・大坂や江戸に出て来ることも多く、現に貞享二年六月にも、江戸の小石川で芭蕉・其角らと百韻を成している。前書の「三月廿日」は貞享三年と考えてよく、清風が亭主として「懼て蛙のわたる細橋」と脇を賦しているから、場所は不明ながら江戸での清風の仮寓で俳席が設けられたのであろう。

句は花に鶴を配して、闌わの春色を歌いあげたもので、「七日」で両者を結びつけたのが趣向である。それに、挨拶吟として、鶴を清風に擬したことは動くまい。古風な比擬の手法を嫌ってか、「嘱目の風景を詠むことが、清風への挨拶となるのだ」（山本氏『全発句』）という見方もあるが、この時代それではピンと来ない。清風にしても談林以来の俳歴はあるにせよ、作品はどうも旦那藝の域を脱け切れない人であった。野ざらしの旅で京の秋風に挨拶した時のように、そういう人に対しては芭蕉も調子を下げたのではあるまいか。兎に角近時の解釈で鶴を清風に擬したと見るものが増えているのは正しいと思う。従って、この鶴は必ずしも実景でなくてよく、仮想の所産であって一向構わないのである。

『水の友』（松琵撰、享保九年刊）の句形は、後年のものゆえ問題にはなるまい。元文期の『芭蕉句選』には「鶴下りて七日花見るふもとかな」という句形が現われるが、これは原の句形を解し兼ねたものか、却って平凡化して、「花」

の印象も薄いものになってしまった。

隣菴の僧宗波たびにおもむかれけるを

255 ふるすたゞあはれなるべき隣かな　（あつめ句）

続深川・栞集

春季（ふるす）。

語釈 ○**隣菴の僧宗波**　「隣菴（りんあん）の僧宗波（そうそうは）」。芭蕉庵の隣なる草庵に住む宗波。この僧は黄檗宗の禅僧と伝えられ、後に江戸本所原庭なる定林寺の住職になった。この翌年秋には、芭蕉の『鹿嶋詣』の旅に同行しており、当時は深川に住んでいたのである。「菴」は「庵」と同じ。「此作者は松もとにてつれ〴〵よみたる狂隠者、今我隣庵に有」（極月五日付尚白宛芭蕉書簡）。○**たびにおもむかれけるを**　「旅（たび）に赴（おもむ）かれけるを」。「おもむかれ」の「れ」は尊敬。「明日は遠国へおもむくべしときかん人に、心閑になすべからんわざをば、人いひかけてんや」（『徒然草』百十二段）「Vomomuqi, u, ijta.」（『日葡辞書』）。○**ふるす**　「古巣（ふるす）」。雛鳥が巣立った後の巣をいう。留守になる宗波の庵をたとえた。「鳥の巣・鳥の古巣・鳥のさえづり、皆春也」（『御傘』）「Furusu.」（『日葡辞書』）。○**たゞあはれなるべき隣**　ひたすら寂しく物あわれになって行くであろう隣。「隣」は芭蕉庵から見ての隣で、宗波の庵を指す。これから別れるので、未来の事として「べき」を用いた。「酔ざめの水の飲たき比なれや　傘下　たゞしづかなる雨の降出し　越人」（『あら野』員外）「花売に留主たのまるゝ隣哉　野水」（『あら野』巻六）「Tada.」「Tonari.」（『日葡辞書』）。

大意 あなたのお立ちになった後のお隣は、鳥の古巣のように、ただもう寂しく物哀れになって行くことだろう。

考 『続深川』には「桑門宗波行脚せんとてたび立けるを送る」と前書がある。初出は貞享四年秋の「あつめ句」であるが、その前年の閏三月十六日付寂照（尾張鳴海の知足の法号）宛芭蕉書簡の追而書に次のような文面が見える。

此僧二人拙者同庵に而御坐候。上京修行に被出候而長除草（ママ）臥可被申候間、二三日御とめ休足いたし通候様に奉頼候。……今程御閙敷時節に御坐候間、如風様御方に御とめ被成被下候様に奉頼候。／大キウ和尚拝いたし度ねが

いに御坐候間、其段も奉頼候。

また、『知足斎日々記』貞享三年閏三月の条によると、二十三日に芭蕉の手紙を持った宗波・鉄道二人の僧が知足方を訪れ、三晩泊って二十六日に出立したことが知られるのである。句の前書にいう宗波の旅行はこの時の事にちがいなく、句は同年閏三月の作と推定される。芭蕉は商用などで忙しい知足に遠慮して、同地の如風の住持する如意寺に泊めてやって呉れと書いたが、知足は自分の屋敷に二人を泊めたのであった。なお「此僧二人拙者同庵」とあるのは、「隣庵」と大して変らない意味に用いたのであろう。芭蕉庵と同じ長屋なので斯う言ったのかも知れない。

宗波の住んでいた庵を、雛の巣立ったあとの古巣にたとえて、惜別の情を籠めた句で、表面では古巣があわれと言いながら、実は作者自身の寂しい気持を訴えている趣がある。「ふるす」「隣」共に芭蕉庵と見る説、「隣」は芭蕉庵とする説などあるが、穏当ではあるまい。「ふるす」「隣」共に宗波の庵を指すのである。安東次男氏の『芭蕉発句新注』は、『山家集』春の部から「ふるすうとくたにの鶯なりはてば我やかはりてなかんとすらん」「鶯はたにのふるすを出ぬともわがゆくへをばわすれざらなん」「うぐひすは我をすもりにたのみてやたにのをかべはいでてなくらん」等の歌を引いておられるが、こうした歌の内容や余情が句の発想に影響を与えているように思われる。情味溢れる佳句といってよい。

256

観音のいらかみやりつ花の雲　（真蹟懐紙）

昆沙門堂の花盛、四王天の榮花も、是にはいかでまさるべき。うへなる黒谷・下河原、むかし遍昭僧正のうき世ヲいとひし花頂山、鷲の深山の花の色、枯にしつるの林まで、おもひしられて哀なり

末若葉・泊船集・三冊子・蕉翁句集草稿

観音のいらか見やりつ花曇り　（芭蕉句集）

春季（花の雲）。

語釈　○**毘沙門堂の花盛**　「毘沙門堂の花盛り」。「毘沙門堂」は、今の京都市の上京区と北区の境あたり出雲路にあった天台宗の寺院。今は山科区に移っている。毘沙門天を本尊とするのでこの名がある。出雲路にあった頃、境内は桜の名所として知られた。○**四王天の栄花**　「四王天」は、仏説に須弥山の山腹にあるという四天で、東を持国天、南を増長天、西を広目天、北を多聞天といい、多聞天に毘沙門天が鎮座する。ここは前の「毘沙門」を承けて「天上の栄花」という程の意であろう。「栄花」は、華やかに栄えるさま。「片時ガ間ニ四万由旬ヲ飛越テ、須弥ノ半四王天ヘ逃上ル」（『太平記』巻八）「栄花の花も一時の、夢とはしら雲の」（謡曲「邯鄲」）「Xiuôden.」（『日葡辞書』）。○**是にはいかでまさるべき**　「是には如何で勝るべき」。毘沙門堂の花の美しさには、天上の栄花といえども勝ることは出来ない、というのである。反語の言い方として、精しくは「いかでかまさるべき」とあった方が良い。「畜生修羅の悲みも、われらにいかでまさるべき」（謡曲「歌占」）「Icadeca.」「Masari, u, atta.」（『日葡辞書』）。○**うへなる黒谷・下河原**　「上なる黒谷・下河原」。「黒谷」は、今の京都市左京区黒谷町。法然が浄土宗を広める為に本拠とした所で、本山紫雲山金戒光明寺がある。「下河原」は、東山区下河原町。「うへなる」は、「下河原」に対して置かれた語であろう。○**むかし遍昭僧正のうき世ヲいとひし花頂山**　「昔遍昭僧正の浮世ヲ厭ひし花頂山」。「遍昭僧正」は、俗名良岑宗貞。平安初期の歌人、六歌仙の一人として名高い。「浮世を厭ふ」は、俗世を捨てて出家入道すること。今の京都市山科区北花山河原町にある華頂山元慶寺は、陽成天皇降誕の時遍昭が発願草創した寺で、自らこの寺の座主となり花山僧正と呼ばれた。もう一つ、東山三十六峰の一に華頂山があり（現東山区粟田口粟田山）、桜の名所であるが、遍昭とは縁がない。この文は東山の花の名所を遍昭の遺跡と混同したのであろう。「御跡御弔ひのために、大原の寂光院に浮世をいとひ御座候を」（謡曲「大原御幸」）「Youo itoi xucqe suru.」（『日葡辞書』）。○**鷲の深山**　「鷲の深山」。本来は釈迦説法の地として名高い霊鷲山（天竺マガダ国の首府王舎城の東北にある）のことであるが、ここはそれを京の東北に聳える比叡山に擬したもの。「深山」は「御山」と同じ意の宛字と思われる。「半ばは雲に上見えぬ鷲の御山の名を残す、寺は桂の橋柱」（謡曲「熊野」）「Vaxi.」（『日葡辞書』）。○**枯にしつるの林**　「枯れにし鶴の林」。釈尊入滅の時、傍らの娑羅双樹が白い鶴のように白く変じたと経文に見えるところからの表現。ここは京都東山の雙林寺（現東山区鷲尾町。花の名所）をなぞらえている。「二月の中の五日は、つるのはやしにたき木つきにし日なれば」（『増鏡』序）「Fayaxi.」（『日葡辞書』）。○

おもひしられて哀なり　「思ひ知られて哀れなり」。見る人の心にまざまざと分って感動を誘う、というのである。「しられて」は自発。「哀」は、もののあわれというよりもっと広い意味に見たい。「小塩の山も今日こそは、神代も思ひ知られけれ」（謡曲「小塩」）「Macotoni sorega saigotoua nochini vomoixirarete gozatta.」（『日葡辞書』）。○**観音のいらか**　「観音の甍」。「観音」は、今東京都台東区浅草二丁目にある金龍山浅草寺のこと。一寸八分の丈の観音像を本尊とするので、「浅草の観音」と呼び習わされる。「いらか」は、その屋根。「観音にふらついて居て目立也」（『柳多留』十一編）「四面新に囲て甍を覆て風雨を凌」（『おくのほそ道』）「Iraca, Iyeno tçuma.……Iracauo naraburu.」（『日葡辞書』）。○**みやりつ**　「見遣りつ」。はるかに眺め遣るのである。「うとふ啼そとの浜辺より、ゑぞが千しまをみやらむまでと」（「幻住庵記」米沢家蔵真蹟）「Miyari, u, atta.」（『日葡辞書』）。○**花の雲**　桜花の盛りを「雲」に見立てていう。「花の雲　正花也、植物なり、聳物也。花の雲、可二分-別一物の所に入たり。花を雲と見たるも、雲を花と見たるも、共に花の雲といふにより、植物・そびき物両方に嫌が尤なれば、誹にも新式のごとく用也」（『御傘』）「おもしろや理窟はなしに花の雲　越人」（『あら野』巻一）。

大意　雲かと紛う花盛りの眺めの中に、観音様の大屋根が見える。

考　真蹟懐紙は天理図書館蔵。その前書は謡曲「西行桜」の一節であって、墨譜を付けてある。京の花の名所を連ねた内容なので、前書に利用して興じたのである。露伴も、

前書といふものは前書でいろ／＼趣向のあり得るものです。前書に京都のことを謡そのまゝ載せて置いて、句は江戸の事を云ふ、そこが俳諧であり、機転でもあり、洒落でもあり、をかしみでありませう。（『続々芭蕉俳句研究』）

といっている。其角の『末若葉』（元禄十年刊）には、この句の後に「かねは上野か浅艸かと聞えし前の年の春吟也。尤病起の眺望成べし。一聯二句の格也。句ヲ呼テ句とす」と記してあり、成立時期を知ることが出来る。有名な「花の雲鐘は上野か浅草か」の句は貞享四年秋筆の真蹟「あつめ句」や、同年冬刊行の『続虚栗』初出なので、恐らく同年春の作と見られ、「観音の」の句は三年春の作と推定されよう。岡田利兵衛氏の『芭蕉の筆蹟』では、謡曲の詞章を前書にした真蹟懐紙の筆蹟を貞享後期体と断定しており、右の推定を支持するものとなっている。この当時芭蕉は前

書に時々謡曲の詞を利用していて、その面からも詠作の時期に疑いはない。

深川の芭蕉庵から浅草の方を眺めた花盛りの景色を詠じた句である。万朶の桜花の雲の中に黒々と浮ぶ浅草寺の大屋根に目をとめたところが面白いが、一寸見ると「みやりつ」が力無い表現のように受け取れる。しかし、前記『末若葉』の其角の文に「尤病起の眺望成べし」とあるのを想起すれば、ここには病みあがりの懶い気分があらわれているることが分ろう。ようやく病が癒えて、まだ気力の乏しい眼で見るともなく遠くを眺めやっていると、観音様の屋根が目にとまったわけだ。春闌わの時節の感じに病みあがりのけだるさが重なって、微妙な気分を醸し出しているのである。まだ江戸の町もそれ程人家の立て込んでいなかった当時は、深川から浅草辺まで眺望がきいたのであろう。

『末若葉』に「一聯二句の格」とあるところから、古注の『膝元さらず』(茂蘭著、明和二年成)は、菅原道真の大宰府での詩「都府楼纔看二瓦色一、観音寺只聞二鐘声一」(都府楼には纔かに瓦の色を看る。観音寺には只鐘の声を聴く。「不レ出レ門」。『和漢朗詠集』下)の俳諧化かと見ている。有名な詩句であり、「観音寺」という共通の語もあって、この句の時芭蕉の頭に菅公の詩句が浮んだ可能性は否定出来ないが、なお決定的とはいえない。ただ一年後の「鐘は上野か浅草か」の句と並べて見ると、この古詩が背景により鮮明に浮んで来るのは確かである。

異形としては、土芳の『蕉翁句集』貞享三年の部に下五を「花曇り」としているのが注意を惹く。蝶夢も恐らくはこれによって『芭蕉翁発句集』に収め、偽書『其角十七条』にもこの形で見えるのである。しかし「花曇り」では天候に重点が移って、花の印象が稀薄にならざるを得ない。且つ『蕉翁句集草稿』では「花の雲」の形を採った土芳が、何によって「花曇り」としたのか甚だ疑問である。やはりこの句形は誤写誤伝の類と見るべきであろう。

257

古池や蛙飛こむ水のおと（蛙合）

古池や蛙飛ンだる水の音（庵桜）

山吹や蛙飛込水の音（暁山集）

はるの日・あつめ句・番匠童・蕉影余韻所収真蹟懐紙・続蕉影余韻所収真蹟懐紙・出光美術館蔵真蹟懐紙・真蹟十句懐紙・蕉影余韻所収自画賛・蕉翁遺芳所収自画賛・出光美術館蔵真蹟短冊・柿衛文庫蔵真蹟短冊・某氏蔵真蹟短冊・財部氏蔵真蹟発句切・芭蕉翁記念館蔵真蹟五句発句切・泊船集・千句塚・蕉翁句集・蕉翁全伝附録・栞集

春季（蛙）。

語釈 **○古池**「フルイケ」。後述する支考の文によれば、深川芭蕉庵の敷地内にあったものらしい。年代を経てひっそりと水を湛えたささやかな池が想像される。「古池の水もあまらぬつゝみより菊ばかりこそ咲こぼれたれ」（『出観集』）「IQe.」（『日葡辞書』）。**○蛙飛こむ**「蛙飛び込む（かはづとびこむ）」。蛙が池の岸から水へ飛び込むさま。「蛙」は季語としては春季である。「惣別、蛙の句、云古して新み少なからん。西行上人の、うれし顔にもなく蛙哉とよみ給ひし此顔こそ、誠ニまざ〳〵と見る心地はすれ」（『篇突』）「夏の虫水に飛こむ蛍哉　定勝」（『毛吹草』巻五）「Cauazzu. P i, Cairu.」「Tobicomi, u.」（『日葡辞書』）。

大意 ひっそりと水を湛えた古池。蛙の飛び込む音がポチャリと響く。

考 この句、蕉門の集としては貞享三年閏三月刊の『蛙合』（仙化撰）に初めて見え、同年八月下旬刊の『はるの日』（荷兮撰）にも収められた。やや後年のものながら、支考の『葛の松原』（元禄五年成）に、

芭蕉庵の叟（ヲキナ）……春を武江の北に閉給へば、雨静にして鳩の声ふかく、風やはらかにして花の落る叓おそし。弥生も名残おしき比にやありけむ、蛙の水に落る音しば〳〵ならねば、言外の風情この筋にうかびて、蛙飛こむ水の音　といへる七五は得給へりけり。晋子が傍に侍りて、山吹といふ五文字をかふむらしめむかとをよづけ侍るに、唯古池とはさだまりぬ。

と詠作時の情況を伝えており、貞享三年の三月頃、江戸の芭蕉庵で成ったと考えてよかろう。小異ある形ではあるが、貞享三年三月下旬に刊行された西吟の『庵桜』に初出することから、成立時期を天和期まで溯らせる志田義秀博士の説（『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』）は却って不自然である。この句は貞享三年に出た俳書三点以前には全く所見がなく、特に蕉門の俳書として初出の『蛙合』はこの発句の成ったのを機縁として発句合が企画されたものなのだから、貞享三年の成立と見る方が遥かに説得力があろう。『庵桜』には三月初旬に訪れた鬼貫関係の記事もある程で、必ずしも三月下旬の刊行ではなく、実際はそれより後れるのではないかという山崎喜好氏の指摘もある（『芭蕉図録』解説）。この句が成るや忽ち評判を呼んで、談林派で上方住の西吟にまで知られるに至ったのであろう。「蛙飛ンだる」は談林風の立場からの賢しらかも知れない。また、貞門系の芳山が撰した『暁山集』（元禄十二年成）の句形にしても、恐らくは前記『葛の松原』の記事から出たものとおぼしく、推敲とは関係のないことと考えられる（乾・桜井・永野三氏編『芭蕉全句集』参照）。

「古池」というと、江戸時代も後期に近い梅人の『杉風秘記抜書』に見える「ばせを庵の傍に生洲の魚を囲ひたる古池あり」といった記事をつい連想してしまうが、この池が生簀の用に当てたものだったかどうかは分らない。『葛の松原』の文に従えば、芭蕉庵の敷地内に年代を経た池があって、それを採り上げたというまでである。鑑賞上は、別に特定の池である必要はなく、何処の古池であっても構わない。ひっそりと水を湛えたその古池に、一匹の蛙がポチャリと水音を立てて飛び込んだ。暫くその水音の余韻があたりに漂って、やがてまたもとのしじまにかえる。道具立といい用語といい、全く他奇のないもので、読者の印象に残るのは、そういう蛙の水音を抱え込んでひっそりと静まりかえる寂びた古池のたたずまいである。最初に「古池や」と提示された以上、句の世界の中心は古池でなければならない。この世界は発句の条件として「蛙」という春の季語を持つけれども、中心にすわるのは春の季節感というより、「古池」に象徴される永遠の閑寂味―寂び―であろう。「枯枝に」（I 122）の句にもあらわされているものが、こ

こでは「寒鴉枯木」といった型に嵌らずに出ているところが佳い。しんと静まって人々の胸に滲み徹る言い難い或る物は、この句の持つ独得の味わいである。

「蛙飛こむ水のおと」が先ず出来たというのは、恐らく事実であったろう。傍に居た其角は、「山吹や」という上五を提案したが、芭蕉はこれを採らず、ただ「古池や」と置いた。これについて文考は、

しばらく論（ルニ）レ之（ヲ）、山吹といふ五文字は風流にしてはなやかなれど、古池やといふ五文字は質素にして実也。実は古今の貫道なればならし。されど華実のふたつは、その時にのぞめる物ならし。……しかるを山吹のうれしき五文字を捨てゝ、唯古池となし玉へる心こそあさからね。頓阿法師は風月の情に過たりとて、兼好・浄弁のいさめ給へるとかや。誠に殊勝の友なり。

と論じている。「山吹」は華、「古池」は実、其角の案は風月の情に過ぎたもので、古今の風雅に貫道する「実」なるものには及ばないというのである。そればかりか、「蛙」に「山吹」は連歌以来の陳腐な付合に過ぎず、華やかは華やかでも、その景に新味は認められない。「古池」は、もっと内面的な深みを持つといってもよかろう。

一方、「蛙」は点景的存在ながら、これにも新味がある。「水にすむ蛙」は言うまでもなく『古今集』の仮名序以来和歌・連歌の世界に採り上げられて来たものであるが、たとえば『夫木和歌抄』蛙の部に挙げられた二十九首が凡てその鳴き声を詠んでいるように、従来はその「声」が風流人達の主な関心事であった。しかるに芭蕉のこの発句では、「飛こむ水のおと」を採り上げた点が新しい。これより以前、水に飛び込む蛙の趣が全く詠まれなかったわけではないが、人々が蛙にそのような趣があることを気づかされたのは、芭蕉の「古池」の句によってであった。この点は古注にも、「詩歌連歌には、称する所声に止り侍る。音にも聞どころを知れるは、翁のこゝに始りし」（康工『金花伝』）「古人は声のみ詠じ来れるに、其音をきゝ出して、はじめて正風を発起せられたり」（吾山『朱紫』）「水音にほそみあることを見出て、蛙声を詠ずるの古轍を追ず」（杜哉『芭蕉翁発句集蒙引』）等触れられていて、近時も支持する説が多い。し

かも、それと「古池」との配合は、更なる新しさであった。

……ぼちゃんと蛙が水に飛びこんだ卑近な滑稽に対し、「古池や」という初五文字を配したとき、滑稽は沈潜し、内面化され、閑雅な風趣が支配する。古池をただ古い池の情趣として（例えば、水草が生い茂っているなどと）詠むのではなく、古池に対してはむしろ思いがけない蛙の飛びこむ音をもって古池を写したところに、ただの閑寂ではない、俳諧としての閑寂が成立する。滑稽と閑寂とが微妙な平衡を保ち、相たすけて俳諧的詩情を深めている。（『鑑賞日本の古典・芭蕉集』）

と井本農一博士の述べられたのは肯綮に当っている。

この句については、支考が「古池や……と云へる幽玄の一句に自己の眼を開きて、是より俳諧の一道は弘まりけるとぞ」（『俳諧十論』）などといってから、蕉風開眼の句として世間にもてはやされ、禅的な境地と結び付ける見方も出て、芭蕉の句中では最も有名な句になった。しかし、野ざらしの旅の後の貞享中期という成立時期からしても、芭蕉がこの句ではじめて新しい自らの行く道を悟ったわけでないことは自明である。「秀逸の中にも、此吟には聞人さまぐ高上の意を添て弁ず。翁は不用意に出来たる句なるべし。その比、今の人のとやかく称るやうには沙汰あるまじ。年経て万代不易の妙に驚く」（東海呑吐『芭蕉句解』）といった説は、成立の消息によく通じたものといわなければなるまい。色々な見方が出来る句であるが、現代の読者はそうした代々の謂わば「手垢」を拭い去って、改めてこの句に対する必要がある。実質以上の賛辞、或いは殊更な反撥に惑わされてはならない。公正な眼で見た場合、この句には後代に至ってひろく展開する「俳趣味」の基本的典型的なものが打ち出されている。歴史的な意味ばかりでなく、さきに述べたような表現の内実からしても、芭蕉の代表的な句の一であることは確かであろう。最後に近代の諸家の目ぼしい評を引いておく。

……強ち芭蕉庵の実況に頓着しないでもいいと思ひます。刹那の中に永遠の閑寂な相を把んだもので、……矢張

り偉い句だと思ひます。（『芭蕉俳句研究』安倍能成氏）

……名画は描き来つて直ちに是れ天地であると云ふところが此の句にはある。所謂渾然として境を作すもの、どうにも動かしやうのないもので、斯う云ふ句は全く解釈を超越してゐる。（同右、幸田露伴）

自分の身を置くところから想を得る心境に達してゐる。さういふ境は、長い俳諧に立ち向ふ生活の間に、或は和歌或は漢詩或は禅又は荘子といふやうに多岐にわたつた求道の果に自ら醸成されて来て、生活の基調となりつゝあつた静寂な境地が、その境に触れた自然の事象によつて揺がされたものである。だから、単なる蛙の写生でもなく古池の叙景でもない。或は日常生活の悲喜愛憎でもなく、さういふものの底にあつて、長い間に芭蕉の人間的基調になつて来てゐた芭蕉の血と自然の渾融した深層が、蛙の飛びこんだ幽かな水音に揺がされたものである。……表現は淡如として飾らない。蛙飛んで心裡にひろごる閑寂の余響に、どこまでも追ひ縋らうとする求心的態度が見られる。一切の表立たんとする声を抑へて、全く内部の響に合せた無言の表現である。一事を投げ出して、以て語らしめる。自らは口を緘して一語をも発せぬ態度である。……山吹や、と置けば季の情趣は濃厚に出て来る。しかも、蛙飛びこむ水の音、は山吹の一点景となり、傍観の句となるのである。或は配合の味といつてもよい。……芭蕉の胸裡に往来してゐた深層の影は、そんな叙景では描きうるやうなものではなかつたのである。……日常の生活に結びついた季的情趣の底に、季そのものを成り立たせる自然そのものの動きがある。……この「造化の深意」に身を寄せんとするに至つて、すでに表層の情趣を超えたゆらめく何ものかが、未だ十分なる把握に至らず、渾沌（カーオス）の状態で漂つてゐたものであらう。……揺ぐものの中核に求め入つて、古池や、となつたのである。蛙も、この句では表立つた季的情趣を示してゐない。（加藤楸邨氏『芭蕉講座』発句篇）

「古池」は「山吹」のような取合せではなく、下の七五の情景から煮つめ出されるエキスのようなものであり、詩人的認識の中核の挙示である。逆に言えば、初五によって示された断定的・直覚的把握が、七五による具象

的・細叙的・反省的把握によって、意味が重層化されてくる。……貞享三年閏三月某日、門下が多数芭蕉庵に会して、衆議判で蛙の句二十番の発句合せを行った……この席上で、「古池」の句が発表されたとき、一座はどよめきわたったに違いない。……それは新しい啓示であった。談林の傍若無人の高笑いから、彼等はまださまで隔たっていなかったとしても、笑い抜いたあとの笑い切れぬ人生の寂寥相を次第に感じはじめていたと言ってもよい。……笑いを本願とする俳諧師たちの心の盲点を、この句は的確に衝いたのである。この句の啓示するものがあまりに鮮かなイメーヂであり、啓示に対して用意された人たちが多数存在したかぎりにおいて、この句の意味するものの伝播の速度は、意外に早かったのである。……この句は対者に微かに笑みかける普遍的境地を持っている。……この句の秘密は、おそらく把握の、判断のあまりの的確さのなかに在ろう。（山本健吉氏『芭蕉その鑑賞と批評』）

258

名月や池をめぐりて夜もすがら　（孤松）

あつめ句・葛の松原・誹林一字幽蘭集・陸奥鵆・泊船集・橋南・蕉翁句集・栞集

草庵の月見

名月や池をめぐつて夜もすがら　（続虚栗）

雑談集・蕉翁句集草稿

秋季（名月）。

語釈 ○**名月**「メイゲツ」。陰暦八月十五夜の月をいう。後述（Ⅱ *441*）参照。「三五・十三夜の月、今をしなべて名月と云り。其内いづれの月かしらず、名月と云故有と聞キぬ。然共今日、名月の詩哥を作らんに、あながち其古実にかぎるべからず。尤古実によらば猶佳なるべし。……又漢家には、名の字は三五両夜共に用る事なし。我朝の古実なるゆへ也」（『旅寝論』）「めいげつやはだしでありく草の中　傘下」（『あら野』巻一）「Meiguet. Aqiracana tçuqi.1, na aru tçuqi.」（『日葡辞書』）。○**池をめぐりて**　この句は

芭蕉庵での吟なので、「池」は前の「古池」の句の池と同じものと見られる。その池の周囲をまわって月を賞するというのである。「一めぐり人待かぬるをどりかな　尚白」（『あら野』巻七）「Meguri, u, utta.」（『日葡辞書』）○夜もすがら　一晩中、夜っぴて。「終夜秋風きくや裏の山　曽良」（『猿蓑』巻三）「Yomosugara.」（『日葡辞書』）。

大意　名月は如何にも見飽きない。池のまわりを廻って一晩中、天上と水面の月を交々賞することだ。

考　『橋南』（沾洲撰、宝永二年刊）には、「何事も皆かはりはてゝ、まれに残る家は門前草深くして庭上に露しげし。よもぎが杣あさぢが原、鳥のふしどゝ荒果て、虫の声〲うらみつゝ、黄菊紫蘭の野辺とぞなりにける。今古郷の名ごりとては、河原の大宮ばかりぞましく〱ける」と前書がある。これは『平家物語』巻五、月見の一節で、「観音の」（Ⅱ256）の句に謡曲「西行桜」の一節を配したのと同様の逸興であろう。そういう真蹟に拠ったものと思われる。

この句の成立については、其角の『雑談集』（元禄五年刊）に「丁卯のとし」（貞享四年）の名月の夜に芭蕉庵を訪れた時に示された句として出し、それから舟遊びに誘ったことを記している。ところが、句は貞享四年三月二十五日に刊行された尚白の『孤松』初出であるから、同じ年の中秋ということはあり得ず、其角のいう年次には錯誤があると考えざるを得ない。貞享中の作には違いないとして、貞享元年は野ざらしの旅に出掛けた頃であり、二年の名月の夜は三人七郎兵衛の句文（Ⅰ250参照）に描かれたような事があって、『雑談集』に見える舟遊びなどがあったとは思われない。結局「名月や」の句の年次としては貞享三年中秋と見るのが最も穏当であろう。

「めぐりて」「めぐつて」の相違は小異に過ぎないが、初出の『孤松』よりも後れる『続虚栗』に「めぐつて」となっているのは一応問題になる。しかし、『続虚栗』刊行より僅かに先立つ貞享四年秋の真蹟「あつめ句」は「めぐりて」であるし、『雑談集』にしても、斯うした点では兎角杜撰の嫌いのある其角の著とあっては、信憑性は高くない。『蕉翁句集草稿』では『続虚栗』に従った土芳も「自筆には、めぐりてと有」と注記し、『蕉翁句集』では「めぐりて」の形を採っている（但し年代は貞享四年）。こう見て来ると、真蹟の裏付けのある「めぐりて」の方が信頼すべ

き句形といえよう。

中秋の名月――一年中で月を賞するのに最も佳興の時である。天上の清光、池水に映る月影、彼を見此を賞して興は尽くる期が無い。忘我の一夜を過す作者の雅懐が流露してそのままに一句を成した趣がある。これ以後、鹿島、更科、敦賀、湖南等いろいろな土地で名月を賞し、この夜に寄せる思いの並々でなかった芭蕉も、これだけ自然な、珠のような名月の句は、終に得られなかったようである。この「池」が芭蕉庵の池であること、作者が実際に一晩中池のほとりを廻って過したかどうかといったことは、このような句の場合本質的な問題ではない。要するに良夜の雅懐の尽きぬ趣を、こうした形で表現しているのである。だから時によっては、『平家物語』の月見の一節を前書にするような興も生じたわけであろう。そういう風雅意識を「やや鼻につき過ぎる」（山本健吉氏『芭蕉』）と感ずる向きもあるが、芭蕉の「名月」に寄せる思いは、全く古い和歌や漢詩の伝統を承けるもので、陳腐といえばこれ位陳腐なことはない。ただ、そうした思いを、このような自然な調べに乗せて珍しい用語・趣向もなしに表現し得たのは、やはりこの句の新しさであり、この時期の作者の安定した心境の所産としても意義を認めるべきではあるまいか。私としては、

こよひの清光をもてあそぶ心の深きをいはんとて、夜もすがら詠めあかしたりとや。七もじにおのづから千歳の詩歌もこもりて、言外の余味いひつくすべからず。ことさらに作り出でたるやうのことなれども、月も池上をめぐり、みる人もほとりをたゝずみありきてうかるゝ風情、感ふかきものなり。（吾山『朱紫』）

という見方が、素直な鑑賞として心に残った。なお、「夜もすがら」は逆置ではない。右にもある「夜もすがら詠めあかしたり」の意を含めて見るべきである。

いさゝかなる處にたびだちて、ふねのうちに一夜を明して、暁の空篷よりかしら指出て

259　あけゆくや二十七夜も三かの月　（あつめ句）

――孤松・真蹟自画賛・真蹟集覧・蕉翁句集草稿・栞集

常陸へまかりける時舩中にて

あけぼのや廿七夜も三日の月　（芭蕉庵小文庫）

――泊船集・蕉翁句集

秋季（三かの月）。

語釈　**○いさゝかなる処にたびだちて**　「聊かなる処に旅立ちて」。ちょっとした処に向って旅に出た、というのである。この「いさゝかなる処」は、江戸から比較的近い処であろうが、後述するように何処を指すかは明らかでない。「いさゝかの子細候間、ひそかに討って捨てばやと存候」（謡曲「湛海」）「Isasaca.」（『日葡辞書』）。**○ふねのうちに一夜を明して**　「舟の中に一夜を明かして」。「一夜」は「イチヤ」ともよめるが、葦水文庫蔵真蹟自画賛の前書に「ふねの中に一ゝよを明し」とあるのを参考にして「ヒトヨ」と訓んでおく。「はつしもに何とおよるぞ船の中　其角」（『猿蓑』巻一）「漸まどしき小家に一夜をあかして」（『おくのほそ道』）「Fune.」「Youo acasu.」（『日葡辞書』）。**○暁の空**　「暁の空」。明け方の頃に、の意。「あかつきのそら、いさゝかはれけるを」（『鹿嶋詣』）「Acatçuqi.」「Sora.」（『日葡辞書』）。**○篷よりかしら指出て**　「篷より頭指し出でて」。「篷」は、菅や茅で編んだ莚。舟に覆って屋形代りにする。その蔭から頭を出して外を眺めるのである。「幾日路も笘で月見る役者船　珍碩　す布子ひとつ夜寒也けり　正秀」（『ひさご』）「雨いとあやにくに、かしらさしいづべくもあらず」（『落窪物語』巻一）「Tomauo fuqu.」「Caxira.」（『日葡辞書』）。**○あけゆくや**　「明け行くや」。夜が白々と明けて行くことよ。「や」は、詠嘆の切字。「しのゝめのほがらくとあけゆけばおのがきぬぐなるぞかなしき」（『古今集』巻十三、よみ人しらず）「Aqeyuqi, u, uita.」（『日葡辞書』）。**○二十七夜**　「ニジフシチヤ」。陰暦二十七日の夜の月。**○三かの月**　「三日の月」。陰暦の月はじめ三日の月。「三ケ月」（Ⅰ*162*）参照。「見る人の目も張弓か三日の月　昌意」（『毛吹草』巻六）。

大意 夜が白々と明けて行くなあ。二十七夜の月も、形は三日月とおんなじだ。

考 「あるところにたびだちて、ふねの中に一よを明し、下弦の月のあはれなるあかつき、篷よりかしらいだして」(真蹟自画賛)「常陸へまかりける船中にて」(『泊船集』)「旅行舩中にて」(『焦翁句集』)等の前書がある。「常陸へまかりける」といえば貞享四年八月の『鹿嶋詣』の旅を誰しも連想するが、初出板本の『孤松』に同年三月二十五日の奥書があるので、『鹿嶋詣』の折ではあり得ない。現存資料の範囲内では、貞享二年か三年の秋に舟を利用した小旅行を試みた際の作としか言えず、それ以上の確言は難しい。「常陸へ」という前書も、『小文庫』の撰者史邦が何にもとづいて付したか、その根拠は不明で、こまかい考慮を払わずに『鹿嶋詣』の時の吟と思い込んでしまった可能性がある。真蹟は何れも行先をはっきり述べているわけではないのである。

二十七夜の月は月末まで残すところ三日、下弦は上弦と向きこそ違え、形は三日月と同じに見えるところに興を発した趣向で、こうした思いつきも俳諧の一面であろう。細り行く二十七夜の有明月は、三日月とちがって余りもてはやされることがない。それがここでは、舟中で一夜を明かした暁という特別の環境での発見として扱われているのが、句の余情に独得のすがすがしさを与えている。貞享中期の佳句を集めた「あつめ句」に入ったのも、そうした特色がある故であった。句形については、『小文庫』の「あけぼのや」が問題になるが、その前書と同様に誤伝の疑いがあって余り信用出来ない。表現としても、夜から朝への時の移りをまざまざと示す「あけゆくや」の方が快い印象を受ける。真蹟もすべてこの形なのである。土芳は『蕉翁句集草稿』で、最初「明ぼのや」と書いた「ほの」を見せ消ちして「行」と改め、「或集に、常陸へまかりける船中にしてと有。五文字、明ぼのやと有」と記して、上に「此句自筆ニ有」と書いている。最初は『小文庫』に拠ったのを、真蹟を参照して「明行や」と直したのである。しかるに『蕉翁句集』では年次を元禄二年と誤り、句形を「明ぼのや」に戻した。これはやはり古板本として『小文庫』の句形を尊重したのであろう。土芳は『孤松』を見ていなかったのかも知れない。

260

東にしあはれさひとつ秋の風　（真蹟懐紙）

あか冠

いづれの時の秋にや、去來・千子が伊勢まうでの比、道の記かきて深川に送りけるに、奥書の褒美ありて

西東あはれさおなじ秋の風　（笈日記）

泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

秋季（秋の風）。

語釈　**○東にしあはれさひとつ**　「東西(ひがしにし)あはれさ一(ひと)つ」。「東」は芭蕉の住む江戸、「にし」は去来・千子(ちね)らの住む京を指す。住居は東西に遠く隔たっていても、秋風の寂しさ哀れさを感ずる心は同一だ、といったのである。句の成立事情については〔考〕参照。「いなづまやきのふは東けふは西　其角」（『あら野』巻四）「莚二枚もひろき我菴　越人　朝毎の露あはれさに麦作ル　旦藁」（『はるの日』）「妹も我も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる」（『万葉集』巻三、高市黒人）「Figaxi.」「Nixi.」「Auaresa.」「Fitotçu.」（『日葡辞書』）。

大意　貴方と私と、住居は東と西に遠く隔たっていても、秋の風の哀れさを感ずる心は、全く同じですね。

考　この句は『笈日記』の前書にあるように、京の向井去来が妹千子を伴なって伊勢参りをした旅の記『伊勢紀行』を深川の芭蕉に送ったところ、芭蕉が賞美の跋文を加え、その末尾に記された句であった。去来自身の著『旅寝論』に「伊勢記(ママ)行一巻つゞりて深川におくる。先師只一巻を賞して文章并に発句をむすび、句の善悪はさたなし」とあり、『泊船集』にも「これは去来・千子いせの紀行書て深川へ送りけるかへりに、此句を其おくに書付たまひしなり」と注していて、成立事情に疑いはない。去来らの伊勢参りと芭蕉のこの発句の成立年次が貞享三年秋であるべきことについては、志田義秀博士の「蕉門十哲」（岩波講座『日本文学』）に精しい考証がある。真蹟懐紙（大津村田利兵衛氏旧

蔵）によって、芭蕉の跋文を左に掲げよう。

ねなし草の花もなく、みもみのらず、たゞいやしきくちにいひのゝしれるたはぶれなりけるに、さるを其角ひとゝせ都の空にたび寐せしころ、向日氏去来のぬし、むつましきちぎり有て、酒のみ、ちやにかたる折ゝ、甘き辛きしぶき淡き心の水の浅きより深を伝て、朝に一掬して百川の味ひをしれるなるべし。今年の秋、いもうとをゐていせに詣ッ。しら川の秋風より、かの浜荻折しきて、とまり〳〵のあはれなること共かたはし書顕して、我草の戸の案下に送る。一たび吟じて感を起し、ふた〔た〕び誦して感を忘る。みたびよみて其無事なることを覚ふ。此人や、この道に到れり尽せり。

この末に冒頭の発句が記されている。「今年の秋」と右にもあり、句も秋季であるから、芭蕉の句文の成立も貞享三年秋のことと見て誤りはあるまい。跋文にも見えるように、去来の紀行を読んだ芭蕉は、去来が風雅俳諧の道の至境に到達していることを賞揚しており、発句にも同じ意味を繰返したのであった。江戸と京と、住居は遠く隔たっていても、秋風の哀れさを感ずる心は一つだといって、二人の間の風雅を愛する心の一致相通を寓しているのである。この年と推定される閏三月十日付去来宛芭蕉書簡に、

御秀作度ゝ相聞、千里隔といへども、心一に叶時は符節と合候而、毫髪可入処無之、近世只俳諧之悟心明に相きこへ候……

と述べているのも、同じ気持のあらわれといってよい。この頃まだ二人は面晤しておらず、冬になって去来が江戸に下向して、翌年春に芭蕉・其角・嵐雪らと一座した歌仙一巻が、両者の同席を明証する最初の資料となっている。

この句に「秋の風」とあるのは、いうまでもなく能因の名歌「みやこをばかすみとともにたちしかど秋風ぞふくしらかはのせき」を心に置いたものである。去来の『伊勢紀行』のはじめの方に、

白川橋に来ぬ。やう〳〵家のさまかはり、過し野分に軒庇こぼれがち也。

白川や屋根に石おく秋の風　去来

能因が詠歌はさらなり、津守何がしが関までゆかぬ白川さへ、はるか北の山里なりと、千子が難じぬるを、七夕つめに宿からむと聞ゆるたぐひ、感興おなじかるべしといひはべり。

ともあって、これらから、「東西の白川で詠まれた二つの「秋の風」の吟詠は、同じ「もののあはれ」がただよっている……そのように京の去来と江戸の自分との間にも、秋風のあわれを感じる、同じ風雅の道が通っている」（山本健吉氏『芭蕉全発句』）と解する説がある。後半は良いが、芭蕉の句を釈くのに京の白河での去来の句のことまで持ち込む必要はなかろう。能因の歌は兎も角、余り白河の関にこだわると、句の世界が狭くなり過ぎる嫌いがある。この句の秋風のあわれは、白河の関を須たずともよく、それに深く立ち入らない方が句の世界は広くなるのではあるまいか。跋文には「しら川の秋風より」云々とあるから、去来の句のことが芭蕉の頭にあったことは事実であるが、それと末尾の句の解釈とはおのずから別であろう。句はやや観念的で、挨拶の時宜に叶えたまでであるが、「あはれさひとつ」と言い切ったところには、去来への同感が強く感ぜられる。

句形としては、前掲の『笈日記』の外、「西東あはれも同じ」（『芭蕉句選』）「東西のあはれさひとつ」（板本『伊勢紀行』）といった異形も伝えられる。『句選』や幕末期の『紀行』板本は問題外としても、芭蕉歿後間もなく刊行された『笈日記』の句形は一応考慮する要があろう。同書は早い時期の資料集として貴重ではあるが、曖昧な記憶や不的確な採録態度等による誤りがかなりあることは、近時の今栄蔵氏の研究等によって明らかにされている。「あはれさおなじ」は全く概念的説明的であって、「あはれさひとつ」という直観的で引緊った力ある表現に遥かに及ばない。「ひとつ」から「おなじ」へ推敲することは先ず考えられないとすれば、『笈日記』の句形は冒頭の「西東」も含めて、杜撰な誤伝の可能性が大きいであろう。真蹟を見るに及ばなかった以後の句集類が、『笈日記』の句形を採用したのは止むを得ない成行であった。このうち『蕉翁句集』は元禄六年の部に入れ、中七を「あわれ同じ」と誤っている。

261

ものー我がよはかろきひさご哉　（あつめ句）

――芭蕉集

顔公の垣穂におへるかたみにもあらず、恵子がつたふ種にしもあらで、我にひとつのひさごあり。是をたくみにつけて花入るゝ器にせむとすれば、大にしてのりにあたらず。さゝえに作りてさけをもらむとすれば、かたちみる所なし。あるひとのいはく、草庵のいみじき糧入べきものなりと。まことによもぎのこゝろあるかな。やがてもちゐて隠士素翁にこふて、これが名を得さしむ。そのことばは右にしるす。其句みなやまをもておくらるゝがゆへに、四山とよぶ。中にも飯顆山は老杜のすめる地にして、李白がたはぶれの句あり。素翁りはくにかはりて我貧をきよくせむとす。かつむなしきときは、ちりの器となれ。得る時は一壺も千金をいだきて、黛山もかろしとせむことしかり

ものひとつ瓢はかろき我よかな　（随斎諧話）

――四山集

秋季（ひさご）。

語釈　**○ものー**　「物一つ（ものひと）」。自分の身のまわりにある物として、一つを提示した表現。即ちそれが下の「ひさご」である。「美景物としてたらずと云事なし」（「幻住庵記」）「Mono.」（『日葡辞書』）。**○我がよ**　「我が世（わよ）」。自己の境涯をいう。「よをへて、うとくはづかしきものに思ひて、すぎはて給ひぬる」（『源氏物語』葵）。**○かろきひさご**　「軽き瓢（かろひさご）」。「ひさご」は、夕顔の一変種瓢簞（ひょうたん）のこと。中秋の頃この実の成熟したのを捥ぎ、口を切って水に浸し、果肉を腐敗させて中空にして、酒を入れたり、その他の容器として利用する。中をうつろにしたものだから「かろき」なのである。「とく〳〵の雫を侘て、一炉の備へいとかろし」（「幻住庵記」）「芹摘

とてこけて洒なき瓢哉　旦藁」(『はるの日』)「Fisago.」(『日葡辞書』)。

大意　身のまわりの目ぼしいものとしては、このひさご一つだけ。我が境涯の身軽さは、軽いひさごさながらだ。

考　『四山集』(盾山・菰洲撰、元禄十六年刊)にも成美の『随斎諧話』(文政二年刊)と殆んど同じ前書があるが、ここでは後者の真蹟摸刻によって掲げた。この句文と一体をなす素堂自筆の瓢の銘は、『蕉影余韻』所載のそれに「貞享三仲秋後二日　素堂山子書」と年記があり、芭蕉の句文もその後間もなく成ったものと推定される。この大きなひさごは、天和三年九月の素堂筆「芭蕉庵再建勧化簿」(『随斎諧話』に摸刻所収)に「大瓠一台　北鯤之」とあるものとおぼしく、芭蕉庵再建に際して門人北鯤の贈ったものに、後年素堂が四山という名を与えたのであった。なお、芭蕉の文については、蓼太の『七柏集』(天明元年序)に、初稿かと思われる異文が伝えられている。

「瓢はかろき我よかな」と「我がよはかろきひさご哉」と、内容にさしたる変りはないけれども、成立時期を右のように考えるとすれば、貞享四年秋筆の「あつめ句」の句形の方が明らかに後案である。はじめは「瓢はかろき我よ」と「かろき」を上下にかけた表現だったものを、翌年には「我がよはかろきひさご」と直喩風な表現に変えたことになる。前者が巧みは巧みながら、やや晦渋で不透明な傾きのあるのを、後に単純で分りやすい表現に変えたのでもあろうか。兎に角成立の順序ははっきりしているので、ここでは後案を本位句とした。

門人の好意にたよる草庵の隠者生活は、贅沢とは凡そ縁のないものである。しかし、物に執着しない清貧の境涯には、世間並みの生活では得難い安らかさがある。貞享中期ともなると、深川の草庵生活も板について来て、俗世間であれこれ奔走していては得られない安定した心境を得るに至ったのであろう。そういう知足安分の心境から自然と流露した趣の句で、前案後案いずれも軽々とした調べが快い。四山瓢については、「はる立や」(I 131)の句の条参照。

我くさのとのはつゆき見むと、よ所に有ても空だにくもり侍れば、いそぎかへることあまたゝびなりけるに、師走中の八日はじめて雪降けるよろこび

262 はつゆきや幸庵にまかりある（あつめ句）

続虚栗・泊船集・今日の昔・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・続深川・栞集

冬季（はつゆき）。

語釈 ○**我くさのと** 「我が草の戸」。「くさのと」は、草庵。深川の芭蕉庵をいう。○**はつゆき** 「初雪」。冬に入ってはじめて降る雪。句中に用いれば、勿論冬の季語になる。「連歌本意抄云、初雪は木枯吹出て世上さはがしき夜は少岸にふり、里野などの木草の葉に薄くもたまり、人の面白くおもふ体にし、初雪消るとしても冬也。△按に、初雪は十月の物と心得たるか、凡作例多し」（『滑稽雑談』）「首出してはつ雪見ばや此衾美濃竹戸」（『猿蓑』巻一）。○**よ所に有ても** 「余所に有りても」。深川の草庵以外の所に居ても、の意。「有」は「在」を用いた方が良い。「十里ばかりの余所へ出かゝり　里圃　笹の葉に小路埋ておもしろき　沾圃」（『続猿蓑』上）「Yoso.」（『日葡辞書』）。○**空だにくもり侍れば** 「空だに曇り侍れば」。空が曇りさえすれば。この「だに」は、「すら」「さへ」に通ずる用法である。「かげ沼と云所を行に、今日は空曇て物影うつらず」（『おくのほそ道』）「つくぐ〜と一年をくらすほどだにも、こよなうのどけしや」（『徒然草』七段）「Sora.」「Coredanimo.」「Tenqiga cumoru.」（『日葡辞書』）。○**いそぎかへることあまたゝびなりけるに** 「急ぎ帰ること数多度なりけるに」。急いで深川の草庵へ戻ることが度重なったが、の意。「のたまひあはすべきことも一言もいださず、聴いそぎ帰られけり」（『平家物語』巻八）「落ぬべき事あまたゝびなりけるを」（『更科紀行』）「Isogui, u, oida.」「Amatatabi.」（『日葡辞書』）。○**師走中の八日** 「師走中の八日」。陰暦十二月十八日。「師走十日余、名ごやを出て旧里に入んとす」（『笈の小文』）「卯の花山くりからが谷をこえて、金沢は七月中の五日也」「八日、月山にのぼる」（『おくのほそ道』）「Xiuasu.」「Naca.」（『日葡辞書』）。○**はじめて雪降けるよろこび** 「初めて雪降りける喜び」。念願が叶ったので「よろこび」といった。「むさしの仲秋の月、はじめて見侍て」（『炭俵』下、素龍発句「明月や」前書）「雪降て馬屋にはいる雀かな　鳧仙」（『あら野』巻一）「けふあすかへりさりなむとするに、かくありがたき人にたいめんしたるよろこび」（『源氏物語』桐壺）「Fajimete.」「Yorocobi.」（『日葡辞書』）。○**幸庵にまかりある** 「幸庵に罷り在る」。「幸」は副詞。「幸にも」の意。「庵」は芭蕉庵を指す。

「まかりある」は、改まった鹿爪らしい言い方である。「兆もし拾ば我ひろはん。幸いがの句に似たる有」（『去来抄』先師評）「またのはるは、あむにありて」（あつめ句所収芭蕉発句「いくしもに」前書）「二三日いぜんよりお長屋に逗留（とうりゅう）いたし罷有大坂の住人」（『心中宵庚申』上）「Saiuai.」「An, iuori.……An uo musubu.」「Macari, u, atta.」（『日葡辞書』）。

大意　ようやく初雪が降り出した。今日は幸いにも我が庵に罷り在って、これを心ゆくまで賞することが出来る。

考　『続虚栗』には「十二月九日はつ雪降のよろこび」と前書があり、杉風系の資料を集めた『続深川』の前書は「あつめ句」と略々同じであるが、「師走中の八日」の「中の」の二字を欠く。貞享四年秋の真蹟「あつめ句」に書かれたのが最も古く、従って貞享三年以前の或る年の十二月十八日に成ったものと見られる。恐らく貞享三年の作であろうが、その年と確定し得る証拠は、今のところ存在しない。『続虚栗』に十二月九日とあるのは誤りとおぼしく、真蹟の記載の方が信憑性がある。

陰暦の十二月も半ば過ぎの初雪は、江戸としても遅い方であろう。深川の草庵で初雪を見たくて、冬に入ってからそれまで、空さえ曇れば余所から舞い戻っていたというのだから、芭蕉の雪月花に寄せる情は子供っぽい程で、いっそ微笑ましい。さて、待ちに待った初雪を在庵の折に迎え得て、風狂の情を託したのがこの句である。「まかりある」は、武家言葉めいた鹿爪らしいもので、それを殊更用いたところにおかしみが強く出ており、山本健吉氏が狂言の大名と太郎冠者の場面を連想しておられるのは、適切な鑑賞といえよう。即興句であって、取り立ててどうと言うことはないが、風狂の雅情がそうした言葉遣によって流露しているのが嬉しいところである。

草庵の初雪に友を迎え得た喜びと解する説が古来からあるのは、「まかりある」に対話の調子を感ずるからであろう。友もがなと思うのも風雅の通情ではあるが、ここはやはり作者自筆の前書通り、一人で初雪に興じているものと解したい。対話調を強いて生かせば、これは「はつゆき」に対して呼び掛けているのである。

263

初雪や水仙のはのたはむまで　（あつめ句）

続蕉影余韻所収真蹟懐紙・蕉影余韻所収真蹟色紙・芭蕉の筆蹟所収自画賛・陸奥衛・泊船集・蕉翁句集・栞集

初雪や水仙の葉のたはむほど　（目団扇）

冬季（初雪・水仙）。

語釈 **○水仙のは**　「水仙(すゐせん)の葉(は)」。「水仙」はヒガンバナ科の多年草で、我が国では暖地の海岸に自生する外、鑑賞用に栽培され、切り花として用いられることも多い。その葉は細長くて厚質、通常四五枚が鱗茎から出て、冬季に葉の間から高さ二、三十センチに及ぶ直立の花茎を生じ、香りの好い美しい花を咲かせる。「水仙花……単葉……霜がれの草の中に。いさぎよく咲出たるを。菊より末のをとうとゝもてはやし。雪の花に見まがひていかにすいせんとわきかぬる心をもつらね。又葛もて作るすいせんにもそへ。花瓶の口をすいせんくわなどもいへり」（『山之井』）「楊誠斎曰、世以二水仙一為二金盞銀台一、蓋単葉者其中有二一酒盞一、深黄ニシテ而金色、至二千葉水仙一其中花片捲皺キ、密蹙リ、一片之中、下軽黄ニシテ而上淡白也、与二酒盃之状一殊不二相似一。要スルニ之単葉ノ者当レ命ズルニ以二旧名一。千葉ノ者乃チ真水仙也」（『滑稽雑談』）「なを清く咲や葉がちの水仙花　氷固」（『続猿蓑』下）「Suixenqua.」「Faga nobita.」（『日葡辞書』）。**○たはむまで**　「撓(たわ)むまで」。「たはむ」は、しない曲ること。「は」は「わ」の仮名ちがいである。「まで」には、雪の程良い量を限定する働きがある。「薄雪たはむすゝき痩たり　正秀　藤垣の窓に紙燭を挟をき　珍碩」（『ひさご』）。

大意　水仙の葉が撓い曲るほどまでに、初雪が降ったことだ。

考　貞享四年秋筆の「あつめ句」に見えることが、年代のはっきりした資料として唯一のもので、即ち貞享三年冬までには成立していた句と見られる。それには前の「幸庵にまかりある」の句の次にあるから、或いは同時の作だったかも知れない。下五を「たはむほど」とした異形は、首尾完全な形では『目団扇』（之建・于候撰、享保五年刊）が最も早いが、既にそれより遥か以前、『篇突』（李由・許六撰、元禄十一年刊）に、

初雪・春雪のさかいまぎれ安し。水仙の葉のたはむ程と云は、例の季と季の取合にてこそ春雪にはうごきがたけ

れ。

と中七以下を引用している。許六の門人たる孟遠系統の撰集『目団扇』は、この記事を頭に置いて採録したものらしく、その元になった『篇突』の記事がどんな根拠に基づくかは確かでない。従って「たはむほど」という句形を問題にする必要はあるまいと思う。

句は初雪の日の庭前の即景である。初雪だから、そう沢山降るわけではなく、しなやかに伸びた水仙の葉が撓む程の適量の雪を賞する気持があって、それが「初雪」の趣に叶うわけである。清楚な水仙の気品も、初雪に相応しい。これは決して月並ではなく、自然を眺める純な眼の新しい発見であった。

「まで」と「ほど」の比較について、諸注に「ほど」の方が理に堕ちるように見ているのは何故であろう。理といえば、「まで」と強く限定するように聞える方が、態とらしく響くのではあるまいか。前述したように「ほど」の原拠は明らかではないので、余り立ち入る必要はないけれども、「まで」の形で鑑賞する際にも、「まで」の語の持つ限定する働きを余り強く意識しては嫌味になってしまう。これは程良い量として限定しているのであって、作者として余り強調する気持はなかったものと見たい。「厚葉が倒れ伏すほどでもない雪の重みを支えて均衡状態を保っている水仙の姿態に、ほどよい初雪のイメージを匂わした」（今栄蔵氏『芭蕉句集』）というのが確説である。

霜の後むぐらをとひて

264　花皆枯て哀をこぼす草の種　（孤松）

あつめ句・真蹟短冊・泊船集・蕉翁句集・宰陀稿本・栞集

冬季（枯て）。

語釈　○**霜の後**　「霜の後」。霜が置くようになってから後、の意。冬の段々深まる趣である。「霜の後撫子さける火桶哉　風羅坊」

（『俳諧勧進牒』）「Nochi.」（『日葡辞書』）。○**むぐらをとひて** 「葎（むぐら）を訪（と）ひて」。この「むぐら」は「葎の宿」と同じで、荒れた貧しい家をいう。（I 247）参照。「いせの斗従に山家をとはれて」（『続猿蓑』下、芭蕉発句「蕎麦はまだ」前書）「Toi, ô.ôta.」（『日葡辞書』）。○**花皆枯て** 「花皆（みな）枯れて」。下に「草の種」とあるから、この「花」は「草の花」（秋の季題）である。ここでは、「冬枯」或いは「枯草」に準じて「枯て」が冬季になる。「麻の露皆こぼれけり馬の路 岐阜李晨」（『あら野』巻三）「野は枯てのばす物なし鶴の首 支考」（『続猿蓑』下）「Mina.」（『日葡辞書』）。○**哀をこぼす草の種** 「哀（あは）れを零（こぼ）す草（くさ）の種（たね）」。草の種がこぼれて物哀れな有様であることを、草が哀れをこぼしていると言い做した技巧的表現である。「芦の穂やまねく哀れよりちるあはれ 路通」（『あら野』巻四）「一露もこぼさぬ菊の氷かな 芭蕉」（『続猿蓑』下）「世わたりは草の種（たね）とかや」（『好色万金丹』巻五ノ二）「Auare uo moyouosu.」「Coboxi, su, oita.」「Cusa.」「Taneuo maqu.」（『日葡辞書』）。

大意 この冬枯れの庭には、草の花は皆枯れてしまい、草の種が哀れにこぼれているばかりだ。

考 「古園」（「あつめ句」『栞集』）「荒薗」（真蹟短冊）「葎の宿をとひて」（『幸陀稿本』）等の前書があり、『泊船集』と『蕉翁句集』の前書は『孤松』と同じである。貞享四年春刊行の『孤松』初出で、同年秋筆の「あつめ句」にも見え、貞享三年冬以前の作と推定される。『蕉翁句集』は貞享二年の部に入れているが、その根拠は明らかでない。

誰の家を訪れたのかは分らぬが、その庭の荒れ寂れた冬枯れのたたずまいを述べたまでである。「哀をこぼす草の種」と擬人的に言った言葉の綾が工夫のところではあるが、その為に却って句の格を落しており、自然の営みに思いをひそめる観相的な味わいは感ぜられない。ただ初五の字余りが、詠嘆的な気分をそれなりに生かしているだけである。

265 月白き師走は子路が寝覚哉 （孤松）

泊船集・蕉翁句集

冬季（師走）。

語釈　○**月白き師走**　冬も深まった「師走」の寒月のさまを「月白き」と表現した。また、「月色が白く眺められるのであるから、宵のほどの明かな光りでなく、夜も更けわたりて光の衰へた有様である」（内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』）という見方も確かなところで、下の「寝覚」とも併せ考えれば、明け方近い寒月の趣と見るべきであろう。「既に揚升菴白の字の異訓を挙るに、……月光の白きを皎と云とあり。此月白きは皎也。皎月とも云也」（素丸『説叢大全』）「冬の月白し豆腐に梅の花　乙由」（『麦林集』）。○**子路が寝覚**　「子路」は、孔子の門人仲由の字。廉潔直情の人として知られる。「寝覚」は、眠りから覚めること。ここは朝の眼ざめの趣と見てよい。「が」は、所有格。「蛙のみきゝてゆゝしき寐覚かな　野水」（『はるの日』）「Voino nezamede youo nocosu.」（『日葡辞書』）。

大意　白々と師走の空にかかる月の趣は、あの廉潔直情な子路の寝覚めの感じそのものだ。

考　前の句と同じく『孤松』初出だから、貞享三年冬以前の成立である。『蕉翁句集』は貞享二年の部に収める。
『野ざらし紀行』旅中の吟「義朝の心に似たり秋の風」（I 203）と同様に、自然物の感じを史上の人物の持つ気分と匂い合わせた趣向である。ただ、「似たり」というような露わな比擬の語がないだけ、「月白き」の句の方が象徴性が高く、冬の未明の厳しくもさわやかな空気と、子路の一徹な生き方とが、絶妙な配合で共に生かされて、すぐれた表現効果を発揮している。古注以来、『枕草子』に師走の月が「すさまじきもの」として挙げられていることが引かれるが、この「すさまじ」は勇気あるさまでないことはもちろん、荒涼とした感じばかりでもあるまい。きびしい一方ではなくて引緊ってさわやかな冬の未明の大気、それと、衛の国の乱に巻き込まれて冠の纓を切られながら、「君子は死して冠を脱がず」といって纓を結ぶうちに殺されたという子路の、信念を曲げない真直ぐな生き方とが通じ合うところが此の句の要である。従って、これも古注以来よくいわれる子路の親孝行の話なども、ここには直接の関係はない。更には、この句の「寝覚」を作者に引き付けて解するのも見当ちがいであろう。作者に子路への同感があったことは疑えないが、それを句の解釈鑑賞に持ち込むべきではない。山本健吉氏の説を左に掲げておく。
子路は孔子が最も愛した弟子の一人。「子路、行行如たり」というのが、孔子の評語である。鄭玄の注に、「行行

は剛強の貌」とある。子路は直情径行であった。「由の若(ごと)きは、其の死を得ざるがごとく然り」と言った。畳の上では死ねないね、と言ったのだ。果して子路は、衛の国の内乱に捲きこまれて、自ら進んで非業の死を遂げる。内乱の報を聞いたとき、孔子は衛にいなかったが、「高柴は生きて帰ってくる、子路は死ぬだろう」と言った。子路の死は孔子にとって、たいへんな悲しみであった。この子路の志の壮烈さを、芭蕉は師走の月にたとえた。月だから寝覚を対したので、寝覚めていて反省している貌ではない。寝覚の子路を、直接師走の月に向わせたとき、そこにすがすがしさと言っては足りず、すさまじさと言っては言い過ぎてしまう、一つの情緒が浮び上って来るだろう。「月白き師走」と「子路が寝覚」に、強く響き合うものを感じ取ればよいのである。

芭蕉は後に「義仲の寝覚の山か月悲し」という句を作っている。意中の古人と寝覚の月とを取り合せながら、二様の句ぶりを示している。「義仲の寝覚」は、「燧山」という具象であり、「子路の寝覚」は、芭蕉想裡の抽象である。(『芭蕉全発句』)

なお今一つ、今栄蔵氏が「月の白から同音の子路を連想して興じた気分もある」(『新潮日本古典集成・芭蕉句集』)と見ておられるのは如何なものか。音調の諧和をいうのは良いけれども、洒落のように解しては、この句の持つ凛とした気品と矛盾して良くあるまい。

元起和尚より涌(ママ)をたまはりけるかへしにたてまつりける

266 水寒く寝入かねたるかもめかな (あつめ句)

栞集

冬季(寒く)。

語釈 ○**元起和尚** 「ゲンキヲシヤウ」。当時芭蕉と交渉のあった僧であるが、詳細は不明。ここの芭蕉の言葉遣から見ると、相当

身分のある人だったかも知れない。「和尚」は、修行を積んだ僧の敬称で、「大和尚」等僧位の称となることもある。梵語upādhyāya（教導者の意）の変化した中央アジアの俗語を漢字で音写したものという。「根本寺のさきの和尚、今は世をのがれて此所におはしけるといふを聞て」（『鹿嶋詣』）「Voxŏ.」（『日葡辞書』）。○涌をたまはりけるかへしにたてまつりける　「涌」は「酒」の誤筆であろう。酒を下さったお返しとして奉った句だというのである。「自かゝせたまひてたまはりけるよしをかたるに」（『笈の小文』）「その人にかはりてかへし」（正月廿九日付許六宛去来書簡）「鳥の毛羽を此国の貢に献ると風土記に侍とやらん」（『おくのほそ道』）「Tamauari, ru, atta.」「Cayexi.」「Deusni inochiuo tatematçuru.」（『日葡辞書』）。○寝入かねたる　「寝入り兼ねたる」。なかなか眠れずにいるさま。「鳥共も寝入てゐるか余吾の海　路通」（『猿蓑』巻一）「Neiri, u, itta.」（『日葡辞書』）。○かもめ　「鷗」。カモメ科の海鳥。体は白く、翼は青灰色、嘴と脚は緑黄色。海猫より小さく、尾に黒帯がない。「鷗　雑也。水鳥は皆冬になれ共、此鳥・鳰・都鳥など冬にならざるいはれは、哥道の秘事なるゆへに爰にしるさず。新式に雑にせられたるにて、昔の連哥師は哥学の至たる事を察らるべし」（『御傘』）「しほ風によく／＼聞ば鷗なく　昌圭　くもりに沖の岩黒く見へ　執筆」（『はるの日』）「Camome.」（『日葡辞書』）。

大意　私は水が冷くて寝入れないでいた、この辺の鷗のようでした。頂戴の酒で暖まって、今夜はぐっすり眠れるでしょう。

考　「あつめ句」に見えるので、貞享三年冬以前の作である。隅田川や江戸湾に近い深川の草庵では、冬の夜を浮寝する鷗の啼き声なども聞えたであろう。そういう実境から発想して自身を鷗に比し、寒夜に酒を贈られた好意を謝したのである。表面は寒夜を過す鷗のことを叙したのみであるが、冷えまさる冬の夜の作者の境涯を寓していることは、おのずから知られる。全体に遍満するのは草庵生活の侘びた気分であって、それがそのまま謝句となっているところが面白い。

曾良何某は此あたりちかく、かりに居をしめて、朝な夕なにとひつとはる。我くひ物いとなむ時は、柴折くぶるたすけとなり、ちやを煮る夜は、きたりて氷をたゝく。性隠閑をこのむ人にて、交金をたつ。あるよ雪をとはれて

267

君火をたけよき物見せん雪まるげ　（花膾）

続虚栗・若水・真蹟色紙・泊船集・こじきぶくろ・周徳自筆本雪まるげ・雪の薄・続深川

草庵をとぶらへる人に対して

君火たけよき物みせむ雪丸　（笈日記）

――蕉翁句集

冬季（雪まるげ）。

語釈　**○曾良何某**　「ソラナニガシ」。奥の細道の旅を共にしたことで有名な門人。岩波氏、名は正字、通称庄右衛門、後には河合惣五郎とも称した。信州上諏訪の産。若年の時郷里を離れ、伊勢の長島藩に仕えたが、やがて致仕して江戸に出、吉川惟足に就いて神道や和歌を学んだといわれる。芭蕉と交渉を生じたのは貞享中期以降で、同四年秋には『鹿嶋詣』の旅に同行した。細道の旅以後も旅に日を送ることが多く、宝永七（一七一〇）年、幕府が諸国に派遣した巡国使の随員として滞在中の壱岐で病を得、五月二十二日勝本で客死した。享年六十二。「何某」は、本名を書くべきところをおぼめかした表現である。「筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが厳子にて」（『幻住庵記』）「Nanigaxi.」（『日葡辞書』）。**○此あたりちかく**　「此の辺り近く」。芭蕉の住む草庵の近辺であることをいう。天和三年冬以来芭蕉の住んだ第二次庵は、「江戸深川本番所森田惣左衛門御屋敷」（『知足斎日々記』貞享二年四月九日条）内にあった。「此あたり目に見ゆるものは皆涼し　ばせを」（『笈日記』）「Sono atari.」（『日葡辞書』）。**○かりに居をしめて**　「仮に居を占めて」。仮に家を持って。借屋に住んだのであろう。「隠士にかりなる室をもうけて」（『はるの日』荷兮発句「あたらしき」前書）「此津の人の角のなきつきあひに住よくて、今は米や町といふ所に居をしめ」（『好色万金丹』巻四ノ四）「Carini.」「Qiouo ximuru.」（『日葡辞書』）。**○朝な夕なにとひつとはる**　「朝な夕なに訪ひつ訪はる」。朝に夕に繁々と、お互いに訪ねたり訪ねられたりしている、の意。「とはる」は受身である。「あさな夕なに立けぶり、たみのかまどはにぎはひて」（『竹斎』下）「Asana

yūna.」（『日葡辞書』）。**○くひ物いとなむ**　「食物営む」。食事の支度に煮炊きをすることをいう。「食物下人どもにもいとなませず、夫婦手づからみづからして、めさせけり」（『宇治拾遺物語』巻十五ノ九）「Cuimono.」「Butjiuo itonamu.」（『日葡辞書』）。**○柴折くぶるたすけとなり**　「柴折りくぶる助けと成り」。粗朶を折って火にくべる手助けに成る、というのである。食事を支度する時、曾良が芭蕉の手伝いをするわけだ。「はなの山常折くぶる枝もなし　一井」（『あら野』巻一）「なんぢがたすけにとて、かた時のほどとてくだしゝを」（『竹取物語』）「Cube, uru, eta. ……Fini taqiguiuo cuburu.」「Tasuqe.」（『日葡辞書』）。**○ちやを煮る夜は**　「茶を煮る夜は」。「茶を煮る」は、湯を沸かして煎茶を淹れること。「足もとに菜種は臥て芥の花　銀杏　茶を煮て廻す泊瀬の学寮　芭蕉」（『句兄弟』）「Ni, iru, ita.」（『日葡辞書』）。**○きたりて氷をたゝく**　「来りて氷を敲く」。水甕の氷を割って茶の為に水を汲むさま。元唐卿の詩「雪夜訪僧」に「童子敲レ氷夜煮レ茶」（童子氷を敲いて夜茶を煮る。『錦繡段』所収）を踏まえた表現である。「氷」は、この文を載せる『雪まるげ』等は多く「軒」とするが、底本の『花膾』は明らかに「氷」であって、右の詩によっても、ここは「氷」でなければならない。漢字を崩して書いた時の字体の相似から「軒」と誤ったものと認められる。「あるは宮守の翁、里のおのこ共入来りて」（「幻住庵記」）「霧下りて本郷の鐘七つきく　杜国　ふゆまつ納豆たゝくなるべし　野水」（『冬の日』）「Qitari, u, atta.」「Tataqi. u, aita.」（『日葡辞書』）。**○性隠閑をこのむ**　「性隠閑を好む」。曾良が生まれつき俗世間を離れ隠れた閑かな境涯を好むことをいう。「唯これ天にして、汝が性のつたなきをなけ」（『野ざらし紀行』）「誠隠閑葎の中まで世のありさまのがれがたく」（三月十二日付岸本八郎兵衛宛芭蕉書簡）「ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにはあらず」（「幻住庵記」）「Conomi, u, ôda.」（『日葡辞書』）。**○交金をたつ**　「交はり金を断つ」。『易経』繫辞伝に見える孔子の語「二人同心、其利断レ金」（二人心を同じうすれば、其の利きこと金を断つ）に基づき、二人の交情が極めて厚いことをいった。「その交のあはきものは、砂川の岸に小松をひたせるがごとし」（『続猿蓑』上、支考「今宵賦」）「しろがねを根とし、こがねを茎とし、白き玉を実として立てる木あり」（『竹取物語』）「当夏暑気つよく、諸縁音信を断、初秋ゟ閉関」（霜月八日付曲翠宛芭蕉書簡）「Majiuariuo fucô suru.」「Cogane.」「Tachi, tçu, atta.」（『日葡辞書』）。**○あるよ**　「或る夜」。**○君火をたけ**　「君火を焚け」。「君」は曾良に対する呼び掛け。茶を煮る為に火を焚きつけよ、というのである。「君とは人を尊敬する称号なれども、爰にては少心安きにまかせて興ずる言葉なり」（東海呑吐『芭蕉句解』）「君かならず首をめぐらせて見よ。われ又此岸上に立ん」（芭蕉「僧専吟餞別之詞」—『芭蕉句選拾遺』）「きえぬそとばにすご〳〵となく　荷兮　影法のあかつきさむく火を焼て　芭蕉」（『冬の日』）「Qimi.」「Fiuo taqu.」（『日葡辞書』）。**○よき物見せん**

「良き物見せん」。良い物を作って見せよう。これは友人に対して自分のすることで、この「よき物」が即ち下の「雪まるげ」なのである。「よき友三あり。一には物くるゝ友」（『徒然草』百十七段）「かはらけの手ぎは見せばや菊の花　其角」（『あら野』巻四）

○雪まるげ　「雪丸げ」。雪を丸めた物の意。雪をころがして大きな塊にする子供の遊びで、「Mixe, suru, eta.」（『日葡辞書』）。「雪ころばし」「雪まろばし」ともいう。「雪の山……雪をあつめて作りたる山なり。雪まろげの類也。是は降物也、冬也」（『御傘』）「霜やけの手を吹てやる雪まろげ　羽紅」（『猿蓑』巻一）。

大意　君は火を焚きつけたまえ。私はよい物を作って見せよう。雪丸げなんかをね。

考　『続虚栗』には「対友人」、真蹟色紙には「くさのとを雪をとはれて」と前書があり、『泊船集』と『蕉翁句集』の前書は『続虚栗』と同じである。周徳自筆本『雪まるげ』や板本『雪まるげ』にも『花膾』（若人撰、天保五年成）と殆んど同じ長い前書があるが、これらは凡て『花膾』に摸刻された真蹟を原拠としたものと思われる。ここに摸刻された真蹟は信ずべきものと思われるので、本位句の底本はこれに拠った。板本に見える句の初出は貞享四年十一月刊の『続虚栗』であり、その年の十月二十五日に芭蕉は江戸を立って西上の途に就いているので、この句が同三年冬以前に成ったことは確かである。芭蕉と曾良との交渉で年代の明らかな最も早いものは、貞享三年三月二十日の「花咲て」（Ⅱ254）の歌仙であって、土芳の『蕉翁句集』も同年としているから、恐らく三年冬の作であろうが、なお同二年冬の可能性も全くは否定出来ない。真蹟色紙の筆蹟は貞享期よりはおくれて元禄期の書風である。

雪に興ずる芭蕉の気持は、前の「はつゆきや」（Ⅱ262）の句にもあらわれていたが、ここでは曾良という相手を得て愈々子どものようにはしゃいでいるさまが窺える。『おくのほそ道』に「曾良は河合氏にして惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の労をたすく」とある通りの二人の生活が、句の前書によっても知られるが、この句文は芭蕉の曾良に対する親愛の情が率直に語られ、早い頃の両者の交情を如実に示すものとして貴重である。「雪まるげ」は実際に作らなくてもよいので、それを作って見せようというところに、風狂の情が託されているのだ。こ

うという童心の発露によって、この句は前書と併せてまことになつかしい師弟の交遊の雰囲気を伝えている。
『笈日記』等の「君火たけ」は、調子が迫って良くない。「火をたけ」と字余りになってこそ、暢びやかで無邪気な情感が生きるのである。この句形は恐らく杜撰であろう。「雪まるげ」を板本『雪まるげ』等では「雪まろげ」としてあり、これはどちらでもよいが、真蹟や初出の『続虚栗』に「雪まるげ」とあるのに拠るべきことは当然である。

268　年の市線香買に出ばやな　（続虚栗）

泊船集・蕉翁句集

冬季（年の市）。

語釈　**○年の市**　「年の市」。年末に正月用の飾り物や縁起物、雑貨類を売る市。深川八幡の年の市は、十二月十四、五両日に立った。「年の市誰を呼らん羽織どの　其角」（『続猿蓑』下）「**Ichiga tatçu.**」（『日葡辞書』）。**○線香買に出ばやな**　「線香買ひに出でばやな」。線香を買いに出ようよ。「線香」は、香料の粉末を線状に練り固めたもの。この時代には仏前に用いるより、香を聞く為のものだったという。「ばや」は自己の願望、「な」は詠嘆。「線香、寛文七、五島一官と云者、福州より伝へ、子の一官長崎にて始めて製」（『本朝世事談綺』巻五）「檜笠に宮をやつす朝露　杜国　銀に蛤かはん月は海　芭蕉」（『冬の日』）「見せばやな茄子をちぎる軒の畑　惟然」（『笈日記』）「**Xencô.**」「**Cai, cô, ôta.**」（『日葡辞書』）。

大意　年の市が立った。正月用品など買うこともないが、線香でも買いに出ようよ。

考　初出の『続虚栗』は貞享四年十一月十三日の刊行だから、年の市の句は刊行の年ではなく、貞享三年冬以前の成立である。『蕉翁句集』は貞享三年としている。

年の市が立っても、世外隠遁の身には正月の支度の要もない。しかし、市の賑わいには心惹かれるので、出掛けて人混みにまじりたい気持が動く。何も買わないのもうら淋しいから、線香でも買おうかというのである。歳暮の魂祭

に用いる線香と見る説が古注以来あるが、そういう目的あって買うのでは面白くない。正月に関わりのないものとして線香を考えているわけで、当時はまだ仏前に用いる習わしがなかったとすれば猶更である。俳席に用いることもあったから、常備しておいてよいものでもあった。因みに〔語釈〕に引いた『本朝世事談綺』（菊岡沾涼著、享保十九年刊）の記事によると、線香は寛文七年に渡来し、普及は更に遅れることになり、この当時の江戸の人士にも珍しい品と見られるけれども、寛文よりは遥かに先立つ慶長度の『日葡辞書』にこの語が見えるのはどうしてであろう。沾涼の記事は鵜呑みには出来ないように思う。

ともかく、句は年の市に出掛けたい気持を、軽くユーモラスにあらわしているところが眼目である。世外の身が俗世の賑わいに惹かれるのを恥じるわけではなく、ふとそれを距離を置いて眺めて微笑するような気味がある。「出ばやな」の軽い調子には、浮き浮きした童心めいたものさえ感ぜられ、殊更に隠者趣味を衒った厭味とは無縁であろう。

歳暮

269 月雪とのさばりけらし年の暮（正月廿日付寂照宛書簡）

あつめ句・続虚栗・真蹟短冊・篇突・泊船集・四山集・蕉翁句集・栞集

冬季（年の暮）。

語釈 ○**歳暮**「セイボ」。既出（I *151*）。○**月雪**「ツキユキ」。秋の月、冬の雪は、春の花と共に風雅の代表的季物である。「月雪や鉢たゝき名は甚之丞　越人」（『去来抄』先師評）。○**のさばりけらし** 自分勝手に振舞ったようだなあ。「のさばる」は俗語。「けらし」は「けるらし」の約で「らし」は語調をやわらげるのが主意。ここでは自嘲的な気分をあらわす。『おくのほそ道』市振の条の「哀さしばらくやまざりけらし」とは聊か異なっている。既出（I *172*）。「なんとていしゆ久しいのと、のさばり上れば」（『曾根崎心中』）。

大意 今年も暮を迎えたが、一年中月だ雪だと自分勝手に振舞ったようだなあ。

考 寂照（鳴海の知足）宛書簡は貞享四年正月筆と考えられるもので、歳旦や歳暮吟を書き付けた中に見えるから、貞享三年年末の作であることは疑いを容れない。四年秋筆の「あつめ句」にも見え、板本の初出は『続虚栗』である。真蹟短冊は鯉屋伝来の品で、杉風筆の火桶を前にした芭蕉画像の上に貼られている。

野ざらしの旅を終えた後の芭蕉の作品を見ると、雪月花を賞して風雅に生きようとする心境が安定して、清閑を愛する温和な気分が句々に溢れているのが看て取れるのであるが、そういう日常を時あって自省する気持が顔を出すこともあった。特に俗世間の人が一年の総仕上げに走り廻る年末には、それと関わりのない自らの位置を強く意識して、ほろ苦い反省を噛みしめることもあったのである。これは隠者生活を択んだ人間の謂わば宿命であって、「予が風雅は夏炉冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし」（元禄六年「許六離別詞」）という信念はありながらも、非生産的な無用の事に生きる自分のあり方を、世間と対比して省みるのも、自然な心の動きであったろう。そうした心境を述べたものとして、この句では「のさばりけらし」という表現が強い印象を与える。

五文字に月雪と優美に云出て、乃佐婆流と俗談の語を以て俳諧となす、名誉也。（信天翁『笈の底』）

といった俳諧独得の自由さは勿論だが、「のさばる」のような語を用いたところには、それだけ自省の強さが籠められており、それに続く「けらし」に自嘲の気分を濃く滲ませることになっている点に注目したい。後年の「月花の愚に針たてん寒の入」（『薦獅子』）の句になると、この気持は一層強調されている。

貞享四年

270 たれやらがかたちに似たり今朝の春　（正月廿日付寂照宛書簡）

続虚栗・真蹟短冊・俳林良材・蕉翁句集

誰やらが姿に似たりけさの春　（泊船集）

春季（今朝の春）。

語釈　**○たれやらがかたち**　「誰やらが容姿」。「かたち」は人の姿、容儀の意。「たれやら」は、身分ある人の意をおぼめかした、おどけた表現である。「が」は、所有格。「像花にあらざる時は夷狄にひとし」（『笈の小文』）「Catachi.」（『日葡辞書』）。**○今朝の春**　新年をことほぐ初春の季語。既出（I *91*）。

大意　元日の今朝は普段とはちがった物を着込んで、誰やら尤もらしい人の姿に似ている。

考　板本の初出が貞享四年十一月刊の『続虚栗』で、歳旦吟としては貞享二年に「誰が婿ぞ」、同三年に「幾霜に」の句があったのだから、当面の句は四年の歳旦吟と考えてよい。これによって寂照宛書簡の年次も確定するのである。『句選年考』には「風艸茶話に支考が曰く、嵐雪が妻芭蕉に紙衣を贈りける時の句なりとあり」と見え、『芭蕉翁発句集』には「嵐雪が送りたる正月小袖を着たれば」と前書があるが、これらは何れも根拠が確かでない。ただ句の内容からして、何か普段とはちがったものを着込んだ趣は窺われ、紙衣よりは小袖などが正月の場合には相応しいかと思

われるまでである。

句形については、寂照宛書簡や真蹟短冊等直筆のものに「かたちに似たり」と書かれているのが最も信頼出来る。『泊船集』の「姿に似たり」は、意味は同じながら、何に拠ったものか明らかでなく、真蹟の仮名書きに比べれば、信憑性は格段に劣る。『蕉翁句集』の「容に似たり」は「カタチ」と訓んでよかろう。

新年は何となく改まった感じのもので、ちゃんとした家では、家内での挨拶にも言葉を改める。芭蕉庵ではそうした儀式張ったこともなかったろうが、普段の十徳などとちがって、門人から贈られた小袖か何かを着込めば、我ながら別人のような感じがする。一寸面映く、はにかみたいような気持を、誰か身分のある人の姿のようだ、とユーモラスに表現したのである。そこに贈り主への謝意も籠り、新年の賀句として明るくまとめられている。「今朝の春」を「かたちに似たり」の主格と取る説が古くからあるが、良くあるまい。

人日

271　よもに打薺もしどろもどろ哉　（続深川）

春季（薺打つ）。

語釈　**○人日**　「ジンジツ」。五節供の一で、陰暦正月七日を指す。中国の古い習俗に、正月の初め六日間は獣畜を占ない、七日に人を占なうところからこの名があり、草を炊き込んだ七種の粥を祝う習わしがある。「人日　正月七日也。凡毎年正月一日曰雞日。二日云狗日。三日云猪日。四日云羊日。五日牛日、六日馬日、七日人日、八日曰穀日。見荊楚歳時記矣。或書曰、人日以七種菜作羹　食之則諸人無病患也」（『増補下学集』）「**Iinjit.**」（『日葡辞書』）。**○よもに打薺**　「四方に打つ薺」。「薺」は春の七草の一。所謂「ぺんぺん草」で、アブラナ科の二年草。七草粥にする外、早春に若葉を茹でて食べる。正月

七日の早朝、薺などの七草を俎板の上に置き、庖丁の背や摺粉木で叩き、唱え言をしながら大きな音を立てる。これを「薺打つ」といい、各戸で行うその音が寒い暁天に響くさまは、かなり印象的であった。「和俗春苗をとりて、七日の羹に和す。七草の内、第一此ものを採て盤上に置、ちいさき枝木を以て盤面を打囃す。其詞に云、唐土の鳥と日本の鳥と、渡らぬさきに、七くさ薺と云ゝ。又名の草薺ともいふよし侍る。是を此六日の未明より華夷の人民家ゝに賞し、七種をはやすと云、又薺をはやすといへり。其由来を知らず」（『滑稽雑談』）「星はら〱かすまぬ先の四方の色　呑霞」（『はるの日』）「薺うつ遠音に引や山かづら」（『青蘿発句集』）「**Yomo. Xifô.**」「**Nazzuna.**」（『日葡辞書』）。○**しどろもどろ**　拍子が揃わず雑然と響くのを、俗語を用いて形容したもの。今は、言うことの前後が合わず、理路不透明なことを指す場合が多い。「ともすれば風にみだるゝ刈萱のしどろもどろに物ぞかなしき」（『海人刈藻物語』巻三）「ものごとのしどろにあとさきなるも、中〱におかしき事のみ多し」（『更科紀行』）「**Xidoromodoroni ayumu.**」（『日葡辞書』）。

大意　四方で薺を打つ響きも、しどろもどろで面白い。

考　杉風の後裔に伝わった芭蕉関係の資料を紹介した梅人の『続深川』（寛政三年成）に見える。所収の蕉句は「延宝の末、貞享終りまでの吟」とあり、江戸での作とすれば、『笈の小文』の旅にあって伊賀の郷里で新年を迎えた貞享五年は年次推定の範囲から除かれよう。同四年正月以前の作と見てここに置く。

四方の家々から響いて来る薺を打つ音の雑然とした響きを「しどろもどろ」という俗語で形容した俳諧で、軽く興じた気分が調子に出ている。「薺も」は色々に取れるが、余り理詰めに解しては良くあるまい。「薺はしどろもどろかな」と同じことなのだが、それでは曲が無さすぎるので「も」と置いたのであろう。「二日にも」（Ⅱ*338*）の句参照。先蹤作として「七くさをむさくさたゝく朝哉」（『毛吹草』巻五）という慶友の句があるが、これは類音の洒落に過ぎない。芭蕉の句の方が、音の感じをずっと生かしていると思う。

272 わするなよ藪の中なるむめの花　（俳諧勧進牒）

初蟬・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

ひとゝせみやこの空にたび寝せしころ、みちにて行脚の僧にしる人になり侍るに、
このはるみちのおく見にゆくとて、わが草庵をとひければ

またもとへやぶの中なる梅花　（あつめ句）

——栞集

春季（むめの花）。

語釈　○わするなよ　「忘るなよ」。○藪の中なるむめの花　「藪の中なる梅の花」。梅の花を作者自身に譬えた。「むめ」は、語頭の唇音を忠実に表記したもの。「藪の中に紅葉みじかき立枝哉　林斧」（『あら野』巻四）。

大意　藪の中に咲く梅の花のような私を、忘れて下さるな。

考　『泊船集』には「門人何がしみちのくに下るを、馬のはなむけしたまひて」と前書があり、それに先立つ『初蟬』にも、「此句はある門人に遣れける也」と注記がある。出典として最も早いのは貞享四年秋筆の「あつめ句」で、その前書に「このはる」とあるところを以て見れば、「またもとへ」の形が同年春の成立たることは疑いを容れない。それから数年を隔てた『俳諧勧進牒』（路通撰、元禄四年刊）に初五を「わするなよ」とした句形が現われるわけであるが、句の見える「月山発句合」には作者が漁父として出ている。嘗て潁原退蔵博士は『芭蕉俳句新講』に於いて、「あつめ句」の前書の「行脚の僧」が即ち漁父で、当人が羽黒あたりでこの句を語ったのを、漁父の作と考えたのではないかと推測されたが、事情は何れにもせよ、『初蟬』以下の諸集に収められている以上、『勧進牒』の作者が誤伝であることは確かであろう。「あつめ句」以後の数年間に初五を「わするなよ」と改めたものと推定される。

古注には、行脚の途中「藪の中なるむめの花」のような目立たない物にも、よく目を留めて見よ、とか、或いは

「むめの花」にたとえられた風流人に会うのを忘れるな、というような意味に解しているものがあるが、これらは皆誤解といわざるを得ない。初案に「またもとへ」（又も訪へ）とあるのに留意すべきであって、つまり無事で奥州（みちのおく）から帰って来たら、又訪ねて来て下さいといっているのである。すると、藪の梅の花は当然芭蕉自身をたとえたものと考えられよう。藪蔭のひそかな梅花のたたずまいには侘びた趣があり、草庵隠遁の身をたとえるのに相応しい。路通の「返店文」（『本朝文選』巻七所収）を見ると、貞享五年春当時、芭蕉の旅に出たあとの深川の草庵のさまを叙して、「むなしき跡は草ふかき庵を閉て。ばせを一もとを残せり。藪梅のにほひ簾にちり。小鳥の声軒にあそぶ」といっており、芭蕉庵の庭に実際に「藪梅」が見られたのである。

「またもとへ」と「わするなよ」の優劣は、聊か判断が難しい。「「またもとへ」……よりも、「忘るなよ」の方が、遠い旅の行先を思いやりつつ名残を惜しむ気持ちが、はっきりと言葉の背後に感ぜられるようである」（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）「「忘るなよ」……の方が表現は間接ながら、意味はいっそう強い」（山本健吉氏『芭蕉全発句』）といった鑑賞はあるが、私は「わするなよ」の強い呼び掛けよりも、「またもとへ」の穏やかでなつかしい響きに愛着を感ずる。要するに貞享四年の折は「またもとへ」を良しとし、数年後には「わするなよ」に左袒したわけで、人それぞれ折々の心の動きは、一概に論じ難い面があろう。なお、「わするなよ」には「わするなよほどは雲ゐになりぬともそらゆく月のめぐりあふまで」（『伊勢物語』十一段）の古歌が響いていると思われる。

「あつめ句」の前書に見える「行脚の僧」を、『野ざらし紀行』貞享二年夏尾張の条の「伊豆の国蛭が小嶋の桑門」かとする山崎喜好氏の推測がある（『日本古典全書・芭蕉句集』）。今ではこの桑門が路通であることが明らかになっているが、「行脚の僧」を路通と考えることは今のところ無理のようである。貞享二年以後五年春まで、路通の閲歴には空白があるけれども、「返店文」で見る限り、貞享五年春留守の芭蕉庵を訪ねる前に、路通が深川の草庵で芭蕉と会ったことは無いと推定されるからである。

草庵

273
花の雲鐘は上野か浅草歟（続虚栗）

あつめ句・蕉影余韻所収真蹟懐紙・柿衞文庫蔵真蹟懐紙・富岡美術館蔵真蹟懐紙・真蹟十句懐紙・真蹟五句発句切・竹冷文庫蔵真蹟短冊・芭蕉全図譜所収真蹟短冊・定本芭蕉大成所収真蹟短冊・柿衞文庫蔵真蹟扇面・真蹟集覧・枯尾花・芭蕉庵小文庫・陸奥鵆・泊船集・今日の昔・蕉翁句集・栞集

春季（花の雲）。

語釈　○**草庵**　「サウアン」。草葺きの庵（いおり）。深川の芭蕉庵を指す。「阿叟は深川の草庵に四年の春秋をかさねて」（支考「今宵賦」―『続猿蓑』上）。○**花の雲**　桜花の盛りのさまを雲に見立てた表現。既出（Ⅱ*256*）。○**鐘**　「カネ」。ここは寺院で撞く鐘の音をいう。「血刀かくす月の暗きに　荷兮　霧下りて本郷の鐘七つきく　杜国」（『冬の日』）「Caneuo tçuqu.」（『日葡辞書』）。○**上野**　「ウヘノ」。現東京都台東区。東叡山寛永寺を指す。「うへの丶花見にまかり侍しに、人〳〵幕打さはぎ、もの丶音小うたの声さま〴〵なりける」（『炭俵』上、芭蕉発句「四つごきの」前書）。○**浅草歟**　「浅草（あさくさ）」は、今の東京都台東区浅草にある浅草寺を指す。（Ⅱ*256*）参照。「歟（か）」は、古典漢文に用いられる疑問の助辞。既出（Ⅰ*182*前書）。「浅草と申す堂あり。十一面観音のをはします」（『とはずがたり』巻四）。

大意　雲かと紛う花盛りだ。遠くから響いて来る鐘の音は、上野の寛永寺か、それとも浅草の浅草寺だろうか。

考　柿衞文庫蔵真蹟懐紙には、「しかるに花の名だかきは、先初花を急ぐなる近衛どの丶糸桜、みわたせば柳さくらをこきまぜて、みやこははるのにしき散乱たり」と謡曲「西行桜」の一節に譜点を付して前書としており、富岡美術館蔵真蹟懐紙も同じ一節を前書にしているが、用字が異なる。「観音の」（Ⅱ*256*）の句の条で述べたように、「花の雲」の句は『末若葉』の記事によって前者の翌年の作と推定されるのであるが、当面の句は「あつめ句」や『続虚栗』等貞享四年秋冬の間に成立したものに初めて見えるので、同年春の作と考えられる。
『続虚栗』の「草庵」という前書からも分るように、芭蕉は深川の草庵から花盛りの江戸の町を遥かに眺めやっているのだ。「花の雲」のあたりは花見の人出で雑踏している筈だが、そこを離れた作者の周辺は至って閑静なのであ

る。「鐘は上野か浅草歟」にしても、鐘の音が寛永寺か浅草寺かが問題なのではない。何れか聞き紛うという表現によって、春闌わの頃の日中の「鐘霞む」趣を描き、駘蕩たる季節感をあらわしているのである。地名などを詠み込んだ平易な表現のせいか、人口に膾炙した句であることは、人に書き与えた真蹟類の多いことによっても知られ、謡曲の詞を前書にしたものがあるのも、「観音の」の句と同様である。誰知らぬ者もない句なので、俗調を帯びたように兎もすれば受け取られやすいが、そうした先入主を除いて見れば、閑適の雅情を湛えた落着いた調べが感ぜられると思う。

この趣の中に、草庵の春、静かに四辺の自然に身を任せた姿が見られる。境(きょう)に身を委(ゆだ)ねた人の大きな安らぎが、この句の調子の上に流れていて、前年の「観音の甍見やりつ花の雲」と一連をなす味がある。(『芭蕉全句』)

という加藤楸邨氏の鑑賞が至当であろう。

「観音の」の句の条でも触れた菅公の詩「都府楼纔二瓦色一、観音寺只聞二鐘声一」は、この句に於いても影響が考えられないではない。ただ井本農一博士の指摘されたように、前の句と一年を隔てていることでもあり、直接菅公の詩句を下敷にしたわけではなく、飽くまで実感が中心であって、句をまとめる過程で古詩を念頭に置いたかという程度に見るのがよかろう。また、元禄七年五月十三日付浪化宛去来書簡には、「鐘隔二寒雲一声到遅」(鐘は寒雲を隔てて声の到ること遅し。謡曲「熊野」に引く出典不明の詩句)の心に思い寄せた句と解しているが、冬の「寒雲」では花の春の趣と余りにも異なるので、この見方を採ることは難しい。

この御寺の縁記、人のかたるを聞侍て

274 かさ寺やもらぬ岩屋もはるのあめ (無日付寂照宛書簡)

尾張の國笠寺を通りける時、寶前にてこの句を見付侍るよし、ある人かたりければ

笠寺やもらぬ岩屋も花の雨　（枯野塚）

笠寺や窟ももらず五月雨　（蕉翁句集草稿）

尾劦笠寺繪馬

かさ寺や窟にもゝらず五月雨　（蕉翁句集）

春季（はるのあめ）。

語釈 **○この御寺の縁記**　「此の御寺の縁記」。「御寺」は現名古屋市南区笠寺町上新町にある天林山笠覆寺（真言宗）を指す。天平年間禅光という僧が、浜に漂着した霊木に十一面観音像を刻んで堂宇を建て小松寺と称したのに始まり、その後荒廃したが、本尊が雨露にさらされているのを嘆いたさる女が、自分の笠を観音像にかぶせた。その女は太政大臣兼平の妻となり、兼平の手で寺が再興されたので、女の笠にちなんで笠寺と称するようになったという。「縁記」は、寺社の由来。「縁起」と書くのが正しいが、「記」を書く習わしもあり、『おくのほそ道』に「縁記の旨世に伝ふ事も侍し」「まのあたり縁紀にみえたり」（素龍清書本）といった例があるところを見ると、芭蕉は「縁記」と書く癖があったようである。「五十丁山に入て永平寺を礼す。道元禅師の御寺也」（『おくのほそ道』）「Cumanono yengui.」（『日葡辞書』）。**○人のかたるを聞侍て**　「人の語るを聞き侍りて」。「去来京より来ル。途中の吟とて語る」（『嵯峨日記』）「Catari, u, atta.」（『日葡辞書』）。**○かさ寺**　「笠寺」。前記笠覆寺の俗称。**○もらぬ岩屋**　「漏らぬ岩屋」。雨露の漏らない岩窟、の意。「もらぬ」は「かさ」の縁語になる。「くさのいほなにつゆけしとおもひけんもらぬいはやも袖はぬれけり」（『金葉集』巻九、僧正行尊）の歌を踏まえる。「Mori, u, otta.」（『日葡辞書』）。**○はるのあめ**　「春の雨」。「あめ」は「かさ」「もらぬ」の縁語。『三冊子』には「春雨はをやみなくいつまでもふりつゞく様にする。三月をいふ。二月すゑよりも用る也。正月、二月はじめを春の雨と也」（わすれみづ）とあり、「春雨」と「春の雨」に使い分けがあったように伝えるが、実際の用例では厳密に区別し難い。この句の春の雨も、しとしとと降り続く趣であろう。「春の雨弟どもを呼てこよ　鼠弾」（『あら野』巻二）。

大意　「もらぬ岩屋」ともいうべき笠寺の御堂にも、今は春の雨がしとしとと煙っていることよ。

考　『熱田三歌仙』には「笠寺にて」と前書があるが、実際尾張に行っての作ではない。時期的に最も早い寂照宛

書簡は貞享三、四年の何れかに江戸で書かれたものであるが、それには、

笠寺の発句度々被仰下候故、此度進覧候。よきやうに清書被成、奉納可被成候。

とあり、寂照（知足）に笠寺に俳諧を奉納する計画があって、その発句を需められて作ったことが分る。鳴海連衆による笠寺奉納歌仙は、『知足斎日々記』によると貞享四年十一月十七日に行われ、折柄『笈の小文』の旅の途次当地に来ていた芭蕉も立合っている。発句は旅に出る前、貞享三、四年のうちに江戸で作られたわけであるが、とりわけ四年春の可能性が大きい。

いうまでもなく「もらぬ岩屋」は笠寺に実在するものではなく、「かさ」の縁で出て来た想化の所産である。今では笠寺も本尊が雨ざらしということはなく、立派な堂宇が建って「もらぬ岩屋」ともいうべきだが、其処にも今は春雨が煙っていようと思い遣ったもの故、「煙っているだろう」と訳してもよいけれども、奉納する現在の意識として「煙っていることよ」とした。芭蕉の頭には、前記の行尊の歌と共に西行の「露もらぬいはやもそでではぬれけりときかずばいかゞあやしからまし」（『山家集』中）という歌が当然あったであろう。奉納の句として、これら古歌を踏まえ縁語を綾なして上品にまとめられている。降るとも見えぬ暖かな春雨の趣は、本尊に自らの笠をかぶせたそのかみの鄙の女性の心づかいにも通い、季節感と共に人間のぬくもりを感じさせる。知的に構成された句ではあるが、悪い出来ではない。

いろいろ伝えられる異形は、何れも問題があって信じ難いものばかりである。先ず『枯野塚』（野坡・哺殿撰、宝永二年刊）の「花の雨」は、誤読か伝聞の誤りであろう。土芳の『蕉翁句集草稿』には「此句尾陽笠寺の絵馬に哥仙有。貞享五辰五月吉日と記ス。浅井氏是を写ス」と注記があり、『蕉翁句集』も同じものを原拠とすることが前書によって明らかである。『知足斎日々記』貞享五年二月五日の条に「笠寺俳諧絵馬掛ル」とあるが、土芳のいう「五月吉日」とは日が違うから、浅井なる人の見たのとは別物であったろう。「五月雨」は奉納の時節に合わせたものかも知れな

いが、芭蕉の作としては真蹟の裏付けのある「はるのあめ」の形を採るのが当然である。『蕉翁句集』の中七「窟にも〻らず」は誤筆に過ぎない。

275　ふるはたやなづなつみゆくおとこども　（あつめ句）

古畑に薺摘行男ども　（誹諧曾我）

柱暦・蕉翁句集・雪まるげ・栞集

泊船集書入

春季（なづな）。

語釈　**○ふるはた**　「古畑」。耕されずに長い間放置されている荒れた畑。「ふるはたのそばのたつ木にゐるはとの友よぶこゑのすごき夕暮」（『山家集』中）。**○なづなつみゆく**　「薺摘み行く」。「なづな」は既出（Ⅱ271）。**○おとこども**　「男共」。歴史的仮名遣では「をとこ」が正しい。

大意　荒れた古畑を、男どもが薺を摘みながら通って行くよ。

考　「あつめ句」初出の句であるから、貞享四年春までには成っていた句である。「古畑に」の句形は信じ難い。「古畑に」では句は死んでしまって、単に場所を指定したに過ぎなくなる。「古畑や」となって初めて、眼前にひろがるところの、去年のままに占びた畑が、単なる説明としてではなく生きているのである」（『芭蕉全句』）と加藤楸邨氏がいわれる通りで、真蹟の句形に従うべきである。

春の七草の代表たる薺は、それ一種を指して若菜ということもあり、初春の若菜摘みには優雅な都人が相応しい。ところがここでは、都雅な上﨟の若菜摘みどころか、むくつけき農夫が古畑のほとりの草を摘んで行くのである。伝統的な人日の行事につけて、こんな庶民の現実を見つけたところに、この句の俳諧があろう。伊賀での所見とする見方もあるが、必ずしもそう限ったことではなく、江戸の郊外でもこうした光景は見られたろうと思う。愛想のない句

柄ながら、噛みしめるうちに滋味の出て来るような作である。

あるひとのかくれがをたづね侍るに、あるじは寺に詣でけるよしにて、とし老たるおのこ獨庵をまもりゐ暮ける。かきほに梅さかりなりなりければ、これなむあるじがほなりといひけるを、かのおのこ、よ所のかきほにてさぶらふと云をきゝて

276

るすにきて梅さへよそのかきほかな　（あつめ句）――栞集

ある人の草の戸を尋ね侍りけるに、よそに出けるよしにて、年老たるおのこのひとり留守を守り居けるに、垣ほの梅さかりなりけるを、是なんあるじといひければ、かのおのこ、隣の梅にてさぶらふと申に、いよ〳〵興うしなひて歸り侍るとて

留主に來て梅さへ餘所の垣根哉　（虚空集）――蕉翁句集

春季（梅）。

語釈 ○**あるひとのかくれが**　「或る人の隠れ家」。「かくれが」は、隠宅のこと。「あるひと」が誰を指すかは明らかでない。「九月十日素堂の亭にて／かくれ家やよめ菜の中に残る菊　嵐雪」（『あら野』巻七）「Cacurega.」（『日葡辞書』）。○**寺に詣でけるよしにて**　「寺に詣でける由にて」。寺に参詣して家に居ないということで。「越人旅立けるよし聞て、京より申つかはす」（『あら野』巻七、野水発句「月に行」前書）「Yoxi.」（『日葡辞書』）。○**とし老たるおのこ**　「年老いたる男」。「おのこ」は歴史的仮名遣では「をのこ」と書くのが正しい。ここは下男などをいう。「若き女の声二人斗ときこゆ。年老たるおのこの声も交て」（『おくのほそ道』）「Vonoco.」（『日葡辞書』）。○**独庵をまもりゐ暮ける**　「独り庵を守り居暮らしける」。「庵」は前の「かくれが」のこと。「アン」と音読してもよい。「まもる」はこの場合、留守番をしていること。「暮」は聊か余計な言葉のように感ぜられる。「行く末久に御垣

守、守るべしく〳〵や」（謡曲「老松」）「淀川のほとりに日をくらして」（『続猿蓑』下、丈草発句「舟引の」前書）「Rusumori, i, Rusunoban.」「Mamori, u, otta.」「Curaxi, su, aita.」（『日葡辞書』）。○**かきほに梅さかりなりなりければ**　「垣穂に梅盛りなりければ」。「かきほ」は「かき」というに同じ。「なりなり」は行替えの為に生じた誤筆で、下の「なり」は削るべきである。「蕣や垣ほのまゝのじだらくさ　文鱗」（『あら野』巻四）「Caqiuo. P. i, Caqi.」（『日葡辞書』）。○**これなむあるじがほなり**　「是なむ主顔なり」。この梅が主人のような様子をしているよ、の意。「なり」は文法上の誤り。「なむ」は係助詞だから、結は「なる」でなければならない。「むかし見しあるじがほにてむめがえのはなだにわれにものがたりせよ」（『金葉集』巻十、基俊）。○**かのおのこ**　「彼の男」。留守番をしている老人を指す。「お」は「を」の仮名ちがい。○**よ所のかきほにてさぶらふ**　「余所の垣穂にて候ふ」。自分の家の垣根ではなく、他人の家のそれだというのである。「さぶらふ」は、「あり」の丁寧語。この時代の言い方としては「さふらひ」「さぶらふ」（発音は「ソウライ、ソウロウ」）もあった。後者を採るべきかも知れない。「これよりめづらしき事は候なんや」（『源氏物語』帚木）「Saburai, ô, ôta.」「Sôrai, rô, ôta.」（『日葡辞書』）。○**云をきゝて**　「云ふを聞きて」。○**るすにきて**　「留守に来て」。主人の留守に訪ねて来て。「るす」は、もと天皇が都の外に行幸の際、都にとどまって政務をとる人をいった。「留主」とも書くが宛字である。「はつ雪に戸明ぬ留主の菴かな　是幸」（『あら野』巻一）「Rusu. Todomari mamoru.」（『日葡辞書』）。

大意　主人の留守に訪ねて来て当てがはずれたのに、芳しい梅までが余所の家のものだとは、何とも拍子抜けすることだ。

考　『蕉翁句集』に「浅草或人の庵にて」と前書があるのは、何に拠ったものか明らかでない。「あつめ句」初出の句であるから、貞享四年春までには成っていた筈である。

わざわざ訪ねて来たのに、主人は不在だった。当てがはずれた思いであたりを眺めると、垣根の梅が今しも盛りである。これは佳い、これが主人代りだねと興じたら、風流など解しない下男が、ぶっきらぼうに「よそのうちのです」と答えた。重ね重ねのことに拍子抜けして苦笑する気持を句に託したのである。細道旅中の「月のみか雨に相撲もなかりけり」に似ており、句よりも前書が面白い。

『虚空集』（坂山・東海撰、元禄十六年刊）の句形は、前書も同趣旨ながら処々異なっているので、こういう別案があった

かとも思われる。しかし原拠が明らかでない以上、確かな真蹟の裏付けのある「かきほかな」を本位句とするのが当然であろう。

里　梅

277　さとのこよ梅おりのこせうしのむち（あつめ句）　　真蹟短冊・栞集

里の子等梅折のこせ牛の鞭（前後園）

里の子よ鞭おり残せ梅の花（漆川）　　蕉翁句集

春季（梅）。

語釈　○**里梅**「里の梅」。村里に咲いている梅の花。「春雨袖に御哥いたゞく　荷兮　田を持て花みる里に生けり　羽笠」（『はるの日』）。○**さとのこ**「里の子」。ここは牛飼の牧童である。「里の子が燕握る早苗かな　支考」（『続猿蓑』下）。○**おりのこせ**「折り残せ」。「おり」は歴史的仮名遣では「をり」と書くのが正しい。「馬上に折り残す江北の柳陰の糸もて繋ぐ駒」（謡曲「蟻通」）。○**うしのむち**「牛の鞭」。牛を歩ませる為の鞭。「御さきの露を、むまのむちしてはらひつゝ、いれたてまつる」（『源氏物語』蓬生）「Muchi.」（『日葡辞書』）。

大意　里の子よ、少しは梅の枝を折り残しておけよ。牛の鞭にするにしても。

考　年代の明らかな資料としては「あつめ句」が最も早いので、貞享四年春以前の成立と考えられる。異形は前掲の外、華雀の『芭蕉句選』に「子共らよ梅折のこせ牛の策」（「策」も「ムチ」と訓む）といった形も伝えられるが、何れも信じ難い。『前後園』（言水撰、元禄二年刊）は他門の集であり、『漆川』（上明撰）には「天和のはじめ浪士なにがしのもとにての吟なり」と注記があるが、刊行が宝永三年まで降るとあっては、信憑性に難があろう。「あつめ句」や

真蹟短冊の句形に拠るべきである。

牛飼の牧童が、花をつけた梅の枝を折って鞭代りにしている。こういう事は群衆心理が手伝うから、子供は数人居るものと見てよい。作者はそれを咎めているわけではなく、のどかな里景色として眺めているのだ。「梅おりのこせ」というところが一句の興で、花を賞したい雅懐が感ぜられる。ただ、加藤楸邨氏が『芭蕉講座』で指摘されたように、「うしのむち」が上から離れてしまって、意味を取るのに戸惑う感じがある。少し考えれば分るけれども、表現上いささかの難であろう。題詠風の句柄である。

続虚栗・破暁集・誹林一字幽蘭集・真蹟十句懐紙・観魚荘蒐集展観図録所収真蹟短冊・麻生氏蔵真蹟短冊・蕉翁句集・日団扇・栞集

278　はらなかやものにもつかず啼ひばり　（あつめ句）

草も木も離れ切たるひばりかな　（泊船集書入）

春季（ひばり）。

語釈　**○はらなか**　「原中（はらなか）」。野原の中。「Fara.」（『日葡辞書』）。**○ものにもつかず**　「物（もの）にも付（つ）かず」。何物にも依拠することなく。次の「啼」にかかる。後述するように西行歌による表現であり、原意を聊か転じて用いている。「姫ゆりのなにゝもつかず、雲雀の大空にはなれて」（芭蕉『あら野』序）「Tçuqi, qu, ita.」（『日葡辞書』）。**○啼ひばり**　「啼（な）く雲雀（ひばり）」。「ひばり」は、雀よりやや大きい小鳥。体色は褐色で地味だが、高く空にあがって囀るので、よく詩歌の題材になる。季語としては春。「雲雀……童蒙抄曰、此鳥は春日うらゝかに照る日、遥に空へあがる也。……和訓義解云、日のはれたる時高く上りて鳴也。ひはる也。雨天にはのぼらず。△夏月に及て猶高くあがる也。……尤夏に許用す」（『滑稽雑談』）「青麦や雲雀があがるありやさがる　鬼貫」（『金毘羅会』）「Fibari.」（『日葡辞書』）。

大意　一面にひろがる原野の中で、草木にも何にも頼らずに、ひばりがひたすら空高くあがって啼いていることよ。

考　「あつめ句」が最も時期の早い出典なので、貞享四年春までには成っていた句である。板本の初出たる『続虚

栗』春の部には、

艸庵を訪ける比

永き日も囀たらぬひばり哉　芭蕉

原中や物にもつかず鳴雲雀　同

と聞えけるに次で申侍る

啼〳〵も風に流るゝひばり哉　孤屋

として、以下、孤屋・野馬・其角の三吟歌仙を掲げている。これによれば江戸の門人孤屋が深川の芭蕉庵を訪ねた時に「永き日も」の句と共に示したもので、二句は同日の吟である可能性が高いが、それまでに出来ていた句を孤屋に示したとも考えられる。

発想は芭蕉庵から見渡される春の田園の風趣を契機としたものであったろうが、それを句としてまとめるに当ってば西行歌を踏まえた表現になっている。『目団扇』（之建・于候撰、享保五年刊）所収、孟遠の「桃の杖」に見える許六の説に、

西行の哥に心性さだまらずと云事を題にて人へよみやり侍る

雲雀たつあら野におふる姫ゆりの何につくともなき心かな

此歌をとりて

夕にも朝にもつかず瓜の花　翁

原中や物にもつかず鳴雲雀　同

と見えており、「雲雀たつ」の歌は、人間の心性が不安定なものとする仏教の立場から、これを「あら野におふる姫ゆり」に譬えたものであった。それを芭蕉は何物にも依拠拘束されない意に取做して「ものにもつかず啼ひばり」と、

ひばりの空高く揚って啼くさまの形容としている。『誹林一字幽蘭集』（沾徳撰、元禄五年刊）はこの句の後に「なくひばり空をやおのが道芝に床をしめても又あがる也」という後土御門院の御製を注しているが、一面にひろがる春の野の空にさえずるひばりのさまは、まことに自由で、しかも一途なものがある。その無心さは自然の心に通じ、その極寂寥感をさえ帯びる。この句は駘蕩たる春昼の趣を叙しながら、単なる叙景にとどまらないところがあるのだ。「深川の草庵に隠栖独居して俳壇の俗流と訣別した芭蕉が、自己の藝境の探究にのみ専念する日々の営みの中にあって、融通無碍ではあるが孤愁とも言うべき胸中の悲哀を、期せずして吐露している」（富山奏博士『俳句に見る芭蕉の藝境』）といったところまで芭蕉が意識したかどうか断定の限りではないけれども、このようにも見得る表現の奥行は、凡て「ものにもつかず」の語から発しているのである。元禄二年の『あら野』序にも類似の表現があるから、芭蕉が「雲雀たつ」の西行歌に強い印象を受けていたことは疑いない。この前後の作句に、自然の奥秘に観入する底のものが屢々見えるのは注目すべきであろう。

真蹟類のうち、故麻生磯次博士蔵の小短冊は、狩野梅笑の絵に貼付されたもので、『芭蕉翁真跡集』に摸刻された桃鏡蔵の小短冊と同一の品と思われる。『泊船集』許六書入の「草も木も」という句形は、初案とも伝えられるが、これでは理に堕ちて浅露な表現でしかない。

279　**永き日もさえづりたらぬひばり哉**（あつめ句）

続虚栗・出光美術館蔵真蹟懐紙・真蹟十句懐紙・西の詞・蕉翁句集・栞集

雲雀ふたつ
永き日を囀りたらぬ雲雀かな（笈日記）
永き日の日和に足らぬ雲雀哉（尾花の系譜）

陸奥鵆・泊船集

春季（永き日・ひばり）。

語釈 ○**永き日**　「永き日」。春分以後昼の時間が長くなって長閑さを感ずる意味で春の季語とされる。「永き日や鐘突跡もくれぬ也　ト枝」（『あら野』巻二）。○**さえづりたらぬ**　「囀り足らぬ」。ひばりが頻りに鳴いて止まないさまをいった。「え」は、歴史的仮名遣では「へ」を書くのが正しい。「五形菫の畠六反　とこく　うれしげに囀る雲雀ちり〳〵と　芭蕉」（『冬の日』）「**Sayezzuri, u, utta.**」（『日葡辞書』）。

大意　春の日永も囀り足らぬように、ひばりは頻りに囀っていることよ。

考　『続虚栗』には「艸庵を訪ける比」と前書があり、これは「はらなかや」（Ⅱ278）の条で触れたように、孤屋が芭蕉庵を訪うた時の意味である。「あつめ句」初出であり、孤屋は貞享三年の『蛙合』に加わっているから、貞享三、四年の春の作であろう。

日永の春の一日を鳴き続けてなお鳴き足らぬようなひばりの趣をのべた句で、おのずから春の夕暮の懶い気分が感ぜられる。空高く揚ってしきりに鳴くのは、ひばりの本性であるし、句もひたすらそれを直叙して他を顧みていない。「はらなかや」程の深みはないが、微小な命の天真の趣を写した点は同じである。門人と終日語り暮らした疲れなどは、言わずもがなだ。

『笈日記』の「永き日を」という句形は、以後の集にも影響を与え、現代の感覚にはこの方が評判も良い。しかし真蹟二点と初出板本が「も」なのに対して、『笈日記』の「を」とした根拠は必ずしも確かでない。「雲雀ふたつ」と題したのも、「はらなかや」の句と併せ掲げてこそ意味があるのに、その句を脱しているのは杜撰である。「も」が「たらぬ」と呼応するのは、理窟といえば理窟ながら、自然な措辞とも見られよう。『笈日記』の句形を後案とするのは根拠薄弱なのである。『尾花の系譜』（柳水著、宝暦十年成）には「杏花宛真蹟短冊の由」と注してあるが、この句形も信じ難い。『西の詞』（釣壺撰、元禄十四年刊）には、「故翁自筆の色紙、此度有かたよりたうびぬ。賞するにたらず、巻の

かしらを照す」とあって、これまた「も」とした真蹟があったことを証する。出光美術館蔵真蹟懐紙は「ふる池や」の句と並記した貞享後期の筆蹟で、「武陵散人桃青」と署している。

老　慵

蕉翁句集

280 蠣よりは海苔をば老の賣もせで　（続虚栗）

かきよりは海苔をば老の賣りはせで　（去来抄）

蠣うりよ海苔をば老のうりもせで　（泊船集書入）

春季（海苔）。

語釈　○**老慵**　「ラウヨウ」。「慵」は、ものうい、怠る等の意。従って、老いのものうさ、老いの怠りをいう。「慵」の正しい音は「ショウ」「ジュ」。「ヨウ」は慣用音である。「老慵自愛㆓閉㆑門居㆒」（白楽天「老慵」）。○**蠣**　「カキ」。「牡蠣」「石花」とも書く。イタボガキ科に属する二枚貝の総称。雌雄同体で卵胎生。灰色の肉は栄養に富み、美味である。我が国の沿岸に広く分布し、養殖も盛んに行われている。季語としては冬。春季とする根拠はない。「大和本草云、牡蠣、海辺の石に付て化粧す。冬春味好、四月以後秋まで不可食。故に海人不取。凡蠣は石に付て一所に有て不動。故に牝牡の道なし。子を不生。故に牡蠣と云。一所に有て不動者、蠣の外に稀也」（『滑稽雑談』）「柚味噌酒麸の跡から岩花のお吸物出して」（『西鶴織留』巻一ノ二）「Caqi.」（『日葡辞書』）。○**海苔**　「ノリ」。水中の岩石に付着したいろいろな藻類の総称。特定の種類を指すのではない。生のまま、或いは乾燥し紙状に漉いたものを食用にする。春の季語。「苔とりし跡には土もなかりけり　湍水」（『あら野』巻六）。○**老**　「老い」。ここは老人をいう。「看経の嗽にまぎるゝ咳気声　里東　四十は老のうつくしき際　珍碩」（『ひさご』）「Voi.」（『日葡辞書』）。○**売もせで**　「売りもせで」。売りもしないで。言い切らずに遺憾の意をこめた。

大意　あの物売りの老人は、生臭い牡蠣を売るよりは、さっぱりした海苔を売ればよいのに、そうはしないでさ。

考

『続虚栗』春の部初出の句で、貞享四年春までには成っていた句と推定される。

この句については、『去来抄』故実に左の如き説が見える。

去来曰、古事・古歌を取るには、本歌を一段すり上て作すべし。譬へば、蛤よりは石花をうれかしと言西行の歌を取て、

かきよりは海苔をば老の売りはせで

と先師の作あり。本歌は、同じ生物をうるとも、かきを売れ、石花はかんきんの二字に叶ふといふを、先師は、生物を売らんよりのりをうれ、海苔は法にかなふと一段すり上て作り給ふ也。老の字、力あり。大概かくのごとし。

ここにいう西行の歌とは、『山家集』下に、

くしにさしたる物をあきなひけるを、なにぞととひければ、はまぐりをほして侍なりと申けるをきゝて

おなじくはかきをぞさしてほしもすべきはまぐりよりはなもたよりあり

とあるのを指している。これは「蛤よりは牡蠣」といって「かき」に「柿」を言い掛け、「はまぐり（栗）」よりは串に刺した干柿を思わせるからと戯れた歌なのである。芭蕉の「蠣よりは」の句の発想が、この西行歌に基づいていることは疑いを容れない。老人の物売りが、重い牡蠣の荷を携えて売り歩いている。もう旨い時期も過ぎようとしているのに、あの年で重い荷を持ち歩くとは御苦労様なことだ。同じ売るなら荷も軽い海苔でも売ったらよいにと言って、ふと四十を過ぎた自身の老懶の気分に苦笑している体である。殊更切字を入れず、「売りもせで」と言い残した句作りによって、呟くような声調を生かしているところが面白い。

牡蠣という不気味な生物が、老の身にふさわしくないのを感じて、枯淡な海苔に思いを寄せているところに、この頃の、初老に達した芭蕉が感じとれるように思う。その感じたものが「老慵」であって、この老慵の中には、

芭蕉庵に籠っている自分の身に沁みてくるものをはらんでいるようでもある。他の上を語りながら、自らの身の上も、おのずからにじみ出てきているのである。この句は、しずかに誦してみると、どこかつぶやいているような感じがある。芭蕉の句は単に意味上の理解ではどうにもならないことは言うまでもないが、表面上の音調のよろしさという点にとどまらず、もう一つ奥のこのつぶやくような声調にあらわれている音の秘密を見落してはならないであろう。（『芭蕉全句』）

と加藤楸邨氏がいわれた通りである。

去来は前掲の一節で、西行歌の「かき」が「看経(かんきん)」（読経の意）に通うと見ている。『山家集』のこの前後には、人間の犯す罪悪に関わる歌もあるけれども、「おなじくは」の歌にそこまでの含意があるかどうかは断定し難い。しかし、芭蕉の句で老人の牡蠣を売るのを厭うのは、それが生臭物で、後生を願うべき年配に相応しくないという意味を恐らく籠めているのであろう。「海苔」に「法」（仏法）を掛けていることは明らかである。して見れば、『去来抄』の西行歌に対する解釈は、芭蕉も共有していたものと見られ、当時そういう見方が広くあったと考えられよう。西行歌に対するそのような解釈に立ち、それを「一段すり上て」同じく仏法に縁ある作意としたのであった。

異形としては最初に掲げたものの外、蝶夢の『芭蕉翁発句集』に「蠣(カキ)よりも海苔をば老の売もせで」とも伝えられるが、これら芭蕉歿後の書に見える異形は何れも杜撰とおぼしく、問題にはならない。

281 よくみれば薺花さく垣ねかな（続虚栗）

頭陀袋・蕉翁句集・花声

春季（薺の花）。

語釈 ○**薺** 既出（Ⅱ*271*）。○**垣ね** 「垣根(かきね)」。「灰捨て白梅うるむ垣ねかな　凡兆」（『猿蓑』巻四）「Caqine.」（『日葡辞書』）。

大意 垣根のあたりに、ささやかな花が見える。よく見ると、薺が花を開いているのだった。

考 この句も『続虚栗』初出であって、貞享四年春以前の作と考えられる。『花声』（郁賀ら撰、文化四年刊）は「華咲て」「地にたふれ」「まふくだが」等の句と共に記した真蹟の摸刻である。

薺といえば正月に摘まれる春の七草の筆頭だが、実は俗にぺんぺん草などというつまらない草に過ぎない。春も闌けてから、直径三ミリほどの白く小さい花を茎の先に開く。目立たない、ささやかな花である。この句は恐らく芭蕉庵あたりの路傍で見つけたその花に興を発した作であろう。垣もとに何か花があるとよくよく見ると、薺が花をつけていたのだった。その時に覚える心のゆらぎがそのまま句に成ったような、無作為の面白さがある。『三冊子』にいう「物に入てその微の顕れて情感るや句と成る所」（赤雙紙）であって、観念を言おうが為に造り設けたものではあるまい。安東次男氏は、

薺は正月の若菜を代表する草だが、花期は早春から初夏まで、車輪状の根生葉の真中から茎を抽き、旧正月が終る頃にはナズナの花はもう咲き始める。七草のなかで一番早い。見つけるといよいよ春だという実感が湧く。ふだん気にもとめぬ雑草だけに、却って珍しさも伴うが、もうひとつ大切な見所がこの句にはある。ナズナは平地の日あたりの良い場所を好む。日陰でも生えぬことはないが、垣根などにふさわしいのは七草ならはこべ（ミドリハコベ）の方だ。……まさか、こんなところにも、というおどろきが初五文字に出ている。物の性質をよく知っていてもなおかつ虚をつかれた、というところがみそである。

評釈は、造化の妙を発見したよろこびだの、日常生活から一瞬解放されたやすらぎだの、と思弁的に云いつくろうが、それを云うなら素材はなにも垣根に見つけたナズナの初咲に限るまい。（『芭蕉発句新注』）

と説いておられる。「よくみれば」に、「こんな所にも」という驚きを見る鑑賞は正しいであろう。素材は何であってもよいが、そんなささやかな物にも春色が満ちていることへの感動は、世界観的な大きさを持つ。この時期、心境の

安定と共に、芭蕉は造化の営みに思いを致し、後に「造化にしたがひ造化にかへれ」（『笈の小文』）と書くような風雅観を獲得しつつあったのであろう。そうしたもののあらわれは、これまでの作にもあり、次々に扱う句どもにも見えている。兎に角「よくみれば」の句は、何気ない言葉が並んでいるだけに、その包蔵するものは大きく豊かだと言ってよい。

282　鸛の巣もみらるゝ花の葉越哉　（続虚栗）

鸖の巣も見らるゝ花の葉越哉　（蕉翁句集）

春季（花）。

語釈　**○鸛の巣**　「鸛」は、「こふのとり」に同じ。体は純白、羽根の大部分は黒くて光沢があり、開くと二メートルにも達する。松その他の喬木の樹頂に巣を作り、鶴と混同されることが多いが、鶴は脚が赤く、頭頂部は赤くない点で区別される。歴史的仮名遣では「コフ」が正しい。なお、『御傘』には「鳥の巣・鳥の古巣・鳥のさえづり、皆春也」「巣　春也。古巣もおなじ。……鸖の巣・鷹の巣は雑也」とあって、鳥の巣は原則として春ながら、例外もあったことが分る。『滑稽雑談』には更に精しく、「総じて鳥の巣は春也。鳥の名をさしていふには、其鳥によて春ならざるも有べし。……水鳥の巣は夏也。又大鳥の類の巣は皆雑也。其故は、鶴・鴻・鷲・鵰などの巣は、作始てより幾年も同所にあり。其鳥も四時ともに巣居する也。外の鳥は四季に往来渡帰の事侍りて、巣も又毎年かはるゆへ也」と見え、これらによれば「鸛の巣」も季は持たないと考えられる。「ふるす」（Ⅱ*255*）参照。「土蔵の軒は雀がうがち。塔に鳩がねぐらをしめ。鸛の巣には水をたゝへて魚をかふとも云伝たり」（『類船集』）。**○みらるゝ**　「見らるゝ」。「らるゝ」は、可能或いは受身とも取れなくはないが、自発と見るべきであろう。自然と目に入って来るというのである。**○花の葉越**　「葉越」は、葉を越した向側の意。「花」は具体的には桜をいうが、花と共に葉の出るここの桜は、山桜の類と見られる。「合歓の木の葉ごしもいとへ星のかげ　芭蕉」（『猿蓑』巻三）。

大意 盛りの山桜の葉の向側遥か頂に、こうのとりの巣も目につくことだ。

考 『続虚栗』初出で、これまた貞享四年春以前の作である。『蕉翁句集』の「鸖」は誤りであろう。
仰向いて山桜の花を見ていると、その葉越しの遥か上に鸛の巣も見えたというので、花見を主としながら、それだけでは風情もない「鸛の巣」にも、風情を感じているのである。古注には、上野あたりの大寺の棟に掛けた巣のさまと見たものもあるが、山峡の春色を賞したものと見た方が面白い。旅の何処かで見た景色を思い出して作ったのかも知れぬ。

石河北鯤生、おとうと山店子、我つれぐなぐさめんとて、芹の飯煮させて、ふりはくて來る。金泥坊底の芹にやあらむと、其世の侘も今さらに覺ゆ

283

我ためか鸖はみのこす芹の飯　（続深川）

春季（芹）。

語釈 **○石河北鯤生** 「イシカハホクコンセイ」。江戸の蕉門俳人。延宝八年刊の『桃青門弟独吟廿歌仙』に作品が収められており、天和三年秋の芭蕉庵再建に当って、米入れの大瓢を贈った。生歿年未詳。「生」は自称として名の下につけ、謙退の意をあらわすことが多いが、ここは三人称で親愛の意を籠めているようである。**○おとうと山店子** 「弟(おとうと) 山店子(さんてんし)」。「山店」は江戸の蕉門俳人で、北鯤の弟であった。『蕉門諸生全伝』には板上氏とも伝えるが、芭蕉のこの前書の書き方では、同じ石河氏だったものと思われる。生歿年未詳。「子」は「生」と同様に名の下に添えて親しみの意をあらわす語。軽い敬意をあらわす場合もある。「黒羽の舘代浄坊寺何がしの方に音信る。……其弟桃翠など云が朝夕勤とぶらひ」（『おくのほそ道』）「旅寐の力も心もとなしと、荷兮子が奴僕をしておくらす」（『更科紀行』）「Votovoto. i, Votôto.」（『日葡辞書』）。**○我つれぐなぐさめんとて** 「我(わ)が徒然慰(つれぐなぐさ)めんとて」。「つれぐ」は、為す事もなく無聊なこと。「我」即ち芭蕉の無聊を慰めようとて、の意。「さるからさぞともうちかたらはば、つれぐなぐさ

まめとおもへど」(『徒然草』十二段)「Tçurezzure. l, tçurezzurena. i, Tojenna.」「Cocorouo nagusamuru.」(『日葡辞書』)。○**芹の飯煮させて** 「芹の飯煮させて」。「芹の飯」は、芹を炊き込んだ飯。それを家人に作らせて、の意である。「芹」は、句中では春の季語。春の七草の一である。「冬月より出で、和俗臘寒の間ことに賞翫す。然ども芹は春の部也。和名にせりといふ。其生ずる事一所にしげくせまり合ふ也。……異名を根白草、又つみまし草、又ゑぐと同じ」(『滑稽雑談』)「芹摘とてこけて酒なき瓢哉　旦藁」(『はるの日』)「さゝげめし妹が垣ねは荒にけり　心棘」(『あら野』巻七)「Xeri.」(『日葡辞書』)。○**ふりはくて来る** 底本、「く」の右傍に「本ノマ、」とある。「え」「へ」の仮名のやや上下に伸びた形が「く」のように成ったのであろう。「振り延へて」で、わざわざ、の意。「来る」は、北鯤・山店の兄弟二人が芭蕉庵に来たのである。但し、山店一人が来たと解する説もあり、「石河北鯤生おとうと」を続けてよめば、そういう解も可能になる。「ふりはへていざふるさとの花見むとこしをにほひぞうつろひにける」(『古今集』巻十、よみ人しらず)「Furifayete yuqu.」(『日葡辞書』)。○**金泥坊底の芹** 杜甫の詩「崔氏東山草堂」の一節「飯煮青泥坊底芹」(飯には煮る青泥坊底の芹)を引いた表現で、「金」は「青」の誤りと思われる。「坊」は「防」と同じで堤防の意。「青泥坊」は長安の近郊にあった渭水の堤防で、その「坊の底」で採れる芹は名産だったという。○**其世の侘も今さらに覚ゆ** 「其の世の侘」は、杜甫の時代の侘びた趣をいい、「侘」は美意識をあらわす語として用いられている。杜甫の時代の「侘」が今更のようにゆかしく思われる、というのである。「侘おもしろくとちのかゆ煮る　さらしなの里の碪をうちにゆき」(『野ざらし紀行』初稿芭蕉真蹟長巻)「身にしみけりなむかふ面影　いま更におどろく老のますかゞみ」(『河越千句』一)「Imasara.」(『日葡辞書』)。○**我ためか** 「我が為か」。○**靍はみのこす** 「靍喰み残す」。「靍」は「鶴」に同じ。上の「我ためか」で切れると考えることも出来るが、私は「芹の飯」を全体に係けた提示語とした方が良いと思うので、「はみのこす」で切れるものと見たい。「たれかその姪のはみのこしは欲しき」(『宇津保物語』あて宮)「Fami, u, ôda, ……Toriga yeuo famu.」(『日葡辞書』)。

大意 私のために、鶴が食べ残して呉れたのだろうか、この芹の飯は。

考 門人の心尽しを謝した句である。「梅白し」(I *229*)の句の条で述べたように、鶴は高士林和靖に飼われていたもので隠逸の気があり、これを出すことによって相手への挨拶の意も籠る。こうした高逸の情は、抑々前書に引合に出された杜詩の持っているものなので、良い配合なのである。北鯤・山店が古くからの門人で、前書が杜詩にも触れて

いる為に、天和初頭の吟と見る向きが多いが、句調は案外落着いていて、必ずしも天和時代に限定は出来ない。『続深川』の跋に「延宝の末貞享終りまでの吟」とあるのによって、上方の旅に在った貞享五年春よりは一年を溯り、四年春以前の作と見ておく。このような隠逸志向は貞享期の作としても相応しい。

284 まふくだがはかまよそふかつくぐし　（花声）

春季（つくぐし）。

語釈 **○まふくだ**　行基伝説に出て来る少年の名。『今昔物語集』巻十一ノ二「行基菩薩学二仏法一導レ人語」に「真福田丸」として見えるが、その外にも『古本説話集』『奥義抄』にも載る。なお委しくは〔考〕の条で述べたい。**○はかまよそふか**　「袴装ふか」。土筆の茎の節毎にある輪生葉を「はかま」という。その形を人が袴を着けたさまに見立てたのである。「か」は、疑問に詠嘆を含む。「はつ雪のことしも袴きてかへる　埜水」（『冬の日』）「君無くは何ぞ身よそはむ匣なる黄楊の小梳も取らむとも思はず」（『万葉集』巻九、播磨娘子）「**Facama.**」（『日葡辞書』）。**○つくぐし**　杉菜の胞子茎。「土筆」に同じ。早春地上に顔を出し、成長するにつれて節の間が長くなる。酢の物などにして食用にもなり、春の野の土筆摘みは季節の行楽としてよく行われる。「つくぐしは。おほく筆にとりなしていひ侍。又はかまきる。ほゝくるともいへり。つくぐしつむにさへ。ほうしひくと名のたつとうたひ侍れば。法師のえんもあめるにや」（『山之井』）「大和本草云、和品土筆、国俗の所レ名也。春初より其花先生ず。茎立て苗の生ずるが如し。苗にも非ず。其鋒如二筆形一。是其花也。節々皮有て包レ之。俗に袴と云。花は茎ともに早く枯、苗は後に生ず。杉菜と云。……根土中に深く入る。其乾きたるを外医用レ之、金瘡の深くして薬力の徹しがたきに加へ用。△或云、天花菜、つくぐしなり」（『滑稽雑談』）「土筆うるやはかまの町くだり　貞徳」（『犬子集』巻一）「**Tçucuzzucuxi.**」（『日葡辞書』）。

大意　野に生え出た土筆は、真福田丸が袴を付けた姿かなあ。

考　袴のある土筆の形を、伝説の真福田丸が袴をつけた姿になぞらえて興じた句である。『今昔物語集』には、

此ノ行基菩薩ハ前ノ世ニ和泉国大鳥ノ郡ニ住ケル人ノ娘ニテ御ケリ。……而ニ其家ニ仕フ下童有リ。庭ノ糞令取棄ル者也。名ヲ真福田丸ト云フ。此ノ童心ニ智有テ思ハク、我レ難受キ人身ヲ得タリト云ヘドモ、下姓ノ身ニシテ勤ル事无クハ、豈ニ後ノ世ニ頼ム所有ジ。然レバ大ナル寺ニ行テ法師ト成テ仏ノ道ヲ学バムト思得テ、先ヅ主ニ暇ヲ請ヘバ、主ノ云ク、汝ハ何ゾノ暇ヲ申スゾト。童ノ云ク、修行ニ罷出ムト思フ本ノ心有リト。主ノ云ク、実ノ心有ラバ速ニ免ムト云テ免シツ。但シ年来仕ツル童也。今修行ニ出ム剋ニ、水干袴着セテ遣セト云テ、忽ニ水干袴ヲ令調ルニ、此ノ幼キ娘有テ、此ノ童ノ修行ニ出ヅル料也。功徳ノ為也ト云テ、此ノ片袴ヲ継テケリ。童此ヲ着テ元興寺ニ行テ出家シテ其寺ノ僧ト成ヌ。名ヲバ智光ト云フ。法ノ道学ブニ、極テ止事无キ学生ト成ヌ。彼主ノ幼カリシ娘ハ、此ノ童出テ後幾シ无テ……

として行基少時の法会の講師として智光が臨んだ時の話に移り、行基が「真福田ガ修行ニ出デシ日藤袴我レコソハ縫ヒシカ片袴ヲバ」と論義を出したことに及んでいる。この話では恋の気配は全くないけれども、『古本説話集』や『奥義抄』になると、真福田丸が主人の娘に恋をし、娘はそれを方便として真福田丸に出家修行をすすめる話になっているのである。芭蕉が何の書でこの話を知ったのか明らかではないが、或いは『奥義抄』を見たのかも知れない。それは兎もあれ、この句で芭蕉は土中から顔を出した土筆の可憐な姿を、伝説の真福田丸の袴をつけたさまになぞらえたわけである。土筆の袴や、前掲『山之井』の記事にあるように法師の縁もあるとすれば、かなり多様な言葉の縁を綾なした表現と見られよう。基本的には貞門以来用いられた見立の趣向による句であるが、「まふくだ」という名の響きがユーモラスで愛らしく、伸びた土筆の坊主頭も思われて、おだやかなおかしみを醸し出している。

出典の『花声』は文化四（一八〇七）年の刊行ながら、採茶庵二世梅人の門弟たる郁賀・宗拱の二人が撰した書で、「芭蕉翁真蹟」として摸刻した懐紙の中に見える句である。「よくみればなづな花咲垣根哉」「華咲て七日鶴みるふもと哉」「地にたふれ根により花のわかれかな」の三句と共に記されており、貞享期江戸での作と見て、ここに配しておく。

坦堂和尚を悼奉る

285 地にたふれ根により花のわかれかな （花声）

春季（花）。

語釈 ○**坦堂和尚**「タンダウヲシヤウ」。この前書と句によって芭蕉と交わりのあったことが分るだけで、出自経歴等未詳の人物である。禅僧かも知れない。「和尚」は既出（Ⅱ*266*）。○**悼奉る**「悼み奉る」。死を悼む意。「奉る」は、謙譲の補助動詞。「李下が妻のみまかりしをいたみて」（『あら野』巻七、去来発句「ねられずや」前書）「上臈の山荘にまし〱けるに候し奉りて」（『猿蓑』巻四、去来発句「梅が香や」前書）「**Itamino mono.**」「**Tatematçuri, ru, utta.**」（『日葡辞書』）。○**地にたふれ**「地に倒れ」。芭蕉の悲嘆の情を強調した表現である。「どことなく地にはふ蔦の哀也　越水」（『あら野』巻四）「行〱てたふれ伏とも萩の原　曾良」（『おくのほそ道』）「**Chi. Tçuchi.**」「**Tauore, ruru, eta.**」（『日葡辞書』）。○**根により**「根に倚り」。樹の根（幹）に倚り掛る。これも作者のさまである。「月なき浪に重石をく橋　羽笠　ころびたる木の根に花の鮎とらん　野水」（『はるの日』）「かの冬籠の夜、きり火桶のもとにより」（『炭俵』序）「**Ichijuno cagueni yoru.**」（『日葡辞書』）。○**花のわかれ**「花の別れ」。花が散ること。坦堂和尚の死をたとえた。

大意 和尚は花の散るように逝ってしまわれた。私は悲しみの余り地に倒れ、花の樹の幹に倚りすがって別れを惜しむことだ。

考 和尚の死を花の散ることに譬えた趣向の悼句である。作者の脳裡には、「花はねに鳥はふるすにかへるなり春のとまりをしる人ぞなき」（『千載集』巻二、崇徳院）「ながむとて花にもいたくなれぬればちるわかれこそかなしかりけれ」（『新古今集』巻二、西行）等の歌があったであろう。和尚の死を、散って根に帰る花に擬するのは、もとの空に帰した意味も含むようであるが、「地にたふれ根により」と自らの悲嘆を強調したのは余りに大袈裟で、却って真情に遠

ざかっている。

前の句の条で記したように、『花声』に摸刻された真蹟は信ずべきものと思われ、貞享四年春までには成立していた句と見ておく。

物皆自得

286 花にあそぶ虻なくらひそ友雀（続の原）

真蹟十句懐紙・泊船集書入・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・元禄風韵

花を吸ふ虻なくらひそ友すゞめ（笈日記）

泊船集

春季（花）。

語釈 ○**物皆自得**「モノミナジトク」。この世界の凡ゆる物は各々その所を得て、その地位に安んじているものだ、の意。『千家詩』所収の程明道の詩「偶成」の一句「万物静観皆自得」（万物静かに観るに皆自得）に拠ったものであろう。「静にみれば物皆自得すといへり」（芭蕉「蓑虫ノ説」跋）というのも、句の成った頃と同じ貞享四年の文章である。「Iitocu.」（『日葡辞書』）。○**虻なくらひそ**「虻（あぶ）な喰（くら）ひそ」。虻を食べるなよ。「虻」は、蝿に似てやや大きい双翅目の昆虫で、牛虻・馬虻・花虻など、種類が多い。「花咲けば芳野あたりを欠廻　曲水　虻にさゝるゝ春の山中　珍碩」（『ひさご』）「Abu.」（『日葡辞書』）。○**友雀**「トモスズメ」。一群の雀を友と見ている。親しみを籠めた表現である。「噂せよわらほす宿の友すゞめ　主人（注、自準）」（『鹿嶋詣』）。

大意 雀たちよ、花に遊ぶ虻を食べるな。虻は虻でそれなりに自分の生を楽しんでいるのだ。

考 『新編芭蕉一代集』に紹介された逸志の写本『元禄風韵』には「花園　貞享四　江戸」と前書があり、これを発句に、以下岩松・古益・炉方の連衆による歌仙一巻を載せている。出典としては不卜の撰した『続の原』（貞享五年三月序）巻末の発句春の部に見えるものが最も古く、江戸での吟とすれば貞享四年春までには成っていたことになり、

見えない）。然るに、支考は『笈日記』雲水部桑名の条に「狼も一夜はやどせ芦の花」の句と並べて、初五を「花を吸ふ」とした形で載せ、「此二句も阿叟の吟なるよし。此ほとり漂泊の間なるべし」と注している。句形の問題は後に述べるとして、貞享四年以前の春に芭蕉が桑名に居た時といえば、野ざらしの旅の帰途に桑名本統寺に立寄ったことはあるが、この時の作という確証はない。共に挙げた「狼も」の句は、貞享四年八月鹿島に詣でた時の句を誤り伝えたもので、支考のこのあたりの記述には多分に疑問がある。ただ彼が桑名でこの句を聞いたのは、これを発句とした歌仙の席に本統寺の住職古益が出ていることと関係があろう。恐らく四年の春に古益が江戸に出て来たことがあって、それを迎えた俳席での発句として詠まれたと見るのが穏やかである。

「花を吸ふ」の形が誤りであることは、『蕉翁句集草稿』で土芳も、

此句笈日記に、花を吸と有。違也。直聞、はじめは、虻なつかみそ也。後直るか。

とはっきり述べている。彼の伝える中七「虻なつかみそ」に他の裏付けはないが、直接芭蕉から聞いたという以上、これが初案だったのであろう。許六の『泊船集書入』には、「自筆雀づくしに出たり」と注して「花にあそぶ」の句を挙げてある。

「物皆自得」という前書によって、この句が単なる写生や自然のさまに発した逸興ではないことが分る。それだけに詩としての純粋さには欠けるけれども、「虻」のような微物にも「自得」の姿を見る視点は、野ざらしの旅を終えて後の芭蕉の作に顕著に見られるものであった。「古池や蛙飛こむ水のおと」「よくみれば薺花さく垣ねかな」といった句と相通う物の見方が、句の基底を成している点を見逃してはなるまい。このような世界観自然観は老荘の哲学から得て来たもので、それがこの時期の安定した心境につながり、句に反映しているわけである。

五七の日追善會

287
卯花も母なき宿ぞ冷じき（続虚栗）

蕉翁句集

夏季（卯花）。

語釈 ○**五七の日追善会**「五七の日追善会」。死後三十五日目の忌日に行われる法要。「追善」は、死者の冥福を祈って善根を修することをいう。『続虚栗』には、この芭蕉の発句の前に「四月八日母のみまかりけるに」、「初七ノ夜いねかねたりしに」とそれぞれ前書した其角の句があり、貞享四年四月八日に其角の母妙務尼が逝去したことが知られる。享年五十七歳であった。その三十五日忌は五月十二日に当る。菩提寺は芝二本榎の上行寺だったから、法要は其処で行われたのであろう。「一笑と云ものは、……去年の冬早世したりとて、其兄追善を催すに」（『おくのほそ道』）「Tçuijen.」（『日葡辞書』）。○**卯花**「卯の花」。既出（I *240*）。○**母なき宿**「母亡き宿」。ここの「宿」は、「家」というに同じ。「新しき卒都婆を立ておきたり。亡き人の追善とおぼしくて」（謡曲「知章」）。○**冷じき**「冷じき」。その場にそぐわない為に、面白くなく、趣がないさま。『枕草子』の「すさまじきもの」と同じ意味である。『日葡辞書』や節用集類によると、当時「すさまし」という清音の語もあったことが分るが、既に濁音の語も行われているので、ここでは濁ってよむ。「冷じや灯のこる夏のあさ　藤羅」（『あら野』巻三）「Susamajij.」（『日葡辞書』）。

大意 初夏の趣深い卯の花も、母を失ったこの家では、全く趣がないことだ。

考 『蕉翁句集』には「其角母五七日追善」と前書がある。前記の如く貞享四年五月十二日の吟で、『続虚栗』にはこの後に、

香消のこるみじか夜の夢　キ角
色〱の雲を見にけり月澄て　嵐雪

という付合を始め、露沾・枳風・沾徳・挙白・嵐雪・蚊足・去来・野馬・全峰・魚児らの悼句を収めている。

初夏の垣根を飾る白い卯の花は、何処となく人なつかしさを誘う趣があるが、この喪に籠る家では何の風情もない、と属目の花を材にして、子たる其角の凄寥の情を思い遣った句である。

288　ほとゝぎすなく〳〵とぶぞいそがはし　（あつめ句）　栞集
郭公なき〳〵飛ぞ鬧はし　（続虚栗）
郭公啼〳〵飛ぞいそがはし　（句兄弟）　真蹟懐紙・泊船集・蕉翁句集

夏季（ほとゝぎす）。

語釈　**○なく〳〵とぶぞ**　「啼く啼く飛ぶぞ」。「ぞ」は係助詞。**○いそがはし**　落着きがなく、あわただしいさま。既出（I 225前書）。

大意　ほとゝぎすが鋭い声で啼きながら飛ぶさまは、何とあわただしいことよ。

考　最も年代の早い資料は貞享四年秋筆の真蹟「あつめ句」なので、その夏までに成立していたことは確かである。その句形と初出板本『続虚栗』の句形が相違することについて、穎原博士は、「なく〳〵」というと「見る〳〵」「這ふ〳〵」「行く〳〵」等と同じく特殊な意味が加わるが、「句意は鳴きながらといふのだから、語法上からは「なきなき」の方が穏当である」（『芭蕉俳句新講』）とされた。しかし、芭蕉にそのような語法上の配慮があったかどうかは疑わしく、「なき〳〵」が後案と速断は出来まい。最もの問題は、加藤楸邨氏も指摘された「なき〳〵」が俗調を帯びる点であって、『続虚栗』の句形には杜撰誤伝の疑いがある。本位句としては、真蹟の裏付けがある「なく〳〵」の形を採るべきであろう。『句兄弟』以下の形は「啼〳〵」「鳴〳〵」等、何れともよめる表記をとっているものである。『句兄弟』（元禄七年序）三十五番に、其角はこの句と自作の「若鳥やあやなき音にも時鳥」の句を引いて、次のように述べている。

此躰は俳諧よりおもひ入たる也。もし是等の格法を得道せん人は、縦横と混雑したりとも、句法にそむくべからず。
縦は〻花〻時鳥〻月〻雪〻柳〻桜の折にふれて、詩歌連俳ともに通用の本題也。横は〻万歳〻やぶ入の春めく事より初めて、〻火燵〻餅つき〻煤払〻鬼うつ豆の数〻なる俳諧題をさしていふなれば、縦の題には古詩・古歌の本意をとり、連歌の式例を守りて、文章の力をかり、私の詞なく、一句の風流を専一にすべし。横の題にては、洒落にもいかにも、我思ふ事を自由に云とるべし。ひとつ〻には論じがたし。縦ぞと心得て本歌を作なくとり、時鳥の発句せしなど〻、あて仕舞なる案じやうは無念也。句意に縦横を教んため、はづかにおもひよりたる迄也。みづから人の師にならんとにはあらず。古人を師として鏡に向ふ。

縦は詩歌連俳に通じて用いられる伝統的な題材、横は俳諧独自の現代的題材であるが、右の文の眼目は、縦の題だからといって「本歌を作なくとる」ような案じ方を心無いやり方とする点にあろう。たとえば『連歌至宝抄』（紹巴著、寛永四年刊）に、

　時鳥はかしましきほど鳴候へども、稀に聞き珍しく鳴き、待兼ぬるやうに詠習はし候。

とあるような詠み方が時鳥の本意を得たものである。俳諧でそれを受け継ぐばかりでは「作」がない。この芭蕉の発句では「かしましきほど鳴」く時鳥の本性を採り上げ、それを「いそがはし」と、余計な情感を持たせずに直叙したところが新しいのである。あわれな余情や観相的な観念は持ち込まない方がよかろう。

289　さみだれに鳰のうき巣を見にゆかむ　（あつめ句）

真蹟懐紙・笈日記・泊船集・三冊子・蕉翁句集・栞集

夏季（さみだれ）。

語釈 ○**鳰のうき巣**　「鳰(にほ)の浮巣(うきす)」。鳰は、かいつぶりの古名。カイツブリ科の水鳥で、全長二十六センチ程、背が灰褐色で腹は白く、尾が非常に短い。夏になると頸の部分が栗色になる。葉状の水かきを持ち、巧みに潜水して小魚を捕食する。夏に水草を集めて芦の間などの水上に作る巣が「浮巣」である。『無名抄』に「にほのすをくふには、蘆のくきを中にこめて、しかもかれをばくつろげて、めぐりにくひたれば、しほみちては上へあがり、塩(ママ)のひれば、したがひてくだるなり」とあるのによっても、その巣のさまは知られよう。よるべないあわれなものとして歌に詠まれ、また琵琶湖のことを別名「鳰の海」ともいうので、この湖が連想される語でもある。これを連歌時代に夏季としたものもあるが多くは雑とされており、俳諧で夏季としたのは支考の『俳諧古今抄』あたりからのようである。「鳰(にほ)　雑也。浮巣(うきす)も雑也」(『御傘』)「今歳湖水の波に漂。鳰の浮巣の流とゞまるべき芦の一本の陰たのもしく」(「幻住庵記」)「Niuo.」「Vqisu.」(『日葡辞書』)。

大意　さあ、この五月雨の降る中、鳰の浮巣を見に行こう。琵琶湖の水も増して、浮巣の趣も格別だろうから。

考　『笈日記』と『泊船集』『蕉翁句集』には「露沾公に申侍る」と前書がある(幕末期の『一葉集』に「露川へ申侍る」と前書するのは、平藩主内藤家の露沾と、名古屋の蕉門沢露川とを混同した誤りである)。この句は貞享四年秋筆の「あつめ句」初出であり、同年五月頃に湖南や京に旅したい意図を露沾に披露したのではないかとも考えられるが、成立時期は必ずしもその時だけに限定は出来ない。その前年貞享三年の芭蕉書簡にも、「当秋冬晩夏之内上京」(閏三月十日付去来宛)「夏之中には登り可申候」(閏三月十六日付寂照宛)「当夏秋之比上り可申覚悟に御坐候へ共、何角心中障る事共出来延引」(極月一日付寂照宛)等と上京の計画が述べられているからで、この句の年次は貞享三年五月とも考えられるわけである。今は確定を見送り、四年五月以前とするのが穏当であろう。

句は上方へ旅立とうとする意を、「鳰の浮巣を見に行かむ」という形であらわしたのが趣向の要である。「鳰の海」の語を連想させて琵琶湖の俤を髣髴させようとしたのであるが、鳰の浮巣は歌語であって、それ自体に俳意はない。その点については、『三冊子』に左のような芭蕉の語が伝えられている。

春雨の柳は全躰連歌也。田にし取烏は全く俳諧也。五月雨に鳰の浮巣を見にゆかんといふ句は、詞にはいかひな(ママ)

し。浮巣を見に行んと云所俳也。……詞に有、心に在。……依所一すじにおもふべからずと也。（白雙紙）

ここに説かれた意味は、凡そ以下の如きことと解されよう。即ち、「春雨の柳」は全く連歌に採り上げられるべき風情のものだし、これに対して田螺を取る烏は全く俳諧的な素材である。こうした「田螺」とか「烏」とか、詞の上にあらわれる俳諧の外に、鳰の浮巣の句の場合のように、詞には俳諧がないものがある。それではこの句の俳諧が何処にあるかというと、「浮巣を見に行かん」というところが俳諧なのだ。つまり五月雨の中をわざわざ鳰の浮巣を見に行こうという「心」（意味、内容）が俳諧なので、俳諧のあらわれ方は一つに限ったものではなく、多様なのだ、ということであろう。ここにあらわれたものは物好きな風狂人の気持であって、芭蕉は「見に行かん」というところに俳諧性のあらわれを見ているのである。俳言や露わな滑稽による俳諧を事とした貞門・談林とはちがって、俳諧に幅広い多様性を認めたのが蕉風の俳諧であった。その事を明示するものとして、右の芭蕉の言葉は重要である。上方への旅に向って遊意しきりに動く心のはずみが句の調子にあらわれている。それは『笈の小文』の旅に出立する際の「旅人と我が名呼ばれん初しぐれ」につながるものでもあった。

自詠

290　髪はえて容顔蒼(アヲ)し五月雨　（続虚栗）

あつめ句・真蹟懐紙・笈日記・泊船集・蕉翁句集・続花摘・栞集

夏季（五月雨）。

語釈　○**自詠**　「ジエイ」。自らを詠んだ句、の意。真蹟懐紙の「貧主自ヲ云」という前書も、同じ意味である。○**髪はえて**　「髪生(かみは)えて」。剃髪している髪が、剃らずにいた為に伸びて来たさまである。「わがいほは鷺にやどかすあたりにて　野水　髪はやすまをしのぶ身のほど　芭蕉」（『冬の日』）「Cami.」「Faye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**容顔蒼(アヲ)し**　「容顔蒼(ようがんあを)し」。顔色が蒼い。「容顔」は

既出（I *12*）。「くやしくおぼすに、御いろもあをくなりてぞおはしける」（『大鏡』第二巻、師尹伝）「Auoi.」（『日葡辞書』）。○五月雨「サツキアメ」。陰暦五月頃の長雨、梅雨。「さみだれ」に同じ。ここは五音に訓むべきところである。「五月の雨」（I *117*）参照。「この比は小粒になりぬ五月雨　尚白」（『あら野』巻三）「Satçuqiame. i, Samidare.」（『日葡辞書』）。

大意　梅雨の頃とて毎日陰鬱な雨つづき。剃らずにいる我が髪は伸び、顔色は蒼白い。

考　『蕉影余韻』等に見える真蹟懐紙には、前述の如く「貧主自ヲ云」と前書があり、『蕉翁句集』の「自讃」という前書は「自詠」の誤写かと思われる。年代の明らかな資料としては「あつめ句」が最も古いので、貞享四年夏までには成立していた句であろう。後年の『芭蕉翁発句集』に「病中自詠」と題してあるのは拠る所が明らかでなく、古い資料に病中の作たる裏付けは見当らない。『一葉集』の前書「病中自脉」は勿論『翁発句集』を承けたもので、「脉」は「詠」の誤りと思われる。『続花摘』（湖十撰、享保二十年刊）には、才牛の句の前書に「髪はへて容顔青し五月雨といへるばせをの翁の句、感ずるに堪たり」と引かれている。

「貧主自ヲ云」という前書でも明らかなように、陰鬱な五月雨の時節を背景に、貧寒の生活に堪える草庵隠遁の作者の自画像を描いた句である。形容枯槁したその姿を鏡中に映し見て成ったものかも知れないが、「髪はえて容顔蒼し」という直截な表現には、其処に孤高な作家の個性のあらわれを見る鑑賞を許容するものがある。そうした見地をも踏まえた鋭い立言として、山本健吉氏の説を左に引いておこう。

近代絵画の自画像に慣れたわれわれには、この句が何か近代的なものに映るのである。楸邨は「ゴッホの自画像は、この句から季感を抜いた感じであらうか」と言っている。だが芭蕉には、自分の肖像を描くという近代的な意識はないのである。個性というものに、それほど興味を持っていたとは思われない。むしろ、村々における生活協同体の変形としての連衆の意識のなかに、個性没却への道を生きたと言った方がよい。もちろん元禄前後の、個人意識の発生の波の上に、芭蕉は自分の詩人としての自覚をうち立てたのであるが、近代詩人として、詩の糧

として個性を掘り下げるという方向に、彼は進まなかっただけである。……この句の発想は、草庵生活の一齣として、己れの風貌の変容に驚くところにある。自画像そのものであるより、バックの生活色調とともにある「貧主」の自画像である。油絵のようなどぎつさで、彼は全体を青の色調を主として塗りたくる。その感覚的な強烈さは、芭蕉がことさら使用した漢語的表現に基づいている。彼の場合漢語的表現は、一つの情緒の意識的な強調であって、深いところから出てくるものではない。この句の凄味は、彼の病的感覚と言うべきで、近代のわれわれには共感の度が大きいし、棄てがたい句であるが、それだけに、芭蕉としては本来のものではないであろう。
（『芭蕉その鑑賞と批評』）

291

門人杉風子、夏の料とてかたびらを調じ送りけるに

いでや我よきぬのきたりせみごろも　（あつめ句）

疑集

人に帷子をもらいて

いでや我能布着たり蟬の聲　（蕉翁句集）

杉風生夏衣いと清らかに調じて送りけるを

いでや我よききぬ着たり蟬の聲　（続深川）

夏季（せみごろも）。

語釈 **○門人杉風子**　「モンジンサンプウシ」。私の弟子の杉風さん。「杉風」は杉山氏。通称藤左衛門また市兵衛。江戸日本橋小田原町で幕府や諸侯御用の魚問屋を営み、屋号を鯉屋といった。父仙風と共に芭蕉東下当初からの古い門人で、深川移居後の師の生活の面倒も見、芭蕉のパトロン的存在として有名である。芭蕉晩年の「軽み」唱道に当っては、主導的役割を果した一人でもあっ

た。享保十七（一七三二）年六月十三日歿、享年八十六。「子」は軽い敬称。既出（Ⅱ283前書）。「ゆきは不レ中先むらさきのつくばかな／と詠しは、我門人嵐雪が句也」（『鹿嶋詣』）。○**夏の料**　「料」は、何かの用に当てるものをいう。ここは暑い夏の時季に着用する衣服のことである。「夜の料にとかみこ壱つ」（『笈の小文』）「Reô.」（『日葡辞書』）。○**かたびら**　「帷子」。夏に着るひとえもの。「かたびらは浅黄着て行清水哉　尚白」（『あら野』巻三）「Catabira.」（『日葡辞書』）。○**調じ送りけるに**　「調ず」は、ととのえこしらえる意。「送」は、この場合「贈」の字を用いた方が良い。「色々のそめ物三十、前にて女房どもに小袖にてうぜさせて、後につかはされけり」（『徒然草』二百十六段）。○**いでや**　さてもさても。「いで」を強めた感動詞。「いでや月のあるじに酒振まはんといへば、さかづき持出たり」（『更科紀行』）「Ide.」（『日葡辞書』）。○**よきぬのきたり**　「佳き布着たり」。上等の生地の布を着たというのである。「蟬啼やぬの織る窓の暮時分　暁烏」（『続猿蓑』下）「Nuno.」（『日葡辞書』）。○**せみごろも**　「蟬衣」。紗や絽など上等の布で作った夏向きの着物。蟬の羽のように薄く透けて見えるところからいう。「かたびら」や「ひとへ」に準じて、ここではこの語が夏の季語になる。「掛香や何にとゞまるせみ衣」（『蕪村句集』）。

大意　さてもさても、私は上等の着物を着たことだ。蟬の羽のように透けた帷子をね。

考　「あつめ句」に見えることによって、貞享四年夏までには成っていた句と知られる。下五を「蟬の声」とした句形は、配合が何か唐突な感じであるが、『蕉翁句集』には末尾の「後見出て句を記ス。年号不知」とした中に、「一桐所持のたんざくに二句」として「花木槿はだかわらべのかざし哉」の句と並記してあり、『続深川』も杉風所伝の真蹟に拠ったものだから、何れも基づく所あるものである。『続深川』の句形が初案、「あつめ句」が定案、『蕉翁句集』は中間案か。「よきぬの」と「せみごろも」は同じ物を指すのではあるが、それ故にこそ「ぬの」と「ころも」と言葉を使い分けているのであろう。取って付けたような「蟬の声」が「せみごろも」に変ることによって、はじめて安定した表現になるのである。華雀の『芭蕉句選』に初五を「行や我」としているのは、「いてや」の「て」を「く」と誤読したところから出ているようで、問題にならない。

杉風から上等の夏衣を貰って、子供のように喜んでいる気持が素直に出ている挨拶句で、「たれやらがかたちに似

たり今朝の春」（Ⅱ270）と同類の発想である。「いでや」の気負った調子や、最後に「せみごろも」と置いて「よきぬの」と同じものを指して繰返したあたりに喜びが溢れている。それはそのまま杉風への親愛の情を示すものでもあった。「よきぬのきたり」のあたりには、『古今集』仮名序の文屋康秀の歌風を評した一節「あき人の、よきゝぬきたらむがごとし」をかすめた趣が見える。意識的というより、読んだ記憶が思わず出た感じである。「けふかふるせみの羽ごろもきてみればたもとに夏はたつにぞ有ける」（『千載集』巻三、基俊）という歌も参考になろう。また作者が意識したかどうかは分らぬが、全体の調子には、「吾はもや安見児得たり皆人の得かてにすとふ安見児得たり」（『万葉集』巻二、内大臣鎌足）の無邪気な口調に通うものが感ぜられる。

292　**酔て寝むなでしこ咲る石の上**　（あつめ句）

伊東氏蔵真蹟短冊・粟津氏蔵真蹟短冊・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・栞集

夏季（なでしこ）。

語釈　○**酔て寝む**　「酔うて寝む」。○**なでしこ咲る**　「撫子咲ける」。「なでしこ」は、ナデシコ科の多年草。各地の山野や河原に自生する。夏から秋にかけて枝先に淡紅色或いは白の、縁の細裂した径三、四センチの可憐な五弁花をつける。季は夏・秋共に用いられるが、古くは夏とされ、この句も「納涼」という前書を持った真蹟があるので、夏季の扱いと思われる。異名とこなつ。「撫子　やまとなでしこ　からなでしこ　川原なでしこ　とこなつは。床にそへて。妹と我ぬるともよめれば俳諧にもぬりふちもせよ花畠などもし。……撫子は小児にそへて。哥にもおほく見ゆめればかぶり〱やちやうち〱などやうのことわざをさせ。……すべて此花どもその色さまよく似かよひ。咲比もひとつなれば。かく引あはせてもしたつ」（『山之井』夏部）「花の姿ちいさやかに、うつくしく色々にさけば、おさなき名にたとへて撫子と云、又盛り久しければ常夏といへり。唐撫子は色々也。大和撫子は紅梅色也。花のすそはわけてかはり、秋の野に一筋々々ぞ咲たる……大和本草云、野生の者、花葉倶に大に、花辺にまたあり。是大和撫子也。此一種も近年異色生ず。園中に植る者を石竹と云、時珍がいへるごとく色々あり。是唐撫子也」（『滑稽雑談』六月之部）「撫子や蒔

絵書人をうらむらん　越人」（『あら野』巻三、仲夏）「Nadexico.」（『日葡辞書』）。

大意 なでしこの花が如何にも可憐だ。この花の傍、河原の石の上に酔うて寝るとしよう。

考 二つの真蹟短冊何れにも「納涼」と前書がある。両者は字配りや用字が全く同じで、二つながら真蹟と認められよう。年代の確かな資料としては「あつめ句」が最も古いので、貞享四年夏以前の作と推定される。『蕉翁句集草稿』には、「此句卓袋が短尺の句也。或人の覚に、肌のよき石に眠らん花の山と云句有。後なでしこに直り侍るか」と考えているが、「花の山」の句は『いつを昔』（其角撰、元禄三年刊）に見える路通の句である上、季は春であり、改案とすることは出来ない。

酔うて石上に眠る趣は、「枕石漱流」の隠逸の情を帯び、風狂味も感ぜられる。この「石」は大きな岩であってもよいが、それよりは「納涼」とも併せ考えて河原などに出ての涼みとすれば、河原にあるやや細かい石であろう。「河原なでしこ」の名がある通り、なでしこは河原によく咲いているものである。もとより石の上に花が咲いているわけではなく、なでしこの花のある傍の河原の石に酔臥しようというわけだ。其処に俳諧らしい生新洒落な味があると思う。実際にそうするかしないかは問題ではない。

この句にはもう一つ、隠れた仕掛がありそうである。『日本古典文学全集・松尾芭蕉集』で堀信夫氏が指摘されたように「石の上」や「寝む」の語は小町と遍昭の戯れの贈答歌を連想させるものがある。『後撰集』巻十七に、

小野小町

いはのうへに旅ねをすればいとさむし苔の衣を我にかさなん

返し　　　　遍　昭

世をそむく苔の衣はたゞひとへかさねばうとしいざふたりねん

とあり、大和の石上（いそのかみ）寺に参詣した折なので「いはのうへに」と洒落たわけである（『大和物語』百六十八段では、舞

台が京の清水寺になっているが、それではこの洒落が利いて来ない）。「なでしこ」には古来おとめの連想が纏っているし、異名の「とこなつ」には、前掲『山之井』の記事にも見える「妹と我が寝る床」も思い合わされる。この句の持つ俳諧には、こうした艶笑性―エロティックな面も見逃し難い。芭蕉の発句としては珍しい例なのである。

すみける人外にかくれて、むぐら生しげる古跡をとひて

293 瓜作る君があれなと夕すゞみ　（あつめ句）

真蹟懐紙・栞集

夏季（瓜・夕すゞみ）。

語釈 **○すみける人外にかくれて**　「住（す）みける人外（ひとほか）に隠（かく）れて」。住んでいた人が他処（よそ）へ行って行方をくらましたことをいう。『伊勢物語』四段「にしのたいにすむ人有けり。……む月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり」を踏まえた表現である。「Foca.」「Cacure, uru, eta.」（『日葡辞書』）。**○むぐら生しげる古跡**　「葎生（むぐらお）ひ繁（しげ）る古跡（こせき）」。「むぐら」は、雑草。既出（I *247*）。「古跡」は、もと建物などのあった跡をいう。「さま〴〵の島〳〵……をの〳〵松生茂りて」（『蕉翁全伝附録』芭蕉発句「島〴〵や」前書）「甲斐といふは、古人仏者の古跡等多く」（『初懐紙評註』）「Voixigueri, ru, etta.」「Coxeqi. Furui ato.」（『日葡辞書』）。**○とひて**　「訪（と）ひて」。**○瓜作る君があれな**　瓜を作って閑居していた貴方が、此処に居てほしいなあ、の意。「瓜」は、ウリ科の植物の総称。夏の季語で、ここは真桑瓜の類を指すのであろう。潁原退蔵博士は『芭蕉俳句新講』で「君かあれな」として「君よあれかし」の意と見ておられるが、「か」を感動乃至呼び掛けの終助詞と取るのは語法的に無理であり、後述する西行の和歌も「君があれな」として立派に通ずる。「あれ」は、あれかしと願う意の命令形、「な」は詠嘆の意を添えたものである。踏まえた漢土の故事については〔考〕の条で述べる。「北野・賀茂河原につくりたる、まめ・さゝげ・うり・なすびといふもの、このなかごろは、さらに術なかりしものをや」（『大鏡』第五巻）「Vri.」「Tauo tçucuru.」（『日葡辞書』）。**○夕すゞみ**　「夕涼（ゆうすず）み」。夏の一日の暑さをさます夕方の納涼。「月待や海を尻目に夕すゞみ　正秀」（『猿蓑』巻六）「Yûsuzumi.」（『日葡辞書』）。

大意　瓜を作って閑居していた貴方が、今ここに居てほしいなあと思いながら、夕涼みをすることだ。

考 『続蕉影余韻』所収の真蹟懐紙には「古園」と前書がある。「あつめ句」に見えるところから、貞享四年夏までには成っていた句と推定される。

踪跡をくらました隠士の家の跡を訪ねての句で、「瓜作る」には『漢書』に見える秦の東陵侯邵平の故事を踏まえたのである。即ち、

邵平者故秦東陵侯也。秦破為二布衣一、種二瓜長安城東一。瓜美。故世号二東陵瓜一。従二邵平一始也。

（邵平は故秦の東陵侯なり。秦破れて布衣と為り、瓜を長安城の東に種う。瓜美し。故に世東陵瓜と号く。邵平より始まる）

とあるのに拠ったもので、日本でいえば、大名をやめて隠遁した木下長嘯子のような人だった。芭蕉の句の人も、実際に瓜を作ったかどうかは兎に角、「瓜作る」ということによって隠逸の閑人の俤が描かれるわけである。更に「君があれなと夕すゞみ」には、『山家集』下所収の西行歌の表現を踏まえている。

夏熊野へまいりけるに、いはたと申所にすゞみて、下向しける人につけて、京へ西住上人のもとへつかはしける

まつがねのいはたの岸の夕すゞみ君があれなとおもほゆるかな

とある歌であって、この句は前書も含めて和漢先蹤の表現を借り、隠逸の情を慕う気持を形象化したものといえよう。「瓜作る」や「夕すゞみ」には俳味もあるが、また低徊顧望去りやらずして夕べに到った趣も見え、如何にも貞享期の作らしい浪曼性も見えている。

梅　雨

294　五月雨や桶の輪きるゝ夜の聲　（真蹟懐紙）

夏季（五月雨）。

語釈　○梅雨　「バイウ」。仲夏、梅の実の熟する頃に降る長雨。「さみだれ」に同じ。「夕だちのかしら入たる梅雨哉　丈草」（『韻塞』五月）。○五月雨　「サミダレ」。○桶の輪きるゝ　「桶の輪断るゝ」。「桶の輪」は、桶を締めている箍のこと。それがきれて、はずれるのである。「桶の輪やきれて鳴やむきりぐ〵す　昌房」（『猿蓑』巻六）「Voqe.」「Va.」「Qire, uru.」（『日葡辞書』）。○夜の声　「夜の声」。「声」は、「音」というに同じ。（Ⅰ216）参照。

大意　五月雨の降りしきる中、水桶の箍がきれた音が夜の闇に響く。

考　『蕉影余韻』等に所収の真蹟懐紙には、この句の外に「ほとゝぎす啼〳〵飛ぞいそがはし」（Ⅱ288）「髪はへて容顔青し五月あめ」（Ⅱ290）の二句が記されており、潁原博士は二句共に『続虚栗』に出ているから貞享四年の作と推定された（『新講』）。確定的ではないが、二句は何れも「あつめ句」に見えて、貞享四年夏までには成っていたものだから、当面の句も四年夏以前としてよかろう。『魚あぶら』（徳雨撰、享保二十年成）という書に、中七が「桶の輪を切る」とあるそうであるが、根拠不確かな誤伝と思われる。『芭蕉翁句解参考』に「桶の輪きれる夜の音」とあるのも同断。

五月雨の頃は湿気が多く、桶にはめた竹の箍が弾け切れることも多い。この句の「桶の輪」は、台所などに置かれた水桶とおぼしく、それがバシッと切れた音が夜の闇に響くのである。外は降り続く雨の音。じめじめと暗鬱な夜にひとり起きている作者の耳に、箍のきれる音が飛び込んで来る瞬間の驚きがとらえられている。それは一瞬のことで、雨夜の寂寥は前と変らずに続くのである。「夜の声」は表面上箍のきれた音であるが、夜そのものの声のようにも感

受され、幽暗な虚無に目をこらす作者の思いが伝わって来る。

295　さゞれ蠏足はひのぼる清水哉　（続虚栗）

夏季（清水）。

語釈　**○さゞれ蠏**　「さゞれ蠏（がに）」。小さい沢蟹（さわがに）。沢蟹は日本で唯一の純淡水種で、渓流に棲む。「さゞれ石」等と同じく、「さゞれ」は小さいさまの形容語である。「蠏」は「蟹」の本字。**○はひのぼる**　「這（は）ひ上（のぼ）る」。「羊腸険岨の岩根をはひのぼれば、すべり落ぬべき事あまたゝびなりけるを」（『笈の小文』）「**Fainobori, u, otta.**」（『日葡辞書』）。**○清水**　「シミヅ」。野山の湧き水をいう。『御傘』に「雑也。結ぶといへば夏なり。せくも夏なり。只水を汲は雑也。只水を結ぶも汲と同事にて雑也」、『滑稽雑談』に右の『御傘』の説を引いて「これらの説に心（ここ）得がたし。泉は、結ぶともせくともいはずして夏也。清水は詞に意釈なければ雑になるはいかゞ。或師云、歌の題にも泉とは侍る。清水とはなし。清水は泉のうはさなるべし。泉と云題歌に、皆清水結ぶと読るにてしるべし。さらし井も季持、もたぬの両説侍る。是も泉の類なれば、詞の会釈なくても夏といふ説よろしといへり。併是も題になき物なれば、作意思惟あらんかし」と見えるが、これら凡て和歌・連歌的伝統意識に基づくのに対して、当面の句では明らかにそれから脱化しており、その辺に俳諧の新味を求めるべきであろう。「はら〱としみづに松の古葉哉　長虹」（『あら野』巻三）「**Ximizzu.**」（『日葡辞書』）。

大意　清水に足をひたす快さよ。小さな沢蟹が脚を這いのぼって来る。

考　貞享四年十一月に刊行された其角撰の『続虚栗』初出の句で、同年夏以前の作である。

暑い夏の日中、清水に足をひたしているのだ。冷い快さを満喫してふと気づくと、我が脛を小さな沢蟹が這いのぼって来る。むずがゆいようなその感覚が、「さゞれがに」という音にも反映している如くであって、清爽な気分の横溢した佳句である。

実に素直な句で、清水の中に立ってその足に来る感触をじっと味わっている芭蕉が感じられる。こういう句では、肉体を通じてじかにひびく素朴な共感を覚える。自然に素直に身を寄せて何の巧みもないところ、芭蕉のいう、他門は心を巧むが、わが門は「有る所を吟ず」（去来抄）とはこれであろう。……清水の季趣が的確に生かされた句である。（『芭蕉全句』）

という加藤楸邨氏の鑑賞は、この句の感味を説いて余す所がない。

296　瓜の花雫いかなる忘れ艸　（類柑子）

夏季（瓜の花）。

語釈　**○瓜の花**　白または黄色の瓜類の花。（Ⅱ*293*）参照。「つよふ降たる雨のついやむ　利牛　瓜の花是からなんぼ手にかゝる　桃隣」（『炭俵』下）。**○雫**　「シヅク」。既出（Ⅰ*53*）。**○いかなる忘れ艸**　「如何(いか)なる忘(わす)れ艸(ぐさ)」。「忘れ艸」は、憂を忘れさせる草として本来は萱草(かんぞう)を指すが、ここは、「瓜の花」を賞して「如何なる忘れ草ならん」といったもので、憂を忘れさせる物の意に転用している。「忘れ艸」は既出（Ⅰ*102*）。「艸」は「草」の本字。

大意　瓜の花から雫がおちて、如何にも涼しげに暑さを忘れる。これは一体どういう忘れ種(ぐさ)なのだろう。

考　この句の成った事情は、『類柑子』（沾洲ら撰、宝永四年刊）所収の其角の文「瓜の一花」に委しい。即ち、

河野松波老人宗対州公茶道也。一物三用の器をもてあそべり。則長嘯翁のめで玉へる記あり。時鳥まだ聞ばえする比、かの鉢たゝき所望して見んと、芭蕉翁・高山何がし・言水等これかれ訪らひ侍りけるに、もとよりして風月の窓灯、雨の扉に修竹わかやかに茂りて、老をやしなふあらまし成に、折から風炉の蟹眼にわきたつ程也とて、半日のあしらひいと興あり。床のうちに無絃の琵琶を居(スエ)て、ふるき長瓢のわれたるに、花雫(ヲチ)より雫発(ポチ)とと落て、誰となく

後をおびやかしたるしめり、やるかたなし。主の涼を味はふる心にくさをうかゞひ居たるに、瓜の花をもて此瓠にいけられたり。花よりもれ、蔓より露をむすべるに、水はたあふれて扇を忘る。廬岳の雨を聞心地したり。……水声玉ちるばかり此一花に夏を流して、老人の茗話忘れがたし。月よくさし入、時鳥まぢかう飛ちがふほどの窓ならば、花をせぬを本意とす也。今は郭公すがりてあるに、久しう取出ぬふくべのけしからずもりて、閑席を犯すまゝに、花はいけたりとて、一句づゝのぞまれ侍り。これらの風興今は二昔になん。

右の文によって、宗対馬守の茶道を勤める河野松波なる人の許を、芭蕉が高山麋塒・言水・其角らと共に訪れた時の吟と知られる。この事のあった年代は確かには分らないが、其角が「今は二昔」といっているのが手掛りになろう。「瓜の一花」の文が何時書かれたかも不明ながら、『類柑子』には元禄十七年（宝永元年）の真名叙がある。「二昔」を概数と見ても十五年を割ることは先ずないとすれば、宝永元年から十五年を溯ると元禄二年に当る。然るに、この件の舞台は明らかに江戸なので、芭蕉が旅にあって江戸に居なかった貞享五年と翌元禄二年を除けば、貞享四年の夏が句の成立年次の最下限となる。この句を此処に配した理由は右のような推考を根拠にしたわけである。

其角の文によると、河野松波なる茶人の家を訪ねて、鉢たたきという花生け（木下長嘯愛玩の品）を拝見しようとした。茶室のしつらいは床に陶淵明の無絃の琴ならぬ無絃の琵琶を据え、ひび割れた長瓢の花生けに瓜の花を生けてある。瓢からしたたる雫が琵琶の面に当って音を立てるのが涼を誘って廬山の雨を聞くようであったという。句を所望されて、その趣を賞したのがこの句であった。俗世を忘れ暑さを忘れる花のさまだといって、挨拶の意を述べたのである。俗塵を離れた侘茶の風流がしのばれる。

文鱗生出山の御かたちを送りけるを安置して

297　南もほとけ艸のうてなも涼しかれ（続深川）

なも仏

夏季（涼し）。

語釈 ○**文鱗生**「ブンリンセイ」。鳥居氏。江戸住の蕉門。泉州堺（大阪府堺市）の人と伝えられる。貞享三年正月の初懐紙百韻連衆の一人で、富裕だったらしく、天和三年秋の芭蕉庵再建に当っては、銀一両を寄附している。生歿年未詳。「生」は、親愛の意をこめた軽い敬称である。既出（Ⅱ283）。○**出山の御かたち**「出山の御像」。釈尊が六、七年にわたった苦行をやめて苦行林を出、尼連禅河のほとりに至った事蹟に基づき、苦行に痩せ衰えた姿で弊衣をひるがえしつつ雪山を下りる釈尊の像が、中国で画題として行われ、日本にも伝わった。多くは画像であるが、ここのは彫像かも知れない。市川柏筵（二世団十郎）の『老之楽』に載せる小川破笠の談に、芭蕉庵の内部の様子を言ったところにも、「翁の仏壇は、壁を円く掘抜き、内に砂利を敷き、出山の釈迦の像を安置せられし由。目のあたり見たりとの笠翁物語」と見える。「出山の尊像をづしにあがめ入テうしろに背負」（『鹿嶋詣』）「蟠龍ノ玉ヲ吐ク形チヲ作テ、其内ニ燈ヲ点ズルナリ」（『江湖抄』）「Catachi.」（『日葡辞書』）。○**送りける**「送」は、「贈」の字を用いた方が良い。○**安置して**「安置」は、神仏の像などを崇めて特定の場所に据えること。前記『老之楽』の記事参照。「光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す」（『おくのほそ道』）「Angi. l, anchi.」（『日葡辞書』）。○**南もほとけ**「南無仏」。「南も」は、「南無」と同じく「敬礼」の意をあらわす梵語namasの音訳で、仏に帰依することを表明する。「仏神三宝を帰敬する詞に、なもといへり。如何。答、なもは南無とかけり。梵語也」（『名語記』四）「君はいとのどかにて、なもあみだ仏なもあみだ仏とて」（『堤中納言物語』虫めづる姫君）「灌仏／けふの日やついでに洗ふ仏達　荷兮」（『あら野』巻六）「Fotoqeni. l, Fotoqeuo inoru.」（『日葡辞書』）。○**艸のうてな**「艸の台」。草庵の粗末な仏壇を謙退していう。仏像は蓮華の台座に安置するのが普通である。「艸」の字は既出（Ⅱ296）。「草の戸も住替る代ぞひなの家」（『おくのほそ道』）「譬喩品ノ三界無安猶如火宅といへる心を／六月の汗ぬぐひ居る台かな　越人」（『はるの日』）「Cusa.」「Tamano vtena.」（『日葡辞書』）。○**涼しかれ**「涼し」は夏の季語。命令形にしたのは、願う意をこめたの

である。極楽浄土への道を「涼しき道」という。「無実をはらし、役をすましなどして心の涼しきといふ句も、……それも季をばもつなり。……すゞしき道、極楽の名なれども、……季を持也」（『御傘』）「目の下や手洗ふ程に海涼し　美濃垂井市隠」（『猿蓑』巻六）「**Suzuxij.**」（『日葡辞書』）。

大意　尊い御仏よ。こんな粗末な茅屋の台でも、せめて涼しくおわしませ。

考　「貞享終りまでの吟」を収めたという『続深川』に見えるから、江戸での作とすれば貞享四年夏までには成っていた句と見られる。句の後には「くだれる世にもと云けむ、断りなりや」とあり、前書と共にこれも芭蕉の文であろう。

敬虔な信仰心が看取されるが、一方「涼しかれ」でこの句は俳諧になっているのである。季節感と俳味とさわやかな悟道の境地が一体になった佳い表現といえる。この尊像は破笠の談話にもあるように庵の持仏となっていたらしい。

298　**萩原や一よはやどせ山のいぬ**　（鹿嶋詣）

続虚栗・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

狼も一夜はやどせ芦の花　（笈日記）

狼も一夜はやどせ萩がもと　（泊船集）

秋季（萩）。

語釈　○**萩原**　「ハギハラ」。「萩」は秋の季語である。既出（I *12*）。「秋ぎりはたちかくせどもはぎはらにしかふしけりとけさみつるかな」（『後拾遺集』巻十六、兵衛内侍）「**Faguiuara.**」（『日葡辞書』）。○**一よはやどせ**　「一夜は宿せ」。『蕉翁句集』は「一夜は宿を」と誤る。「宮古に廿日はやき麦の粉　羽笠　一夜かる宿は馬かふ寺なれや　野水」（『はるの日』）「芭蕉翁を宿し侍りて」（『はるの日』如行発句「霜寒き」前書）「**Yadoxi, su, oita.**」（『日葡辞書』）。○**山のいぬ**　「山の犬」。狼。また、野生化した犬をいうこともある。

大意 原一面に萩の花が咲き乱れている。あの恐ろしい山の犬を、せめて一夜なりとこの可憐な花の蔭に泊めてやってくれよ。

考 貞享四年八月、芭蕉は中秋の名月を常陸の鹿島で賞するべく、曾良と宗波（深川住の禅僧）を伴なって江戸を旅立った。その旅の記『鹿嶋詣』の末にまとめられた旅中の句のうち、この発句は「野」と題された中に見える。この題下にある「もゝひきや一花摺の萩ごろも」「はなの秋草に喰あく野馬哉」という曾良の二句の内容が、

やはたといふ里をすぐれば、かまがいの原といふひろき野あり。秦甸の一千里とかや、めもはるかにみわたさるゝ。……萩は錦を地にしけらんやうにて、ためなかゞ長櫃に折入て、みやこのつとにもたせけるも風流にくからず。きちかう・をみなへし・かるかや・尾花みだれあひて、さをしかのつまこひわたる、いとあはれ也。野の駒ところえがほにむれありく、またあはれなり。

とある一節と照応するので、鹿島へ赴く途次、香取鹿島街道の宿場鎌ヶ谷（現千葉県鎌ヶ谷市鎌ヶ谷）あたりの原野の印象を詠んだ句と推定される。

『笈日記』（支考撰、元禄八年刊）雲水部、桑名の条に、「花を吸ふ虻なくらひそ友すゞめ」の句と並べて出し、「此二句も阿叟の吟なるよし。此ほとり漂泊の間なるべし」と注記している。また、『泊船集』は先ず『鹿嶋詣』と同じ句形を掲げた後、「この句続みなしぐりの比也。またヘ狼も一夜はやどせ萩がもとトか様にもきこえ侍りけり。笈日記には芦がもとゝありぬ」と述べてあるが、「萩がもと」という句形が何に拠ったか明らかでなく、『笈日記』の引用も間違っていて信用し難い。抑々『笈日記』が桑名あたりでの吟としているのは全くの誤りであるし、「狼も」が「山のいぬ」から、「芦の花」が「萩原」から出た誤りとおぼしく、更に上下を転倒してこのような句形が出て来たのではあるまいか。今栄蔵氏の指摘された「口コミによる訛伝の振幅の大きさ」（「蕉句句形誤伝考抄」―『中央大学文学部紀要』文学科第五十一号）を考えるべきで、この句の場合、『笈日記』や『泊船集』に伝えられる異形は、全く考慮に値しないので

ある。

『山之井』萩の条に「小鹿のつまといへば。しがらみて鹿のつまづくとも。くゞるは鹿のつま戸かなともつゞけ。身をする鹿やにしき草。小萩やこけるから錦など。もはらにしきにもいひなす」とあるように、鹿を「萩の夫」「萩の花夫」ということは和歌以来の伝統で、〔語釈〕に引いた『後拾遺集』の歌にもその事は窺われる。この句では恐らく「鹿」を「山のいぬ」に変えて俳諧にしたもので、「臥猪の床」などの連想もはたらいているのであろう。「山のいぬ」が聊か唐突である為に、野宿或いは旅宿の折の挨拶という見方も古くから出ているが、鑑賞に際しては、紀行の中で「野」の題下にあることを尊重したい。但し、題詠のように取るのは行き過ぎである。

299 月はやし梢は雨を持ながら（鹿嶋詣）

真蹟色紙・蕉翁句集

秋季（月）。

語釈 ○**月はやし** 「月速し」。月の動きはいつも変らない筈であるが、あたりの雲の動きが速いので、月が速く動くように見える。其処をとらえた直観的表現である。「月早しと云詞珍敷也。月に向て村雲逸き時は、風に雲の走るとは思はれず、唯雲透に月の行道の早きが如く見ゆる物也。則月早しと云て嵐と為知たる妙計也」（『笈の底』）「肩ぎぬはづれ酒によふ人　長虹　夕月の入ぎは早き塘ぎは　鼠弾」（『あら野』員外）「**Fayai.**」（『日葡辞書』）。○**梢は雨を持ながら** 「梢は雨を持ちながら」。樹々の梢は雨に濡れて光り、雨滴をしたたらせるさまをいう。

大意 雨があがって雲の動きが速く、月が速く動くようだ。樹々の梢には、なお雨を含んだままながら。

考 奥地氏蔵真蹟色紙には「山家雨後月」と前書がある。『芭蕉句選拾遺』（寛治編、宝暦六年刊）所収のこの句の頭注には「貞二、梨雪所持、題山家雨後月」とあり、貞享二年とする年次推定は誤っているが、ここに見える伊賀の蕉門

中野利雪旧蔵の真蹟が、現存の色紙であったことは恐らく確かであろう。

芭蕉の一行は布佐（現我孫子市内）から夜舟に乗って利根川を下り、十五日に鹿島に着いたのであるが、昼からの雨で名月は見るべくもなかった。『鹿嶋詣』には、

ひるよりあめしきりにふりて、月見るべくもあらず。ふもとに根本寺のさきの和尚、今は世をのがれて此所におはしけるといふを聞て、尋入てふしぬ。……あかつきのそら、いさゝかはれけるを、和尚起し驚シ侍れば、人々起出ぬ。月のひかり雨の音、たゞあはれなるけしきのみむねにみちて、いふべきことの葉もなし。はるぐ〳〵と月みにきたるかひなきこそ、ほゐなきわざなれ。

云々とあって、当夜の模様を知ることが出来る。根本寺の前住職仏頂は、天和の頃江戸で芭蕉参禅の師だった人で、この頃は寺内の長興庵に隠栖していた。三人は月も見られぬままに寝ていたのを、明け方雨があがったので和尚に起されたのである。

雨あがりの雲行は速く、宛かも月が速度をあげて空を行くように見える。雨が止んだばかりで樹々の梢は月光を受けて濡れ色に光り、折々は滴りが軒を打つ。なお雨気を帯びたさわやかな明け方の景色を、しかと言い留めた佳句である。「月はやし」と強く言い切り、天上の景を地上の景色がどっしりと支えた構成には寸分の隙もない。「月が早くも現われた」と取るのは、「はやし」を誤解したもので、ここを聞き誤っては、句の真味に遠ざかるものと言わなければならぬ。

300　寺に寐てまこと顔なる月見哉　（鹿嶋詣）

続虚栗・泊船集・今日の昔

秋季（月見）。

語釈 ○**寺に寝て** 「寺に寝て」。「寺」は、広くは根本寺全体、狭く限れば前記仏頂の隠居所長興庵を指す。「明月や処は寺の茶の木はら膳所昌房」(『猿蓑』巻三)「Tera.」(『日葡辞書』)。○**まこと顔なる** 「誠顔なる」。殊勝な様子をした、の意。寺なので皆かしこまっているのをユーモラスにいった。なお(I 234)参照。「をこの者どもが誠がほに与力同心して」(『源平盛衰記』巻三十三)「Macoto.」(『日葡辞書』)。

大意 寺に泊って、柄にもなく殊勝な様子で月見をすることだ。

考 『続虚栗』には「鹿嶋に詣ける比、宿根本寺」と前書がある。『鹿嶋詣』に前の「月はやし」の句の次に並んで出ており、同時の作と考えられる。

前掲『鹿嶋詣』の仏頂の隠居所を訪ねたことを言ったところに、

……尋入てふしぬ。すこぶる人をして深省を発せしむと吟じけむ、しばらく清浄の心をうるにゝたり。

とあり、この句の内容と関連づけて見るべき文である。「人をして深省を発せしむ」は、杜甫の詩句「欲レ覚聞二晨鐘一、令レ人発二深省一」(覚めんと欲して晨鐘を聞けば、人をして深省を発せしむ。「遊二龍門奉先寺一」)を引いたもので、清浄な仏寺にあって、平生の自身のあり方に深い反省の気持をおこすことを言ったものであった。『鹿嶋詣』にいう「清浄の心」も芭蕉の心情として偽りはなく、それが句の「まこと顔」の語につながっていることも論はないけれども、従来の諸注を見ると、この句の持つ気分を余り大真面目に取り過ぎた感が深い。基本的には、

誠とは俗塵を出離する底の事、即深省を発するの場。しかるを顔なりと実を崩せる手段、俳にして且謙なり。(杜哉『芭蕉翁発句集蒙引』)

……他の場所なれば月見するに一番ざれて見る可きを、寺の事であるから厳格に月見をしましたといつて、其の実は却つて大いにざれてゐる。(内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』)

といった見方が確かなものであって、「まこと顔なる」に飄逸な味を看て取るべきなのである。ただ「大いにざれて

ゐる」とは言っても、ふざけ散らしているのではない。仏頂の傍に居て寺での月見とあって、酒興などとは程遠く、三人ながらかしこまって神妙に月を見ている。そういう自身の姿を突離して外から眺め、聊か興じた気分といったらよかろう。また、気分は全くちがうが、「なげゝとて月やは物をおもはするかこちがほなるわがなみだかな」(『山家集』中、『千載集』巻十五)の西行歌の調子が影響しているように思われる。

神　前

301　此松の實ばへせし代や神の秋　(鹿嶋詣)

宝の槌

秋季。

語釈　○神前　「シンゼン」。神社の拝殿の前、広前。ここは鹿島神宮のそれである。「神前に古き宝燈有」(『おくのほそ道』)「Xinjen. Camino maye.」(『日葡辞書』)。○此松　「此の松」。鹿島七不思議の一とされる境内の「根あがりの松」のことである。○実ばへせし代や　「実生えせし代や」。「実ばへ」は、草木がその種子から芽が出て成長することをいう。「生ゆ」はヤ行動詞ゆえ、「へ」は「え」の仮名ちがいである。「や」は、疑問の意とする余地もないではないが、姑く詠嘆の切字と見ておく。「おれとそなたはみばへのきくよ」(『津国女夫池』千畳敷其世がたり)。○神の秋　「秋」は季語を出す為に添えたもの。神徳賛仰の意である。「雪にけさ国土や白洲神の春　光有」(『毛吹草』巻五)。

大意　この神前の松の実生えした遥かな昔よ。いとも神々しい秋である。

考　『宝の槌』(露月撰、延享二年刊)には「鹿島神前にて」と前書がある。『鹿嶋詣』の前書によって、鹿島訪問中、鹿島神宮に参拝した時の吟と知られる。

鹿島神宮は武道の神として著名な由緒ある社である。その神前に額ずき、賛仰の意をあらわすのに「根あがりの

松」によって趣向を構えた典型的な神祇祝言の句であった。「この松の実生えした代は遠い神代の秋であったのか」と、「や」を疑問にとる解釈もあり得るが、「秋」が生成の時節として聊か相応しくないので、「や」は単なる詠嘆の語と見た方がよかろう。亭々と聳える老松に神代の昔を思うのは、型通りではあるが気持の良い句である。

田家

302 かりかけし田づらのつるや里の秋　（鹿嶋詣）

秋季。

語釈 ○**田家**　「デンカ」。語は「農家」の意で、田舎（いなか）のこと。ここではその風景をいう。「田家眺望／霜月や鸛（カウ）の彳々（ツク）ならびゐて　荷兮」（『冬の日』）。○**かりかけし田づらのつる**　「刈りかけし田面（たづら）の鶴（つる）」。稲を刈りかけてまだ全部終らない田圃の上に下りた鶴。「つる」は既出（Ⅱ*283*等）。「砧も遠く鞍にいねぶり　芭蕉　秋の田をからせぬ公事の長びきて　越人」（『あら野』員外）「うちわびておちぼひろふときかませば我も田づらにゆかましものを」（『伊勢物語』五十八段）「Ineuo caru.」「Tazzura. P. i, Ta.」（『日葡辞書』）。○**里の秋**　村里の秋色を賞した表現。「十日のきくのおしき事也　荷兮　山里の秋めづらしと生鰯　松芳」（『あら野』員外）。

大意　刈りかけた田圃の上に鶴が下りているなあ。里の秋も今やたけなわだ。

考　『鹿嶋詣』に「神前」とした一行三人の句の次に見える。

田の水は既に落して、稲刈りが始まっている時節、刈りかけた田面に鶴が下りて餌をあさっているさまは、如何にも水郷の風景らしい。写生ではあるまいという見方もあるが、やはり実景によって興を触発されたのであろう。別に目立った表現をするでもなく、淡々と平凡な言葉を連ねてまとめたところに、却ってなつかしい趣が見え、秋気澄む田園の清麗な真昼が思われる。

303

賤の子やいねすりかけて月をみる　（鹿嶋詣）

里の子や稲すりかけて月を見る　（芭蕉杉風両吟百韻）

秋季（いねする・月）。

語釈 **○賤の子** 「賤の子」。庶民の子。「子」とはあるが、後に引く山本健吉氏の説のように、稲摺りの作業に雇われた男と見るのが良い。（Ⅰ5）参照。**○いねすりかけて** 「稲摺りかけて」。「稲摺る」は、籾米をすり臼にかけて穀皮を除く作業をいう。「籾摺る」（Ⅰ*198*）と同じ。「すりかけて」は、前の「かりかけし」と同様に、動作を途中でやめる意である。「とまり〳〵稲すり歌も替けり京ちね」（『あら野』巻七）「Ine.」（『日葡辞書』）。

大意 農家に雇われた男が籾をする手を休めて月を見ているよ。

考 前の「かりかけし」の句と同じく、『鹿嶋詣』の「田家」と題した句の中に見える。鹿島あたりの農村での所見によった句であろう。『芭蕉杉風両吟百韻』（寛美撰、天明六年刊）に見える異形は真蹟短冊に基づくというが、『鹿嶋詣』の真蹟類の一致する句形を本位句とするのが当然である。

籾摺りの作業について、山本健吉氏は次のように述べておられる。

籾摺は農村の庭仕事の一つで、「庭」とは仕事場の意味。籾摺の作業場を臼庭ともいう。朝庭・夜庭と言って、夜を日についでの苦しい作業で、臼摺の夜業が始まると、臼の夜食と言って、ごもく飯などの夜食がでる。これは夜庭の句である。作者が「賤の子」と言ったのは、農事に雇われた作男の類である。苦しい作業の中で、しばしの休息に、月を見上げるのだ。（『芭蕉全発句』）

籾摺りは大勢の手を要する難作業であったから、「賤の子」は言葉通りの子供ではなく、雇われた農夫の類とするの

が確かな所だと思う。

一体に『鹿嶋詣』所収の芭蕉の発句に関する諸家の見方は、前の句の条でも聊か触れたように、写実とは異なる情趣化された理想画とする向きが多い。山本氏なども、この句について「籾摺る賤の子にすらも月を見る風流心を見出だすという、観想的な作柄であって、経験というより想裡の景であろう」(『芭蕉全発句』)と見ておられる。風雅などとは縁のない人達のふとした行為に興を催していることは確かながら、それが体験でないとする根拠は薄弱なのではあるまいか。田舎の自然や人のたたずまいをスケッチ風にまとめている点で、これらの句どもは共通した性質を持っており、何れも嫌味のない自然さを持っている。私はその趣を素直に受け取りたい。野に生きる人の何気ない風流心のあらわれはそれとしても、それを言わんが為に作られた句の世界ではないのである。澄明な句の世界を、強いて歪んだレンズで眺めるべきではあるまい。内藤鳴雪の左の所見は、今も顧るべきものを持っていると思う。

田家の景色が善く現され画にもしたいやうである。……此句の如きも若しこれを悪く解すると、賤の子でさへも月に対しては見とれる、月は美しいものぢや、賤の子にも風雅心は存する、など言ふ事も出来るが、此句は左様な理窟でなく、単に瞬間の賤の子の有様を叙したのみで、純客観の句である。斯くてこそ詩味が多くなるのである。(『芭蕉俳句評釈』)

この句の自然さは、「賤の子や」と初五に切字を置き、七五にその行為を安らかに言い下した句作りにもあらわれている。

304 いもの葉や月待里の焼ばたけ　(鹿嶋詣)

いもの葉や月待里のやけ畠　(蕉翁句集)

秋季（いもの葉・月）。

語釈　**○いもの葉**　「芋の葉」。この芋は勿論里芋で、根茎に生じた芽が地上に出て蔓状に這い、先の尖った長心臓形濃緑色の葉を形成する。「いもの葉の露や銀河のこぼれ水　自笑」（『続明烏』）。**○月待里**　「月待つ里」。月の出が近いことを風流に「月待つ」と言いなした。「門の石月待闇のやすらひに　野水　風の目利を初秋の雲　荷兮」（『あら野』員外）。**○焼ばたけ**　「焼畠」。草地や山峡の雑草雑木を焼き、その焼跡に蕎麦・稗・麦・粟・豆・芋を栽培する原始的農耕法をいう。「焼ばたけ」と訓んで、旱の為に作物が枯れかかった畠ととる説もあるが、そうした意味での言葉の存在自体が問題であり、焼き畠が鹿島辺に相応しくないとも必ずしも言えない。今栄蔵氏の『新潮日本古典集成・芭蕉句集』のように「焼ばたけ」と訓むべきものと思う。土芳の『蕉翁句集』は「やけ畠」と仮名書きになっているが、現存本は転写を経たものだから土芳のよみ方がそうだったとはいえず、たとえ土芳がそうよんでいたとしても当面の問題の参考にはならないのである。

大意　月の出が近い村里の焼き畠には、芋の葉が露を含んでひろがっていることだ。

考　『鹿嶋詣』の句中、前の「賤の子や」の句の次に見える「田家」の句で、鹿島あたりでの所見と思われる。句の解釈としては、

　これも夕ぐれの景色らしく見ゆる。芋の葉が一面にあつて、月が早く出よかしと待つてゐるやうな趣がある。そこは村里の日に焼けた畑であるといつたので、久しく雨を得ず旱魃の為めに水気のない田畑となつて一雨欲しげなるさまを叙したのぢや。雨欲しげなるを婉曲に月まつとうたひ、月が出れば露置きて多少は霑つた景色になる所よりして、人のそれをまつのを芋の葉がまつとして、景色情致兼ね現はしたのである。これ亦た詩人の一手段ぢや。（内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』）

というような見方が従来主流をなしている。但し右の説で、芋の葉が月を待つように見ているのは切字の働きを全く無視していて従い難く、月を待つのは当然里人でなければならぬが、その外は一応筋の通った解釈といえよう。しかし前述の如く「焼ばたけ」と訓んで旱の畠とすることには問題があり、ここを「焼ばたけ」と訓めば、解釈も変って

来る筈である。第一、名月の当夜は雨であって、この前後に旱だったような様子は他の句にも見えない。山本健吉氏は「焼ばたけ」とよみながらも、

> 荒地を焼いて開墾したばかりの新畑に、芋を作ってある。芋の葉がすくすくと伸びているが、それも月待つ里の月見の料だという気持を、ほのめかしてある。やはりこれも、月夜の景と見てよかろう。（『芭蕉全発句』）

と別趣の解を提示しておられるが、こうした見方を最もはっきり打ち出したのは、前記今栄蔵氏の『芭蕉句集』であった。即ち、「焼畑」としてこれを草木を焼く農耕法と見て、

> 里近い焼畑には芋の葉がよく育って、豊かな収穫が目に見えるようだ。名月にこの芋を売り出そうとする里人らも、さぞ収穫が楽しみであろう。

と解し、「仲秋の名月は「芋名月」ともいって必ず里芋を煮て食うのが習慣。「月待つ」ことは普通は風流の心だが、句は、収穫した芋を都会地に売り出すのに名月を待つと転じて、農民の生活に焦点を当てた」と付説しておられる。この句が「芋名月」を心に置いた作であることは確かで、「焼ばたけ」を農耕法の一つとし、芋の豊作を余情とする解は、私も基本的に賛成である。ただ「月待つ」を「収穫した芋を都会地に売り出すのに名月を待つ」と見るのは、余りに現実的過ぎはしまいか。「月待里」を過度に現実生活に結び付けるのは、作者の真意を誤るものだと思う。旅中のこのあたりの句を見ると、自然や人の現実の姿をスケッチしながらも、風雅の枠をはみ出していない。「かりかけし田づらのつる」がそうであり、「いねすりかけて月をみる賤の子」がそうである。当面の句も「焼ばたけのいもの葉」は新しい発見として俳味十分なもので、「月待里」は風雅のあしらいと私は見ている。これによって月の出近い宵の村里が、背景として浮び上って来るのである。

くさの戸ぼそに住わびて、あき風のかなしげなるゆふぐれ、友達のかたへいひ
つかはし侍る

305 蓑蟲の音を聞にこよくさのいほ　（あつめ句）

続虚栗・天理図書館蔵真蹟画賛・岡田彰子氏蔵真蹟自画賛・続蕉影余韻所収真蹟懐紙・出光美術館蔵真蹟自画賛・陸奥鵆・泊船集・庵日記・蕉翁句集・素堂家集・蓑虫庵集・笈集・蓑虫庵小集

秋季（蓑虫の音）。

語釈　**○くさの戸ぼそ**　「草の戸臍」。「戸ぼそ」は、もと戸を設けた処の梁と敷居に穿った小さな穴のことで、これに枢を挿し込んで固定するのである。しかし後には戸そのものを指す語になって、「扉」を「トボソ」と訓ませるようにもなった。ここも勿論後者の意であって、「草の戸」というに同じく、粗末な草庵即ち深川の芭蕉庵を指す。「おりふしをのゝほそみちかきわけて、くさのとぼそをうちならし」（『小町草紙』）「Tobosouo firaqu.」（『日葡辞書』）。**○住わびて**　「住み侘びて」。侘びしく住んでいて。既出（I *126*前書）。**○あき風のかなしげなるゆふぐれ**　「秋風の悲しげなる夕暮」。「たゞかなしげなりとみしかゞみのかげのみたがはぬ、あはれに心うし」（『更級日記』）「夕ぐれのさびしさ感に堪たり」（『おくのほそ道』）「Canaxigueni.」「Yûgure.」（『日葡辞書』）。**○友達のかた**　「友達の方」。後述するように、俳友山口素堂の隠宅をいう。貞享四年当時、素堂宅は葛飾阿武にあり、芭蕉庵と程近かった。「友達の六条にかみそりいたゞくとてまかりけるに」（『猿蓑』巻三、卓袋発句「影ぼうし」前書）「Tomodachi.」（『日葡辞書』）。**○いひつかはし侍る**　「言ひ遣はし侍る」。句を作って友の許へ遣わしたというのである。「旧里の人に云つかはす」（『あら野』巻七、杜国発句「こがらしの」前書）「Vocuri tçucauaxi, su, ita.」（『日葡辞書』）。**○蓑虫の音**　「蓑虫の音」。「蓑虫」は、蓑虫蛾の幼虫。木の葉や小枝を口から吐く糸で綴った堅牢な袋の中に棲み、時に頭を出して木の葉を食べて成長する。発音器官はなく鳴かない虫であるが、『枕草子』四十三段に「みのむし、いとあはれなり。おにのうみたりければ、おやにて、これもおそろしき心あらんとて、おやのあやしききぬひききせて、いま秋風ふかむをりぞこんとする。まてよといひおきて、にげていにけるもしらず、風の音を聞きしりて、八月ばかりになれば、ちちよ、ちちよとはかなげになく、いみじうあはれなり」とあるのによって古来鳴くものとされ、秋の季語とされている。実は蓑虫と同じような所に棲む鉦叩き（コオロギ科の昆虫）の鳴き声を誤って、蓑虫が鳴くものと

されたらしい。「簑虫　雑也。なくとすれば𡢳也」（『御傘』）「Minomuxi.」（『日葡辞書』）。〇聞にこよ「聞きに来よ」。〇くさのいほ「草の庵」。草葺きの粗末な草庵。芭蕉庵を指す。「芭蕉翁をわが茅屋にまねきて／もらぬほど今日は時雨よ草の庵　斜嶺」（『炭俵』下）「Iuo. i, Iuori.」（『日葡辞書』）。

大意　わびしい我が草庵に、父よ父よと鳴くという蓑虫の音を聞きに来て下さい。

考　『続虚栗』には「聴閑」と前書がある。貞享四年秋筆の「あつめ句」に見えるので、その秋までに江戸で出来た句と見られよう。また、『素堂家集』（享保六年刊）には「ばせを老人行脚帰りのころ／蓑虫やおもひしほどの庇より／此日予が園へともなひけるに、また竹の小枝にさがりけるを／みのむしにふたゝびあひぬ何の日ぞ／此のち、ばせをのもとより／蓑むしのねを聞に来よ草の庵」とあって、芭蕉が貞享四年以前秋に江戸へ「行脚帰り」した時といえば、同年『鹿嶋詣』の旅を終えた頃が、考えられる唯一の機会である。従ってこの句は、『鹿嶋詣』の後、九月へかけての頃の成立と考えられ、出来て間もなく「あつめ句」に書かれたものと認められる。この時素堂の草した「蓑虫説」と、それに付した芭蕉の「蓑虫説跋」を左に掲げておこう。

まねきに応じてむしのねをたづねしころ

素堂主人

みのむしく、声のおぼつかなきをあはれぶ。ちゝよくとなくは孝にもつぱらなるものか。いかに伝へて鬼の子なるらん。清女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも、瞽叟を父として舜あり。なむぢはむしの舜ならんか。みのむしく、声のおぼつかなくて、かつ無能なるをあはれぶ。松むしは声の美なるがために籠中に花野をなき、桑子はいとをはくにより、からうして賤の手に死す。みのむしく、無能にして静なるをあはれぶ。胡蝶は花にいそがしく、蜂はみつをいとなむにより、往来おだやかならず。誰が為にこれをあまくするや。

みのむし〳〵、かたちのすこしきなるをあはれぶ。わづかに一滴をうれば、其身をうるほし、一葉をうれば、これがすみかとなれり。龍蚍のいきほひあるも、おほくは人のために身をそこなふ。しかじ、汝がすこしきなるには。

みのむし〳〵、漁父の一糸をたづさへたるに同じ。漁父は魚をわすれず。風波にたえず幾度かこれをときて、さけにあてんとする。太公すら文王を釣のそしりあり。子陵も漢王に一味の閑をさまたげらる。

みのむし〳〵、たま虫ゆへに袖ぬらしけむ。田みのゝしまの名にかくれずや。いけるものたれか此まどひなからん。鳥は見てたかくあがり、魚は見てふかく入ル。遍昭が簑をしぼりしもふる妻を猶わすれざるなり。みのむし春は柳につきそめしより、桜のちりにすがりて定家のこゝろを起し、秋は萩ふく風に音をそへて寂蓮に感をすゝむ。こがらしの後はうつせみに身を習ふや、からも身もともにすつるや。

又以男文字云古風

簑虫簑虫　落入牕中
一糸欲絶　寸心共空
似寄居状　無蜘蛛工
白露甘口　青苔粧躬
従容侵雨　飄然乗風
栖鴉莫啄　家童禁叢
天許作隠　我憐称翁
脱簑衣去　誰識其終

貞享至南日誌

（以上素堂の文。蚊足清書本による）

草の戸さしこめてものゝ侘しき折しも、偶蓑虫の一句をいふ。我友素翁はなはだ哀がりて、詩を題し文をつらぬ。其詩や錦をぬひ物にし、其文や玉をまろばすがごとし。つらく〳〵みれば離騒のたくみ有にゝたり。又蘇新黄奇あり。はじめに虞舜・曾参の孝をいへるは、人におしへをとれと也。其無能不才を感る事は、ふたゝび南花の心を見よとなり。終に玉むしのたはれは、色をいさめむとならし。翁にあらずば誰か此むしの心をしらん。静にみれば物皆自得すといへり。此人によりてこの句をしる。むかしより筆をもてあそぶ人のおほくは花にふけりて実をそこなひ、みを好て風流を忘る。此文やはた其花を愛すべし。其実猶くらひつべし。こゝに何がし朝湖と云有。この事を伝えき（ママ）ゝてこれを画。まことに丹青淡して情こまやか也。こゝろをとゞむれば虫うごくがごとく、黄葉落るかとうたがふ。みゝをたれて是を聴けば、其むし声をなして秋のかぜそよ〳〵と寒し。猶閑窻に閑を得て両士の幸に預る事、蓑むしのめいぼくあるにゝたり。

芭蕉庵桃青

（以上芭蕉の文。真蹟による）

この素堂と芭蕉の文章は、杉風の鯉屋伝来の巻子本で、一軸に仕立てられており、芭蕉の文中に見える朝湖（翠蓑翁・英一蝶）筆の枯木に蓑虫の図に芭蕉が句を賛した幅物に添うている。芭蕉の文には、外に芭蕉の真蹟を杉風が摸写したかと思われる異文も伝わるが、何れも素堂との風雅の交わりを偲ばせるに足るものである。また、『続虚栗』には芭蕉の発句の次に、「聞にゆきて」として「何も音もなし稲うちくふて螽哉」という嵐雪の句が見えるので、門人の嵐雪にもこの句を贈ったことが知られる。嵐雪はこの時「蓑虫を聞に行辞」という文章も草した。『続虚栗』に「聴閑」と前書したのは、「閑を聴く」即ち閑寂の中でじっと耳を澄まし、謂わば声無き声に耳を傾ける意味である。蓑虫が鳴かないことは、嵐雪の句にもある通り誰しも知っていたけれども、古来言い伝えられている

ように鳴くものとして声を聞こうとするところに風雅の情が生まれるのだ。「あつめ句」の前書によっても知られるように、侘びしい秋の気分にひたりつつ雅友を求める心である。文章や絵による周囲の人々の交響は、当時の文人趣味をよくあらわしている。

『連歌俳諧研究』八十一号に紹介された一幅は、面壁の達磨の絵にこの句を賛したもので、土芳の『庵日記』元禄元年の条に、

蕉翁、面壁の画図一紙ふところより取出て、是をこの庵のものにせばやと夜すがら書るはと也。その讃に、

○みのむしの音を聞にこよくさの庵　ばせを

則おしいたゞきて、初五の文字を摘て簑虫庵と号すべしと云へば、よろしと也。

と見える土芳に贈った自画賛の原物であった。藤堂藩を致仕して俳諧に専念しようとする土芳に記念として贈った品で、蓑虫庵の号の由来ともなったものである。貞享五年（元禄元年）の三月、吉野の花見に出掛ける前のことだった。『泊船集』に「此句いづれの集にか、伊賀芭蕉庵と前書あれど、是は深川の庵なるべし」とある付記は、『陸奥鵆』（桃隣撰、元禄十年成）に「対伊陽門人」と題した「行秋や手をひろげたる栗の毬（イガ）」と並べて収められたのを斯う解したものらしいが、右の前書が蓑虫の句までかかるとは必ずしも決し難い。かかるとしても土芳の件があるから、誤りではないわけである。ただ、達磨面壁の図に賛したところは、雅交の間に成った当初の趣とは聊か異なっていて、考えておく要があろう。達磨の画賛としては、禅的な含意を持つ句となるわけであって、謂わば「聴閑」の「閑」を禅的な悟境に見直したことになる。声なき声を聞くことは、禅でいう「隻手の声」に通ずる面もある為に、達磨の像の賛としてこの句を用いたのでもあろう。それはまた土芳に対して、「俳諧の神髄に参入せよ」という示唆にもなっていた筈である。

寄二李下一

306 いなづまを手にとる闇の紙燭哉 （続虚栗）

泊船集・三冊子・蕉翁句集

秋季（いなづま）。

語釈 ○**寄二李下一** 「李下に寄ス」。「寄ス」は、句や歌を人に贈ること。「李下」は蕉門の俳人。既出（I134前書）。「李下に」の仮名は底本に欠く。「或千里寄レ書」（『猿蓑』丈艸跋）「Yoxe, suru, eta.」（『日葡辞書』）。○**いなづま** 「稲妻」。秋の夜空に走る電光。雷鳴を伴なわないものをいう。「稲妻 秋也、夜分也。……つまの字をかけ共、稲づまは人倫にあらず。……いなびかり 雑也。非夜分」（『御傘』）「稲妻 よひのま……いなづまは。妻によせて。ちらと見しよひの俤などいひ。雲の衣のもんにもいひなす」（『山之井』）「いなづまやきのふは東けふは西 其角」（『あら野』巻四）「Inazzuma.」（『日葡辞書』）。○**闇の紙燭** 「闇の紙燭」。紙や布を細く縒った上に蠟を塗った小型の照明具。芯に細い松の割木を入れることもある。夜の屋内で明りとして携えるのである。「薄雪たはむすゝき痩たり 正秀 藤垣の窓に紙燭を挟をき 珍碩」（『ひさご』）「Xisocu.」（『日葡辞書』）。

大意 ピカリと手許まで稲妻がひらめいた、宛かも闇の中で手に持った紙燭に火をともしたように。

考 『続虚栗』初出の句で、貞享四年秋以前の作である。その由来について『三冊子』には、

この句師のいはく、門人此みちにあやしき所を得たるものにいひて遣す句也となり。そのあやしきをいはんと、取物かくのごとし。万心遣ひして思ふ所を明すべし。（赤雙紙）

とあり、李下の奇才を賞した句と知られる。句作りは「手にとる」を上下に働かせているのだが、句意は逐語的にいえば、「闇の夜の紙燭として、稲妻を手に取る」（能勢朝次博士『三冊子評釈』）ということであろう。紙燭を人が実際に持っているのか、それとも紙燭は譬喩にとどまるのか、見方はそれぞれ分れるけれども、私は紙燭を譬喩と見たい。電光が一閃して、瞬間に四辺の物を照らし出したのを、紙燭に火をともして闇を照らすのに譬えたものと思われる。言

葉の微妙な綾によって妖しい気分を出しているのが、李下の「あやしき所を得たる」俳風に叶うのであろう。李下の作としては、

　破　茅
風妖て薄に夜の雨すごし
でんがくに寄ス狂句の法師雪の児
寒苦鳥孤婦がね覚を鳴音哉　（以上『虚栗』）
　深川夜泊
木がらしや夜の木魚に吹やみぬ（『続虚栗』）

といった句が幻妖な味を持ったもので、こうした作風を賞しながら、聊か諷した気味もあるようである。最後に諸家の解を掲げておく。

お前の句風は、たとえていえば、闇を照らす紙燭として、あの大空の稲妻を手にとったかのごときあやしさがあるようだ。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

闇夜を貫いて稲妻が一閃した。見るとあとの暗闇には、その一瞬の電光を素手で奪い取ったかのごとく、紙燭が手にかかげられている。（堀信夫氏『日本古典文学全集・松尾芭蕉集』）

紙燭を手にして、夜の闇を照し出すと、稲妻を手にして、あたりをぱっと輝かせたような感じがした。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

お前は闇の中で紙燭を灯して手に持ちながら、まるで夜空に走る稲妻の閃光を手に取っているかのように見せかける。（今栄蔵氏『新潮日本古典集成・芭蕉句集』）

艸菴雨

307　起あがる菊ほのか也水のあと　（続虚栗）

泊船集・蕉翁句集

秋季（菊）。

語釈　**○艸菴雨**　「艸菴の雨」。「艸菴」は、草葺きの粗末な住居。いうまでもなく深川の芭蕉庵を指す。**○起あがる菊**　「起き上る菊」。水をかぶって倒れた菊が、またもとのように、茎を立て直して来たさまをいう。「菊」は既出（I *54*）。「柚の色や起あがりたる菊の露　其角」（『続猿蓑』下）「**Voqiagari, ru, atta.**」（『日葡辞書』）。**○ほのか也**　生気を帯びた菊の姿情をあらわす微妙な表現。「明る夜のほのかに嬉しよめが君　其角」（『続猿蓑』下）「**Fonocani.**」（『日葡辞書』）。**○水のあと**　出水の引いた後の意。「まがきまで津浪の水にくづれ行　荷兮　仏喰たる魚解きけり　芭蕉」（『冬の日』）。

大意　出水の引いた後、倒れた菊がまた茎を立て直し起き上って、ほのかに生気を帯びている。

考　低湿地の深川は、雨でも降ると兎角水が出やすい。この句はそうした雨の後の庭の一点景をまとめたものである。庭の菊は植えたまま手入れもせずにあるものであろうが、雨の出水に浸って伏し倒れていたその菊が、水の引いた後でふと見ると、もう茎を立て直して起きあがる気配を見せている。穎原博士は『新講』で、「ほのか也」に黄昏のさまを感じておられるが、寧ろ菊そのものの姿の形容と見た方が良い。この「ほのか」はまことに微妙な表現で、一言では悉し得ないけれども、要はささやかな植物の持つ生気を、このような語を以て把握したのである。

これは、主観を露出してゐないが、それだけに、芭蕉の姿がはつきりわかる句である。……この「ほのかなり」は、菊の様であり、その菊の様に揺らぐ芭蕉の心でもある。静かに見つめた中に、菊に滲透した芭蕉の呼吸がきこえるやうである。やはり感合の句と見るべき静かな心力が感ぜられる。（『芭蕉講座』発句篇(上)）

という加藤楸邨氏の鑑賞はすぐれている。この力は芭蕉のものであると共に、謂わば菊の生命力に触発されたものだ。

山本健吉氏は、

「ほのかなり」で、たおやかな菊のほのかな息づかいが聞えるようだ。黄昏によるほのかさであるばかりでなく、菊の姿情そのもののほのかさである。おのずからたゆげに起き上る菊の姿に、何となく女の閨情を感じ取っているような、ほのぼのとした色気がある。（『芭蕉全発句』）

と見ておられ、このような観点に立てば、

かぶろいくらの春ぞかはゆき　野水
櫛ばこに餅すゆるねやほのかなる　かけい

という『冬の日』はつ雪の巻の一連の趣にも通う艶な気分も包蔵することになる。ただそれは、この句の場合余り幽暗な感じではなく、雨の暗さを脱け出たほの明るさとして感受すべきであろう。「ほのか也」によって、この句が生きていることは論が無い。

308　痩ながらわりなき菊のつぼみ哉　（続虚栗）

俳林一字幽蘭集・笈日記・泊船集

秋季（菊）。

語釈　○**痩ながら**　「痩せながら」。痩せていながらも。「鉄炮の遠音に曇る卯月哉　野径　砂の小麦の痩てはらく　里東」（『ひさご』）「Yaxe, suru, eta.」（『日葡辞書』）。○**わりなき菊のつぼみ**　「わりなし」は「理無し」で、理由・根拠がなく無理だというのが原意であるが、転義として、非常につらいとか、止むを得ないという意にも用いられる。ここは超越的な自然の促しによって、菊が痩せながらも莟をつけているのを「わりなき」といったので、健気さをいじらしく思う余情がある。『おくのほそ道』月山の

条に、「岩に腰かけてしばしやすらふほど、三尺ばかりなる桜の、つぼみ半ばひらけるあり。ふり積雪の下に埋て春を忘れぬ遅ざくらの花の心わりなし」とあるのは、当面の句と同じ用法である。「Varinai.」「Tçubomi.」(『日葡辞書』)。

大意 痩せていながらも健気に莟をつけている菊のいじらしさよ。

考 『笈日記』大垣部には「菊　如行亭」と前書があり、画賛の句として挙げてある。大垣の如行がそのような幅物を所蔵していたのであろう。『続虚栗』初出で、貞享四年秋以前の作と考えられる。

この句の眼目は「わりなき」の語にあり、これによって写生句の域を超えて観相の味わいを持って来るのであるが、この語の受け取り方は各人各様実にさまざまである。

此吟などは不思議の妙詞と云べき也。今案、草木痛み痩る時は色衰へ、花有物は莟も稀にして開く事少し。然るに菊は霜を帯る草にて、其性強し。故に捨置ても莟を多く生じ、痩ながらも無理(ワリナク)花開く草也。是天地自然の其物ゝの本性也。翁の吟は如此小細の所に至て一つとして其本性を違ふ事なし。(信天翁『笈の底』)

「わりなき」といふのは、痩せながらも時が来れば莟をもつて来る。その止むに止まれぬ自然の催しを言つたので、この場合いかにも適切な言葉である。それは物の心に通ずる細みであり、又このぬきさしのならぬ一語に表現したのがしをりだと言つてよからう。(潁原博士『新講』)

わりなき、の一語にすべてがかゝつてゐる。痩せながらも時至つて莟をつけずには居られぬ菊の姿に、切ない傷ましさを感じたものであらう。こゝから、「わりなき」の一語は、絞り出されるやうに据ゑられてゐるのである。……菊に滲透した芭蕉の静かではあるが凄烈な心力が、じり〳〵動いてくるやうである。かういふ句には、菊がはつきりと生きながら、その中にもうのつぴきならぬ芭蕉の人間が生きてゐる。痩せながらわりなき莟を銜むものは、こと〳〵しい言ひ方ではあるが、芭蕉の人生の姿であるとも言ひえよう。(加藤楸邨氏『講座』発句篇(上))

……「わりなし」という言葉には、意義の変遷を通じて、伝統的に恋愛感情が附き纏っているのであって、芭蕉

のこの句にも、それは流れこんでいると見ていいのである。この「わりなき」は、仕方がない、止むをえないというほどの意である。不合理やつらさを認容する心である。痩せ細った庭前の菊の身に取っては、莟をつけるということは大変な重荷なのであるが、詮方なくも莟をつけてしまったというつらさの認容である。……たよわな痩菊が、自然の止むに止まれぬ力に屈服して、莟を持ったという無力さの感じを籠めているのである。……ここにはやはり、……みごもった痩身の婦人のイメーヂが、芭蕉にもあったと見ていい。閨怨というと言葉が強すぎるが、みごもって捨てられたといった、貧しい女の切ない諦めの感情である。「わりなき」という言葉に、菊を擬人化して、その切なさに惹かされているのである。……このようなイメーヂの二重性は、芭蕉の心が菊という対象を得て、深く細く滲透することから起こるのであって、そのことが「わりなき」という言葉を掘り起こしたのである。芭蕉の歴史的意識が働いて、ここに一つの言語的体験として結晶し、芭蕉の言葉で言えば、「細み」の境地を実現したのである。（山本健吉氏『芭蕉その鑑賞と批評』）

植え捨てのひょろひょろとしたやせ菊にまで、相違なく造化の運行は行きわたり、いま眼前に脈々と息づいているのだということを発見した折の感動の吟詠。……芭蕉の「わりなし」は、ただ単に理性レベルにおける事象の非合理性をいうのではなく、人間の相対的知見を惑わせる、造化そのものがはらむ不可避的根源的な非合理性を意味する。すでにその非合理性が究極的な造化に由来する以上、芭蕉の考える人間もまた例外ではなく、「わりなき」存在である。一句の陰に芭蕉自身の面影がほの見えるのも故なしとしない。（堀信夫氏『古典文学全集・松尾芭蕉集』）

右に挙げた諸説のうち、『笈の底』の説は、「天地自然の其物〻の本性」をとらえた「妙詞」と見ているあたり、近世期のものとしては優れているといえよう。「止むに止まれぬ自然の催し」（『新講』）の発現を痩せ菊の如き微物に観じているのであって、それを「わりなき」という語で把握したところが如何にも芭蕉らしく、そういう語を使われて見る

と、それ以上の表現は見出し得ない底の必然性を納得させられる。人間の理性の水準を超越した「造化の理」の発見と、それに対する賛歎がこの句の中核である。その観点からすれば「切ない傷ましさ」(『講座』)といった気分は突き抜けていた筈であろう。「よく見れば薺花さく」(Ⅱ281)の句と同様な静かな観相がこの句の動機になっていると見たい。山本氏のいわれる婦人のイメージは、「わりなし」の語の歴史を溯れば納得出来ないではないが、私はそのような方向に深入りしたくない。堀氏のような見方が一番抵抗なく受け入れられるように思う。こうした一類の句の彼方には、『笈の小文』冒頭の風雅論中に見える造化随順の思想があるのだ。

仙風が悼

309 手向けり芋ははちすに似たるとて (続深川)

秋季(芋)。

語釈 ○**仙風が悼** 「仙風(せんぷう)」は杉山氏、名は賢永、通称市兵衛。摂津今津村の産。江戸に出て本小田原町で魚問屋を営み、屋号を鯉屋と称した。芭蕉のパトロンとして名高い杉風の父である。歿年未詳。「悼(いたみ)」は、逝去を悼む意をあらわした句をいう。「が」は、所有格。「七十余の老医みまかりけるに、弟子共こぞりてなくまゝ、予にいたみの句乞ける」(『猿蓑』巻二、其角発句「六尺も」前書)「Itamino mono.」(『日葡辞書』)。○**手向けり** 「手向(たむ)けけり」。「手向く」は、霊前に供えること。「魂祭舟より酒を手向けり 亀洞」(『あら野』巻八)「Tamuqe, uru, eta. ……Chatô, fana, côuo tamuquru.」(『日葡辞書』)。○**はちす** 「蓮(はちす)」。「はす」に同じ。スイレン科の多年生水草。インド・中国等の原産で、日本へは古く中国から渡来した。高さ一、二メートル、根茎は地中を這い、節の多い塊根を作る。長く水上に出た葉柄に、とげの散生した扁円形の大きな葉をつけ、夏には花茎の頂に約二十個の花弁を持つ美しい大きな花を開く。極楽では仏菩薩がこれを象った台座(蓮台)に座しており、仏教には縁の深い草花である。実の入った花托が蜂の巣に似ているところから「蜂巣(はちす)」の名が出た。季語としては夏。「吹ちりて水のうへゆく蓮かな 岐阜秀正」(『あら野』巻三)

「Fachisu.」(『日葡辞書』)。

大意 御霊前には芋の葉をお供えしましたよ。芋は蓮の葉と形が似ていますから。

考 仙風の歿年は明らかでない。延宝末から貞享末までの吟を集めたという『続深川』に見えるところから、『笈の小文』の旅に出る前、貞享四年秋以前の句として、ここに配しておく。

芋は勿論里芋である。蓮の葉に形が似ているから取り敢えず芋の葉を供えるといって、俳諧的素材によって飄逸な味を出している。極楽に生まれて蓮台に乗るようにという祈りを籠めつつ、最初に「手向けり」と打ち出して追悼の意をあらわし、杉風同様気の置けない間柄の仙風への悼句らしいおかしみを盛ったのである。芋の葉は初秋の季語とされており、仙風の死んだのは七月頃だったのかも知れない。

毒海長老我草の戸にして身まかり侍るを葬りて

310 何ごともまねき果たるすゝき哉　(続深川)

秋季(すゝき)。

語釈 ○**毒海長老** 「ドクカイチヤウラウ」。出自経歴等未詳。「長老」とあるから、禅寺の住職かと思われる。「長老(ちやうらう)になるや綸旨(りんし)の梅法師　作者不知」(『毛吹草』巻五)「Chŏrŏ.」(『日葡辞書』)。○**我草の戸にして** 「我(わ)が草(くさ)の戸(と)にして」。私の草庵で。「草の戸」は、草庵というに同じ。深川の芭蕉庵を指す。「くさの戸ぼそ」(Ⅱ *305*)参照。「にして」は「にて」と同じ。「いとゞ神さび物しづかなる傍に、住捨し草の戸有」(「幻住庵記」)「仏此ノ上ニシテ滅度シ給ヘリ」(『今昔物語集』巻三ノ三十五)「Cusanoto.」(『日葡辞書』)。○**身まかり侍るを葬りて** 「身罷(みまか)り侍(はべ)るを葬(はうむ)りて」。「身まかる」は、死ぬこと。「旅にてみまかりける人を」(『あら野』巻七、鼠弾発句「あは雪の」前書)「Mimacari, u.」「Xigaiuo fômuru.」(『日葡辞書』)。○**何ごとも** 「何事(なにごと)も」。「何事も昔に替りて」(『野ざらし紀行』)「Nanigoto.」(『日葡辞書』)。○**まねき果たるすゝき** 「招(まね)き果(は)てたる薄(すゝき)」。穂の出た薄が風になびくさまを擬人化して「招く」

という。ここは当季の語として「すゝき」（秋）を採り上げ、それがもう招くこともないといって毒海長老の死の象徴としたのである。「初月に外里の娵の新通ひ　知足　薄はまねく荊袖引　芭蕉」（『千鳥掛』）「Maneqi, u, eita.」「Susuqi.」（『日葡辞書』）。

大意 何事も皆招き終えて、風に揺れることもなくなった薄のような御最期であることよ。

考 毒海という坊さんが芭蕉とどういう縁故があったかは分らぬが、芭蕉庵でなくなったというのは、たまたま訪れていて急死したということかも知れない。『続深川』が唯一の出典なので、貞享四年秋以前の作と考えられる。

隠閑の草庵も、そこで人が死んだとあっては、葬いを終えるまであわただしさを免れなかったろう。それも一段落してほっと一息つき、改めて長老亡き跡の空虚感、亡人を偲ぶ思いに浸っているのである。長老の死を当季の薄で象徴しており、その空漠とした寂しさが何がなし人の胸を打つ。もとより長老が薄に招かれて死んだというのではなく、薄その物が「死」の象徴なのである。

人に米をもらふて

311　よの中は稲かる頃か草の庵　（続深川）　なも仏

秋季（稲かる）。

語釈 ○**米をもらふて**「米を貰うて」。「ふ」はウ音便の変則表記である。（I *131*、*252*）参照。○**よの中**「世の中」。作者自身の隠者としての境涯に対して、一般世間、俗世間をいう。「むさぼりに帛着てありく世の中は　冬文　莚二枚もひろき我菴　越人」（『はるの日』）「Yononaca. i, Xejŏ.」（『日葡辞書』）。○**稲かる頃か**「稲刈る頃か」。稲を刈って取り入れをする時季なんだなあ。「か」は、詠嘆。「稲刈の其田の端やこき所　許六」（『韻塞』八月）「Ineuo caru.」（『日葡辞書』）。○**草の庵**「草の庵」。草葺きの粗末な家。「よの中」と対置して、芭蕉庵の生活をいう。「もらぬほど今日は時雨よ草の庵　斜嶺」（『炭俵』下）「Iuo. i, Iuori.」（『日葡辞

書』）。

大意 世間は稲刈りをして新米を取り入れる時季なんだなあ。それとは凡そ関わりのない我が草庵生活だ。

考 『続深川』所収の句で、貞享四年秋以前の作である。芭蕉庵の生活が門人達のもたらす米などによって支えられていたことは、「めでたき人の」（Ⅰ252）の句の条で述べた通りだが、「人に米をもらふて」という前書にも、そうした情況はあらわれている。門人に新米を貰って、「そうだ、もう取り入れの頃だった」と気づく心の揺ぎが、「よの中は稲かる頃か」の詠嘆なのだ。そして自らの「草の庵」の境涯がこれに対置される。この方は生活など世間の実際には何等関わりのない風月三昧の生活である。その閑情と共に、自ら生活の事にたずさわらない無為徒食への自省を噛みしめているような調子がある。この句の持つ静かな沈んだ気分は、其処から生まれて来るのであろう。自分の境涯を得意がって「よの中」を見下しているのではない。そういう厭味から、この句の境地は遥かに離れている。

十月十一日餞別會

312　旅人と我名よばれん初霽（続虚栗）

真蹟画賛・真蹟懐紙・笈の小文・真蹟自画賛・真蹟色紙・泊船集・冬かつら・三冊子・夏の月・蕉翁句集・千鳥掛・嚢虫庵小集

冬季（初霽）。

語釈 **○餞別会** 「センベックワイ」。旅立つ人を送るはなむけの俳席。貞享四年十月、『笈の小文』の旅に出る芭蕉への餞別として、江戸堀江町（現中央区日本橋小船町、小網町辺）の其角亭で催された。「ある人の餞別に」（『あら野』巻七、除風発句「ほとゝぎす」前書）「深川の会に」（『炭俵』上、利牛発句「長閑さや」前書）「Vtano quai. Tçuzzumino quai.」（『日葡辞書』）。**○旅人** 「タビビト」。「見やるさえ旅人さむし石部山大津尼智月」（『猿蓑』巻一）「Tabibito, i, Reojin.」（『日葡辞書』）。**○我名よばれん** 「我が名呼ばれん」。人から我が名を呼び掛けられたい、というのである。「金鍔と人によばるゝ身のやすさ　芭蕉　あつ風呂ずきの宵〳〵の月　凡兆」（『猿蓑』巻五）「Yobi, u, ôda.」（『日葡辞書』）。**○初霽** 「ハツシグレ」。暫く降っては止む初冬の「しぐれ」の、その年はじめての

もの。「しぐれ」に「霽」の字を宛てる例は既出（Ⅰ128）。「時雨……初時雨としても、月に結びても冬也」（『御傘』）「一夜きて三井寺うたへ初しぐれ　尚白」（『あら野』巻五）。

大意　さあ、これから初時雨に濡れて旅立って、道々「お泊りあれや旅人」と我が名を呼ばれる身に、早くなりたいものだ。

考　「はやこなたへといふ露の、むぐらの宿はうれたくとも、袖かたしきて御とまりあれやたび人」（真蹟画賛・真蹟懐紙・千鳥掛・蓑虫庵小集）「故郷に趣る道中の吟」（『夏の月』）「江戸ヲ出ルとて」（『蕉翁句集』）等の前書が見える。このうち、「はやこなたへと」云々の前書は謡曲「梅枝」の一節を採って、謡い方を指示する譜点まで施したものであるが、本によってそれぞれ小異がある。芭蕉の旅姿を描いた熱田蕉門東藤の画に芭蕉の賛した堀尾氏蔵の著名な品と、平田氏蔵の真蹟懐紙は、何れも貞享末期、旅行当時の染筆と思われるのに対して、柿衛文庫蔵の自画賛と芭蕉翁記念館蔵の真蹟色紙は、筆蹟からして元禄三、四年頃の揮毫と推定されている。
『続虚栗』の前書によって、この句が西上の旅の餞別会で詠まれたことが明らかになるが、この会は『笈の小文』に、

　神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、
　　旅人と我名よばれん初しぐれ
　　又山茶花を宿〳〵にして
　岩城の住長太郎と云もの、此脇を付て、其角亭におゐて関送りせんともてなす。

と書かれている会に当り、『続虚栗』には発句・脇以下、芭蕉・由之・其角・枳風・文鱗・仙化・魚児・観水・全峰・嵐雪・挙白・執筆の顔触れによる世吉一巻が収められた。脇の作者由之が『笈の小文』にいう「長太郎」であって、岩城国小奈浜（現福島県いわき市）の人、井手氏、領主内藤家の家人と伝えられる。これよりさき秋のうちには、

内藤露沾の主催する餞別会があったが、この十月十一日の会は、場所こそ其角亭だったものの、内藤家に仕える由之の発起にかかる会なのであった。江戸に於けるこの吟が評判を呼んだか、各地で種々の揮毫を残し、後年に及んでも折々染筆することがあったのである。

土芳の『三冊子』にはこの句について、

此句は、師武江に旅出の日の吟也。心のいさましきを句のふりに出して、呼れん初時雨とはいゝしと也。いさましきこゝろを顕す所、謡のはしを前書にして、書のごとく章さして門人に送られし也。一風情有もの也。

此珍しき作意に出る師の心の出所を味ふべし。（赤雙紙）

と述べている。前掲の『笈の小文』の文では、時雨のわびしさと、その中を旅する人の行方なき心細さが強調されており、それはそれで和歌連歌以来「しぐれ」の語によってあらわされて来た季節感や無常感に叶うものであるが、「心のいさましきを句のふり（姿）にふり出」す意図が作者の胸裡にあったとすると、単なる「時雨の侘び」だけでは片づかない。つまり芭蕉はこの時、時雨に濡れて行方なく漂泊するような旅をしたいと、謂わば勢い立っていたのである。侘びた旅を楽しもうと心はずむ思いで居たわけで、それが「よばれん初霽」という句姿に振り出されたのであった。この時芭蕉の頭にあったのは、業平・能因・西行・宗祇ら代々の歌人・連歌師の旅姿であり、また謡曲に屢登場する廻国のワキ僧の姿であったろう。自分も時雨に濡れてそのような旅をしたい。そういう弾んだ気持が、この句には託されているのだ。だから謡の詞の前書を付したのは旅に出掛けてからのことではあったが、謡がかりの発想は最初からあったものと思われる。「旅人と我名よばれん」というところに「気力充実して名乗座に立った能のワキ僧に、わが身を擬している口吻（こうふん）があり、そのわれと名のり出たところに、えもいわぬ風狂味がある」（堀信夫氏『古典文学全集・松尾芭蕉集』）という見方に同感を禁じ得ない。「お泊りあれや旅人」と声を掛けられたいと興じているのである。同じ西上の長旅でも、「野ざらしを心に」出掛けた前回の旅とは、随分ちがった余裕が感じられ、この気分は今

回の旅全体を通じて看取されるものでもあるようだ。ただ、それを井本農一博士のように「心のゆるみ」（『鑑賞日本古典文学・芭蕉』）と見るべきかどうかは、一概に言えないのではなかろうか。旅に出て間もなく熱田で書かれた鳴海の寂照（知足）宛書簡に「はいかい急に風俗改り候様に心せかれ」「風俗そろ〳〵改り候はゞ、猶露命しばらくの形見共思召可被下候」（霜月廿四日付）という文言が見出されるからである。成果の程は別としても、芭蕉には旅の当初から、俳風変革の強い意向があったことが窺われる。

寒夜

313 瓶破るゝよるの氷の寐覺哉（真蹟懐紙）

蕉翁句集草稿・蕉翁句集・筑藻橋

冬季（氷）。

語釈 ○寒夜 「カンヤ」。もとより冬の夜の趣である。「我を厭ふ隣家寒夜に鍋を鳴ラす」（『蕪村句集』）「Canya, Samui yo.」（『日葡辞書』）。○瓶破るゝ 「瓶破るゝ」。台所などにある水甕のひび割れするさまであろう。花瓶と見る説もあるが、「瓶」という字にこだわる必要はない。「一里の炭売はいつ冬籠り　一井　かけひの先の瓶氷る朝　鼠弾」（『あら野』員外）「石臼の破ておかしやつはの花　胡及」（『あら野』巻五）「Came.」「Tçubo, chauanga vaururu.」（『日葡辞書』）。○よるの氷 「夜の氷」。「氷」は下の「寐覚」にもかかる。○寐覚 「ネザメ」。既出（Ⅱ265）。

大意 水甕の水が氷って甕のひび割れる音で目ざめると、氷のような夜の寒気が身を刺すことだ。

考 『筑藻橋』（韋吹撰、享保十三年刊）には「寒夜ノ吟」と前書がある。『続蕉影余韻』所収の真蹟懐紙には、「古池」や「蓑虫」の句等、貞享三、四年頃江戸での作と思われる八句が列記されており、貞享四年冬に上方への旅に出るまでには成っていた句と推定される。筆蹟の特徴もこの時期のものと見て差支えない。『蕉翁句集草稿』には「此句短尺

にあり」とあり、短冊に揮毫したものもあったのである。『一葉集』に初五が「瓶われる」とあるのは、真蹟がある以上、問題になるまい。

夜の寒気に目がさめて寝られずにいるうちに、甕のひび割れる音を聞いたと解する説が多いが、ひび割れる音に目がさめて寒気を強く感ずると見た方が良いのではあるまいか。

氷の張りつむ(ママ)時は水が膨脹する為め水を入れた器の割れる事がある。其の音を夜中に聞いた時の句と見えて、瓶のわれる音の為めに驚かされ寝覚めしたといふ意である。（内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』）

とある説に全面的に従いたい。「よるの氷の寐覚」という「氷」を上下に働かせた巧みな表現によって、寒気のきびしさと侘寝の寂寥感を双つながらよく言い取っている。夜のしじまに響く物音を焦点にしたところは、「五月雨や桶の輪きるゝ夜の声」（Ⅱ294）の句を思わせよう。

寺嶋氏業言亭に飛鳥井黄門の御詠草をかけ侍し歌に和す

314　京まではまだ半天や雪の雲　（知足筆書留）

真蹟懐紙・如行子・笈の小文・蕉翁句集・千鳥掛

冬季（雪）。

語釈　○**寺嶋氏業言亭**　「テラジマシボクゲンテイ」。寺嶋業言は名は安規、通称伊右衛門。尾張国鳴海（現名古屋市緑区）の本陣で、屋号を桝屋と称した。下里知足の叔父に当る。元文元（一七三六）年九月六日歿、享年九十一。「亭」は、その家を指す。「三月六日野水亭にて」（『はるの日』、旦藁発句「なら坂や」前書）「Tei.」（『日葡辞書』）。○**飛鳥井黄門**　「アスカヰクワウモン」。飛鳥井雅章(まさあき)のこと。和歌・蹴鞠・書道の家として名高い公卿の家に生まれ、中納言・権大納言・武家伝奏を勤めた。延宝七（一六七九）年十月十二日歿、享年六十九。「黄門」は「黄門侍郎」の略で、中納言の唐名。「俳諧といふは黄門定家卿の言利口也」（『三冊子』白雙紙）。○

御詠草をかけ侍し　「御詠草を掛け侍りし」。飛鳥井雅章の書いた和歌の詠草を掛軸に仕立てて對言亭の床の間に掛けてあったのである。「その心をしるは、師の詠草の跡を追ひ、よく見知て」（『三冊子』赤雙紙）「本間主馬が宅に、骸骨どもの笛鼓をかまへて能する処を画て、舞台の壁にかけたり」（『続猿蓑』下、芭蕉発句「稲づまや」前書）「Contas, goyei nadouo caquru.」（『日葡辞書』）。○**和す**　ここは雅章の和歌と同じような趣の句を作ること。もとは他と同じ韻で漢詩を作ることをいった語である。既出（Ⅰ*161*前書）。○**半天**　「ナカゾラ」。出発点から到着地までの途中。ここでは「道の半」といった感じの用法になっており、空中の意にも働いて「雪の雲」を引き出している。「やすむべきやどをおもへばなかぞらのたびもなににかくるしかるべき」（『山家集』中）「Nacazorano cumo.」（『日葡辞書』）。○**雪の雲**　雪になりそうな雲の様子。「此雪の雲と云は、則雪気の雲の義也」（信天翁『笈の底』）。

大意　京まではまだ道の半だなあ。空を仰ぐと雪もよいの雲が重く垂れこめている。

考　「なるみの駅にとまりけるに、飛鳥井雅章の君都をへだつるとよみて、あるじに給はらせけるを見て」（真蹟懐紙）「貞享四年卯十一月五日、鳴海寺島氏對言に飛鳥井亜相の御詠草のかゝり侍りし哥を和す」（『如行子』）「鳴海の駅に泊りて、飛鳥井雅章の君、都を隔とよみて給はらせけるを見て」（『蕉翁句集』）等の前書の外、池田文庫蔵昭和四十一年五月の展観目録所収の真蹟懐紙写真の前書には「なるみの駅にとまりけるに、飛鳥井雅章の君、都をへだつるとよみてあるじに給」とあることも報告されている。この懐紙の書風は貞享期、尾張滞在中の染筆かという（尾形仂氏「俳林逍遊」―栗山理一博士編『芭蕉・蕪村・一茶』―）が、近時『芭蕉全図譜』に紹介された真蹟懐紙と或いは同じ物かも知れない。十月二十五日に江戸を立った芭蕉は、十一月四日鳴海の下里知足亭に到着し、翌五日對言亭の俳席に臨んだ（『知足斎日々記』参照）。この時の歌仙発句が「京までは」の句であったことは、『如行子』（如行撰、貞享四年成）の前書によっても明らかで、歌仙全巻は『千鳥掛』（知足撰、正徳二年刊）に収められている。他の連衆は、對言・知足・如風・安信・自笑・重辰ら鳴海の人々であった。後年執筆の『笈の小文』にも、

飛鳥井雅章公の此宿にとまらせ給ひて、都も遠くなるみがたはるけき海を中にへだてゝと詠じ給ひけるを、自か

ゝせたまひてたまはりけるよしをかたるに

として発句が録せられている。

右に引かれた雅章の和歌の初五を、何丸の『句解大成』には「うちひさす」と伝えるが、『雅章卿詠歌』には「けふは猶」とあるという。後者が正しいのであろう。その前書に「寛文二年卯月八日、としの初の勅使として東へ下向し侍りけるに」とあるので、雅章が鳴海の本陣に泊ったのは、貞享四年より二十五年も前だったことが知られる。ともあれ芭蕉はこの雅章の和歌を契機として、それに唱和しようとしたのであった。雅章の歌が京から東下した折に、都が段々遠ざかって行く趣を詠んだのに対して、芭蕉は西上の途にあって都がなお遥かなことを言ったのは俳意の存するところ。業言がもてなしに披露した雅章の歌に唱和することは、即ち亭主への挨拶になるわけである。しかし、この句では「まだ半天や」という重々しい詠嘆や、「雪の雲」の陰鬱な印象の為に、そうした挨拶の枠を超えて重く暗い旅愁が強く表に出る結果になった。旅の侘びが滲み出たような、体験の重さが感ぜられる。

ね覺は松風の里、よびつぎは夜明けてから、かさ寺はゆきの降日

315　ほしざきの闇をみよとや啼ちどり　（真蹟自画賛）

真蹟懐紙・真蹟短冊・歌仙懐紙・如行子・あら野・笈の小文・皺筥物語・笈日記・泊船集・宇陀法師・千網集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・千鳥掛・小太郎・伊良胡崎・あゆちがた

冬季（ちどり）。

語釈　**○ね覚は松風の里**　「寝覚は松風の里」。「松風の里」は、里村紹巴の『富士見道記』（永禄十年）に「舷を叩きて唄ひかはし、大高に入る。銘城にて唐人伝詩を贈りし所なり。城は松風の里、麓は呼つぎの浜なり」とあるのによれば、今の名古屋市緑区大高町城山のあたりか。熱田区伝馬町四丁目の正覚寺辺を擬する説もある。寝覚にはさわやかな風を思わせる松風の里が良い、という意。右に引いた紹巴の紀行には、「寝覚の里の上、山崎にて」ともあり、「寝覚の里」という所も、今の南区山崎町あたりにあった。

今は緑区大高町字中の島に、明治の末に建てられた「寝覚の里」の石碑がある由で、その名所の名を文中に採り込んで綾としているのである。○**よびつぎは夜明てから**　「呼続は夜明けてから」。「よびつぎ」は、前掲紹巴の紀行によれば、松風の里の丘の下の浜であるが、南区に呼続町の名も残っている。この文は「よびつぎ」に「よびづき」（宵月）を掛け、呼続の浜は宵月ならぬ夜が明けてからの景色が良い、という意。「名月は夜明るきはもなかりけり　越人」（『あら野』巻一）「Yoga aquru.」（『日葡辞書』）。○**かさ寺はゆきの降日**　「笠寺は雪の降る日」。「かさ寺」は既出（Ⅱ*274*）。笠寺は、笠に縁ある雪の降る日が良い、というのである。○**ほしざきの闇**　「星崎の闇」。今の名古屋市南区から緑区にかけての旧愛知郡の海浜は、星崎七ヶ村と呼ばれ、古くからの塩の産地、千鳥の名所であった。今、南区に星崎の地名が残る。「星」と「闇」の対照に興じた表現である。○**みよとや**　「見よとや」。「や」は、疑問に詠嘆を含んだ切字。○**啼ちどり**　「啼く千鳥」。「ちどり」は既出（Ⅰ*208*）。

大意　名所の浜辺で鳴く千鳥は、星崎の闇夜の趣を見よとでもいうのかなあ。

考　「星崎の浦」（真蹟懐紙）「貞享四年十一月七日／歌仙之俳諧」（歌仙懐紙）「鳴海にとまりて」（『笈の小文』）「おなじ比鳴海にわたりて」（『笈日記』）「星崎」（『泊船集』）「鳴海のむまやにて」（『千網集』）「星崎のうら」（『蕉翁句集』）「笠寺」（『伊良胡崎』）等の前書があり、『如行子』『皺筥物語』の前書は、『俳人真蹟全集』等に収められた自画賛と同文で、それに基づいたことが知られる。真蹟短冊は『蕉翁遺芳』所収。その他、『芭蕉・蕪村・一茶』に尾形仂氏の報告された昭和四十一年五月の池田文庫展観目録に見える懐紙には「星崎の浦」と前書があるという。「京までは」の句の条参照。『知足斎日々記』によると、十一月七日には本陣寺島氏の分家根古屋加右衛門（嘉右衛門。俳号安信）方で俳席が開かれ、この星崎の句を発句として歌仙一巻が成った。連衆は芭蕉・安信・自笑・知足・業言・如風・重辰らであって、成立の年時に問題はない。『笈の小文』では「京までは」の句の前に掲げられているが、芭蕉としては鳴海での句を順不同にまとめたまでで、虚構という程の意識はなかったであろう。支考の『笈日記』が貞享元年冬の「海暮れて」（Ⅰ*219*）の句の次にこの句を出して「おなじ比」としたのは全くの誤りで、『泊船集』に「星崎や闇を見よとてともきこえぬ」と付記したのも、その根拠を知らない。

前書を伴なった自画賛は今も知足の後裔の家に伝蔵されており、句の理解に資する所が多い。この前書は付近の名所の名を綾なした文で、「星崎」とはいっても、ここは星さえない闇夜が良い。あの千鳥もその闇を見よと鳴いているのかと、句へ続いて行くからである。筆蹟は典型的な貞享後期の特色を示しており、句を成した当時知足の家に残したものと思われる。山本健吉氏が句の動機について次のように見ておられるのは注目に値しよう。

露伴は「昔時此処に星落ちて石と化すとも云ひ、熱田の神を近き辺に祠りけるに天の七星光を放ちて降りしとも云ふ。これは落星湾の故事を附会せるものなれど、此事にもとづきて星崎の闇と興じ、闇といひて見よと云へるところ、俳諧の小技のみ」（評釈曠野）と言っている。「俳諧の小技」とまでは思わないが、「星崎」の地名にまつわる言い伝えを知って置くことはいい。なぜなら、この句は地名を詠みこんだ効果を発揮しているからである。……おそらくこの伝説をも耳にしたということが、地名に対する芭蕉の興趣のわかしかたに、微妙に滲透していると言った方が、よいのではないか。芭蕉が句に地名を詠みこむときは、単なる固有名詞としてでなく、そこにまつわる歴史や伝承に対する回想を伴なっているのが常である。これは彼の国土への深い愛情を物語るとともに、言葉のニュアンスの複合的要素に対する敏感さをも証明するものである。堂上歌人の歌枕に対する紋切型の反応と対照的であり、歌枕に対する新しい態度の確立と言ってもよい。……この当日は闇夜であり、海を見はらす佳景があいにく見えないことを客のために惜しむ主人に対して、闇夜の千鳥を詠みこんで、かえって慰めているような趣きがある。闇夜の千鳥だから、もちろん姿は見えないのであって、闇のなかに啼く声だけが実体あるものとして捉えられるのである。「海暮れて鴨の声ほのかに白し」にやや似て、その句の純粋に感覚的な把握に対し、これは「闇を見よとや」という主情的な把握によって、句の情趣と曲節とを加えている。「星崎の」でいったん小休止を置いて、「見よとや」には休止を置かず、つづけ気味に読み下した方が、俳句の味わい方としては自然である。……「とや」はあらわな断定を避け、疑問を含みながら、より自然に結句につながることによって、千

鳥の情趣に、より深く滲透していると言えそうである。（『芭蕉その鑑賞と批評』）
この山本氏の説によって、この句の発想と内容及び鑑賞は略々尽されている。ただ味わい方の問題として、「見よとや」に休止を置かずに読み下した方が自然といわれたけれども、この「や」は一応切字なのである。分析的に言うと、この句は「啼く千鳥は星崎の闇を見よとや」を倒置した形であって、一方また「や」が芭蕉得意の措辞として纏綿たる余韻を引く為に、其処ですっぱりとは切れないで下へかかって行く感じを持つのだ。それがこの句の情趣を引き立てるのに与って力あるものになっているのである。内容の面では、夙く近世期の『笈の底』に、
……闇夜を千鳥は歌にも哀なる事に詠み来る。是を以て闇の一字を手柄とする所也。何れにも寒夜の天、霜満たる風情、此闇を見よと言詞に顕れたり。名誉と云べし。
と指摘されているように、「うば玉の夜のふけゆけばひさ木おふるきよきかはらに千鳥なくなり」（『新古今集』巻六、赤人。『万葉集』巻六の原歌は「ぬばたまの……千鳥数鳴く」）「思ひかねいもがりゆけば冬の夜の河風さむみちどりなくなり」（『拾遺集』巻四、貫之）等の名歌の伝統を踏まえつつ、地名の縁から「闇」を出して俳諧にしたところが眼目であろう。この「闇」は、深沈として旅愁をかき立てるものを持ってはいるが、この場合余り深読みして大袈裟には取りたくない。やはり「興」を中心にした軽い味の句とするのが本筋であろう。

316 寒けれど二人寐る夜ぞ頼もしき　（笈の小文）

よしだに泊る夜
寒けれどふたり旅ねぞたのもしき　（真蹟懐紙）
此時は越人もぐせられしとかや

如行子・あら野・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・合歓のいびき

寒けれど二人旅ねはおもしろき　（笈日記）

冬季（寒し）。

語釈　**○二人寐る夜ぞ**　「二人寐る夜ぞ」。この「二人」は副詞的用法である。「寐る」は、下二段動詞の連体形。「ぞ」は係助詞。「菊ある垣によい子見てをく　旦藁　表町ゆづりて二人髪剃ん　越人」（『はるの日』）「**Futari.**」（『日葡辞書』）。**○頼もしき**　「頼もしき」。心丈夫な感じをいう。「ぞ」の結びとしての連体形終止である。「鳰の浮巣の流とゞまるべき芦の一本の陰たのもしく」（「幻住庵記」）「**Tanomoxij.**」（『日葡辞書』）。

大意　冬のこととて寒いけれど、こうして二人で寝る夜は、心丈夫な感じがする。

考　「参川の国いらごといふ所に杜国といひし此道のすき人有。翁むかしよりむつまじくかたり給ひけるゆへ、かの所たづね玉ふ道すがら、霜月十日の夜よし田にて、名古屋の越人を伴ひければ」（『如行子』）「越人と吉田の駅にて」（『あら野』『蕉翁句集』）等の前書があり、『笈の小文』にも、

三川の国保美といふ処に杜国がしのびて有けるをとぶらはむと、まづ越人に消息して、鳴海より跡ざまに二十五里尋かへりて、其夜吉田に泊る。

としてこの発句を出して、『如行子』の前書と揆を一にしている。名古屋の蕉門坪井杜国は貞享元年の『冬の日』の連衆として名を顕わし、その才を芭蕉に愛されたことは、「白げしに」（I 242）の句の存することによっても明らかである。翌二年空米売買の咎を蒙って死罪に処せられんとしたのを、尾張藩主の格別の慈悲によって八月十九日領内追放の処分が定まった（拙著『新修芭蕉伝記考説』行実篇参照）。以来杜国は名古屋を去り、渥美半島の伊良湖崎に近い三河国保美（今の渥美郡渥美町保美）に蟄居していたのである。今度の旅で先ず鳴海の知足亭に着いた芭蕉は、十一月八日に宮（熱田）に赴き、恐らくは其処で名古屋の越智越人と落ち合って、九日夜には彼を伴なって再び知足の家に戻った。そして翌十日朝越人と共に三河の杜国の許に出発したのである。この時のことを三十年の後、越人はその撰にか

かる『鶡尾冠』（享保二年刊）に於いて回顧して左のように記している。

> 杜国子は予が覊客たるをあはれみ、旦暮懇情を尽さる。……彼は富り、我は貧なり。与へて報を不レ思、同志断金の情不レ浅。さらに予が俳諧の手を引、泣み笑みせしも去て三紀に近し。……彼人不幸に沈み、旧里を辞せしを、芭蕉老人江府に聞キ、甚憂て踏レ鞋ヲ鳴海に来り、予に消息して其道路ヲ問フ。先登して枯藤ヲ引、杜国が草堂に至り、三人焼レ葉ヲ夜を明し、同ク馬を並べて伊良古崎に逍遥せしも、浮雲あとなく、流水もとの水にあらず。
> ……

これによって越人と杜国との関係や、この時芭蕉が越人を誘ったわけを知ることが出来る。越人はその号の通り北越の出身と思われるが、名古屋へ来て染物屋を営んでいた。富裕な米問屋の主人だった杜国と境遇は随分ちがうけれども、ウマが合うところがあったらしく、生活の上でも俳諧の道でも、越人は右にいう如く杜国の世話になって、親しく交わっていたのである。芭蕉も愛弟子が事に座して故郷を追放されたことを江戸で聞き知って、その不幸な身の上を心配し、西上の旅の序でに訪れて慰めようとしたのであるが、越人を同行させたのは、一つには道案内の為、且つは名古屋で親しかった友を連れて行って、失意の人の気持を引き立てようとする親心であったろう。この時まで芭蕉と越人の交遊を裏付ける資料はないけれども、こうした経緯や、この発句の持つ親しげな気分は、野ざらしの旅の頃から二人が昵懇だったことを思わせる。「寒けれど」の句が鳴海を出発した日の十日夜の作であることは、当時の記録として信ずべき『如行子』の前書に見え、『笈の小文』の「其夜吉田に泊る」も出立当夜の意であるから、成立の時処に問題はない。吉田は今の豊橋である。二人は翌十一日には杜国の家に着いているから、二日で二十五里を歩くかなりの強行軍だったわけである。

森川昭氏が『連歌俳諧研究』三十七号に紹介された鳴海の加藤静枝氏蔵真蹟懐紙は、嘗て知足の後裔に蔵せられていた品で、知足の孫蝶羅が明和六（一七六九）年『合歓のいびき』の巻頭に摸刻したもの。伊良湖への旅での芭蕉・越

人・野仁（杜国）の句が録せられており、貞享四年当時の染筆と思われる。従って成立当初中七が「ふたり旅ねぞ」だったことは疑いなく、その句形で『あら野』（荷兮撰、元禄二年刊）にも収められた。問題は『笈の小文』の句形「二人寐る夜ぞ」との関係である。この表現に関しては、

いその神といふてらにまうでゝ、日のくれにければ、夜あけてまかりかへらむとて、とゞまりて、この寺に遍昭侍りと人のつげ侍ければ、ものいひ心見むとて、いひ侍ける

小野小町

いはのうへに旅ねをすればいとさむし苔の衣を我にかさなん

返し

遍　昭

世をそむく苔の衣はたゞひとへかさねばうとしいざ二人ねん（『後撰集』巻十七。『大和物語』百六十八段にも同趣の説話が見える）

という古い贈答歌の影響が指摘されており、何れの句形にせよその点は否定し難い。当夜二人の間でそれが話題になったかどうかは兎も角、芭蕉は明らかにこれらの古歌の表現を意識していると思う。考えて見れば、江戸から鳴海までは一人旅であった。ここではじめて気の置けない豪放な性格の越人という同行者を得たのである。そういう体験と古歌とを重ね合わせたのが「ふたり旅ねぞ」であったろう。しかし「旅ね」は概念化された言葉であって、芭蕉にして見ればもっと当夜の体験に直結した表現が欲しかったに違いない。そこで後年に至って案じたのが「二人寐る夜ぞ」である。「二人寐る」には謂わば即物性があり、背景として遍昭の歌も連想される。加藤楸邨氏に従えば「動的でしっかり実感を把握した表現」（『芭蕉全句』）である。このように見れば、「二人寐る夜ぞ」が後案であることが納得出来よう。「頼もしき」には、明日は杜国に会えるという喜びも感ぜられる。同じ夜の越人の句は「こがらしに菅がさ立るたびね哉」（加藤氏蔵懐紙）だった。当夜は木枯が吹いて寒さが身にしみたことであろう。

『笈日記』の句形は孤立していて信じ難い。支考の杜撰な所伝と思われる。

泊船集・焦翁句集・三河国二葉松・伊良胡崎

旅宿

317 ご（ママ）を焼て手拭あぶる寒さ哉 （笈日記）

ごを焼て手拭あぶる氷哉 （如行子）

冬季（寒さ）。

語釈 ○**旅宿** 「リヨシュク」。旅の宿の様子を題材にしたことを示す前書。「憐ベシ千年ノ契ヲ旅宿一夜ノ夢ニ結ビ、生涯ノタノミヲ往還諸人ノ望ニカク」（『海道記』）「Reoxucu. Tabino yadori.」（『日葡辞書』）。○**ごを焼て** 「ご」は、松の枯れ落葉をいう美濃・尾張・三河地方の方言。掻き集めて燃料にする時に多く用いられる。『三河国二葉松』（知堯撰、元文五年刊）には「松葉を焼て」と表記されている。「焼て」は「焼きて」ともよめるが、当地の方言を取り込んでいることもあり、「焼いて」と音便によみたい。「不断たつ池鯉鮒の宿の木綿市　芭蕉　ごを抱へこむ土間のへつゝゐ　洒堂」（『深川』）。○**手拭あぶる** 「手拭炙る」。凍った手拭を火にあてて乾かすのである。「手拭」は古く「タナゴヒ」「テノゴヒ」の語があり、『日葡辞書』にも「Tenogoi.」のみあって、「テヌグヒ」は最も新しい語形である。この句の頃は「テノゴヒ」「テヌグヒ」が並び行われていたとおぼしく、西鶴の『男色大鑑』巻四ノ三に、「いつよりは首尾よくあふての別れに即座にあそばし、手水手拭に書残されし」という明らかな振仮名の例もあるので、ここでも「テヌグヒ」の訓みを採りたい。「雪や散る笠の下なる頭巾迄　杉風　刀の柄にこほる手拭　翁」（『継はし』）「いかに見よと難面うしをうつ霰　羽笠　樽火にあぶるかれはらの松　荷兮」（『冬の日』）「Fide monouo aburu.」（『日葡辞書』）。

大意 囲炉裏に枯松葉を焚いて凍った手拭をあぶると、寒さが身にしみることだ。

考 「吉田の内、下地にて」（『三河国二葉松』）「下地」（『伊良胡崎』）等の前書が見える。「下地」は豊橋の郊外旧下地村で、今は市域に入って下地町という所。『如行子』には十一月十日夜の「寒けれど」の句の後、十二日の句の前に出てお

り、「寒けれど」と同時の作か、遅くとも十一日朝の成立であろう。吉田では下地の旅宿に泊ったのかも知れない。下五の「氷哉」は初案か。

枯松葉を囲炉裏に焚いて凍った手拭を炙るさまで、辺地の安宿などの侘しい体が髣髴とする。当地の方言がこれ程有効に使われた例は稀であろう。これだけの句がどうして生前の集に見えず、『笈の小文』にも入らなかったのか不思議である。朝の洗面後の湿った手拭が凍りついたと見れば、寒さの程もしのばれて面白い。

古松葉はパッと燃え立ってたちまち火勢の衰えるもの。そこに炬燵（こたつ）などと違い、先を急ぐ旅の朝のあわただしい気配が感じられる。また「手拭あぶる」にも、身支度を急ぐ旅の余意がある。（堀信夫氏『古典文学全集・松尾芭蕉集』）

という鑑賞に同感する所以である。また、安東次男氏は、

手焙に一くべ、二くべして両手をかざすことを、「手拭あぶる」と云ったところが俳だ。実際は身の暖をとることが目的で、拡げ持ったのは（たとえそれが湿っていたとしても）事のついでに過ぎないが、旅人にとって手拭は、片時も手放せぬ、いわば掛替のない分身のようなものだ、ということを改て思出させる作りである。ならばこの中七は、いたわりのある、懐しい表現だろう。芭蕉も気がついて手拭をたねにしているらしいところが面白い。（『芭蕉発句新注』）

と見ておられる。

318　冬の日や馬上に氷る影法師　（笈の小文）

あま津なはて
さむき田や馬上にすくむ影法師　（真蹟懐紙）

——合歓のいびき

あまつ縄手を過るまで

冬の田の馬上にすくむ影法師　（如行子）

訪二杜國一紀行

すくみ行や馬上に氷る影法師　（笈日記）

――泊船集・焦翁句集・伊良胡崎

冬季（冬の日・氷る）。

語釈　**○冬の日**　この「日」は、下に「影法師」があるので、一日の意ではなく、日ざしの意でなければならない。「奥羽象潟の暑き日に面をこがし」（「幻住庵記」）。**○馬上に氷る影法師**　「影法師」は、地上に映る自分の影。ここは、馬に乗った自分の影が氷りついたようだというのである。「馬上」は、この時代「バシヤウ」と発音した。既出（Ⅰ188前書）。「影ぼうしたぶさ見送る朝月夜　伊賀卓袋」（『猿蓑』巻三）「Caguebôxi.」（『日葡辞書』）。

大意　冬の日が薄くさして如何にも寒々しい。地上に映る馬上の我が影は、さながら氷りついたようだ。

考　『如行子』には杜国訪問の記事の後にあって、帰途の作のように取れる。しかし伊良湖への旅の直後の染筆と思われる加藤氏蔵真蹟懐紙には、吉田での芭蕉・越人の発句を書いた後に記し、次には杜国の家に着いた後の句々を書いている。後年の『笈の小文』にも、「寒けれど」（Ⅱ316）の句の後に、

あま津縄手、田の中に細道ありて、海より吹上る風いと寒き所也。

としてこの句を出し、それから伊良湖崎出遊の事に及んでいるから、やはり往路の作で、十一月十一日に成ったものと推定される。種々の句形については、真蹟懐紙が最初の案であることは論がなく、『如行子』は第二案か。但し、この句形は切字が欲しく、「冬の田の」は「冬の田や」の誤写かも知れない。最初の「さむき田や」を、尾張帰着後間もなくの段階で「冬の田や」と案じ替えたのであろう。『笈の小文』の句形は、「寒けれど」の句の推敲過程によっても知られるように、元禄二年春の『あら野』刊行以後のもので、これが最終案である。ただこれに関しては、大礒

義雄氏の紹介された異本に「冬の田や馬上に氷る影法師」という句形になっていることも留意しなければならない。これは『如行子』と『笈の小文』定稿との中間案たる可能性がないではないが、やはり「冬の日」を「冬の田」と誤写したとすべきもののようで、そうならば『笈の小文』の異文として処理されるべく、句の推敲過程の考察上は大した問題にはなるまい。また、『笈日記』の句形は、『泊船集』や『蕉翁句集』に踏襲されてはいるものの、初五を「すくみ行や」とした形が何処から出たか、甚だ疑わしい。『笈日記』には『鹿嶋詣』の「萩原や一よはやどせ山の犬」（Ⅱ298）の句を「狼も一夜はやどせ芦の花」と誤った例があり、当面の句の場合もそうした類の杜撰から出た誤伝かと思われる。

「あま津縄手」は、今豊橋市内に「天津」の地名が残っており、渥美郡旧杉山村に属する地であったが、杉山村は町村合併で豊橋市と田原町に分割されてしまった。昔の吉田宿から天津まで約三里、天津の出端れから田原町の北境豊島の橋まで約一里ほどの間、渥美湾に沿う縄手道が天津縄手であって、海からの西風が甚だ寒いことは芭蕉の文に述べてある通り。潁原博士の『新講』によれば、地元には古くから「養子に行くか、天津の縄手を裸で飛ぶか」という諺があるそうである。

この句は真蹟懐紙や『如行子』に見える初案の段階では、明らかに田面に映る馬上の我が影を詠んだ句であった。ところが従来の諸注を見ると、定案の「影法師」を馬上で行く作者自身の姿そのものとする説があり、特に近来は殆んどが後者の説になっている。

此「馬上に氷る影法師」は氷つた田の上若くは地の上に映つた影法師を見てから、馬上の自身を影法師とするといふのでなく、寒さの為にすくんでゐる馬上の自身の姿を客観視して、夫を直に「馬上に氷る影法師」と云つたものだらうと思ふ。我々は、自分の影法師を眼前にしなくとも、自分も影法師だと感ずる事は屢々ある。（『芭蕉俳句研究』）

という小宮豊隆氏の説あたりに始まり、潁原博士も、

初案の如く「冬の田の」とあれば、実際田の上に落ちた影法師の寒さうな姿が想はれるが、「冬の日や」になると馬上の姿そのまゝが影法師として現はれて来る。薄い冬の日を斜に受けて、馬上に凍りついたやうな人の姿が、まことに寒々として影法師に見えるのである。寒さにすくんで居る自分の姿を、そのやうに客観視したところが面白い。（『新講』）

と見ておられ、また山本唯一博士は、「きえぬそとばにすご〱となく　荷兮／影法のあかつきさむく火を焼て　芭蕉」（『冬の日』）「蕣は踊みるらんはかなしと　其角／露よりきゆるかげぼしの影　破笠」（『続虚栗』）等の例を挙げて、影のようなぼんやりした人の姿、或いは痩せ細った人の姿を「影法師」と表現することを証しておられる（『芭蕉俳句ノート』）。しかし、こうした説はどうやら『笈日記』所載の句形の影響をかなり受けているような気がしてならない。

……「すくみ行くや」という形もあり、静かに読んでみると身に迫った響きの感ぜられるあたり、自分のすくみ上がって、氷りついたような姿そのものを客観視して、こう言ったものであろうとおもう。「すくむ」から「氷る」という把握に踏みこんでゆく過程が極めて関心をひく。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

薄氷を張った冬の田に落ちていよいよ寒むざむとした自分と馬との影法師を、初め強調しようとしたが、モチーフを純化し強化しようとして、冬の田の形象を切り捨て、薄曇ったにぶい光の冬の日を点出した。そして田とともに地上の影法師も消されて、実体そのものの寒むざむしさ、馬も一つに氷りついた姿を、ただちに「馬上に氷る影法師」と言った。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

これら何れも「すくみ行や」の句形を推敲過程のうちの重要なものとして扱っている。確かにこの句形では、「影法師」が人の姿という印象が強いけれども、前述した通り、この句形の信憑性は甚だ心許ない。真蹟懐紙や『如行子』の句形と『笈の小文』の形とを直結させれば、「田」の代りに「日」を、「すくむ」の代りに「氷る」を新たに案じて

来た消息が分り、而も基本的な句の構造には何等変化のないことが歴然と看取されるではないか。日ざしとしての「日」と「影法師」との密接な関係は言うまでもない。このような見地からすれば、

貞享四年という時代を考えると、やはり影法師は実際の影法師と解すべきであろう。実際の影法師ととっても、「氷る影法師」は当時としてはすこぶる新しいつかみ方であり、馬に乗ったわが影がそのまゝ氷りつきそうだと解しても、十分おもしろい句である。かえってこの方が古拙な素朴な味わいがあると思う。（『日本古典鑑賞講座・芭蕉』）

という井本農一博士の説が想起される。要するに、影法師を芭蕉自身の姿そのものと見るのは、正確を欠いた推敲過程の考察から生まれたもので、余り近代的過ぎる見方と言わざるを得ない。芭蕉は寒風に吹きさらされた縄手道を行く我が姿を、田面に映る影法師を以て描き、失意の境涯に沈む愛弟子を訪う侘びた旅の気分を「氷る」という主情的な表現に盛ったのであって、素朴というよりは、かなり巧みな佳作といってよい句であると思う。

319　梅つばき早咲ほめむ保美の里　（真蹟懐紙）

鎌倉海道・猫の耳・伊良胡崎

此里をほびといふ事は、むかし院のみかどのほめさせ玉ふ地なるによりてほう美といふよし、里人のかたり侍るを、いづれのふみに書とゞめたるともしらず侍れども、いともかしこく覚え侍るまゝに

冬季（梅、つばきの早咲）。

語釈　**○此里をほびといふ事は**　「此の里を保美と云ふ事は」。「ほび」は杜国の謫居の地で、今の愛知県渥美郡渥美町保美である。その地名の由来は、ということ。**○むかし院のみかどのほめさせ玉ふ地**　「昔院の帝の褒めさせ玉ふ地」。その昔上皇がお褒めに

なった土地、の意。「院のみかど」は、天皇の位を退かれた方をいい、「上皇」「おりゐの帝」と同じ。この上皇が誰を指すかは詳らかでない。「させ玉ふ」は最高の敬語。「玉」は宛字である。「御かどの御夢に、院の御かど御まへのみはしのもとにわたらせ給ひて」（『源氏物語』明石）「おかしげにほめて詠る月夜哉　一髪」（『あら野』巻二）「In.」「Micado.」「Fome, uru, eta.」。○**ほう美といふよし**「褒美といふ由」。「ほび」は「ほうび」の転だという地名起源説話なのである。「それは褒美の言葉にて、妙なる法と説かれたり」（謡曲「鵜飼」）「慈恵大師遷座執事法華八講の侍るよし」（『あら野』巻八、越人発句「散花の」前書）「Fôbi. Fome itçucuximu.」（『日葡辞書』）。○**里人のかたり侍るを**「里人の語り侍るを」。里の人が話してくれたのを。「里人」は、実際には杜国を指した語であろう。この「を」は、下の「覚え侍る」にかかる。「里人に尋ねばやと存じ候」（謡曲「御裳濯」）「Satobito.」。○**いづれのふみに書とゞめたるともしらず**「何れの書に書き留めたるとも知らず」。どういう書物にこの地名の由来が書き留められているとも知らない、の意。土地に伝えられた口碑なのである。「しらず是はいづれのところにして、乾坤の外なることを」（『ひさご』越人序）「このごろよむとてもてありくふみ、とりわすれて」（『かげろふ日記』上）「御随身近友が自讃とて七箇条書とゞめたる事あり」（『徒然草』二百三十八段）「Izzureno.」「Vtauo caqitodometa.」「Iêgouo xiranu.」（『日葡辞書』）。○**いともかしこく覚え侍るまゝに**「甚も恐こく覚え侍るまゝに」。大変恐れ多く（有り難く）思われましたので、の意。「かしこし」は、上皇がお褒めになったことに対して、恐れ多いと感ずる作者の心情で、それには有り難いという気持も含まれる。「まゝに」は、理由をあらわす語法。「勅なればいともかしこし鶯のやどはととはばいかゞこたへむ」（『拾遺集』巻九、紅梅の家主）「挙白何がしの名残も思ひ出てなつかしきまゝに」（『四季千句』、芭蕉発句「散らせぬ」前書）「Itomo.」「Mamani.」（『日葡辞書』）。○**梅つばき早咲ほめむ**「梅椿早咲き褒めむ」。「つばき」は我が国一帯に自生する常緑樹で、花を観賞する園芸品種も多い。梅と共に春のものであるが、その花の季に先立って冬の内に咲くのが「早咲」で、伊良湖辺の暖い気候が思われる。ここは何れも杜国の家の庭に植えられた樹の花であろう。「椿　雑也。花を結ては春也。たとひ花の字なくとも、花の心ある句-躰ならば春に成べし」（『御傘』）「椿花　伊勢椿　しら玉椿　つら〳〵椿　とびいり　咲わけ……つばきは。やちよもかはらぬ色をめで。玉椿といふを。玉によせて。琥珀珊瑚にもいひなす」（『山之井』）「深冬に開く物又多し。春に至て咲けるを正とす。早咲椿はすべて冬季也」（『滑稽雑談』）「何ぞと見れば露の白玉　はやざきをしたる椿の花の雨　重頼」（『犬子集』巻七）「Tçubaqi.」（『日葡辞書』）。

大意　この庭の梅や椿の早咲きを褒めよう。褒美に縁のある保美の里だから。

考 「三河の国に褒美の里と云所あり。其処に至りて里の名の面白ければ」（『鎌倉海道』）「三州ほびといふ所にて前書略之」（『猫の耳』）等の前書がある。豊橋の松坂重俊氏蔵の真蹟は、後述する伊良湖崎の鷹の句の初案が共に記されており、『伊良胡崎』（子礼撰、宝暦九年刊）に保美の人白梅下路喬蔵として掲げられた真蹟と同一の品と思われる。杜国の許に書き遺したものが保美に伝わっていたとおぼしく、松坂氏の手に移る前は、渥美町福江の井本家に所蔵されていたそうである。この真蹟前書は桃鏡の『芭蕉翁文集』（宝暦十一年刊）を始め、近世期の数種の板本に収められた。なお、『芭蕉句選』に中七が「はや咲つぼむ」とあるのは誤伝であろう。

杜国の家のある保美村の地名の由来を記し、其処に見られる早咲きの梅・椿を賞美するのは、そのまま杜国への挨拶になる。句は保美（褒美）の里だから褒めようといったまでの即興であるが、温暖な土地柄が思われ、久しぶりに会った杜国への温い思い遣りも感ぜられる。芭蕉は十二日には伊良湖崎に出遊しているので、十一日のうちに杜国亭に到着したのであった。

伊羅古に行道、越人酔て馬に乗る

320 ゆきや砂むまより落よ酒の酔　（真蹟懐紙）

合歓のいびき

冬季（ゆき）。

語釈 ○**伊羅古に行道**　「伊羅古に行く道」。「伊羅古」は渥美半島西端の岬一帯の地をいう。万葉以来の歌枕で、字はいろいろ宛てられる。杜国の家から伊羅古へ行く途中、の意。『笈の小文』には「保美村より伊良古崎へ壱里斗も有べし」と見える。「是を矢立の初として、行道なをすゝまず」（『おくのほそ道』）。○**越人**　「ヱッジン」。「寒けれど」（Ⅱ*316*）の句の条にも記した蕉門俳人。越智氏。通称十蔵。北越の出身で、名古屋に出て染物業を営んだ。貞享元年の『冬の日』の頃蕉門に入り、元禄元年には深川の芭蕉庵

で師と起居を共にする等、芭蕉の親愛を得た。しかし芭蕉晩年の軽みには批判的で、二十年ほど鳴かず飛ばずであったが、正徳五（一七一五）年俳壇に復帰し、支考との論争に往年の俤をしのばせた。元文四（一七三九）年以後歿、享年八十余。○酔て馬に乗る「酔うて馬に乗る」。『鶉尾冠』（越人撰、享保二年刊）下に見える越人の文に、この杜国訪問の旅を回顧して、「杜国が草堂に至り、三人焼ㇾ葉夜を明し、同ク馬を並べて伊良古崎に逍遥せしも、浮雲あとなく、流水もとの水にあらず」と述べており、この時三人は馬に乗って伊良湖へ向ったのであった。恐らくあたりの農家の飼馬にでも乗ったのであって、単なる駄賃馬に乗せてもらったということではあるまい。酒好きの越人は、出掛ける前から呑んで酔っていたのである。「輪をかけて馬乗通る柳かな　巴丈」（『続猿蓑』下）「Vmani noru.」（『日葡辞書』）。○ゆきや砂「雪や砂」。浜近い所なので、砂地に雪が交っているのである。「や」は列挙の意。「砂の小麦の痩てはらく　里東　西風にますほの小貝拾はせて　泥土」（『ひさご』）「Suna.」（『日葡辞書』）。○むまより落よ「馬より落ちよ」。「むま」は、語頭の唇音を発音に忠実に表記したもの。「落ちよ」は、もとより興じた表現である。「荷鞍うちかへりて馬より落ぬ」（『笈の小文』）。○酒の酔「酒の酔ひ」。「口すゝぐべき清水ながるゝ　越人　松風にたをれぬ程の酒の酔　羽笠」（『はるの日』）「Yeiuo susumuru.」（『日葡辞書』）。

大意　下は雪まじりの砂地だ。ひとつ馬から落ちて御覧。酒の酔いをさますによかろう。

考　芭蕉ら三人が伊良湖崎に出遊したのは、『如行子』によれば十一月十二日である（次の「鷹ひとつ」の句の条参照）。其処へ行く途中の即興吟として加藤静枝氏蔵の真蹟懐紙に見える。

『庭竈集』（越人撰、享保十三年刊）所収の越人に贈った芭蕉の文に、

尾張十蔵、越人と号す。……性酒をこのみ、酔和する時は平家をうたふ。

とあるように、越人は酒呑みであった。この日は雪が降ったので、一杯ひっかけて出掛けたのであろう。下は雪や砂でやわらかいから落ちても大丈夫というところに、いたわりの気持が見える。『合歓のいびき』の摸刻の手際が拙い為に、以前は「むまより落ちて」「むまより落そ」等ともよまれていたが、真蹟懐紙の写真（『連歌俳諧研究』三十七号）によれば、明らかに「落よ」である。鳴海の知足の後裔下郷学海の書いた『伊良虞紀行』（安永六年八月）に、

一かさ高き所は卯波江坂とて、むかし越人、翁にしたがひ、酔ふて馬にのられし時、雪や砂馬より落て酒の酔と
翁の口ずさみ給ふとなん。

とあるが、大礒義雄氏によると、「卯波江坂」は「宇津江坂」の誤聞で、これを下りたところに「江比間」の村があり、古く「酔馬」とも書いたという。すると、この句には地名に掛けた洒落があることが知られよう。今の渥美町江比間の地である。

321　鷹ひとつみ付てうれしいらご崎　（加藤氏蔵真蹟懐紙）

如行子・続の原・笈の小文・笈日記・泊船集・蕉翁句集・合歓のいびき

いらござきほどちかければ、見にゆき侍りて
いらご崎にる物もなし鷹の聲　（松坂氏蔵真蹟懐紙）

―伊良胡崎

冬季（鷹）。

語釈　**○鷹ひとつ**　「鷹一つ」。「鷹」はワシタカ科の猛禽をいい、種類が多い。「大鷹がりは冬也。たか狩とばかりも、鷹とばかりも皆冬也。小鷹は秋也。……かりばの事、……かり詞皆冬也」（『御傘』）「只鷹ト云イ、鷹狩ト云時ハ冬也。箸鷹ト云フハ鷹ノ総名也。……大鷹ハ日本ニ生ゼズ、朝鮮ヨリ来ル。夏ノ末ヨリ毛落テ、冬ニ至リ新毛生ヒト、ノフ。……当年生レテ山ニ育ツモノヲ黄鷹ト云。其色黄也。是ワタリ鷹及和ノ小鷹トモニアリ。是モ冬也。……皆狩言冬季也。……凡鷹ハ性強悪ニシテ友禽ヲ食フ。サレドモ天性義有テ寝鳥ヲ不レ取、胎モノヲ不レ取。モシ胎鳥ヲ取ルトイヘドモ、不レ殺シテ放チヤルト云〻」（『篗纑輪』）「雪の暮猶さやけしや鷹の声　桂夕」（『あら野』巻一）「Taca.」（『日葡辞書』）。**○み付てうれし**　「見付けて嬉し」。「見付く」は発見する意。「見出でて」に比べて口語的な表現である。「高びくのみぞ雪の山〳〵　越人　見つけたり廿九日の月さむき　荷兮」（『はるの日』）「新畳敷ならしたる月かげに　野水　ならべて嬉し十のさかづき　去来」（『猿蓑』巻五）「Mitçuqe, uru, eta.」「Vrexij.」（『日葡辞書』）。
○いらご崎　「伊良湖崎」。渥美半島突端の岬。前の「ゆきや砂」の句参照。

大意 鷹のはじめて渡るという伊良湖崎に来て、一羽の鷹の飛ぶ姿を見つけた嬉しさよ。

考 「同十二日」(『如行子』)「杜国をとぶらひける道すがら」(『続の原』『蕉翁句集』)「いらご崎を見渡して」(『笈日記』)等の前書があり、『笈の小文』には、

保美村より伊良古崎へ壱里斗も有べし。三河の国の地つゞきにて、伊勢とは海へだてたる所なれども、いかなる故にか、万葉集には伊勢の名所の内に撰入られたり。此洲崎にて碁石を拾ふ。世にいらご白といふとかや。骨山と云は鷹を打処なり。南の海のはてにて、鷹のはじめて渡る所といへり。いらご鷹など歌にもよめりけりとおもへば、猶あはれなる折ふし

という文の後に見えている。伊良湖崎に遊んだ十一月十二日の吟である。

松坂氏蔵の真蹟懐紙は「梅つばき」(Ⅱ319)の句が共に記されてあり、旅行当時杜国の許に書き遺したものと推定され、『伊良胡崎』に紹介されたものの原物なので、「いらご崎にる物もなし」が初案であることは動かない。それを鳴海に戻ってから改めたのが加藤氏蔵真蹟懐紙の形であって、その時期は十一月中、熱田へ移る前だった筈である。『芭蕉句選年考』には、初案が「鷹の声似るものもなしいらご崎」だったという行脚僧の話が録せられているが、これは上下を転倒した誤伝であろう。

伊良湖崎を訪れた芭蕉は、万葉時代からのこの地の歌枕としての来歴を思っていた。『万葉集』巻一には、「麻續王流二於伊勢国伊良虞嶋一之時人哀傷作歌」(麻續王の伊勢国の伊良虞の島に流さるゝ時、人哀しび傷みて作る歌)として、

打麻を麻續王海人なれやいらごの島の玉藻刈ります

と、それに和した王自身の歌、

空蟬の命を惜しみ浪にぬれ伊良虞の島の玉藻刈り食む

が収められている。家隆の『壬二集』の鷹狩を詠じた歌、

　ひきすゑよいらごの鷹の山がへりまだ日はたかし心そらなり

さては西行の『山家集』下に、

　　ふたつありけるたかの、いらごわたりをすると申けるが、ひとつのたかはとゞまりて、木のすゑにかゝりて

　　侍と申けるをきゝて

　すだかわたるいらごがさきをうたがひてなほきにかへる山がへりかな

とある歌などが頭にあったと思われる。そして思い通り鷹の姿を見るを得た喜びの表現が、うち見た所この句の第一義である。芭蕉の見た鷹が何種だったかは分らないが、兎に角この時季に岬を通って南へ渡る群に遅れた一羽であったろう。「み付てうれし」には、天翔る鷹の雄姿に対する賛嘆と、歌枕で古歌さながらの鳥の姿に逢えた喜びの情を見たい。

　更に、この「鷹」には杜国の俤が寓されている筈である。これを否定する説もあるが、既に其角の『花摘』元禄三年五月十七日の条に、

　　いらごの杜国例ならでうせけるよしを越人より申きこえける。翁にもむつまじくて、

　　鷹ひとつ見つけてうれしと迄にたづね逢ける昔をおもひあはれみて

　羽ぬけ鳥鳴音ばかりぞいらご崎　　角

とある位で、其角も「鷹ひとつ」の句に杜国の俤を読み取っていることが明らかだからである。元来『万葉』の麻績王にしてからが流人であって、この歌枕に流人の俤を重ね合わせる動機は十分にあろう。才能ある杜国が不幸な境涯にありながら恙なく居ることが、芭蕉にはこの上なく嬉しかったに違いない。次の「夢よりも」の句を見ても、鷹に杜国を寓する芭蕉の意図ははっきりしている。

初案の「にる物もなし鷹の声」は、次に扱う「夢よりも」の前書とも関連して「鷹の声」が中心である。最初は「声」を中心にした想であったものが、「にる物もなし」という説明的で平板な表現に代えて、「み付てうれし」という主情的な表現を思いつくに至って、もはや「声」にこだわる必要を認めなくなったのであろう。境と情が茲に統一され、渾然たる一句にまとまったのである。

杜国が不幸を伊良古崎にたづねて、鷹のこゑを折ふし聞て

322 夢よりも現の鷹ぞ頼母しき（鵲尾冠）

冬季（鷹）。

語釈 ○**杜国が不幸** 「不幸(ふかう)」は、空米売買の罪で尾張領追放になった境遇を指す。「が」は、所有格。「彼人不幸に沈み、旧里を辞せしを」（『鵲尾冠』下、越人文）「**Fucŏ. Saiuai narazu.**」（『日葡辞書』）。○**折ふし聞て** 「折節(をりふし)聞きて」。「折ふし」は、丁度その時。時々の意ではない。「折節ある商人此者をかいとる」（『伊曾保物語』上ノ一）「**Vorifuxi. i, Voricara.**」（『日葡辞書』）。○**現の鷹** 「現」は「ウツヽ」。「夢」に対して、現実の、実際の鷹をいう。『類船集』にも見えるように、吉夢の代表「一富士二鷹三茄子」の縁で「夢」と「鷹」は縁語になる。「寝(ぬ)る夜おちず　いめには見れど　うつつにし　ただにあらねば」（『万葉集』巻十七、大伴家持）「**Vtçutçuni miyeta.**」（『日葡辞書』）。○**頼母しき** 「頼母(たのも)しき」。「母」は宛字。頼み甲斐のある、心丈夫な感じをいう。既出（Ⅱ *316*）。

大意 実体のない夢で見るよりも、現実に目のあたり見る鷹は、何とも心強いものだ。

考 前の「いらご崎にる物もなし鷹の声」と同じ日、十一月十二日の吟であろう。古い出典は『鵲尾冠』のみであるが、信憑性に問題はない。『芭蕉句選年考』は、元禄四年夏嵯峨の落柿舎に居た芭蕉が、夢に杜国のことを言い出して泣いたという『嵯峨日記』の記事を引いて元禄四年の作と見ているが、『鵲尾冠』の前書に拠る限り、成立時期

は貞享四年冬伊良湖崎遊覧の際でなければならない。
めでたい夢とされる「鷹」を前提にして、その夢の中の鷹よりも、伊良湖崎に来て見る現実の鷹が頼もしいと作意したのである。この「現の鷹」には杜国の寓意がはっきりあらわれており、遥々この愛弟子を訪ねて来て会い得た喜びを鷹に託していることは疑いを容れない。この句が存することからしても、前の「鷹ひとつ」の句は、鷹の声を主軸にした初案の段階から、杜国のことを裏面に含みとしていることが明らかといえよう。当面の句の解としては、杜国を余り強く意識し過ぎる故か、『嵯峨日記』の有名な夢の記事の連想も手伝って、「杜国を夢に見るよりも」と解する説が案外多い。しかし、表面上はこの句も伊良湖崎の鷹の句なのであって、右のように解すると、表面の意味と寓意が混同されてしまう。句意は飽くまで〔大意〕に記したように取って、その上で寓意に及ぶべきであると思う。

同十三日

323　されば こそあれたきまゝの霜の宿　（如行子）

あら野・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

逢二杜国一

されば こそ逢ひたきまゝの霜の宿　（笈日記）

人の菴をたづねて

されば こそあれたきまゝの霜の菴　（泊船集）

冬季（霜）。

語釈　**○同十三日**　貞享四年十一月十三日をいう。**○さればこそ**　予期が的中した場合にいう。思った通りだ、の意。「さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其実を顕す」（『おくのほそ道』）「Sarebacoso.」（『日葡辞書』）。**○あれたきまゝの霜の宿**　「荒(あ)れたきま

ゝ」は、荒れるに任せた状態。「たき」は願望・意志をあらわす助動詞で、自然に或る意志を認めた表現である。「宿」は、「家」に同じ。「むぐらおひてあれたるやどのうれたきはかりにもおにのすだくなりけり」(『伊勢物語』五十八段)「霜の宿の旅寐に蚊屋をきせ申　如行　古人かやうの夜のこがらし　蕉」(『野ざらし紀行』初稿真蹟)「Are, ruru, eta. ……Iyega aruru.」(『日葡辞書』)。

大意 思った通りだ。荒れるに任せた霜寒いお住居ですな。

考 『あら野』には『泊船集』と同じ前書がある。『如行子』は貞享四年十一月の芭蕉の杜国訪問の記事中に掲げてあり、「同十三日」は、この句の成った時日についての唯一の精しい資料である。『笈日記』の異形に関しては、「此句、笈日記には逢杜国といふ前がきにて、へあひたきまゝのとありぬ。書あやまりなるべし」(『泊船集』)「笈日記に、杜国逢と題有。逢たき儘と有。違也」(『蕉翁句集草稿』)等夙くから指摘されたように杜撰な誤りであって、「逢ひたきまゝの」では抑々語を成さない。文考の誤りを正した『泊船集』の下五「霜の菴」も根拠不明で、これ亦杜撰であろう。

句の成ったのは十三日であるとしても、その動機は杜国の侘住居を訪れた当座の感慨にあった。「さればこそ」には、江戸に居た頃から杜国の境遇の激変を思い遣っていた芭蕉の深い同情の念が籠っており、「あれたきまゝの霜の宿」と言い下して、辺陬の地の冬の侘しさを強く読む者に印象づけている。

句の解釈についてかくありたかつた荒れ様だとか、自然のまゝとりつくろはぬ住居の風情を喜ぶとか、さういふ心持が此句にあると見るのは不賛成である。寧ろ痛ましい感じと、其痛ましい相手を引立てようとする感じと、さういふ二つの感じだけが特に際だつて表出されてゐるのが此句であるといふ気がする。此処では宿の事しか詠んではないのであるが、然し見えて来るのは人である。人に対する芭蕉の感情の動きである。(『芭蕉俳句研究』)

という小宮豊隆氏の鑑賞に全面的に賛同したい。俳諧らしい突き離した感じはなく、激しい感情が堰を切って溢れたのを、そのまま句の形にしたものであろう。其処から、

……「荒れたきままの」という表現に籠もった主観の激越さは、芭蕉が杜国の荒れはてた侘住居のさまを、自分

の肉体的な苦痛として受け取っていることを意味する。これはまさに、恋人の苦痛に対する共感ではないのか。私はこの句から、肉感的なものを、じかに感じ取ることが出来るように思う。それがこの句の原始的な強さであり、「さればこそ」とは、単に彼の推測通りと言うより、まざまざと夢に見た通りといった、妄念の激しさを籠めているようである。そこに「霜の宿」という結句のなまなましいリアリティがあり、それはまた「念夢」のなかにあらわれた朦朧たる「霜の宿」に、ぴったりと打ち重なるのである。(『芭蕉その鑑賞と批評』)

という山本健吉氏の見方も出て来るのである。芭蕉の杜国に対する感情の切実さは、既に「白げしに」(I 242)の句に見られ、後年の『嵯峨日記』の有名な記事にも歴々とあらわれたことであった。

324　麥はえて能隠家や畑村　(加藤氏蔵真蹟懐紙)

笈日記・泊船集・蕉翁句集・伊良胡崎・合歓のいびき・伊良虞紀行

長安はもとこれ名利の地、空手にして銭なきものは道路かたしといへり

麥蒔て能隠家や畑村　(漂泊の詩人芭蕉展図録所収真蹟懐紙)

如行子

冬季(麦はえて)。

語釈　**○麦はえて**　「麦生(むぎは)えて」。「麦蒔(ま)き」も冬季であるが、その蒔かれた麦が芽を出し、葉を伸ばして来るさまをいう。冬枯の中に麦の芽の青さが一際印象的なのである。「麦」は下の「畑村」と縁語。**○能隠家**　「能(よ)き隠れ家(かくが)」。「隠家」は、世捨人が隠れ住む家。ここは保美村の杜国の住居を指す。「能」は、「良」「佳」を用いるべきところであるが、可能の意で「能(よ)くす」等の言い方があるので通用した宛字である。**○畑村**　「ハタケムラ」。今の渥美郡渥美町福江の地。諸国の運送船が出入りした畠・古田港の奥にあり、保美村の東方に接している。保美村の下地(しもぢ)には「杜国屋敷跡」の石柱が今も残るが、その家は両村の境近くにあったのである。

大意 名も畑村という通り、麦が芽を出して、まことに野趣に富む隠れ家だ。

考 「ある人のもとにて」（『泊船集』）「畠邑　杜国が閑居を尋て」（『伊良胡崎』）等の前書がある。『如行子』貞享四年十一月十三日の条にあり、「麦蒔て」の句形がこの日に杜国亭で成ったことは疑いない。二つの真蹟と『如行子』『合歓のいびき』『伊良虞紀行』には、以下に越人・野仁（のひと）（杜国の別号）の脇・第三を録している。

「長安はもとこれ」云々の前書は、有名な白楽天の詩句（「しばの戸に」（I126前書）参照）を引き、名利の巷を離れて隠栖する杜国の境遇を慰めたものである。「麦蒔て」は隠栖の主が手ずからする感じがあり、その境涯への同情が切実に感じられる。前の「さればこそ」の句の、杜国の悲境への万斛の涙を思わせる激しさに比して、この句では寧ろ辺境での今の生活を良しとし、出来るだけ杜国の気を引立てるように配慮しているようだ。保美村から畠村の方を見渡して、「麦」と「畑」の縁語に興じながら、閑静な野趣を賞したのである。杜国は三河へ移った当初畠村に居り、間もなく保美村に移ったのだという。「麦はえて」となると、人の業よりはその結果としての景が中心になり、感情は更に平静なものになっている。恐らく「蒔て」が訪問当時の初案で、鳴海帰来の後、景を主とした案に推敲したのであろう。最後に、山本健吉氏の鑑賞を引いておく。

……麦など蒔いて、ひっそりと隠れ栖んでいると言ったので、「麦まきて」に住む人の心ざまを見ているのである。それが「麦はえて」になると、隠れ栖む人の心根より、隠家そのものの景観を主としている。古歌に流謫の人を詠んで、「玉藻刈り食（は）む」「藻塩たれつつ」などといった心根のあわれに通じるものは、「麦まきて」の方にあるだろう。だが、「よき隠家」と、隠家の景観を言ったことから言えば、「麦はえて」とその青々した芽立ちを言うことの方が、ふさわしいと思ったのかも知れぬ。五十歩百歩だが、どちらかと言えば、私は「麦まきて」を取る。ただし、不幸な配所ながら、南を受けたよい地相であることを讃める気持もあって、「麦生えて」とその色づくさまを取り上げて言ったのかも知れない。（『芭蕉全発句』）

しばしかくれゐける人に申遣す

325

先祝へ梅を心の冬籠り　（あら野）

冬季（冬籠り）。

語釈　**○しばしかくれゐける人**　「暫し隠れ居ける人」。ここの「隠る」は、世間から離れて住む意。杜国を指すと思われるが、この句は杜国だけに贈ったものではないので、この前書は不正確である。〔考〕参照。「山林に隠るばかりを隠るとは云べからず」（『風流志道軒伝』巻五）「Cacure, uru, eta.」（『日葡辞書』）。**○申遣す**　「申し遣はす」。「言ひ遣る」に同じ。多少改まった感じがある。「京なる人に申遣しける」（『あら野』巻五、尚白発句「一夜きて」前書）「Tçucauaxi, su, aita.」（『日葡辞書』）。**○先祝へ**　「先づ祝へ」。何はさておき前途を祝いなさい。「春や祝ふ丹波の鹿も帰とて京去来」（『炭俵』上）「Iuai, ô, ôta. ……Xôguachino fiuo iuô.」（『日葡辞書』）。**○梅を心の冬籠り**　「冬籠り」は、寒さを避けて一間に籠居する冬の生活をいう季語。「梅」は「花の兄」ともいわれるように、早春他の花にさきがけて花を開く。その梅のめでたさを心に持って、陽春のめぐり来ることを期待しつつ、冬籠りをしているというのである。「定家僻按抄云、冬籠とは冬とてこもる也。ことなき草木も花もはもなく、霜雪に埋もれたるを冬籠と云也。昔のさくや此花冬ごもりより読出たり。△或云、誠は冬木籠也。こを略していふ也。万葉集に冬木成など読るに同じ心也共いへり師説。△按に、これらの説侍れど、俳におゐては、冬籠の詞うへ物に構ひなしとは、人の寒を凌て籠居するを冬籠とも云にや」（『滑稽雑談』）「一里の炭売はいつ冬籠り　一井」（『あら野』員外）「Fuyugomori.」（『日葡辞書』）。

大意　何はさておき祝いなさい。今の境遇は、他の花にさきがけて咲く梅のめでたさを心に持って、一陽来復の春を待つ冬籠りなのだ。

考　この句の年代については、『刷毛序』（巴静撰、宝永三年刊）に見える左の芭蕉の文が参考になる。

権七にしめす

旧里を去て、しばらく田野に身をさすらふ人あり。家僕何がし、水木のために身をくるしめ、心をいたましめ、其獠奴阿段が功をあらそひ、陶侃が胡奴をしたふ。まことや、道は其人を取べからず。物はそのかたちにあらず。下位に有ても上智の人ありといへり。猶石心鉄肝たゆむ事なかれ。主も其善のわするべからず。

祝

先いわへ梅をこゝろの冬籠　芭蕉

句の出典としては元禄二年春の『あら野』が初出なので、元禄元年冬以前に芭蕉が故郷を離れて田野に漂浪する人を訪ねた時といえば、貞享四年冬に杜国の隠宅を訪うた時が最も相応しい。その際杜国の忠僕権七に与えて、主人共共励ましたのがこの句だったと思われる。頴原博士は『新講』で、権七を荷兮の僕と見て、貞享四年冬尾張で荷兮に与えたと推定しておられるが、荷兮に故郷の尾張を離れた事実はなく、この推定は無理である。幸田露伴の『評釈曠野』が、この句を杜国の僕に与えたものと断定しているのに従うべきであろう。大礒義雄氏によると、この「権七」は杜国の手代か家僕だった家田与八であろうという（「杜国新考(二)」—『愛知学藝大学研究報告』二）。何れにせよ、杜国亭滞在中の作にちがいない。「権七」は家僕の汎称で、芭蕉の文によれば、権七と主人と両者に贈った趣である。

『滑稽雑談』に触れているように、「冬籠り」という季語には、『古今集』仮名序に引く「なにはづにさくやこのはなふゆごもりいまははるべとさくやこの花」の連想が色濃くまつわりついている。その上、暖い保美村では梅や椿の早咲きが見られた程だった（Ⅱ319参照）。これらがこの句の動機になっていることは明らかであろう。悲境に沈む主従を、やがて来るべきめでたい春に期待して先ずは祝えと励ましたもので、芭蕉のあたたかい心遣いが滲み出た句柄である。

326

鍛冶出羽守饗に

面白し雪にやならん冬の雨（知足筆書留）

同二十日なるみ鍛冶出羽守饗に

おもしろや雪にやならん冬の雨（如行子）

冬季。

語釈 **○鍛冶出羽守**「カヂデハノカミ」。尾張鳴海の刀鍛冶出羽守氏雲を指す。岡島氏、通称を佐助また庄三郎といい、俳諧を嗜んで自笑と号した。剃髪後の法号を了照という。正徳三（一七一三）年正月七日歿、享年未詳。「此国の鍛冶霊水を撰て爰に潔斎して剱を打、終月山と銘を切て世に賞せらる」（『おくのほそ道』）「Cagi.」（『日葡辞書』）。**○饗**「キヤウ」。酒食のもてなし。もとより俳席を兼ねたものである。「所〱の饗など、……きよらをつくしてつかうまつれり」（『源氏物語』桐壺）「Qiŏ.」（『日葡辞書』）。

大意 面白いことだ。冷い冬の雨に白いものが混って、この分では雪にでもなろうか。

考 芭蕉と越人が杜国訪問の旅を終えて鳴海の知足亭に戻ったのは、十一月十六日の夜であった。なお数日芭蕉は鳴海に滞在するが、この句の成ったのは『知足斎日々記』同月二十日の条に、「此昼夜出羽左助にてはいかい有」とある俳席でのことで、『如行子』の前書とも一致している。『千鳥掛』には「鳴海出羽守氏雲宅にて」と前書。知足の書留と『如行子』『千鳥掛』には、自笑・寂照（知足）の脇・第三も収められた。

雪を待つ風狂の雅情を動機として、「面白し」と先ず主情的に強く打ち出し、「雪にやならん」と続けた弾んだ調子に心躍りが見える。その興が亭主に対する挨拶の意にも叶うわけで、「はつゆきや幸庵にまかりある」（Ⅱ262）にも通ずる童心の発露にも注目したい。古注には「面白し」に「雪」との詞のあやを見る説もあるが、所詮考え過ぎであろ

笈日記・泊船集・宇陀法師・蕉翁句集・千鳥掛

う。その座の興を主とした無造作な表現が、却って成功した例である。『如行子』の「おもしろや」は「雪にやならん」と「や」が重なって良くない。杜撰な誤伝と思われる。

熱田御修覆

327 磨なをす鏡も清し雪の花 （真蹟懐紙）

四季千句・池田文庫展観目録所収真蹟懐紙・笈の小文・笈日記・皺筥物語・後の旅・泊船集・三冊子・蕉翁句集・熱田三歌仙・芭蕉杉風両吟百韻・浅草

冬季（雪の花）。

語釈 **○熱田御修覆** 「熱田」は、今の名古屋市熱田区にある熱田神宮。草薙剣を御神体とし、熱田大神・天照大神・日本武尊等を祀る格の高い神社で、宮の宿（熱田）はその門前町として発展した町である。「御修覆」は、修繕・修理の意の敬語。「ミシフク」と訓んでも可い。当社の記録によると、貞享三年四月八日着工、同七月九日落成、同月二十一日遷宮が行われたという。「金武の奥松に逗留して、堤の修復をいそがし給ふに」（『椿説弓張月』六十七回）。**○磨なをす鏡** 「磨ぎ直す鏡」。社殿修復を、鏡を磨ぎ直すことにたとえ、鏡を神霊の象徴とした。昔の鏡は青銅製で、その曇りをざくろの実の汁や水銀、後には梅酢を用いて磨き、つや出しをしたのである。「なをす」は「なほす」の仮名ちがい。「磨ぎ出す」（I *81*）参照。「おきながいへのをんなどものもとなるくしげかゞみの、かげみえがたく、とぐわきもしらず」（『大鏡』第一巻）「**Nauoxi, su, oita.**」（『日葡辞書』）。**○雪の花** 雪を花にたとえていう語。「雪の花　ふり物也。植物にあらず」（『御傘』）「伊賀大和かさなる山や雪の花　配力」（『続猿蓑』下）。

大意 境内には雪が花と積り、磨ぎ直された神鏡が雪に映えて、いかにも清らかだ。

考 「熱田御修覆（ママ）」（『笈の小文』）「そのとしあつ田の御造宮ありしを」（『笈日記』）「熱田御造宮」（『泊船集』）「みしふくありし御やしろにふたゝびまうでゝ」（『熱田三歌仙』）「御修覆ありしあつたの御社にふたゝびまうでゝ」（『芭蕉杉風両吟百韻』）等の前書があり、尾形仂氏が「俳林逍遊」（栗山博士編『芭蕉・蕪村・一茶』所収）で紹介された池田文庫展観目録の真蹟懐紙と『蕉翁句集』の前書は『笈の小文』と同じである。この真蹟については、「京までは」「星崎の」等の句の条を参

照されたい。『皺筥物語』と『熱田三歌仙』には「石しく庭の寒るあかつき」という桐葉の脇も収めているが、後年のものながら『浅草』（成美撰、寛政元年刊）には、これに始まる桐葉と両吟の歌仙が初めて見える。『笈の小文』には伊良湖崎に於ける「鷹ひとつ」の句の次にこの発句を出し、熱田で書かれた同年霜月廿四日付の寂照（知足）宛芭蕉書簡には「二三日此かた両吟致、大かた出かし候。出来候はゞ被懸御目候様に」という文言があるので、この両吟が桐葉との歌仙を指すことは疑いない。芭蕉は二十一日に鳴海を去って熱田に赴いており、神宮に参拝して発句を詠んだのは、二十一、二日頃であったろう。『芭蕉句選』『伊良胡崎』に下五を「雪の玉」としているのはその根拠を知らず、恐らくは杜撰に過ぎまい。

三年前野ざらしの旅で熱田神宮に詣でた時は、

社頭大ィニ破れ、築地はたふれて草村にかくる。かしこに縄をはりて小社の跡をしるし、爰に石をすえて其神と名のる。よもぎしのぶこゝろのまゝに生たるぞ、中〳〵にめでたきよりも心とゞまりける。（『野ざらし紀行』）

とあるような荒廃した有様で、「しのぶさへ枯て餅かふやどり哉」の吟があった。それが今回参って見ると全く面目を一新した情況になっていたので、いわば「法楽」（『後の旅』）としてこの句を詠んだのである。『三冊子』にはこの句について、

此雪の句は熱田造宮の時の吟也。とぎ直すといゝて其心を安くいゝ顕し、その位を能する。……ものによりて思ふ心を明す。その物に位をとる。（赤雙紙）

と述べているが、寄物陳思というべき句であること、「とぎ直す」といって神宮の修復工事の意をあらわし、「鏡」や「雪」は神宮に相応しい「位」（品格）あるものにしたことはその通りである。単なる譬喩ではなくて、「鏡」には御神体の縁もあり、象徴的な格の高さを感じさせる。しかも「雪の花」との配合によって、その清浄さが一段と強調されるわけである。ただ、加藤楸邨氏の指摘されたように、「清し」が表現としてやや弱いため、「沁み透るものが乏し

い」（『芭蕉全句』）という評は甘受しなければならない。句の内容は実景と限る要はなく、言わば道具立が揃い過ぎて、それを支える情感があり来りになってしまった例である。

翁心ちあしくて、欄木起倒子へ薬のいひつかすとて

328 薬のむさらでも霜の枕かな（如行子）

冬季（霜）。

語釈 ○**翁**「オキナ」。蕉門の間で芭蕉を敬愛して生じた呼び名。○**心ちあしくて**「心地悪しくて」。気分が悪くて。病気による不快感をいう。『皺筥物語』にはこの時の事情を「一とせ此所（注、熱田）にて例の積聚さし出て」と記しており、「積聚」は腹部胸部の激痛、所謂さしこみで、芭蕉の場合は胃痙攣と思われる。「翁こゝちあしく、くるしき時も、この子をみれば、くるしき事もやみぬ」（『竹取物語』）「**Rei naranu cocochi.**」「**Axij.**」（『日葡辞書』）。○**欄木起倒子**「ランボクキタウシ」。星崎の医師と伝えられるが、姓氏未詳。医名三節、起倒は俳号である。「子」は軽い敬称。「団扇もて」（I *241*）の句の条参照。○**薬のいひつかすとて**「薬の［事］いひつか［は］すとて」の脱字と思われる。積聚を鎮める薬を調合してくれるように言い遣ったこと。「一貫の銭むつかしと返しけり　曲水　医者のくすりは飲ぬ分別　翁」（『ひさご』）「松坂の浮瓢といふ人の身まかりたるにいひやりける」（『あら野』巻七、荷兮発句「橘の」前書）「**Cusuriga qicu.**」（『日葡辞書』）。○**薬のむ**「薬服む」。○**さらでも**「然らでも」。そうでなくても、の意。ここは、病気でなくても、というのである。「身にかへていざゝは秋をしみゝんさらでももろきつゆのいのちを」（『新古今集』巻五、守覚法親王）。○**霜の枕**　この「枕」には「旅寝の枕」「草枕」の含みがある。それに「霜」を添えて、冬のきびしい寒さを印象づけたのである。「霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申大垣住如行」（『はるの日』）と同じ内容の表現といってよい。

大意 持病が出て薬を服むとは。そうでなくても、霜置く寒さの身にしみる旅寝なのに。

考 『笈日記』には「病中」と前書がある。『如行子』には、貞享四年十一月下旬の熱田滞在中のこととして出てお

り、二十一日から二十五日の間の作と推定される。霜月廿四日付寂照宛芭蕉書簡に「持病心気ざし候処、又咳気いたし、薬給(たべ)申候」とあるのによって、病状が知られよう。この時起倒は「昔し忘れぬ草枯の宿」という脇を賦した。土芳の『蕉翁句集』が貞享元年の部に出して「如行亭」と前書するのは誤りとする外ない。『皺筥物語』には、

一とせ此所にて例の積聚さし出て、薬の事医師起倒子三節にいひつかはすとて、

　薬のむさらでも霜の枕哉　翁

其起倒子が許にて、磐斎老人のうしろむける自画の像に、

　団扇もてあふがむ人のうしろつき(うばそく)芭蕉

とかきてをくり給ふ。

という風に、貞享二年夏の「団扇もて」の句より前に記されている為に、誤解したのであろう。そうでなくても寒さの身にしみる旅寝に、病に臥した心細さを訴えた句で、しみじみとした旅愁と老懐が感ぜられる。「薬のむ」と最初に打ち出した気息は微妙で、末に「かな」があるから、この「のむ」はここで切れるのではなく、構文上は「枕」にかかるのであろう。「さらでも」との間の屈折が、重苦しいまでの気分を醸し出している。

同二十八日名古や昌碧會

329　ためつけて雪見にまかる帋子哉　（如行子）

笈の小文・曠野後集・笈日記・呉服絹・泊船集・蕉翁句集・桃の白実

冬季（雪見）。

語釈　**○同二十八日**　貞享四年十一月二十八日をいう。**○名古や昌碧会**　「名古屋昌碧会(なごやしやうへきのくわい)」。名古屋住の俳人昌碧は『はるの日』『あら野』に作品が見えるが、出自経歴等未詳の人物である。山本健吉氏は、「作句技量は拙く古風である。名前からして、里村昌

琢の流れを汲む連歌師であったろう」(『芭蕉全発句』)と見ておられる。「会」は、俳席の意。○**ためつけて**　「矯め付けて」。着物の皺の寄ったりしたのを、きちんと整えること。「五節供に袴肩衣ためつけ、紋付の小袖に金拵の小脇指」(『日本永代蔵』巻一ノ五)「Qirumonouo tametçuqete qiru.」(『日葡辞書』)。○**雪見にまかる**　「雪見に罷る」。「雪見」は、風雅の集いとしてのもの。「まかる」は、ここでは来る意であるが、殊更改まってユーモラスな気分を添えた表現である。「幸庵にまかりある」(Ⅱ262)参照。「いざ雪見容(カタチソクリ)す蓑と笠　蕪村」(『五車反古』)。○**帋子**　「カミコ」。渋紙で作った着物。「帋」は「紙」と同じ。既出(Ⅰ215前書)。

大意　旅の身とて晴着もありません。せめてものことに、紙子の皺を伸ばし折目を正して、この雪見の会にやって来ました。

・考　『笈の小文』に「有人の会」、『曠野後集』と『蕉翁句集』に「兼日の会に」とそれぞれ前書がある。成立の日次は『如行子』の前書を信ずべきである。『如行子』と『桃の白実』(車蓋撰、天明八年刊)には、昌碧・亀洞・荷兮・野水・聴雪・越人・舟泉らとの歌仙一巻が収められている。『如行子』によると、芭蕉は十一月二十五日に熱田の桐葉亭から名古屋の荷兮亭に移った。

鑑賞に当っては、昌碧への挨拶句であることを見逃してはならない。ためつけるのが、袴肩衣でもあることか、粗末な紙子なのは、旅の身の隠士の境涯に如何にも相応しい。そこには又、馴染の薄い昌碧に対する何がしか改まった感じも見え、やや大袈裟な言い方がユーモラスな俳味を強調している。「はつゆきや幸庵にまかりある」の句にも見えたように、芭蕉は雪が好きであった。境涯句と挨拶句のちがいはあるが、古紙子の皺を伸ばし折目をつけていそいそとやって来た芭蕉の姿には、同じような雪見に対する心躍りが際立つのである。

330

いざさらば雪見にころぶ(ママ)所迄　（花摘）

　書林風月ときゝし其名もやさしく覚えて、しばし立寄てやすらふ程に、雪の降出ければ

いざ出むゆきみにころぶ所まで　（風月堂伝来真蹟懐紙）

いざゆかむ雪見にころぶ所まで　（あら野）

――芭蕉庵小文庫・陸奥鵆・泊船集・旅寝論・四山集・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・花橘・朝日川

――某氏蔵真蹟懐紙・鶉衣・麻刈集

――笈の小文

冬季（雪見）。

語釈　○**いざさらば**　「さあ、それでは」と人を誘うことば。下に「行(ゆ)かむ」「出(い)でむ」等が略されている。「いざさらばなみだくらべんほとゝぎすわれもうきよになかぬ日はなし」（『続古今集』巻十七、雅成親王）「Izasaraba.」（『日葡辞書』）。○**ころぶ所迄**　「顚(ころ)ぶ所迄(ところまで)」。「ころぶ」は、積雪に足をとられて動けなくなる状態をいう。俗語。「七夕やあまりいそがばころぶべし伊賀小年杜若」（『猿蓑』巻三）「Corobi, u, ôda.」（『日葡辞書』）。

大意　さあそれでは、みんな雪見に出掛けよう。雪にころんで動けなくなる所まで。

考　某氏蔵真蹟懐紙には「あるひとのもとにあそびて、ものくひさけのむほどに、ゆきのおかしう降出ければ」と前書があり、同じく「いざ出む」の句形を記した真蹟懐紙の句の後には、「丁卯臘月初、夕道何がしに送る」と書かれている。也有の『鶉衣』や士朗の『麻刈集』（寛政五年刊）に夙く紹介された有名なものであるが、夕道(せきどう)は、石田元季氏の『俳文学考説』によると、名古屋本町一丁目の書林風月堂長谷川孫助の俳号である。十二月三日、如行の「霰かとまたほどかれし笠やどり」という発句に始まる表六句（『如行子』所収）の連衆は、如行のほか夕道・荷兮・野水・芭蕉らであって、この日夕道亭にこれらの人々が会したことが知られ、風月堂伝来真蹟懐紙の前書とも相俟って、この

句の「いざ出む」の形は十二月三日に成ったものと見られる（「丁卯」は貞享四年の干支）。『後の旅』には、

一とせ芭蕉翁予が旅舎にて雪見にころぶの句高吟あり

初雪は翁の墳も降たるか　　尾陽夕道

ともあって、右の推定が更に裏付けられるのである。

土芳の『三冊子』には「いざゝらば」の句形を先ず掲げて、「雪見、はじめは、いざゆかんと五文字有」と述べており、これによって「いざゆかん」は「いざ出む」と「いざさらば」の中間案だったことが分る。『蕉翁句集草稿』には「此句阿ら野に、いざゆかんと有。違也」とあるのみであるが、「いざゆかん」は『笈の小文』にもその形で出ているから、単なる誤りではあるまい。

雪見にはずむ気持を「ころぶ所迄」と表現して、風狂の情を強調している。杜哉の『蒙引』が「転ぶ所迄とは老情にをかしみありて、奇絶とも称せん」といっているのは良く、調子のよさも手伝って人口に膾炙する句となった。時間的順序としては、「いざ出む」「いざゆかむ」「いざさらば」と推敲されたことになるが、これらは何れを採っても然程差があるわけではない。ただ、後になる程調子の軽快さが増していることは確かで、その点に留意して表現をいろいろいじって見たのであろう。この推敲過程によって、紀行『笈の小文』の主部が、『あら野』（元禄二年春刊）と『花摘』（元禄三年七月刊。雪見の句は五月四日の条に見える）との間に書かれたと推定されることも付言しておく。

四日はみのやの聴雪にとゞめらるゝ。その夜の會

331　筥根越す人も有らし今朝の雪　（如行子）

冬季（雪）。

笈の小文・漆川集・蕉翁句集・たねだはら・桃の白実

語釈 ○**四日**　貞享四年十二月四日。○**みのやの聴雪**　「美濃屋(みのや)の聴雪(ちやうせつ)」。大橋氏、通称市左衛門。名古屋堀詰町（現名古屋市西区）住と伝えられる。「みのや」は恐らく屋号で、商賈だったのであろう。俳号は「釣雪」とも書いた。○**とゞめらるゝ**　「留(とゞ)めらるゝ」。引き留められた、の意。主語は如行である。「往来の順礼をとゞめて奉加すゝめければ」（『猿蓑』巻二、去来発句「つゞくりも」前書）「Todome, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**筥根越す**　「筥根(はこね)越(こ)す」。「筥根」は、いうまでもなく関東と東海地方を境する山塊。「天下の嶮」と称せられ、江戸幕府は関所を設けて出入りをきびしく取締った。「霧しぐれ」（I *185*）の句参照。「箱根八里(ハコネハチリ)は馬でも越が、越に越れぬ大井川」（『譬喩尽』一）「Coxi, su, oita.」（『日葡辞書』）。○**有らし**　「有(あ)るらし」。推量の助動詞「らし」は、目前の事態について用いられる外、目前にない事柄でも推量の意をあらわすことがある。ここも殆んど「らむ」と同様の現在の推量を、目前にないことについて述べているのである。「鮬(セイゴ)釣比も有らし鱸つり　半残」（『猿蓑』巻三）。

大意　今頃こんな雪の中、箱根の嶮を越す旅人もあることだろう。今朝の雪の深さよ。

考　句の成った時処は『如行子』の前書によって明らかである。『如行子』『たねだはら』（良交ら撰、天明六年刊）『桃の白実』には、この句を発句とした聴雪・如行・野水・越人・荷兮らの連衆による歌仙一巻が収められており、『笈の小文』には、熱田での「磨なをす」の句の次に、「蓬左の人ゝにむかひとられてしばらく休息する程」として数句を並べた冒頭にこの句が見える。

朝起き出て雪が積っているのを見るにつけて、こうした雪の中けわしい山路を越す旅人の上を思い遣ったのである。よんどころない事情で嶮路を越す人に比べて、自分は人々の歓待を受け、あたたかい屋根の下に居るのを謝する気持が裏にあり、それが亭主に対する挨拶になっている。箱根は江戸から名古屋に至る途次、芭蕉自身越えて来た処でもあった。

十二月九日一井亭興行

332
たび寐よし宿は師走の夕月夜　（熱田三歌仙）

冬季（師走）。

語釈　○**一井亭興行**　「イッセイテイコウギヤウ」。一井は名古屋の俳人で『あら野』にかなりの数の句が見えるが、出自経歴等は明らかでない。「興行」は、俳席を設け、連衆が付合をすることをいう。「四日本坊にをゐて誹諧興行」（『おくのほそ道』）「Côguiŏ. Vocoxi voconŏ. ……Asobino côguiŏuo suru.」（『日葡辞書』）。○**たび寐よし**　「旅寐良し」。○**宿**　「ヤド」。ここは一井亭を指す。○**夕月夜**　「ユフヅクヨ」。「夕月」に同じ。陰暦の九日は、月の出がまだ早い頃である。『日葡辞書』には「Yŭzzucuyo.」「Yŭzzuqiyo.」の両語が見えるが、前者が「夕方出る月」の意なのに対して、後者は「宵の口に月の出る夜」とあって、意味が区別されている。「夕月夜　夜の字はあれども非夜分。夕の月也」（『御傘』）「五月雨の空聊はれて、夕月夜幽に、籬が嶋もほど近し」（『おくのほそ道』）。

大意　このお宅には師走の夕月がさして趣深く、まことに結構な旅寝が出来ます。

考　『熱田三歌仙』（暁台撰、安永四年刊）には、この句をはじめに、芭蕉・一井・越人・昌碧・荷兮・楚竹・東睡らによる半歌仙が収められている。芭蕉は元禄元年以降冬に名古屋に居たことはなく、一井・昌碧が加わっているところから、貞享四年十二月に成った可能性が高いが、貞享元年冬とも考えられないではなく、断定は差控えたい。

「たび寐よし」と先ず打ち出したところに、挨拶の意が強く感ぜられる。「宿は師走の夕月夜」は、その良き旅寝の友となる自然の風物で、冬の極まる師走にも関わらず、この夕月の影にはほのかな温か味があるようだ。一井の脇は「庭さへせばくつもるうす雪」とあって、実際にはかなり寒い日だったのであろうが、亭主の心の籠ったもてなしが、句のほのかなぬくもりとして反映しているのであろう。加藤楸邨氏は、

この句はかなり興に乗って上五で一時停止し、すぐ一気に流すあたり、句に拍子が生まれている。後年の芭蕉ならば、この句の拍子はおそらくもう少し抑えられて、内にこもる力として詠じたであろう。（『芭蕉全句』）と評しておられる。

ある人興行

333 香を探る梅に藏見る軒端哉　（笈の小文）

防川亭

香を探る梅に家みる軒端哉　（笈日記）　――泊船集・蕉翁句集

冬季（探梅）。

語釈 ○**香を探る梅**　「香を探る梅」。梅花の匂いをたよりに樹の在り処を探る意。「梅」は春の季語であるが、「探梅」は、冬のうちから早咲きの梅を尋ねて山野を歩きまわることで、冬の季語である。本来花の在り処を探るのが探梅で、それを「香を探る」といったのがこの句の俳諧であろう。「Saguri, u, utta.」（『日葡辞書』）。○**蔵**　「クラ」。商家の土蔵。「楽する比とおもふ年栄　昌碧　いくつともなくてめつたに蔵造　釣雪」（『あら野』員外）「Cura.」（『日葡辞書』）。○**軒端**　「ノキバ」。既出（Ｉ80）。

大意 梅の匂いにその在り処を探って来て見ると、立派な土蔵の軒端近くに尋ね当てた。豊かなお暮しぶりがしのばれる。

考 『笈の小文』には「ある人」とあるだけであるが、『笈日記』の前書によって、防川なる俳人の家での作と見られる。防川は『あら野』の作者で、この句は『笈の小文』に貞享四年冬名古屋滞在中の作中にあるから、名古屋の住であろうが、出自経歴等は詳らかでない。句の内容からして、恐らく富裕な商家であったろう。「興行」とあるから

には付合があった筈であるが伝わらない。

「梅」に亭主の風雅を籠め、「蔵」でその富裕をあらわして挨拶の意を寓したのである。梅は匂いだけという見方もあるが、やはり蔵の軒端に樹を見出したものと見たい。潁原博士は、

……江戸時代の言葉で家見とか家見る等といへば、新居などを故らに見に行くことである。思ふにこの俳諧が催された防川の亭は、近い頃に新築されたものであつたのだらう。そこで一句の意は、早梅の香を探つて、恰かも新居の結構を見る軒端にその梅を得たといふのである。それで挨拶の句となる。而して更に「蔵見る」と言ひかへたのは、実際梅が咲いて居たのが蔵の軒端だつたといふ事もあるだらうが、それよりは蔵の方が防川の家の富を象徴するものとして、もつと効果的だつたからである。そこに推敲のあとがある。（『新講』）

と見ておられる。家見に関する説はさることながら、『笈日記』の句形の信憑性は、かなり問題であろう。勿論初案とも見られるにしても、誤伝の可能性も同じ位あると思う（『泊船集』や『蕉翁句集』は『笈日記』を信じ、これに基づいたに過ぎまい）。何れにせよ、主の富裕を褒めるには「蔵」が最も相応しいのである。

探梅は『円機活法』等にもある漢詩の題で、夙く連歌書の『無言抄』に「早梅を尋ぬる心なり」として冬季とされていたが、俳諧で実際に季語として活用したのは、芭蕉のこの句あたりが最初らしい。それを「香を探る」としたところにも、俳諧らしい工夫が見える。但しこの句は、題材が多過ぎて考え落ちになる傾きがあり、「探る」「見る」と同音が重なる点も余り感心出来ない。

334　露凍て筆に汲干ス清水哉　（三つの顔）

苔清水

熱田三歌仙

凍とけて筆に汲干す清水哉　（芭蕉庵小文庫）
露冴て筆に汲ほすしみづかな　（筆のしみづ）
――泊船集・蕉翁句集

冬季（凍て）。

語釈　○露凍て　「露凍てて」。「凍つ」は、寒さでこおること。その連用形が「凍て」である。「ためつけて雪見にまかる㛶子哉」ばせを　ゐている土に拾はれぬ蘆　昌碧」（『如行子』）「Ite, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○筆に汲干ス　「筆に汲み干ス」。筆に含ませる為に（清水を）汲み干す、の意であろう。「干ス」といったのは、「飲み干す」の「干す」と同じく、水が少量で、すべて汲んでしまったさまである。「井の水をくみほす」（『名語記』四）「Cumifoxi, su, oita.」（『日葡辞書』）。

大意　筆を執って物書こうと、僅かの清水をすべて硯に汲みとるのだが、その露ほどの水も凍るばかり寒さがきびしいことよ。

考　『蕉翁句集』には「苔清水にて」と前書がある。『芭蕉庵小文庫』（史邦撰、元禄九年刊）の前書に従えば、貞享五年春吉野の西行旧庵跡での吟ということになり、『蕉翁句集』が貞享五年の部に出したのも、これを信じた為であろう。しかし『三つの顔』（越人撰、享保十一年成）には「此句は尾陽昌圭もとにて（ママ）せられけるを、何の集にやらん、凍解てとあやまりぬ」と注し、『熱田三歌仙』にも「尾陽昌圭がもとにての句也。いづれの集にや、凍解てと誤る」と見える。これら尾張の所伝、特に直門の越人の言はやはり尊重しなければならず、この句は名古屋で成ったものと思われる。遥か後代の『筆のしみづ』（和月撰、文化十年頃刊）に、前掲の発句に始まる二十四句の付合が収められたが、初五の「露冴て」は恐らく「凍」の草体を誤ったものらしく、これが越人のいう昌圭亭での作に当るのかも知れない。ただ脇の作者は「鏡鶏」とあり、その外にも不明の人物が加わっているが、重五・荷兮の名も見えるので、名古屋での作と推定される。名古屋での冬の作とすれば、最後の元禄四年冬は短期間の滞在ゆえ除くとして、貞享元年か四年、就中後者が有力となろう。しかし貞享元年冬の可能性も皆無ではない。「露」や「汲干ス清水」といった表現からして、こ

の句が伝西行歌「とく〱と落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなき住居かな」を踏まえたことは明らかである。後に推敲して吉野の苔清水での吟にしたのかも知れない。句の姿は『小文庫』が最も整っているようである。加藤楸邨氏や今栄蔵氏は、『三つの顔』と『小文庫』の句形を、それぞれ別句として扱っている。前者なら〔大意〕に示したような句意で昌圭への挨拶としたもの。後者は「この苔清水は冬の間の氷がとけて、筆執るべく硯にすべて汲み取るほど清水が湧き出ているよ」と、句を案ずる我が姿の背後に西行の姿を髣髴させているのである。

335

旅寝してみしやうきよのすゝ拂　（極月十三日付杉風宛書簡）

あら野・笈の小文・泊船集書入・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

旅をして見しや浮世の煤はらひ　（泊船集）

宇陀法師・世中百韻

冬季（すゝ払）。

語釈 ○**みしや**「見しや」。「や」は、詠嘆の切字。○**うきよのすゝ払**「浮世の煤払」。俗世間で行われる煤払。「うきよ」は既出（I 166）。「すゝ払」は、一般に行われる年末の大掃除で、実際には、この日を手始めに適当な日を撰んで行うのが例であった。「此月二十日以後撰吉日禁裏有御煤払。主殿寮献払煤之箒於禁裏院中。同箒柄南座献之。煤払以後至正月左義長不被用竹串之調味」（『日次紀事』）「当世において禁裏・院中の御煤取を始として、貴家比屋のわかちなく十二月十三日以後是をいたす。廿日には諸家の寺院に此事を行ふ。其由未考」（『滑稽雑談』）「夜るの日（ママ）や不破の小家の煤はらひ　如行」（『あら野』巻七）。

大意 世間のいそがしそうな煤払いを、私は旅寝をして、関わりもなくただ眺めて過ぎたことよ。いつの間にか、もう歳暮なのだ。

考 貞享四年と推定される極月十三日付杉風宛書簡に、「……霜月五日鳴海迄つき、五三日之中いがへと存候へ共、

……わりなくなごや引越候而、師走十三日煤はきの日まで罷有候」云々としてこの句を披露しており、当十三日名古屋での吟と知られる。『笈の小文』では、「師走十日余、名ごやを出て旧里に入んとす」としてこの句を出している。『泊船集』等の「旅をして」という句形は、『蕉翁句集草稿』に、「違也」という通り、杜撰な誤りに過ぎない。

この句の動機・内容については、左に引く加藤楸邨氏の説に尽されている。

この句では、上五の「旅寝して」のひびいて行く「浮世の」が眼目で、旅中煤掃を矚目して、旅寝の自分と煤掃の世間との二つの世界が眼前に繰りひろげられた軽い驚きである。これは旅寝の境遇に身をまかせきって世間を忘れがちであったが、煤掃という浮世のいとなみによって、はっきり自分の身の置き場を見せつけられたという その驚きである。常の人々の営みによって自分の姿をはっきりさせられてしまった気持ちが、「浮世の」という 発想を呼びさましている。（『芭蕉全句』）

いわば浮世の鏡に映された世外の自らの姿が、「みしや」の詠嘆に籠められているのだ。浮世と自分との対照を動機とした句はこれまでにも幾つかあったけれども、「花にうき世我酒白く食黒し」（Ⅰ166）は、浮世の浮華を白眼視する自恃の精神が中心であって、当面の句の境地からは遠い。それよりもこの煤払の句は、「よの中は稲かる頃か草の庵」（Ⅱ311）の筋を引くもので、俗世の事によって喚起された世外の身の自覚を、おだやかな詠嘆に包んでいるのである。

さやゟおそろしき髭など生たる飛脚めきたるおのこ同舩しけるに、折〻舟人ヲねめいかるに興さめて、山〻のけしきうしなふ心地し侍る。漸〻桑名に付て、處〻駕に乗、馬にておふ程、杖つき坂引のぼすとて、荷鞍うちかへりて馬より落ぬ。ひとりたびのわびしさも哀増て、やゝ起あがれば、まさなの乗てやと、まごにはしかられて

336 かちならば杖つき坂を落馬哉

（真蹟懐紙）

横日記・笈の小文・笈日記・泊船集・旅寝論・去来抄・三冊子・蕉翁文集

終に季の言葉いらず。

雑。

語釈 **○さやゟ** 「さや」は、今の愛知県海部郡佐屋町。木曾川の支流が此処を流れている。東海道で唯一つ舟航の便による桑名・熱田間の七里の渡は、風波の激しい時は舟が出せずに旅人が難渋したが、そういう際の脇道として桑名から佐屋まで木曾川筋を三里さかのぼり、佐屋から熱田まで六里の陸路をとるコースがあった。芭蕉はこの時名古屋から伊賀の上野へ赴こうとして、熱田から佐屋まで歩き、其処から川舟に乗って桑名へ向ったのである。以下の前書の前半は、その舟中の事を描いている。「ゟ」は「より」の合字。**○おそろしき髭など生たる** 「恐ろしき髭など生えたる」。下の「おのこ」にかかる。「蛍火やこゝおそろしき八鬼尾谷長崎田上尼」（『猿蓑』巻二）「Vosoroxij.」（『日葡辞書』）。**○飛脚めきたるおのこ** 「飛脚めきたる男」。「飛脚」は往時、信書・金銭・小貨物の運搬に当った人夫。江戸時代には、幕府公用の継飛脚、大名飛脚、民営の町飛脚等があった。飛脚を職業とするらしい男、の意。「お」は「を」の仮名ちがいである。「状箱を駿河の飛脚請とりて　沾圃　まだ七つにはならぬ日の影　里圃」（『続猿蓑』上）「Fiqiacu.」「Meqi, u, eita.……Fitomequ.」（『日葡辞書』）。**○同舩しけるに** 「同舩」は、同じ船に乗ること。「舩」は「船」の俗字。「我〻夫婦も同舩にて御供申べきが」（『国性爺合戦』第二）。**○舟人ヲねめいかるに興さめて** 「舟人ヲ睨め怒るに興醒

めて」。「舟人」は「船頭」「船客」の両義があり、ここは何れにもとれる。要するに同船の人々に当り散らすので、その為に気まずい雰囲気になってしまうのである。自分のむしゃくしゃを、わけもなく人中で発散している人は、時折見かける。「舟人にぬかれて乗し時雨かな　尚白」(『猿蓑』巻一)「近くに居れど長谷をまだみぬ　野坡　年よりた者を常住ねめまはし　利牛」(『炭俵』下)「高名仕らんとするを、ぬける太刀むなしくなし給ひつることといかりて、ひたぎりにきりおとしつ」(『徒然草』八十七段)「まちうけてみたまふ人〴〵、みな〴〵めをおどろかし、けうさめてぞおはしける」(『鉢かづき』)「Funabito.」「Icari, u, atta.」「Qeô sameguaoni naru.」(『日葡辞書』)。**○山〻のけしきうしなふ心地**　見渡される山々の絶景も台無しになる感じ、の意。「不二の句も、山のすがた是程のけしきにもなくては、異山とひとつに成べし」(『三冊子』赤雙紙)「かねてはたけく見えし人〴〵も、まことのきはになりぬれば、いと心あわたゞしくて、色をうしなひたるさまども、たのもしげなし」(『増鏡』新島守)「Qexiqi.」「Vxinai, ô, ôta.」(『日葡辞書』)。**○漸〻桑名に付て**　「漸〻桑名に付きて」。「桑名」は既出(I *210*)。「付」は「着」の宛字。「其日漸早加と云宿にたどり着にけり」(『おくのほそ道』)「Yôyô.」「Minatoni tçuqu.」(『日葡辞書』)。**○処〻駕に乗**　「処〻駕に乗り」。行程全部ではなく、処々で駕籠に乗り。「駕」は「駕籠」の略。「籠のわたりのあやうきところ〴〵、道もなき山路にさまよひて」(『猿蓑』巻四、凡兆発句「鷲の巣の」前書)「かごにのる人かご舁人、しなはかはれど行道はおなじこと」(『博多小女郎波枕』上)「Tocorodocoro.」「Nori, u, otta.」(『日葡辞書』)。**○馬にておふ程**　「馬にて追ふ程」。「おふ」は「馬追ひ」等の「追ふ」で、歩ませること。「足袋ふみよごす黒ぼこの道　芭蕉　追たてゝ早き御馬の刀持　去来」(『猿蓑』巻五)「Vmauo vô.」(『日葡辞書』)。**○杖つき坂引のぼすとて**　「杖つき坂引き上すとて」。「杖つき坂」は、今の三重県四日市市采女町と鈴鹿市石薬師との間の坂。日本武尊が伊吹山の神を討伐した帰途、病の為に疲れて杖をついて歩かれたのが名の起りと伝えられる。西鶴の『一目玉鉾』(元禄二年刊)巻三には、四日市のはずれ、東海道と伊勢街道の分れる追分のことを「是よりひだりに伊勢道あり、右かた本海道也。尾古曾むらをすぎて、うねめ町に砂川ありて、五十間の橋を掛し」と記した後、「○杖突の里／此町はづれに、すこしなれどもけはしきのぼり道有。馬も難義の所、旅人も杖なしには草臥とて、杖つきの坂といへり。爰饅頭の名とりし、気色よく休所也」と見える。「引のぼす」は、馬を引いて坂を上らせる意。「小川じや、そこせいかたせいまつかせ杖つき坂、小だに大だに打過て」(『博多小女郎波枕』下)「大師ノ御廟修造ノ為トテ、材木ヲ多ク山上ニ引ノボセタリケルヲ」(『太平記』巻十七)「Fiqinoboxe, suru, eta.」(『日葡辞書』)。**○荷鞍うちかへりて馬より落ぬ**　「荷鞍打ち返りて馬より落ちぬ」。街道筋の駄賃馬の背につけた荷鞍が引繰りかえって、

芭蕉自身が馬から落ちてしまったというのである。「うちかへり」の「うち」は接頭語。この馬は、大きな荷はつけない所謂「空尻」であろう。「荷鞍ふむ春のすゞめや縁の先　土芳」（『猿蓑』巻四）「あさましきもの……車のうちかへりたる」（『枕草子』九十七段）「馬のうへにて只ねぶりにねぶりて、落ぬべき事あまたゝびなりけるを」（『更科紀行』）「Nigura.」（『日葡辞書』）。○**ひとりたびのわびしさ**　「一人旅の侘しさ」。「侘しさは夜着を懸たる火燵かな少年桃先」（『続猿蓑』下）「Vabixisa.」（『日葡辞書』）。○**哀増て**　「哀れ増して」。みじめさが一層感ぜられて、の意。「三か月の陰にてすゞむ哀かな　素堂」（『炭俵』上）「積あげて暑さいやます畳かな　卓袋」（『続猿蓑』下）「**Auare uo moyouosu.**」「**Maxi, su, aita.**」（『日葡辞書』）。○**やゝ起あがれば**　「やゝ起き上れば」。やっと起き上ると。「はるの日のゝつと出しより、秋の月にかしらかたぶけつゝ、やゝ吟終り篇なりて」（『炭俵』序）。○**まさなの乗てや**　「正無の乗り手や」。形容詞「まさなし」は、正常でない、他愛ない状態をいう。その語幹に「の」をつけて形容詞の連体形と同じはたらきをさせる語法。「乗て」は「馬の乗り手」で、客として馬に乗った人、即ちここでは芭蕉を指す。「や」は、詠嘆の助詞。「馬から落ちたりして仕様のないお客さんだなあ」という馬子の言葉である。「わどのやまひにおかされて、まさなくそゞろごといふなめり」（蕪村『新花摘』）「馬を取たとしがみつく。けふの乗手は氏神やくそくの馬次迄やれ〳〵とせがまるゝ」（『丹波与作待夜のこむろぶし』中）「**Masana. l, masanano.**」（『日葡辞書』）。○**まごにはしかられて**　「馬子には叱られて」。「まご」は、駄賃馬を引く馬方。「初荷とる馬子もこのみの羽織きて　馬莧　内はどさつく晩のふるまひ　里圃」（『続猿蓑』上）「しかられて次の間へ出る寒さ哉　支考」（『枯尾花』芭蕉翁終焉記）「**Fitouo xicaru.**」（『日葡辞書』）。○**かちならば**　「徒歩ならば」。「馬にものらず、ほそはぎのちからをためさんと、かちよりぞゆく」（『鹿嶋詣』）「**Cachide yuqu.**」（『日葡辞書』）。○**杖つき坂**　前記の伊勢の地名「杖つき坂」に「杖つく」を言い掛けた。「おもひ立木曾や四月のさくら狩　ばせを　京の杖つく岨の夏麦　東藤」（『幽蘭集』）「**Bôuo tçuqu. l, tçuyeuo tçuqu.**」（『日葡辞書』）。○**落馬**　「ラクバ」。「寺と宇治との間にて……宮は六度まで御落馬にて煩はせ給ひけり」（謡曲「頼政」）「**Racuba. Vma. yori votçuru.**」（『日葡辞書』）。○**終に季の言葉いらず**　「終に季の言葉入らず」。発句には季語が必要なので色々工夫したが、とうとう季語が入らなかった（入れることが出来なかった）、の意。「終に路ふみたがえて石の巻といふ湊に出」（『おくのほそ道』）「連俳には季の詞なくては難とする故に、紙子は出たり」（『宇陀法師』）「**Tçuini.**」「**Cotoba.**」（『日葡辞書』）。

大意　徒歩でのぼったなら、杖つき坂の名の通り、杖をついても無事だったろうに、馬に乗ったばかりに落馬してし

まったよ。

考　真蹟懐紙は中山義秀氏蔵、『俳句』昭和三十五年六月号に荻野清氏が紹介されたもので、末尾に「初春の状にも此事書進じ候。もようおかしきゆへなり」と付記があり、貞享五年春の染筆と推定される。土芳の『横日記』や『蕉翁文集』、支考の『笈日記』に収められたもの（「紀行」という題は支考の案か）は、真蹟をもとに推敲したものらしく、内容に大差はない。『笈の小文』にも、前の煤払の句の次に、

桑名よりくはで来ぬればと云日永の里より馬かりて杖つき坂上るほど、荷鞍うちかへりて馬より落ぬ。

歩行ならば杖つき坂を落馬哉

と物うさのあまり云出侍れ共、終に季ことばいらず。

と見えている。旅の途中で出逢った一椿事から、地名に掛けて案じた即興頓作で、季語が入らなかったことにも、作者自身興じているのである。切字について支考の『俳諧古今抄』に事々しい論があるが、そうした出来方に照らしても概ね無用の説といって可い。

『笈日記』伊賀部には、右の落馬の一件の句文を掲げた後に、

その丶ちいがの人〻に此句の脇して見るべきよし申されしを

角のとがらぬ牛もあるもの　　土芳

とあり、土芳自身の『三冊子』にもこの発句・脇を挙げて、

□(蝕)の句は門人土芳が句也。先師、此句を風与仕たり。季なし。みな脇して見るべしと有。各〳〵様〳〵付て見侍れ共心にのらずして、ふと此句を見せ侍れば、宜しとて、その儘取て付られ侍る。師の心味ふべし。（赤雙紙）

と述べてある。この直後伊賀の郷里に入った時の話柄であろうが、土芳の脇は発句に見える遊び心によく叶うところがあるようである。

芭蕉翁記念館蔵真蹟句切・あら野・笈の小文・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・千鳥掛・こがらし集

337 ふるさとやへその緒になくとしのくれ　（石川県美術館芭蕉展図録所収真蹟懐紙）

歳暮

ふるさとや臍の緒なかむとしの暮　（若水）

冬季（としのくれ）。

語釈 ○**ふるさと**　「故郷」。ここは芭蕉の郷里伊賀の上野を指す。「あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言伝などしやる也」（『おくのほそ道』）「**Furusato. i, Coqiŏ.**」（『日葡辞書』）。○**へその緒になく**　「臍の緒に泣く」。「へその緒」は、胎児の臍と胎盤とをつなぐ細い帯状の器官。出産の際に切って保存しておく習慣がある。その臍の緒を見て、それに対して泣くのである。「へそ」の語については、『日葡辞書』の「Foso.」（臍）の項に、上（近畿地方）では「feso.」ということが注記されているのが参考になる。「きのふけふ生れ出、まだへそのをもおちぬ聖徳とやら、ふんとくとやらいふせがれ」（『用明天王職人鑑』第五）「**Fesono vo. l, fosono vo. …… Fesono vouo qiru, l, tçugu.**」（『日葡辞書』）。○**としのくれ**　「年の暮」。

大意 故郷に帰って来て、さまざまの思いが胸に迫る。この年末に我が臍の緒を見て親のことが思い出され、涙をこぼすことだ。

考 『千鳥掛』には「代々の賢き人々も古郷はわすれがたきものにおもほへ侍るよし。我今ははじめの老も四とせ過て、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまたよはひかたぶきて侍るも見捨がたくて、初冬の空のうちしぐるゝ比より雪を重ね霜を経て、師走の末伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛のむかしも悲しく、おもふ事のみあまたありて」と前書があり、『こがらし集』（青阿撰、寛政五年刊）の前書も略々同文である。右の文中に自らの年齢を四十四歳とし、十月以来旅を続けて「師走の末」に伊賀の上野に入ったことを述べており、『笈

の小文』にも前の杖つき坂の落馬の記事の後に句が見えるので、貞享四年の歳暮吟であることは論が無い。この年末芭蕉が郷里に帰ったのは、『千鳥掛』の前書に「師走の末伊陽の山中に至る」とあり、土芳の『全伝』も「トシノナゴリノコロ此里ニ入テ」としている。十二月十四日に名古屋を出たとして、郷里に直行したにしては時間がかかり過ぎる感じであるが、或いは桑名の本統寺あたりに淹留したのかも知れない。「臍の緒なかむ」という『若水』(嵐雪撰、貞享五年刊)の句形は「正月十日伊賀山中よりきこえ侍る」として掲げられ、『蕉翁句集草稿』でも注意していて、初案たる可能性が大である。多くの資料は中七の初めに「臍」の漢字を宛て、『蕉翁句集』には「ホソ」と振仮名があるが、真蹟懐紙に「へそ」と仮名書きしているのは、よみ方について決定的な原拠になるから、これを底本とした。他に無落款ながら、杉風の紙中極めのある真蹟句切が伝わっている。

この句を成した時の芭蕉の感懐は、『千鳥掛』所載の長い前書に尽されて余蘊がない。夙く故郷を捨てた芭蕉ではあったが、野ざらしの旅以来、それ以前に比べれば屢々帰郷するようになった。『笈の小文』の旅も、この翌年の二月に父与左衛門の三十三回忌を控えていることが、動機の一つだったのであろう。世間を離れた俳隠者も故郷に帰っては、さまざまの旧縁を何かにつけて思い出させられることが多い。特に年の暮には、我が齢や無常の時の流れを強く感じさせられるものだ。句中の「ふるさと」や「としのくれ」の語の背後には、こうした無限の思いが籠っている。「へその緒」は眼前に見ているわけではないとする説もあるけれども、これが単なる想像では、表現として力無いものにならざるを得ない。故郷での年の暮の万感を、特に痛切なものにするのが「へその緒」なのである。それは既にこの世にない両親、殊には母親との肉体的なつながりをまざまざと想起させるもの。俳諧一筋につながる世捨て人も、たまたま見出したこれには涙せざるを得なかったのである。山本健吉氏が言われたように、何の隠喩も寓意もない単純直截な叙述によって、言語に絶する複雑な感慨を描き切った「古拙な力強さがある」(『芭蕉全発句』)。また、貞享元年秋の「手にとらば消んなみだぞあつき秋の霜」(I *195*)の句が抒情に流れ、悲しみの強調が意識的なのに対して、当

面の句が「主観を言葉に氷結させてしまったような造型性がある」（山本氏『芭蕉その鑑賞と批評』）というのも確かなところであろう。それもこれも、句中唯一の具象物「へその緒」の働きである。この語はまた、「ほその緒」よりも更に日常的な用語であった。

なお「臍の緒なかむ」という句形は、臍の緒が泣くのではなく、「臍の緒に」「臍の緒を」といった助詞が省かれた表現であって、「なかむ」は意志であろう。

貞享五年・元禄元年

よひのとしは空の名残おしまむと、さけのみ夜ふかして、元日ひるまでいねたり

338　二日にもぬかりはせじな花のはる　（真蹟懐紙）

若水・あら野・笈の小文・柱暦・篇突・泊船集・三冊子・蕉翁句集

春季（花のはる）。

語釈　**○よひのとし**　「宵の年」。大晦日の夜のこと。「宵の年のせつなき事をわすれがたく」（『世間胸算用』巻五ノ二）。**○空の名残おしまむと**　「空の名残惜しまむと」。「去り行く年の名残を惜しもうとして」の意。「おほかたの秋のそらだにわびしきに物思ひそふる君にもある哉」（『後撰集』巻七、右近）のように、「空」には時候、時節の意味がある。ここの「空」はその更なる展開として、冬の終りの時節の意を含み、歳末の意の「年の名残」と同様の表現としたものであろう。後に掲げるように、芭蕉は『笈の小文』でもこの語を用いている。恐らく『徒然草』の「この世のほだしもたらぬ身に、たゞ空の名残のみぞをしき」（二十段）を意識していると思われる。「おしまむ」は「をしまむ」と書くのが正しい。「秋の名残もともにおしまれて」（『続寒菊』、芭蕉発句「むさし野や」前書）「Nagoriuo voximu.」（『日葡辞書』）。**○さけのみ**　「酒呑み」。「のみ」は、動詞の連用形中止法。「物をもいはず、ひとり酒のみて」（芭蕉「閑居ノ箴」）「Saqeuo nomasuru.」（『日葡辞書』）。**○夜ふかして**　「夜更かして」。「夜をふかして」の略。夜おそくまで起きているのである。「竹かはに夜をふかさじといそぎしもいかなるふしをおもひおかまし」（『源氏物語』竹河）。**○元日ひるまでい**

ねたり　「元日昼まで寝ねたり」。正月元日には昼まで眠っていた、の意。「元日は明ましたるかすみ哉加賀一笑」（『あら野』巻二）「昼は稀〱とぶらふ人ゝに心を動し」（「幻住庵記」）「我も日比のつかれに、しばしいねみいねずみ枕して」（一茶『父の終焉日記』五月十九日条）「Guanjit. i, Xôguachino tçuitachi.」「Yoru, firu.」「Ine, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**二日**　「フツカ」。ここは正月二日を指す。「Futçuca.」（『日葡辞書』）。○**ぬかりはせじな**　「抜かりは為じな」。手抜かり（失敗）はしまいよ、の意。「な」は、詠嘆。「名はぬるでぬからで早き紅葉哉　政公」（『毛吹草』巻六）「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」（『古今集』巻二、小野小町）「Nucari, u, atta.」（『日葡辞書』）。○**花のはる**　「花の春」。新年を祝う初春の季語。「たれ人の手がらもからじ花の春釈古梵」（『あら野』巻二）。

大意　二日にはもうこんな失敗はしまいよ、折角のめでたい新年に。

考　「そらの名残おしまんと旧友の来りて酒興じけるに、元日のひるまでふし、明ぼのみはづして」（『若水』。『篇突』も略々これと同文）「二日」（『柱暦』）「元日はひるまで寝て、もちくひはづしぬ」（『泊船集』）等の前書がある。『笈の小文』にも、前の「旧里や」の句の次に、

　　宵のとし空の名残おしまむと、酒のみ夜ふかして、元日寐わすれたれば、

と、真蹟懐紙と同趣の文を書いてこの句を出しており、貞享五年正月元日の作たることは確かである。句の内容からして二日の作と見るべきではないから、『柱暦』（鶴声撰、元禄十年刊）の題は精確とはいえない。嵐雪の『若水』には「正月十日伊賀山中よりきこえ侍る」と注しており、書状で江戸の嵐雪にも報じたのであろう。偽簡と見られる芭蕉書簡に見える異形は、何れも問題にならない。

　一年のはじめの元旦には、早くから起き出て初日の出を拝み、家内揃って雑煮の餅を祝うのが仕来りである。普段独り住みの芭蕉庵では、そうした事もそこそこに済ますところだろうが、伊賀の郷里に帰って兄半左衛門の家で迎える正月は、世間並みの事が行われ、芭蕉もそれに参加すべきだったのだ。ところが、前夜人が来て酒を呑み夜更かしをしたお蔭で、寝過してしまい、初日の影も雑煮の餅も見はずし食いはずす羽目になった。とんだ失敗にいやはやと

頭を掻きながら、苦笑している芭蕉の姿が目に浮ぶ。こんな句が出来たのも故郷の兄の家で気の置けない血縁の人々に囲まれた気易さ故であろう。『三冊子』には、

この句は、元日ひるまでいねて餅食はづしたりと前書有り。此句の時、師のいはく、等類の気遣ひなき趣向を得たり。このてに葉は、二日にはといふを、にもとは仕たる也。にはといひては、余りひら目に当りて、聞なくいやしと也。（赤雙紙）

という記事が見える。「等類の気遣ひなき趣向」とは、同類の趣向の先行作の有無を気にする必要のない新趣向の意。一種の諧謔であって、てに葉の事と直接の関係はない。さて、芭蕉自身の解説によれば、「二日にも」は「二日には」というべきところを「にも」としたのであった。その理由は、「には」では余り平目（平板・平俗の意）に当り、聞いた感じが卑しくて良くないからだという。そうすると、この句は、意味の上では「二日にはぬかりはせじな」と同様に解すべきものということになろう。この「にも」については、「二日にも又このような失敗はしまいよ」と並列の意にとる説もあるけれども、そうではなくて、「明日二日には今日のような失敗はしまいよ」ということなのだ。ところがそれでは「二日にはぬかりは」と「は」が重なる上、散文的で聞いた感じが良くないので、「にも」としたのである。「も」は即ち詠嘆の間投助詞で、調べを和らげ、詩的なうるおいを添える働きをする。強いて訳せば「二日にはマア、今日のような」云々となろうか。「ぬかり」というような俗語を用いながら、「句の姿」（『去来抄』修行）を重視する芭蕉の志向が、ここにもあらわれたものと言えよう。

杖つき坂の落馬の句や「ぬかりはせじな」の句は、何れも作者自身の些細な失敗を種にした微苦笑的気分を身上にしている。軽い気分の句なので重量感には乏しいが、くつろいだ作者の気持が反映して、なつかしい風懐を感じさせる作である。

初春

339 春立てまだ九日の野山哉 (笈の小文)

初蟬・泊船集・蕉翁句集

春季(春立て)。

語釈 ○初春 「ハツハル」。陰暦正月の春まだ浅い趣。「初春(しょしゅん)」(I 225)参照。「はつ春のめでたき名なり賢魚(ママ)ヽ 越人」(『あら野』巻二)「Fatçu faru. i, Xóguat.」(『日葡辞書』)。○春立て 「春立(はるた)ちて」。言葉通りには、立春の節を迎えて、の義であるが、ここは年が明けて新年になったことを、この語で表現したもの。なお、〔考〕で述べる。(I 38)参照。○まだ九日 「九日(ここのか)」は、正月九日。まだ一旬にも満たない春の浅さをいった。○野山 「ノヤマ」。野や山。「花にすく人や野山を家桜 望一」(『毛吹草』巻五)「No yamauo caquru.」(『日葡辞書』)。

大意 年が明けてまだ九日にしかならない野山のさまは、冬の趣のままながら、やはり争えない春の気配を漂わせていることだ。

考 「風麦亭にて」(『初蟬』)「風麦亭」(『泊船集』)等の前書がある。この句は竹人の『蕉翁全伝』元禄元年(貞享五年)の条に、「其春風麦氏小川亭に会して」として見え、土芳の『蕉翁全伝』貞享五年の条にも、「二日にも」の句について「此句正月九日風麦ニ会シテノ吟也」とあって、正月九日に小川風麦(二百石取の藤堂藩士)亭で俳席が設けられたことが知られる(土芳『全伝』の曰人写本では、「二日にも」の句に注した形になっているが、これは「春立て」の句をこの箇所に脱したものであろう)。句中の「春立てまだ九日」の表現に徴しても、この句が正月九日風麦亭での吟であったことは疑いを容れない。

「春立てまだ九日の」といっただけで、その「野山」のさまが霞んでいるとか春めいているとかいう形容は一切無

い。こういうところが俳諧というものの特色をよくあらわしている。これが和歌ならば、『拾遺集』の壬生忠岑の巻頭歌「はるたつといふ許にや三吉野ゝ山もかすみてけさは見ゆらん」といった表現になるのが普通である。芭蕉もさきの野ざらしの旅では「春なれや名もなき山の薄霞」（I 227）の句があって、なお具象的な形容を残していたのである。ところが当面の句では自然の具象的形容は影をひそめ、凡ては新年になってまだ九日しか経たないという表現に籠められて、それで春浅い趣を読者は領得するという仕組である。しかも、何がどうという具象物の指摘がないだけ、句の世界は大きなひろがりを持ち、待ち得た春になごむ気分が悠揚とした調べに感ぜられよう。風麦亭からの眺めを動機とした即興の挨拶であろうが、無造作な句作りが成功した例といえる。

『句選年考』には、

白雄此句に付、長翠同道信州より江戸愛宕下東海寺へ来り、貞享四年の暦を借りて見る。是は一通りの歳旦にては不ㇾ分、定て貞享五年の前年十二月九日立春なるべしとて此事有り。極て右の通にて、此時初めて白雄の考訂を恐る。

と事々しい記事があるが、十二月九日立春と「春立てまだ九日」とは一緒にはならず、句意もそれでは分らない。それに貞享五年の立春は正月四日であった。それから九日とすれば十二日になるが、そんな勘定を合わせるより、「春立て」を新年を迎えた意に用いて、正月九日の会を面白く言い做したと見れば、話は簡単である。文字通りの暦の立春は、この句と関わりはないのだ。

340　あこくその心もしらず梅の花　（蕉翁句集草稿）

あこくその心はしらずんめの花　（三冊子）

蕉翁句集

春季（梅の花）。

語釈 ○**あこくそ**　『古今集』の撰者紀貫之の幼名。『倭訓栞』に「源氏物語の抄に、貫之が童名内教坊のあこくそと云へり」とある。「あこくその「あこ」は吾子（アコ）の意で童男・童女の称とされ、又大鏡に道隆の童名を阿古君とある如く、固有名詞としても用いられた。「くそ」はこその転で、こそはもと称呼の下に添へる尊称であるが、又宇津保物語に見える「たゞこそ」の如く、人名にも添へていふ語となつた。それを久曾と転じ、かつ人名に用ひた例は大和物語に「小薬師久曾」などの名が見える」（潁原博士『新講』）「阿古久曾のさしぬきふるふ落花哉」（『蕪村句集』）。

大意 あこくそが歌を詠んだ気持はどうだったか知らないが、今我が故郷の梅の花は、昔のままに匂っている。

考 土芳の『蕉翁句集草稿』に「此句は風麦子にて兼日会に句を乞はれし時の吟也」、同じく『蕉翁全伝』に「此句正月九日風麦ニ会シテノ吟也」とあり、前の「春立て」の句と同じ折に成った句と知られる。

句の趣向は『古今集』巻一に、

はつせにまうづるごとに、やどりける人の家に、ひさしくやどらで、程へて後にいたれりければ、かの家のあるじ、かくさだかになんやどりはあると、いひいだして侍ければ、そこにたてりける梅の花ををりてよめる　　つらゆき

ひとはいさ心もしらずふるさとは花ぞむかしのかににほひける

とある歌と前書に基づき、その表現を踏まえたのである。貫之といわずに「あこくそ」というその幼名を用いたのは、その名の響きが俳諧に聞えること、王朝風の優雅な雰囲気を持つこと、芭蕉自身の幼時を懐う気分を反映させること等、さまざまの動機が渾融しているであろう。貫之の原歌は一種の減らず口で、人の心の移り易さを諷した気味があるが、句はそれとは関わりなく、「ふるさと」を単なる旧馴染みの土地ではなくて「故郷」の意に取做し、その梅の花と共に人の気持の温さをも、なつかしく言い取っている趣がある。

土芳はこの句の切字について、句案の消息を次のように伝えている。

切字いろ〳〵なしかへられて、心にのらざるのよし見え侍る故、予、此句はよく切侍るかと云ければ、切るゝ事は切れ侍れども、切字を能入(よくいれ)たるよし。初心の思ひ迷ふて、みだりにならん事を慎りと云り。(『蕉翁句集草稿』)

ある時、あこくその心はしらずんめの花と云句をして、切字をいるゝ事を案じられし傍にありて、此句は切字なくて切るやうに侍ると云ば、切る也。され共切字はたしかに入たるよし。初心の人の道のまどひに成てあしゝ。つねにつゝしむべし。まして、させる事もなき句は、句を思ひ止とも、常にたしなむべしと示されし也。(『三冊子』白雙紙)

この句の切字は「しらず」であるが、芭蕉はもっとはっきりした切字があった方が良いと考えて、いろいろ案じ替えたようである。しかし、思うような表現が得られず、結局この形に落着いたのであろう。問答に見えるように、「や」「かな」等のはっきりした切字がなくとも、この句は切れているのである。なお、「心もしらず」を『三冊子』の主な伝本は凡て「心はしらず」としているが、貫之の原歌が既に「心も」であり、土芳の他の編著が「心も」と伝えている方が信憑性が高い(土芳の『全伝』も「心も」)。『三冊子』の句形は誤伝であろう。歌も句も、何れも「も」は、「二日にも」(Ⅱ338)の句の場合と同様に、詠嘆の間投助詞なのである。

341　枯芝やや　かげろふの一二寸(笈の小文)

かれ芝やまだかげろふの一二寸(あら野)

——真蹟十句懐紙・泊船集・蕉翁句集

春季(かげろふ)。

語釈　○**枯芝**「カレシバ」。「芝」は、野原や路傍に生える葉の細いイネ科の草。ここは春になっても冬枯のままのものをいう。

「かれ芝や若葉たづねて行胡蝶　百歳」（『あら野』巻二）「Xibauo qiru, vtçu, l, vocosu.」（『日葡辞書』）。○やゝ　ようやく、やっと、の意。既出（Ⅱ336前書）。○かげろふの一二寸　「陽炎の一二寸」。春の日ざしが地表近くで熱せられて散乱し、物の形の外辺にちらつく物の見える現象が「かげろふ」である。それがまだ一、二寸（一寸は三センチ強）として、春浅い趣をいった。「かげろふ新式に雑とあれば雑也。……陽炎とて、春の日のあたゝかにさす時、甍のうへなどにちら〱と眼にさへぎる物をいふ。又春草をもいふといへり。古今に、今更に雪ふらめやもかげろふのもゆる春日と成にし物をとよめるは陽炎也。さるによりて連にも、もゆるとすれば春也」（『御傘』）「かげろふや馬の眼のとろ〱と　傘下」（『あら野』巻二）「Caguerô.」（『日葡辞書』）。

大意　野中の芝は枯れたままながら、その上にようやく一、二寸ほどの陽炎がゆらめいて見えることだ。

考　『笈の小文』には「初春」と題した「春立て」の句（Ⅱ339）と並んでおり、「初春」は「枯芝や」の句までかかるのであろう。やはり正月の伊賀滞在中の吟と見られ、伊賀に伝存する真蹟十句懐紙は当時の染筆と推定される。

冬枯のままの芝の上に立つ僅かな陽炎に目をとめた叙景句で、内には作者の春待つ心が籠っている。自然を微妙に深く観察した佳句で、当時としては、この句のような自然の生かし方はまったく新鮮な句風であった。つまり、自分の気持ちなどを語ったりしないで、逆に、自然を精妙に生かすことで、それに目をそそいで感動している人間が生かされているのである。（『芭蕉全句』）

という加藤楸邨氏の見方は、蓋し適評であろう。「まだ」という『あら野』等の句形は、「一二寸」との間に理を含んで、表現としては「やゝ」よりも劣る。恐らくこれが初案であって、『笈の小文』執筆の元禄三年以降に改案されたものと思われる。これまた『笈の小文』の成立が『あら野』刊行後であったことを示す一証であった。『一葉集』の「枯芝やまだ陽炎も一二寸」という句形はその根拠が明らかでなく、問題にならない。

342

丈六にかげろふ高し石の上（笈の小文）

芭蕉庵小文庫・泊船集

阿波大佛

丈六にかげらふ高し石の跡（田中氏旧蔵真蹟詠草）　蕉翁全伝附録

そのとし阿波といふ所の大佛に詣して

丈六のかげろふ高し石の上（笈日記）　三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁文集

丈六の陽炎高し砂の上（土芳蕉翁全伝）

かげろふに俤つゞれ石の上（三冊子）　蕉翁句集草稿

かげらふや俤つゞれいしの上（土芳蕉翁全伝）

陽炎の俤つゞれいしのうへ（竹人蕉翁全伝）

春季（かげろふ）。

語釈 ○**丈六にかげろふ高し**　「丈六に陽炎高し」。「丈六」は、一丈六尺（約四メートル八十五センチ）。仏の三十二相の一で、仏像の標準的な高さである。その高さに陽炎が立っている、という意。「暫ク有テ林ノ中ヨリ歩ミ出タルヲ見レバ、長ハ丈六、頂ハ紺青ノ色也」（『今昔物語集』巻四ノ八）「松高し引馬つるゝ年おとこ　釣雪」（『あら野』巻二）「Tacai.」（『日葡辞書』）。○**石の上**　「石」は、仏像を載せる石造の台座。蓮華を象どっているので、「蓮台」と呼ばれる。後掲『笈の小文』の文参照。

大意　虚しい石の台座の上に、丈六ほどの高さに陽炎がゆれて、ありし日の尊像のお姿を偲ばせる。

考　『泊船集』には「伊賀新大仏之記今略之」と前書があり、『芭蕉庵小文庫』や『蕉翁文集』には「伊賀新大仏之記」と題した文が句の前にある。『笈の小文』にも、「春立て」「枯芝や」の初春の句を並べた次に、

伽藍は破れて礎を残し、坊舎は絶て田畑と名の替り、丈六の尊像は苔の緑に埋て、御ぐしのみ現前とおがまれさせ給ふに、聖人の御影はいまだ全おはしまし侍るぞ、其代の名残うたがふ所なく、泪こぼるゝ計也。石の連台(ママ)、獅子の座などは、蓬葎の上に堆く、双林の枯たる跡も、まのあたりにこそ覚えられけれ。

伊賀の国阿波の庄といふ所に俊乗上人の旧跡有。護峰山新大仏寺とかや云。名ばかりは千歳の形見となりて、

と叙して、この句が収められている。芭蕉は貞享五年春、郷里の「旧友宗七・宗無ひとりふたりさそひ物して」(『伊賀新大仏之記』)、今の三重県阿山郡大山田村富永の地にある新大仏寺の遺跡を訪ねたのであった。鎌倉初期、奈良東大寺の大仏再興で有名な俊乗坊重源開基の寺院である。同行した宗七は窪田氏、大和屋といった伊賀上野の造り酒屋、宗無は菅野氏、同じく上野の米問屋の出であるが、後に禅門に帰したという。

この年春の芭蕉の新大仏寺訪問は、右の『笈の小文』の書き方では二月初めからの伊勢行の前の事と見られるが、その確証に乏しく、伊勢行の後と考える余地もないではなかった。ところで『笈の小文』に於いて、

伊勢山田

何の木の花とはしらず匂哉

裸にはまだ衣更着の嵐哉

と並べられた二句は、前者が二月四日、後者が滞留最後の日二月十七日の作である。この時の伊勢滞在中の句を記した田中善助氏旧蔵の真蹟詠草(今は所在不明ながら、竹人の『蕉翁全伝附録』に臨摸されているのによって全体の体裁を窺うことが出来る)には、「何の木の」の句は見えるが、「裸には」の句は見えない。この二句は芭蕉が常に一対の作と意識していたもので、若し右の真蹟詠草が伊勢を発して伊賀の郷里に戻ってから揮毫されたものならば、「裸には」の句を書かないわけはないのである。そうして見ると、この真蹟詠草は十六日以前、伊勢滞在中に書かれたものと考えざるを得なくなる。その詠草の初頭に新大仏寺での句が記されているということは、取りも直さず右の訪問

が伊勢行の前、恐らくは伊勢へ赴く途中に立寄ったのであろうことの証左になろう。委しくは拙稿「芭蕉「伊勢懐紙」の成立と新大仏寺参詣の時期等について」（『専修国文』第四三号）を参照されたい。

最初に掲げたように、この句には種々の句案が伝えられているが、右の事情をも参考にして、推敲過程を考えて見よう。先ず真蹟詠草に見える「丈六にかげらふ高し石の跡」が最初の案であることは疑いない。次に、「丈六の」という『笈日記』の句形については土芳自身が、

白船（ママ）には、丈六に、と有。の也。又、かげろふに俤つゞれ石の上と云句有。人にもきかせて後、かげろふ高しに尽ル。（『蕉翁句集草稿』）

と述べている。『草稿』の文は特に『泊船集』の「丈六に」という句形に対する批判であるが、土芳が「に」ではなくて「の也」と断定するについては、「人にもきかせて後、かげろふ高しに尽ル」という事情を、自身が直接見聞していたからに違いない。芭蕉は二月十八日に上野に戻った後、土芳も同席した所で色々と句案を練り、人にも吟じて聞かせたりした。その過程で「かげろふに俤つゞれ石の上」といった別案も浮んだのであろう。そしてこの時は「丈六のかげろふ高し石の上」の形に決定したのである。それを直かに聞いていた土芳が「の也」と自信を持って断定したのも尤もである。この貞享五年二、三月頃執筆されたとおぼしい『小文庫』所収の「伊賀新大仏之記」が「丈六に」の形であるのは矛盾のようだけれども、土芳の『蕉翁文集』所収の文案の方は「丈六の」となっており、『小文庫』の句形は誤伝で、『文集』の方が真を伝えていると思われる。

しかし、芭蕉は元禄三、四年頃『笈の小文』を執筆するに当って更に手を加え、「丈六にかげろふ高し石の上」の形で最終的に治定した。「丈六の」をまた「丈六に」の形に戻したのは、「の」も頽破した尊像のありし日の幻を描いて力強い表現ながら、下へのつながりが直接的に過ぎる為に、「高し」が余り利かない憾みがある。「丈六に」と副詞

化すれば、「高し」の情況を具体的に精しく述べることになるから、その難を免れよう。そういう考慮から、芭蕉は最終的に初五を「丈六に」としたのではあるまいか。土芳は『笈の小文』に於ける推敲を後に至るまで知らなかった為に、芭蕉歿後も「の」説に固執したのであろう。土芳が『笈の小文』の句形を知らなかったらしい形跡は、前の「枯芝や」の句で、『蕉翁句集』が「まだかげろふの」の形に従っているところにも現われている。

今栄蔵氏は右のような考えとはちがって、「丈六の」は土芳の錯誤と見ておられる。有名な「木のもとに汁も鱠も桜かな」(『ひさご』)の句について、土芳は一貫して「木の本は」という句形に固執している例を挙げて、彼にはそういう不可解な思い込みをすることがあり、「丈六の」もその例ではないかというのである(今氏著『芭蕉伝記の諸問題』第二部第七章)。確かに「丈六に」は初案からの表現なので、それを中途で「の」に改め、又元に戻したというのは不自然な過程と考えられなくもない。しかし『ひさご』の花見の句の場合、土芳は丈六の句のように「人にもきかせて」(『句集草稿』)「人にも吟じ聞せて、自も再吟ありて」(『三冊子』)という程、具体的に同座の折の句案の情況を伝えているわけではない。勿論「花見の句のかゝりを少し心得て、軽みをしたり」(『三冊子』赤雙紙)という貴重な作者の言を伝えてはいるが、これは句案の当座の発言とは限らぬであろう。「丈六の」について土芳がここまで具体的に情況を述べているのは、その所伝の句形の信憑性を増すものではあるまいか。これが「思い込み」として片づけられないとすれば、推敲過程はさきに述べた私の考え方のようになって来ると思う。

新大仏寺は嘗ては広大な規模を誇った伽藍であったが、芭蕉の訪れた時は見る影もなく荒れ果てていた。寛永十二(一六三五)年五月の暴風雨で山崩れがあり、本尊の盧舎那仏が埋没し、堂舎も倒壊してしまったのである。『小文庫』所収の「伊賀新大仏之記」には、

仁王門・撞楼のあとは枯たる草のそこにかくれて、……蓮花台・獅子の座なんどは、いまだ苔のあとをのこせり。御仏はしりへなる岩窟にたゝまれて、霜に朽苔に埋れてわづかに見えさせ玉ふに、御ぐし斗はいまだつゝがもな

く、上人の御影をあがめ置たる草堂のかたはらに安直（ママ）したり。

と『笈の小文』以上に精しい叙述があり、「誠にこゝらの人の力をついやし、上人の貴願いたづらになり侍ることもかなしく、涙もおちて談もなく、むなしき石台にぬかづきて」と所懐を記している。無常の時の流れの中に、仏像も伽藍も嘗ての面影をとどめない嘆きが句の動機なのである。陽炎は一丈六尺もの高さに立つことはなく、増して実際に訪れた陰暦二月初の頃では猶更であろう。「丈六に」は本尊が損われずにあった嘗ての日の姿を幻に現じた手段なのである。中途の別案「かげろふに俤つゞれ」は、そうした意図を露わに見せているが、何の俤なのかこれだけではっきりしないし、「つゞれ」という呼び掛けがそれだけ空疎に響くのを免れず、捨てられたのは当然だった。「丈六にかげろふ高し」という思い切った想化は、写実を突き抜けて極めて力強く、遺跡に立った作者の懐古的詠嘆と無常観の深さを訴え掛けて止まない。推敲過程で問題になるのは、前述の如く「丈六にかげろふ高し石の上」「丈六にかげろふ高し石の跡」「丈六のかげろふ高し石の上」「かげろふに俤つゞれ石の上」の四句形であって、他は凡て誤伝と思われる。

343

参宮

何の木の花とはしらず匂ひ哉（無日付杉風宛書簡）

勝延筆歌仙懐紙・出光美術館蔵真蹟懐紙・芭蕉図録所収真蹟懐紙・田中氏旧蔵真蹟詠草・真蹟集覧・蕉翁全伝附録・笈の小文・菊の塵・蕉翁句集・花はさくら・枇杷園随筆

山行

何の木の華ともしらず匂ひかな（名月集）

伊勢御神前にて

何の木の花ともしれぬ匂ひかな（反故集）

笈日記・泊船集

何の木の花とも見へず匂ひかな（三冊子）

春季（花）。

語釈 ○**参宮** 「サングウ」。神社に参詣することであるが、特に伊勢神宮に参詣することをいう。「来春女ぼう共が参宮いたすつかひ銀なれども」（『世間胸算用』巻三ノ二）「Ixe sangŭ.」（『日葡辞書』）。○**何の木の** 出光美術館蔵真蹟懐紙に「なにの木の」と表記されており、「何」の字の訓みについて参考になる。

大意 伊勢の神域に、何という木の花とは分らないが、妙なる匂いが漂うて、如何にも神々しいことだ。

考 「西行のなみだ、増賀の名利、みなこれまことのいたる処なりけらし」（出光美術館蔵真蹟懐紙）「いせに詣で〻西上人のなみだのあとをしたひ、増賀聖のむかしをおもひて」（芭蕉図録所収真蹟懐紙）「いせ」（田中氏旧蔵真蹟詠草・蕉翁全伝附録）「外宮に詣ける時」（真蹟集覧）「伊勢山田」（『笈の小文』）「西行のなみだをしたひ、増賀の信をかなしむ」（『笈日記』）「いせ神法楽」（『泊船集』）「二月十七日神路山を出て、西行の涙をしたひ増賀の信をかなしむ」（『蕉翁句集』）「貞享五とせ如月の末伊勢に詣づ。此御前のつちを踏事、今五度に及び侍りぬ。更にとしのひとつも老行ま〻に、かしこきおほんひかりもたふとさも猶思ひまされる心地して、彼西行のかたじけなさにとよみけん涙の跡もなつかしければ、扇うちしき砂にかしらかたぶけながら」（『花はさくら』。『枇杷園随筆』にも同趣の文）等の前書があり、このうち「増賀」云々の事があるのは、伊勢を去るに当って二月十七日に詠まれた「裸には」（Ⅱ353）の句に関するもので、何れも「何の木の」「裸には」の二句に併せて付せられた前書である。杉風宛書簡に「二月四日参宮いたし」と見え、後でこの句を書いているので、この日に成ったことは疑いない。土芳の『蕉翁句集』が、「裸には」の句と共に元禄三年の部に出しているのは誤りである。なお、『花はさくら』（秋屋撰、寛政十三年刊）の長い前書は、参宮の時期を「如月の末」としたり、参宮が五度に及ぶといっていること、句の再案として、「何の木の花とも知らぬ匂ひ哉」という句形を掲げる等、内容面に疑問が持たれる。歌仙はこの句を発句に、益光の家で伊勢の神官達と興行されたものである。中七の異伝は何れ

も信じ難く、真蹟類の一致する「花とはしらず」に従うべきであろう。
「西行のなみだ」といった類の前書は、延宝二年刊の『西行法師家集』に見える「何事のおはしますをばしらねどもかたじけなさの涙こぼるゝ」の歌を踏まえたことを示すもので、このことは『三冊子』にも説かれている。芭蕉は初五と中七にこの本歌をほのめかし、下五に於いて本歌にはない花の「匂ひ」を点出した。抑々西行歌は伊勢神前に額ずく作者の敬虔な気持を叙しただけであって、具象物は何もない。これに対して蕉句の方は、「花の匂ひ」のみあって、作者の感懐は句裡に籠められてしまっている。その花さえ「何の木の花とはしらず」なのである。内藤鳴雪が、

神前にぬかついた時の心持を理想的に、何の木の花であるか気高いにほひがしたと叙したので、実際匂ふ木があつて其名を知らぬといふ意味ではない。西行の何事のおはしますと言つたのから、何事を実物にかへて何の木とした位な事であらう。斯かる敬神の場合には斯様に理想的の事を実地らしく言ひなすもよい。花の木の何であるかは穿鑿するに及ばぬ。（『芭蕉俳句評釈』）

と述べている通りで、この「花」は現実の何かの花ではなく、象徴性の高い（「理想的の」）ものなのである。しかも、神域の神々しさを象徴する「花の匂ひ」に句の表現は集約され、作者の気持は内に籠められて外にあらわれないだけ、読者に強く訴えるものになった。この句の表現力と言い難い気品は、こうしたところから発していると見られよう。

344　梅の木に猶やどりきや梅花　（田中氏旧蔵真蹟詠草）

網代民部息雪堂會
ちゝが風雅をそふ

梅の木の猶やどり木や梅の花　（蕉翁句集草稿）

あら野・笈の小文・笈日記・泊船集・蕉翁全伝附録・蕉門録

蕉翁句集

春季（梅花）。

語釈 ○**網代民部息雪堂会** 「アジロミンブソクセツダウノクワイ」。「網代」は「足代」の誤り。足代民部は伊勢外宮の師職家で、名は弘氏。神風館一世と号した俳人である。天和三年四十四歳で歿した。この人については、許六の『歴代滑稽伝』（正徳五年刊）に、「伊勢足代弘氏は神職の人也。談林の時上手の名あり。……百韻の附味句作り、宗因に等し」と見えている。「息」は、子息の意。弘氏の子弘員は通称助之進また権大夫。この人も胡来と号して神風館二世を継いだ俳人で、雪堂は別号であろう。後でふれる平庵宛芭蕉書簡によれば、弘員も父と同じく民部と称したようである。享保二（一七一七）年八月二十三日歿、享年六十一。「会」は、俳席の意。「此夜木因ニ会。息弥兵ヘヲ呼ニ遣セドモ不行」（『曽良旅日記』元禄二年九月三日条）「Socu.」（『日葡辞書』）。○**ちゝが風雅をそふ** 「父が風雅を擬ふ」。雪堂の父弘氏の風流ぶりをなぞらえる意の句であることをいう。俳諧を風雅の道とし、弘氏に俳諧の嗜みがあったことを褒めたのである。「が」は、所有格。「たな霧らひ雪も落らぬか梅の花開かぬが代にそへてだに見む」（『万葉集』巻八、安倍奥道）「さては花若が父の空しくなりたるな」（謡曲「柏崎」）「予が風雅は夏炉冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし」（『許六離別詞』）「Chichi.」「Fūga. i, Xijcano michi.」（『日葡辞書』）。○**猶やどりきや** 「猶宿り木や」。父と同じく俳諧を嗜むことを「やどりき」に譬えた。宿り木は、他の植物に寄生する植物の総称。『日葡辞書』には「Yadoriqi.」とあって「キ」を濁っていないので、ここでも清音によむ。「猶」は、加えて、更に、の意。「や」は、詠嘆の切字。「麦畑や出ぬけても猶麦の中　野坡」（『炭俵』上）「あれはつるくち木のもとをやどり木と思ひおきけるほどのかなしさ」（『源氏物語』宿木）。○**梅花** 「梅の花」。

大意 立派な梅の木にも比すべきお父上に、更に宿り木した若木が、見事な花を咲かせていますな。

考 「網代民部の息に逢て」（『あら野』『泊船集』『蕉翁句集』）「網代民部雪堂に会」（『笈の小文』）「胡来亭」（『笈日記』）等の前書があり、『笈日記』には句の後に「是はその父弘氏のぬし此道の風流に名あるゆへなるべし」と付記している。山田で足代民部に招かれたことは、山田の俳人平庵に宛てた二月十一日付の書簡に、

　先以先夜民部殿へ被召寄候而御厚志之御馳走、貴様御内通よろしき故と、御亭主振感心、忝奉存候。

と見え、二人の会見には平庵の推挽があったことが知られる。書簡の他の文面によると、芭蕉は十日に山田の嵐朝なる俳人を訪ねて一泊しており、民部に招かれたのは二月九日以前のことと推定されるのである。

句形については、初五を「梅の木の」とする土芳の所伝が注意をひく。『蕉翁句集草稿』には、

此句阿ら野に有。網代民部の息に逢てと前書有。笈日記には胡来亭と有。同人か。白船に、梅の木にと有。直に聞、見るにけ高き雨の青柳、と雪堂が脇ありと也。

とあり、芭蕉の直話によって他の資料に見えない雪堂の脇まで記している。『あら野』や『笈日記』も「梅の木に」であるのに、何故『泊船集』だけを問題にしたのか不審であるが、土芳は兎に角「梅の木に」の句形を無視したわけではなかった。それにも拘らず「梅の木の」と書いているのは、何か拠る所があったかとも考えられるが、伊勢滞在中に揮毫された真蹟詠草に「梅の木に」と書いているところを見ると、伊賀に帰ってから「梅の木の」と案じ変える可能性は殆んどあるまい。「の」は誤伝とせざるを得ないと思う。

足代氏父子が二代にわたって俳諧に名あることを、梅の木に又梅が宿り木した趣に譬えたのである。梅に梅の宿り木は珍しいといわれるが、それによって父子の何れ劣らぬ風雅の品位を仄めかしていると見られる。

岡本勝氏は、弘員が父の存命中こそそれなりの俳諧活動が見られるものの、芭蕉が訪れた頃は殆んど俳諧から遠ざかっていたらしいとされ、「そうした点を考え合わせると、いかに挨拶の句とはいえ、弘員に対して「風雅の花を咲かせている」とはいわないように思う。そうなれば、この句の梅は、やはり西山宗因でなくてはなるまい。そしてやどり木をしたのが、宗因から談林俳諧を学んだ弘氏なのであろう。句意は、宗因という梅の木に、弘氏はやどり木をして見事な伊勢の談林俳諧という花を咲かせたことよ、というのである。この句は、直接に弘員に対する挨拶ではないが、伊勢俳壇に大きな足跡を残した足代家に対する挨拶となっているのである」(『近世俳壇史新攷』第二章)と述べておられる。前書からしても、芭蕉が弘氏に対して高い関心を持っていたことは窺われるが、挨拶句としては、やはり対面している当の弘員が中心になるべきであろう。この時には「見るにけ高き」という芭蕉に敬意を表した弘員の脇があったことからも、発句の中心は弘員と見たい。この人の俳諧活動は確かに目立たないけれども、後年の『笈日記』

にも胡来号で句が入っており、必ずしも俳諧から遠ざかったとは言い切れないと思う。何れにせよ、句の出来は譬喩の意が露わに過ぎて、挨拶だけの句に成り了っている。

龍尚舎

345 物の名を先とふ芦のわか葉哉 （笈の小文）

龍尚舎にあふ
もの丶名をまづとふ荻のわかば哉 （田中氏旧蔵真蹟詠草）

――境野氏蔵真蹟小色紙・笈日記・泊船集・蕉翁句集・蕉翁全伝附録

春季（芦のわか葉）。

語釈 **○龍尚舎** 「リユウノシヤウシヤ」。龍野氏、名は熈近（ひろちか）、通称伝右衛門、「尚舎」は斎号である。伊勢山田の人。神宮の神官で、神道学者として多数の著作があった。元禄六年八月二日歿、享年七十八。**○物の名を先とふ** 「物（もの）の名（な）を先（ま）づ問（と）ふ」。「物」は、下の「芦」を指す。その土地での呼び名を何よりも先に尋ねる、というのである。「京で見ぬ物の名とはん旅の道　隅田（すみだ）川原を渡す舟さし」（『毛吹草』巻七）。**○芦のわか葉** 「芦（あし）の若葉（わかば）」。「芦」は、イネ科の宿根草本植物。沼沢地や河川のほとり等水辺に大群落をなして自生する。春になるとその旧根から芽を出し、伸びて青々とした若葉になる。春の季語。「若葉（わかば）　春夏有両説。加花者為レ春。然而夏季大切之間、可為夏云々。此新式の文章をみれば、花を結ばぬ句は皆夏といふ義也。是は木の若葉也。草の若葉は春になる也」（『御傘』）「芦の若葉こゆる白鷺や浪がしら松江維舟」（『桜川』春）「**Axi. l, yoxi.**」「**Vacaba.**」（『日葡辞書』）。

大意 折から芦の若葉の季節。ところで芦は所によって呼び名が変るということですが、物識りの貴方にお目にかかった今、その芦の呼び名を何よりも先にお尋ねしたいものです。

考 「いせにて龍尚舎と云ける有職の人に逢て」（境野氏蔵真蹟小色紙）「逢二龍尚舎一」（『笈日記』）等の前書がある。伊勢滞在中の詠草に見える「荻のわかば」が初案で、『笈の小文』に入れるに当って「芦のわか葉」と改めたのであろう。

『蕉翁句集』に「荻のわか葉」とあるのは誤写に過ぎない。貞享五年二月伊勢で龍野熙近に会った時の挨拶吟である。所によって物の呼び名が変ることによく引合に出される諺「難波の芦は伊勢の浜荻」は、『莵玖波集』巻十四所収の救済の連歌あたりが古い資料で（前句は「草の名もところによりてかはるなり」）、謡曲にも「物の名も処によりて変るよなう。……この芦を伊勢人は浜荻といひ、難波人は芦といふ」（「芦刈」）「物の名も処によりてかはりけり。難波の芦の浦風も、こゝには伊勢の浜荻の音をかへて聞き給へ」（「阿漕」）と利用されている。伊勢へ来て、その「芦」を種に、博学の人にその名を問うと趣向した即興の挨拶である。初案は「伊勢の浜荻」から「荻の若葉」を案じたもので、それが「芦」に変っても趣向の基本は変らない。ただ「芦」の方が理窟が通るというまでである。また、こういう句は、芦の若葉を目の前に見ていなくても可いと思う。更には、「とふ」といっても今更問うまでもないことを問うているところに、却っておかしみが出ているようだ。これに関連して、孔子が魯の大廟（周公を祀った社）に入って、祭祀の次第を事毎に問うたという故事（『論語』八佾篇に見える）を引合に出す説が古来あるけれども、この句については関わりの薄いものでしかあるまい。

草庵會

346　いも植て門は葎のわか葉哉　（笈の小文）

二乗軒と云草庵會

やぶ椿かどは葎のわかばかな　（田中氏旧蔵真蹟詠草）

——笈日記・泊船集・蕉翁句集・蕉翁全伝附録

春季（いも植て・葎のわか葉）。

語釈　**○草庵会**　「サウアンノクワイ」。さる草庵での俳席、の意。この草庵は、真蹟詠草の前書にいう「二乗軒」、正しくは二畳軒

という茶室のような庵で、今の伊勢市山田船江町狐垣外の大江寺境内にあったという（富山奏博士著『芭蕉と伊勢』第二章第五節参照）。

○いも植て　「芋植ゑて」。「いも種うふる」（『誹諧初学抄』末春）。○門　「カド」。「あいくに松なき門もおもしろや　柳風」（『あら野』巻二）「Cadouo tatçuru, sasu, tçumuru, xecu.」（『日葡辞書』）。○葎のわか葉　「葎の若葉」。一年生の蔓性草本植物カナムグラの若葉。そこらの路傍や山林荒地等に群がりはびこる草で、春季とされる。「山賤のおとがい閉るむぐらかな」（Ⅰ*247*）の「むぐら」が一種の汎称なのに対して、これは特定の種類を指す語である。前の「物の名を」の句参照。

大意　庭前の畠には芋を植え、門には生えるに任せた葎が折しも若葉の季節である。まことに侘びた草庵のたたずまいだ。

考　『笈日記』『泊船集』『蕉翁句集』には「二乗軒」と前書があり、貞享五年二月伊勢滞在中の吟である。真蹟詠草等の「やぶ椿」が初案、『笈の小文』に入れるに際して「いも植て」と推敲された。

庵主が誰であったかは分らないが、招かれたその草庵の属目を以て挨拶としたのである。初案と後案の差異については、

実景が簡約に把握されており、それだけに庵主の人となりまでが看取でき、挨拶の心がよく出ているようだ。上五「藪椿」の形もあって、一応景は出ているが、「葎の若葉」と同質でつきすぎる。「芋植ゑて」のほうが、庵主の生活が見えるだけにおもしろい。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

という見方が良い。「いも」の方が俳味豊かな題材でもある。「やぶ椿」は特定の種類ではなく、藪の中に咲いている椿であろう。この句、『野ざらし紀行』に見える「蔦植て竹四五本のあらし哉」（Ⅰ*193*）と句作りが似ており、これまた伊勢での作で、草庵のたたずまいを叙した挨拶吟であった。

菩提山

347
此山のかなしさ告よ野老堀(ママ)　（笈の小文）

菩提山卽事
山寺のかなしさ告よ野老堀(ママ)　（田中氏旧蔵真蹟詠草）
――笈日記・泊船集・蕉翁句集・蕉翁全伝附録

春季（野老掘）。

語釈　○**菩提山**　「ボダイサン」。今の伊勢市中村町、朝熊山の西の尾に当り、此処に行基の開創にかかる聖武天皇の勅願寺菩提山神宮寺があったが、十三世紀中葉鎌倉時代の弘長年中に伽藍が焼失して以来四百二十余年を経、芭蕉の訪れた頃は荒廃の極に達していた。この後宝暦十（一七六〇）年に再建された。真蹟詠草前書の「即吏」（即事）は、目前その場の事の意。○**此山**　「此の山(こやま)」。菩提山を指す。○**かなしさ告よ**　「悲(かな)しさ告(つ)げよ」。「かなしさ」は、嘗ての大伽藍の跡の荒廃を悲傷する気持をいう。それを告げて呉れと「野老掘」に呼び掛けるのである。「此浦の実は秋をむねとするなるべし。かなしささびしさいはむかたなく」（『笈の小文』）「呂房子陵がむかしをひきて、隠逸の用意を告るか」（芭蕉「蓑虫説跋」草稿写）「Canaxisa.」「Tcugue, uru, eta, ……Vguysu qitatte faruo tçuguru.」（『日葡辞書』）。○**野老堀**　「野老掘り(ところほり)」。「堀」は「掘」の誤り。野老を掘る人、の意。「野老」は、ヤマノイモ科の蔓性多年草で、各地の山野に自生する。鬚根のついた根茎を老人の鬚にたとえ、長寿を祝って正月の飾りにする外、早春に根を掘り取って茹でて苦味を去り、輪切りにして飯に炊き込むという。春の季語。「ところほる」（『誹諧初学抄』末春）「つぼさうぞくして侍ける女どもの野べに侍けるを見て、なにわざするぞとゝひければ、ところほる也といらへければ」（『拾遺集』巻十六、賀朝法師歌「はるのゝに」詞書）「Tocoro.」「Fori, ru, otta.」（『日葡辞書』）。

大意　野老を掘る村人よ、嘗て大伽藍のあった此の山の荒れ果てた悲しさを話してお呉れ。

考　『笈日記』『泊船集』『蕉翁句集』には『笈の小文』と同じ前書がある。菩提山に行ったのは、その位置からし

て二見・朝熊辺を見物した日と思われるが、それについては伊勢滞在中の二月十一日付平庵宛書簡に「明日二見への心ざし御坐候へ共、天気如此御坐候得ば、先延引可仕候旨(ママ)」とあり、無日付杉風宛にも「追付二見・朝浅(ママ)へ参候」と見える。滞在は十六日までであったから、この句を作ったのは十二日以降十六日以前の何れかの日だったのであろう。出発前日の十六日の可能性は低く、十五日は外宮近くに居たので、十二日から十四日までの数日のことと考えられる。滞在中に染筆された真蹟詠草の句形「山寺の」が初案で、それを『笈の小文』執筆に際して「此山の」と改めたのである。

嘗ての大伽藍も、今は昔の盛時をしのばせるよすがもなく荒れ果てている。その跡に立っての感懐は古来の詩歌に詠み古されているが、芭蕉はここに俳味のある野老掘りの農夫を点出し、それに呼び掛ける体に仕立てたところが新味であろう。野老を掘るようなわびしい作業をしているその農夫は、「老」の字の印象からしても年老いた姿が想像される。農夫は実際に居なくとも可いという見方もあるが、芭蕉が実際にその場で見たのでなければ、力有る表現とは言えない。ただ呼び掛けるのは実際でなくとも、心中で農夫に語りかける風に表現したとすれば可いであろう。嘗て栄えた寺院が今は見る影もない、その栄枯盛衰を思う心情が「かなしさ」の語となり、それが「此山の」という強い指示と相俟って強調される。「山寺の」では第三者的な視線であって、作者の悲傷の情が生かされないのである。表現の上では有名な小野篁の歌「わたの原やそしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつり舟」(『古今集』巻九)を思わせるところもあるが、篁の歌は自分の悲しい身の上を人に告げよというので、悲傷する自分に山の悲史を語れという芭蕉の句とは趣がかなりちがっている。兎もあれ、不破の関址での「秋風や藪も畠も不破の関」(I 204)と並ぶ遺跡懐古の秀吟である。

十五日外宮の館にありて

348
神垣やおもひもかけずねはん像

（田中氏旧蔵真蹟詠草）

あら野・笈の小文・笈日記・泊船集・蕉翁句集・蕉翁全伝附録

春季（ねはん像）。

語釈　**○十五日**　貞享五年二月十五日をいう。**○外宮の館**　「外宮の舘」。伊勢神宮には内宮（皇大神宮）と外宮（豊受大神宮）があり、外宮には穀物の神豊受大神が祀られている。「舘」は、外宮の北側に接する舘町（今の伊勢市一志町）を指す。ここには当時芭蕉と歌仙の席を共にした神官中津長左衛門益光の家があった。「暮て外宮に詣侍りけるに、一の華表の陰ほのぐらく」（『野ざらし紀行』）**○神垣**　「カミガキ」。神社の周囲にめぐらした垣根。ここは神社の付近一帯をおおまかに指す。「かの上人の、たなこやしろの神垣に取つきてよみしとや」（『猿蓑』巻三、史邦発句「月影や」前書）「Camigaqi.」（『日葡辞書』）。**○おもひもかけず**　「思ひも掛けず」。「ねはん像」のあることが思い掛けぬ意外なことだったのである。「おもひもかけぬ」ではないから、「ねはん像」に直接かかるのではなく、「ねはん像を見る」といった文脈を省略したものと見るべきである。「おもひもかけぬ興に入て、猜碗玉卮の心ちせらるゝも所がらなり」（『更科紀行』）「Vomoicaqe, uru, eta.」（『日葡辞書』）。**○ねはん像**　「涅槃像」。「ねはん」は、もと煩悩を滅した悟りの境地をいう仏語（梵語 nirvāna の音訳）であるが、転じて、仏特に釈迦如来の死をいうようになった。釈迦入滅の姿を描いた画像或いは彫像が「ねはん像」で、寝釈迦といわれるもの。ここは画像の方である。この語自体に季節はないが、釈尊の入滅の日に行われる涅槃会に掛ける為に季語とされる。「仏滅日　凡三仏二祖忌諸禅刹悉修之。三仏所謂今日仏滅日、四月八日仏誕日、臘月八日仏成道日是也。……洛内外諸寺院掲涅槃像。各々修法事。……凡涅槃像図世人之所称美者東福寺明兆画、同三聖寺呉道子画、高台寺顔輝画、大徳寺松栄図、妙顕寺顔輝、妙覚寺古法眼元信画、本法寺長谷川等伯画、浄土宗報恩寺顔輝之図等也」（『日次紀事』）「こゝろゆく極彩色や涅槃像」（『太祇句選』）「Nefanzŏ.」（『日葡辞書』）。

大意　仏法禁制の神宮の境内近くで、思いも掛けず涅槃像にお目にかかるとは。

考

「伊勢にて」(『あら野』『泊船集』『蕉翁句集』)「おなじ春ならん、なにがし寺に詣して」(『笈日記』)等の前書があり、このうち後者は明らかな誤伝である。真蹟詠草の前書によって成立の時処は明らかで、恐らく益光の家などで出来た句であろう。

神仏混淆のこの時代にあっても、伊勢神宮だけはその差別がきびしくて、芭蕉自身神前の広前には参じ得ず、遠くの僧尼拝所から遥拝したことは前述した(I 190参照)。この句について、神宮の境内でも涅槃像を掛けていたように解する説もあるが、恐らくそのようなことは行われなかったであろう。これは真蹟詠草の前書にあるように、外宮の神域に近い舘(たち)町の益光の家あたりで涅槃会の日に釈迦入滅の絵像を掛けていたのに興じた句と思われる。「神垣」をここでは広義にとって、『金葉集』巻九に、

郁芳門院いせにおはしましける時、六条右大臣北方あからさまにくだりて侍けるときに、おもひかけずかねのこゑのほのかにきこえければよめる

六条右大臣北方

かみがきのあたりとおもふにゆふだすきおもひもかけぬかねのこゑかな

とある歌の言葉を踏まえ、「かねのこゑ」を「ねはん像」に変えて俳諧にしたのであった。「おもひもかけず」に絵像を掛ける意も掛けてあるかも知れない。表現に関する加藤楸邨氏の鑑賞を引いておく。

句の「おもひもかけず」の語が、踏まえた歌よりもずっと生動している。歌や和漢の詞句を利用しても、それが芭蕉によって異質のものに昇華(しょうか)されている好例であろう。和歌によって流されてしまわぬところが力である。和歌の中では三十一音の緩(ゆる)やかな抑揚の中で「おもひもかけぬ」もゆるやかな流れをなしていたのであるが、俳諧に入れると五音の下に小停止があり、下五がまた静かな調子になっているので、「思ひもかけず」がぐっと表に出てくるのである。こうして見ると、短歌の調べは五音と七音の上を流れ去り、詠じ終ってもその流れはその方

向のままに流れてゆくが、俳諧のそれは、ふたたび上へ反響してゆくものであることが感じられる。（『芭蕉全句』）

349

御子良子の一もとゆかし梅の花　（笈の小文）

猿蓑・泊船集・三冊子・蕉翁句集

神垣のうちに梅一木もみえず。いかなる故にやと人に尋侍れば、唯ゆへはなくて、むかしより一木もなし。おこらごの舘の後に一もと有といふヲ

梅稀に一もとゆかし子良の舘　（田中氏旧蔵真蹟詠草）

蕉翁全伝附録

春季（梅の花）。

語釈 **○御子良子の一もとゆかし**　「御子良子の一本ゆかし」。「御子良子」は、伊勢神宮で神饌の供進に奉仕する少女をいう。神饌の調理にこの少女達が詰めているのが真蹟詠草にある「おこらごの舘」「子良の舘」である。ここでは、「おこらごの舘の後に一もと有といふ」梅の木を直ちに「御子良子の一もと」といい、それに心惹かれる情を「ゆかし」といった。『国性爺後日合戦』第四、相生さんぐうの条に「斎宮おこらごあさまがだけ、拝めぐれば尉とうば、おそしと爰に松の影」とあるのを以て見ると、「おこらご」とだけで「子良の舘」を指す慣用があったらしい。句の表現もその類で、内容的には「子良の舘」を指すのである。「ゆかし」は既出（I *236*）。「こら　神宮にこらの館あり。子良と書り。永正記にも子等母良とも見ゆ。俗に神楽所と呼び、お子良子といへり。物忌の子也。館は物忌父子斎宿の館也」（『和訓栞』）「**Fitomoto.**」（『日葡辞書』）。

大意　子良の館の後にある、神苑に唯一本の梅の木、花を咲かせたその一もとが何ともゆかしい。

考・　『猿蓑』に「子良舘の後に梅有といへば」と前書があり、『泊船集』と『蕉翁句集』も同様である。『笈の小文』では前記二畳軒に於ける「いも植て」（II *346*）の句の次に、

神垣のうちに梅一木もなし。いかに故有事にやと神司などに尋侍れば、只何とはなし、をのづから梅一もともなくて、子良の舘の後に一もと侍るよしをかたりつたふ。

と述べて当面の句を記し、次に前の「神垣や」の句を並べている。この書き方では、神域に唯一本の梅の木を詠じた句は「神垣や」の吟と同じ二月十五日に成ったもののように考えられるけれども、伊勢滞在中の真蹟詠草では「何の木の花」(Ⅱ343)の次に「梅稀に」の形で出しており、二月四日参宮の頃の成立たる可能性もあって、一概に断定し難い。ここでは姑く十五日の「神垣や」の次に配しておく。句形は旅行当時の真蹟詠草に見える「梅稀に」の初案を、『笈の小文』執筆に際して「御子良子の」と改め、元禄四年の『猿蓑』にもその形で収めたのである。

『三冊子』にはこの句を「御子良子の」の形で掲げて、

此句は一とせ伊勢に詣でゝ、老師んめの事をたづねしに、子良の舘のあたりに漸一本古き梅有。その外に曽てなしと社人の告けるを、則句として留られし也。師のいはく、むかしより此所に連俳の達人多く句をとゞむに、ついに此梅の事をしらずと、悦ばしく聞出ける也。風雅の心がけより此事とゞまるを思ひしれば、安からぬ所也。(赤雙紙)

という記事があり、それまで誰にも詠まれなかった梅の木であることが句作の大きな動機だったことが分る。最初の案「梅稀に」は、「稀に」と「一もと」が重なる上に、「稀に」と「ゆかし」が理でつながる感じがあり、「子良の舘」も単に場所を指示するにとどまって、全体に説明的で平板な表現であった。それが「御子良子の……梅の花」の形になると、表面は「梅の花」の句でありながら、「御子良子」の俤が裡に籠められて来る。「子良の舘」とせずに、直ちに「御子良子の一もと」と把握した効果であり、穎原博士が、

……梅を直に子良に比したといふのでなく、神に奉仕する無垢な少女のさまと、梅花の清らかな美しさとの、相通ずるにほひに寄せた感興といふべきである。この一脈相通ずるにほひに、ゆかしさの詩情が動いて行つたのだ。……「御子良子の一本」といふのも、表の意はやはり「子良の館の一本」であるが、この表現の裡にはおのづから御子良子そのものをゆかしく思ふ心もちが味はれる。梅だけのゆかしさではないのである。(『新講』)

と述べられたのも、この間の消息を語るものだ。まだ世心のつかない童女の神に奉仕する清純な姿が、神域に唯一木の梅の花に象徴されているのである。

一有が妻

350　暖簾のおくものぶかし北の𣧳　（田中氏旧蔵真蹟詠草）

菊の塵・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・蕉翁全伝附録

園女亭

暖簾の奥ものゆかし北の梅　（笈日記）

泊船集

春季（梅）。

語釈　**○一有が妻**　「一有」は、斯波または岩井氏。伊勢山田の医者で、俳諧を嗜んだ。貞享二年に撰著『あけ鴉』を刊行している。元禄五年八月大坂に移り、やがて渭川と改号した。元禄十六年七月歿。その妻は女流俳人として有名な園女である。山田の神官秦師貞の女。大坂へ移住後は雑俳点者としても活躍した。一有の歿後其角を頼って江戸に下り、深川富ヶ岡に住んで眼科医を業とした。享保十一年四月二十日歿、享年六十三。「一有が」は、いうまでもなく所有格である。「かれが妻なるべしとしらる」（『おくのほそ道』）。**○暖簾のおく**　「暖簾の奥」。「暖簾」は、もと禅家で用いた寒さ防ぎの垂幕をいったが、後には普通の家の出入口や部屋の仕切りに垂らす短い布を指すようになった。商家の軒先に屋号等を染め抜いて垂らす布もその類である。ここは家の表と奥を仕切るものであろう。「ノウ」は「暖」の唐宋音「ノン」の転。短く「ノレン」という発音も早くからあった。「扇屋の暖簾白し衣がへ　利牛」（『炭俵』上）「Norenuo taruru.」（『日葡辞書』）。**○ものぶかし**　奥深い感じをいう。「もの」は接頭語。『日葡辞書』には、人柄の重々しさをいう意味ながら「Monobucai.」とあり、「ふ」は濁るべきであろう。「ゆくりなうものふかきおまし所になむ」（『源氏物語』若紫）。**○北の𣧳**　「北の𣧳」。屋敷の「北」は、妻の居室。「北の方」「北堂」の語もある。「𣧳」は「梅」の異体字。「大納言わかれしわざともおぼえずとて、きたをなぐさめたまへども、うらめしくて、さらに物ものたまはず」（『わかくさ』）「Qita.」（『日葡辞書』）。

大意 仕切りの暖簾の向うは、何がなし奥深い感じ。北の庭には梅の花が望まれる。

考 『泊船集』には「いせにて　その女亭」と前書があり、『蕉翁句集』の前書は『笈日記』と同じである。伊勢滞在中に書かれた真蹟詠草に見えるので、貞享五年二月の作と推定されるが、何日の作かは明らかでない。園女自身は宝永期に刊行された撰著『菊の塵』の自序に於いて、

おもふに、わが此道に入し初めは元禄二年の冬なり。あけの年の如月、かの翁とこゝの人曾良などひきゐきたらせし（ママ）に、しか〴〵とつげり（ママ）ければ、翁よろこびて、いかならむことをもつゞりてよとおせり（ママ）たるに、花までは時雨て残れ檜笠といひ出ければ、やがて脇の句附てたうべて、さらに、のうれんの奥物ぶかし北の梅といふ発句をさへきこへられしぞかし。

と述べており、これによれば元禄三年二月の作となるけれども、真蹟詠草の存在は動かし難く、後年の園女の回想は錯誤を含むものと断ぜざるを得ない。土芳の『蕉翁句集草稿』には「直に聞、その女が脇に、松ちりなして二月の頃」と、園女の脇を伝えている。伊勢から伊賀に戻って滞留中に、芭蕉が土芳に語ったのであろう。

句形の異同に関しては、支考の『笈日記』の「ものゆかし」を治定形とする向きもあるが、「ゆかし」は後の改案の可能性がある一方、杜撰誤伝の恐れも否定し難い。今栄蔵氏は、芭蕉が真蹟詠草に於いても、土芳に語った時も、一貫して「ふかし」を変えていないことを指摘され、この句は『笈の小文』にも入らぬ一旦の挨拶に過ぎず、後年まで芭蕉が脳裏にとどめて「ゆかし」に変える必然性がないと見ておられる（「蕉句句形誤伝考抄」―『中央大学文学部文学科紀要』五十一号）。私もこの考え方に全く同感であって、「ゆかし」は支考の誤伝と考えるべきものと思う。なお『句集草稿』は「ものふかし」の形を採りながら、「此笈日記の句也。……白船（ママ）には、奥物ゆかしと有」と書いていて、「ゆかし」が『泊船集』のみの所伝であるような書き方になっているが、『笈日記』板本の字体は「ゆ」としかよみようがない。従って土芳の記事も不正確ということになるが、それ程彼にとっては「ものぶかし」が絶対のものとして頭に

あったのであろう。

暖簾というと商家の店先にあるようなものを考え勝ちであるが、普通の家の間仕切りなどにも用いられるもので、この句の暖簾が即ちそれである。

商家の店頭のはあれは店暖簾といふものです。京阪地方へ行けば室と室との間にも、通り道になつてゐる土間や廊の間にも暖簾のかゝつてゐることは数々見ることです。……京阪の家づくりを知つてゐる人には何でもなく分る句で、その暖簾の奥へ行くと、そこの北の庭に梅の木がある。その実際の景を園女に寄せて云つたものであらう。（『続芭蕉俳句研究』）

と幸田露伴が説いているのによって、この句の世界はよく分る。表の客間と奥との境に暖簾が垂れていて、その隙間から北側の庭の梅の木が見通せるのである。梅の花の清楚な趣に、この家の主婦園女の俤を寄せた挨拶の句で、「暖簾」「おく」「ものぶかし」「北」「梅」といった全体の用語と、やわらかな言葉つづきに繊細な感覚が貫かれている。「ものゆかし」は前述のように誤伝と考えざるを得ないが、加藤楸邨氏は、

「物ふかし」では、家の森閑（しんかん）とした落ちつきが出るが、人への心の傾きが出ていない憾みがあり、その点、誤伝と考えられる「ものゆかし」の句形も捨てがたいところがある。（『芭蕉全句』）

と見ておられる。「物ぶかし」でも園女へのゆかしさが出ないとは限らないが、こういう感受の仕方もあることを付記しておきたい。

351　紙ぎぬのぬるともをらん雨の花（笈日記）

路　草　亭

泊船集・一幅半・蕉翁句集

久保倉右近會　雨降

かみこ着てぬるとも折ン雨の花

（田中氏旧蔵真蹟詠草）　――蕉翁全伝附録

春季（花）。

語釈　**○路草亭**「ロサウテイ」。路草は真蹟詠草の「久保倉右近」その人で、名は盛僚（もりとも）。山田岩淵住の三方家師職であったという。後に乙孝と改号し、『一幅半』（元禄十三年刊）という撰著をまとめた。生歿年未詳。その家でこの発句が成ったというのである。**○紙ぎぬ**「紙衣（かみぎぬ）」。渋紙で作った防寒衣。「紙子」に同じ。隠者らしい簡素な身なりである。「もとは紙ぎぬ一重をぞきたりける。さていとさむかりけるに」（『宇治拾遺物語』巻八ノ三）「Camiguinu.」（『日葡辞書』）。**○ぬるともをらん**「濡（ぬ）るとも折（を）らん」。たとえ雨に濡れても、花の枝を折ろうというのである。「しばし宗祇の名を付し水　杜国　笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮」（『冬の日』）「Nure, uru, eta.」（『日葡辞書』）。**○雨の花**　雨中の花。この花は、桜をいう。「木履はく僧も有けり雨の花　杜国」（『あら野』巻八）。

大意　私の着ている紙子がたとえ濡れようとも一枝折り取りたい。雨の花の風情は、また格別です。

考　雨の花を愛でて、着ている紙子が濡れようとも一枝折り取りたいとまで興ずるのは、余りに風流を衒った態度のようにも見える。この句は、家隆の歌「つゆ時雨もる山かげのしたもみぢぬるともをらん秋のかたみに」（『新古今集』巻五）の詞を取り、紅葉を花に変えて興じたのであって、『撰集抄』巻八、実方中将歌の事に見える「桜がり雨はふりきぬおなじくはぬるとも花の陰にくらさむ」の歌も、影を落しているようだ。そういう古歌を背景にして、生憎の雨を恐縮する亭主に対して、雨の花もまた良しと挨拶しているのである。「紙ぎぬ」が俳諧なのは言うまでもない。

この俳席での歌仙は、亭主自身の撰に成る『一幅半』に断片が収められており、支考は恐らく地元の資料によって『笈日記』に載せたものと思われる。そう見れば両書の句形が一致するのは極めて自然であろう。問題は真蹟詠草の「かみこ着て」という句形である。この句形は従来初案として簡単に片付けられて来たが、よく考えて見るとおかしい。真蹟は度々いう通り伊勢滞在中、恐らくは十五、六日頃の染筆と推定され、勿論路草亭の会よりは後の筈である

から、時間的にはこの方が後案でなければならない。然るに、「かみこ着て」という表現は迂遠で不必要である上、どうかすると花を折る為に態々紙子を着るようにも聞えて、甚だ面白くないのである。芭蕉は一時の心の動きでこうした句形を書いたのであろうか。兎に角「かみこ着て」にはそのような問題点があるので、本位句としては『笈日記』の句形を採るべきである。

352　さかづきにどろな落しそ舞燕　（真蹟）

楠邊

盃に泥な落しそむら燕　（笈日記）——喪の名残・泊船集・蝶姿・蕉翁句集

さかづきにどろな落しそ飛燕　（砂燕）——泊船集書入

春季（燕）。

語釈　**○どろな落しそ**　「泥な落しそ」。「どろ」は、燕の巣を作る為のものであろう。野ざらしの旅で京の三井秋風亭に滞在した折の秋風の付句「家する土をはこぶつばくら」が参考になる。「水しほはゆき安房の小湊　亀洞　夏の日や見る間に泥の照付て　荷兮」（『あら野』員外）「夜の雪おとさぬやうに枝折らん岐阜除風」（『あら野』巻一）「Doroni mabururu.」「Na…so.」「Votoxi, su, oita.」（『日葡辞書』）。**○舞燕**　「舞ふ燕」。「舞ふ」は、飛びめぐる意。「燕」は、春の季語である。「藻塩草曰、燕は鳫にかはりて来る者也。又吉日をえりて巣ふ物也。夫妻の間の祝言物也。二人の女もたざる也。△和訓つばめ・つばくら・つばくらめ、是土はむの略説也、転語也。土をはみて巣作る也。本草に啣泥と云へり。……此者其後雛を巣立せしめて秋に至り、十二の燕子を引つれて、巣作せし屋宇の主人に相見せり。是を礼燕と云り」（『滑稽雑談』）「聞て気味よき杉苗の風　馬莧　花のかげ巣を立雉子の舞かへり　沾圃」（『続猿蓑』上）「黄昏にたてだされたる燕哉　鼠弾」（『あら野』巻二）「Mai, ô, ôta.」「Tçubame.」（『日葡辞書』）。

大意　飛びめぐる燕よ。私の盃に咥えた泥を落すなよ。

考 『砂燕』（寸虎・団友共撰、元禄十四年刊）の支考序に、「伊勢の国なりける菊川のなにがし、古翁の色帋伝へもたりけるに」として「飛燕」の句形を掲げており、「舞燕」と共に根拠あるものと認められる。『笈日記』の「楠辺」という前書も、何か根拠があったのであろうから、「むら燕」の形も一概にしりぞけ難い。ただ三句形の先後関係は明らかでないので、ここでは真蹟（図録類に未紹介）の形を本位句とした。「楠辺」は伊勢山田の五十鈴川中流域にある楠部村、今の伊勢市楠部町に当り、内宮の北約二キロ、朝熊山の西麓にある村落であるから、この前書を信ずれば、菩提山を訪ねた同じ日の作と見られよう。何れにせよ、伊勢での春の句なので、貞享五年二月の作であることは動かない。

休茶屋などに腰掛けて一盃やっていると、燕がしきりに四辺を飛びめぐる。その燕に呼び掛けた即興体で、漸く深まろうとする春の長閑な気分が味わわれる。

353

二月十七日神路山を出ルとて

はだか（ママ）にはまだ衣更着のあらし哉（其袋）

出光美術館蔵真蹟懐紙・芭蕉図録所収真蹟懐紙・笈の小文・笈日記・泊船集・蕉翁句集

春季（衣更着）。

語釈 ○**二月十七日** 貞享五年。○**神路山を出ル** 「神路山を出づル」。「神路山」は、皇大神宮の神苑のある山。標高二百八十メートル、南麓を五十鈴川が流れる。ここは伊勢山田を去ることを、こう表現したのである。「神ぢ山月さやかなるちかひありてあめの下をばてらすなりけり」（『新古今集』巻十九、西行）。○**はだか** 「裸」。後述するように、増賀上人の故事を背景にしている。「子は裸父はてゝれで早苗舟　利牛」（『炭俵』上）「Fadaca.」（『日葡辞書』）。○**衣更着のあらし** 「衣更着の嵐」。「衣更着」は陰暦二月。春ながら寒の戻りなど寒い時に衣を重ねるところから、このような漢字を宛てる。従って「あらし」は寒風である。「衣更着」の

字面が前の「はだか」と対照されていることは言うまでもない。「きさらぎに衣、二句きらふべし」（『御傘』）「奥儀抄曰、きさらぎとは、正月のどかなりしを、此月さへかへりて更にきぬをきれば、きぬさらぎといふをあやまれるなり。△按に、もとはきぬさらぎ也。蔵玉、さほひめの空に霞のきぬさらぎながき日かげと此月ぞしる」（『滑稽雑談』）「衣更着のかさねや寒き蝶の羽　惟然」（『続猿蓑』下）「Qisaragui. P. i, Niguachi.」（『日葡辞書』）。

大意　まだ二月の寒風が激しくて、増賀上人のように裸にはなれないことよ。

考・『泊船集』には「二月十七日神路山を出るとて、西行のなみだをしたひ、増賀の信をかなしむ」と前書があり、真蹟懐紙や『笈の小文』『笈日記』等は凡て「何の木の花」（Ⅱ343）の句の次にこの句を並べ掲げている。即ち「西行のなみだ増賀の名利、みなこれまことのいたる処なりけらし」（出光美術館蔵真蹟懐紙）「いせに詣でゝ、西上人のなみだのあとをしたひ、増賀聖のむかしをおもひて」（芭蕉図録所収真蹟懐紙）等二句並記したものの前書は、この句にもかかるのである。『泊船集』のように、この句のみについての前書に「西行のなみだをしたひ」の一節があるのは、杜撰のそしりを免れない。『其袋』（嵐雪撰、元禄三年刊）の前書によって二月十七日に成ったことが知られるが、これは無日付杉風宛芭蕉書簡に「当月十八日親年忌御座候付、伊賀へかへり候て」と述べている通り、二月十八日が父与左衛門の三十三回忌に相当したので、その法事に間に合わせるため、前日に山田を出たのであった。

　当時西行の著と信ぜられていたところから、芭蕉も愛読していた中世の説話集『撰集抄』の冒頭に、左のような話が見える。

　昔僧(ママ)賀聖人と云人いまそかりけり。……或時たゞ一人伊勢太神宮に詣て祈請し給けるに、夢に見給ふやう、道心を発さんと思はゞ、此身を身とな思そと示現を蒙給けり。打驚ておぼすやう、名利を捨よとにこそ侍るなれ。さらば捨よとて、き給へりける小袖・衣みな乞食どもにぬぎくれて、一重なる物をだにも身にかけ給はず、赤はだかにて下向し給けり。みる人不思義(ママ)の思を成て、物にくるふにこそ。みめさまなんどのいみじさに、うたてやな

んど云つゝ打かこみ見侍れ共、露心もはたらき侍らざりけり。……げにもうたてしき物は名利の二也。……唯識止観に眼をさらし、法文の至理を弁侍る程の人達の、しりながら捨侍らで、生死の海にたゞよひ給ふぞかし。……しかあるに、此僧賀上人の、名利の思を頓而ふり捨て給けん、有がたきには侍らずや。是又伊勢太神宮の御助にあらずは、いかにしてか此心も付侍るべき也。貪痴の村雲引おほい、名利のとこやみなる身の、いすゞ川の波にすゝがれて、天照太神の御光に消ぬるにこそ。返〳〵忝なく貴く侍り。……

増賀は平安中期の天台の高僧であるが、名聞がましいことを徹底して厭い、種々の奇行が伝えられた人であった。芭蕉が伊勢を去るに当ってこの人のことを思い浮べたのには、右の『撰集抄』の記事が第一の動因となったことは疑いない。それを俳諧にして「はだか」と「衣更着」の対照に興じたのではあるが、諸種の前書が示すように、内実は真面目なものであろう。つまり、笑いに紛らしながら、信薄くして増賀のようには徹底出来ない自身を省みているのである。堀信夫氏が「何の木の花」と当面の句の共通したテーマを「まこと」とされ、「貞享五年という時点で、芭蕉が、執拗に「まこと」に拘泥していることを示す貴重な資料」（『鑑賞日本の古典・芭蕉集』）と見ておられるのは良い。この気持が、この年杜国と共に吉野の花見を終った後、大和路を行く間に竹内村の孝女いまを訪ねた折の、

十二日、竹の内いまが茅舍に入。うなぎ汲入たる水瓶もいまだ残りて、わらのむしろの上にて茶酒もてなし、……おもしろきおかしきも、かりのたはぶれにこそあれ。実のかくれぬものを見ては、身の罪かぞへられて、万菊も暫落涙おさへかねられ候。（卯月廿五日付物七宛書簡）

という述懐につながるのであり、更には翌年奥羽の旅の出立に際して、

……猶観念やまず、水上の淡きえん(ママ)日までのいのちも心せはしく、去年たびより魚類肴味口に払捨、一鉢境界乞食の身こそたうとけれと、うたひに侘し貴僧の跡もなつかしく、猶ことしのたびはやつし〳〵て、こもかぶるべき心がけにて御坐候。（無日付猿雖宛）

と表白した心境にも関連するのだ。右にいう「一鉢境界乞食の身こそたうとけれ」と謡ったという「貴僧」とは増賀のことであって、この時も芭蕉はこの聖を念頭に置いているのである。俳諧に生きようとする詩人気質と共に、無常を観じて凡愚の情を醒まそうとする気持もまた、芭蕉の生涯を貫くものであった。この二つが綯い交ぜになって、この句の特異な味わいとなっているところに注目したい。

354　手鼻かむをとさへ梅の盛哉（後の旅）

蕉翁句集草稿・泊船集書入・蕉翁句集

手鼻かむ音さへ梅の匂ひ哉（卯辰集）

春季（梅）。

語釈　**○手鼻かむをと**　「手鼻(てばな)かむ音(おと)」。「手鼻かむ」は、紙を使わずに指で鼻をつまんで鼻をかむことをいう。「を」は「お」の仮名ちがい。「なんのわしらに手ばなもかみたふ有まい」（『冥途の飛脚』上）「Tebanauo camu.」（『日葡辞書』）。**○梅の盛**　「梅の盛(さか)り」。（I *19*）参照。

大意　手鼻をかむ音さえも長閑に聞える。梅が盛りで、春も深まって行くことだ。

考　「伊賀の山家に有て」（『蕉翁句集草稿』）「山家」（『蕉翁句集』）等の前書があり、土芳の『全伝』貞享五年の条に載せるのによって、この年春伊賀滞在中の吟と推定される。『句集草稿』には「自筆物」（芭蕉真蹟）がある由が見え、句形としては「梅の盛」の方が信憑性が高い。潁原博士の『新講』では「匂ひ」を初案と見ているが、成立当初から元禄四年の『卯辰集』（北枝撰）まで初案のままで、その後改案したとは考えにくく、不自然であろう。「匂ひ」は誤伝ではあるまいか。

風雅な季物の「梅の盛」を背景に、卑俗な「手鼻かむをと」を点出した。手鼻をかむような野卑な行為は伊賀の山

里の農夫を思わせるが、それさえも梅咲く春には快い野趣を感じさせるというのである。「手鼻かむをと」が、和歌連歌では採り上げようのない野卑なもので、それを梅の雅と掛け合わせることによって、俳諧の新境地としたわけだ。余寒の頃の趣であるが、既に盛りであるから、春も段々深まり行く感じと見たい。花の春色が物皆を長閑に思わせるのである。

伊賀の城下にうにと云ものあり。わるくさき香なり

355 香にゝほへうにほる岡の梅のはな（有磯海）

泊船集・横日記・蕉翁文集・冬紅葉

春季（梅のはな）。

語釈 ○**伊賀の城下**　「伊賀の城下」。伊賀は三重県西北部の旧国名。伊勢の津にある藩主藤堂家の支城が上野にあった。その城下及び近郊をいう。「膳所、城あり。本田侯領せらる。……城下の町都て二十四町なり」（『東海道名所図会』一）。○**うにと云もの**　「うにと云ふ物」。「うに」は、泥炭のこと。もとの植物組織がそのまま含まれた炭化度の低い一種の石炭で、よく乾燥して始めて燃料となる。「土中より堀出す薪は伊賀・近江にもあり。石にあらず土にあらず。……上品の炭より堅し。是をウニと云」（『諸国里人談』巻四）。○**わるくさき香**　「悪臭き香」。変にくさい匂い。「馬が離れてわめく人声　孤屋　暮の月干葉の茹汁わるくさし　利牛」（『炭俵』上）。○**香にゝほへ**　「香に匂へ」。佳い香りに匂えよ、と「梅のはな」に呼び掛けた表現。「穂に出づ」と同類の言い方である。「きやん伽羅の香ににほへかし犬桜　正之」（『貝おほひ』六番左）「Niuoi, ô, ôta. ……Fanaua iroiro niuoyedomo,」（『日葡辞書』）。○**うにほる岡**　「うに掘る岡」。埋蔵された「うに」を、岡の土中から掘り出す作業をいう。「日は寒けれど静なる岡　芭蕉　水かるゝ池の中より道ありて　支考」（『続猿蓑』上）「Voca.」（『日葡辞書』）。

大意 臭いうにを掘っている岡の梅の花よ、せめて佳い香りに匂ってくれ。

考 土芳の『横日記』に「伊陽山家にうにといふ物有。つちのそこよりほり出て薪とす。石にもあらず木にもあら

ず、黒色にしてあしき香あり。そのかみ高梨やゝ是をかゝなへて曰、本草に石炭と云物侍る。いかに云伝へて、このくにゝのみ焼ならはしけん。いと珍し」と前書があり、『蕉翁文集』も同文を収めている。竹人の『蕉翁全伝』には「春たちてまだ九日の野山かな」の句の次に、「伊賀の古山といふ所に、うにといふ物あり。土にあらず木に非ず、くさき香して、本艸にいへる石炭の類ならんと高梨野也（順揚）考有。其句を案じ置りとて蓑虫庵にての吟」としてこの句があり、前掲の前書と表裏をなす所伝である。土芳の『全伝』貞享五年の条にも、「此句ハ土芳庵ニテノ吟也」とあり、土芳が致仕して蓑虫庵に入ったのは貞享五年三月初めであるから、その時より同月十九日に芭蕉が杜国と共に上野を立って吉野の花見に赴くまでの間に成った句と推定されよう。別の考え方として『横日記』所載の「翁のうにほる岡を見て」と前書した酔猿らの一順の付合や、土芳『全伝』の句の排列順等を根拠に、伊勢へ行く前と見る説もあるが、私は『横日記』のこの前後の書き方は、蓑虫庵新築後のこととするのが穏当と思う。「或夜翁ありて□なきことども云出て、此国のうにめづらしと杉原取て」この句と前書を記したのも蓑虫庵での事と見られ、それに続けて「庵月次初会一順」の酔猿らの付合が載るのである。竹人『全伝』の「其句を案じ置りとて」という書き方から見ても、芭蕉は必ずしも古山のうに掘りの現場を見て作ったとは限らないであろう。芭蕉は前から郷里の近くに産する「うに」のことを知っていて、この春偶々それを題材に句を作ろうとしたに過ぎないのかも知れない。なお、『冬紅葉』（苔路撰、元文四年刊）には、野坡の句の前書に「伊賀の山里に石を焼木とすることあれば、香に匂へうに堀岡（ママ）の梅の花といにしへ翁の吟じ給へる……」と、この句を引いている。

土芳の文に徴しても、作者の第一の興味は「うに」という珍しい物を題材として句を詠むことにあった。それ自体は「わるくさき香」を放っているので、それを梅の花の佳い薫りで消して呉れよ、と興じたのである。悪臭と清香の対照に俳諧がある。芭蕉の文や竹人の『全伝』に見える高梨野也は、京都の医家で、梅盛門の俳人である。

356

初櫻折しもけふは能日なり （土芳蕉翁全伝）

初ざくら折しもけふはよぎ（ママ）日哉 （蕉翁句集）

初ざくら折しも今日はよい日なり （竹人蕉翁全伝）

春季（初桜）。

語釈 **○初桜** 「ハツザクラ」。咲きはじめの桜の花。「はつざくらまた追〻にさけばこそ伊賀利雪」（『猿蓑』巻四）。**○折しも** 「折りしも」。「折」は、機会、時節。「しも」は、強め。時も時、丁度よく、と副詞的な用法である。「花もやう〳〵けしきだつほどこそあれ、をりしも雨風うちつゞきて、こゝろあわたゝしくちり過ぬ」（『徒然草』十九段）「Vorixime.」（『日葡辞書』）。**○けふは能日なり** 「今日は良き日なり」。今日は晴天に恵まれた良い日である。「能」は、宛字。「麦はえて」（Ⅱ324）の句の条参照。「よい日」とも訓めるが、「よい」とする資料が凡て後世の写本なので、強いて砕けたよみ方をする根拠に乏しい。「木のもとに汁も鱠も桜かな　翁　西日のどかによき天気なり　珍碩」（『ひさご』）。

大意 桜が咲きはじめた。丁度時も時、月並初会の今日は晴れた良い日和である。

考 土芳の『全伝』に「薬師寺月並初会」、竹人の『全伝』に「菅社のほとり薬師寺の会に」として、何れも貞享五年の条に掲げ、寛治の『芭蕉句選拾遺』（宝暦六年刊）にも、土芳の『全伝』と同様の注がある。『句選拾遺』以前の板本には見えないが、土芳・竹人の伝に見えるので、芭蕉の真作として信じてよい。貞享五年春、恐らく伊勢から帰って後、上野滞在中の吟であろう。薬師寺については、藤堂元甫の『三国地志』（宝暦十三年成）に、「上野山上坐院、天正年間廓内ニアリ。後廓外ニ移ス。今天神ノ境内ニアリ」とある。天神は芭蕉が嘗て若き日に『貝おほひ』を奉納した社である。この句は「初桜」の初五で切れていると見られ、『蕉翁句集』の最後の「哉」は強過ぎる。竹人『全

伝』の「よい日」が根拠薄弱であることは前記の通り。
故郷の薬師寺で月次の句会が催されることになり、今日はその初会に当る。折柄桜も咲きそめ、良い日和に恵まれたというので、「初桜」の裏に「初会」の意が籠められていよう。無造作にまとめられた挨拶の句であるが、前途を祝う用意は行き届いている。

探丸子のきみ別墅の花みもよほさせ玉ひけるに、むかしのあともさながらにて

357　さまぐの事おもひ出す櫻かな　（亀井氏蔵真蹟懐紙）

小島氏蔵真蹟懐紙・笈の小文・笈日記・泊船集・蕉翁句集・冬扇一路・蕉翁全伝附録・故郷塚百回忌

春季（桜）。

語釈　**○探丸子のきみ**　「探丸子の君」。藩主藤堂家の一族、士大将新七郎家の三代当主。名は良長。芭蕉が若い頃仕えた良忠（俳号蟬吟）の子で、蟬吟が死去した寛文六年の出生である。「探丸」は俳号（「タンマル」ともよまれる）、「子」は敬称。芭蕉の主人筋に当るので「きみ」といった。貞享五年当時は二十三歳である。宝永七（一七一〇）年七月五日歿、享年四十五。「君も臣もさぞな三肌をあはせ衣　助勝」（『一葉集』）「Qimi.」（『日葡辞書』）。**○別墅の花みもよほさせ玉ひけるに**　「別墅の花見催させ玉ひけるに」。「別墅」は、別邸。五千石の身分の新七郎家には、今の上野市玄蕃町に下屋敷があり、上野盆地東部を見遥かす景勝の地で、八景亭と呼ばれた。今この芭蕉の発句に因んで名づけられた「様々園」の地で、芭蕉の松尾家のあった赤坂町からも程近い。其処での花見の会を探丸子がお催しになったところ、と最上の敬語を用いている。「玉」は宛字。「あるは小舩をうかべ、別墅にまうけし、草庵に酒肴携来りて行衛を祝し、名残をおしみなどするこそ」（『笈の小文』）「岸上に莚をのべて宴をもよほす」（芭蕉「堅田十六夜之弁」）「Bexxo.」「Moyouoxi.」（『日葡辞書』）。**○むかしのあと**　「昔の跡」。芭蕉の若き日に来た同じ処をこう言った。「三更月下入ルニ無我（ママ）ニ」といひけん昔の跡に立帰りおはしければ」（其角「芭蕉翁終焉記」―『枯尾花』）「Mucaxi.」「Ato.」（『日葡辞書』）。**○さながらにて**　そのまま、もと通りであって、の意。「衣共着重タリシモ袴モ然乍ラ有リ」（『今昔物語集』巻二十四ノ八）「Sanagara.」（『日葡辞書』）。**○さまぐの事おもひ出す桜**　探丸の別墅の桜樹の下で、昔芭蕉が蟬吟に仕えていた頃さまざまの事があったのを、今思

い出す、というのである。「さまぐ〳〵の過しをおもふ年のくれ　除風」(『あら野』巻七)「はつしぐれ何おもひ出すこの夕　湍水」(『あら野』巻五)「Samazamano.」「Vomoidaxi, su, aita.」(『日葡辞書』)。

大意　この桜の樹の下で花見をしていると、昔あったさまざまの事を思い出しますなあ。

考　「おなじ年の春にや侍らむ、故主君蟬吟公の庭前にて」(『笈日記』)「探丸子のきみ別墅の花見もよほさせ玉ひけるにまかりて、ふるき事抔思ひ出侍る」(『蕉翁句集』)等の前書がある。『蕉翁全伝附録』にも摸写されている亀井氏蔵の懐紙には、「春の日はやくふでに暮行」という探丸の脇が共に記され、「貞享五年春」とあって、『笈の小文』にも句が見えるから年次は明らかである。伊勢から上野へ戻って滞在していた間に、探丸の下屋敷の花見に招かれた折の吟であった。この時の付合については、鳥酔の『冬扇一路』(宝暦八年成)に「歌仙満尾、翁執筆、則其一巻今に残れり」とあるが、第三以下は今伝わらない。

芭蕉と蟬吟との出会いは運命的ともいってよいものだった。俳諧一途に生きる生涯の方向は、この俳諧好きな若い主人に仕えることによって定まったのである。勿論芭蕉には若い時期の試行錯誤もいろいろあり、蟬吟の夭折によって早く別れなければならなかったのではあるが、俳諧の一筋につながって四十代も半ばに達した今、振り返って見ると、自分の生涯にとって蟬吟が如何に重要な存在であったか、芭蕉は今更のように深く感じていたに違いない。故主の俤を残す遺孤探丸と花見の席を共にして、彼の感慨は正に無量のものがあったろう。眼の前の桜樹は、嘗て蟬吟に仕えていた頃にも花の盛りには常に訪れたものである。彼を思い此を思い、往事を追懐する芭蕉の胸中は「さまぐ〳〵の事おもひ出す」とより外に言い様のないものだった。余りにも「ただごと」と見えるばかりの表現をずばりと打ち出したところに、この句の力がある。そして、凡てが「桜」に集約提示される形も、典型的な発句の表現形式であって、感懐をのべる抒情的な言葉が一切無いのは、この年正月の「春立てまだ九日の野山哉」(Ⅱ339)を思わせる。このような句は全体が作者の感慨そのものなのである。

『笈の小文』では、この句が何の前書もなしに、新大仏寺での句文と伊勢滞在中の句群との間に、ぽつんと置かれている。これについては種々の考え方もあろうが、こうした句に前書は是非とも必要である。その位置も伊勢の句群の後にあるべきで、『笈の小文』の未定稿的性格の一端を示すものであろう。

瓢竹庵にひざをいれて、たびのおもひいと安かりければ

358　花をやどにはじめをはりやはつかほど　（真蹟懐紙）

初蟬・泊船集書入・蕉翁句集

宗無亭

花も宿にはじめ終りや廿日程　（泊船集）

はじめ終り花に禮いふ廿日ほど　（もろつばさ）

春季（花）。

語釈 **○瓢竹庵にひざをいれて**　「瓢竹庵に膝を容れて」。「瓢竹庵」は、伊賀上野の俳人木白（後、苔蘇と改号。岡本治右衛門政次。藤堂藩士）の家の庭にあった小庵。木白亭は上野の東日南町にあったという。「膝を容る」は、狭い部屋に居ることをいい、陶淵明の「帰去来辞」に「倚南窗以寄傲、審容膝之易安」（南窗に倚りて以て寄傲し、膝を容るゝの安んじ易きを審かにす）といった例がある。恐らく淵明の文が意識されているのであろう。「蜑の苫屋に膝をいれて雨の晴を待」（『おくのほそ道』）「**Fiza.**」（『日葡辞書』）。**○たびのおもひいと安かりければ**　「旅の思ひいと安かりければ」。旅の気分が大変安らかだったので。「立居につけて物思へど、人目なきこそ安かりけれ」（謡曲「大原御幸」）。**○花をやどに**　「花を宿に」。花を宿として。瓢竹庵のほとりの桜樹が花盛りで、花に堪能したことを斯う表現したのである。**○はじめをはりやはつかほど**　「始め終りや二十日程」。前後二十日ほどの滞在期間だったことをいう。「始あるもの必よ終ある、時なるべし」（『春雨物語』捨石丸）「朝夕の若葉のために枸杞うへて　荷兮　宮古に廿日はやき麦の粉　羽笠」（『はるの日』）「**Fajime.**」「**Vouari.**」「**Fatçuca.**」（『日葡辞書』）。

大意 花を宿として、咲き始めてから散り終るまで前後二十日ほども過し、すっかり堪能しました。

考 『蕉翁句集』に真蹟懐紙と同じ前書があり、土芳の『全伝』では、貞享五年の条に次の「このほどを」の句と並べ掲げて、「此二句ハ瓢竹庵休息の時也。是ヨリ吉野の花ニ出ラレシ也。万菊もへ長閑さに何も思はぬ昼寐哉ト云句アリ」と述べている。「万菊」は即ち杜国であって、前年十一月伊良湖崎の隠宅に彼を訪ねた時、春の吉野行に伴なうことを約し、伊勢で落ち合って伊賀に来ていたのである（『笈の小文』の記事参照）。真蹟懐紙には当面の句の次に万菊の句「のどかさにものもおもはぬ朝寐かな」の句と「このほどを」の句が書かれている。三月十九日の旅立ちまで二十日ほどの間、二人は木白の家の小庵に滞在していたのであった。『初蟬』（風国撰、元禄九年刊）には「此句はいが宗無亭にての吟なり」とあり、同じ撰者の手に成る『泊船集』の前書もそれを承けたものであるが、これらは誤伝と考えざるを得ない。句形の異同についても、本位句とした真蹟懐紙の形以外は、何れも信じ難いものである。

木白亭の瓢竹庵に杜国と二人で二十日程も滞在し、厚遇されたことを謝した挨拶の句である。折柄桜の時節で、咲きはじめから散り終るまで、心ゆくばかり花を堪能したと言って、長閑で華やかな季節感を強調している。「花七日」は桜花の盛りの短いことをいう言葉であるが、「花は莟て七日、咲き初めて七日、散り初めて七日、三七二十一日には空しく成り侍るとかや」（『芭蕉句選年考』）といった計算は、あらずもがなである。それよりは、箙の梅の話で有名な平忠度の「旅宿花」の歌「行くれて木の下かげをやどとせば花やこよひのあるじならまし」（『平家物語』巻九）の俤があろう。また、『詞花集』巻一に、

新院位におはしましゝ時、牡丹をよませ給けるによみ侍ける　関白前太政大臣

さきしよりちりはつるまでみしほどにはなのもとにてはつかへにけり

とある歌も、本歌として指摘されている。余り著名な歌でもないが、この通り表現に共通点が多くては、やはり作者の念頭にあったとすべきかと思う。牡丹を桜に変えた俳諧なのである。

たび立日

359　このほどを花に禮いふわかれ哉　（真蹟懐紙）　蕉翁句集・蓑虫庵小集

此比を花に禮いふ別かな　（もろつばさ）　芭蕉杉風両吟百韻

春季（花）。

語釈　**○たび立日**　「旅立つ日」。吉野へ旅立つ日をいう。「短夜の空もやう〱明れば又旅立ぬ」（『おくのほそ道』）「**Tabidachi, tçu, atta.**」（『日葡辞書』）。**○このほど**　「此の程」。直近の過去から現在までを漠然と指す。この場合は、その滞在中の世話、の意も含んでいる。「さて〱此ほどより心ざしのほど、身にあまりおぼえたり」（『恨の介』下）「**Cono fodo.**」（『日葡辞書』）。**○花に礼いふわかれ**　「花に礼言ふ別れ」。別れに際して花に礼を言う、の意。実際は主人に礼を言うのであるが、それを「花に」と言い做したところが俳諧で、花を主とする心がある。前の「花をやどに」の句の条に引いた平忠度の和歌参照。「宿へも礼いふて帰ける」（『好色一代男』巻七）「あき風に申かねたるわかれ哉　野水」（『あら野』巻七）「**Reiuo yŭ, l, mŏsu.**」「**Vacare.**」（『日葡辞書』）。

大意　この程滞在中の御厚意に対し、別れに際して花にお礼を言って旅立つことです。

考　真蹟懐紙には前の「花をやどに」の句及び杜国の「のどかさに」の句と共に書かれており、土芳の『全伝』に貞享五年春の句とされているものである。前書によって、吉野の花見に伊賀の上野を旅立った日の吟と知られるが、出立は三月十九日であった（この年卯月廿五日付惣七宛万菊・桃青連名書簡参照）。「此比を」という句形は、意味に変りはないながら、恐らく杜撰に過ぎまい。

「花をやどに」の句と共に、この二句は何れも花を主題にして、その裏に主人木白の厚遇を謝する意を籠めている。忠度の歌を心に置いて「花に礼いふ」と興じた態度には、暢びやかな雅懐が感ぜられ、浅薄なおかしみではない。

乾坤無住同行二人

360　よし野にて櫻見せふぞ檜の木笠　（笈の小文）

真蹟短冊・笈日記・古蔵集・泊船集・蕉翁句集

よし野に立し朝、笠の書付

よし野にて花を見せうぞ檜木笠　（土芳蕉翁全伝）

春季（桜）。

語釈 ○**乾坤無住同行二人**　「ケンコンムヂユウドウギヤウニニン」。「乾坤」は、天地。天地の間に住まるところ無く、御仏と二人連れ立って行く、の意。巡礼が笠に書き付ける文句で、ここは杜国（万菊丸）と二人連れであることも掛けている。「涅槃の妙楽すなはち無碍大自在の人となりて、乾坤に独歩すべし」（『万民徳用』）「同行一両人あひかまへて、したしむべきか」（『一言芳談』下）「Qencon, i, Tenchi.」「Mugiŭxo. Sumu tocoro naxi.」「Dôguiŏ. Vonajicu yuqu.」「Nininzzure.」（『日葡辞書』）。○**見せふぞ**　「見せうぞ」。「ふ」は「う」と書くべきところ。現代口語では「見せよう」が普通であるが、助動詞「む」の展開として、中世から近世にかけては、「う」が二段系の活用語にも用いられた。「産出すを見ぐるし野とや思ふらん　似春　きせうものなき天のかぐ山　桃青」（『江戸十歌仙』）「雪の日に庵借ぞ鷦鷯　依々」（『炭俵』下）「Yoizo.」（『日葡辞書』）。○**檜の木笠**　檜の木の薄板を網代に張った笠。既出（I *199*）。

大意　檜の木笠よ、これから旅に出て、お前にも吉野で桜の花を見せてやろうぞ。

考　「乾坤無住」（『笈日記』）「芳野山の花見んとて伊賀の国より旅立申れしに、尾州の杜国を同行にて、筆をとりて檜の木笠の裏に戯れられしとぞ」（『泊船集』）「よしの丶旅立」（『蕉翁句集』）等の前書がある。前述の如く、吉野への出発は三月十九日、木白の瓢竹庵からであったが、その時の模様を『笈の小文』は左のように記している。

弥生半過る程、そゞろにうき立心の花の、我を道引枝折となりて、よしの丶花におもひ立んとするに、かのいら

ご崎にてちぎり置し人の、い勢にて出むかひ、ともに旅寐のあはれをも見、且は我為に童子となりて道の便リにもならんと、自万菊丸と名をいふ。まことにわらべらしき名のさま、いと興有。いでや門出のたはぶれ事せんと、笠のうちに落書ス。

この後、掲出の前書と芭蕉の発句、万菊丸の「よし野にて我も見せふぞ檜の木笠」の発句が並べてある。万菊丸の句には季語がなく、其処にも軽い戯れの気分のあらわれが見られよう。土芳の『全伝』曰人写本の句形について、竹人の『全伝』では「花を」で可いような書き方になっているが、『笈の小文』や真蹟以下の所伝にまさる信用度はなく、誤伝としてよい。

晴雨兼用で、旅にはいつも被っている檜木笠、それに呼び掛ける体にして、狂じた趣を出した。名にし負う吉野の花を愛弟子と共に見られるのが、芭蕉にはこの上なく嬉しく、子供のようにはしゃいでいるさまが窺える。

初瀬

361 春の夜や籠リ人ゆかし堂の隅　（笈の小文）

春季（春の夜）。

語釈　○**初瀬**　現奈良県桜井市に属する地名。観音の霊場として名高い長谷寺がある。既出（I25）。○**春の夜**　「春の夜」。「師説云、春の夜も短きやうに作例多し。然ども夏の夜の心とはかはりめ侍る也」（『滑稽雑談』）「春の夜はたれか初瀬の堂籠　曾良」（『猿蓑』巻四）。○**籠リ人ゆかし**　「籠リ人」は、祈願の為に観音堂に夜を徹して参籠する人。それがどんな人か心惹かれるという気持が「ゆかし」である。「焼めしもありこめつぶもあり　長頭丸　籠り人の帰りし跡の神社　安静」（『紅梅千句』第二）。○**堂の隅**　「堂の隅」。「堂」は、十一面観音を祀る長谷寺の本堂。参籠する人の居場所をあらわす。「人去ていまだ御坐の匂ひける　越人　初瀬に

籠る堂の片隅　芭蕉」（『あら野』員外）「Dō.」「Sumi.」（『日葡辞書』）。

大意　艶な感じの春の夜、初瀬の堂の片隅で夜すがら籠る人に、何がなし心惹かれることだ。

考　『笈の小文』には吉野へ向う途次の吟として、万菊丸の句「足駄はく僧も見えたり花の雨」と共に収められている。卯月廿五日付の連名書簡によると、芭蕉達は上野から南下して国見山の兼好塚（現三重県名賀郡青山町種生（たなふ））を尋ね、伊勢街道を通って琴引峠（奈良県宇陀郡室生村三本松琴引）を越えて大和に入り、初瀬に至ったようである。

初瀬は貞徳の『淀川』に「恋を祈る所也」とされ、『毛吹草』の連歌恋之詞の条にも「初瀬を祈る」があるように、伝統的に恋の気分を豊かに持つ所であった。王朝の文学では、『源氏』の玉鬘の巻に、筑紫から上って来た玉鬘が、昔の侍女で今は源氏に仕えている右近に、この初瀬で偶然めぐりあう場面があり、芭蕉の愛読した『撰集抄』にも、西行がここの観音堂で尼になった昔の妻に邂逅する話（巻九、於長谷寺逢故人）があって、幸田露伴はこれを踏まえた趣向と見ている程である（『続芭蕉俳句研究』）。この句はそれらのもろもろが芭蕉の脳裡で渾融して打成された夢幻の世界であろう。初瀬の堂に籠って傍えの人を、ふと誰かと心惹かれたようなこと、それが明らかに男であっても、それを機縁にこういう句をまとめることは有ってよい。この「籠り人」は、はっきりことわっているわけではないが、女性的雰囲気を濃く漂わせている。「初瀬のこもりと云へばあの本堂にこもるのであるが、それへは爪先上りの廊下を凡そ百間も登つてゆくのである。広い堂で、さくらなどの木にかこまれてゐて、よいところである。春の夜、みあかしがかすかにともつて、そこに籠つてゐる人の景を想像すると、此の句の心がよくわかる」（『研究』）という露伴の鑑賞は良い。

山本健吉氏は、この句が三段に切れながら余り切れたという感じがしないのは、全体を王朝的な俤で柔かく覆っているからであろうと見て、

一種の物語の躰であり、折に触れての句でありながら、現実の感情のそのままの表現でなく、歴史的意識による

濾過作用を経て、より高いものの表現に到達している。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

と述べておられる。「春の夜や」は全体の背景として此処に大きな句切れがあるのに対して、「籠り人ゆかし」は「堂の隅」との熟合度が高く、七五は殆んど一つに感ぜられるから、散漫な感じを免れているのだと思う。現実の感情ではなくて、王朝物語の世界への想化が行われていることはその通りである。

その立場を推し進めると、この句を「芭蕉の全くの創作」（山本唯一博士『芭蕉俳句ノート』）とする見方も出て来る。「創作」をどの程度のことと考えるかにもよることであるが、万菊丸の句に徴しても参詣したことは間違いなく、体験を基盤に王朝風の幻想的場面を構想したことは確かであろう。句の古い出典としては『笈の小文』の宝永板本以外に無いところから、元禄三、四年『笈の小文』執筆当時の作かとする見方もある（堀信夫氏『日本古典文学全集・松尾芭蕉集』）。

この句の先蹤として、江戸を出る前の餞別世吉に、

道しらぬ里に砧をかりに行　　枳風
月にや啼ん泊瀬の籠人（コモリド）　　文鱗
葛籠（ツヅラ）とく匂ひも都なつかしく　　仙化
（『続虚栗』）

という一節があり、これが発句を作る時芭蕉の念頭にあったろうことは想像に難くない。『笈の小文』の旅を終り、更科の月を賞して江戸に帰った直後に作られた『あら野』所収の越人との両吟歌仙中の「初瀬に籠る堂の片隅」（〔語釈〕参照）も王朝趣味の横溢した作で、発句と同想の付句版といってよいものである。更に、これも〔語釈〕に引いた『猿蓑』所収の曾良の発句「春の夜はたれか初瀬の堂籠」に至っては、芭蕉が自作との関係をどのように考えていたか、その真意は容易に窺知を許さないものがあろう。

臍　峠　多武峯ヨリ龍門ヘ越道也

362　雲雀より空にやすらふ峠哉　（笈の小文）

真蹟短冊・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・蕉門録

雲雀より上にやすろふ峠かな　（あら野）

卯辰集・芭蕉庵小文庫・橋守・泊船集

春季（雲雀）。

語釈　○臍峠　「ホソタウゲ」。「細峠」とも書く。今の奈良県吉野郡吉野町大字三津の西、同町大字平尾の北に当り、鹿路トンネルが通じている。○多武峯　「タフノミネ」。今の奈良県桜井市南部、寺川上流一帯の地をいう。標高六百七メートルの御破裂山を中心に、南には多武峯寺（今の談山神社）があった。藤原鎌足の遺骸を葬って塔が建てられたのに始まり、天台宗の大規模な伽藍が営まれていた所である。○龍門へ越道也　「龍門（りゅうもん）へ越（こ）ゆる道也（みちなり）」。「龍門」は、今の吉野町北部と宇陀郡大宇陀町南部一帯の地で、中世から近世にかけて龍門郷が置かれ、明治中期以降は龍門村となった。「越ゆ」は、山路を通ること。「尿前の関にかゝりて出羽の国に越んとす」（『おくのほそ道』）「Coye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○雲雀　「ヒバリ」。既出（Ⅱ278）。○空　「ソラ」。ここは上方の広い空間をいう。「八九門空で雨降る柳かな　芭蕉」（『続猿蓑』上）「Sora.」（『日葡辞書』）。○やすらふ　「休（やす）らふ」。旅の途中息を入れて休む。「よひのほど其漁家に入てやすらふ」（『鹿嶋詣』）「Yasurai, rô, ôta.」（『日葡辞書』）。○峠　山道の上り下りの境目。旅人がここで道祖神に手向けをして平安を祈る。その「たむけ」の転じた語。この漢字は国字である。「蝙蝠ののどかにつらをさし出て　路通　駕籠のとをらぬ峠越たり」（『ひさご』）「Tôgue.」（『日葡辞書』）。

大意　あの高く揚るひばりよりも更に高い峠の上で、一息入れて休むことだ。

考　『泊船集』の「栖去之辯（ママ）　略之　小文庫に見えたり」という前書は、『芭蕉庵小文庫』所収のこの句の前に元禄五年二月に成った「栖去之辨」の文があるのを、この句の前書と誤解したのである。句は『笈の小文』にある通り、貞享五年三月吉野に入る時に成ったことは疑いない。

句形について『あら野』の「上に」を定案とする見方も嘗てはあったが、「寒けれど」（Ⅱ316）「枯芝や」（Ⅱ341）等の推敲の例を見ても、『あら野』よりも『笈の小文』の成立が後れることは明白である。恐らく「上に」が初案であって、後に「空に」と改めたのであろう。柿衛文庫蔵の真蹟短冊の筆蹟は元禄三、四年頃と見られるが、これは伊賀に伝わったものだった（岡田利兵衛氏『図説芭蕉』解説参照）。土芳が『蕉翁句集草稿』で「空に」の句形を採り、「此細峠にての句也。阿羅野に、上に休ふと有。違也」と自信を持って断定しているのも、この短冊を知っていたからと思われる。但し、「上に」を杜撰と言い切れるだけの根拠はなく、今は初案と見ておきたい。

平地に居れば空高く聞く揚雲雀の声を、この峠では下に聞いて休息している。その軽い驚きを、さしたる技巧もなしにまとめた即興句である。両案の優劣については諸説あるけれども、「上に」は雲雀との位置関係を示すに過ぎないのに対して、「空に」となると、虚空の無限のひろがりを感じさせ、句柄も抜群に大きくなる。峠の上から眼下に見遥かす眺望と上なる空のひろがり、その虚空に身を置いたような驚きの感覚は、「空に」によってこそ十全にあらわし得るであろう。

瀧　門

363　龍門の花や上戸の土産にせん　（笈の小文）

春季（花）。

語釈　○**瀧門**　「リユウモン」。吉野の龍門郷。前の句の〔語釈〕参照。「瀧」は戯書か。〔考〕の条で述べる。○**上戸の土産**　「上戸（じやうご）」は、酒呑み。その人に贈る旅のみやげ物が「つと」である。「つと」は、旅の荷を蓆などでまとめた包み物のことであるが、みやげも包み物にするところから同じ語が用いられる。「土産（つと）」は、その土地の産物の意で宛てた字。「ちかづかまほ

しき人の、上戸にてひしくとなれぬる、またうれし」（『徒然草』百七十五段）「消のこりのゆきにあへ照るあしひきのやまたちばなをつとに摘み来な」（『万葉集』巻二十、大伴家持）「Iôgo.」「Tçuto.」（『日葡辞書』）。

大意 龍門の桜の花はまことに見事だ。滝のほとりの花を一枝折って酒呑みに贈るみやげにしよう。

考 吉野の龍門郷での吟。ここには龍門岳の麓に吉野川に面して有名な滝がある。ここで芭蕉は滝を好み酒を愛した詩人李白を思った。

日照香炉生紫煙　　日は香炉を照らして紫煙を生ず。
遥看瀑布挂長川　　遥かに看る瀑布の長川を挂くるを。
飛流直下三千尺　　飛流直下三千尺、
疑是銀河落九天　　疑ふらくは是銀河の九天より落つるかと。
（「望廬山瀑布」其二）

両人対酌山花開　　両人対酌すれば山花開く。
一盃一盃復一盃　　一盃一盃復一盃。
我酔欲眠卿且去　　我酔うて眠らんと欲す卿且く去れ。
明朝有意抱琴来　　明朝意有らば琴を抱いて来れ。
（山中与幽人対酌）

作者の脳裡には右のような李白の詩が浮んだのであろう。山中にかかる滝のほとりの華やかな花の眺めに堪能して、この花を一枝折り取って、李白のような酒呑みへのみやげにしようと興じたのである。枝を折るのではなく、土産話にするのだという解もあるが、要するに風狂の情の表現であるから、実際に折る折らないは問題ではない。「一枝折ってみやげにしよう」という意向のあらわれが眼目なのである。なお、前書の「瀧門」は従来誤記と見られているが、

龍門の滝や、酒を一息に呑み干す意味の俗語「滝呑み」を利かせた戯書ではあるまいか。単なる誤りで「サンズイ」を添えるのは不自然に思われる。異形としては『芭蕉句選』に下五を「土産せん」としているが、恐らく脱字に過ぎない。

364　酒のみに語らんかゝる瀧の花　（笈の小文）

春季（花）。

語釈　○**酒のみに語らん**　「酒呑みに語らん」。「父は酒のみにて、母なんふぢやといふ組やなりける」（『好色伊勢物語』巻一）「星合を見置て語れ朝がらす　涼葉」（『続猿蓑』下）「Saqenomi.」「Catari, u, atta.」（『日葡辞書』）。○**かゝる滝の花**　「斯かる滝の花」。このように見事な滝のほとりの桜花。「滝」は、龍門の滝（前の句の条参照）を指す。「かゝる」には「滝が掛る」（滝が岩頭から流れ落ちる）が掛けてあるであろう。「かゝる夜の月も見にけり野辺送　去来」（『猿蓑』巻三）「見あげしがふもとに成ぬ花の滝津島俊似」（『あら野』巻二）「Cacaru. ……i, Cayônaru. l, cacuno gotocu naru.」「Taqi.」（『日葡辞書』）。

大意　酒呑みに話して聞かせたいものだ。滝が掛るあたりに咲くこんな見事な花の眺めを。

考　『笈の小文』に前の「龍門の花や」の句の次に並べ掲げてあり、同時の吟である。これもまた李白の詩などを背景に、龍門の滝の桜の見事さを賞したのであって、「酒のみ」の中には其角のような酒豪の門人も含まれているかも知れない。二句共に大した作ではなく、捨てても惜しい句ではないが、作者としては花の興を強調したいばかりに、このような同想の句を二句並べたのであろう。他の撰集類に見えないのは当然で、『笈の小文』の未定稿的性格の一端を示すものでもある。

やまとのくにを行脚しけるに、ある濃夫の家にやどりて一夜をあかすほどに、
あるじ情ふかく、やさしくもてなし侍れば

365 はなのかげうたひに似たるたび寐哉　（真蹟小懐紙）

あら野・雑談集・泊船集・後れ馳・千句塚・蕉翁句集

春季（はな）。

語釈 ○**やまとのくにを行脚しけるに**　「大和の国を行脚しけるに」。「やまとのくに」は、今の奈良県。貞享五年春、杜国との吉野の旅をいう。「行脚」は僧の修行としての旅をいうが、芭蕉は剃髪していたから、旅についてこの語を用いることが相応しいのである。「アンギヤ」は唐宋音。「大和の国に行脚して」（『野ざらし紀行』）。「Anguia suru, l, itasu.」（『日葡辞書』）。○**ある濃夫の家にやどりて一夜をあかす**　「或る濃夫の家に宿りて一夜を明かす」。「濃」は「農」の誤り。山中の農家に一晩泊ったのである。「一夜」は「ヒトヨ」ともよめるが、ここは他にも漢語が用いられており、「イチヤ」でよいであろう。「あけゆくや」（Ⅱ *259*）の前書参照。「農夫の家に一夜をかりて、明れば又野中を行」（『おくのほそ道』）「Nôfu.」「Ichiya.」（『日葡辞書』）。○**あるじ情ふかく**　「主情ふかく」。その農家の主人が情深くて旅人をいたわって。「なさけふかい御方で、お盃を下されてござる」（狂言記「鶯」）「Nasaqe.」「Fucai.」（『日葡辞書』）。○**やさしくもてなし侍れば**　「優しくもてなし侍れば」。「もてなす」は、旅人を接待する意。「御身はやさしき心を持ち給へる人かな。人のつかれを助けて、わがうゑをしのぎ給ふ志、ためしなき次第なり」（『梅津かもむ物語』）「Yasaxij.」「Motenaxi, u, aita.」（『日葡辞書』）。○**はなのかげ**　「花の蔭」。桜の花の咲く木の下蔭。「冷汁に散てもよしや花の陰　胡及」（『あら野』巻一）。○**うたひに似たるたび寐**　「謡に似たる旅寐」。「うたひ」は謡曲の詞章のこと。それに出て来そうな旅寝のさまなのである。「うたひのこんぼんを申さば、おきなのかぐらうたを申べきか」（『申楽談儀』）「Vtaini fuxiuo tçuquru.」（『日葡辞書』）。

大意 花の木蔭でこのように心のこもった御もてなしを受けるとは、謡曲に出て来る旅寝のようですな。

考 『あら野』に「大和国平尾村にて」、『泊船集』に「大和の国草尾村にて」、『蕉翁句集』に「同じ国平尾にて」

とそれぞれ前書があり、『あら野』の古板本では「平」の字が「草」と紛らわしい字体になっているが、平尾村での作と認めてよかろう。平尾は今の吉野町の大字で、臍峠（細峠）や龍門の滝の南方に当る。芭蕉と杜国は貞享五年三月、この村のさる農家に一宿したのである。現存の真蹟小懐紙は下司賤夫氏蔵。当の農家の主人に書き与えたものかも知れない。

吉野の花の木蔭の宿で、農家の主人の手厚いもてなしに感謝した挨拶の句である。芭蕉は宛かも謡曲の登場人物になった積りで、雅懐を一句に託した。謡曲には、

頃は春、所はみ吉野の、花に宿かる下臥も、のどかならざる夜嵐に、寝もせぬ夢と花も散り、……（「二人静」）

見もせぬ人や花の友、知るも知らぬも花の蔭に、相宿りして諸人の、いつしかなれて花衣の、袖触れて木のもとに、立ち寄りいざやながめん。（「吉野夫人」）

いかに尉殿、はや日の暮れて候へば、一夜の宿を御貸し候へ。うたてやな、この花の蔭ほどのお宿の候べきか。

……行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし。（「忠度」）

といった詞章があり、頴原博士の『新講』は、平尾村が「二人静」の舞台たる吉野の菜摘川に近いところから、この文句がおのずから思い浮べられたものと見ている。これらは特にどの曲と限ったことではなく、「鉢木」では季節がちがう冬の雪の夜ながら、行き暮れた旅の僧が一夜の宿の主佐野源左衛門尉から心の籠った接待を受けるのだし、芭蕉の愛誦した西行歌には「このもとにたびねをすればよしの山はなのふすまをきするはるかぜ」（『山家集』上）もあった。作者の脳裏にはこれらが渾然一体となって、この句の動機を形成したのであろう。「うたひに似たる」という表現は余りに浅露な感じもなくはないが、一方また素朴で暢びやかな句の気分を醸し出す役割をも果していて、捨て難いところがある。

きしの山吹とよみけむよしのゝ川かみこそみなやまぶきなれ。しかも一重に咲こぼれて、あはれにみえ侍るぞ、櫻にもをさく〳〵をとるまじきや

366 ほろ〳〵と山吹ちるかたきのおと（真蹟自画賛）

真蹟五句発句切・あら野・笈の小文・真蹟画賛・真蹟懐紙・泊船集・蕉翁句集・青ひさご・有の儘・落葉考

春季（山吹）。

語釈 **○きしの山吹とよみけむ** 「岸の山吹と詠みけむ」。「きしの山吹」は、紀貫之の歌「吉野河岸の山吹ふく風にそこの影さへうつろひにけり」（『古今集』巻二）を指す。「けむ」は、「（貫之が）詠んだという」と伝聞をあらわす語法。「ふるのたきは、法皇の御覧じにおはしましけんこそめでたけれ」（『枕草子』六十一段）。**○よしのゝ川かみこそみなやまぶきなれ** 「吉野の川上こそ皆山吹なれ」。「川かみ」は、川の上流域。「やまぶき」は既出（I *137*）。「すゑやみな川かみすめる春の水」（『宗長手記』上）「**Cauacami.**」（『日葡辞書』）。**○しかも一重に咲こぼれて** 「然も一重に咲きこぼれて」。「一重」は、花弁が一枚ずつで重ならないさま。「咲こぼれ」は、花が一杯に咲き乱れることである。「しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす」（『笈の小文』）「一重かと山吹のぞくゆふべかな岐阜襟雪」（『あら野』巻二）「さくらのいみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、こうらんのとまで咲きこぼれたる」（『枕草子』二十三段）「**Xicamo.**」（『日葡辞書』）。**○あはれにみえ侍るぞ** 「あはれに見え侍るさまぞ」の略。この「あはれに」は、趣深いさまをいう。「ぞ」は係助詞。「きちかう、をみなへし、かるかや、尾花みだれあひて、……いとあはれ也」（『鹿嶋詣』）。**○をさく〳〵をとるまじきや** 「をさく〳〵」は、なかなか、どうして等の意。「をとる」は「劣る」だから、「を」は仮名ちがいである。「や」は詠嘆。「銀燭秋光、月の影にもをさく〳〵をとるまじき百目がけの蠟燭にや」（桃青『十八番発句合』）「**Votori, ru, otta.**」「**Maji, l, majij.**」（『日葡辞書』）。**○ほろ〳〵と山吹ちるか** 「ちるか」は、「散るか」。「か」は詠嘆。「ほろ〳〵と」は、ここでは殊更他の力が加わるわけでもないのに、おのずから散って行くようなさまをいう。「きなる葉どものほろほろとこぼれおつる、いとあはれなり」（『枕草子』百九十九段）「うつりゆく雲に嵐のこゑすなりちるかまさ木のかづらきの山」（『新古今集』巻六、雅経）「**Fororoto.**」（『日葡辞書』）。**○たきのおと** 「滝の音」。

大意　滝の音の響く中、川岸に咲く山吹の花が、ほろほろと散ることよ。

考　「西河」（『笈の小文』）「西河にて」（『蕉翁句集』）等の前書がある。「西河」は、もと「二十河」「二十講」と書き、今の吉野郡川上村大字西河の地であるが、『笈の小文』等にいう「西河」はこれとは異なり、今の川上村大字大滝にある所謂「西河の滝」で『和州巡覧記』（貝原益軒著、元禄九年刊）に、

　西河の滝　是吉野川の上也。大滝とも云。村の名をも大滝と云。清明が滝より五町ばかり有。此滝は只急流にて、大水岩間を漲落る也。よのつねの滝のごとく高き所より流落にはあらず。岩間の漲ぎり沸事、甚見事也。近寄りて見るべし。遠くては不堪賞。

とあるのによって、その情況が知られよう。『笈の小文』では、龍門の滝での二句の次に並べられている。本書の底本としたやや長い前書のある自画賛は、元禄初年の揮毫と鑑定されているように、芭蕉翁記念館蔵の真蹟五句発句切と共にこの句の最も時期の早い資料と認められるもの、闌更の『有の儘』や『落葉考』に紹介されたものの原物である。鯉屋伝来の許六の画に芭蕉の賛した幅（天理図書館現蔵）は有名であるが、許六との関係から元禄五、六年頃の執筆と見られ、この画も自画も高所から水の落ちる普通の滝の形になっている。真蹟懐紙は『野ざらし紀行』の際の「山路来て」の句と併記したものである。

　この句が吉野川上流の激湍大滝での吟であるかどうかについては、諸家によって問題が提起されている。山本唯一博士は、芭蕉の吉野入りの道筋を検討した後、

　……西河滝という名の滝はない。それで従来これは西河の近くにある大滝というところ……をいったのだとされている。けれども樫尾峠から西河へゆき蜻蛉の滝から吉野へいった芭蕉は大滝へは廻らなかったのではあるまいか。そして句の前書は大滝ではなく西河なのだから、吉野川の支流のそれをさすと見るべきである。蜻蛉の滝を通って流れてくる河である。勿論それとて滝ではなく、谷川というにふさわしい。芭蕉は恐らく蜻蛉の滝へゆく

道の滝つ瀬をなすところで、この句を得たのであろう。あるいは蜻蛉の滝でよんだのかも知れない。（『芭蕉俳句ノート』）

と見ておられ、安東次男氏は、

『笈の小文』の記述では句前に「西河」とあり、句後に「蜻蛉が滝」としるしているが、それらしい句はほかにない。西河（にじこう）は宮滝の川上大滝あたりの地名で、古くから吉野川の激（たぎ）つ瀬として有名な所である。「滝」と云ってもいわゆる瀑布ではないが、ここには近くに支流の音無川がつくる瀑布もまたあり、蜻蛉・蜻螟・清明などの名で呼ばれている。……嶮なる岩洞の奇景である。／「滝の音」は大滝の激湍でもよいが、蜻蛉の滝と解しておく。
（『芭蕉発句新注』）

といった説を述べておられる。按ずるに、山本博士のように大滝へ行かなかったと見るのは無理ではあるまいか。卯月廿五日付万菊・桃青連名書簡に於いて、巡った滝を記した中に「西河」があり、『笈の小文』の「ほろ〳〵と」の句の前書と照応しているし、「西河の滝」の称があったことは前掲『和州巡覧記』の記事に明らかで、それを大滝とも呼ぶことも其処に見えるからである。『笈の小文』に「蜻蛉の滝」の名のみあって句がないのは、本書の未定稿的性質のあらわれであって、それ故に「ほろ〳〵と」の句が蜻蛉の滝やその近所の激湍での句ということにはならないと思う。この句が成ったのは、吉野川上流の激湍、西河の滝別名大滝とも呼ばれる急流のほとりだったのであろう。ただ句の成立の処がそうであったとしても、句の表現は「たきのおと」とあるだけであるから、その情景を普通の瀑布としてイメージしても一向に構わない。自画や許六画が普通の瀑布を描いているのは、芭蕉自身もそうした自由な鑑賞を許容し、自らそうした扱いをしていたことを示すものなのだ。

句の表現の眼目は、「ほろ〳〵と」という、花びらの散るさまの形容の、巧みで而も事象の真をよく把握した点と、それと「ちるか」の詠嘆の微妙に響き合う感覚にあろう。この「か」は〔語釈〕に引いた雅経の歌を思わせつつ、

「かな」よりも遥かにデリケートな感情のゆらぎをあらわしている。この句を解して、滝の響きの為に山吹の花が散るとか、その延長として「か」を疑問の意と取るような説は、この絶妙な表現の真価を知らぬものでしかない。「たきのおと」は花の散る原因ではなく、句全体の背景である。「たきのおと」に包まれた中で、何に促されるともなく「ほろ〳〵と」山吹が散る。それを滝の流れと共に視野に入れている芭蕉の感情のゆらぎを示すのが「か」の働きであろう。勿論滝も花も両つながら作者は目にしているのである。この吉野の花見の旅で得た句中では随一の傑作といえよう。

櫻

367　櫻がりきどくや日〻に五里六里　（笈の小文）

春季（桜がり）。

語釈　○**桜がり**　「桜狩り」。野山や村里に桜の花を尋ねて歩きまわること。既出（Ⅰ*244*）。○**きどくや**　「奇特や」。「きどく」は、労をいとわずに何かをして、殊勝感心だという気持をあらわす。「や」は詠嘆。ここで切れる。「扨も〳〵御執心御きどくなお心入」（『鑓の権三重帷子』上）「Qidocu.」（『日葡辞書』）。○**日〻に**　「日〻に」。毎日々々。『笈の小文』宝永板本の反復符は「々」や「〻」ではなく、仮名の場合と同じ「〻」である。「時〻気を転じ、日〻に情をあらたむ」（『笈の小文』）「Fibini.」（『日葡辞書』）。

大意　桜の花を尋ね歩いて日を暮らし、毎日々々五里六里と歩くとは、我ながら殊勝なことよ。

考　この句以下「扇にて」までの三句は、『笈の小文』吉野の条に並記されており、貞享五年三月その地の花見の時の吟と知られる。その模様は、

よしの〻花に三日とゞまりて、曙黄昏のけしきにむかひ、有明の月の哀なるさまなど心にせまり胸にみちて、あ

るは摂章公（ママ）のながめにうばゝれ、西行の枝折にまよひ、かの貞室が是は〳〵と打なぐりたるに、われいはん言葉もなくていたづらに口をとぢたる、いと口をし。おもひ立たる風流いかめしく侍れども、爰に至りて無興の事なり。（『笈の小文』）

と述べられており、『去来抄』先師評の去来の句「おとゝひはあの山こえつ花盛」の条には、

……杜国が徒と吉野行脚したまひける道よりの文に、或は吉野を花の山［と］いひ、或は是は〳〵とばかりと聞えしに魂を奪はれ、又は其角が桜さだめよといひしに気色をとられて、吉野にほ句もなかりき。只、一昨日はあの山こえつと日々吟じ行侍るのみと也。

という記事も見える。来し方の山を振り返りながら、花に興じて歩きまわる師弟のさまが窺えよう。そうした一ときにふと、何と酔興なと自らの姿を省みる気持が動く時もあって、この句の「きどくや」という砕けた日常語を用いたところには、その苦笑するような自省の気分が託されているのだ。俳諧らしい軽いおかしみの句である。大虫の『芭蕉翁真蹟拾遺』には「六里七里日ごとに替る花見哉」という句が見えるが、真作と決定出来る根拠はなく、別案かどうかも明らかでない。

368　日は花に暮てさびしやあすならふ　（笈の小文）

あすは檜の木とかや、谷の老木のいへること有。きのふは夢と過て、あすはいまだ來らず。たゞ生前一樽の樂の外に、あすは〳〵といひくらして、終に賢者のそしりをうけぬ

さびしさや花のあたりのあすならふ　（真蹟懐紙）

春季（花）。

語釈　**○日は花に暮て**　「日は花に暮れて」。日が暮れるという現象が花の咲く場に於いて進行するのである。「人のさわらぬ松黒む也　利牛　雑役の鞍を下せば日がくれて　野坡」（『炭俵』上）「Faru, natçu, aqi, fi, toxiga cururu.」（『日葡辞書』）。**○さびしや**「寂しや」。「や」は詠嘆。**○あすならふ**　「あすならう」。ヒノキ科の常緑喬木。東北から九州にかけて分布する。高さ十〜三十メートルに及び、樹皮は灰褐色で薄く、葉はやや大きな鱗状、枝の表側の葉は緑だが、裏側のは白蠟色である。建築・土木・船・車の用材として広く利用される。形が檜木に似ているところから、「明日は檜木になろう」の意から、この名が生じたといわれる。「余の木どもが問ひやうに、其方は何どといへば、彼名のなき木が、それがしは檜の木のぢやうにあす成ふと云て、終に何にもならざる間、此木の名をあすならふと名づくる」（『甲陽軍鑑』四十ノ下）。

大意　華やかに咲く花に日は暮れかかり、あたりに黒々と立つあすなろうが一入さびしく見えることだ。

考　真蹟懐紙は今所在不明であるが、昭和八年三月の名古屋美術倶楽部での売立目録『北岳楼蔵品展観図録』に見えることを、大礒義雄氏が『連歌俳諧研究』四十九号に紹介しておられ、『笈日記』伊勢部に「讃二幅」のうちの一幅として収められた句文も同じである。両案の先後について確証はないが、観念的な「さびしさや」から写生的な「日は花に」へ推敲されたと見るより、その逆の方が自然と思われるので、「さびしさや」の方が一応後案と思われる。井本農一博士は、『笈の小文』の成立時期が元禄四年前半頃と考えられるところから、その後に「さびしさや」に改案して伊勢あたりに画賛にして届けるとは信じ難いとして、「日は花に」の形を後案と見ておられる（「『日は花に暮てさびしやあすならふ』考」—『国文』三十一号）が、この場合伊勢に真蹟が伝わったことを成立と密接に結びつける必要はないのではあるまいか。『笈日記』に採集された資料の中には、外にも成立の時処とは関係のない例があり、偶々支考が伊勢にあったものを寓目しただけなのであろう。

「日は花に」の句は、花見に日を暮らして吉野山中に夕暮を迎えた寂しい気分が、暮方の山中の自然のたたずまいと共に、よく言いおおされている。

まず時間の経過がある。一日中春の明るい日ざしの中で咲き匂っていた桜や花見の人々が背景にあって、それが夕方になって今は桜にも宵闇が迫り、花見の人々も帰り去ってしまったあとの情景の具象性がある。宵闇が漂い出したとき、昼間の花やかさの中では気づかなかった翌檜が、黒々と浮かび上がってくる。花やかさのあとのさびしさが、急に目立ち始めた翌檜によって、具象的に表現されている。……「あすはなろう、あすこそは」と言い暮らしている、悲しい木の運命も、底辺感情としては捉えられている。(『鑑賞日本古典文学・芭蕉』)

と井本博士が鑑賞しておられる通り、「日は花に」の句は完熟した詩的世界を打成しているのである。

これが「さびしさや」の形になると、「さびしさ」「花のあたりの」という用語表現にも現われているように、観念性が強く表面に出て来る。桜花の傍にあすなろうを配することによって、「さびしさ」という観念を強調しようとする図式なのである。それは、「明日は、明日は」と言い暮らして一事も成る無き人間の怠りを諷した前書と照応するもので、もう吉野の花の夕景色とは関係がない。芭蕉はこの翌年の『おくのほそ道』の旅中、須賀川の可伸庵で「隠家や目だゝぬ花を軒の栗」の句を詠んだが、『おくのほそ道』にはこれを「世の人の見付ぬ花や軒の栗」と改案して収めた。「世の人の」の形では、栗の花によって可伸の隠閑の境涯を象徴し、その俗世の人との懸隔を強調する観念性が強く出る一方、可伸の草庵のたたずまいは殆んど描かれない。現実の草庵のさまは「隠家や」の形の方がよく描かれているのである。これと同様な関係が、「日は花に」と「さびしさや」の両句形の間に認められるのであって、両者は殆んど別の句といってもよい程である。ここでは二つの句形の表現のつながりを考慮して一まとめにして扱うが、本位句としては吉野の自然を具象的にあらわした「日は花に」を採ることにした。これも叙景句として鑑賞に堪える内容を持つことを強調したい。「さびしさや」の句に於ける「花のあたりの」という表現には、『撰集抄』公任能宣素性三人名歌ノ事の条に「此二のあふぎかちに定まりて、その外のゆゝしかりける扇どもは、花のあたりのみやま木の心ちして、心とめ見る人もなかりけり」という一節の影響が、古くから指摘されている。

369

扇にて酒くむかげやちる櫻（笈の小文）

扇子にて酒くむ花の木陰かな（駒掫）

扇にて酒酌む花の木陰かな（芭蕉翁真蹟拾遺）

春季（桜）。

語釈　○扇にて酒くむかげ　「扇(あふぎ)にて酒酌(さけく)む蔭(かげ)」。能役者が酒を飲む所作をするのに、持った扇を盃に見立てて、それを傾ける仕草をする。それを桜の木蔭で真似て見るのである。「酒くむ」は酒を器につぐことであるが、ここは「飲む」意味に展開した例。「かげ」は、木蔭に同じ。「泉はもとより酒なれば、酌みては勧め掬ひては施し、我が身も飲むなり飲むなりや」（謡曲「菊慈童」）「冷汁に散てもよしや花の陰　胡及」（『あら野』巻二）。

大意　桜の花の散る木蔭で、能楽中の人物を気取って、扇で酒を酌む所作を真似てみることだ。

考　吉野山中での花の句として『笈の小文』に見える。花下に酒を酌む人を描いた客観句と解する説もあるが、これは前の「はなのかげうたひに似たるたび寐哉」（Ⅱ365）等とも共通する作者自身の逸興と見るべきであろう。能や狂言では徳利・盃といった小道具を使わず、扇をそれらに見立てて酒をついだり飲んだりする仕草をする。落花の面白さに興じて、自ら曲中の人物と化する風狂の趣向である。大虫の『真蹟拾遺』には、小簗庵春湖なる人の所蔵として、この旅中貞享五年春夏の句十二句を録した真蹟を紹介しており、中に見える句形が異形として標出した句形である。原物が知られないのでなお確言は出来ないが、『駒掫』（芙雀撰、元禄十五年刊）の句形よりは、『真蹟拾遺』所載の句形の方が初案としての可能性は高い。

尾形仂氏は、散る花の下で自ら能の中の人物になったつもりで「扇の盃」に酔う風狂の擬態と見る立場を初案の解

として肯定されながらも、『笈の小文』の句形をもそのように取るのは、「酒酌むかげ」を「酒酌む花の木陰」と同義とする点に無理があり、且つは「散る桜」がやや冗長の嫌いを生ずるとして、左のような新解を提示しておられる。

> 「影」は、すなわち、人影である。……「酒酌む影」は、春の黄昏の光の中ではらはらと散る落花のヴェールを通して見た幻影にほかならない。……『古今集』序文の筆法を借りるならば、「春のゆふべ、吉野の山の落花のもとに宴する人影は、芭蕉が眼には、能舞台の人のしぐさかとのみなむおぼえける」といったことにでもなろうか。そこには、自己をワキ僧の立場に置いて、現実の花下の人影をシテ・ツレの酒宴の幻想の場面としてながめる逸興の笑いと、繽紛たる落花の舞台に静かに〝扇の盃〟を酌みかわす幻影の無言劇がかもす寂びの色とが、不思議な調和をもって混在している。
>
> 初案が「扇にて酒酌む花の木陰かな」と一息に言い下した形であるのに対して、定稿は「扇にて酒酌む影や」と切れ字で切って二句一章の形をとる。初案では「花の木陰」の措辞が幻想の世界への扉を開いていたのに対して、定稿では「や」の下の表現零の空間に、現実の世界と幻想の世界との転換を仲介する役割を託したのである。「扇にて酒酌む影や」とまず読者を夢幻劇の世界へさそって置いて、さて、切れ字「や」による休止をはさんだ「散る桜」の座五によって、それが落花のヴェールを通した幻想であったことをうなずかせ、さらに、現実の人影を一瞬にして能舞台の人物に変身させた俳諧の〝幻術〟に感嘆せしめる、その表現の手づまは、……芭蕉の花ごころを伝えて、心にくい。（『松尾芭蕉』）

私の見るところでは、「酒くむかげ」は「ちる桜」と照応することによって、「木蔭」であることを了解するのにさして手間はかからず、それ程無理な言い方とは思えない。且つ「酒酌む花の木陰かな」では表現が在り来りである上に、花咲く木蔭ではあっても、散る趣をあらわすわけではなかった。従って「ちる桜」は新たな背景を展開したことになり、決して冗長な表現ではなかろう。私は右のような見地から、尾形氏の説に全面的な賛意を表することは出来ない

が、特色ある一説として注目したい。

苔　清　水

370　春雨のこしたにつたふ清水哉　（笈の小文）

おなじく

はる雨の木下にかゝる雫かな　（芭蕉庵小文庫）　――泊船集・蕉翁句集

春季（春雨）。

語釈　**○苔清水**　「コケシミヅ」。西行の作と伝えられる歌「とく〳〵と落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなき住居かな」にちなんだ吉野山中の泉。奥の院から四五丁離れた、西行隠栖の跡の近くにある。「露とく〳〵」（Ⅰ *201*）参照。「Coqe.」（『日葡辞書』）。**○春雨**　「ハルサメ」。「はるのあめ」（Ⅱ *274*）参照。「蛛の井に春雨かゝる雫かな　奇生」（『あら野』巻二）「Farusame.」（『日葡辞書』）。**○こしたにつたふ**　「木下（こした）に伝（つた）ふ」。桜の梢から幹を伝わって雨滴が落ちることをいう。「つたふ」は自動詞。「秋蟬の虚（カラ）に声きくしづかさは　野水　藤の実つたふ雫ほつちり　重五」（『冬の日』）「Tçutai, tŏ, ŏta……Cozuyeuo tçutŏ.」（『日葡辞書』）。

大意　この苔清水は、花の梢を濡らす春雨が木の下に伝い流れて来たものかなあ。

考　『笈の小文』の吉野の条に見え、「苔清水」とあるところから、この時西行隠栖の跡を訪うての作と認められる。『芭蕉庵小文庫』に「おなじく」とあるのは、この句の前に「苔清水」と題した「凍とけて筆に汲干す清水哉」の句があるのを承けたのであるが、「凍とけて」の句についてはさきに述べたので、ここでは触れない。「露凍て」（Ⅱ *334*）の条参照。「凍とけて」の句の信憑性に問題がある為に、穎原博士の『新講』では、「木下にかゝる雫」という句形にも信を措き難い感がするとされている。ただ、大虫の『芭蕉翁真蹟拾遺』に載せたこの旅中の真蹟というものには

「春雨の小(ママ)したにかゝるしみづ哉」と見えており、『小文庫』の句形は、こうした初案を誤り伝えたかとも考えられよう。『一葉集』に「春雨の木下につたふ雫かな」とあるのは恐らく杜撰である。

吉野という場と時季からして、この句の「こした」は桜樹の蔭でなければならない。西行ゆかりのとくとくの清水を訪ねて、その清水は桜樹を濡らした春雨が伝い流れて来たものかと、その由来に如何にも美しい想像を働かせた趣向であって、疑問を含む詠嘆の「哉」に静かな興が感ぜられる。「春雨」は眼前に降っていなくとも可い。『野ざらし紀行』で同じ所を訪ねた際の「露とく〳〵」の句は、風狂の情が露わであった。今度の旅では、自然に対して優雅な想像を働かせ、全体におとなしい句柄で、前の旅との気分の相違を端的に見せている。但し、自然を扱いながら、その態度は写生とは異なり、興に発した趣向が中心なのである。

芳野

371 花ざかり山は日ごろのあさぼらけ （芭蕉庵小文庫）

泊船集・蕉翁句集

春季（花ざかり）。

語釈 ○**芳野** 「ヨシノ」。「吉野」の異表記。○**日ごろのあさぼらけ** 「日頃(ひごろ)の朝(あさ)ぼらけ」。「日ごろ」は、日常、平生の意。「あさぼらけ」は、夜が明けて段々明るくなる早朝の趣をいう語。あけぼの。「日ごろはふるき事のやうにおもひ侍れども、折にふれて感動身にしみわたり、涙もおとすばかりなれば」（『猿蓑』巻四、嵐蘭発句「夢さつて」前書）「あさぼらけ　新式に非二夜分一所に載られたり。既に朝の字ある詞を、何の疑(うたがひ)ありてか非二夜分一とことはられたるにや。其時代に不レ審したるものおほくありけるにや。二条殿の御老耄(らうもう)ありてや。尤おぼつかなし。ほらけは開の字也。ひらくと云事也。はひふへほの五レ音相通の故也。花などのひらくるごとく夜の明る躰なり」（『御傘』）「青天に有明月の朝ぼらけ　去来　湖水の秋の比良のはつ霜　芭蕉」（『猿蓑』巻五）「Asaboraqe.」（『日葡辞書』）。

大意　吉野山は普段と変らない夜明けなのだが、花盛りの頃の趣の何と素晴らしいことよ。

考　『蕉翁句集』には「よし野にて」と前書がある。『笈の小文』には見えない句であるが、花の頃吉野に居たのは貞享五年だけだから、杜国と共に花見をした時の作と認められよう。

古注には、「あさぼらけありあけの月と見るまでによしのゝさとにふれる白雪」（『古今集』巻六、坂上是則）の歌を引いて、「花の時には雪をおもひ、雪の時には花をおもふの余情」（杉雨『芭蕉翁発句評林』）とか、「日比は日数也。日比の願ひ叶て丁ど花盛りに参り逢たるよとなり」（東海呑吐『芭蕉句解』）といった説が見えるが、何れも句の真意を得たものとは思えない。「花盛なる此日比の朝ぼらけは殊に佳い眺めぢや」（『芭蕉句集講義』望東説）、「（山の景色は毎日よいが）わけても今朝は満山花に埋もれて、心ゆくばかり愉快な眺めだ」（半田良平氏『芭蕉俳句新釈』）等とも解し得るけれども、やはり今一つ納得が行かない。「日ごろ」は近来の数日の意ではなく、日常平生の意であることを基本として、「山は」と改めて言い起しているから、それ以下は初五と対照した表現と見られよう。そうすると、「山は日頃の山ながら、中〻さやは思はれずとの嘆美也」（杜哉著『芭蕉翁発句集蒙引』）と解するのが最も穏当に思われて来る。つまりは「山の朝明けそのものは常と変らぬことを述べて、花の美を強調」（今栄蔵氏『新潮日本古典集成・芭蕉句集』）した作意なのであった。「山は日ごろのあさぼらけ」には「名もなき山の薄霞」（Ⅰ227）に似た新しい発見があるが、それは聊かの事に過ぎない。この句の取柄は七五の部分のおおらかな声調であって、その為に全山花に覆われた吉野の大観が、読者のイメージに浮んで来るのである。

高野にて

372　父母のしきりに戀し雉子の聲　（あら野）

笈の小文・新始・泊船集・俳諧問答・蕉翁句集・柏声舎聞書・枇杷園随筆

春季（雉子）。

語釈 ○**高野** 「カウヤ」。今の和歌山県伊都郡高野町にある真言宗の総本山金剛峰寺をいい、県北東部の山地一帯の称でもある。○**父母** 「チ、ハヽ」。『日葡辞書』には「**Chichi faua.**」とあり、中世から近世初頭にかけての発音を示している。「猶父母のいまそかりせばと、慈愛のむかしも悲しく」（『千鳥掛』芭蕉発句「ふるさとや」前書）。○**しきりに恋し** 「頻(しき)りに恋(こひ)し」。「しきりに」は、感情の度合が強いこと。切に。「恋し」は形容詞。ここで切れる。「其おもふ処しきりにして猶かなわざる時は書うつす也。あぐむべからず」（『三冊子』わすれみづ）「いとゞしく過ぎにし方の恋しきにうらやましくもかへる浪かなとうち詠めゆけば」（謡曲「杜若」）「**Xiqirini.**」「**Coixij.**」（『日葡辞書』）。○**雉子の声** 「雉子(きじ)」は我が国固有種の野鳥。黒緑色の美しい羽根と長い尾羽を持つ。春の季語。後掲の『滑稽雑談』の説に、「子」の字を書き添えるのは誤りとあるのは、必ずしも正しくない。「子」を添えた場合、よみが「キヾス」だけとは限らないのである。「きじ……きゞす……野鶏……皆春也。かりばの雉子は冬也。声、鳴、音をたつるなど云詞入ば春也。春はよひに雉子のなく所を聞置、未明にゆきてとるを、鳴鳥狩共、聞すへ鳥共、朝鷹がり共云也。かりばのとりと斗いへども雉子の事なり」（『御傘』）「雉子　きじ　あさるきゞす　子おもふ　つまこふ　やけ野　禁野　野山やく比は足(あし)よはの妻子(つまこ)をのけかねて。道のけんそをけん〳〵となきかなしみ。鷹(たか)にあふても獵師(れうし)を見ても。泪(なみだ)のほろゝ隙(ひま)もなく。万おそれおほく哀(あはれ)なる物とぞいひならはし侍る。されば子を思ふきじは泪のほろゝとも。鷹にあふてけんをとるゝなどもいへり」（『山之井』）「総じて雉は春也。狩場にむすびて冬と春との違あり。只狩場にむすびたる雉は冬也。それに、声をむすびては春也とは、彼聞すへ鳥、なき鳥狩の心を云句也。雉子、只雉の事也。雉と云句に子の字を書添ふるは誤也。雉子はきゞす也。……此者雛を愛する事切也。野焼にも子を思ふて飛ずとなん」（『滑稽雑談』）「滝壺もひしげと雉のほろゝ哉　去来」（『続猿蓑』下）「**Qiji.**」（『日葡辞書』）。

大意 この高野のお山で子を思うこと深いという雉子の声を聞くにつけ、亡き父母のことが一入(ひとしお)切に偲ばれる。

考 『笈の小文』では、吉野の花見の記事の次に「高野」として、この句と万菊丸の「ちる花にたぶさはづかし奥の院」の句が並んでおり（万菊丸の句は『あら野』にも中七を「たぶさ恥けり」とした形で所収。初案形であろう）、『蕉翁句集』の前書は『あら野』と同じである。芭蕉と杜国は吉野を出て高野山に登り、奥の院に詣でたのであった。士朗の『枇杷園随筆』（文化七年刊）には、「高野登山端書」として、この時の模様や感懐を述べた左の如き長い前書が

紹介されている。

高野のおくにのぼれば、霊場さかんにして法の燈消る時なく、坊舎地をしめて仏閣甍をならべ、一印頓成の春の花は、寂寞の霞の空に匂ひておぼえ、猿の声鳥の啼にも腸を破るばかりにて、御廟を心しづかにをがみ、骨堂のあたりに彳て、倩おもふやうあり。此処はおほくの人のかたみの集れる所にして、わが先祖の鬢髪をはじめ、したしきなつかしきかぎりの白骨も、此内にこそおもひこめつれと、袂もせきあへず、そゞろにこぼるゝ涙をとゞめて

右の外、士朗の著に十年先立つ卓池の自筆稿本『柏声舎聞書』（享和元年）にも小異ある文が収められていることが知られている（『連歌俳諧研究』六十三号、大礒義雄氏稿参照）。

芭蕉の亡き父母を思う切実な気持は、『野ざらし紀行』の折の「手にとらば消ん」（I 195）の句や、今度の旅での歳暮吟「ふるさとや」（II 337）の句に強く現われている。それに、右の長い前書によれば、高野山奥の院の骨堂には、芭蕉の「先祖の鬢髪をはじめ、したしきなつかしきかぎりの白骨」が納められていた。芭蕉の旧主蟬吟が寛文六年四月に亡くなった後、彼はその遺髪を奉じて高野山に登ったとも伝えられる。兎に角「したしきなつかしきかぎり」といった表現には、蟬吟への思いも籠められていることは確かであろう。貞享五年二月十八日には、伊賀の上野で父与左衛門の三十三回忌法要に列し、その後間もなく旧主の遺児探丸に招かれては、「さまぐ〜の事おもひ出す桜かな」（II 357）と吟じた芭蕉であった。何かにつけて故郷での昔の事が思い出される旅だったのである。骨堂のほとりに立った芭蕉の感慨は、正に無量のものがあったろう。折柄けたたましく鳴く雉子の悲しげな声をきいて、この句が発想されたのである。行基菩薩の詠と伝えられる「山鳥のほろく〜となくこゑきけばちゝかとぞおもふ母かとぞおもふ」（『玉葉集』巻十九）の歌を踏まえていることは明らかで、前掲の『山之井』や『滑稽雑談』の記事にもあるように、雉子は子を思う鳥とされていた。親や故旧のことが今更偲ばれるこの高野の奥に来て、その雉子の声をきいたのである。古

歌の背景はあるが、この感動は真率で、「しきりに恋し」という表現が哀切を極めている。真情を真正面から採り上げた、芭蕉らしい骨太な佳句といえよう。

和　哥

373　行春にわかの浦にて追付たり　（笈の小文）

春季（行春）。

語釈　○**和哥**　「ワカ」。「和歌の浦」の略記。「哥」は「歌」の略体である。○**行春**　「行く春」。去り行く春を惜しむ気持を籠めた季語。「行春もこゝろへがほの野寺かな　野水」（『あら野』巻六）。○**わかの浦**　「和歌の浦」。今の和歌山市和歌浦町、紀ノ川旧河道の海に面した湾岸の景勝地。万葉以来の歌枕である。○**追付たり**　「追つ付いたり」。「行春」と照応する表現である。「追ひ付きたり」ともよめるが、ここは謡曲調とおぼしく、謡曲では、「追つ付いて申さうずる間」（「元服曾我」）「いで追つ付かんといふまゝに」（「錦戸」）「路次にてやがて追つ付き候へ」（「忠信」）等凡て「追つ付く」なので、ここでもそれに準じてよんでおく。「Votçuqi, qu, tçuita.」（『日葡辞書』）。

大意　去り行く春に漸く和歌の浦で追い付いたことよ。

考　『笈の小文』では、高野山での句の次にこの句を出している。芭蕉と杜国は三月末に和歌の浦に着いたのである。これ以外に出典がないところから、元禄三、四年頃『笈の小文』執筆当時の作かとする説もある。

伊賀から吉野・高野へと、これまで芭蕉は山地ばかりを歩いて来て海を見遥かす展望の広い所に出たのは久しぶりだった。和歌の浦は、赤人の名歌「和歌の浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさしてたづ鳴き渡る」（『万葉集』巻六）で知られた歌枕、

誠に和哥の浦は山色遠含空海明先見日の瞻望にして、玉津嶋の瑞籬清く、春を惜むべきの地なり。されば、追付たりのことばちからありて、浦山の風色に光をもたせたる所、妙といふべし。（『芭蕉句解』）

と蓼太の説く通り、風光明媚の地の春色に興を発した趣向である。「行春」を擬人化して「追付たり」といい、宛かも作者が舞台に上って春の袖を控えているように表現したところが面白く、「追ひ付きたり」「追ひ付いたり」等ではなくて「追つ付いたり」とよめば、狂じた調子が一層強く印象づけられよう。しかも自然描写は何もなくても、渺茫と霞みわたる海陸の景色は、おのずから読者の胸に浮んで来る。趣向のある即興句にあり勝ちな嫌味が全くないところ、俳味上乗の句なのである。

衣　更

374　一つぬひで後に負ぬ衣がへ（笈の小文）

前後園・あら野・秋津島・泊船集・続別座敷・銭龍賦・蕉翁句集

行脚のころ

ひとつ脱てうしろにおひぬ衣がへ（出光美術館蔵真蹟懐紙）

ひとつぬぎてうしろにおひぬころもがへ（天理図書館蔵真蹟短冊）――天理図書館蔵真蹟懐紙写

前書きれてみえず

一つ脱で（ママ）せなに負けり衣がへ（芭蕉庵小文庫）

夏季（衣がへ）。

語釈　○**衣更**　「コロモガヘ」。陰暦四月一日、冬の衣をぬいで夏の軽装になる行事。「Coromogaye.」（『日葡辞書』）。○**一つぬひで**　「一つ脱（ひとぬ）いで」。重ね着していた上の衣を一つ脱ぐことをいう。「ひ」は「い」を書くべきところで、音便の変則表記である。「行

燈はりてかへる浪人　嵐雪　着物を碓にうてと一つ脱　雪」（『あら野』員外）「Nugui, u, uida.」（『日葡辞書』）。○**後に負ぬ**　「後に負ひぬ」。「後」は、背中をいう。「とのは、……ひさしのはしらにうしろをあてて、こなたむきにおはします」（『枕草子』百四段）「Vxirouo misuru.」（『日葡辞書』）。○**衣がへ**　「衣更へ」。夏の季語。江戸時代には四月一日にそれまでの綿入れを脱いで袷にかえ、端午の節供から帷子になる習いであった。季語としては四月一日のことである。「更衣……ころもがへは。宮中所〱の御装束。御殿の御帳のかたびらまで。夏の御よそひにあらため侍事となれば。女御もけふは更衣かなとも。高位にもまじはるやなどもいへり。又花衣ぬぎかへて。はらわたもたつとも。春と夏の季かゆるなどもいひ。地虫も蟬の衣がへ。わたぬく鮒も衣がへともし侍し」（『山之井』）「更衣今日称更衣節。禁裏諸家自今日被著夏袍。自今日紫宸殿清涼殿改御装束。紫宸殿者装束使史生官掌奉仕之。御装束行事官調進、清涼殿者出納御蔵小舎人掃部寮等奉仕之。御装束者出納調進至九月晦日几帳等用単紗。地下良賤亦改綿服著袷衣。互相賀」（『日次紀事』）「綿をぬく旅ねはせはし衣更　九節」（『炭俵』上）。

大意　旅の途中の衣更えとあって、上の一枚を脱いで背に負っただけ、いとも簡略だ。

考　『続別座敷』には「旅行」と前書がある。芭蕉と杜国は和歌の浦から奈良へ向うのであるが、その途上四月一日の衣更えの日に際して詠まれたのがこの句であった。『笈の小文』では万菊丸の「吉野出て布子売たし衣がへ」の句と並んでいる。

「ひとつぬぎて」の形は、最初に標出したように真蹟短冊の外に真蹟の写しと思われるものにも明記されている。これは荻野清氏の『芭蕉論考』に、尾張鳴海の下郷是朗氏蔵として紹介されたもので、貞享五年の旅中の作を列記してあり、恐らく当時鳴海に書き遺したものを原拠としていると思われる。従って旅中の初案が「ぬぎて」であったことは確かであろう。また出光美術館蔵の真蹟懐紙については、岡田利兵衛氏が『観魚荘蒐集展観図録』の解説で、五年夏の岐阜に於ける「鵜舟」懐紙に続く元禄初年の筆蹟と鑑定しておられ、その頃とすれば「脱て」は「ぬぎて」と訓むべきもののようである。これらに対して、「ぬいで」と明記した最初は、言水の『前後園』（元禄二年刊）であって、

蕉門の集でないところから、それはなお確実視出来ないにしても、元禄三、四年の間に執筆された芭蕉の草稿に基づく宝永板『笈の小文』に「ぬひて」とあることは、元禄に入って音便形に変えたことの明証となろう。すると、『あら野』『秋津島』(団水撰、元禄三年刊)『泊船集』『続別座敷』『銭龍賦』『蕉翁句集』等、「脱て」と表記されて何れにもよめるものも、「ぬいで」とよむものと認められる。『前後園』の言水自序は元禄二年二月に書かれているのに対して、『あら野』の芭蕉序は翌三月の執筆なのである。『芭蕉庵小文庫』の句形は杜撰の類かとも思われるが、ことわり書きによれば真蹟に基づいて載せたらしく、卒かには疑えない。或いは鳴海に入る前の、最も早い時期の案かも知れぬ。その「脱で」とした原本の濁点は、板行の際に付したものであろう。

〔語釈〕に引いた九節の句「綿をぬく旅ねはせはし衣更」にもあらわれているように、古人はこうした季節の節目の行事を今より几帳面に行ったもので、旅中だからといって、せずに済ますようなことはなかった。旅の途上で衣更えの日を迎えたが、別に薄い衣裳の支度があるわけでもない。唯重ね着していた一枚を脱いで荷物の中に入れ、背に負うて行くばかりだというので、旅の境涯の中からふと取り出された、飾らない軽みの味わいの好句である。

支考の句に、「帷子のねがひはやすし銭五百」と云ふのがある。冬の寒さは防ぐによすがも無いが、銭五百で帷子の願ひをも満すことが出来るとの意である。芭蕉の此の衣更の句と趣きが似てゐる。おれの衣更はこれだぞ……と途中で一つ脱いで背負つたのである。衣更を簡単に扱つたところに旅の無頓著が出て面白い。支考の句には月並の感があるが、此の芭蕉の句には月並のところが無い。(『芭蕉俳句研究』幸田露伴)

旅に身をまかせきった芭蕉の姿がある。軽い句のようにみえて、その底を支えているものは実に根強い。誦しているうちに言葉が消え、その境地のみ心に残って旅の芭蕉が生きて動く。内に充実したものが表現になりきって言葉を消してしまっているからであろう。『笈の小文』の本文に「跪(きびす)はやぶれて西行に等しく……」と旅ゆくころをつづった文がこの句の前にあって、それを読むとひとしおこの句の味わいが深くなる。同じ境地を詠んだ、

杜国の「吉野出て布子売たし衣がへ」という芸が表にあらわれた表現と比較してみると、なおそのことがはっきりしよう。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

といった見方は、よく肯綮に中っている。杜国の句の中七は、『あら野』巻七に「布子売おし」となっているが、内容表現共にそれでは体を成さない。この年卯月廿五日付の万菊・桃青連名惣七宛書簡にも、「かの布子うりたしと云けん万菊のきる物のあたひは彼（注、竹内村の孝女いま）におくりて過り」とあるから、「おし」は「たし」の誤りと認められる。

奈良にて

375　灌佛の日に生れ逢ふ鹿の子哉　（あら野）

笈の小文・泊船集・蕉翁句集

夏季（灌仏の日・鹿の子）。

語釈　**○灌仏の日**　「灌仏」は、釈迦誕生の日とされる四月八日に修する法会「灌仏会」のこと。花御堂を造って誕生仏を安置し、それに甘茶をそそぎかける。「灌」は、水をかける意。「灌仏　四月八日也。仏誕生の義式ある也」（『御傘』）「灌仏　卯月八日は。尺尊嵐毘園にて誕生したまへる時。天龍くだりて水をそゝぎ。仏にあぶせ奉りにしをまねぶ日なれば。諸寺をはじめ。おほうちにも是をこなはれて。御導師五色の水をそゝぎ侍事などありしとなり。又けふ躑躅樒など。あま入道のつみけるわざは。彼花園のけしきを思ふよしとかやいふを。うぶやの餅つゝじなどいひなせり」（『山之井』）「灌仏の其比清ししらがさね　尚白」（『あら野』巻八）。**○生れ逢ふ**　「生まれ逢ふ」。その日に丁度生まれる。「誠にかゝる折ふしに生れあひぬる事こそめでたふ候へ」（『伊曾保物語』中ノ三十五）「**Vmareai ô, ôta. ……Govoqiteno firomaru jibunni vmarevô.**」（『日葡辞書』）。**○鹿の子**　「鹿の子」。鹿の子。古語では鹿を「か」といった。「けだ物はおほくはさつきに子をうめば、かのこもしかありとなん。是をはいかに、京かのこ、江戸かのこ、しろめゆひ、よつめゆひなど染物のえんいひたる作あまた侍る」（『山之井』）「毎-年五-月時-節南-都春-日-山麑-鹿子漸成-

長。然力未レ足」（『日次紀事』）「和にある所、又鹿子と称す。是色薄白き物也。夏月多く生ずる者也」（『滑稽雑談』）「とかぬ間のかのこかしゝの腹籠　宗朋」（『毛吹草』巻五）「Canoco.」（『日葡辞書』）。

大意　この鹿の子は、釈尊誕生の灌仏会の日に丁度生まれあわせるとは、獣ながら果報なことよ。

考　芭蕉と杜国は和歌の浦から奈良へとって返した。『笈の小文』のこの句の前には、

灌仏の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに、鹿の子を産を見て、此日におゐておかしければ

とあって、成立の時処と動機を知ることが出来る。鹿を町中で見掛けることの多い奈良での所見であって、釈尊降誕の日に生まれ合わせた愛らしい鹿の子に、あたたかい眼ざしをそそいでいるのである。聖者と獣類を誕生ということによって結んだ機智的趣向であるが、理窟とはちがって、ほのぼのとしたものを感じさせる。そういう一種の「軽み」を見逃すと、「我も其ごとく風雅の中にはあれど我は我也との作意」（正月堂『師走嚢』）といった見当ちがいや、道念的な解釈に陥ることになるのだ。

376　若葉して御めの雫ぬぐはゞや（笈の小文）

幾年計先にや侍らん、この宮古の西大寺に詣して

青葉して御目の雫拭ばや（笈日記）　――泊船集・蕉翁句集

夏季（若葉）。

語釈　**○若葉して**　「若葉」は夏の季語。「若葉でもって」の意。「して」は、手段をあらわす。「若葉　春夏有両説。加花者為レ春。然而夏季大切之間、可為夏云々。此新式の文章をみれば、花を結ばぬ句は皆夏といふ義也。是は木の若葉也。草の若葉は春になる也」（『御傘』）「わけもなくその木〳〵の若葉哉　亀洞」（『あら野』巻三）「松の炭して岩に書付侍りといつぞや聞え玉ふ」（『おくのほ

そ道』）「Vacaba.」（『日葡辞書』）。○**御めの雫**　「御目の雫」。像の御目に見える雫。「雫」は即ち涙である。○**ぬぐはゞや**　「拭はばや」。拭いてさし上げたい、の意。「ばや」は、自己の願望をあらわす。「手ぬぐひもちて泪ぬぐへり　はな昏のうす情こそ曲なけれ」（『毛吹草』巻七）。

大意　あたりの木々の若葉でもって、和尚の像の御目に宿る涙を拭いてさし上げたいものだ。

考　『笈の小文』には、

灌仏の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに、……招提寺鑑真和尚来朝の時、船中七十余度の難をしのぎたまひ、御目のうち塩風吹入て、終に御目盲させ給ふ尊像を拝して

としてこの句を掲げており、前の「鹿の子」の句と同じ日の吟と思われる。これに対して、西大寺参詣の時とする『笈日記』の前書は根拠が明らかでなく、恐らく誤伝に過ぎまい。『蕉翁句集』に「西大寺にて」と前書があるのも、その誤りを承けたもので、初五の「青葉して」の句形と共に信じ難いものである。大礒義雄氏の紹介された『笈の小文』の異本に「青葉」とあることも、この異本が芭蕉草稿の俤を伝えるものかどうかに問題がある以上、この形が芭蕉の案の中にあった確証にはならない。言葉としても、「若葉」の生き生きとした新鮮味を思わせる方が「青葉」よりまさるであろう。

唐招提寺に伝わる鑑真和尚の乾漆像は、我が国古代彫刻の傑作として著名なものであるが、芭蕉の参詣した頃は、境内の鐘楼北側にある開山堂に安置されていたという。折柄の瑞々しい若葉の木蔭に堂内の尊像を拝した芭蕉にとって、幾多の艱難にも仏教弘布の志を捨てず、遂に渡海の素懐を果して律宗を日本に伝えた鑑真の生涯は、まことに欣慕すべきものと感ぜられたであろう。和尚の強い意志と衆生済度を願う慈悲の心は、今もこの像に対する者の等しく感動を以て受け取るところである。

初五の「若葉して」を、木々の若葉した自然描写と取るか、「若葉でもって」と手段の意に解するか、昔から説が

分れていた。近世期からあった手段と取る説に対して、幸田露伴は自然描写説を次のように強く主張している。

「して」を「もて」の意味に解する場合もあるが、夫は俗語の場合である。此の句の「して」を「もて」と解するのは如何だらうか。句の意は若葉が眼のさめるやうに萌えてゐるのから、そのあざやかさと爽やかさとに芭蕉の感が動いて、その感で木像にむかつて言つた句である。病眼も此の若葉の爽やかなやうにさつぱりと雫を拭つてあげたらばとの願ひである。「ぬぐはゞや」にはその願ひの心が分明である。「若葉して」が緊要な言葉で、爽快なる若葉した時、四辺の新緑の景色から木像への思ひやりを句としたのである。文法上からは「若葉して」は若葉が主であるのに、「ぬぐはゞや」は作者が主となつて来るから、少し理路がねぢれて批難はあらうが、自分はさう解したい。雫が眼にも若葉にも関聯してゐるところに此句の繊い生命がある。（『芭蕉俳句研究』）

潁原博士の『新講』も右と同じ立場をとり、加藤楸邨氏も、手段では露わに過ぎると見ておられる（『芭蕉全句』）。しかし、露伴も問題としている文脈のねじれは、どうしても無視出来ない。「若葉して」と情況を述べ掛けたのなら、以下でそれを受ける表現が必要なのである。それをそのままにして、顧みて他を言うような無理な句作りを、この時期の芭蕉がするであろうか。それ以外に解釈の仕様がないならば格別、「して」を手段と解すれば、この難点は立ちどころに解消するのである。山本健吉氏もそのような見方から、単なる描写説には批判的で、且つ、手段をあらわすならより穏当な「もて」という語があるとする潁原説に対して、「もて」は響きが鈍重であり過ぎるとし、更に鑑賞にもわたって左のように述べられた。

表面の意味は、若葉で目の雫を拭うということであるが、その裏には、当然若葉が照り映えている四辺の光景が前提としてあり、そのみずみずしく、あざやかな情景から、永遠に閉じられた盲眼への共感を、はげしく掻き立てられているのである。「若葉して」を動詞と取ると、……若葉して、それゆえに、御目の雫を拭おうという感じになる。むしろ「若葉」を、目の雫を拭うという、仮想された行為の手段として、表面の意味としては従属的

な位置に引き下ろすことで、句を一枚の黄と化すに如かない。しかもそれは、同時に満目の若葉を、イメージとして浮き立たせるのである。その情景と、肖像に対する感動の波とが、イメージの照応として造型されるのである。

「若葉」に対して「雫」が、まず一つの照応をなしており、そこから若葉の一枚を以て目の雫を拭うという一つの行為が、イメージとして描き出されてくる。「青葉」ではこのような照応が、それほど生かされて来ない。「若葉」と「青葉」とは、ともに初夏の新緑の季語であるが、「若葉」は、その若々しさ、柔くつやつやした感触を主として言うのに対し、「青葉」はその色彩の濃度を強調して言う違いがある。その時期から言っても、「若葉」の方がやや早い。……この句の場合、目の雫を拭うというデリケートな行為に照応するのは、もちろん「若葉」の語感の持つ柔軟さである。「雫」とは盲眼の涙であるが、それは盲いた尊像に対して、芭蕉の慟哭が描き出した虚像である。その虚像の涙に、四辺の「若葉」が照り映えるのであり、ごく自然に、「若葉」で「御目の雫」を拭うという行為が連想されて来るのである。意識の深処で、それは匂い合い、映り合っているのであり、しかも根底の発想は尊像そのものの悲しみから導き出されている。「若葉を以て」と取れば、この句は冒頭から一気に悲しみの中核に飛びこんで行った力強い表現となり、「若葉がして」と取れば、それは一種の取合せの句となる。(『芭蕉その鑑賞と批評』)

句の内容把握と鑑賞の両面からして、先ずは間然する所のない見方といえよう。ただ、ここで「尊像の悲しみ」とか「芭蕉の慟哭」とかいわれているものは何であろう。「御めの雫」はもとより芭蕉の心眼に映じた幻想の涙であるが、それを労苦艱難による涙や、それへの同情と見ては、底が浅くなってしまう。鑑真像の持つ牢固たる意志と澄明な静かさは、この高僧の把持した揺ぎない信仰の具象化である。だから、「御めの雫」は衆生への慈悲心の象徴であり、芭蕉は鑑真の人格行蔵に満腔の同感を表しているのだ。それを俳諧の発句として定着する際に撰ばれたのが、「若葉

を以て御目を拭う」という虚の行為である。これが一句の俳諧の眼目で、表面上は軽い「興」を見せているが、内実は軽いものではなく、深い同感が基底となっているのである。この旅中で記憶されるべき名句と称してよかろう。

旧友に奈良にてわかる

377 鹿の角先一節のわかれかな (笈の小文)

夏季(鹿の若角)。

語釈 ○旧友 「キウイウ」。奈良で会した故郷伊賀上野の知人達を指す。〔考〕参照。「旧友親疎門人等、あるは詩哥文章をもて訪ひ、或は草鞋の料を包て志を見す」(『笈の小文』)「Qiǔyǔ. Furuqi tomo.」(『日葡辞書』)。○わかる 「別る」。「ひみといふ山にて卯七に別て」(『猿蓑』巻三、去来発句「君がても」前書)「Vacare, ruru, eta.」(『日葡辞書』)。○鹿の角 「鹿の角」。鹿の角は春から初夏にかけて落ちるが、直ぐに新しい角が発育し始める。はじめのうちは、皮膚で包まれた所謂袋角で、やがてそれが竹の子のように伸びて、秋には立派な角になるのである。『御傘』には「鹿角雑也」とあるが、『毛吹草』の誹諧四季之詞四月の条には「鹿袋角」があり、当面の句でも「鹿の角」を夏の季語としていることは明らかである。「鹿袋角……和産また所説のごとく、角落て則生ず。四五月の頃茄子の形色に似たるもの也。是を鹿袋角と称す。薬に用て鹿茸と云。……此もの夏の季に用る事、只夏の鹿をいふなるべし。あへて茸の儀に限らず、歌に、夏野の鹿の束の間とよめる、此事成べし」(『滑稽雑談』)「Tçunoga vouoru.」(『日葡辞書』)。○先一節のわかれ 「先づ一節の別れ」。鹿の袋角が伸びて、先ず最初の節で枝分れすることを「別れ」に言い掛けた。「先づ」は、鹿の角に関しては「最初に」の意に働き、人の別れに関しては「一先ず」の意に働く。「Fitofuxi.」(『日葡辞書』)。

大意 鹿の角が今ようやく最初の一節目で枝分れし始めた。それではないが、我々も一先ずここで区切りをつけて、お別れするとしよう。

考 「灌仏の」「若葉して」等の吟が成った四月八日には、奈良の東大寺で大事な儀式が行われた。永禄の兵火に焼

かれたままになっていた大仏殿再建の為の釿始めの法会が催されたのである。この時伊賀上野の知人達も拝観に来たので、一夕の宴集に人々は歓を尽した。これについては当時の芭蕉の書簡が参考になる。

奈良に而遊興、誠旅中之慰み、与兵・貴様御物入推量いたし候。……与兵へ殿・権左衛門殿へ可然御意得被成可被下候。又〱いが衆なつかしく罷成候。（卯月廿五日付卓袋宛）

此度南都の再会大望生〻の楽ことばにあまり、離別の恨み筆に不被尽候。……我等一里来る時は人〻一里可行や、三里過る時は各今や三里可行やいまだしや、梅軒何がしの足の重きも道連の愁たるべきと墨売がおかしがりし事ども云〻、……今は人〻旧里にいたり、妻子童僕のむかへて、水きれいなる水風呂に入て、足のこむらをもませなどして、大仏の法事のはなしとり〲なるべき。市兵衛は草臥ながら梅額子へ巻ひけらかしに可被行、梅軒子は孫どのにみやげねだられておはしけむなど、草のまくらのつれ〲に、ふたりかたり慰て、……（卯月廿五日付惣七宛）

右の文面によれば、窪田猿雖（惣七郎）・貝増卓袋（市兵衛）・中野利雪（与兵衛）・植田示蜂（権左衛門）・梅軒（姓・通称等未詳）らの伊賀衆と芭蕉・杜国が集うたのであって、「巻ひけらかしに」とあるところを見ると、これらの連衆による付合もあったのである。その郷里の人々と別れたのは、惣七宛書簡によって以後の旅程が四月十一日八木泊り、十二日誉田泊りと考えられるので、十一日朝のことと推定される。句案については、素丸の『説叢大全』（安永二年刊）に「旅人に別るゝとて」と前書した「振返るをじかも角の別れ哉」という真蹟もあった由が見える。なお年代不明の部「ふたまたにわかれそめけり鹿の角」の条を参照されたい。

奈良でよく見掛ける鹿を題材に、その若角が漸く分岐する時節に合わせて、「角の岐れ」を「人の別れ」にかけて表現している。其処にユーモアもあり、また「先一節の」というあたりには後会を期する趣も見えるが、全体の気分は淡々としたものである。前掲惣七宛書簡に、「離別の恨み筆に不被尽候」とあるのとは、かなりのちがいであった。

378

草臥て宿かる比や藤の花　（笈の小文）

郭公宿かる比やふぢの花　（蕉翁句集草稿）

ほとゝぎす宿かる比の藤の花　（竹人蕉翁全伝）

猿蓑・蔦の松原・泊船集・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・蕉門録

春季（藤の花）。

語釈 ○**草臥て**　「草臥れて」。「草に臥す」と書くのは宛字。旅などで野山に疲れて臥すことからの連想であろう。「賤を遠から見るべかりけり　野水　おもふさま押合月に草臥つ　同」（『あら野』員外）「Cutabire, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**宿かる比**　「宿借る比」。旅の一夜の宿を借りる頃、即ち夕暮時。「額にあたるはる雨のもり　旦藁　蕨烹る岩木の臭き宿かりて　越人」（『はるの日』）「Yadocari, ru, atta.」（『日葡辞書』）。○**藤の花**　「藤の花」。藤はマメ科の蔓性落葉木本植物。各地の山野に自生するものの外、観賞用に栽培もされる。蔓状の幹は右巻きに他物にからんで成長し、長さ十メートル以上に達する。晩春から初夏にかけて薄紫色の蝶形花が長い房状に咲いて垂れ下る。季語としては春。「藤は草也。古歌に木に用たる事あれ共、連誹には惣別かつらは草に用也」（『御傘』）「ふぢの棚は。ふさだな。匂ひの棚などいひなし。松にさがれるを松笠のしめを共。姫小松の帽子やかつらかとも見なし。池のほとりにさくを波にまがへ。門口にまつはるゝを藤ともゐ。ふぢの丸などいひて。家の紋にもきこえなし侍る」（『山之井』）「朧夜やながくてしろき藤の花　兼正」（『あら野』巻二）「Fugi.」（『日葡辞書』）。

大意　一日中歩き疲れて一夜の宿をとる夕暮時、ふと目についた藤の花の咲き垂れたさまが、如何にも物憂げなことよ。

考　「大和行脚のとき」（『猿蓑』『蕉翁句集草稿』『蕉翁句集』）「大和行脚のときに、たはむ市（ママ）とかやいふ処にて日の暮かゝりけるを、藤の覚束なく咲こぼれけるを」（『泊船集』『蕉翁句集草稿』）等の前書がある。『笈の小文』では、吉野の花見に伊賀の上野を旅立つ記事の次に、

旅の具多きは道ざはりなりと、物皆払捨たれども、夜の料にとかみこ壱つ、合羽やうの物、硯・筆・かみ・薬等、昼笥なんど物に包て後に背負たれば、いとゞすねよはく力なき身の、跡ざまにひかふるやうにて、道猶すゝまず。たゞ物うき事のみ多し。

として「草臥て」の句が記されている。しかし、この句の初案は、花見の後四月に入って奈良から大坂へ向う途中で得たものであった。この年卯月廿五日付の惣七宛万菊・桃青連名書簡に於いて奈良出発以後の事を叙して、

……石の上有原寺、井筒の井の深草生たるなど尋て、布留の社に詣、神杉など拝みて、こゝろばかりこそむかしなりけれと詠し郭公の比にさへなりけれとおもしろくて、滝山に昇る。帝の御覧に入たる事、古今集に侍れば、猶なつかしきまゝに、弐拾五丁わけのぼる。滝の景色言葉なし。丹波市、やぎと云所、耳なし山の東に泊る。

ほとゝぎす宿かる比の藤の花

と云て、なほおぼつかなきたそがれに哀なるむまやに到る。

とあるのによって、初案成立の時処が明らかになる。奈良を出てから芭蕉と杜国は南下して、四月十一日の夜は八木（現橿原市内）に泊った（書簡の「耳なし山の東」は恐らく「西」の誤り）。その辺りの夕暮のあわれな景色から発想されたのが「ほとゝぎす宿かる比」の句であって、四月に入っての作だから「ほとゝぎす」という夏の季語になっているのも当然であった。それを『笈の小文』執筆に当って春の「藤の花」の句とし、前に溯って花見の旅立の次に配したのである。

序でに初案の句形について述べたい。「ほとゝぎす宿かる比の藤の花」という句形は、万菊・桃青連名書簡に見えるけれども、この書簡は竹人の『全伝』に付載された「拾遺雑録」中に「翁在京猿雖への返書」として引用されているもので、書簡の原物は未発見である。然るに土芳の『句集草稿』は、「草臥て」の句形を挙げた後、此猿簑の句也。ある所之書翰に、其道より聞侍るは、丹波市やぎと〔云〕処、耳なし山の東に泊る。郭公宿かる

比やふぢの花と也。後直り侍る。

と記し、『三冊子』にも「此句始は、ほとゝぎす宿借る頃やと有。後直る也」とある。土芳が惣七宛書簡を見た上で物を言っていることは、前書が竹人の所伝と一致することからも明らかであろう。書簡が伊賀に伝存していたとすれば、土芳や竹人が寓目するのは極く自然である。ところで問題は竹人『全伝』の句形「宿かる比の藤の花」であって、「比の」では表現に曲がなさ過ぎて句の姿が整わない。「比や」と切字を入れた方が表現として遥かにまさるのである。「比の」から「比や」に推敲して、更に「草臥て」で治定したとしても一応の筋道は立つが、『句集草稿』と『全伝』が同源と見られるとすれば、竹人所伝の句形は誤りではあるまいか。芭蕉が郷関を出て江戸へ下る際の留別吟「雲と隔つ友かや雁の生き別れ」を、『全伝』に「友にや」と伝えているような例もある。こういう不適切な表現を伝える後年の書よりも、土芳直筆の『句集草稿』の方が信憑性の高いことは言うまでもない。このような見地から私は、貞享五年四月当時のこの句の初案は「郭公宿かる比やふぢの花」だったと推定するのである。

惣七宛書簡に「布留の社に詣、神杉など拝みて、こゑばかりこそむかしなりけれと詠し郭公の比にさへなりけれとおもしろくて」といい、「なほおぼつかなきたそがれに哀なるむまやに到る」とあるように、初案の段階では、「いそのかみふるき宮こ(の)郭公こゑばかりこそ昔なりけれ」(『古今集』巻三、素性)の歌や、『徒然草』の四季の移りかわりを述べた中に「山吹のきよげに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすてがたきことおほし」(十九段)とある一節などが芭蕉の脳裡にあって、その古歌に詠まれた郭公が藤の花に宿を借りる頃になった、と詠嘆したのである。初案の「宿かる」の主語が「郭公」であることは自明と思われるのに拘らず、この点が従来の諸注では案外見逃されていて、どれにも明記されてはいないが、どうやらこの句形でも「宿かる」の主語は作者自身と見られているようだ。前記の私見はそれらと異なることになるが、句の表現を素直に読めば、郭公が宿を借りると取るのは当然と思う。芭蕉が宿を借りるとした場合、初案形は初五で切れることになる。「宿かる比の」という竹人の所伝が大して疑問を持た

れずに打ち過ぎた原因は、この辺にあるのかも知れない。土芳の伝える「比や」に従えば、初五で切れるとは到底考えられず、「宿かる」の主語が郭公であることが一層明らかになろう。

さて、後に至って芭蕉は初五を「草臥て」と改め、「郭公」が消えたことによって、句は「藤の花」の春の句になった。この改案の動機については、郭公と藤と、季節のちがう二つの物によって句の主題が分裂するのを避けたと見るのが普通であるが、堀信夫氏は、郭公と藤の花の組合わせは当時の常識で、然程問題になるべきことではないことを指摘し、郭公が象徴する古都懐旧の情と、「宿かる比の藤の花」が象徴する旅愁春愁が素晴らしい効果を生む可能性に触れた後、次のように述べておられる。

ところで、このような趣味や教養を同じうし、連衆心を共有する芭蕉・惣七の間では、初案の形で十分楽しむことが出来たとしても、一般読者に対しても、それが通用するかということになると、問題が残る。『猿蓑』という本は不特定多数の読者を相手にした撰集である。そこで、芭蕉は業平・遍照・素性への追慕の情を一般化し、遠い昔の都人への懐旧の情へと普遍化、それを「大和行脚のとき」という前書に言いこめたのである。そして、その大和行脚の旅愁の中から芭蕉が掘り起した言葉が、ほかでもない「草臥て」という上五である。……その点『笈の小文』の、旅の苦労を記した後に、この句を書き添えたやり方は、この句をただ単なる旅愁と春愁の作品に終らせており、成功したとは言い難い。（『鑑賞日本の古典・芭蕉集』）

これは句が『猿蓑』に収められていることを重視し、其処に改案の動機を見出そうとする説である。これはこれで興味ある見方であり、相応の根拠もあるけれども、『笈の小文』が『猿蓑』の成立に先立って書かれている点は、やはり無視出来まい。『笈の小文』宝永板の原になった芭蕉の草稿は『猿蓑』成稿の元禄四年五月以前には書かれていた筈で、私見に従えば、須磨・明石見物より前の部分、「草臥て」の句を含む紀行の主部は、元禄三年五月までには成っていたと見られる。従って「草臥て」の改案は、その前にある「旅の具多きは」云々の文と密接な関連を持つと考

えざるを得ない。それを「単なる旅愁と春愁の作品に終らせ」たと貶しめるのは言い過ぎであろう。句文は吉野の花見に上野を立つ後に配され、次には初瀬・葛城山の句が続く。『笈の小文』に於いても、古歌にゆかり深い大和路の影は濃いのである。

「草臥て」の句形は、初案の成った境涯から離れて、春の句として新たに構想されたものだ。重い荷を負って長途に疲れた旅人の物憂さを「草臥て宿かる比や」といい、それに重く咲き垂れた「藤の花」を配して、おぼつかない花の色と黄昏の気分を旅愁に通わせている。「比や」という一見ぼんやりした措辞が、ここでは絶妙な効果を発揮しているのを見逃してはならない。藤は藪藤でも、棚に造ったものでもよいが、色は白ではなく、やはり紫に限る。最後に半田良平氏の鑑賞を引いておこう。

おなじ旅の夕暮にしても、晩春のこと故、犇々と身に迫るやうな寂寥感はなく、肉体も魂もたゞ茫然と疲れて、一味の哀愁に浸されて居るだけである。さういふ時に夕暮の薄明な空気の中から、藤の花があるかなきかの如く浮き出てゐたのである。この場合の藤の花は、芭蕉の気分と渾一体に融け合つて、所謂作者の気分をいゝしくも象徴してゐるのである。私はこの句を象徴詩のすぐれた一例として、常に愛誦措かざるものである。（『芭蕉俳句新釈』）

379 猶みたし花に明行神の顔　（芭蕉翁遺墨集所収真蹟懐紙）

やよひのすゑやまとのくにゝ行脚して、かづらき山のふもとを過るに、よもの山花のさかりにて、みねく〵は霞かゝりて、いとゞなつかしげなりければ

三井文庫蔵真蹟懐紙・今治市河野美術館蔵真蹟懐紙・四季千句・惹摺・笈の小文・猿蓑・真蹟自画賛・陸奥鵆・泊船集・俳諧問答・蕉翁句集・智周発句集・蕉翁全伝附録・先手後手・深川よどみ集

春季（花）。

語釈 ○**やよひのする** 「弥生の末」。「やよひ」は陰暦三月。「弥生も末の七日、明ぼのゝ空朧々として、月は在明にて光おさまれる物から」（『おくのほそ道』）「Yayoi. i, Sanguachi.」「Suye.」（『日葡辞書』）。○**やまとのくにゝ行脚して** 「大和の国に行脚して」。○**かづらき山** 「葛城山」。大和と河内（現大阪府南部）の境、金剛山地にある山。標高九百六十メートル。修験道最古の霊場である。「山又山を分けこえて、ゆけば程なく大和路や、葛城山につきにけり」（謡曲「葛城」）。○**ふもとを過るに** 「麓を過ぐるに」。「麓に細き流を渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして」（「幻住庵記」）「出羽の最上を過て」（『猿蓑』巻二、芭蕉発句「眉掃を」前書）「Fumoto.」（『日葡辞書』）。○**よもの山** 「四方の山」。○**みね〳〵** 「峯々」。「花吹き渡せ船橋の、法に往来の道作り給へ山伏、峯々廻り給ふとも」（謡曲「船橋」）「Mine.」（『日葡辞書』）。○**いとゞなつかしげなりければ** 「いとゞ」は、一層、一段と、の意。普段よりも一層、という気持である。「日比は人の詣ざりければ、いとゞ神さび物しづかなる傍に」（「幻住庵記」）「姫君に向ひ、さもなつかしげに立ち舞ふ姿、実にあはれなる」（謡曲「初雪」）「Itodo.」「Natçucaxij.」（『日葡辞書』）。○**猶みたし** 「猶見たし」。「猶」は、この場合、一層、ますますの意。○**花に明行** 「花に明け行く」。花盛りのうちに夜が明けて行く。「明行」は既出（Ⅱ *259*）。○**神の顔** 「顔」は、ここでは容貌の意。「鉢たゝき憐は顔に似ぬものか　乙州」（『猿蓑』巻一）。

大意 麓から眺める葛城山の花の曙は、何とも壮麗の極みだ。葛城の一言主神は容貌がみにくかったというが、そんな筈はない。花の曙の景色の中で神の顔がどんなか、一層見たくなる。

考 「やまとのくにを行脚して、かづらき山のふもとをとをるに、よもの花はさかりに咲て、みね〳〵は霞こめたる有明の月もいとゞ哀ふかきに、かのみめわるきといひけん神のみかたち、いかなる人のわる口にや有けむと、いぶかしくおもひうたがひて」（三井文庫蔵真蹟懐紙）「かづらき山のふもとを過るに、よもの花はさかりに咲て、みね〳〵は霞わたれる空のけしき、いとゞなつかしかりければ」（今治市河野美術館蔵真蹟懐紙・『深川よどみ集』）「葛城山の梺過るに」（『四季千句』）「かづらき山の麓を通り侍る比」（『蕊摺』）「葛城山」（『笈の小文』）「葛城のふもとを過る」（『猿蓑』『陸奥衛』）「やまとの国を行脚して、葛城山のふもとを過るに、よもの花はさかりにて、峯〳〵はかすみわたりたる明ぼののけしきいとゞ艶なるに、彼の神のみかたちあしゝと、人の口さがなく世にいひつたへ侍れば」（『泊船集』。『蕉翁句集』の前書も略

略同文）「大和国を行脚して、かづらき山の麓を通るに、四方の花は盛に咲て、岑〳〵の霞に似たる有明の月もいとゞ哀なりきに、かの美目わるきといゝけん神の御かたち、いかなる人のわる口にや。なき名といぶかしくおもひ疑て」（『先手後手』）等、種々の前書があり、このうち、三井文庫蔵の真蹟懐紙は『先手後手』（風陽・兎什撰、明和四年刊）に摸刻されたものの原物と推定される。また、真蹟自画賛には、句の後に「これはかづらきの山ぶしの寝ごとをつたへたるなるべし」と記してあり、「又花の下に眠る山伏を自画て、讃に此句あり。其端に、是はかづらき山の山伏のねごとをつたゑたる成べしともあり」（『蕉翁句集』）「猶みたし花に明行く神の顔　是はかづらきの山伏の寝言なるべしと、画讃蕉翁したゝめたもふを一軸として秘蔵し置けるに、白舌翁をして尊御方に献じ奉る」（『智周発句集』）等とある伊賀の所伝と一致する。これらにいう自画讃が現存のそれと思われ（写しの可能性もある）、伊賀上野の女流蕉門俳人梢風（法号智周）旧蔵の品を藩主あたりに献上し、『全伝附録』に収められるに至ったものであろう。その外、真蹟懐紙の裏付けのある『深川よどみ集』（鬼吉撰、弘化三年刊）所収の文や、『祖翁消息孚』（撰者刊年不明）所収のものも真蹟に拠ったという。但し、後者の士朗所持のものは本文に破損の箇所が多い。

前掲の如く、前書では殆んど葛城山の麓を通った時の作としているけれども、『笈の小文』では初瀬と三輪の間に句が置かれており、それでは麓を通ったとするより寧ろ遠望した趣になる。麓を通った時の作とすれば、四月十二日頃奈良から大坂へ出る途次の吟とすべく、それならば遅桜を詠んだことになろう。「やよひのすゑ」という真蹟前書の表現に主眼を置いて、吉野から高野へ向う途中の吟とする考え方もある（今栄蔵氏「芭蕉年譜」──『校本芭蕉全集』第九巻）。兎に角四月十二日頃までに成ったことは確言出来そうである。最初何処で出来たか確かには分らないが、芭蕉はその時々によって句形は同じながら色々な扱い方をしている。「ふもとを過るに」といった前書では、山麓から仰望した比較的近距離の花であり、『笈の小文』のような位置に置けば、遠望した趣になる。制作時の実境実感とは聊かちがって、その場や背景をさまざまに変えることによって、句の世界に異なる色合を与えようとするわけだ。この

ように、作品世界を構成しようとする行き方は、芭蕉の表現手法の重要な一面であって、この句の成立を追求して行くと、その一端が顔をのぞかせるのである。

修験道の元祖役行者が金峰山の蔵王菩薩の為に葛城山との間に岩橋を掛けた時、その工事に使役された葛城の一言主神は容貌が醜かったので、夜だけ出て働いたという。この話は『日本霊異記』上、『三宝絵詞』中、『今昔物語集』巻十一等に見えるが、恐らくそうした説話集よりは、謡曲「葛城」あたりから、芭蕉はこの伝説を知っていたのであろう。しかも謡曲の趣向では「女体の神」であって、末の所で、

いづれも白妙のけしきなれども、名に負ふかづらきの神の顔かたち、面なやおもはゆや。恥かしやあさましや。あさまにもなりぬべし。あけぬ先にと葛城の、夜の岩戸にぞ入り給ふ。

となっているのが面白い。よく引かれる「いはゞしのよるの契もたえぬべしあくるわびしき葛城の神」（『拾遺集』巻十八、左近）の歌もさることながら、芭蕉は葛城山のあたりで謡曲の「葛城」の俤を常に念頭に思い浮べていたのではあるまいか。折柄四方は花の盛り、いとど艶麗な花の曙である。幸田露伴が、

葛城の神の顔は伝説の上では醜いと云ふがそれは如何にもあれ、此の花の景色から想ふとその顔もさぞ美しいであらう、それを見度いと云ふのである。花の景色の美しさから伝説に反抗して、その神の顔までも美しいものと思ふところが、此の句の眼目である。それほど強く此の朝の景色を賞美してゐるのである。（『芭蕉俳句研究』）

と指摘しているように、根本の動機は花の曙の景色にあった。それを神の醜貌と結んで、隠すものはなお見たいという俗諺を言い掛けたのは俳諧の興である。「かづらきの山ぶしの寝ごと」という自画賛の後書を見ても、興じた気分の強いことは分るが、「花に明行神の顔」という表現は、景情を併せてまことに巧みというべく、この句の価値を高からしめている。なお、言うまでもないが、「この神の御かたちをたへなる花に並べなば、いよ〳〵醜かるべしと思ふに、猶見まほしきと也」（杜哉『蒙引』）と解しては良くない。『先手後手』の前書にもあるように、容貌が醜いと伝え

られるのは「いかなる人のわる口にや。なき名といぶかしくおもひ疑て」というのが芭蕉の気持なのである。

大坂にてある人のもとにて

380 杜若語るも旅のひとつ哉　（笈の小文）

蕉翁句集草稿・蕉翁句集

夏季（杜若）。

語釈 ○**大坂**　摂津の海岸の大都会の名は、近世には「坂」と土偏を用いるのが例で、「阪」とコザト偏になったのは明治以後のことである。○**ある人**　後述するように、同郷の先輩俳人一笑を指す。○**杜若**　「カキツバタ」。水辺に自生するアヤメ科の多年草。既出（Ⅰ *30*）。○**旅のひとつ**　旅の楽しみの一つ、一興。「物にも書付、人にもかたらんとおもふぞ又是旅のひとつなりかし」（『笈の小文』）。

大意 庭前のかきつばたは業平ゆかりの花。それを話題にして久しぶりに語り合うのも、旅の楽しみの一つですな。

考 『蕉翁句集草稿』には「難波に旅ねして」と前書があり、成立事情について左のように委しく述べている。

此句は万菊を供して難波の一笑が本に旅ねの時也。一笑はいがにて紙や弥右衛門と云る旧友也。三吟有。廿四句にて終ル。

一笑がワキ、山路の花の残る笠の香

万菊第三、朝月夜紙干板に明そめて

芭蕉達が竹内村や誉田八幡を経て大坂に入ったのは四月十三日であった。

……誉田八幡にとまりて、道明寺・藤井寺をめぐりて、つの国大江の岸にやどる。いまの八間屋久左あたり也。

（卯月廿五日付惣七宛）

大坂へ十三日に着候而十九日発足、久左衛門方に逗留いたし候。尤せばくやかましく、逗留之内さて〳〵難義、ざつと大坂にて大事之旅之興失ひ申候。気づまり候而方々見物に出候。（卯月廿五日付卓袋宛）

といった書状の文言によって滞在中の模様を知ることが出来るが、その間の一日旧友保川一笑を訪うた時の吟なのである。この人については、『句集草稿』の土芳の記述に見える以外に精しいことは分らないが、芭蕉若年の在郷時代には、藤堂蟬吟をめぐる上野俳壇の有力者の一人であって、芭蕉の先輩格に当り、抑々俳諧の手ほどきを一笑に受けたのではないかといわれる（今栄蔵氏著『芭蕉伝記の諸問題』第一部第三章参照）。伊賀を去って大坂に移っていたこの旧知を、この時久しぶりに訪ねたわけである。

一笑の家の庭先に咲いていたか、それとも床の間に生けてあったか、兎に角かきつばたの花を見ての即興句であろう。かきつばたといえば、『伊勢物語』東下りの一段が思われる。

むかし、をとこありけり。……身をえうなき物に思なして、京にはあらじ、あづまの方にすむべきくにもとめにとてゆきけり。……みちしれる人もなくて、まどひいきけり。みかはのくに、やつはしといふ所にいたりぬ。……そのさはのほとりの木のかげにおりゐて、かれいひくひけり。そのさはに、かきつばたいとおもしろくさきたり。それを見てある人のいはく、かきつばたといふいつもじを、くのかみにすゑて、たびの心をよめといひければ、よめる、

から衣きつゝなれにしつましあればはるぐ〵きぬるたびをしぞ思ふ

とよめりければ、みな人かれいひのうへに、なみだおとして、ほとびにけり。（九段）

物語の昔男は京から遥々三河の八橋まで来て、京に残して来た妻を思い、かきつばたの五文字を折句にした歌に旅情を託した。芭蕉も江戸からの長途を旅して既に半年にも及ぶ。業平ゆかりの花を話題にすれば、旅愁惻々と迫るものがあったろう。それを「旅のひとつ」と軽く言いなして一笑への挨拶としたのである。俳味十分、恰好の挨拶句であ

った。付合は二十四句まであったことが惣七宛書簡にも見えるが、第三までしか伝わっていない。

381

須广のあまの矢先に鳴か郭公　（笈の小文）

須广の蜑の矢さきに啼や郭公　（泊船集）　——蕉翁句集草稿・蕉翁句集

夏季（郭公）。

語釈　**○須广のあま**　「須磨の漁人」。摂津の海岸須磨（現神戸市須磨区）で魚をとって暮らす人々。「須广」「あま」何れも既出（Ⅰ*107*、*154*）。「广」は「磨」の略体。「鴫突は萱津のあまのむまご哉　淵支」（『あら野』巻七）。**○矢先**　「ヤサキ」。「矢」は、後に引く『笈の小文』の本文にも見える鳥おどしの道具である。その鏃の向く先。「重盛保元平治の合戦には、命を捨てて矢さきに立つて振舞ひしかども、矢にも中らず剣にも撃たれずして」（『源平盛衰記』巻十一）「Yasaqini cacaru.」（『日葡辞書』）。**○鳴か**　「鳴くか」。主語は郭公。「か」は、詠嘆。

大意　須磨の漁師の鳥おどしの矢先に、ほととぎすが鳴いて飛び去って行くことよ。

考　『泊船集』には句の後に付記して「此詞書は須广紀行に見え侍る。是は須广の蜑の鳶烏を追とて矢を放ちけるに、源平のむかしもおもはれて吟じたまふなりけり」とあり、『笈の小文』の草稿から採ったらしい。『笈の小文』宝永板には、鉄拐が峯に登った記事の後に出ているが、句の内容は登山より前の、

東須广・西須广・浜須广と三所にわかれて、あながちに何わざするともみえず。藻塩たれつゝなど哥にもきこへ侍るも、いまはかゝるわざするなども見えず。きすごといふうをゝ網して真砂の上にほしちらしけるを、からすの飛来りてつかみ去ル。是をにくみて弓をもてをどすぞ、海士のわざとも見えず。若古戦場の名残をとゞめて、かゝる事をなすにやと、いとゞ罪ふかく、……

という記述に関連している。須磨一帯を見物した四月二十日か二十一日の作であろう。「か」と「や」の相違については、『笈の小文』の芭蕉草稿が知られていないので、同書宝永板の誤りの可能性もないではないが、やはり『泊船集』の方に杜撰の疑いが濃い。信ずべき句形としては「鳴か」を採るべきである。『蕉翁句集草稿』は『泊船集』の付記を引用して「須磨の記行可尋(ママ)」とし、句の方は「須磨の蜑の矢先に鳴郭公」と、脱字のある不完全な形になっている(『蕉翁句集』は「や」)。

須磨は古来高名の歌枕である。『笈の小文』にも触れている在原行平の歌「わくらばに問人あらばすまの浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ」(『古今集』巻十八)があり、『源氏物語』須磨の巻にも「またなくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり」と書かれている。歌枕の風流を慕ってこの地を訪れた芭蕉の目にしたものは、予期とはちがって甚だ殺風景な現実であった。干魚に集まる鳥や鳶を弓矢でおどす漁師の姿がこの句の動機の第一である。「郭公」は季節の取合わせで、風雅の対象でもあるが、一方「啼いて血を吐く」ともいわれ、古戦場や殺生の業に相応しい。この「郭公」には想化の傾向がかなり著しいと思う。恐れて飛び去るというより、矢先をも平然と横切って瞬時に遠ざかる趣であろう。現実と空想とを巧みに融合して緊張した調子を盛った面白い句である。半田良平氏が、

この句は決して現実の光景を詠んだものではない。芭蕉は、須磨の漁師が弓矢で鳥をおどすのを眼のあたり見て、番へた矢の先の空を、時鳥が啼いて通る光景を脳裏に創造(クリエート)して来たのである。然もそこに創造された世界は、実に一つの幻覚の世界である。あの軽快な体躯と絹を裂くやうな鋭い声で、時鳥が空を啼きく飛んで行く感じと、切つて放てば勢ひよく空に向つて飛ぶであらう弓矢が示唆(サゼスト)する感じとが、融合して醸し出して来るところの一つの幻覚の世界である。それ故、この句は洵に殆(あやふ)い世界を取扱つて居るといはねばならぬ。(『芭蕉俳句新釈』)

と述べられたのは、的確な鑑賞といえよう。これとは対照的に、安東次男氏は細道旅中の「野を横に馬牽むけよほとゝぎす」の句と共に、その飛ぶ姿を間近に見たに違いない例とし、ほととぎすを材にした歌や句の中では珍しいもの

と見ておられる。

382 ほとゝぎす消行方や嶋一つ　（笈の小文）

郭公聞行かたや島一ツ　（泊船集）
　あかし

夏季（ほとゝぎす）。

語釈　○**消行方や**　「消（き）え行（ゆ）く方（かた）や」。「や」は、詠嘆の切字。

大意　ほとゝぎすが飛び去って、その姿が消えて行く彼方に、島影が一つ浮んでいることだ。

考　『芭蕉庵小文庫』『花の雲』（千山撰、元禄十五年刊）『蕉翁句集』等の前書は『泊船集』と同じである。卯月廿五日付惣七宛書簡には、「あかしよりすまに帰りて泊る」とあって、明石見物も須磨と同じ日だったことが知られる。『笈の小文』で前後に須磨の句があるところから、この句も須磨での作と見る説もあるが、芭蕉の場合、紀行中での句の並べ方は作られた時処に必ずしもそのまま結び付かない。実際には同じ日に須磨・明石をめぐっているのだから、他の出典の前書はやはり尊重すべきであろう。須磨・明石・淡路島は一連のものとして意識される歌枕なのだ。『泊船集』の「聞行かた」は表現としておかしく、明らかな誤りである。

実際には鳥の声をきいて姿を追うのであろうが、鳥の影は視野になかなか捕えがたいものである。しかし「ほとゝぎす消行方や」と表現した場合、読者のイメージに先ず浮ぶものは鳥の姿であろう。声と共に小さくなって行く鳥の影――、それをあらわしたものと見たい。更に、この句には古歌の背景がいろいろ考えられる。「郭公なきつるかたをながむればたゞありあけの月ぞのこれる」（『千載集』巻三、後徳大寺実定）「ほのぐ〵とあかしのうらのあさぎりにしま

芭蕉庵小文庫・花の雲・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

がくれ行く舟をしぞ思ふ」（『古今集』巻九、よみ人しらず、一説に人麻呂）「あはぢしまかよふちどりのなくこゑにいくよねざめぬすまのせきもり」（『金葉集』巻四、源兼昌）等であって、「なきつるかた」が「消行方」、「たゞありあけの月」が「嶋一つ」となり、「しまがくれ行く舟」「あはぢしまかよふちどり」が島の方へ消え行くほととぎすに転化されている。これらの古歌が芭蕉の脳裏で渾然と一つになって、この句の制作動機に働きかけていることは自明であろう。そして「嶋一つ」は句の中では遠くの沖合に浮ぶ小島といった趣であるが、実際には眼前に大きく見える淡路島だった筈である。実景に基づきながら、句中の世界としてはかなり自由な変型が加えられ、古歌の趣や旅愁を盛った心象風景が成立している。

383　須广寺やふかぬ笛きく木下やみ　（笈の小文）

須磨の浦一見の時
須广寺に吹ぬ笛きく木下やみ　（続有磯海）

夏季（木下やみ）。

語釈　○**須广寺**　「スマデラ」。現兵庫県神戸市須磨区須磨寺町にある上野山福祥寺の通称。仁和二（八八六）年僧開鐘が創建したと伝えられ、漁夫が近くの海中から得た聖観音像を祀る。真言宗須磨寺派の本山。平敦盛愛用の青葉の笛を蔵するので名高い。「須磨寺に汗の帷子脱かへむ　重五　をの〳〵なみだ笛を戴く　荷兮」（『はるの日』）。○**ふかぬ笛きく**　「吹かぬ笛聞く」。実際は吹いているわけではない笛の音を聞く思いがする、の意。「声はわれたる笛を吹やうになん侍る」（『猿蓑』其角序）「**Fuyeuo fuqu.**」（『日葡辞書』）。○**木下やみ**　「木下闇」。夏木立が鬱蒼と茂って昼なお暗いさまをいう。夏の季語。「青葉の笛」の名と縁がある。「木の下闇　夏也。夜分にあらず」（『御傘』）「隈界のなまけ所や木下闇」（『おらが春』）。

大意　須磨寺では何といっても敦盛のことが想われる。木下闇の中で吹いてもいない笛の音が聞えて来るようだ。

考　杜国と共に須磨・明石を遊覧した折、須磨寺に詣でての句である。惣七宛書簡には、

……敦盛の石塔にて泪をとゞめ兼候。磯近き道のはた、松風のさびしき陰に物古たるありさま、生年拾六歳にして戦場にのぞみ、熊谷に組ていかめしき名を残し侍る。其日のあはれ其時のかなしさ、生死事大無常迅速、君わする丶事なかれ。此一言梅軒子へも伝度候。須磨寺のさびしさ、口を閉たるばかりに候。蟬折・こま笛、料足十疋見るまでもなし。此海見たらんこそ物にはかへられじと、あかしよりすまに帰りて泊る。

とあり、源平一ノ谷の合戦に熊谷直実に討たれた敦盛への想いが殊に強かったことが知られる。右にも見えるように、芭蕉は寺宝の笛を見なかったのであるが、「蟬折・こま笛」と笛の名器の名を書いているのは、山本唯一博士が『芭蕉俳句ノート』で指摘されたように、謡曲「敦盛」の影響であろう。即ちその一節に「小枝・蟬折さまぐに笛の名は多けれども、草刈の吹く笛ならば、これも名は青葉の笛と思し召せ」とあるあたりを想い起しているのである（敦盛の携えていた笛の名は『平家物語』や『源平盛衰記』では「小枝（さえだ）」となっているが、謡曲の「青葉」が最も著名）。更に曲の始めの方には「誠に昔の有様今のやうに思ひ出でられて候。又あの上野に当つて笛の音の聞え候」ともある。これらがこの句の発想の基盤になっていることは明らかであろう。須磨寺境内の幽暗な木下闇に佇んで、敦盛の吹く笛の音をうつつに聞く趣をいったこの句は、古戦場に古えを懐う典型的な句想であって、「ふか**い**ぬ笛きく」と態々ことわったところは、渾然たる味わいに聊か欠けるように感ぜられる。ただ此処には「啼かぬ鳥の声」といった道歌の影響があるのかも知れず、「禅機の詞」（麦水『貞享正風句解伝書』）という古注の説も、その辺から出ているのであろう。

異形を伝える『続有磯海』（浪化撰、元禄十一年刊）には、「此句は湖南の丈艸幾とせ袖底におさめられしを、此たび我続集結縁にとて文通の中に緘して送られ侍る」云々と付記が見える。潁原博士の『新講』は、丈草が記憶の誤りのままに書き送ったと見ているけれども、これは所蔵の芭蕉真蹟短冊か懐紙を書状と同封して撰者浪化に送ったと見た方

が良い。刊行の際に書写の誤りがなければ、「須广寺に」は恐らく初案で、『笈の小文』執筆の際「や」に推敲したものと思われる。

須广の浦傳ひしてあかしに泊る。其比卯月の中半にや侍らん

384 たこつぼやはかなき夢を夏の月 （真蹟懐紙）

笈の小文・猿蓑・陸奥鵆・泊船集・俳諧問答・四山集・類柑子・蕉翁句集

夏季（夏の月）。

語釈 **○須广の浦伝ひして** 「浦伝ひ」は、浜辺に沿うて行くこと。「はるかにもおもひやるかなしらざりし浦よりをちにうらづたひして」（『源氏物語』明石）「**Vrazzutai.**」（『日葡辞書』）。**○あかしに泊る** 「明石に泊る」。「あかし」は、今の兵庫県明石市。須磨の西方に当る。惣七宛書簡に「あかしよりすまに帰りて泊る」とあるように、この時芭蕉が明石に泊った事実はない。「**Tomari, ru, atta.**」（『日葡辞書』）。**○其比** 「其の比」。芭蕉の明石に泊った時は、の意。**○卯月の中半** 「卯月の中半」。陰暦四月の中旬。須磨・明石見物は四月二十日か二十一日で、厳密には「中半」ではないが、『笈の小文』須磨の条にも「卯月中比の空も朧に残りて」とあり、極く大雑把な言い方なのであろう。「すゑの世をてらしてこそはきさらぎのなかばの月は雲がくれけれ」（『続千載集』巻十、澄世）「**Vzzuqi.**」「**Nacaba.**」（『日葡辞書』）。**○たこつぼ** 「蛸壺」。蛸を捕える為の素焼の壺。口径十センチ、深さ二十五センチ程のもので、長い幹縄に多くの枝縄をつけ、枝縄に壺をしばって海底に沈めて置くと、穴にひそむ習性のある蛸が中に入る。それを引上げて捕えるのである。「たこを取には、たこ壺をいくらもつなにつけて、桐の木の切口をうけにつけて流し置き、一日一夜過て引あぐれば、つぼの内にたこ入て居る也」（『日本山海名物図会』巻五）「**Taco.**」「**Tçubo.**」（『日葡辞書』）。**○はかなき夢** 直ぐさめてしまう夢。蛸の見る夢を、目がさめれば捕まってしまうところから「はかなき」と言った。「はかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに」（『笈の小文』）「**Facanai.**」（『日葡辞書』）。**○夏の月** 既出（I 63）。

大意 夏の月の照らす一夜、海底の蛸壺の中では、蛸が明日の朝は捕まるとも知らず、短夜のはかない夢を結んでいることだろう。

考　「明石夜泊」（『笈の小文』『蕉翁句集』）「あかしの夜泊」（『泊船集』）「明石のとまり」（『類柑子』）等の前書がある。真蹟懐紙は昭和十七年伊賀上野での芭蕉翁生誕三百年記念展覧会に大阪の和田久左衛門氏蔵として出陳されたもので、『蕉翁遺芳』に写真版が収められ、貞享後期の筆蹟と鑑定されている。明石の浜で蛸壺を見たことが句の動機になってはいようが、芭蕉が明石に泊らなかったことは前記の通りである。

「明石夜泊」とした『笈の小文』よりも前、恐らく旅しているうちから「あかしに泊る」（真蹟懐紙前書）としてこの句を書いたのは、「蛸壺」の句が「明石の夜」を背景にしなければ真に生かされない為であろう。播州は蛸の名産地として知られ、須磨は隣り合った土地ながら摂津国であって、播磨に属する明石とは国がちがうのである。蛸壺も須磨ではなく、明石の浜辺で見たに違いない。更に、尾形仂氏の『松尾芭蕉』が指摘するように、詩題としての「夜泊」が舟旅と密接に関連する語であるとすれば、「明石夜泊」に於ける芭蕉は船上で浮寝する旅人となる。こういう虚構の舞台で展開されたのがこの句の世界であった。

はかない夏の短夜の月が海面を照らしている。芭蕉は日中浜辺で見た蛸壺を機縁にして、海底に沈められた蛸壺に這入り込んだ蛸を想像した。明日の朝は捕えられて命を失うとも知らず、安心し切って寝込んでいる蛸を思うと、滑稽であると同時にそぞろ哀れである。「はかなき」は夏の短夜にも響き、しかも「夢を」から「夏の月」へ、はっきりした切れ目無しに屈折する表現が無常感を増幅する。このあたりに漂泊した光源氏も平家の公達も、凡て空しく過ぎ去ったのであるし、浮寝の旅人も明日の命は知れない。句の中では空しいとも悲しいとも言っているわけではなく、唯海面を照らす夏の月の景と海底の壺中に眠る蛸のイメージが結合されただけであるが、この句の持つユーモアとペーソスは、単に蛸の上だけにとどまるものではなく、人生と天地間万物の無常へとひろがって行くのである。「蛸壺」という新しい素材を生かした俳味ある内容表現の裡に、無常観をしみじみと思わせる秀逸であろう。そういう感味を持ちながら、観念的なものがすこしも表面に出ていないところが佳い。

此境はひわたるほどゝいへるも、こゝの事にや

385 かたつぶり角ふりわけよ須磨明石（猿蓑）

陸奥鵆・泊船集・後れ馳・三冊子・類柑子・蕉翁句集・本朝文鑑

夏季（かたつぶり）。

語釈 **○此境はひわたるほどゝいへるも** 「此の境這ひ渡る程と云へるも」。「此境」は、須磨・明石一帯の地を指していい、『源氏物語』須磨に「あかしのうらは、たゞはひわたるほどなれば」とあるのを引いたのである。「かの瀟湘の八のながめ、両湖の十のさかひも、涼風一味のうちに思ひためたり」（芭蕉「十八楼ノ記」―『笈日記』）「**Sacai.**」「**Faiuatari, u, atta.**」（『日葡辞書』）**○こゝ** 「此処」。「蛍火やこゝおそろしき八鬼尾谷長崎田上尼」（『猿蓑』巻二）「**Coco.**」（『日葡辞書』）。**○かたつぶり** 「蝸牛」。日本中に弘布する陸産の巻貝。雌雄同体で種類が非常に多い。夏に出て雨の時特に活動し、桑の葉や野菜を食べ、冬には薄い膜で殻の口を閉じて眠る。「自二此月一至二五月一有二霖雨一則蝸牛多出。或登レ床、又黏レ壁。高登則其涎随尽随落。其在レ貝也見レ人則蝟縮。児童相聚謂二出出虫一虫不レ出則打二破釜一云レ爾。此虫貝俗称レ釜」（『日次紀事』）「和訓義解云、此虫の両角相戦て、常に其頭正しからず。故にかたつぶり共、又行事は頭を左右へふる者なればとも云り。△和俗つねに、ででむしといへり。蛞蝓と一類二種の者也。歌にはかたつぶりと詠り。俳諧には夏に許用す」（『滑稽雑談』）「蝸牛つの引藤のそよぎかな　水鷗」（『続猿蓑』下）「**Catatçuburi. l, quaguiú.**」（『日葡辞書』）。**○角ふりわけよ** 「角振り分けよ」。角を二つの方角に振り分けて示せ、という意。「ひさかたのあめのやへ雲ふりわけてくだりし君をわれぞむかへし」（『新古今集』巻十九、紀淑望）。

大意 かたつむりよ、お前の二本の角を両方に振り分けて、須磨と明石の名所二つをそれぞれ指し示してほしい。

考 「須广にて」（『後れ馳』）「此さかひはひわたるほどゝいへば」（『類柑子』）等の前書が見える。貞享以降、芭蕉が夏に須磨・明石辺に居たのは貞享五年だけであるから、同年四月の作と推定される。この句は宝永板『笈の小文』になく、支考の『本朝文鑑』（享保三年刊）所収の異本「庚午紀行」だけに見えて、この部分は支考の手が加わっている疑い

が濃いので、これを年代推定の根拠にすることは出来ない。
『源氏』の「たゞはひわたるほど」というのは、須磨・明石が相接して距離が極めて近いことを言ったので、おまけに何れも名高い歌枕である。折柄浜辺などで蝸牛を見つけ、「這ふ」という言葉に縁があるのに興じて、蝸牛に呼びかけた体に仕立てた趣向であった。あの二つの程近い地を、お前の角を振り分けて指し示して見よ、と戯れたまでながら、角を振り振り這い歩く蝸牛の様子も思われて、なかなか成功した逸興になっている。源平の古戦場だった縁から、『荘子』に見える蝸牛角上の国蛮・触二国の争を引合に出す説が古来多いが、『猿蓑』の前書からすれば、そこまで言うのは行き過ぎの感が強い。ただ前にも言ったように、須磨は摂津、明石は播磨と、境を接しながら二国に分れているところが、何がしか作者の意識にあったかと推測されるだけである。

正成之像
鐵肝石心此人之情

386 なでし子にかゝるなみだや楠の露 （芭蕉庵小文庫）

泊船集・かぶと集・蕉翁句集・俳諧古選

夏季（なでし子）。

語釈 ○**正成之像** 「マサシゲノザウ」。「正成」は、鎌倉時代末期の武将。楠木氏。河内の土豪で、後醍醐天皇の討幕挙兵に呼応し、赤坂・千早の城に籠って幕府軍を苦しめたことは『太平記』でよく知られている。建武三（一三三六）年五月、摂津の湊川で足利尊氏の軍と勇戦して討死した。「像」は、絵像であろう。○**鉄肝石心** 「テッカンセキシン」。何物にも動かされないしっかりした精神を、鉄や石にたとえた語。「何か無依の鉄肝、鴬鳩（ママ）の翅にたえむ」（「移芭蕉詞」）「転ばし難き石心も、又棄やられぬ所あれば」（『近世紀聞』巻九ノ三）。○**此人之情** 「コノヒトノジヤウ」。「此人」は、正成を指す。「情」は、気持、精神。「情といふは、人心の上に

就て、思慮安排にわたらず、生れ付たるまゝにて、いつはりかざることなきところをいふ」(『訓幼字義』六)「Iôuo faru.」(『日葡辞書』)。**○なでし子** 「撫子(なでしこ)」。既出(Ⅱ*292*)。植物の名に、正成の子正行を寓した。**○かゝるなみだ** 「懸る涙(かかるなみだ)」。正成は湊川の合戦に先立って長子正行を河内の郷里に帰した。ここの「なみだ」は、子にそそぐ慈愛の涙であると共に、その際の別れを惜しむ涙の含みがある。「かしこまるしでになみだのかゝるかな又いつかはとおもふあはれに」(『山家集』下)「**Amega cacaru.**」(『日葡辞書』)。**○楠の露** 「楠(くす)」は、楠木に同じ。クスノキ科の常緑大喬木で、我が国の関東以西の地に自生し、防風林などとして栽植もされる。幹の高さ二十メートル、径は一メートル以上にも達し、全体に芳香がある。幹・根・葉から樟脳を採り、建築・船舶・家具材としても用いられる。ここでは苗字の縁から正成を寓してあり、「露」は親の慈愛の象徴となっている。「鷲の巣の樟の枯枝に日は入ぬ　凡兆」(『猿蓑』巻四)「**Cusu. l, cusuno qi.**」(『日葡辞書』)。

大意 楠の葉からこぼれる露が撫子の花にかかっている。それは正成が子にそそぐ慈愛の涙でもあろう。

考 「正成桜井にて庭訓の図を書たる讃に／鉄心鉄肝此人の情」(『かぶと集』)「桜井宿懐旧」(『俳諧古選』)等の前書がある。『蕉翁句集』は元禄四年の部に出しているが、それを裏付ける資料はない。画賛とあって、このような句を作る機会は何時と限らないわけであるが、姑く実境の背景を求めるとすれば、貞享五年四月の須磨・明石遊歴の際である。惣七宛書簡によれば、芭蕉はこの時「良将楠が塚」を訪れており、丁度句の季節とも合うので、一応ここに配しておく。

楠公父子桜井の駅の別れは、落合直文の「青葉茂れる」の詩で明治以来馴染深いが、芭蕉の見た画像もその父子訣別の場面を描いたものだったのであろう。湊川に赴く時の正成の心事はかなり複雑であったろうが、「鉄肝石心」云云の前書は、この人に対する芭蕉の見方を明らかに示している。楠木に撫子を配した句中の景色は、父子の情をあらわす為の想裡のもので、「なみだ」も「露」も象徴性が多い。単なる譬喩に終っていない点は、この句の取柄といえる。

須　广

387
月はあれど留主のやう也須广の夏（笈の小文）

卯月の中比須广の浦一見す。うしろの山は青ばにうるはしく、月はいまだおぼろにて、はるの名残もあはれながら、たゞ此浦のまことは秋をむねとするにや、心にものゝたらぬけしきあれば

夏はあれど留主のやう也須广の月（真蹟懐紙）

夏季（夏の月）。

語釈　**○留主のやう也**　「留主（るす）」は、主人が外出してその家に居ないこと。既出（Ⅱ276）。

大意　須磨の夏には、月は出ているけれど、まるで主人の留守に来たようだ。秋と違って全く趣が感じられない。

考　須磨・明石をめぐった後須磨に帰って一泊した夜の印象に基づく吟であろう。『笈の小文』ではその辺を見物した記事の冒頭に次の「月見ても」の句と並べ掲げてあり、後の方の文に、

かゝる所の穐なりけりとかや。此浦の実は秋をむねとするなるべし。かなしささびしさいはむかたなく、秋なりせばいさゝか心のはしをもいひ出べき物をと思ふぞ、我心匠の拙なきをしらぬに似たり。

とあって、前掲真蹟懐紙の前書「月はいまだおぼろにて、はるの名残もあはれながら、たゞ此浦のまことは秋をむねとするにや、心にものゝたらぬけしきあれば」と共に、句意を考える上で参考になる。

「夏はあれど」の句及びやや長文の前書の書かれた真蹟懐紙は、『芭蕉図録』に清海泰堂氏蔵として写真版が見えるが、嘗て桃鏡の『芭蕉翁真跡集』（明和元年刊）に「東都久保田氏栢子」の所蔵として摸刻されたものの原物と思われる。

筆蹟は貞享元禄の交と認められるので、この句形が初案、それを『笈の小文』執筆に際して「月はあれど」の形に改めたものと認められよう。

『源氏物語』須磨の巻に「又なくあはれなるものは、かゝるところの秋なりけり」と書かれて以来、須磨の趣は秋に限るという伝統的な観念が生まれ、謡曲「松風」にも襲用されている。芭蕉の延宝期の句「見わたせば詠れば見れば須磨の秋」（I 107）もその系列に属するものであった。当面の句に於いても、「此浦の実は秋をむねとする」ということを前提に、季節ちがいの夏では趣がないことを述べているのであって、それを「留主のやう也」と日常語を用いて俗に言ったところが俳諧の興なのである。初案の「夏はあれど」は、「みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟のつなでかなしも」（『古今集』巻二十、東歌）等と同様に「夏は夏としての趣があるにはあるが」の意であろう。観念的説明的な表現を、後に改めたものと思われる。

388

月見ても物たらはずや須广の夏　（笈の小文）

須ま

月を見ても物たらはずや須广の夏　（芭蕉庵小文庫）　——泊船集・花の雲・蕉翁句集

夏季（夏の月）。

語釈　**○物たらはずや**　「物足(ものた)らはずや」。何となく不満なことよ。「や」は、詠嘆の切字。『日葡辞書』では、「Tarai, ŏ, ŏta.」の否定形として「Tarauanu, tarauazu.」を挙げている。

大意　須磨の夏は、月を見ても何となく不満な感じがすることよ。須磨はやはり秋に限る。

考　『笈の小文』に前の「月はあれど」の句の次に並んでおり、同じ趣を表現を変えて言った別案である。何れも

唯発句の形にまとめただけの句案を列記しているのは、現存の『笈の小文』の未定稿的な性質を端的に示すものであろう。

「月を見ても」という『小文庫』の句形は、調べはこれで安定するが、何を根拠にしたものか一抹の不安がある。間々杜撰な誤りの見える書なので、本位句としては『笈の小文』の句形を採るべきである。

389　海士の顔先見らるゝやけしの花　（笈の小文）

罌粟合

夏季（けしの花）。

語釈　○**海士の顔**　「海士の顔」。○**先見らるゝや**　「先づ見らるゝや」。何よりも先に目がいくことよ。「らるゝ」は自発。○**けしの花**　「罌粟の花」。「けし」は、中国から渡来したケシ科の一、二年草。初夏に開花し、色は白・赤・紫など種々あり、八重咲きの種類もある。「白げし」（I 242）参照。「けし散て直に実を見る夕哉岐阜李桃」（『あら野』巻三）。

大意　けしの花の咲いているあたりの家から、朝起き出て来る漁師の顔に、思わず真先に目が行くことだ。

考　『笈の小文』には、

卯月中比の空も朧に残りて、はかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに、山はわか葉にくろみかゝりて、ほとゝぎす鳴出づべきしのゝめも海のかたよりしらみそめたるに、上野とおぼしき所は麦の穂浪あからみあひて、漁人の軒ちかき芥子の花のたえぐ＼に見渡さる。

という文の後にこの句が見え、須磨に泊った翌朝の吟と思われる。

江戸時代の注釈では『撰集抄』を引いて漁師の殺生を事とする生活をあわれんだ無常の観相を主想とする句と解する説が多いが、それでは牽強のそしりを免れまい。中では、「其意は松風村雨の昔をおもひ、汐くむなる蜑の先づみ

らる丶との心ならんか。この浦の懐古の情をあらはす寓言」（杜哉『蒙引』）とする説が、作者の意を得たものである。『真蹟拾遺』に引く懐紙の前書に「海士の旧跡」とあるのによっても、この時芭蕉の脳裏に松風・村雨の俤があったことは確かで、謡曲「松風」に「さては此の松は、いにしへ松風・村雨とて二人の海人の旧跡かや」とある詞章を引いているのであった。

はかなげな罌粟の花の咲く漁家のあたりをひとり歩いていると、漁師がひょっこり出て来た。起き出たばかりのその顔に、ふと目が惹きつけられる、というので、あわれ深い古伝説が頭にあるところから、どうしても先ず漁師に目が行くのである。その「海士」は日焼けした侘しげな姿であって、「けしの花」との対照も俳意十分であろう。『笈の小文』に収められた句は、ここまでで終る。

山崎宗鑑が舊跡

390 有がたきすがた拝まん杜若　（泊船集）

蕉翁句集

夏季（杜若）。

語釈 ○**山崎宗鑑が旧跡**　「山崎宗鑑」は室町後期の連歌師。宗長や守武らと風交があり、『犬筑波集』の撰者と伝えられて、守武と並んで俳諧の鼻祖と仰がれた。もと足利将軍家に仕えた武家といわれるが確証はなく、「山崎」は晩年山城の山崎（現京都府乙訓郡大山崎町）に住んだ為の呼び名であって苗字ではない。その「旧跡」は、山崎で宗鑑隠棲の地と伝えられる対月庵の跡を指す。「が」は、いうまでもなく所有格。「佐藤庄司が旧跡は左の山際一里半計に有」（『おくのほそ道』）「Qiŭxeqi. Furuqi ato.」（『日葡辞書』）。○**有がたきすがた拝まん**　「有り難き姿拝まん」。「すがた」は、芭蕉が思い描いた宗鑑のイメージである。俳諧の祖として敬仰の気持を籠めて「有がたき」「拝まん」といった。「実に有難き人の言葉、即ちこれこそ弥陀一教なれ」（謡曲「当麻」）

「Arigatai.」(『日葡辞書』)。○杜若「カキツバタ」。

大意　私の眼前のかきつばたに、俳祖のありがたい姿を偲んで拝むとしよう。

考　竹人の『全伝』に収める卯月廿五日付惣七宛書簡に、

廿一日布引の滝に登る。山崎道にかゝりて、能因のつか、金龍寺の入相の鐘を見る。花ぞ散けるといひし桜もわか葉に見えて又おかしく、山崎宗鑑屋舗、近衛どのゝ、宗鑑がすがたを見れば餓鬼つばたと遊しけるをおもひ出て、

有難きすがた拝まんかきつばた

と心のうちに云て、卯月廿三日京へ入。

と見える。須磨・明石見物を終えて、杜国と共に京へ向う途次、山崎の宗鑑旧跡での吟であって、四月二十二、三日頃成ったものであろう。『蕉翁句集』も右の書簡によって収めている。

芭蕉自身書簡の文面に述べているように、句は「近衛どの」が宗鑑の痩せた姿をからかった戯句「宗鑑がすがたを見れば餓鬼つばた」から発想されたものである。近衛公は「餓鬼つばた」などといわれたが、それはちとひど過ぎる。自分は目の前のかきつばたによって宗鑑法師の風狂の俤を偲び、俳祖のありがたい姿に拝跪しようというので、加藤楸邨氏もいわれるように、かきつばたその物に宗鑑の俤を見ようというのではなく、花は飽くまで機縁に過ぎない。

ところで、この宗鑑に関する話は、随流の『貞徳永代記』(元禄五年刊)によると、慶長の初年九条禅閤が連歌会を催して、近衛龍山公や紹巴・幽斎といった人々が集うた時、禅閤が宗鑑を召して泉水のほとりのかきつばたの花を折らせようとした際のこととなっている。宗鑑が老いの歩みもたどたどしく御庭の橋を渡って漸くかきつばたを二三本折り取ったのを見て、近衛公が「餓鬼つばた」の句を吟ずると、宗鑑が、

のまんとすれど夏の沢水

と脇を付け、以下幽斎と貞徳が第三と四句目を付けたとある。しかし慶長の初年まで宗鑑が存命していた筈はなく、この話はどうやら塚原卜伝と宮本武蔵の鍋蓋試合式の伝説に過ぎぬようで、異伝も多い。其角の『雑談集』（元禄五年刊）では、近衛公が宗鑑を訪れた話になり、もっと古い『醒睡笑』巻七では、「やせにけり此花の名やかきつばた」（長頼）「のまんとすれば夏の沢水」（宗長）「くちなはにをはれたいづちかいるらん」（宗鑑）という三人の付合になっている。別に『犬子集』巻十七では、

称遥院殿へ宗鑑法師始而伺候之時、宗長法師伴ひてまかり出けるに、称遥院殿御当座

宗鑑が姿を見ればがきつばた
のまんとすれど夏の沢水
蛇におはれていづちかいるらん

右、脇は宗長、第三は宗鑑云々

とあり、「称遥院」（正しくは逍遥院）は三条西実隆のことで、これまた時代は遥かさかのぼることになる。何れにせよ、書簡の書きぶりを以て見れば、芭蕉は近衛公と宗鑑の付合として記憶していたのであった。

391 花あやめ一夜にかれし求馬哉（蕉翁句集草稿）

蕉翁句集

夏季（花あやめ）。

語釈 ○**花あやめ** アヤメ科の多年草。高さ三十〜六十センチ。葉は剣の形で基部は淡紅色を帯び、鞘状である。初夏に紫や白の花をつけるが、その外花被が花弁状に垂れ下り、基部には黄と紫の虎斑模様がある。漢名は菖蒲で、渓蓀をこれに宛てるのは誤り

という。特に「花あやめ」というのは、同じく「あやめ」と呼ばれる白菖と区別する為で、後者は端午の節供に軒にさして邪気を払う草である。「紫羅欄花(はなあやめ)　大和本草云、花史曰、紫羅欄、花葉ともに燕子花に似て小也。只あやめと云、四月に花を開く。紫・白・褐色三種有。葉又単葉有」(『滑稽雑談』)「似たりや似たり杜若花あやめ」(謡曲「杜若」)「Fanaayame.」(『日葡辞書』)。○**一夜にかれし**　「一夜(いちや)に枯(か)れし」。求馬が死んだことを、「花あやめ」の縁で「かれし」といった。「一夜」は「ヒトヨ」ともよめるが、ここでは音読を採る。「されば人一日一夜をふるにだに、八億四千の思あり」(謡曲「求塚」)。○**求馬**　「モトメ」。歌舞伎役者吉岡求馬。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)によると、大坂の大和屋甚兵衛座所属の若衆方であったという。

大意　花あやめが枯れるように、吉岡求馬は一夜のうちに死んでしまったよ。

考　『蕉翁句集』には「俗士にさそはれて、さ月四日吉岡求馬を見ル。五日はや死ス。仍而追善」と前書があり、『蕉翁句集草稿』にも「此時万菊も、唐松哥仙よくおどり侍ると前書して、だきつきて共に死ぬべし蟬のからといふ句を書、両人ともに猿雖文通に聞ゆ」とある。京で人に誘われて五月四日に芝居見物をしたが、その時見事な踊を披露した若衆方吉岡求馬が翌五日に急死したので、追善句として詠まれたのであった。阿部喜三男氏が『芭蕉俳文集』で指摘されたように、『蕉翁句集』の前書は『草稿』にいう猿雖への文通の中にあった文言を裁ち入れたものに違いなく、最初から前書として書かれたものではあるまい。なお『蕉翁句集』には、宗鑑旧跡に於ける「有がたき」の句と同じ文通に見える由を注しているが、「有がたき」の句が見えるのは卯月廿五日付の惣七(猿雖)宛であって、五月に入ってからのこの悼句は別の書簡だった筈である。同じく猿雖宛だった為に「同じ文通」と書いたのであろう。

花のような若い役者の舞台を見た翌日、その人の俄かの死を聞いて無常の感を発した追悼句である。「花あやめ」が枯れることに譬えた趣向であるが、「あやめ」を軒に葺く習わしのある端午の節に当っていたことが強く意識されていると説く向きがある。しかし、前に記したように「花あやめ」は節供に用いるあやめとは別種なので、確論とは言えない。ただ「あやめ」の語の相通から、何がしかのつながりはあろうか。「あやめ」「もとめ」と語呂を合わせているることは確かである。譬喩の意が露わで、「求馬」の名まではっきり句中に出しており、一句の形にまとめたとい

うまでの句である。

五月末ある人の水楼にのぼる

392 **海ははれてひえふりのこす五月哉**（真蹟懐紙写）

泊船集書入

夏季（五月）。

語釈 ○**五月末**　貞享五年五月末。「五月」は、「ゴグヮツ」「サツキ」両様によめる。○**ある人の水楼**　「水楼」は、水際に建てられた高い建物。ここは二階家であろう。句は大津での作と思われるが、「ある人」が誰かは不明。「みのゝ国ながら川に望て水楼あり」（「十八楼ノ記」―『笈日記』―）「Suirô. Mizzuno yagura.」（『日葡辞書』）。○**海ははれて**　「海は晴れて」。この「海」は琵琶湖を指すので、「湖」に通用した宛字である。「鳥共も寝入てゐるか余吾の海　路通」（『猿蓑』巻一）「秋のころ旅の御連歌いとかりに　芭蕉　漸くはれて富士みゆる寺　荷兮」（『冬の日』）「Fare, uru, eta. ……Tenqiga faruru.」（『日葡辞書』）。○**ひえふりのこす**　「比叡降り残す」。「ひえ」は、琵琶湖の南に聳える比叡山。大比叡岳（標高八百四十八メートル）と四明岳（標高八百三十九メートル）の二峰がある。「大比叡」（I *70*）参照。「ふりのこす」は、普通は其処だけ雨が降らないことであるが、ここでは、其処だけ雨が降っていることをいう。「雲のみね今のは比叡に似た物か　大坂之道」（『猿蓑』巻二）。○**五月**　句中の語としては「サツキ」と訓むべきであろう。既出（I *117*）。

大意 鬱陶しい梅雨どきの五月、湖の方は雨があがっているが、比叡のあたりだけはまだ雨が残っているらしく、雲に覆われていることよ。

考 貞享五年夏の句を録した詠草中の一句で、芭蕉真蹟の写しと思われるものが天理図書館綿屋文庫に所蔵される。時代の降る書に「長興亭」（『芭蕉翁句鑑』）「長貞亭」（『一葉集』）等の前書があるが、何れも不明の人物である。この年五月末、大津か膳所あたりの人の許で成った句であろう。芭蕉は京で杜国に別れ、岐阜の僧日賢（俳号己百）の迎えを

得て、共に岐阜に向ったのである。

「五月」は「五月雨（さつきあめ）」といってもよいところであるが、「ふりのこす」といえば分ることであるし、はっきりした切字「哉」を入れた方が句の姿が引き立つ。「海ははれて」の初五の字余りがおおらかな調べを成して、湖辺の大観を叙しているところが快い。

後年の書に、「湖水はれて比叡降のこす五月雨」（『蕉句後拾遺』）「海ははれてひえ降の寺五月かな」（『一葉集』）「海は晴て日枝降る夜の五月哉」（『あくた川』）等種々の異形が伝えられるが、何れも信じ難く、真蹟写の句形に拠るべきである。「ひえ降の寺」は、「降のこ寸」と仮名で書いた二字を「寺」と読み誤ったに違いない。

元祿元歳戊辰六月五日會
誹諧之連歌

393　皷子花の短夜ねぶる晝間哉　（尚白筆懐紙）

夏季（皷子花）。

語釈　○**元禄元歳**　元禄改元は貞享五年九月三十日で、六月初めにはまだこの元号は用いられていない。従って尚白の懐紙の年記は後年のものと推定される。○**戊辰**　「ボシン」。つちのえたつ。右の年の干支である。○**会**　俳席の意。既出（Ⅱ329等）。○**皷子花**　「ヒルガホ」。ヒルガオ科の蔓性多年草で、夏の季語。既出（Ⅰ156）。「皷」は「鼓」の俗字。「皷子花（こしか）」は昼顔の漢名である。○**短夜ねぶる**　「短夜眠る（みじかよねぶる）」。「短夜」は、夏の夜をいう。「総て夏の夜を短夜、明やすき夜などいへるは、立夏より前、清明の節より昼ながく夜短き也。就中夏至を最上とする故に、永き日も夏なるべけれど、連俳に春に用、……又春の夜も短きと読る歌も侍る。夏日長と詩にも多し。只古来より、長き日を春とし、短夜を夏に用来ること、類略互歌の心得なるべし。又諷物をわかつて用るな

らし。可考」(『滑稽雑談』)「卯月中比の空も朧に残りて、はかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに」(『笈の小文』)「Mijicayo.」(『日葡辞書』)。○昼間　「ヒルマ」。日中。日常語である。「Firuma. i, Firuno aida.」(『日葡辞書』)。

大意　昼顔は夏の短夜を眠ってこの暑い日中に咲いているが、さすがにうっとりと眠そうで、昼寝をしているようだ。

考　底本とした懐紙の年号に聊か問題はあるが、この時一座した大津の尚白の記録には必ず基づくところがあったであろうから、この年記は信じてよいものと思われる。五月から六月にかけて大津に滞在した時の作である。時代の降るものながら、『金蘭集』(甘井編、文化三年序)には「元禄元年辰六月大津奇香亭興行」と前書があり、「せめて涼しき蔦の青壁」という脇を賦した奇香という俳人の家で催されたのであろう。

難解の句で、古来説が多い。昼顔の花のさまを主とした解と、人の昼寝を中心とした解とに分れており、両者を折衷したような見方もかなりある。

此花の夕顔・朝顔にかはりて、その色の眠げなるよりいへるか。趣向、顔の字より出らん。但、奇香亭に前夜の俳諧につかれて昼寐し給ふ吟なるや。(杜哉『芭蕉翁発句集蒙引』)

みじか夜のつかれを休む昼寝の句也。それをかく短夜ねぶるとは作られたる也。(何丸『芭蕉翁句解大成』)

昼顔の花の短夜を眠るが如く、我はゆる〳〵と眠る昼間かな、と詠歎して主人の欵待を謝したのである。(服部畊石氏『芭蕉句集新講』)

昼顔……が短夜を眠って昼間は美しく咲いているが、自分もよく休養がとれて元気ですという挨拶の句。(阿部喜三男氏『校本芭蕉全集』第一巻)

昼顔は短夜を眠り昼咲くが、自分はその昼顔咲く昼日中をも快く昼寝をすることだの意。奇香への挨拶の意を含む。(宮本三郎氏『校本芭蕉全集』第四巻)

一句の意は、昼顔は短夜を眠ることとて、昼間咲いている顔(花の色)も眠そうに見えるというので、その裏に、

作者自身も短夜の会のつかれで、昼間もうつらうつら寐ることだの意をきかせたのである。昼間のゆっくりした亭のもてなしに挨拶の意を含めたものと思う。（岩田九郎博士『諸注評釈芭蕉俳句大成』）

夜はしぼみ、昼間目覚めて花を開く昼顔が、夏の短夜で寝足りなかったせいか、昼もうとうと夢見るような感じで咲いている。（今栄蔵氏『芭蕉句集』）

といった具合で、挙げて行けばきりがないが、人の昼寝の意を含めたとすると、甚だ独り合点な表現にならざるを得ず、且つは作者がうつらうつらと眠いのでは挨拶の意にも適わない。眼前の昼顔の賞美として、そのうっとりと夢見るような趣を昼寝と言い倣したのではあるまいか。言葉が絡み合って意味が取りにくく、感心した作ではない。

394　五月雨にかくれぬものや瀬田の橋（あら野）

真蹟懐紙写・前後園・雑談集・葛の松原・真蹟短冊・泊船集・蕉翁句集・粟津原

夏季（五月雨）。

語釈　**○かくれぬものや**　「隠れぬ物や」。雨雲に覆われてしまわない物、の意。「や」は、詠嘆の切字。「麓寺かくれぬものはさくらかな　李風」（『はるの日』）「**Cacure, uru, eta.**」（『日葡辞書』）。**○瀬田の橋**　「瀬田の橋」。大津の瀬田川にかかる百九十六間（三百五十五メートル）の長橋。東海道の往還に当り、瀬田橋本から石山鳥居川に通じている。「瀬田の夕照」は近江八景の一。「せたの唐橋共。あはづの南也。橋は東西にかゝれり。長百九十六間。橋上より南に石山寺みゆる。是より湖上の浦々を見渡す景無双也」（『国花万葉記』）「幾人かしぐれかけぬく勢田の橋　僧丈艸」（『猿蓑』巻二）「**Faxiuo caquru.**」（『日葡辞書』）。

大意　五月雨の雲にあたりの物はすべて覆われているのに、瀬田の橋だけは長々と横たわっているのが見える。あの橋だけは五月雨に隠れてしまわないものなのだなあ。

考　この旅行当時の揮毫と思われる真蹟懐紙の写し（天理図書館蔵）に載っており、所収の『前後園』（言水撰、元禄二年

刊）や『あら野』（荷兮撰、元禄二年刊）の成立する以前、夏に湖南に居たのは貞享五年だけなので、この年大津滞留中の吟と見られる。真蹟短冊は『蕉影余韻』所収。桃隣の『粟津原』（宝永七年刊）には、美濃大垣の夏川の句「めぐり来る瀬田の時雨や一むかし」の前書に、「五月雨にかくれぬものや瀬田の橋とめされたる短尺を所持して」と引用されている。

湖上は五月雨に降り籠められて、物皆茫乎とした霧に覆われてしまった中に、瀬田の橋のみは紛れもなく長々と横たわっている。墨絵のような湖上湖岸の大観を、長橋に焦点をあててあらわした句で、其角の『雑談集』に、

……去来が、

湖の水まさりけりさ月雨

と云へる、まことに湖-鏡一-面にくもりて、水接(セッス)ニ天とみえぬ。八景を亡(バウ)ぜし折から、此一橋を見付たる、時と云、所といひ、一句に得たる景物のうごかざる場を、いかで及ぬべきや。

とある通りである。「瀬田の橋」が、「矢矧の橋」と変っても同じという京・大津あたりの俳人の批判に答えたものであるが、湖岸の大景を描くものとして、「瀬田の橋」は動かぬところであろう。「かくれぬものや」という表現について、半田良平氏の『新釈』は、理智的で視野が橋のみに限られ、湖面の情況ははっきりしないと見ているが、これは聊か見当ちがいではなかろうか。ただ近代以降の作家は、叙景句にこういう主観的な詠嘆表現を持ち込むことを余りしないので、其処に違和感を覚えるのだと思う。「かくれぬもの」と取立てていうことによって印象が鮮やかになると見るのが至当で、加藤楸邨氏は「現代俳句には見られぬ大まかな味わい」（『芭蕉全句』）と述べておられる。

395

ほたる

めに残るよしのをせたの螢哉（真蹟懐紙写）

夏季（蛍）。

語釈 ○**めに残るよしの**　「目に残る吉野」。花盛りの吉野山の景色が、なおまざまざと強い印象をとどめていることをいう。「其所〳〵の風景心に残り」（『笈の小文』）「Nocori, u, otta.」（『日葡辞書』）。○**せたの蛍**　「瀬田の蛍」。琵琶湖の南端、瀬田川の源流の発するあたり、今の大津市瀬田は、蛍の名所で、『類船集』（梅盛著、延宝五年正月序）には、「勢多」と「蛍見」、「蛍」と「勢田」を付合としている。「江州石山に蛍谷と称する所侍る。此地の蛍火、四月下旬五月節に入て後十日ほどさかりに出る。次第に流の水に随て下流す。五月中旬には城州宇治川に至て、又十日ほど盛也」（『滑稽雑談』）。

大意 今なおまざまざと目に残る吉野の花盛りのさまに紛れるばかり、瀬田の蛍が眼前に乱舞することよ。

考 貞享五年夏の句を記した真蹟懐紙の写しに見え、大津滞在中に瀬田の蛍見をした夜の印象に基づく句と思われる。

吉野の花の絢爛華麗な景色が、なお残像として強い印象をとどめているところへ、蛍の大群の乱舞する目もあやな川辺の夜景が重なった。二つを二重写しにして一句にまとめようとした試みである。最初は「めに残るよしのはせたの蛍哉」であったが、「よしのは」の「は」を消して「を」に改めてある。「は」では不熟の表現という外なく、「を」という殆い措辞によって辛うじてその意図を窺うことが出来るが、作者自身これでは満足し得なかったのであろう。以後どの俳書にも収められることなく、捨てられたのである。

木曾路のたびをおもひ立て大津にとゞまる比、先せたの螢を見に出て

396 此ほたる田ごとの月にくらべみん （三つの顔）

夏季（ほたる）。

語釈 **○木曾路のたびをおもひ立て** 「木曾路の旅を思ひ立ちて」。「木曾路」は、中山道。江戸から上野・信濃・美濃の諸国を経て、近江の草津で東海道に合した。芭蕉はこの年八月十一日に岐阜を立ち、更科の名月を賞した後、江戸に帰ったが、この前書によれば、京に滞在していた頃からこの意向があったことが知られる。なお、卯月廿四日付惣七宛万菊丸（杜国）書簡に、「猶此すえは、おばすて・さらしな・むさし野・富士までも安く見めぐり候様にといのるばかり御座候」とあるのによれば、最初は杜国も同行する予定だったのである。「木曾路を経て旧里にかへる人は森川氏許六と云ふ」（「許六を送る詞」—『韻塞』—）「いせの山田にありて、かりの庵をおもひ立けるに」（『続猿蓑』下、支考発句「二見まで」前書）「**Qiòye noboròto vomoi tatçu.**」（『日葡辞書』）。**○大津にとゞまる比** 「大津に留まる比」。芭蕉が湖南の大津に滞在していたのは、「海はれて」（Ⅱ *392*）「皷子花の」（Ⅱ *393*）等の句によっても明らかなように、貞享五年五月から六月初めにかけてであった。**○先** 「先づ」。**○見に出て** 「見に出でて」。**○此ほたる** 「此の蛍」。瀬田川のあたりに群飛する蛍をいう。**○田ごとの月** 「田毎の月」。今の長野県戸倉町と上山田町の境にある姨捨山（冠着山ともいう）の麓の斜面に作られた水田に映る月影を賞していう。「信州更級の田毎の月は、姨捨山のなだれに四十八階の山田あり。……姨捨山上より見おろせば、田毎に月ありて風景斜ならず」（『俚言集覧』）。**○くらべみん** 「比べ見ん」。「蓮の実に軽さくらべん蟬の空　示峯」（『続猿蓑』下）「**Curabe, uru, eta.**」（『日葡辞書』）。

大意 この瀬田の蛍の眺めは、まことに見事だ。木曾路の田毎の月の眺めと比べてみたい。

考 前書の内容からして、貞享五年夏大津滞在中の作と見るのが最も相応しい。初出は享保十一（一七二六）年に成った『三つの顔』で、かなり後のものではあるが、撰者越人の手許にあった資料に基づくものと思われるので、信憑性に問題はあるまい。

『和漢三才図会』によると、瀬田川流域の石山蛍谷の蛍は普通の倍ほどの大きさで、数百疋が塊まって飛び、高さ十丈にもわたって火焰のように見えることがあるという。そうした水に映る無数の蛍火に見とれながら、これから行く笞の更科の月の眺めにも思いを馳せている句である。水に映る光が、瀬田の蛍と田毎の月の共通点であって、名所への芭蕉の思いが偲ばれよう。但し、「くらべみん」は余りに露わで余韻に乏しく、即興句として、ただ句の形を成しただけに終っている。

397

世の夏や湖水にうかぶ波の上（真蹟懐紙写）

大津にて

世の夏や湖水にうかむ浪の上（前後園）　──蕉翁句集

井狩昨卜亭に遊て

世の夏や湖水をたゝむ波の上（雪の流）

世の夏や湖水に疊む浪の上（芭蕉句選拾遺）

夏季。

語釈　○湖水にうかぶ波の上「湖水に浮ぶ波の上」。湖面に立つ波の上にあって涼しい、というのであろう。湖水に臨む家を褒めているのである。「湖水」は、いうまでもなく琵琶湖を指す。「高すなごあゆみくるしき北海の荒礒にきびすを破りて、今歳湖水の波に漂」（「幻住庵記」）「杜夫魚は河豚の大さにて水上に浮ぶ」（『続猿蓑』下、拙侯発句「かくぶつや」後書）「Cosui, Mizzuvmino mizzu. i, Mizzu vmi.」「Vcabi, u, ŭda. l, vcami, u.」（『日葡辞書』）。

大意　世間は暑い夏の盛りだが、このお宅は湖面に立つ波の上にある感じで、まことに涼しい。

考　貞享五年夏の旅行当時の句を録した真蹟写しの中に見え、大津滞在中の吟と推定される。『前後園』（言水撰、元禄二年刊）の前書は信じてよい。

「うかぶ」「うかむ」の違いはどちらでもよいが、問題は「湖水をたゝむ」の形である。この「たゝむ」は、波が重なる意と思われるが、所載の俳書『雪の流』は寛保三（一七四三）年の芭蕉五十回忌に際して湖南の俳人松琵が撰した集で、穎原博士によると、中に見える芭蕉遺稿の類は、必ずしも杜撰とは思えないという。恐らく大津に「湖水をたゝむ」とした真蹟が存していたらしく、或いは「湖水に畳む」とした『句選拾遺』の形が真を伝えるものかも知れない。この形が推敲過程のどの段階に属するかは卒かに決し難いが、他門の集ながら板本の初出は真蹟写しの系統の句形なので、本位句としては「湖水にうかぶ」を採った。なお、『雪の流』の前書に見える井狩昨卜は不明の人物であるが、穎原博士は『新講』で、貞門談林時代に活躍した井狩友静の一族かと見ておられる。

「湖水にうかぶ」と「波の上」は一見重複した表現のようであるが、「うかぶ」「たゝむ」は波にかかるのであって、「立つ波」というのと同じことであろう。世間の暑さと対照的に、湖の立つ波の上に家があるように感ぜられてまことに涼しいといって、挨拶の意を籠めたのである。

涼　み

398　夕がほや秋は色〳〵のふくべ哉　（真蹟懐紙写）

真蹟短冊・あら野・翁草・陸奥鵆・梅桜・泊船集・伊達衣・続古今俳諧師手鑑・宇陀法師・蕉翁句集・千鳥掛・宰陀稿本

夏季（夕がほ）。

語釈　○夕がほ　「夕顔（ゆふがほ）」。瓜類の一種で、夏の季語。既出（Ｉ*31*）。○色〳〵のふくべ　「ふくべ」は、夕顔の実。大型で、円筒形か西洋梨のような形である。「夕皃の実は秋也。……惣別瓢（ひやう）とばかりよし。簞（たん）とは籠の支也。……へうたんと云つゞけて、ひとつの

物のやうに人心得侍る。乍誤本より天下に云付たる叓なれば、其分にして置べし。此へうたん、句躰によりて秋になるべし。只は雑也。ふくべ共ひさご共申。……夕皃の宿は植物なり、居所也。花となくても夏也。実の字あれば秌也」（『御傘』）「いろ〱のかたちおかしや月の雲　湍水」（『あら野』巻六）「江南の珍碩我にひさごを送レり。……或は大樽に造りて江湖をわたれといへるふくべにも異なり」（『ひさご』越人序）「Iroironi cauaru.」（『日葡辞書』）。

大意　夕顔の花が白く咲いている。どれも同じような花なのに、これが秋には、いろいろの形のふくべになるのだなあ。

考　「初秋中一　此所に遊て」（『千鳥掛』）「大津なる松洞がもとにて炭とりかきつけける（ママ）」（『宰陀稿本』）等の前書がある。板本初出の『あら野』はこの句を夏の部に収めるのに対して、他は凡て秋の部に入れてあり、『千鳥掛』の前書によっても、貞享五年七月十一日に作ったことになる。しかし、底本とした天理図書館蔵の真蹟写しは、もともと鳴海の下郷家（知足の後裔）に伝わったもので、貞享五年夏の句のみを録しており、それに「涼み」と前書があることは、夏の句として作られたことを示すものと見られよう。尚白の門人宰陀の前書も信ずべきであって、貞享五年夏大津滞在中の作と推定される。『千鳥掛』の前書は、その年七月成海神社の祭礼に知足と同道した際にこの句を語ったのを知足がその日の作と思ったか、或いは芭蕉自身当座の作のような話し方をしたのかも知れぬ。これらの点については、荻野清氏の「芭蕉俳句に関する報告」（『芭蕉論考』所収）を参照されたい。なお、真蹟短冊は、岡田利兵衛氏解説の『芭蕉　蕪村』に紹介されたもので、貞享末期の揮毫と鑑定されている。

この句は、夕顔の花を眼前にして秋のふくべを思い遣ったのか、或いはふくべを見て夕顔の花を回顧したのか、取り方によって内容が変って来るし、季節も前者ならば夏、後者ならば秋である。右に述べたように、資料の上からは夏季の句とすべきであろうが、秋の句とする異解を生じたのは、重用を避けるべき「や」「哉」を両つながら用いた句作りのせいでもあった。この「や」を古くは疑問の辞とする見方があり、

此やもじ、うたがひにて、哉と留る也。瓢は惣名にして、百なり・千なり・長ふくべ品〻あれど、花は一色夕顔といへるは如何成事やと云事也。名人のてには、初心の及ぶ所にあらず。（李由・許六『宇陀法師』）

……瓢の見様体なり。さるを、夕顔や秋はといへるは、夕顔の花と瓢の実との夏秋の差別にて、句情は瓢のをかしみより、やさしき花の夕顔も、か〻るふくべになりぬるやと、此やは疑の耶としるべし。本より連誹の証句にも、口合の也に哉ととむる事は、押字抱字の論なけれど、疑ひの耶には此法をしるべし。詮用は、秋はと句を切りて、下に心をことわる故なり。（支考『俳諧古今抄』）

といった論が見えるけれども、この句の「や」を疑問とするのは所詮無理であって、特に支考の説は迷論というしかない。

夕顔の花は眼前、瓢は未秋の来らざるをおもひつゞけて、やと治定して、哉と未来に聞句也。故に、や・かな障らず。一色に白く艶に咲花なれども、秋になれば異なる姿となるものかなと也。秋はと断るは夏の心なり。……秋の句ならば、秋はの断に及ぶべからず。やの字も不済也。（東海呑吐『芭蕉句解』）

という説が明快である。加藤楸邨氏もいわれるように、「や」「かな」の重用を嫌うのは、どちらも詠嘆として重く響くので、句の中心が二つに分裂するのを避ける為であろう。その恐れがなければ、共に用いても差支えはないのだ。

これも加藤氏の指摘されたことだが、この句は最初『宰陀稿本』の前書にあるように、ふくべを炭取に利用したのを面白がって、「白い艶な夕顔の花が、秋には色々なふくべになって、挙句はこんな炭取になることもあるのだな」といった即興句であったろう。大津での事とすれば、これも夏にはちがいないが、季感には乏しく、「ふくべ」も『御傘』で「只は雑也」といわれた場合に相当する。それが「涼み」という題を与えられると、「や」の詠嘆が利いて夕顔の花の印象が強くなり、秋の「ふくべ」へと連想が動いて行くのもユーモラスで、季節の移行に対する感慨も、何がなし懐しい。大した句ではないが、「涼み」という題によって、この句は生かされたと思う。「みどりなるひとつ

草とぞはるは見し秋はいろ〳〵の花にぞありける」（『古今集』巻四、よみ人しらず）という古歌を背景にしていることは、古注以来の定説である。

399　東武吟行のころ、美濃路より李由が許へ文のをとづれに

ひるがほに晝寐せうもの床の山　（韻塞）

泊船集・蕉翁句集

夏季（ひるがほ）。

語釈　○東武吟行のころ　「東武吟行」は、江戸への句作の為の旅、の意。「東武」は「東国武蔵」の約で、即ち江戸のこと。「吟」は句作、「行」は旅をいう。これが何時を指すか、色々の考え方が出来るが、貞享五年夏上方から江戸へ赴こうとする際のこととするのが最も穏当であろう。〔考〕参照。「亡父の墓東武谷中に有しに」（『猿蓑』巻四、園風発句「まがはしや」前書）「すみよしの市に詣けるに、昼のほどより雨ふりて吟行しづかならず」（『笈日記』難波部）「Guincô, i, Guinjite yuqu.」（『日葡辞書』）。○美濃路　「ミノヂ」。「美濃」は、今の岐阜県南部の旧国名。其処を通る街道の意から、その地方をも指すようになった。ここは美濃へ向う途中の意で用いられたと見られる。〔考〕参照。「みのぢ・あふみ路の山〳〵雪降かゝりていとおかしきに」（『笈日記』伊賀部、芭蕉発句「かちならば」前書）。○李由が許　「李由」は、俗姓河野氏、諱は通賢、字を買年といった。近江国犬上郡平田村（現滋賀県彦根市内）の光明遍照寺（略称明照寺）の十四世住職で、釈名は亮隅。蕉門に入り、彦根の許六と親しく交わって『韻塞』『篇突』『宇陀法師』等の書を共編した。宝永二（一七〇五）年六月二十二日歿、享年四十四。その「許」とは、平田の明照寺を指す。「みのゝ国より去来がもとへ申つかはし侍ける」（『猿蓑』巻二、芭蕉発句「無き人の」前書）「Moto.」（『日葡辞書』）。○文のをとづれ　「文の訪れ」。手紙を遣ること。「を」は「お」を用いるのが正しい。「国許へ下たらば、早ゝ文の便りをも致しませう」（狂言「墨塗」）「いかにもして今一度はかなき筆の跡をも奉り、御をとづれをもきかばや」（『平家物語』巻二）「Fumiuo todoquru.」「Votozzureuo suru, I, môsu.」（『日葡辞書』）。○ひるがほに　「昼顔に」。「ひるがほ」は植物の名。既出（I 156等）。「に」は、……に対して、の意である。（I 157）参照。○昼寐せうもの　出来たら「昼寐」をしようものを。実際には出来なかったことに対する心残りの気持をあらわし、

「もの」は終助詞的用法である。「昼寐」は、後には夏の季語になるが、芭蕉の時代には雑の扱いである。「う」は、「む」から転じた口語助動詞。既出（Ⅱ*360*）。「夏陰の昼寐はほんの仏哉　愚益」（『あら野』巻八）「朝顔をその子にやるなくらふもの　荷兮」（『あら野』巻四）。「**Firune.**」（『日葡辞書』）。○**床の山**　「床の山」。彦根市の東南にある正法寺山。「近江路の鳥籠の山なる不知哉川けのころごろは恋ひつゝもあらむ」（『万葉集』巻四、岡本天皇御製）「いぬがみのとこの山なるなとり河いさとこたへよわがなもらすな」（『古今集』墨滅歌）等と詠まれた古くからの歌枕である。

大意　御地のあたりの床の山で道端の昼顔など眺めながら、出来れば昼寝をしたいのに。

考　『韻塞』（李由・許六共撰、元禄九年刊）の前書によれば、貞享五年夏大津あたりから東へ向う途次、平田の李由に文通した折の即興吟と見られる。李由と芭蕉との交渉は貞享頃からと推定される資料もある上、許六の『泊船集書入』に「大堀より李由が方へ文通にて、すぐにみの路に趣給ふの句也」とあって、東へ向う時と見なければならないので、この年以外には考え難い。「大堀」は彦根の地名で、其処から文通があったのであろう。『蕉翁句集』が元禄七年の部に出しているのは、精しい年代考定の結果とは思われぬ。

近くまで来ながら立寄れないので、李由に言い遣った挨拶の句である。その寺に近い歌枕「床の山」の縁で「昼寝」と洒落たもので、「ひるがほに」と同音を重ねて興じ、「せうもの」と砕けた口語調にして、相手への親愛の情をあらわしている。遊里情調を云々する説は思い過しにすぎない。

其草庵に日比有て

400　やどりせむあかざの杖になる日まで　（真蹟懐紙）

笈日記・泊船集・蝶姿・西の詞・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

夏季（あかざ）。

語釈 **○其草庵**　「其の草庵」。岐阜の妙照寺住職日賢（俳号己百）の草庵。寺の境内にあったのであろう。妙照寺は法華宗、金華山の西麓、本町通南側（現岐阜市梶川町）にあった。〔考〕参照。**○日比有て**　「日比有りて」。何日も滞在して、の意。「有」は「在」の宛字である。「旅の情をも知たれば、日比とゞめて、長途のいたはりさまぐ\にもてなし侍る」（『おくのほそ道』）「Figoro.」（『日葡辞書』）。**○やどりせむ**　「宿りせむ」。この草庵に滞在しよう。「雪に鞍置丿貫が馬　嵐雪　やどりせん大江の岸は八間家　ばせを」（『芭蕉一周忌』）「Carino yado. 1, Carino yadori.」（『日葡辞書』）。**○あかざの杖になる日まで**　「藜の杖に成る日まで」。「あかざ」は、アカザ科の一年草。栽培種だが野生の方が多い。直立した茎は見上げる程にも伸び、緑色の葉は菱形で軟く、夏秋の頃穂状に黄緑色の細かい花が密生する。若葉や実は食用になり、茎は杖にも用いられる。「時珍本草曰、灰藋、四月生レ苗、為レ蔬、藜灰藋紅心者、茎葉稍大、嫩時亦可レ食、老則茎可レ為レ杖。○順和名曰、藜和名阿加佐。」（『滑稽雑談』）「うれしさは我丈過しあかざ哉　家足」（『続明烏』）「夕月や杖に水なぶる角田川　越人」（『あら野』巻七）「Acaza.」「Rŏjin tçuyeuo tanomu.」（『日葡辞書』）。

大意　庭のあかざが伸びて杖に成る日まで、この草庵にとどまっていたいものです。

考　「美濃己百亭」（『泊船集』）「尾陽巴丈亭にて」（『蝶姿』）「桑門己百庵に」（『蕉翁句集』）等の前書があり、『西の詞』（釣壺撰、元禄十四年刊）にも「みの己百亭の吟也」と付記が見える。底本とした早稲田大学図書館蔵の真蹟懐紙には、この句の前に、

ところ〴〵みめぐりて洛に暫く旅寝せし程、みのゝ国よりたび〴〵消息ありて、
桑門己百のぬし、みちしるべせむとてとぶらひ来侍て

しるべしてみせばやみのゝ田植哥　己百
笠あらためむ不破の五月雨　ばせを

という句文があって、事情を詳らかにすることが出来る。これよりさき貞享四年の十一月二十六日に、岐阜の安川落梧が名古屋の荷兮亭に滞在中の芭蕉を訪うて岐阜への来遊を慫慂したのであったが、須磨・明石見物を終って上洛した折にも岐阜から度々消息があって、己百が迎えに出京して来た。京都の本山妙顕寺に所用があった序だったという。

そこで已百と共に岐阜までの道行となり、着後もその草庵を足だまりとしていたことが知られる。真蹟懐紙には「貞享五年夏日」と年記があり、「やどりせむ」の句はこの年六月岐阜に着いてからの作たることは明らかであろう。なお、『笈日記』岐阜部の冒頭には、右の真蹟懐紙の内容が全文紹介されている。「画讃」とあることや漢字仮名の表記上の相違はあるが、支考は現存真蹟に拠ったものと思われる。『蝶姿』（助然撰、元禄十四年刊）の前書の誤りは言うまでもない。

已百のあたたかいもてなしを謝して、ここに長く逗留したいという意をのべた挨拶句である。「あかざ」は庭前の属目であるが隠閑の情があり、これが伸びて杖になる秋の頃までも、と趣向している。それを杖ついて又旅立とうというので、旅への思いと共に老情も感ぜられよう。挨拶句としては上乗の出来である。

喜三郎何がしは、いなば山のふもとに閑居をしめて、納涼のためにたび〱まねかれ侍しかば

401 城跡や古井の清水先とはむ（真蹟懐紙）

笈日記・泊船集・蕉翁句集

夏季（清水）。

語釈 **○喜三郎何がし** 「喜三郎何某（きさぶろうなにがし）」。底本とした真蹟懐紙を所蔵する松橋家の祖松橋喜三郎で、岐阜富茂登（ふもと）村（現岐阜市内）の庄屋と伝えられる。「何がし」は苗字を強いて書かず、おぼめかした表現。既出（Ⅱ*267*前書）。**○いなば山のふもと** 「稲葉山（いなばやま）の麓（ふもと）」。「いなば山」は、岐阜の町の東、長良川の南岸に聳える金華山の別称。標高三百二十八メートル余、平地から崛起して、けわしい山容を呈し、山上からは濃尾平野を一望することが出来る。戦国末期斎藤道三が此処に城を築き、尋いで織田信長も本拠地とした。「麓に細き流を渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして八幡宮たゝせたまふ」（「幻住庵記」）「Fumoto.」（『日葡辞書』）。**○閑居をしめ**

て「閑居を占めて」。「閑居」は、しずかな住居の意で、隠宅などをいう。「居を占む」は、家を建てて其処に住むこと。山麓の梶川町に松橋家の別宅があった。「トリハ林ヲネガフ。鳥ニアラザレバ其ノ心ヲシラズ。閑居ノ気味モ又ヲナジ。スマズシテ誰カサトラム」(『方丈記』)「Canqio, Xizzucani iru.」(『日葡辞書』)。○**納涼**「ダフリヤウ」。暑中物蔭に入り、また風通しのよい所で涼むこと。「納」は入れる意で、「ダフ」は漢音である。『日葡辞書』に「Dŏreô.」の語はあるが、「Nŏreô.」は見えない。「夏日の納涼は扇一本にして世上に交る」(『続猿蓑』下、支考発句「帷子の」前書)。○**たび〱まねかれ侍しかば**「度々招かれ侍りしかば」。「哥仙あるは一折など度〻に及」(『笈の小文』)「Tabitabi. I, dodo.」(『日葡辞書』)。○**城跡**「シロアト」。前記稲葉山にあった斎藤氏や織田氏の城跡をいう。関ヶ原の戦の後、慶長七(一六〇二)年に廃城となった。「東に城跡の山ふかく初茸狩せし人も、皆遊興にはあらず」(『西鶴織留』巻五ノ三)「Xiro,」(『日葡辞書』)。○**古井の清水**「古井の清水」。城跡に清水の湧く古い井戸があるのをいう。築城には何よりも水の手が肝要だから、そういう井があるのは自然で、稲葉山城にも有名な「古井」があったのであろう。「清水」が夏の季語になる。既出(Ⅱ295)。「借はぐる松よ古井よ冬日向」(一茶『享和句帖』)「Furu-i. Furui inomoto.」(『日葡辞書』)。○**先とはむ**「先づ訪はむ」。何よりも先に尋ねよう、の意。案内人に訊こう、と解するのは非。「芭蕉庵のふるきを訪」(『猿蓑』巻四、曲水発句「菫草」前書)。

大意　興亡の歴史を思わせる城跡にやって来た。折からの暑さ、先ず清水の湧く古井を訪ねて、昔をしのぶよすがともしよう。

考　「岐阜山にて」(『笈日記』)「岐阜山」(『泊船集』『蕉翁句集』)等の前書がある。芭蕉が夏に岐阜あたりに居たのは貞享五年六月であり、五日にはまだ大津に居て「皷子花の」(Ⅱ393)の句を詠んでいるから、岐阜滞在はそれ以後の事である。

斎藤氏織田氏など戦国の武将の拠った城跡に立った懐古の情が発想の中心になっている。「古井の清水」を採り上げた芭蕉の胸中には、「いにしへの野中のし水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ」(『古今集』巻十七、よみ人しらず)や、

いづみのぬしかくれて、あとつたへたりける人のもとにまかりて、いづみにむかひてふるきを思ふと云事を人〻よみけるに

すむ人の心くまるゝいづみかなむかしをいかにおもひいづらん

という『山家集』所収の西行歌（『西行物語』にも同趣の歌文が見える）が浮んでいたであろう。懐古の情と共に、「すむ人の心くまるゝ」という余意によって、亭主への挨拶にもなるのである。「清水」は、納涼にも恰好の道具立てであった。

落梧何がしのまねきに應じて、いなばの山の松の下涼して、長途の愁をなぐさむほどに

402 山かげや身を養む瓜ばたけ　（杉山氏蔵真蹟懐紙）

いつを昔・笈日記・泊船集・蕉翁句集

岐阜

山陰に身を養ん瓜ばたけ　（天理図書館蔵真蹟懐紙写）

夏季（瓜）。

語釈 ○**落梧何がし**　「落梧（らくご）」は安川氏、通称助右衛門。岐阜本町で屋号を万屋といった小間物雑貨を扱う富商で、俳諧を嗜んだ。貞享四年十一月末、同じ岐阜の俳人蕉笠と共に名古屋滞在中の芭蕉を訪うて岐阜への来遊を請い、翌年六月にそれが実現したのである。撰集刊行の志があったが果さぬうちに元禄四（一六九一）年五月十三日に歿した。享年未詳。『笈日記』（元禄八年刊）岐阜部の末に、文考が「瓜畠集」と題して落梧の撰集の一部を紹介しており、その最初にこの「山かげや」の句文が見える。「何がし」は、前の「城跡や」の句の条に既出。○**まねきに応じて**　「招（まね）きに応（おう）じて」。「勅定なれば、めしに応じて参内す」（『平家物語』巻四）「Vôji, zuru, ita.」（『日葡辞書』）。○**いなばの山**　「稲葉（いなば）の山」。岐阜の金華山の異称。前の「城跡や」の句の条参照。○**松の下涼して**　「松（まつ）の下涼（したすゞ）みして」。松の下で涼んで暑さを凌ぐこと。「下涼」は既出（Ⅰ*62*）。○**長途の愁をなぐさむ**　「長途（ちやうと）の愁（うれひ）を慰（なぐさ）む」。「長途の愁」は、長い旅によって生じた憂鬱な気分、旅愁。「長途」は既出（Ⅰ*215*前書）。その愁を穏やかに和ませる、晴れやかにす

るというのが「なぐさむ」である。他動詞だから「なぐさむる」とありたいところ。○**山かげ**「山蔭(やまかげ)」。山の傍で、その蔭になった土地をいう。「山陰や猿が尻抓く冬日向　コ谷」(『続猿蓑』下)「**Yamacague.**」(『日葡辞書』)。○**身を養む**「身(み)を養(やしな)はむ」。身体を元気に保とう、という意。「次に医術を習べし。身を養ひ、人をたすけ、忠孝のつとめも、医にあらずはあるべからず」(『徒然草』百二十二段)「**Yaxinai, ô, ôta.**」(『日葡辞書』)。○**瓜ばたけ**「瓜畠(うりばたけ)」。瓜を植えた畠。「瓜」は夏の季語である。既出(Ⅱ*293*)。「うり畠が人どをひ所じや程に、苦しうあるまひかと存る。取にまいらふずる」(狂言「瓜盗人」)「**Vribataqe.**」(『日葡辞書』)。

大意　ここは山蔭の閑静なお宅。暫く滞在して瓜畠の瓜など御馳走になり、旅疲れの身に元気をつけましょう。

考　『笈日記』と『蕉翁句集』の前書は、本位句の底本とした真蹟懐紙と殆んど同じで、『笈日記』が真蹟に基づき、『蕉翁句集』がそれを承けたものと認められる。『いつを昔』と『泊船集』の前書は「美濃に入て」となっている。夏岐阜に居たのは貞享五年で、杉山氏蔵の真蹟には「石井の水にあらふかたびら」という落梧の脇も書かれて「貞享五年」と年記があり、同年六月滞在中の揮毫と思われる。

天理図書館蔵の真蹟写しは、前々の句も含む一連のものであって、前述したように尾張鳴海での執筆と推定されるので、「山陰に」は一応後案ということになる。後に「に」と改めたかも知れないが、誤筆の可能性も否定し難く、この孤立した所伝に大した意義はあるまい。「山かげや」は一見三段切れのように見えながら、悠揚たる調子は、この方に寧ろ生かされている。

落梧の閑居を賞め、瓜に身を養おうといって厚遇に甘える気持を述べた挨拶の句である。「瓜ばたけ」は勿論実際にあったのでもあろうが、「真桑瓜」の名の出た真桑村も近いとあって、恰好の道具立である。抑々瓜は、邵平が長安城東に瓜を作ったとか、呉帝孫権の祖孫鍾が三人の仙人に瓜を馳走したとかいう話があって、隠逸と縁の深いものであった。安藤次男氏は、この句の表現について、

　句は「山陰に身を養はん瓜畠」と、即物ふうに作り直せそうで直せまい。休むべき場

所をえらび、見つけて一息入れる、と伝えるために三句（上・中・下）を疎句気味に仕立てた間の持たせ方に一工夫があり、この「や」はみごとな暗喩的効果だ。（『芭蕉発句新注』）

と述べておられる。但し、疎句仕立とはいっても、「瓜ばたけ」が「山かげ」にあることは自明なので、暗喩という程ではあるまい。ただ「や」によって如何にも寛いだ和やかな気分が味わわれ、それが「身を養む」という飾らない表現につながって行くところが、他に言い換えようのないこの句の取柄であろう。

美濃ゝ國にて辰のとし

403

またたぐひ長良の川の鮎鱠　（己が光）　—　泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

名にしあへる（ママ）鵜飼といふものを見侍らむとて、暮かけていざなひ申されしに、人々稲葉山の木かげに席をまうけ、盃をあげて

又やたぐひ長良の川の鮎なます　（笈日記）　—　蕉翁句集草稿

又類ひながらの川の鰷なます　（蓬壺集）

夏季（鮎）。

語釈　**○美濃ゝ国**　「美濃の国」。今の岐阜県南部の旧国名。「ゝ」は仮名の「の」を書くべきところだが、上の「濃」と同音なので、反復符を用いた。**○辰のとし**　「辰の年」。貞享五年の干支は「戊辰」である。**○またたぐひ長良の川**　「又類長良の川」。長良川は、岐阜県北西部の大日ヶ岳に源を発し、濃尾平野を流れて、三重県の桑名市東部で木曾川に並行して伊勢湾に注ぐ川。「類無からむ」を言い掛けた。「浦わの眺まで、げにたぐひなや面白や」（謡曲「玉葛」）「Taguy.」（『日葡辞書』）。**○鮎鱠**　「アユナマス」。夏の川魚の代表鮎の料理法の一。鮎を割き、骨を抜いて刻み、蓼酢をつけて食べる。「鮎　夏也。若鮎は春也。さび鮎・おち鮎は秌也。鮎

の子は春也。千鮎・々の鮨等は雑なり。……うるか、鮎のわたの名也。雑也」（『御傘』）「鮎なます藍（あゐ）より青き蓼（たです）酢哉　徳元」（『毛吹草』巻五）「Ai. I, ayu.」「Namasu.」（『日葡辞書』）。

大意　又と類はなかろうよ。この長良川の鮎膾のおいしさは正に絶品だ。

考　『笈日記』の前書は支考の文であるが、同書の岐阜部のうち貞享五年夏の作を録した中にあり、『己が光』（車庸撰、元禄五年刊）の前書とも一致するので、六月岐阜滞在中の句と推定される。句形の異同については、『笈日記』所載の形が原拠に忠実ならばこれが初案、『己が光』が再案であろう。「や」を入れるよりも無い方が「長良」の掛詞へのつながりが円滑になるように思われる。『蓬壺集』（竹夫撰、宝永三年刊）の「鯈」は、正しくは「はや」と訓む字ながら、これで「あゆ」と訓ませるつもりなのであろう。

有名な長良川の鵜飼は、岐阜に行っての大きなお目当てだったらしい。芭蕉を待ち迎えた人々のもてなしに、愉快な一夕を過したようである。この「鮎膾」は、鵜の捕ったものをそのまま調理したものだから、美味が一層引立ったことは想像に難くない。快く酔って興に乗った気分が、はずむような句の調子に反映している。勿論その軽い調子が人々への挨拶にもなっているのである。

404

美濃ゝながらがはにて、あまたの鵜をつかふをみにゆき侍りて

おもしろうて頓てかなしき鵜舟哉　（出光美術館蔵真蹟懐紙写）

おもしろうやがてかなしき鵜舟かな　（初蝉）

面白うやがてかなかるゝ鵜ぶねかな　（菊の香）

おもしろくてやがてかなしき鵜飼哉　（橋立案内志追加）

天理図書館蔵真蹟懐紙写・あら野・雀の森・渡し舟・伏見氏旧蔵真蹟懐紙・真蹟短冊・真蹟集覧・笈日記・古蔵集・菊の香・泊船集・青莚

俳諧問答

面白うてやがて悲しき鵜飼哉　（蕉翁句集草稿）――蕉翁句集

夏季（鵜舟）。

語釈　○**美濃ゝながらがは**　「美濃の長良川」。既出（Ⅱ*403*）。○**あまたの鵜をつかふ**　「数多の鵜を使ふ」。所謂「鵜呑み」をする鵜の習性を利用して鮎を捕る漁法をいう。「或説に云、岐阜長良の鵜飼、六月暑を避け納涼の為に、近国より来て見物す。所謂上川七艘下川七艘とて、舟数十四艘なり。……舟一艘に鵜十二羽、鵜遣一人、舳当一人なり。舟の舳先に鉄網を下し篝火を焼く。……月の入より舟を下し、月夜の間は遣はず。鵜遣に腰蓑と云ふをかけ、わき笠を着る」（『年浪草』）「連あまた待せて結ぶし水哉　文瀾」（『あら野』巻三）「いつも月の程はこの御堂に休らひ、月入りて鵜を使ひ候」（謡曲「鵜飼」）「**Fito amata. I, amatano fito.**」「**V. i. Vnotori.**」「**Fitouo tçucô.**」（『日葡辞書』）。○**みにゆき侍りて**　「見に行き侍りて」。○**おもしろうて**　興ずる気持が盛んなさま。既出（Ⅰ*185*）。○**頓てかなしき**　「頓て悲しき」。そのうちに間もなく、物悲しく寂しい気分になる、というのである。○**鵜舟**　「ウブネ」。鵜を使って鮎を捕る舟。「鵜飼」に準じて夏の季語になる。長良川では舟を用い、鵜匠が鵜縄の一端を持って鵜を使い、専ら鮎をとるが、季節や自然環境によってさまざまの魚を捕り、渓流では舟を用いない徒歩遣い（徒歩鵜）が行われ、縄を使わずに鵜を自由に活動させる放ち鵜や、張った網の中へ魚を追い込ませる等、いろいろな漁法があったが、今は長良川の外は殆んど廃れた。「鵜川　夏也。鵜つかふ事也。はなれ鵜は雑也。人につかはれぬ鵜の事也。夜川たつなどは鵜つかふ事也」（『御傘』）「鵜と計は雑にも成べきにや。作意按べし。鵜舟、鵜人、鵜縄など鵜をつかふ心、皆夏也」（『滑稽雑談』）「先ふねの親もかまはぬ鵜舟哉大津淳児」（『あら野』巻三）。

大意　目の前で鵜を使う舟が漁をする時はこの上なく面白いけれど、やがて舟影が遠ざかると、悲しく寂しい思いになることだ。

考　「鵜飼」（天理図書館蔵真蹟懐紙写）「おなじ所にて」（『あら野』）「美濃岐阜にて」（『雀の森』）「ぎふの庄ながら川のうかひとて、よにことぐ〱しう云のゝしる。まことや其興の人のかたり伝ふるにたがはず、浅智短才の筆にもことばにも尽べきにあらず。心しれらん人に見せばやなど云て、やみぢにかへる此身の名ごりおしさをいかにせむ」（伏見氏旧蔵真蹟懐紙）「美のゝながらといふかはに、あまたの鵜をつかふをみて」（『真蹟集覧』）「鵜舟も通り過る程に帰るとて」（『笈日

記』）「岐阜にて」（『泊船集』『蕉翁句集』）等の前書があり、凡て貞享五年六月岐阜での作たることを示している（『あら野』の前書は、この句の前に「岐阜にて／おもしろうさうしさばくる鵜縄哉」とある貞室の句の前書を承けており、「おなじ所」は即ち岐阜を指す）。

『初蟬』（元禄九年刊）で「おもしろう」という句形を掲げた風国は、翌年の『菊の香』で「おもしろうて」の形に訂したが、それに付加して、

　　此句晋子が所持の翁の自筆には、

　　面白うてやがてなかるゝ鵜ぶねかな

　　　と侍りぬるよし、晋子より申こしぬ。

と別の異形を紹介したので、当時から問題になった。これを採り上げた許六は『俳諧問答』の「俳諧自讃之論」（元禄十年頃稿）の中で、

　　おもしろうやがてかなしき鵜舟哉　　翁

　　此句五文字に、て文字あり。則校考に見えたり。其上晋子が方より申こし侍るなどまで書侍るならば、委敷あら野集を見せたし。此句あら野に出て、一天下三歳の童子までおぼえたる句也。

と述べている。右にもいう如く、「なかるゝ」という句案は甚だ疑わしい。天理図書館蔵真蹟懐紙写にあるように、鵜飼見物の直後の名古屋・鳴海辺で芭蕉は既に「悲しき」の形を書いており、「なかるゝ」が信じ得るものならばそれ以前の揮毫ということになるが、其角がどのような経路でそういう真蹟を手に入れたのか、不自然の感を免れまい。句は伏見氏旧蔵真蹟の前書に徴しても、謡曲「鵜飼」の詞章「後の世も忘れ果てて面白や」「思ひ出でたり月になりぬる悲しさよ」等に依拠して作られたことは明らかであって、果して「なかるゝ」のような句形を案じたかどうか、その事からして既に問題であろう。大胆な想像ながら、風国の軽率な性格を見すかした其角のいたずらではないかと

いう志田義秀博士の説まである程で（『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』）、「なかるゝ」という句形の信憑性は極めて覚束ないものと考えざるを得ない。今一つ、下五を「鵜飼哉」とした形については、土芳の『蕉翁句集草稿』に、

此直に聞句也。阿羅野は鵜舟哉と有。初禅(ママ)には、面白うやがてと有。

と、出典を照合しながら芭蕉から直接聞いたという句形を掲げており、『蕉翁句集』も勿論これに基づいて同じ句形を収めたものと認められる。しかし、これ亦孤立した所伝であるし、本位句の底本とした真蹟懐紙写が貞享末期の筆蹟で岐阜での揮毫と見られているところから、伊賀で土芳が聞いたとしても、奥の細道の旅以後のことになって、そういう頃に余り変り栄えもしない句案を人に語るということは不自然の感を免れない。篤実な土芳の所伝とはいえ、軽々には信じ難いものであろう。『橋立案内志追加』（晩山撰、正徳三年刊）の句形も誤伝と見られ、結局真蹟類や『あら野』の句形だけが信頼し得るものと見られるのである。

舳先に篝火を焚いた鵜舟が目の前で賑やかに魚を捕っている間は、興も盛んにまことに面白いが、やがて舟が下流へ遠ざかり、篝火も疎らになって来ると、何ともいえない寂寥感——悲哀の情が襲って来る。盛んに鵜を使っている最中から、作業を終えた後静寂にかえって行くまでの時間の経過に伴なう感情の推移を叙した句である。芭蕉の脳裏に謡曲「鵜飼」があったことは、前掲真蹟の前書にも明らかに見えている。殺生禁断の渓流で鵜飼をして魚を捕った為に殺された漁夫の亡霊が、ワキの僧に鵜を使って見せる曲である。

しめる松明ふり立てて、藤の衣の玉だすき、鵜籠を開き取り出し、島つ巣おろし荒鵜ども、此河波にばつと放せば、おもしろの有様や。底にも見ゆる篝火に、驚く魚を追ひまはし、かづき上げすくひあげ、隙なく魚を食ふ時は、罪も報も後の世も忘れはてておもしろや。……不思議やな篝火の燃えても影の暗くなるは、思ひ出でたり月になりぬる悲しさよ。鵜舟のかゞり影消えて、闇路に帰る此身の名残をしさを如何にせん。

というあたりを思い浮べているのだ。そして、この句の特色は、表現の骨組として自らの主観をあらわす語を列ねて

いる点にあろう。即ち半田良平氏が、

この句は純然たる主観を抒べたものである。眼前の光景を描かうとせずに、その光景の変転につれて推移して行く自分の心持を端的に抒べ来つたのである。初句を『おもしろうて』と六字音にして悠揚迫らざる心持を現はし、それを承けて、『やがて』といふ時間的休止をおき、『かなしき』といふ多少切迫した心持に移つて、座五で『鵜舟かな』と咏嘆して居る。この心持の推移が、調子の上に面白く打ち出て居るところが、この句の生命である。

（『芭蕉俳句新釈』）

と述べられたのは動かぬところである。一方、山本健吉氏は、この句の評価について否定的な見方を述べておられる。即ち、

はっきり言えば、この句は失敗作である。謡曲の詞章に結合することによって、現実の感情がより高い詩的表現に達しようとして、達しそこなった作品である。それは一つの詩的情緒として、あまりにも『鵜飼』が完璧なものであったために、全面的にそれにもたれかかることによって、その情緒を概念的に飜訳するに止まったからだ。その結果、表現されたものは、かえって芭蕉のあまりにもなまの現実感情に逆転してしまった。謡曲の想詞によりながら、中核をなすものは鵜飼の実感だ（加藤楸邨）というのは、この句を賞揚する理由にはならない。むしろその実感を昇華させる契機を謡曲の想詞に見出だしながら、表現されたものが現実の感情に過ぎなかった点に失敗の原因がある。この句の詩因は、単に現実の感情の等価物たる以上のものを目指しながら、つまり個性的なものを離脱する機会を見出だしながら、結果としては個性的な経験のこちら側に止まってしまった作品である。悪い意味で、芭蕉的な作品の一例であるが、後の月並流や平面写生句に較べれば、まだ数等優れたものである。

（『芭蕉その鑑賞と批評』）

と論ぜられたのであるが、この山本氏の評価はかなり問題であろう。私は、

……「おもしろうてやがて悲しき」とは、加藤氏の言うごとく、「謡曲の想詞」による表現であっても、決して「概念的」な「翻訳」などではない。また、一句の主題は、もともと眼前の「現実」の「鵜飼の実感」であって、決して不本意な「逆転」などではない。表現するところは、あくまでも眼前の「現実」の「鵜飼の実感」でありながら、「謡曲の想詞」を借用し、更に、その詞章を裁ち入れた前文を付することによって、一層その情緒を深めているのである。その点を理解せずして、「個性的な経験のこちら側に止まってしまった作品」と評するのは、無理解の極まれるものである。(『俳句に見る芭蕉の藝境』)

という富山奏博士の反論に全く同感である。読者はこの表現によって、芭蕉の現実の悲涼感と、謡曲の持つ哀感とを両つながら感受し得るのであって、「良い意味での芭蕉的な作品」の典型といえよう。

更に、下敷どした謡曲「鵜飼」の主題たる罪業観無常観も手伝って、この句は現実の鵜飼の景情を超えた観相的な味わいを持つに至っている。つまり、歓楽の後の悲哀、人生万般の寂寥感といったものにまで読者の思いは及ぶのである。既に指摘されているように、この曲を踏まえた鵜飼の句は、「面白さやる瀬もなみの鵜川哉　久任」(『ゆめみ草』)「面白や鵜川につみを忘水　良重」(同上)「おもしろうさうしさばくる鵜縄哉　貞室」(『あら野』)等、貞門時代からあったけれども、これらは凡て言葉の上の興に終った次元の低い作品だった。芭蕉の句のような複雑な味わいは求め難い句ばかりである。観相的な余意余情を余計なことのように見る向きもあるが、これは謂わば謡曲を背景にした必然でもあり、この句について見逃してはならない点であろう。この句が著名なのは、そうした味わいにも依るところが多い。最後に、土芳の『三冊子』に見える、この鵜飼見物の折の挿話を挙げておく。

師、一とせ岐阜鵜飼見之時、鵜尉(ママ)一人に拾二羽づゝ、舟に篩して、其あかりに是をつかふ。十二筋の縄たて横にもぢれて、さばきむつかしき事を、安く是をなす。鵜尉に此事を尋侍れば、先もぢれぬよりさばきて、なまもぢれ成るものを又さばく。むつかしくもぢれたるもの、ひとりさばくるといへり。万にこの心はあるべしと也。

（わすれみづ）

おなじところ水樓にあそびて

405　此あたりめにみゆるものは皆涼し　（出光美術館蔵真蹟懐紙写）

天理図書館蔵真蹟懐紙写・真蹟集覧・曠野後集・笈日記・泊船集・今日の昔

此あたり目に見ゆるもの皆涼し（本朝文選）

夏季（涼し）。

語釈　○**おなじところ**　「同じ所」。本位句の底本の前には「おもしろうて」（Ⅱ*404*）の句があり、その前書「美濃ゝながらがはにて」を承ける。長良川のほとりの岐阜の町を指すのである。「おなじ所にて」（『あら野』巻三、芭蕉発句「おもしろうて」前書）。○**水楼にあそびて**　「水楼に遊びて」。「水楼」は既出（Ⅱ*392*）。○**此あたり**　「此の辺り」。「君火をたけ」（Ⅱ*267*）の前書参照。○**めにみゆるものは**　「目に見ゆる物は」。「花は賤の」（Ⅰ*5*）の句参照。○**皆涼し**　「涼し」は夏の季語。既出（Ⅱ*297*）。

大意　川に臨んだこのあたりから目に見えるものは、すべて涼味に満ちている。まことに結構なお住居だ。

考　「水楼の眺望」（天理図書館蔵真蹟懐紙写）「其かはにのぞめる水楼有」（『真蹟集覧』）「河辺眺望」（『曠野後集』）「十八楼の記　笈日記に見えたり」（『泊船集』）等の前書があり、『笈日記』『今日の昔』（朱拙撰、元禄十二年刊）『本朝文選』等には、「十八楼ノ記」と題した左の如き文が収められている。

みのゝ国ながら川に望て水楼あり。あるじを賀嶋氏といふ。いなば山後にたかく、乱山両（西）に重りて、ちかゝらず遠からず。たなかの寺は杉の一村にかくれ、きしにそふ民家は、竹のかこみのみどりも深し。さらし布所〲に引はえて、右にわたし舟うかぶ。里人の行かひしげく、漁村軒をならべて、網をひき鈞をたるゝをのがさま〲も、たゞ此楼をもてなすに似たり。暮がたき夏の日もわするゝ斗入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝかゞ

り火の影もやゝちかく、高欄のもとに鵜飼するなど、誠にめざましき見もの也けらし。かの瀟湘の八のながめ、両湖の十のさかひも、涼風一味のうちに思ひためたり。若此楼に名をいはむとならば、十八楼ともいはまほしや。
（『笈日記』による）

右の文の後に「此あたり」の句があり、「貞享五仲夏」と年記が見える。芭蕉が長良川のほとりに夏居た時といえば貞享五年に当ることは確かであるが、「皷子花の」（Ⅱ393）の句の前書によって明らかなように、六月五日まで大津に居たことは疑い難いので、岐阜滞在は「仲夏」（五月）ではなく、どうしても六月でなければならない。この年記は恐らく芭蕉の記したものではなく、支考がおおよその推定で付したに過ぎないのではあるまいか。主人の「賀嶋氏」は通称善右衛門、岐阜の中河原新田（現岐阜市玉井町）で油屋を営んでいたという。鷗歩と号して俳諧を嗜み、『あら野』等に句が見える。生歿年未詳。

この句は最後の「涼し」の語が眼目であって、強く言い切ったさわやかさが生命である。しかし、句だけでは、別段くわしい描写があるわけでもなく、この語は余りにも観念的に感ぜられる。この点は孟遠の『秘蘊集』（享保年間成）に、

此発句ばかり聞時は、涼の題とみゆれば、皆暑し共、又皆寒しとも動く。ヶ様の句を聞て出傍題をいふやから世上に多し。此句は美濃長柄川にて十八楼の記を書給ふ其文の留りに置給ふ。故に涼しの詞、能居りたり。是草の格の句也。能〱熟吟して、真・草の境をしるべし。

とあるように、「十八楼ノ記」の文の委しい描写と映発してはじめて生きて来る底のもので、見掛けは無造作でも、そういう用意が施されているのである。「記」のような委曲を尽した叙述でなくとも、「水楼」とか「河辺」とか、この句の環境を示す前書があることによって「涼し」は生かされるといえよう。加藤楸邨氏の『芭蕉全句』が、「十八楼ノ記」に対して反歌のような役目を果していると見たのは良い。中国の瀟湘八景や西湖十景を併せた如き河辺の水

陸の佳景が「皆涼し」の裏付けになっており、それによって観念的な「涼し」に詩語としての力が出て来るわけだ。主人に対する挨拶の気持が籠められていることは言うまでもない。
「めにみゆるものは」は字余りであるが、「は」がないと中七が軽くなって据りが悪い。この「は」は謂わば必須の措辞であって、これを欠く形は信じ難いものとなろう。

天理図書館蔵真蹟懐紙写・定本芭蕉大成所載真蹟短冊・俳人真蹟全集所収真蹟短冊・真蹟集覧・笈日記・泊船集・焦翁句集

406　夏きてもたゞひとつばの一葉かな　（出光美術館蔵真蹟懐紙写）

東海道

山路にて
なつ來てもたゞひとつ葉の一つ哉　（あら野）

夏季。

語釈　○**夏きても**　「夏来ても」。○**ひとつばの一葉**　「一つ葉の一葉」。「ひとつば」は、ウラボシ科の多年生羊歯類植物。温暖な地方の岩の上や樹蔭に群生する。葉は細裂せず、長楕円形の一枚だけなのでこの名があるが、根茎から何枚も出ている為、それが集まったところは甚だ賑やかに見える。葉は厚く、表は濃緑なのに対して、裏は胞子が出来ると一面赤褐色になる。常緑ながら、新葉を生ずる季節によって後世には夏の季語とされるが、この句と同時代のものには季語の例は見当らないようである。「一葉」は、一枚の葉の意。既出（I123）。「地誹諧には、……岩間と有に　苔　菅　田を付るは連哥、おもと　一つ葉　蛎　蚫等誹諧付也」（『毛吹草』巻二）「腰かくる庭の岩かどひやめきてながめすてしはをもとひとつば」（『毛吹草』巻七）「Fitotçuba.」（『日葡辞書』）。

大意　夏が来ても、一つ葉は葉を繁らせるでもなく、ひっそりと一枚の葉のままであることよ。

考　『真蹟集覧』には「ひとつばといふ草を」と前書があり、『東海道』（何狂撰、享保六年刊）には、所載の孟遠の句「一ッ葉や竹の子の世を眠らん」の前書に、「夏来ても只一ッ葉のひとつ哉と先師翁の見出サれたる一ッ葉をとぶらひ

て」と引用してある。本位句の底本とした真蹟懐紙写には、岐阜での鵜飼見物の折の句や十八楼に招かれた時の句の後に記しており、『笈日記』も岐阜滞在当時の作として収めているので、貞享五年六月の作と推定して可い。己百の住持する妙照寺庭前の奇岩絶壁に一つ葉の叢生するのを見て詠んだとも伝えられる（『日本歴史地名大系』21）。

恐らく稲葉山の岩蔭などにひっそりと生えている一つ葉を見出して成った句であろう。夏の盛りには、他の植物は思いきり枝を伸ばし葉を繁らせているのに、一つ葉だけはそうしたこともなく、唯一葉の姿である。さびしげなさまに哀れを催す一方では、傍目もふらずに本性に生きる姿に興さえ覚える。この心の動きは「山路来て何やらゆかしすみれ草」（I 236）と同じものであり、目立たぬ物に寄せる作者の思いがなつかしい。近世の注には諷戒の意や隠逸の観相を強調する説が多いけれども、余りその方に傾くと、「ひとつば」は譬喩に過ぎなくなってしまう。根本は植物のひそかな姿に由来する興であって、それに芭蕉の抱懐する隠逸の情が寄せられているのだ。

『あら野』の「一つ哉」という句形について、『泊船集』には「あら野には、一葉を一ツかなとあやまりぬ」と注してある。山本健吉氏の『全発句』のように「一つ哉」の方が良いという見方もあるが、真蹟類が凡て「一葉」であり、「ひとつば」の名との間に生ずる興は「一葉」の方が強く出るから、やはり『あら野』の誤りと認められよう。

千子が身まかりけるをきゝて、みのゝ國より去來がもとへ申つかはし侍ける

407 無き人の小袖も今や土用干　（猿蓑）

泊船集・去来抄・蕉翁句集

夏季（土用干）。

語釈 ○**千子**　「チネ」。長崎の儒医向井元升の三女、去来の妹に当る。名は千代。千子はその俳号である。京で清水藤右衛門なる

人に嫁したが、貞享五年五月十五日に歿した。享年二十八、九歳か。貞享三年秋、去来と伊勢参りの旅を共にした。「東にし」（Ⅱ260）の句の条参照。○**身まかりけるをきゝて**　「身罷りけるを聞きて」。「身まかる」は、死ぬこと。既出（Ⅱ310）。○**みのゝ国**　「美濃の国」。芭蕉は当時美濃の岐阜に滞在していた。○**去来がもと**　「去来が許」。「去来」は向井氏、名は兼時、字は元淵、通称を喜平次・平次郎といった。向井元升の次男。慶安四（一六五一）年長崎に生まれたが、八歳の時父と共に上京、儒者の兄元端の業を扶け、天文暦数の知識を以て堂上家に出入りしながら隠士として生涯を終った。蕉門との縁は貞享初年から其角を通じて始まり、芭蕉と親近して、元禄四年には凡兆と共に代表的撰集『猿蓑』の撰者となった。篤実な性格によって芭蕉の道統をよく伝え、『去来抄』等の著作を残した。その住所は、林鴻の『誹諧京羽二重』（元禄四年刊）に「中長者町堀川東へ入」（現京都市上京区）とある所であろう。なお「東にし」（Ⅱ260）の句の条参照。宝永元（一七〇四）年九月十日歿、享年五十四。○**申つかはし侍ける**　「申し遣はし侍りける」。悔み状の中に悼句を記して送ったのである。「明るわか葉の比、文鱗に申つかはしける」（『あら野』巻三、荷兮発句「髭に焼」前書）。○**無き人**　「亡き人」即ち亡くなった千子をいう。「捨られてくねるか鴛の離れ鳥　羽笠　火をかぬ火燵なき人を見む　芭蕉」（『冬の日』）。○**小袖**　「コソデ」。袖口をせまく仕立てた普段着。古くは装束の下に用いたが、後に上衣となり、絹で製したものもあった。「虫干に小袖着て見る女かな　冬文」（『あら野』巻七）「Cosode.」（『日葡辞書』）。○**今や**　「や」は、疑問。「あふさかの関のし水に影見えて今やひくらんもち月のこま」（『拾遺集』巻三、貫之）「Ima.」（『日葡辞書』）。○**土用干**　「土用干し」。夏の土用中に衣類や書物を外気にさらして虫干しすること。夏の季語。既出（Ⅰ72）。

大意　亡くなった人の着ていた小袖も、今頃は土用干しされているでしょうか。

考　『泊船集』の前書は、『猿蓑』のそれの「きゝて」を欠くだけで、『蕉翁句集』も『猿蓑』と略々同文で出しており、貞享五年六月岐阜での作と推定される。芭蕉は四月末から五月にかけての京滞在中に去来に会っていると思われるが、恐らく千子の死んだ五月十五日以前に京を去り、岐阜に至ってはじめて彼女の訃を聞いたのであろう。

『去来抄』には素堂の句「行ずして見五湖いりがきの音をきく」と並べて芭蕉の句を掲げ、

先師の句は、予妹千子が身まかりける比、みのゝ国よりおくり給ふ句也。共にその事をいとなむたゞ中ニ来れり。……一気の感通自然の妙応、かゝる事も有ものとしらるべし。（同門評）

と述べている。土用干しには長く蔵われていたものが取り出されて、こんなものがあったかと思い出を誘われることが多い。折柄周囲に見られる夏の行事から発想して、「無き人の小袖も」と思い遣ったところに、千子への哀悼と兄去来へのいたわりの思いが、穏やかにあらわれている。亡くなってやや時を経た為もあろうが、切実な情よりは、自然な心の動きが言い取られた句といえよう。「人情詩思双全の句」（内藤鳴雪『評釈』）とは正に至言であって、「その事をいとなむたゞ中ニ」この句を貫った去来の感愴の程も思われる。悼句の至醇のものと評してよい。

その比ならん、落梧のぬしおさなき者を失へる叓をいたみて

408 もろき人にたとへむ花も夏野哉　（笈日記）

泊船集・蕉翁句集

夏季（夏野）。

語釈 **○その比ならん**　この前書は『笈日記』の撰者支考の文である。この前に鵜飼見の時の芭蕉の句や、「落梧亭」と題した「蔵のかげかたばみの花めづらしや」の荷兮発句に始まる落梧・芭蕉との三物があり、それを承けて「その比（ころ）」といっているので、貞享五年六月岐阜滞留の頃とする支考の推測を述べているのである。支考はまだ入門以前で、この前後のことをよく知らないところから、推測の形で述べた。**○落梧のぬし**　「落梧」については「山かげや」（Ⅱ *402*）の句の条参照。「ぬし」は「主（ぬし）」で、親愛の情を籠めて添える敬称。既出（Ⅰ *211*）。**○おさなき者を失へる**　「幼（をさな）き者（もの）を失（うしな）へる」。まだ幼年の我が児を死なせてしまった、の意。幼児が病気などで死んだのである。「おさなき」は「をさなき」の仮名ちがい。「此幼き者どもは此所にて生まれ、相続の者にて候ふ程に」（謡曲「唐船」）「ある人子うしなはれける時申遣す」（『あら野』巻七、荷兮発句「あだ花の」前書）「Vosanai.」「Fitouo vxinô.」（『日葡辞書』）。**○叓**　「事」と通用する字。「叓」（「事」の古字）から出たか。**○いたみて**　「悼（いた）みて」。悔みの気持をあらわすこと。「李下が妻のみまかりしをいたみて」（『あら野』巻七、去来発句「ねられずや」前書）「Itamino mono.」（『日葡辞書』）。**○もろき人にたとへむ花**　「脆（もろ）き人（ひと）に譬（たと）へむ花（はな）」。呆気ない人の命に譬えよう花。花も散る時は呆気ないので、譬えになるのである。「む」は仮定

法で、婉曲な感じをあらわす。「御幸に進む水のみくすり　重五　ことにてる年の小角豆の花もろし　野水」（『冬の日』）「竹の子の力を誰にたとふべき　凡兆」（『猿蓑』巻二）「Moroi inochi.」「Tatoye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**夏野**　草茂る夏の原野をいう季語。既出（Ⅰ*167*）。ここは「無し」を言い掛けている。

大意　呆気ない人の命に譬えよう花となく、野にはただ夏草が茂るばかり。まことに哀悼の情に堪えません。

考　『泊船集』にも「此句は追悼の吟也」と注している。『笈日記』には、この句の次に「似たかほのあらば出て見ん一おどり」という落梧の悼句が見え、岐阜滞留当時の吟と推定される。

「花も無し」と言い掛けにする解に対して、加藤楸邨氏は、

それより秋の「花野」に対して、夏野の花が見る人もなく、あわれにしぼむ様と考えたほうがよい。「夏野」が技巧的に使われて充分に生きていない。（『芭蕉全句』）

と述べておられる。掛詞などを嫌う近代感覚が根本にあろうが、古人の表現に関するこうした趣味は、あるがままに認めなければなるまい。「花も夏野」といえば、当然「花も無し」が掛けられているとするのが素直であって、花もない夏野の茂りに、幼児を失った親の心の虚しさが象徴されているのである。哀悼の情はよくあらわれているが、一通りの出来の句に過ぎない。秋になってからの落梧の句「似たかほの」の方が、さすがに親だけに悲しみの情が切実に感ぜられる。

稲　葉　山

409　撞鐘もひゞくやうなり蟬の聲　（笈日記）

泊船集・蕉翁句集

夏季（蟬の声）。

語釈 ○**稲葉山** 既出。「城跡や」（Ⅱ*401*）の句の条参照。○**撞鐘** 「ツキガネ」。撞木で撞き鳴らす鐘。「敲き鉦」に対していう。釣鐘。「撞く鐘」とよむ説もあるが採らない。「常在光院のつき鐘の銘は、在兼卿の草なり」（『徒然草』二百三十八段）「Tçuqigane.」（『日葡辞書』）。○**ひゞくやうなり** 「響く様なり」。反響して鳴るように思われる、というのである。「入相のひゞきの中やほとゝぎす　羽紅」（『猿蓑』巻二）「**Fibiqi, u, ijta.**」（『日葡辞書』）。

大意 全山をとよもすばかりの蝉の声に、麓の寺の釣鐘までも反響して鳴り出すようだ。

考 『笈日記』岐阜部、貞享五年六月の滞在中の句を録した中に見え、年代は明らかである。

句は「蝉の声」を主題としている。稲葉山の杉木立に鳴きしきる蝉の声は、盛夏の趣として印象深く感ぜられたのであろう。稲葉山の麓に寺は幾つかあり、芭蕉の滞在していた妙照寺もその西麓にあった。その寺の鐘も蝉の声に反響して鳴り出すようだと言ったのである。「撞く鐘」とよんで、鐘も鳴っているように取る説もあるが、「撞き鐘」という言葉が耳遠くなった為に生じたらしく、作者の本意ではあるまい。蝉の音の反響によって鐘も鳴り出さんばかりだという意で、「鐘の音も」としなかった理由も、それで納得出来る。そうした形容の仕方や「撞鐘」という日常語（俗語）を用いたところが俳諧なのである。蝉の声を鐘の音に擬したと取るのは良くない。

　斯う云ふ句は、現場にてはひどくよい句のやうに感じるが、あとではもの足らずおもふものである。併し乍ら悪い句ではなからうと思ふ。（『芭蕉句集講義』角田竹冷氏）

という見方は、蓋し適評であろう。

三　日

410　何事の見たてにも似ず三かの月（あら野）　　橋守・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

尾張圓頓寺にて
ありと有譬にも似ず三日の月（真蹟色紙）　　笈日記・泊船集

此比名古屋圓頓寺にて
ありとある見立にも似ず三日の月（知足書留）

何事の喩へにも似ず三日の月（庭竈集）

秋季（三かの月）。

語釈　○**三日**　「ミツカ」。『あら野』巻一、「月　三十句」のうち、「朔日」から「七日」までの月を題材とした句を並べた中の題で、陰暦三日の月をいうことは、句中の語によっても明らかである。○**何事の見たてにも似ず**　「何事の見立にも似ず」。「見たて」は、或る物を他の物に譬えなぞらえること。俳諧では譬喩仕立の句をこの名で呼ぶ。ここは、どのような見立にも似ていない、なぞらえようがない、の意。「風にふかれて帰る市人　芭蕉　なに事も長安は是名利の地　同」（『あら野』員外）「見たて／川岸の洞は蛍の瓦燈かな」（『毛吹草』巻二）「Nanigoto.」「Mitate, tçuru, eta.」（『日葡辞書』）。○**三かの月**　「三日の月」。陰暦三日の月。既出（Ⅱ259）。

大意　三日月の趣は、どのような譬えにも似ていない。なぞらえようもない美しさだ。

考　『笈日記』には「大曾根成就院の帰るさに」、『泊船集』には「大曾根の成就院にて」とそれぞれ前書があり、板本としては元禄二年三月に成った『あら野』初出の句である。詠作の場所として円頓寺と成就院と二つの伝えがあ

るが、円頓寺は名古屋市西区橋詰町にある法華宗中山派の寺、成就院は同市東区大曾根町坂上の同宗身延派の寺（後に了義院と改称）で、何れも名古屋にある。元禄二年春以前に芭蕉が秋の頃名古屋に居た時といえば、貞享五年の七、八月にかけてであった。この句の早い時期の資料たる知足書留は、知足の弟知之の新宅を賀した芭蕉の発句「よき家や雀よろこぶ背戸の粟」に始まる表六句を記した真蹟懐紙の余白に知足が記したもので、新宅の賀のあった七月八日以後数日の間に書かれたものと認められる。つまり、その前書に見える「此比」は、貞享五年七月を意味し、この発句は七月三日に成ったと推定されよう。六月中か或いは七月に入ってから、芭蕉は岐阜を去って名古屋に来たのである。そして七日朝には、名古屋から鳴海の知足亭に入っている。詠作の場所については、真蹟色紙や知足の書留が最も信憑性が高いから、円頓寺とすべきである。『笈日記』や『泊船集』は誤伝とおぼしく、特に前者の前書に「帰るさに」とあるのに留意すれば、これは必ずしも円頓寺とする所伝と矛盾するものではない。成就院からの帰途円頓寺で詠んだとすればよいわけで、『泊船集』の前書は『笈日記』を匆卒に読んだ誤りの可能性があろう。しかし、そう取るにしても、『笈日記』が場所をはっきり書かずに、殊更成就院の名を出したのは紛らわしく、その意図が那辺にあったか理解に苦しむ。やはり成就院での作という別伝があって、支考はその方を信じたのかも知れない。

真蹟色紙は大礒義雄氏が『愛知学芸大学研究報告』第十号に紹介されたもので、知足の書留と共に『あら野』に先立つ句形と認められる。「譬」と「見立」の先後は何れにしても大差はなく、卒かに決し難いが、『あら野』が「見たて」であるから、「譬」を最も早い案と考えておく。土芳は『蕉翁句集草稿』に於いて、

　此句笈日記に、大曾祢成就院の帰さにと有。上の五、ある（ママ）と有見たてとあり。白船（ママ）には、ありとあるたとへにも似ずと有。爰に云るは阿羅野の句也。実をしらず。

と書いているが、『笈日記』の句形を「見たて」とするのは誤りで、同書は明らかに「たとへ」である。これは板本の「とへ」の字体が「立」に見えるところから誤ったのであろう。兎に角『あら野』に収めるに当って「何事の見た

てにも似ず」と改めて治定したことは確かである。越人晩年の撰著『庭竈集』（享保十三年刊）には句の下に「吟人芝響」とあり、「機石は素堂が詞を聞てなき人の面影を思ひ、芝響は翁の句を吟じて松下の塵を恋ふる。ともに其情同じければ、こゝにならべて跡をつぐ」と注して、越人・機石の発句・脇について第三として出している。これは初案と定案の句形を混淆したもので信じ難い。

　三か月のたはめる影を。西方に往生腰とも。勢至腰などもいひなし。山頭のこゆひゐぼしとも。空の海のつりばりとも見たて。宵のまゝ見ゆる心を。ひる出てよるはいるまやう。あさひるいねてよひまどひなどもいへり。

と『山之井』に説くように、三日月の趣は古来いろいろの物に見立てられて来た。しかし今熟々眺めて見ると、今までのどの見立も相応しくは思えない。たとえようもない美しさだといったのである。従来の陳腐な見立にあきたらず、物自体の実相に観入して行く態度が見られないではないが、この句の表現では、どういじっても所詮概念的な説明に堕して、詩としての取柄はない。山本健吉氏は、

　『奥の細道』に「天台止観の月明らかに、円頓融通の法の灯かゝげそひて」とあるように、形而下の譬喩を否定して、寺号そのままの円頓融通の光を見たのであろう。……つまり円頓寺に対する挨拶句である。そうとでも見なければ、こんなつまらない句を作るはずがない。（『芭蕉全発句』）

と述べておられる。

賀新宅

411　よき家や雀よろこぶ背戸の粟　（真蹟懐紙）

真蹟草稿・千鳥掛

はなもゝみぢもなきうらのとまやの秋にしなかはりて

よき家やすゞめよろこぶせどの秋　（真蹟自画賛）　――泊船集・記念題・蕉翁句集

秋季（粟）。

語釈　○**賀新宅**　「新宅を賀す」。鳴海の下里知足の弟三郎左衛門の新しい家の落成を祝った句であることをいう。〔考〕参照。「賀重」（芭蕉真蹟懐紙、和歌「いく春を」詞書）「乙刕が新宅にて」（『猿蓑』巻二、芭蕉発句「人に家を」前書）「Xintacu. Ataraxij iye.」（『日葡辞書』）。○**雀よろこぶ**　「雀喜ぶ」。○**背戸の粟**　「背戸」は家の裏門のことだが、家の裏側の意もあり、ここは後者の場合で、家の裏側に粟畠があるのである。「粟」は五穀の一で、秋の季語。「背戸の畑なすび黄ばみてきりぐ゛す　旦藁」（『はるの日』）「粟稗と目出度なりぬはつ月よ　半残」（『猿蓑』巻三）「Xedo.」「AVA.」（『日葡辞書』）。

大意　本当に良いお住居だ。裏の粟畠は折しもよく稔り、雀が実をついばんだり囀ったりして喜んでいる。

考　「鳴海知足亭」（『泊船集』『記念題』）「ある人の家にて」（『蕉翁句集』）等の前書があり、芭蕉の鳴海関係の資料を集めた知足の『千鳥掛』にあるのによっても、鳴海に於ける作であることは疑いない。芭蕉が秋の頃鳴海に居たのは貞享五年であり、『俳文学考説』所収『知足斎日々記』の石田元季氏の注には、同年七月八日に知足宅でその弟知之の新宅を賀した句とある。本位句の底本とした真蹟懐紙には発句の外に、寂照（知足）・安信（鳴海の本陣寺島家の分家）と共に付けた表六句と、末に知足の記したこの前後の芭蕉発句「初秋や」「ありとある」の二句が見え、別に発句・脇のみを記した真蹟草稿も伝来している（天理図書館蔵）。『記念題』（松星・夾始撰、元禄十一年刊）には第三までを掲げてあるが、第三は露川の作である。貞享五年当時露川はまだ芭蕉に入門しておらず、これは後年彼が別個に付けたものであろう。

典型的な祝賀の挨拶句で、「よき家や」と大らかに打ち出し、周囲の田園の趣を描いて、その中にある新宅のたたずまいを、おのずから浮き出させた。稔りの秋の豊かさが「粟」に端的にあらわされ、全体に明るく朗らかな気分が溢れている。この粟は、落穂や干し散らしてあるものより、畠でたわわに穂を垂れているさまの方が面白い。

下五が「せどの秋」となっている真蹟自画賛は、詠作当初より時期が後れるものらしく、句形の異同も画の趣に合わせた為と思われる。前書に『新古今』三夕の歌の一の定家の名歌「み渡せば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ」を引いており、「せどの秋」は「稔りの秋」の意なのであろうが、大づかみ過ぎて焦点が定まらない。「栗」の方が遥かに良いので、この方を本位句とした。

秋立日

412　たびにあきてけふ幾日やら秋の風　（真蹟集覧）

秋季（秋の風）。

語釈　○**秋立日**　「秋立つ日」。二十四節気の一「立秋」をいい、この日から秋が始まる。「秋たつや中に吹るゝ雲の峯　左次」（『続猿蓑』下）「Aqiga tatçu.」（『日葡辞書』）。○**たびにあきて**　「旅に飽きて」。旅中に日を重ねて、旅の境涯にもやや倦んだ心境をいう。「長者富にあかず」（『毛吹草』巻二）「Aqi, u, aita……Acu made monouo cũ.」（『日葡辞書』）。○**けふ幾日やら**　「今日幾日やら」。今日で何日になることやら、の意。「火とぼして幾日になりぬ冬椿　加賀一笑」（『あら野』巻五）「Icuca ?」（『日葡辞書』）。

大意　長い旅路を経て、飽きる気持が兆してから、今日で何日になることやら。いつか季節は移って、秋の風が吹いている。

考　『真蹟集覧』（松栄軒編、天保十三年刊）の詠草摸刻では、「おもしろうて」「此あたり」「夏きても」等、貞享五年夏岐阜での三句を記した後に書かれており、この年立秋の日の作と推定される。当年の立秋は七月十日であった。

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」（『古今集』巻四、藤原敏行）の歌に代表される初秋の季節感を詠む伝統を基調とした句で、敏行の歌も「秋立日よめる」であるのも面白い。この句の取柄は、そうした

昔ながらの発想の外に、自己の旅愁を配合した点であろう。昨年の十月末江戸から東海道を経て西上して以来、寒熱を凌いで旅に幾月を送って来た。特に吉野から美濃・尾張まで、暑い時期に処々を歩き廻って、かなりの疲労を覚えていたであろう。その気持が「たびにあきてけふ幾日やら」という呟きになったので、飾らない口語調が極く自然に流れ出ている。細道旅中の句「あか〳〵と日は難面もあきの風」の前書にも、旅愁を云々しているものがあり、いくら旅好きの芭蕉でも、時にはこういう気持になることがあったのである。水準以上の句ではないが、一度読むと何となく思い出されることの多い句で、集に採られることのなかったのが不思議なほどである。

鳴海眺望

知足書留・枕かけ

413 はつ穐や海も青田の一みどり　（千鳥掛）

鳴海眺望

初秋はゝみやら田やらみどり哉　（歌仙草稿）

鳴海がたや青田にかはる一みどり　（鹿嶋紀行附録）

秋季（はつ穐）。

語釈　○**鳴海眺望**　「ナルミテウバウ」。「鳴海」は、名古屋の東方に位置する東海道の宿駅（現名古屋市緑区鳴海町）。南に鳴海潟を控えて海の眺めが開けている。「田家眺望」（『冬の日』、荷兮発句「霜月や」前書）「Chôbô.」（『日葡辞書』）。○**はつ穐**　「初穐（はつあき）」。「穐」は「秋」の古字。「きのふの空にかはる気色もあらねど。吹風もひやりとけさは身にしられ。よだるかりし手足もたち。おほひきさるまぶたも昼寝（ひるね）を忘れ（わす）。草の朝露も。夕（ゆふべ）の虫の音も。漸（やうく）さびしさのおさなだちときゝなされ。桐も柳も一ように。舟出する池の心ばへなどもつらぬ」（『山之井』）「門の石月待闇のやすらひに　野水　風の目利を初秋の雲　荷兮」（『あら野』員外）。○**海も青田**

の一みどり　「海も青田の一緑」。「青田」は、稲の苗が成長して青々と見えるさまをいう。普通は稔らない前、夏の土用頃の稲田をいうが、ここは既に秋に入ってからの青田である。手前に見える青田から向うの海へと、同じ一色の緑が連なっている、といった。青田の緑と紺碧の海の色は、厳密には同じではないが、それを大づかみに「一みどり」というのは、詩的表現として不自然ではない。「ほとゝぎす青田の浪を湖水とも」（『麦林集』巻二）「一色や作らぬ菊のはなざかり　暁鼯」（『あら野』巻四）「松の花……みどりたつ」（『毛吹草』巻二）「Auota.」「Yamamo nobemo midorini naru.」「Midorino vmi. Firoqu fucaqi vmi.」（『日葡辞書』）。

大意　気持のよい初秋になった。目の前に稔った青田の波うつ向うに、海も同じ一色のみどりにひろがっている。

考　『枕かけ』（寄木撰、元禄十四年刊）には「鳴海にて」と前書がある。貞享五年七月十日、鳴海の荷問屋児玉源右衛門（俳号重辰）の家で興行された歌仙の発句として、初案「初秋はうみやら田やらみどり哉」が成った。連衆は重辰・知足・如風・安信・自笑・牛歩ら鳴海の人々であって、上野伊次郎氏蔵の歌仙草稿（発句・脇のみ芭蕉筆、他は別筆。『連歌俳諧研究』三十五号参照）によって、「初秋はうみやら田やら」が最も早い案であることは明らかである。然るに、同じ鳴海での作「よき家や雀よろこぶ背戸の粟」（Ⅱ411）に始まる表六句の芭蕉真蹟の末尾に、知足の筆蹟で「昨日問屋源右衛門方にて之会に」と前書して「初秋や海も青田の一みどり」と書かれてあり、これによれば翌十一日に「海も青田の一みどり」の形に改められたことが分る。尤も前書の「昨日」は「昨月」と読めそうな字体であるが、ここで「月」と書くのは、次に見える「ありとある」（Ⅱ410参照）の句の前書「此比名古屋円頓寺にて」との関係からしても意味のあることとは思えない。仮に字体は「月」としても「日」の誤筆と見られ、十一日改案の推定は動かないであろう。兎もあれ知足は後年『千鳥掛』でこの歌仙表六句を紹介するに当っては、冒頭に掲出した通り改案形で収めている。ずっと降って寛政二（一七九〇）年に刊行された『鹿嶋紀行』附録に見える「鳴海がたや」の句形では夏の句になるけれども、既に歌仙草稿に「初秋は」の句形になっているところを見ると、それより前にこういう句形を案ずる可能性は殆んどあるまい。これを最初の案とする見方もあるが、私はこの句形を疑わしいものと考える。「初秋

や海も青田も一くもり」（『金蘭集』校合異本）「初秋や海やら田やら一みどり」（『句解参考』）等の異伝は信じ難い。
海沿いの田園から茫々たる海面への広い眺望を一気に描き切った句で、一読さわやかさが胸に満ちて来る感が深い。「海も青田も」ではなく、「青田の」とすることによって、近景の稲田から遠景の海へと眼を移して行くところが見えて来るのであって、稲葉の緑と海の紺碧は同じ色とはいえぬにせよ、「碧の海」という表現もあり、「青田の一みどり」と言い切った力は、まことに大景に相応しい。初案の「うみやら田やら」は砕けた調子が取柄であるが、情景が分るだけで、一息に言い下した爽快さは、所詮定案形に及ばないのである。

414 はす池やをらで其儘玉祭り　（枕かけ）

千鳥掛・風の前

秋季（玉祭り）。

語釈 ○**はす池**　「蓮池」。蓮を植えてある池。夏の季語になる。「蓮　水辺也、夏也。れんと声に読ても同前。荷葉も同前。大液の芙蓉も同前。蓮の実も同前。秋といふ人あり。不レ用レ之。余の菓草のみにかはりて花と共に蓮は実を結ぶもの也。又蓮肉と名付て薬種につかふやうなる句躰ならば、水辺にあらず、植物にあらず、夏にあらず。雑也。蓮の実の飛は秋也」（『御傘』）「蓮池のふかさわするゝ浮葉かな　荷兮」（『はるの日』）「**Fasu iqe.**」（『日葡辞書』）。○**をらで**　「折らで」。○**其儘**　「其の儘」。「幾春も竹其儘に見ゆる哉　重五」（『あら野』巻八）「**Sonomamadeua narumai.**」（『日葡辞書』）。○**玉祭り**　「玉祭り」。「玉」は「魂」の宛字。七月中旬の盂蘭盆に当って先祖の霊を供養する祭で、精霊棚を設けて位牌を安置し、供え物をして読経供養する。古くは年末から正月にかけても行われたが、『徒然草』を見ると、上方では鎌倉末期に既にすたれ、東国のみにその遺風があったという。「玉まつり……なき人の此世にきます事は年に六度のよし、報恩経にみえたり。中にも七月は、うらぼんにあたれば、一入にまつり侍り。……報恩経には、十四日の卯の時に来りて、十六日午時に帰る由侍」（『増山井』）「玉まつり柱にむかふ夕かな　越人」（『はるの日』）「**Tamamatçuri.**」（『日葡辞書』）。

大意　蓮池に蓮が咲いている。折るまでもなくそのままで魂祭の供花になるだろう。

考　出典の一たる『風の前』（亀及撰、寛保二年刊）は鳴海の宮口亀慶の追善集であるが、知足の後裔亀世の追悼句の前に左のような記事が見える。

今はむかし風雅に志の日、予に名を乞ふ。かたく辞するにゆるさゞれば、亀慶と称しぬ。なを蕉翁に因みあれば、孝子のはらから翁のほつ句を望むに、思ひ出れば往昔やつがれが庭にして、

蓮池やおらで其儘玉まつり　ばせを

となむありしを夕がほの馬のはなむけとなして、ともに〳〵玉まつり成事をいふ。

俤や目にみそ萩の下雫　尾陽鳴海蔵六岡亀世

芭蕉の「蓮池や」の句は、これによれば知足の庭で詠んだもので、季語の魂祭からして、貞享五年七月七日から十四日まで鳴海に滞在した間の作と推定される。この蓮池は、『知足斎日々記』貞享四年九月六日の条に、「うらに蓮池こしらへ申候」とあるものとおぼしく、折柄の行事にかけてその庭の趣を賞したのであった。

「をらで其儘」が俳諧らしい興で、諸家の鑑賞のように、小さな蓮池でなくては、この表現が生きて来ない。盆の十三日頃に精霊棚が知足の家でしつらえられた時にでも詠まれたのであろう。蓮は極楽の縁もあり、盆の習俗には蓮の葉に飯を包むことも行われる。しかし句の主眼は、蓮池の趣を賞するにあったと思う。

貞享五戊辰七月廿日
於竹葉軒
長虹興行
俳諧之連歌

415　粟稗にとぼしくもあらず草の菴　（荷兮筆懐紙）　──　秋の日

杉の竹葉軒といふ草庵をたづねて
粟稗にまづしくもなし草の庵　（笈日記）　──　泊船集・蕉翁句集

秋季（粟・稗）。

語釈　○**戊辰**　「ボシン」。つちのえたつの年。貞享五年（九月三十日に元禄と改元）の干支である。○**於竹葉軒**　「竹葉軒に於いて」。「竹葉軒」は長虹の軒号。次項参照。○**長虹**　「チヤウコウ」。法号を竹夭といった江戸牛込長国寺の隠居で、明暦三（一六五七）年尾張に移り、名古屋の城北杉村の薬師堂（現名古屋市東区杉村町西杉の解脱寺）の境内に庵を結んで隠栖していた。『あら野』の作者である。歿年は分らないが、江戸で歿したと伝えられる。○**興行**　連衆を集めて俳席を主催すること。本式連歌についても用いられる。既出（Ⅱ*332*）。○**粟**　既出（Ⅱ*411*）。○**稗**　「ヒエ」。イネ科の一年草で五穀の一。外見は稲に似るが、茎が弱く倒れやすい。実は丸くて黄または褐色。今は寒冷地の山間部等に僅かに作られるに過ぎないが、昔は救荒作物として重んじられ、貧しい農民の常食となっていた。家畜の飼料、小鳥の餌にも用いられる。「和俗又粥とし、団子に製す。穀の下品也」（『滑稽雑談』）「粟稗と目出度なりぬはつ月よ　半残」（『猿蓑』巻三）「Fiye.」（『日葡辞書』）。○**とぼしくもあらず**　「乏しくもあらず」。「とぼし」は既出（Ⅰ*129*前書）。○**草の菴**　「草の菴」。既出（Ⅱ*311*）。ここは長虹の草庵をいう。「菴」は「庵」に同じ。

大意　貴方の御草庵は、あたりに粟・稗もよく稔り、食に事欠くこともない、羨しいお暮らしぶりだ。

考　「草庵をたづねて」（『泊船集』）「杉の竹葉軒といふ庵を尋て」（『蕉翁句集』）等の前書がある。年代は歌仙興行の際の

荷兮筆懐紙（柿衞文庫蔵）の前書に明らかで、後年この懐紙が名古屋の駅六の家に伝わっていたのを、暁台が『秋の日』（安永元年刊）の巻頭に収めて紹介したのである。他の連衆は、長虹・荷兮・一井・越人・胡及・鼠弾らであった。『笈日記』等の「まづしくもなし」は、その根拠が今一つ明らかでなく、誤伝の疑いが残る。蝶夢の『芭蕉翁俳諧集』の「まづしくもあらず」も、同様の不安を払拭し難い。懐紙所載の句形を本位句とした所以である。

句は典型的な挨拶句であって、草庵の周囲の粟や稗の稔りを述べて、簡素な生活に事足る主人の隠閑ぶりを称したのである。粟稗は草庵の所有であってもよいが、単に周囲の景物として詠み込まれたと見る方がまさる。

……粟や稗は必ずしも此主人の所有の田地でもあるまいが、唯だ打見た其処の景色を斯様に打ち興じたのであらう。貧しくもあらぬとは俗情で不自由のない事を褒めたのではなく、秋景を管領して余裕綽々たる菴主の心を称したのぢや。（内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』）

という鑑賞は確かなところである。調べからいっても、「とぼしくもあらず」の字余りは悠々とした風格があって、「まづしくもなし」にまさること万々である。この句について、杜甫の「南隣」の詩の冒頭「錦里先生烏角巾、園収二芋栗一未二全貧一」（錦里先生烏角巾、園に芋栗を収めて未だ全く貧しからず）を踏まえ、長虹を隠士錦里先生に擬したと見る説がある。古注以来よく引合に出され、「未だ全く貧しからず」という言い方が「とぼしくもあらず」と似ていることは確かであるが、これは抑々『笈日記』の「まづしくもなし」という句形から言い出されたことではあるまいか。「とぼしくもあらず」の形が本来のものとして注意されていれば、果して注釈者の念頭に浮んだかどうか分らない。典拠としては不確実なものというべきであろう。

三翁は風雅の天工をうけ得て、心匠を萬歳につたふ。此かげに遊ばんもの、誰か俳言をあふがざらんや

笈日記・泊船集・をだまき綱目・庭の巻・蕉翁句集・花は桜・枇杷園随筆

416 月華の是やまことのあるじ達 （皺筥物語）

雑。

語釈 **○三翁** 「サンヲウ」。松永貞徳・山崎宗鑑・荒木田守武の三人を指す。「翁」は、老人・先輩に対する敬称として用いた。貞徳は戦国末期から近世初期にかけての歌学者。後半生には俳諧への関心を深め、その門葉と共に貞門の俳諧と呼ばれて、京を中心に全国に俳諧を広めるのに大きな貢献をした。承応二（一六五三）年十一月十五日歿、享年八十三。守武は、戦国期の連歌作者で、伊勢内宮の長官。天文九（一五四〇）年、俳諧千句の嚆矢たる『守武千句』（飛梅千句）を独吟で成就した。談林の俳人達は、自らの句風を守武流と称している。天文十八年八月八日歿、享年七十七。「義朝の」（Ⅰ*203*）の句参照。宗鑑は既出（Ⅱ*390*）。**○風雅の天工をうけ得て** 「風雅の天工を稟け得て」。「風雅」は、芭蕉の場合「俳諧」の意に用いることが多いが、ここは広く詩歌を中心にした風流文雅の道と取る方がよかろう。「天工」は、造物主の業、大自然のはたらきの意。風雅の道がこの世界において天然自然に備わったものという思想に基づく。その力を人間が授かったというのが「うけ得て」で、上の三人が風雅に関する能力を天から授かったというのである。「吾知人ども見えきたりて、皆風雅の藻思をいへり」（越人『ひさご』序）「造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞を尽さむ」（『おくのほそ道』）「人間に限らず、生をうけぬるたぐひの、子を思はぬはなかりけり」（舞曲「大臣」）「**Fūga. i, Xijcano michi.**」「**Vqe, uru, eta.**」（『日葡辞書』）。**○心匠を万歳につたふ** 「心匠を万歳に伝ふ」。「心匠」は、心中の工夫。それを万年の後までも伝える、という意。「万歳」は古くは漢音で「バンゼイ」と訓まれ、「バンザイ」は明治以降の慣用と思われる。「秋なりせば、いさゝか心のはしをもいひ出べき物をと思ふぞ、我心匠の拙なきをしらぬに似たり」（『笈の小文』）「万歳ましませ、巌が上に亀や住むなり」（謡曲「翁」）「そのかみ国分寺の名を伝ふなるべし」（「幻住庵記」）「**Xenxū banjei. l, bannen, mannen.**」「**Tçutaye, uru, eta.**」（『日葡辞書』）。**○此かげに遊ばんもの** 「此の蔭に遊ばん者」。三翁の道（俳諧）を大樹にたとえて、後世俳

諧をたしなむ者を、その木蔭に遊ぶ者といった。「遊ばん」は、婉曲法。○**誰か俳言をあふがざらんや**　「誰か俳言を仰がざらんや」。「俳言」は、和歌・連歌に用いられない俗語・漢語の類を指し、貞徳が俳諧の句に詠み込むべきものと規定したものであるが、ここはその俳言を用いて作られた三翁の句をいう。後世の俳人は誰しも三翁の作った句を仰いで模範とする、というのである。「誰か」で反語となるので、最後の「や」は不要の語。「世話の詞は俳言の種にもならんやいなや」（『毛吹草』序）。○**月華の**　「月」「華」（花）は俳諧に詠み込む代表的な季物で、ここではそれを連ねて風流文雅の道の意に用いた。俳諧の道に限定することも出来るが、より広い意味にとった方がよかろう。「月」は秋、「華」は春の季語であるが、この句ではそれが両つながらある為に、雑の扱いになる。「の」によって、句を隔てて下の「あるじ達」にかかる。「月花の初は琵琶の木どり哉　釣雪」（『あら野』巻二）。○**是や**　「是や」。普通の散文ならば最初にあるべきものを、挿入句とした。「や」は詠嘆を含む疑問。「これやこの大和にしては我が恋ふる紀路にありといふ名に負ふ勢の山」（『万葉集』巻一、阿閇皇女）「これやこのゆくも帰もわかれつゝしるもしらぬもあふさかの関」（『後撰集』巻十五、蟬丸）等の古歌の例を始め、「これや世の煤にそまらぬ古合子」（『俳諧勧進牒』）と芭蕉自身の用例もある。○**まことのあるじ達**　「真の主達」。（風雅の道の）真のあるじというべき人達、の意。「まことの主は亡きあとの忘れ形見ぞよしなき」（謡曲「富士太鼓」）「Macotono.」（『日葡辞書』）。

大意　この三人の方々こそ風雅の道の真のあるじというべきであろうかなあ。

考　「三聖人図」（『笈日記』）「守武宗鑑貞徳の図に」（『庭の巻』）「夫風流に心をとめて其四季にともなふもの、浜の真砂の尽せぬ詠ならめ。其情を述て其ものをあはれむ人は、ことの葉の聖也。されば文明のころ、其道さかんなりし聖たちの言葉今の掟となりて、其実なる事今の人のすさむ事かたかるべし。されども風雅の流行は天地とともにうつりて、只つきぬを尊ぶべき也。さればかの宗祇宗鑑守武の寿像を求めて、此道の好士許六の筆労をかり、我拙き一句をつゞりて、道のたゞ万古にさかんならんことをいのる而已」（『花は桜』『枇杷園随筆』）等の前書がある。熱田蕉門の芭蕉追善集『皺筥物語』には、「薬のむさらでも霜の枕哉」（Ⅱ*328*）「団扇もてあふがむ人のうしろつき」（Ⅰ*241*）等の句に触れた続きに、

又貞徳・宗鑑・守武の画像に東藤子讃を乞けるに、何を季に、なにを題に。むつかしの讃やとゑみたまひ、やが

て書てたびけり。その句、其こと葉書

として、初めに掲出した前書と句を紹介している。「薬のむ」は貞享四年冬、「団扇もて」は同二年四月の作なので、これだけでは当面の句の年代を推定する根拠にはならないが、この書では元禄四年十月の帰東の途次、熱田の梅人亭に立寄ったことを叙した後、筆を改めて「一とせ此所にて」云々と「薬のむ」の句のことに及んでおり、この書き振りを見ると、「月華の」の句が元禄四年の最後の熱田訪問の時でなかったことだけは確かといってよかろう。それ以前当地を訪れた時として最も晩いのは貞享五年八月上旬であった。この時の滞在は短かったらしいが、兎に角これを下限と見て、句をここに配しておく。『花は桜』(秋屋撰、寛政十三年刊)等の長い前書は、「許六の筆労をかり」とあるのによって分るように、元禄五年八月九日の許六入門から、翌年五月初めに彼が江戸を離れるまでの間に成った後年の作である。この方は貞徳の代りに宗祇が入っているが、年代が異なるからには不思議はない。熱田での句を後年流用したまでなのであろう。

熱田の東藤に頼まれて作った即興の画賛句であるが、俳諧道の先輩達に対する芭蕉の考えが窺われて面白い。宗鑑・守武らの草創期、或いは貞徳の指導した初期の俳諧は専ら滑稽諧謔を主眼としたもので、蕉風の目指すところとは趣を異にしていたけれども、芭蕉はこれらの人々に対して、先達として深い尊敬の念を持っていたのである。「はいかいもさすがに和歌の一体也」(『去来抄』修行)という立場からすれば、これも「月華」に遊ぶ風流文雅の道といってよく、先達たる「三翁」は尊ぶべきものになる。一方で芭蕉は「俳諧に古人無し」ともいっているが、これは去来の説明にもある通り、「古人ナシトハ、古へ達人ナキノ謂ニ非ズ。然此道古人之姿ニ依テ作シガタシ」(不玉宛去来論書)という考えから出たもので、尊敬とは別の問題である。俳諧の道の草分けをした先人達に対する芭蕉の態度が素直に出ており、思想的に注目すべき句といえよう。

田中の法蔵寺にて

417 刈あとや早稲かた〳〵の鴫の聲 （笈日記）

泊船集・蕉翁句集

秋季（早稲・鴫）。

語釈 **○田中の法蔵寺** 「田中の法蔵寺」。名古屋の西郊広井村堀川西（現西区新道）にある浄土真宗の寺。貞享二年に名古屋村から移転し、田中山と号するように、文字通り田圃の中にあった。「あるじはひんにたえし虚家　杜国　田中なるこまんが柳落るころ　荷兮」（『冬の日』）。**○刈あと** 「刈り跡」。ここは稲を刈った跡をいう。「けいせい町をたてんと、よしの苅跡爰やかしこに家作りたりしは」（『慶長見聞集』巻七）。**○早稲かた〳〵** 「早稲片方」。「早稲」は、早く成熟する種類の稲。早稲を植えた田の片側半分が刈り取られて「刈あと」になっているのである。「わさ田　はやわせ共に秋也、うへもの也。植とあらば夏也」（『御傘』）「今按に、わせ・わさ田などいへる、初秋也」（『滑稽雑談』）「早稲刈て落つきがほや小百姓　乃龍」「寐道具のかた〳〵やうき魂祭　去来」（『続猿蓑』下）「**Vaxe, Fayai ine.**」「**Catacata.**」（『日葡辞書』）。**○鴫** 「シギ」。旅鳥として渡来し、日本で越冬するシギ科の鳥の総称。嘴と脚が長く、褐色に暗色の斑のある羽を持つ。雀から烏ほどまで大小さまざまであるが、飛翔力が強く、干潟・河原・河口など水辺に群棲している。普通「しぎ」といわれるものは所謂田鴫で、田地沼地等に多く、ジャージャーと鳴きながら電光形に飛び立ち、直線状に快速に飛ぶ。「鴫　秌なり。物かなしきのこゑなどゝいひても秌也」（『御傘』）「時ならず念仏きこゆる盆の内　利牛　鴫まつ黒にきてあそぶ也　桃隣」（『炭俵』下）「**Xigui.**」（『日葡辞書』）。

大意 早稲の田の片側半分の刈り跡で、鴫がしきりに鳴いていることよ。

考 『笈日記』には「覓閑三句」の中に見える。秋に名古屋辺に居たのは貞享五年七、八月であって、この頃の作と推定される。今法蔵寺の境内に、この句に因む鴫塚があるという。

稲田の刈り跡の落し水を湛えた所へは、よく鴫が下りて来るもので、この句はそうした田園風景を実に確かに描い

ている。「かた〳〵」を所々と取るのは良くあるまい。早稲を植えた田の半ばは刈り取られ、半ばは刈られずにある。その刈られた方で鴫が鳴くのであって、その景をいうのに「早稲片方の」以外にどういう表現があり得るか考えて見れば、この表現の確かさ巧みさが分ると思う。

西行の「こゝろなき身にもあはれはしられけりしぎたつさはの秋のゆふぐれ」(『新古今集』巻四)は、典型的な和歌の世界で、この句を成すに当って、芭蕉も必ずやこの歌を意識したであろう。既に古注にも指摘されたように、「さは」(沢)を「刈あと」に転じたところが俳諧で、秋の夕暮の寂寥感があらわされている。

野水が旅行を送りて

418 見送ₚのうしろや寂し秋の風 (三つの顔)

秋季(秋の風)。

語釈 **○野水が旅行** 「野水(やすい)」は名古屋蕉門の重鎮。岡田氏、名は幸胤、通称佐次右衛門。城下大和町で呉服商を営み、惣町代を勤めていた。俳諧を嗜んで最初は貞門系に属したが、貞享元年冬芭蕉を迎えて『冬の日』の連衆となって以来蕉門に帰した。『猿蓑』以後漸次俳諧に熱意を失い、後半生は茶道に執心してその普及に努めている。寛保三(一七四三)年三月二十二日歿、享年八十六。この前書にいう野水の「旅行(りよかう)」は、貞享五年秋と思われる。〔考〕参照。「が」は勿論所有格である。「翁の旅行を川さきまで送りて」(『炭俵』上、利牛発句「刈こみし」前書)「Reocó. Tabini yuqu.」(『日葡辞書』)。**○見送ₚのうしろや寂し** 「うしろ」は、後姿の意。(I *241*)参照。ここは、自分が見送る旅人(野水)の後姿ということで、やや稚拙な感じを受ける。「や」は詠嘆ながら、切れる所は「寂(さび)し」である。「寂しや」というと調子が聊か軽くなるので、「や」を上に移したのであろう。「貴賤上下、童子のうしろを見送りて、袖をぬらさぬはなかりけり」(『法明童子』)「Mivocuri, u, utta.」「Vxiro.」「Vxirocagueuo mivocuru.」(『日葡辞書』)。

大意 秋風の吹く中、旅立ちを見送るそのうしろ姿の、何とさびしいことよ。

考　この句は越人の『三つの顔』（享保十一年刊）に野水の脇「来る春までと柳ちる陰」と共に載っており、時代はやや降るが、越人が手許の資料によって収めたものと思われるので、信憑性に問題はない。名古屋の野水が旅立つのを送る意味の前書からして、芭蕉も名古屋に居た時でなければならず、貞享五年七、八月頃名古屋で野水が旅に出た時の餞別句と推定される。これより後間もなく、越人は芭蕉と共に『更科紀行』の旅に出るが、『あら野』巻七に見えるその折の餞別吟の末に、

越人旅立けるよし聞て京より申つかはす

月に行脇差つめよ馬のうへ　野水

とある句の前書によれば、当時野水が京に居たことが知られ、彼が旅中にあったことが証せられる。野水は時折商用で上京することがあったのである。

この句、作年次がいろいろに考えられる上に、「見送りのうしろや」という表現に難があって、種々の異解を生ずるに至ったが、作年次は右に述べた貞享五年秋が唯一可能性の考えられる時であるし、表現も「我が見送る野水の後姿」と取るしかあるまい。「や」を疑問と見て「寂し」を助動詞「き」の連体形と見るのは全く無理である。

人と別れるのは寂しいものだ。旅立つ人の後姿が寂しげなのも、見送る者の惜別の情が投影されるからである。蕭索たる秋風の中に独り旅立つ人の後姿を置いて、惜別の情を託した挨拶句であった。

419　おくられつおくりつはては木曾の秋　（あら野）

芭蕉翁追善之日記・笈日記・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・笈のわか葉

送られつ別つ果は木曾の秋　（宝永板更科紀行）

秋季。

語釈 ○**はて**　「果て」。○**木曾**　今の長野県南西部、木曾川の上流地域をいう。既出（I *244*）。

大意　今までの旅の間、人に送られたり人を送ったりしてここまで来たが、その挙句これからは木曾路の秋へ向うのだ。

考　『笈日記』岐阜部には、「十八楼ノ記」を載せた後に「その年の秋ならん、この国より旅立て更科の月みんとて／留別四句」として出し、『蕉翁句集』にも「留別」と前書がある。岐阜を立って更科に向ったのは、この年八月十一日であった。『あら野』には名古屋連衆の餞別句の後に前書なしで見えるから、元来は名古屋の門人達への留別句であって、その後岐阜でも同じ句で挨拶に代えたものと思われる。「おくりつ」は具体的には名古屋で野水の旅立ちを見送ったこと（前の句の条参照）を指しているのであろう。『笈のわか葉』（雲鈴撰、正徳五年刊）には、涼菟の句の前書の中に、「おくられつおくりつ果は木曾の秋とは、ばせを翁の留別の吟なり」と引用されている。

「おくられつおくりつ」は、「我は人に送られつ、人は我を送りつ」の意か、「我は人に送られつ、又人を送りつ」の意か、両様に取れるが、「はては」との続き具合を考えると、主語は「我」一つの方が良いと思う。前者とした場合、送る人を、更科の旅を共にした越人と荷兮の奴僕と見る説もあるが、そう限定し過ぎては良くない。「おくりつ」を芭蕉のすることと取れば、前記のように野水の旅立ちを送ったことを意識した表現と見られよう。問題は宝永板『笈の小文』に付載された『更科紀行』の「送られつ別つ」の形である。これを初案と見たり或いは改案形としたり、従来の説はとりどりながら、抑々これは信憑性のあるものかどうか。『更科紀行』の諸本について、私は芭蕉真蹟草稿本が唯一の原典で、乙州編の宝永板も岱水の『木曾の谿』本も凡てその写しと見る上野洋三氏の説（『俳諧攷』所収「『笈の小文』幻想稿」）が真を得ていると思う。ところが「おくられつ」の句は真蹟草稿本になく、「別つ」の形は全く孤立した所伝なのである。従ってこの部分は乙州の私意が疑われることになり、この句形の信憑性は大きく揺がざるを得ない。それに「我は人に送られつ人と別れつ」では、同じことを表現を変えて繰返したに過ぎず、そういう句案が

推敲過程にあったかどうかさえ問題であろう。私は『あら野』以下の「おくられつおくりつ」の形が唯一の信ずべき句形と考えている。

この句の生命は、「おくられつおくりつはては」というあたりの流動感にあり、それは江戸を出た時から此処までの漂泊の旅の思いにつながる。最後に「木曾の秋」と置いて、嶮しい山路の秋の寂寥を印象深く表現したのも良い。この漂泊の思いと寂寥感は、

旅の物うさもいまだやまざるに長月六日になれば、伊勢の迁宮おがまんと又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

という『おくのほそ道』結尾の気分と等質のもので、冒頭の「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」の宇宙観とも呼応するのである。悠久の時の流れの中に漂う、ときの間の生のはかなさが、この寂しい味わいの源になっている。

420　草いろ〳〵おの〳〵花の手柄かな　（笈日記）

泊船集・誹諧曾我

花いろ〳〵おの〳〵花の手柄哉　（蕉翁句集）

秋季（草の花）。

語釈　○**草いろ〳〵**　「草色々（くさいろく）」。秋の野の草の種類が多様であることをいう。「いろ〳〵」は既出（Ⅱ*398*）。○**おの〳〵花の手柄かな**　「手柄（てがら）」は、他から賞められるような働き。各種の花がそれぞれに特色を発揮して働きを見せているというのである。この「花」は「草の花」なので、春ではなく、秋季に扱われる。「草花　秌也。……是は野花の事也。……然に哥の題に野‐花留（や くわとむ）レ人と云事、春の部にも秌の部にも有レ之。依二句‐躰一春秌の分別すべし」（『御傘』）「総て諸草の類、春夏に花を開く有といへども、其草花秋に

多きゆへに、無名の草花を秋に許用せり」（『滑稽雑談』）「須磨寺に汗の帷子脱かへむ　重五　をのくなみだ笛を戴く　荷兮」（『はるの日』）「たれ人の手がらもからじ花の春釈古梵」（『あら野』巻二）「Vonovono.」「Tegarauo suru, I, arauasu.」（『日葡辞書』）。

大意　秋の野のいろいろの草が、それぞれ特色のある花を咲かせて働きを見せているよ。

考　『笈日記』に前の「おくられつ」の句と同じく、木曾路に向って岐阜を立つ際の留別吟として収める。『蕉翁句集』の句形は「花」が重複しており、伝写の間の杜撰に過ぎまい。同書に成立年次を元禄五年とするのも誤りである。句の表は、秋の野の草の花のとりどりに可憐な花を咲かせているのを「手柄」と擬人化して賞めたまでで、それら凡てに造化の心を見ようとしたもののように聞える。しかし『笈日記』によれば、留別の句として詠まれたものであるから、旅立ちを送ってくれた門人達に対する、何等かの挨拶の意が籠められていなければならない。「ここに集ったそれぞれの人たちの人柄を賞した挨拶の意」（山本健吉氏『芭蕉全発句』）「各人が贈った送別句を秋野の花に寓する作意」（今栄蔵氏『芭蕉句集』）等を酌み取るべきであろう。なお古注以来いわれているように、「みどりなるひとつ草とぞはるは見し秋はいろくの花にぞありける」（『古今集』巻四、よみ人しらず）の古歌を踏まえた表現である。

421　朝皃は酒盛しらぬさかりかな　（あら野）

笈日記・泊船集・金毘羅会・蕉翁句集

秋季（朝皃）。

語釈　○**朝皃**　「アサガホ」。既出（I *160*）。「皃」は「皃」（「貌」に同じ）の異体字。○**酒盛しらぬさかり**　「酒盛（さかもり）」は、更科への旅立ちを送る送別宴をいう。「さかり」は、朝顔の花の盛り。人間の事には関わりのない植物のさまを「知（し）らぬ」といった。「酒盛のやまぬ程こそ久しけれ　雨のふる屋の屋ねぞ朽たる」（『毛吹草』巻七）「Sacamoriuo suru.」（『日葡辞書』）。

大意　朝顔は傍の人間の酒盛など知らぬ顔で盛んに咲いているよ。

考　「人〳〵郊外に送り出て三盃を傾侍るに」（『笈日記』）「旅だちけるころ人ゝ郊外に送りて三盃を傾けるに」（『泊船集』）「みのゝ国よりさらしなの月みむと旅だちける比、人ゝ郊外に送りて三盃をかたぶく」（『蕉翁句集』）等の前書がある。『笈日記』によれば、岐阜に於ける留別吟の一であった。

岐阜の郊外の茶店などで、門人たちと別れの盃を酌み交わした時の即興吟である。花の宴や観菊の宴はあっても、朝顔を観る宴というのはない。そうした事を踏まえて、早朝の野趣ある小酌に朝顔を取合わせ、人の事には我関せずといった朝顔のさわやかさに注目している。留別吟とはいっても、殊更人に対する寓意はなく、ただ属目の物に興ずる気持が、そのまま惜別の心に叶うのである。

432　ひよろ〳〵と尚露けしやをみなへし　（更科紀行真蹟草稿）

あら野・真蹟画賛・芭蕉庵小文庫・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

ひよろ〳〵とこけて露けし女郎花　（笈日記）

秋季（露けし・をみなへし）。

語釈　**○ひよろ〳〵と**　細長く弱々しい女郎花の茎の形容。もとより俗語。下に「して」等を補って解する。**○尚露けしや**　「露けし」は、露に濡れたさまをいう。「尚」は「ひよろ〳〵と」を承けて、「それでもやはり」と「露けし」へ続くと見るべきであろう。「や」は詠嘆の切字。「露けき　露の置きたるかして、物のしめりたるをいふ心に用ゆることばなり」（『改正月令博物筌』）「秋風に女車の髭おとこ　亀洞　袖ぞ露けき嵯峨の法輪　釣雪」（『あら野』員外）。**○をみなへし**　「女郎花」。秋の草花の一。既出（Ⅰ*50*）。

大意　女郎花はひょろひょろと細く弱々しげながら、やはり露がしとどに置いて、可憐な様子であることよ。

考　『笈日記』に、更科へ赴く時の留別四句中の一として見える。『更科紀行』では月見の句の後に出してあるところから、留別の句ではなくて旅中の属目と見る説もあるが、『紀行』に於ける句の排列は、必ずしも留別の句である

ことを否定する根拠にはならず、『笈日記』の所伝は尊重すべきであろう。前の「朝皃は」の句と同趣の留別吟と思われる。旅行の翌年春までの間に書かれたとおぼしい真蹟草稿（『更科紀行』諸本の原典）では、最初「ひよろ〳〵とこけて露けしをみなへし」と書き、「こけて」を見せ消ちにして右傍に「尚」とし、「露けし」の下に「や」を補っており、『紀行』執筆の際の推敲の消息を窺わせている。岐阜で支考の見た資料では「こけて露けし」とあったので、『笈日記』に之を採録したのであろう。即ちこの句形が初案なのである。

「ひよろ〳〵と」という俗語が巧みに生かされているが、「尚」を「それでもやはり」と取るか、「なお一層」と取るかで説が分れる。「露けし」は、いわば女郎花という草の本情で、艶なる女性にたとえられることにもなるわけだが、「ひよろ〳〵と」は、この草の本来ではない。『続芭蕉俳句研究』で幸田露伴が指摘するように、女郎花は真直ぐに立っていて倒れそうなものではないのだ。すると、ひょろひょろと弱々しいさまは、この時芭蕉の見た草の特殊相であろう。露伴は露重きさまと見て一層の意に解するが、この点はもう少し考えたい。「痩ながらわりなき菊のつぼみ哉」（Ⅱ308）の句で、痩せながらもその草本来のはたらきとして莟を持っていることに感動しているように、この女郎花もひょろひょろと弱々しいながら、露に濡れて本来の艶なる風情を保っているところに感じているのではなかろうか。私は「それでもやはり」の意に取る方が良いと思う。なお、初案について、「別れ行く身の頼りない心情を、眼前の女郎花の姿態に託した」（今栄蔵氏『句集』）と、留別の意を重視する考え方があるが、余りそれに執すると、却って牽強のそしりを免れまい。前の「朝皃は」の句と同様に、属目の物に寄せる気持が惜別の情に叶うと見たいのである。

更科の月見の句の後に置かれた『紀行』の排列によってこの句を見た場合、木曾路の野山の風情が強く印象づけられることは否定し難い。『紀行』に於ける位置は、そういう効果を意識した結果とも考えられよう。『あら野』で「朝皃は」とこの句が、「おくられつおくりつ」等一群の贈答句とは全く離れて、巻四の初秋の部に前書もなくばらばら

に収められているのは、理解し難い処置である。

423　桟やいのちをからむつたかづら　（更科紀行真蹟草稿）——泊船集・庵の記・蕉翁句集・木曾の谿

木曾路にて

桟や命をからむ蔦もみぢ　（韻塞）——蕉翁句集草稿

秋季（つたかづら）。

語釈　**○桟**　「カケハシ」。山中の谷をまたいで橋を掛け渡したり、崖に沿った岨道に板を棚のように掛け渡して造った道をいう。木曾の歌枕で、嶮岨な木曾路には、昔は随処にこれがあったが、中世以降漸次改良されて姿を消した。中で上松と木曾福島の間にあった波計(はばかり)の橋（今の長野県木曾郡上松町大字上松桟。とどめきの橋ともいう）は後まで残って、木曾の桟と呼ばれていた。豊臣秀吉の時代に大改修した桟道が正保四（一六四七）年に焼失し、芭蕉の頃には橋の両端が石垣になっていたという。「桟」は音「サン」。「かけはし」を意味する字である。「波と見ゆるゆきをわけてぞこぎ渡るきそのかけはしそこも見えねば」（『山家集』下）「Caqefaxi.」（『日葡辞書』）。**○いのちをからむ**　「命(いのち)を絡(から)む」。「からむ」は、「つたかづら」が「桟」にからみついているさま。従って「いのち」は、「つたかづら」の命であるが、同時に其処を通る旅人の危い命をも思わせる。「をの〱肩にかけたるもの共、かの僧のおひねものとひとつにからみて馬に付て」（『更科紀行』）「Carami, amu, ŏda.」（『日葡辞書』）。**○つたかづら**　「蔦葛(つたかづら)」。紅葉を観賞する夏蔦（錦蔦）のこと。凡て蔦は、吸盤を持った巻鬚で崖や巨樹にまとい付いて這い登る。秋の季語。「蔦蘿(つたかづら)　秋也。……つたは常に有物なれども、烁になるは紅葉の見事なる故也」（『御傘』）「蔦……花は夏月小白花を帯。見るに不レ足。秋に至て紅葉大に賞するに余り有。故に秋とす」（『滑稽雑談』）「山人の昼寐をしばれ蔦かづら　加賀山中桃妖」（『続猿蓑』下）「Tçutacazzura.」（『日葡辞書』）。

大意　かけはしの何と嶮岨なことよ。蔦葛もその危い命を、ようやく橋にからみついて保っている。

考　『木曾の谿』（岱水撰、宝永元年刊）には「桟」と前書があり、『泊船集』と『蕉翁句集』の前書は『韻塞』（李由・許六

撰、元禄九年刊）と同じである。十一日岐阜を発して十五日更科に着いた旅程からすれば、略々十三日頃の作であろう。『韻塞』の下五「蔦もみぢ」は「つたかづら」と同じことであるが、誤伝の疑いが濃い。

高山奇峰頭の上におほひ重りて、左りは大川ながれ、岸下の千尋のおもひをなし、尺地も平かならざれば、鞍うへ静かならず。只あやうき煩のみやむ時なし。桟はし・寝覚など過て、猿がばゝ・たち峠などは四十八曲りとかや。九折重りて雲路にたどる心地せらる。

と述べた『更科紀行』の文によっても、木曾路の嶮難は想像に難くない。この句、表面は桟道にからみついた蔦葛のさまを「いのちをからむ」といって、宛かも蔦葛がその命を桟道に託して必死にしがみついているように言ったのであるが、「いのち」はそのまま其処を渡る旅人の懸命さをも思わせて、主観的な力強い表現になっている。これを、蔦がからみついている為に、渡る者の安全が保たれるように解したのでは、説明的傍観的であって、力強さは全く失われてしまう。ただ、この句ではなお巧みさが先に立って、半田良平氏の『新釈』に説く如く、象徴の域に達していないという評は甘受しなければなるまい。因みに、同行した越人は、「霧晴て桟はめもふさがれず」の句をのこしている。

424 桟や先おもひいづ馬むかへ（更科紀行真蹟草稿）

秋季（馬むかへ）。

語釈 **○桟** 前の句に既出。**○先おもひいづ** 「先づ思ひ出づ」。（Ⅰ*3*）参照。**○馬むかへ** 平安時代、毎年八月半ばに宮中で行われた駒牽きの行事に諸国から貢進される馬を、馬寮の官人が逢坂の関まで出迎えた慣習をいう。「駒迎」（Ⅰ*55*）に同じ。「馬」を「コマ」と訓む説もあるが、「うまむかへ」の語も古くから用例がある。「兼輔朝臣左近少将に侍ける時、むさしの御むまむかへに

まかりたつ日」（『後撰集』巻七、忠房歌「秋ぎりの」詞書）。

大意　木曽路を旅して桟を通るにつけて、先ず思い出されるのは、信州の御牧の駒がこの難路を通り、逢坂の関で迎えられることだ。

考　『更科紀行』に前の句と並んでおり、同じ時の作と思われる。蝶夢の『芭蕉翁発句集』には、「桟やまづおもひ出す駒むかへ」となっているが、何に拠った句形か明らかでない。

「あふさかの関のいはかどふみならし山たちいづるきりはらのこま」（『拾遺集』巻三、大弐高遠）「あふさかの関のし水に影見えて今やひくらんもち月のこま」（同上、貫之）等、駒迎えを扱った有名な古歌によった発想であろう。桐原も望月も信州の御料牧場であり、折柄中秋の名月の連想もある。嶮路に行きなずむ現実の次には、ゆかしい古典的世界が展開されるわけで、昔の人馬の艱難を思いやったものではあるまい。句はただ体を成しているだけである。

425

あの中に蒔繪書たし宿の月（更科紀行真蹟草稿）

あの月に蒔繪書たし宿の月（木曽の谿）

秋季（月）。

語釈　○**あの中に**　「彼の中に」。丸い「宿の月」の中に、の意。「あやにくに煩ふ妹が夕ながめ　越人　あの雲はたがなみだつゝむぞ　芭蕉」（『あら野』員外）「栗がらの小家作らむ松の中　団友」（『続猿蓑』下）「Ano.」「Naca.」（『日葡辞書』）。○**蒔絵書たし**　「蒔絵書きたし」。「蒔絵」は、漆で文様を描き、乾かないうちに金銀粉や色粉等を蒔きつける漆工芸の技法。高蒔絵・平蒔絵・研ぎ出し蒔絵の種別がある。「撫子や蒔絵書人をうらむらん　越人」（『あら野』巻三）「Maqiye.」「Iqiutçuxini caqu.」（『日葡辞書』）。○**宿の月**　「宿」は、旅宿。道中の旅籠で見る月をいう。

大意　山路の旅宿で見るまん丸な月。あの中に蒔絵を書いて見たいものだ。

考　『更科紀行』によると、木曾路で行脚僧と道連れになって、一夜同宿した時の即興である。何日の作かは確定し難いが、十五日更科での月見よりは前、丸くはあっても満月ではない頃であろう。

真蹟草稿では、はじめ「月の中に蒔絵書たし」と書き、「月の」を見せ消ちにして「あの」と改めている。「月の中に」では下の「宿の月」と重なるから当然の推敲であった。『木曾の谿』の句形は、草稿で見せ消ちのしるしが薄いこともあり、匆卒に見て誤ったものと思われる。

とてもまぎれたる月影の、かべの破れより木の間がくれにさし入て、引板の音しかおふ声所〻にきこへける。誠にかなしき秋の心爰に尽せり。

いでや月のあるじに酒振まはんといへば、さかづき持出たり。よのつねに一めぐりもおほきくして、ふつゝかなる蒔絵をしたり。都の人はかゝるものは風情なしとて手にもふれざりけるに、おもひもかけぬ興に入て、琫碗玉巵の心ちせらるも所がらなり。

『紀行』真蹟草稿では、右のような文の後にこの句を記してあり、田舎風の粗末な蒔絵の大盃から、丸い月を盃に見立てて「あの中に蒔絵書たし」と興じたことが分る。「月に柄をさしたらばよき団哉(うちは)」(『あら野』員外、宗鑑)と同類の古風な見立であるが、田舎くさい不束かな大盃も時にとっての興とあって、嫌味なところは微塵もなく、蒔絵という聊か突飛な趣向も、前文を読めば極く自然に理解出来よう。

おばすて山は善光寺にむかひあひて、東西に横をれたり。さすがに冷じう高くもあらず、かどかどしき岩などもみえず、たゞ哀ふかき山のすがたなり。なぐさめかねしといひけん昔のこと、まづおもひいづ

426

おもかげやうばひとり泣月の友（真蹟懐紙）

更科紀行真蹟草稿・いつを昔・雑談集・翁草・泊船集

俤は姥ひとりなく月の友（芭蕉庵小文庫）

祖餞

秋季（月）。

語釈 **○おばすて山**　「姨捨山（をばすてやま）」。棄老伝説で有名な歌枕。現長野県東筑摩郡坂井村と更級郡上山田町・埴科郡戸倉町の境にある冠着山（かむりきやま）がそれとされる。標高千二百五十二メートル。甲状溶岩の円頂丘をなし、遠く善光寺平の水内（みのち）・高井の平地からも見える独立峰である。「お」は「を」の仮名ちがい。「さらしなの里おばすて山の月見事しきりにすゝむる秋風の心に吹さはぎて」（『更科紀行』）。**○善光寺にむかひあひて**　「善光寺（ぜんくわうじ）」は、今の長野市北部高地に建つ大寺院で、山号は定額山。銅造阿弥陀如来を本尊とし、近世には天台宗の善光寺大勧進、浄土宗の善光寺大本願をはじめ、境内に四十六坊が甍を連ね、全国的な信仰を集めていた。姨捨山と善光寺とはかなり距離があるが、右に述べたように、善光寺平あたりから眺められるので「向（むか）ひ合（あ）ひて」といったのである。「Mucaiai, vô, ôta.」（『日葡辞書』）。**○東西に横をれたり**　「東西（とうざい）に横（よこ）をれたり」。東西に横たわっている。「かひがねをさやにも見しかけゝれなくよこほりふせるさやのなか山」（『古今集』巻二十、東歌）の歌のように、「横ほる」は四段活用で、仮名遣も「ほ」を用いるのが正しいが、「横折る」との混同から「横をれ」といった形が出て来たものとおぼしく、芭蕉は細道旅中の荒海の句の前書でも、「佐渡がしまは……東西三十余里、波上によこをれふせて」（真蹟懐紙）と書いている。「Tôzaini chisô suru.」（『日葡辞書』）。**○さすがに冷じう高くもあらず**　「冷（すさま）じう」は、不調和に、興醒めなほど趣なく、の意。「さすがに」は、歌枕だけあって、といった気持である。「さすがに春の名残も遠からず、つゝじ咲残り、山藤松に懸て」（『幻住庵記』）「冷じや灯のこる夏のあさ　藤羅」（『あら野』巻三）「Sasugani.」「Susamajij.」（『日葡辞書』）。**○かどかどしき岩**　「角々（かどかど）しき岩（いは）」。角の立った、いかつい形の岩。「岩

の上のかど〳〵しきもあるものを人のこゆるをいたみだにせぬ」（『新撰六帖』巻二、藤原信実）「Cadocadoxij.」「IVa.」（『日葡辞書』）。
○哀ふかき山のすがた　「哀れ深き山の姿」。「哀」の字を宛ててはいるが、ここは「趣の深い」意。姨捨山の山容が歌枕に相応しく趣が深い、といふのである。「或年の旅行、道の記すこし書るよし物がたり有。……見ざれ共哀ふかし」（『三冊子』わすれみづ）。
○なぐさめかねしといひけん昔のこと　「慰め兼ねしと言ひけん昔の事」。「なぐさめかねし」は、「わがこゝろなぐさめかねつさらしなやをばすてやまにてる月をみて」（『大和物語』百五十六段。『古今集』巻十七には、よみ人しらずとして歌のみ所収）の歌を指す。『物語』では、伯母をかしづいていた男が、妻にそそのかされて老いた伯母を深山に捨てて来たが、心にかかって一晩中寝られずにこの歌を詠み、再び家に連れ帰ったとある。「いひけん」は伝聞による想像。「……といふ歌を詠んだとかいふ」の意である。「Cocorouo nagusamuru.」（『日葡辞書』）。**○まづおもひいづ**　「先づ思ひ出づ」。**○おもかげ**　作者の胸裡に思い描かれる人の姿。次に「うばひとり泣」と具体的にいふ。「人よりはことなりしけはひかたちの、おもかげにつとそひておぼさるゝにも」（『源氏物語』桐壺）「Fitoga vomocagueni tatçu.」（『日葡辞書』）。**○うばひとり泣**　「姥独り泣く」。「うば」は、老女。他の資料は多く「姥」の字を宛てている為に、「姨捨山」の山の名とも関連して「姥独り泣く」とする説が多かったが、ここに底本とした真蹟懐紙の仮名書きによって、この部分は「うば」であることが決定的になった。「津の国なにはのさとに、おうぢとうばと侍り。うば四十にをよぶまで子のなきことをかなしみ」（『一寸法師』）「Vba.」（『日葡辞書』）。**○月の友**　「月の友」。月を共に見る仲間。「月の友　人倫也。但句躰によるべし。月を友、人倫にあらず」（『御傘』）「われて又丸く成をや月の友　盛次」（『毛吹草』巻六）。

大意　姥捨山の月見をする今宵、捨てられてひとり泣く老女の姿が幻に見える。そのおもかげが今夜の月見仲間であることだ。

考　「姨捨山」（更科紀行真蹟草稿）「越人を供して木曾の月見し比」（『いつを昔』）「姨捨」（『翁草』）「更科姨捨之弁　今略之。小文庫に見へたり」（『泊船集』）等の前書がある。『芭蕉庵小文庫』（史邦撰、元禄九年刊）所収の芭蕉の文「更科姨捨月之弁」には、八月十一日に美濃を立ち、強行軍で道を急いだことを叙した後、

思ふにたがはずその夜さらしなの里にいたる。山は八幡といふさとより一里ばかり南に、西南によこをりふして、冷じう高くもあらず、かど〳〵しき岩なども見えず。只哀ふかき山のすがたなり。なぐさめかねしと云けむも理

りしられて、そゞろにかなしきに、何ゆへにか老たる人をすてたらむとおもふに、いとゞ涙落そひければとして「俤は」と「いざよひも」の句を記している。「その夜」は八月十五夜と認められるから、当夜の吟としてよかろう。句形は『小文庫』のみ初五が異なり、それを参照した『泊船集』が猶且つ「俤や」としているので、杜撰とする見方が有力であるが、敲氷の編した『祖餞』に見える「月之弁」の芭蕉真蹟による写しにも「俤は」とあって、これが初案である可能性も一概に否定し難い。本位句の底本とした糸魚川市歴史民俗資料館蔵の真蹟懐紙は、前書に「月之弁」と共通する表現があるが、筆蹟からして旅中或いはその直後の揮毫と思われ、初案があったとしても、それは早く捨てられたと推定される。

表現が錯綜している為に諸解があるが、要は「ひとりなく姨の俤を今宵の友とす」（杜哉『蒙引』）というに尽きると思う。外に、「月の友なる山は姨捨山ぢや、其趣恰かも姨が一人で泣いてゐる俤ぢや」（内藤鳴雪『評釈』）といった特殊な説や、

「月の友」はその姨の俤が今宵の月の友だとの意にも解されるが、やはり姥がたゞ一人月に対して泣くさまをさう言つたのであらう。即ち一句は「姨がたゞ一人月の友として泣いてゐる。その俤が偲ばるるよ」の意である。
（潁原博士『新講』）

という見方もあり、特に潁原説は傾聴に値するが、「月の友として」というあたりに、聊か問題があろう。「月の友」は普通には「月見の友」のことで、潁原説のような意味に用いることはない。「月の友として」を逆にいえば、前記『御傘』で人倫に非ずとされた「月を友」と似たことになって、「月の友」とは別の事である。「月見の友」という意味を生かせば、どうしても「ひとり泣く姥の俤を月見の友とする」と解せざるを得ない。「俤やひとり泣く姥月の友」とあってもよいのだが、それでは姿が整わないから、このような形に落着いたものと思われる。

この句の想には、従来いわれているように、謡曲「姨捨」の影響がかなり著しい。更科の月見に来た人に里の女が

現われて「我が心慰めかねつ」の歌の由来を語り、更に月の面白さに舞を舞いつつ、阿弥陀如来や大勢至菩薩の功徳を賛歎するが、やがて旅人は去り、老女ひとり寂しく残るという筋である。

もとより処も姨捨の、山は老女が住み処の、昔に帰る秋の夜の月の友人円居して、草を敷き花に起き臥す袖の露の、さも色々の夜遊の人に、いつ馴れそめてうつゝなや。……

昔の秋を思ひ出でたる妄執の心、やる方もなき今宵の秋風身にしみぐ\と、恋しきは昔、しのばしきは閻浮の秋よ友よと思ひ居れば、夜もすでにしらく\と、はやあさまにもなりぬれば、我も見えず旅人も帰るあとに、ひとり捨てられて、老女が昔こそあらめ、今も又姥捨山とぞなりにける。……

という詞章を、芭蕉は思い浮べていたのであろう。伝えによっては、「我が心慰めかねつ」の歌を棄てられた老女の詠とするものもあって、謡曲もその系統に属するから、芭蕉の脳裡には、この歌を詠みつつ月に泣く老女の俤が髣髴していたのであった。

其角の『雑談集』(元禄五年刊)には、この句について次のような記事が見える。

翁北国行脚のころ、さらしなの三句を書とめ、いづれかと申されしに、

俤や姨ひとり泣ク月の友

といふ句を可然に定たりと申ければ、誠しか也。一句人目にはたゝず侍れども、其夜の月の天心にいたる所、人のしる事少なりと、悦び申されけり。

「月の天心にいたる」頃は、既に月見の客も去って、山中に捨てられた老女が唯一人月に泣くのである。それはさながら謡曲の末尾の情景そのままであって、それを背景にロマンチックな昔話の気分を盛った自信作だったことが窺われる。なお、「さらしなの三句」とは、「あの中に」「おもかげや」「いざよひも」の三句を指すのであろう。

更科紀行真蹟草稿・あら野・いつを昔・芭蕉庵小文庫・泊船集・春草日記・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・木曾の谿・壬生山家・祖餞

しなの丶さか木と云處にとまりて

427

いざよひもまださらしなの郡哉　（真蹟短冊）

秋季（いざよひ）。

語釈　○**しなの丶さか木と云処**　「信濃の坂木と云ふ処」。信濃国埴科郡坂木村（現坂城町坂城）。姨捨山の東南方、千曲川の東岸に位置する。江戸時代を通じて幕府直轄の天領。古くから「坂城」「坂木」両様の書き方があった。○**とまりて**　「泊りて」。○**いざよひ**　「十六夜」。中秋の名月の翌晩、八月十六日の夜をいう。ためらう意の動詞「いざよふ」から出た語で、名月は日没と共に上るのに対して、それよりかなり後れてためらうように上るからの名である。ここはもとより月を含みとしている。「いざよひ、十六日。……いざよひは源氏物語、いるかたみせぬと云は十六日也。凡十六日以前は、いざよひとはいふべからず。但、限十六日之由は定家説なり」（『八雲御抄』）「いざよひは闇の間もなしそばの花　猿雖」（『続猿蓑』下）「**Izayoino tçuqi. i, Iŭrocunichino yono tçuqi.**」（『日葡辞書』）。○**さらしなの郡**　「更級の郡」。信濃国更級郡。「さか木」は前述の如く埴科郡であるが、このあたりは更級郡と接しているので、凡そに言ったのである。「まだ去らじ」を掛けているであろう。「奥刕名取の郡に入て、中将実方の塚はいづくにやと尋侍れば」（『猿蓑』巻二、芭蕉発句「笠島や」前書）「**Couori.**」（『日葡辞書』）。

大意　名月の夜に引続き十六日の晩も、まだ同じ更級の郡で月見をすることだ。

考　「更科」（『木曾の谿』）「しなの丶国さかきといふ所にて」（『壬生山家』）「十六夜坂木と云処にて」（『祖餞』）等の前書がある。『紀行』では前の「おもかげや」の句と並んでおり、『蕉翁句集草稿』にも「是越人とおば捨月見の時也」と注している。句中の「いざよひ」の語からして、八月十六日の夜坂木村に泊った時の吟と見てよい。

中秋の名月を更級の名所で賞し得た喜びが、翌晩もまだ尾を引いている。そんな気持を、いざよいの月をも名月と同じ郡で心ゆくまで眺め得た、と言ったのである。坂木は厳密にいうと同じ郡ではないけれども、そんなことはこの

場合問題ではない。月見ということを間接的な表現で述べたところが俳諧的な興で、いわば軽みなのである。この時越人も「さらしなや三よさの月見雲もなし」の吟があったが、「三よさの月」は待宵・名月・既望（いざよい）の三夜で、旅程からして十四日の夜はまだ更級郡に入っていなかった筈である。「さらしな」の地名を大雑把に用いている点では、二人とも変るところがない。

428 木曾のとちうきよの人のみやげ哉　（更科紀行真蹟草稿）

秋季（とちの実）。

語釈 ○**木曾のとち**　「木曾の橡」。木曾の山路に落ちていた橡の実。橡の実は球形で、秋に黄褐色に熟し、厚い皮が裂けて、中から赤褐色の光沢のある種が現われる。この種は澱粉質に富み苦みが強いが、よくさらして餅や団子に製し、粥にしても食べる。秋の季語。「杼……其実楝子の大さ有。土民採て粉とし餅とす。凶年食之」「橡ノ実　山木ニテ大木アリ。……実ハ栗ヨリ少大キ也。餅ニ作リ麪トシテ凶年ノ食トス。……木曾ノ山中ニ多シ」（『篗纑輪』）「うらやまし君が木曾路の橡の粥　路通」（『鷹獅子集』）「Tochi.」（『日葡辞書』）。○**うきよの人のみやげ**　「浮世の人の土産」。「うきよの人」は、俗世間で普通の生活を営んでいる人。ここは名古屋の医者で俳人の荷兮を指す。この人に対する旅の土産の意。「土産」（Ⅱ*363*）参照。「麦の粉を土産す」（『猿蓑』巻六、之道発句「一袋」前書）。

大意 木曾の山路に落ちていた橡の実を、俗世間に住む人への土産にすることだ。

考 『更科紀行』旅中の吟。紀行の真蹟草稿では、「よにおりし人にとらせん木曾のとち」の句を抹消して次にこの句を書いてあり、「よにおりし」（「世に居りし」）の句の改案であることを示している。『あら野』巻五に、

　木曾の月みてくる人の、みやげにとて杼の実ひとつおくらる。年の暮迄うしなはず、かざりにやせむとて

　としのくれ杼の実一つころ〳〵と　荷兮

とあり、恐らくは木曾路の旅に同行した荷兮の奴僕に託して橡の実一粒を贈ったのであろう。
加藤楸邨氏も言われたように、「うきよの人」という表現は、浮世の外に居る芭蕉自身のあり方を強く意識した言い方であって、その点「よの中は稲かる頃か草の庵」（Ⅱ*311*）の句などと揆を一にしている。但し、だからといって俗世の人に対して世外の楽しみを教えようというような優越感に基づくのではなく、用のない旅などなかなか出来ない世間の人に、せめて木曾路の風情を想ってもらう種にもという心遣いなのである。それにしても橡の実一粒の贈物とは、如何にも世外の風流人らしい。西行歌「やまふかみいはにしだるゝ水ためんかつぐおつるとちひろふほど」（『山家集』下）が意識されていようが、句自体は取立てていう程の出来ではない。

429　身にしみて大根からし秋の風　（更科紀行真蹟草稿）

秋季（身にしみて・秋の風）。

語釈　○**身にしみて**　大根の辛みが身にしみることを主とし、秋風の身にしむ感じを含めていう。「身にしむ」は秋の季語。（Ⅰ*183*）参照。「物ごとの身にしむ風やをなご笹　才麿」（『椎の葉』）。○**大根からし**　「大根辛し（だいこんから）」。積翠の『芭蕉句選年考』に「彼の地からみ大根と世俗にいふあり。其形小さくして気味至つてからし」と見える。「冬のまさきの霜ながら飛　沾圃　大根のそだゝぬ土にふしくれて　芭蕉」（『続猿蓑』上）「月花に庄屋をよつて高ぶらせ　珍碩　煮しめの塩のからき早蕨　怒誰」（『ひさご』）「Daicon. Vôqina ne.」「Carai.」（『日葡辞書』）。

大意　秋風の吹く木曾路の旅では、大根の辛さが身にしみて感じられる。

考　『更科紀行』の旅中の作である。恐らくは木曾路の旅籠で食膳に出た大根おろしの辛さに感を発したのであろう。「身にしみて大根からし」は実感を確かに把握しており、寒気の早く来るこの辺りの秋風の身にしむ感じと響き

合う。秋風の身にしむのを大根の辛さに譬えたという取り方は悪く、……文章上は身にしむの語は大根のみにかゝるのであるが、又た余意として同時に秋風にもかゝるのである。
（内藤鳴雪『評釈』）

とするのが至当である。其処から下五との間に「匂ひ」「響き」に類する感味が生まれて来るのだ。それは木曾路の旅での体験であると共に、人生の寂しさに通じている。山本健吉氏が『芭蕉その鑑賞と批評』に於いて、白が秋の色であるところから、大根の白の色彩がこの句全体に滲透しており、晩秋蕭殺の気が白色を主調として「身にしむ」のだと述べておられるのは、優れた鑑賞であった。これだけの句が、匆卒の間にまとめられた『更科紀行』のみに見えて、当時の他の集に収められなかったのは不思議である。

善光寺

430 月影や四門四宗も只一　（更科紀行真蹟草稿）

善光寺奉納
月清し四門四宗に只一ツ　（姨捨とはず草）

秋季（月影）。

語釈 ○**善光寺**　既出（Ⅱ *426* 前書）。○**月影**　「ツキカゲ」。月の光。現実の月よりは、仏教の真の悟りの境地をいう「真如の月」を意味する象徴的表現である。「月影を雲のかくすや無正闇　重貞」（『毛吹草』巻六）「Tçuqicaguega sasu.」（『日葡辞書』）。○**四門四宗も只一**　「四門四宗も只一つ」。「四門」は、善光寺には四つの門があり、東門を定額山善光寺、南門を南命山無量寿寺、北門を北空山雲上寺、西門を不捨山浄土寺とするのを指すと思われる。「四宗」については、善光寺が天台・浄土兼学（一部に時宗も含

む）だったところから、顕・密・禅・戒の四宗とする説と、天台・真言・禅・律の四宗とする説があるが、よく分らない。或いは、「寺内は天台宗・浄土宗・時宗の三宗が同居する特殊な組織。そのさまを、「四門」の語呂に合わせて「四宗」と言ったのであろう」（今栄蔵氏『句集』）と取るべきかも知れぬ。要するに、宗門は多岐に分れていても、帰する所は只一つ、真如の月の照らす悟境であるというのである。「Ximon.」（『日葡辞書』）。

大意 有難い御寺の上に、月の光があまねく照っている。四方の門に宗派はいろいろ分れていても、帰する所は只一つ、真如の月の照らす悟境なのだ。

考 長野の善光寺に詣でて、仏道の至境を賛仰する心を託した挨拶吟で、芭蕉達は更科の月を賞してから善光寺の方へ廻ったのである。

全国的な信仰を集める大伽藍を照らす月の光——、この情景は幽秘の感を誘うものであるが、そういう実境実感よりも、ここではやはり真如の月に象徴された信仰の至境をあらわそうとする挨拶性が強く感ぜられる。霊地を訪れる俳諧師の習性であるが、伝統的な発想の枠組の中では、かなり成功した典型的な例といえよう。

『姨捨とはず草』（元水撰、宝暦三年刊）の「月清し」という句形は、或いは初案だったかも知れず、「月影や」よりもやや写生味がまさるようである。その外、「月清し四門四州もたゞひとつ」（『白雄夜話』）「月影や四門四州も唯ひとつ」（『芭蕉翁句解参考』）等の異伝は何れも信じ難い。「四州」は、仏説にいう須弥山をめぐる四洲の意に解したものであろう。

431 吹とばす石はあさまの野分哉　（更科紀行真蹟草稿）

秋季（野分）。

語釈 **○吹とばす石** 「吹き飛ばす石」。暴風が吹き飛ばす活火山の山肌の処々にある石。「蛍火や吹とばされて鳰のやみ　去来」

（『猿蓑』巻二）。○**あさま**　「浅間（あさま）」。長野県北佐久郡軽井沢町と群馬県吾妻（あがつま）郡嬬恋（つまごい）村にまたがる活火山で、標高二千五百四十二メートル。古来噴煙の目立つ東国の山として、「しなのなる浅間のたけに立煙をちこち人のみやはとがめぬ」（『伊勢物語』八段）を始め、歌に詠まれることが多い。○**野分**　台風をいう秋の季語。既出（Ⅰ*144*）。

大意　暴風の吹き飛ばす山肌の石は、如何にも物凄い。さすがは浅間山の野分だ。

考　善光寺から江戸を指して行く途中、八月下旬の頃中山道の通る浅間山南麓での印象を句にしたものである。『紀行』の真蹟草稿では、善光寺での「月影や」の句の次に、

秋風や石吹颪すあさま山
吹颪（落）あさまは石の野分哉
吹落す石をあさまの野分哉

の二案を記して何れも抹消し、その次に、

と書いて「落す」を抹消、右に「とはす」と記し、「石を」の「を」を見せ消ちにして右に「は」と書いている。推敲過程を如実に示すもので、右の順序に推敲されたものと見てよかろう。蝶夢の『芭蕉翁発句集』に上五が「吹とざす」となっているのは明らかな誤記である。

「往古浅間嶽燃て沙石を吹出し、今もその石残りて甚軽し。軽石とて人是を拾ふ」（東海呑吐『芭蕉句解』）「これ浅間のやけ山なるを喩せるなり。麓の石は碓ばかりなるも軽うして小児もころばす」（亦夢『俳諧一串抄』）等とあるように、浅間山の噴出した軽石が裾野へかけて磊々と随処に散らばっており、上半分は草木も生えず荒涼としている。山麓を通った時折柄の暴風に、この軽石が飛ばされる物凄いさまを芭蕉は体験したのであって、この句では石の飛ぶ浅間山特有の暴風の烈しさを表現するのが主眼となった。「秋風や石吹颪すあさま山」では、「石吹颪す」という描写はあっても、「野分」の語もなくて単なる「秋風」では烈しさが感ぜられず、句作りも尋常過ぎる。「吹颪（落）あさまは石の

野分哉」で句の表現の骨格が定まり、「石の野分」の語も、普通の草木を分けて吹きすさぶ「野分」とはちがった浅間山独得の情況が髣髴としている。次には「石」を上に持って来て「石を」として見たが、第二案の「あさまは」を生かして「石は」とし、「吹落す」の代りに「吹とばす」の語を得て治定したのであった。古くから山の名に「浅まし」を掛けたとする見方が行われているが果してどうか。『鑑賞日本古典文学』で井本農一博士の述べられたように、この句の文脈は「石を吹きとばすのは浅間の野分である」というのを「吹きとばす石は浅間の野分である」と言い替えて句勢を強めた一種の倒装法であろう。最初の二案に於いても、「あさま」に掛詞のありそうな様子は見えない。「浅まし」を言い掛けたとまで考える必要はないと思う。兎も角数次にわたる推敲によって、軽い火山石を吹き飛ばす野分の凄まじさをあらわそうとした意図は成功したのである。井本博士はまた、この過程を通じて、山の頂から石を吹きおろすという意は薄れて、浅間の野分の激しさをいう方に焦点が移っていると見て、

だから、この句を読むと、秋も深まろうとする荒涼たる浅間高原を、時おりどっと吹く野分に追われるように歩いている芭蕉と越人の姿が眼に浮かんでくる。砂礫を吹き飛ばす野分の中をせっせと歩みを進める二人の向こうに、ときおりかげる秋の日をあびて紫色に見える浅間山の大きな山姿、ただならぬ雲行きなども、眼に浮かぶ。（『鑑賞日本古典文学・芭蕉』）

と述べておられる。後案に風の石を吹きおろす趣が薄れているかどうかは、人によって受け取り方がまちまちであろうが、二人の旅姿がおのずから目に浮ぶのは論の無いところで、すぐれた鑑賞といえよう。初案の傍観的な趣では、このような味わいは無い。それもこれも、旅人の体感した野分の激しさの十全な表現によって味到されることなのである。

素堂亭

十日菊

蓮池の主翁又菊をあいす。きのふは龍山の宴をひらき、けふはその酒のあまりをすゝめて、狂吟のたはぶれとなす。なを思ふ、明年誰かすこやかならん叓を

432

いざよひのいづれか今朝に残る菊　（笈日記）

陸奥衛・泊船集・蕉翁句集

十六夜のいつしか今朝に殘菊　（翁草）

深川素堂より文の中に

十六夜の月と見はやせ残る菊　（千鳥掛）

秋季（残る菊・いざよひ）。

語釈 ○**素堂亭**「ソダウテイ」。「素堂」は、芭蕉の古くからの友人山口信章の雅号。甲州の産で、江戸に出て漢学を修め、算用の才を以て仕官していたが、延宝七年致仕して退隠、上野不忍池の畔に住み、貞享二、三年頃葛飾阿武（あたけ）に移った。この句は葛飾の素堂の家で詠まれたわけである。俳諧を嗜んで、談林の時代から芭蕉の俳友であり、葛飾蕉門の祖とされた。享保元（一七一六）年八月十五日歿、享年七十五。○**十日菊**「十日（とをか）の菊（きく）」。九月九日重陽の節供に飾られた菊を翌日まで持ち越したもの。端午の節供の菖蒲と共に、「六日の菖蒲十日の菊」といって時季はずれの物のたとえになる。「その後病はいえたれど、六日の菖蒲十日の菊」（『勧善懲悪覗機関』序幕）。○**蓮池の主翁**「蓮池（れんち）の主翁（しゆをう）」。「主翁」は主（あるじ）の翁（おきな）で、素堂を指す。芭蕉庵に近い葛飾阿武のその家には蓮池があった。「蓮池」は、蓮を植えた池。その花を観賞するのである。「ハスイケ」とも訓めるが、この一節全体の調子からして音読したい。「Renchi. Fachisuno iqe.」（『日葡辞書』）「主翁　シユヲウ」（文明本節用集）。○**菊をあいす**「菊（きく）を愛（あい）す」。「唯このかげに遊て、

風雨に破れ安きを愛するのみ」（「芭蕉を移詞」）「Aixi, suru, ita. ……Fanauo aisuru.」（『日葡辞書』）。○**きのふ**　「昨日」。即ち九月九日の重陽の節供を指す。○**龍山の宴をひらき**　「龍山の宴を開き」。「龍山の宴」は、『晋書』に伝える江夏の人孟嘉の話に出る。九月九日に龍山（中国湖北省江陵県にある山か。安徽省当塗県の山ともいう）で宴が開かれた時、嘉が酔って帽が落ちても気づかずに嘲笑されたが、優れた文を作って人々を驚かせたという『蒙求』の「孟嘉落帽」の故事に拠った。「岸上に莚をのべて宴をもよほす」（「堅田十六夜之弁」）。○**けふ**　「今日」。即ち九月十日。○**その酒のあまりをすゝめて**　「その酒の余りを薦めて」。九月九日の宴の酒の残りを翌日また客にすすめるのである。「人に酒すゝむるとて、おのれまづたべて人にしひ奉らんとするは」（『徒然草』百二十五段）「病中のあまりすゝるや冬ごもり　去来」（『枯尾花』）「Saqeuo susumuru.」「Amari.」（『日葡辞書』）。○**狂吟のたはぶれとなす**　「狂吟の戯れと為す」。「狂吟」は「風狂の吟」で、俳諧の句のこと。句を作る遊びとした、の意。『竹馬狂吟集』の書名もあるように、古来「俳諧」を狂吟とも称したのである。○**なを思ふ**　「なほ思ふ」。「戯れの中でもやはり」という気持をあらわす。「を」は「ほ」の仮名ちがい。下の「誰かすこやかならん叓」を思うのであって、普通の語序を倒置した表現。○**明年誰かすこやかならん叓を**　「明年誰か健やかならん叓を」。来年この中の誰が元気でこの日を迎えられるかということを、の意。死が何時訪れるか分らない人の世の無常をいった。杜甫の詩句「明年此会知誰健」（明年此の会知んぬ誰か健やかならん。「九日藍田崔氏荘」）を踏まえている。「去年の今宵は夢のごとく、明年はいまだきたらず」（文考「今宵賦」―『続猿蓑』上）「誰とても健ならば雪のたび　長崎卯七」（『猿蓑』巻二）「Miŏnen. Aquru toxi.」（『日葡辞書』）。○**いざよひ**　既出（Ⅱ *427*）。○**いづれか**　「何れか」。「いづれかまさる」の略。「名月の夜この二句をなし出して、いづれか是、いづれか非ならんと侍しに、此間わかつべからず」（『続猿蓑』下、芭蕉名月句支考評）「Izzureca ?」（『日葡辞書』）。○**今朝**　「ケサ」。九月十日の朝。○**残る菊**　「残る菊」。咲き残った菊。「残菊　秋也。九月九日以後の菊を云也」（『御傘』）。

大意　九月十日の今朝に残った菊と十六夜の月との何れが趣がまさるだろうか。何れ劣らぬあわれさである。

考　『陸奥鵆』（桃隣撰、元禄十年刊）にも『笈日記』と略々同じ前書があり、冒頭に「貞享五戊辰菊月仲旬」の年記が見える。最初に掲げた『笈日記』の句文は下巻雲水部に収められたものであるが、同書には中巻の「瓜畠集」（落梧遺撰）秋之部にも「十六夜」と前書して所収する。しかし、この前書は句意を誤解したもので相応しくない。貞享五年九月

十日素堂亭での吟であって、雲水部には芭蕉の句の後に、

残菊はまことの菊の終りかな　路通
咲叓もさのみいそがじ宿の菊　越人
昨日より朝露ふかし菊畠　友五
かくれ家やよめなの中に残る菊　嵐雪
此客を十日の菊の亭主あり　其角
さか折のにゐはりの菊とうたはばや　素堂

よには九の夜日は十日といへる叓を、ふるき連哥師のつたへしを、此あしたしみを払ひて申侍る。

又中比

恋になぐさむ老のはかなさ
むかしせし思ひを小夜の枕にて
我此心をつねにあはれぶ。今なを思ひいづるまゝに
はなれじと昨日の菊を枕かな　仝

と他の人々の句も記してあり、この日の集いのさまを窺うことが出来る。

『翁草』（里圃撰、元禄九年刊）の「いつしか」は杜撰であろう。『千鳥掛』の句形は、前書によれば当時素堂から鳴海の知足に報じたものらしく、興じた調子の露わなのは初案ゆえかと思われる。なお『蕉翁句集』も『笈日記』と同じ前書を付するが、句の下五を「残ㇲ菊」とし、元禄六年の部に入れているのは杜撰である。

解には古来諸説があるが、この句は普通の散文の語序に直すと、「今朝に残る菊（と）十六夜の何れか（優る）」となるのだ。重陽の節の翌日の菊と名月の翌晩の月の趣を比べて、聊か盛りを過ぎたあわれさは甲乙がつけ難いといっ

たのである。つい先頃見て来た木曾路の既望の月と素堂亭の残菊とを比べ興じて亭主への挨拶とした作意がある。春の花と秋の紅葉を比較した万葉の昔から、二つの物の優劣を比較する趣向が詩歌の世界にはあって、芭蕉自身にも、この句の外、既に扱った「雪の鮏左勝水ー無月の鯉」（Ⅰ158）「猿を聞人捨子に秋の風いかに」（Ⅰ186）等がこの系列に属するものであった。「いざよひの」に陳述の意を見る別解が赤羽学博士の『芭蕉俳句鑑賞』にあるが、私は採らない。

433

木曾の痩もまだなをらぬに後の月

陸奥衛・蕉翁句集・むさし野三歌仙

仲秋の月はさらしなの里姨捨山になぐさめかねて、猶あはれさのめにもはなれずながら、長月十三夜になりぬ。今宵は宇多のみかどのはじめてみことのりをもて世に名月とみはやし、後の月あるは二夜の月などいふめる。是才士文人の風雅をくはふるなるや。閑人のもてあそぶべきものといひ、且は山野の旅寐もわすれがたうて、人〳〵をまねき瓢を扣、峯のさゝぐりを白鴉と誇る。隣の家の素翁、丈山老人の一輪いまだみたず二分虧といふ唐哥は此夜折にふれたりと、たづさへ来れるを壁の上にかけて、草の庵のもてなしとす。狂客なにがし、しらゝ吹上とかたり出ければ、月も一きははへあるやうにて、中〳〵をかしきあそびなりけらし　（笈日記）

歸庵に十三夜

木曾の痩まだ直らぬに後の月　（木曾の谿）

歸庵に十三夜

木曾の痩まだ直らぬに十三夜

（寛政板更科紀行）

秋季（後の月）。

語釈 **○木曾の痩** 「木曾の痩せ」。貞享五年八月の木曾路の旅の労苦で芭蕉の身が痩せたことをいう。「花にうき世我酒白く食黒し　芭蕉　眠ヲ尽ス陽炎の痩　一晶」（『虚栗』）「Yaxe, suru, eta.」（『日葡辞書』）。**○まだなをらぬに** 「未だ癒らぬに」。まだ本復しないのに、の意。「を」は「ほ」の仮名ちがいである。「苔ながら花に並ぶる手水鉢　芭蕉　ひとり直し今朝の腹だち　去来」（『猿蓑』巻五）「Yamaiga nauotta.」（『日葡辞書』）。**○後の月** 「後の月」。陰暦九月十三夜の月をいう。八月十五夜の名月に対する称。季節物の枝豆や栗を供えて月見をする。「豆名月」（Ⅰ40）参照。「九月十三夜は。栗名月とも。まめ名月ともいひ。又ふた夜の月。後のこよひなども申し侍る。名月のおさめなれば。夜をのこすいりかたをうらみ。つねにも似ず月の名残をしたふ心ばへなどすべし」（『山之井』）「家こぼつ木立も寒し後の月　其角」（『炭俵』下）「Nochi.」（『日葡辞書』）。**○仲穐の月** 「仲穐の月」。「仲穐」は陰暦八月。八月十五夜の名月をいう。「穐」は「秋」の古字。「むさしの仲秋の月はじめて見侍て」（『炭俵』下、素龍発句「明月や」前書）「Chixù. I, chùjù.」（『日葡辞書』）。**○さらしなの里** 「更級の里」。既出（Ⅱ427、426）。信濃国の更級郡をいうが、「里」は郡より範囲が狭い感じの語で、ここは姨捨山のある村を斯う称したと見られる。**○姨捨山** 「ヲバステヤマ」。既出（Ⅱ426）。**○なぐさめかねて** 「慰め兼ねて」。月見をして悲愁の情に堪えなかった気持を、姨捨伝説に出る有名な歌「わがこゝろなぐさめかねつさらしなやをばすてやまにてる月をみて」（『大和物語』百五十六段等。Ⅱ426参照）の詞を引いて表現した。**○猶あはれさのめにもはなれずながら** 「猶あはれさの目にも離れずながら」。江戸に帰ってからもなお、そのしみじみとした趣が目のあたりに髣髴する状態のままで、の意。「あはれさ」は、趣深さをいう広い意味である。「ながら」は既出（Ⅰ221）。**○長月十三夜** 「ナガヅキジフサンヤ」。陰暦九月十三日の夜、即ち前に述べた「後の月」の当夜である。なお、『日葡辞書』には「Nagazzuqi. i, Cuguat.」とあるのみで、「Nagatçuqi.」の語は見えない。「長月の初、古郷に帰りて」（『野ざらし紀行』）「九月十三夜」（『あら野』巻七、素堂発句「唐土に」前書）。**○宇多のみかど** 「宇多の帝」。第五十九代の天皇。光孝天皇の第七皇子。菅原道真を登用し、藤原氏を抑えて政治の刷新をはかった。「亭子院」「寛平法皇」の称もある。承平元（九三一）年七月十九日、六十五歳を以て崩御。「宮のうちにめさんことは宇多のみかどの御いましめあれば、いみじうしのびて」（『源氏物語』桐壺）「Micado.」（『日葡辞書』）。**○はじめてみことのりをもて世に名月とみはやし** 「初めて勅を以て世に名月と見囃し」。宇多天皇が仰せ出されて、はじめて九月十三夜を後の名月と定められ、

以来世間一般にこの夜の月を中秋の名月と同格にもてはやして観賞するようになったことをいう。藤原宗忠の『中右記』に「長保四年元年保延九月十三日、今夜雲浄月明。是寛平法皇、今夜明月無双之由被二仰出一云々。仍我朝以二九月十三夜一為二明月之夜一也」と見える。「天照大御神のみことのりもて思兼の神八百万の神だち議り択みて」（謡曲「要石」）「十六夜の月と見はやせ残る菊　芭蕉」（『千鳥掛』下）「Micotonori. i, Ringuen.」「Mifayaxi, su, aita,」（『日葡辞書』）。**○あるは**　「或るは」。「或るいは」と同じ。「あるは宮守の翁、里のおのこ共入来りて」（「幻住庵記」）。**○二夜の月などいふめる**　「二夜の月など云ふめる」。二夜の月などと言うようだ。中秋の名月と並べて「二夜」というのである。既出「後の月」の項の『山之井』の記事参照。**○是**　「コレ」。**○才士文人**　風雅の才ある人や文章の巧みな人。殆んど同じ意味に二語を重ね用いている。同じ表現は前にもあった（Ⅰ*187*前書）。**○風雅をくはふるなるや**　「風雅を加ふるなるや」。中秋の名月以外に風雅の材料を加えたのであろうか、の意、「風雅」は既出（Ⅱ*416*）。**○閑人のもてあそぶべきものといひ**　「閑人の翫ぶべき物と云ひ」。九月十三夜の月は、閑暇の多い隠者が観賞すべきものであり、の意。「閑人の茅舎をとひて」（『野ざらし紀行』）「秋のあはれいづれか〱の中に月を翫て」（『炭俵』下、亀之部題記）「Tçuqi fanauo mote asobu.」（『日葡辞書』）。**○且は山野の旅寐もわすれがたうて**　「且つは山野の旅寐も忘れ難うて」。一方では、ついこの間の山野の旅寝も忘れ難くて、の意。「山野の旅寐」は、『更科紀行』の旅を指す。「且は我為に童子となりて道の便りにもならんと」（『笈の小文』）「山野海浜の美景に造化の功を見」（『笈の小文』）「さすが湖水の納涼もわすれがたくて」（文考「今宵賦」—『続猿蓑』上）「Sanya.　Yama, no.」（『日葡辞書』）。**○人〱をまねき**　「人〱を招き」。漢字の繰返しにも「〱」を用いるのは、この時代の慣用である。「うへのゝ花見にまかり侍しに、人〱幕打さはぎ」（『炭俵』上、芭蕉発句「四つごきの」前書）。**○瓢を扣**　「瓢を扣き」。この「瓢」は、酒の容器としての物であろう。別に芭蕉庵には、素堂の命名にかかる米入れの大瓢「四山」（Ⅰ*131*、Ⅱ*261*参照）があったが、それではあるまい。瓢を叩くのは、唄などうたう時拍子をとるのである。「暑き日や腹かけばかり引結び　荷兮　太鼓たゝきに階子のぼるか　野水」（『あら野』員外）「Tataqi, u, aita.」（『日葡辞書』）。**○峯のさゝぐりを白鴉と誇る**　「峯の笹栗を白鴉と誇る」。「さゝぐり」は、実の小さい柴栗。「白鴉」は、杜甫の詩「崔氏東山草堂」に「盤剥二白鴉谷口栗一」と見える栗の名産地。長安の東南郊、陝西省藍田県の東南二十里にある。山でとれた柴栗を、白鴉谷口の名産品のように自慢する、というのである。「やまかぜにみねのさゝぐりはら〱と庭におちしく大原の里」（『山家集』下）「素琴を送られしより、……あるは声なきに聴き、あるは風にしらべあはせて自ほこりぬ」（『続猿蓑』下、素堂発句「うるしせぬ」前書）

「Focori, ru, otta.」（『日葡辞書』）。〇**隣の家の素翁**　「隣の家の素翁」。「素翁」は、山口素堂を指す。深川の芭蕉庵とは文字通りの隣家ではないが、葛飾阿武の彼の家は、芭蕉庵から程近かった。「いざよひの」（Ⅱ *432*）の句の条参照。「我友素翁はなはだ哀がりて、詩を題し文をつらぬ」（「蓑虫ノ説」跋）。〇**丈山老人**　「丈山」は、近世初期の漢詩人石川丈山を指す。名は重之。家康の近侍として仕えていたが、大坂夏の陣の後致仕、剃髪して洛北一乗寺村の詩仙堂に住んだ。寛文十二年五月二十三日歿、享年九十。「老人」は一種の敬称である。「正に幻住老人の名をのみ残せり」（「幻住庵記」）「Rôjin. Voita fito.」（『日葡辞書』）。〇**一輪いまだみたず二分虧といふ唐哥**　丈山の詩集『覆醤集』上所収の「九月十三夜入二吉田氏家一玩二月池亭一」の詩の起句「一輪未レ満二分虧」を指す。満月の二日前であることを、こう形容したのである。「唐哥」は漢詩のことで、「哥」は「歌」の略体。「漁舟火影寒焼浪、駅路鈴声夜過山といふから歌をたからかに口ずさみ給へば」（『平家物語』巻五）「Ichirin tacacu cacareba, bancocu vonajicu miru.」「Michi, tçuru, ita.」「Caqe, uru, eta.」（『日葡辞書』）。〇**此夜折にふれたりと**　「此の夜折に触れたりと」。この九月十三夜という時に縁がある、その折に相応しいと、の意。「蓑輪笠嶋も五月雨の折にふれたりと」（『おくのほそ道』）「Cotoni fururu.」（『日葡辞書』）。〇**たづさへ来れるを**　「携へ来れるを」。「楽器を手に携へて、雲に乗じて忽ち来り」（謡曲「枕慈童」）「Tazzusaye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。〇**壁の上にかけて**　「壁の上に掛けて」。掛軸に仕立てた書蹟の幅物を壁に掛けたのであろ。「骸骨どもの笛鼓をかまへて能する処を画て、舞台の壁にかけたり」（『続猿蓑』下、芭蕉発句「稲づまや」前書）「Cabe.」（『日葡辞書』）。〇**草の庵のもてなし**　「草の庵のもてなし」。「草の庵」は芭蕉庵を指す。「もてなし」は客に対するもてなしで、食物だけには限らない。「草のいほりまかりはなれて、ふかき山にいり侍りぬる」（『源氏物語』若菜上）「あるじは舟木屋の甚介とて、気さくなる翫し」（『好色一代男』巻二）「Iuori.」「Motenaxi.」（『日葡辞書』）。〇**狂客なにがし**　「狂客何某」。何とかいう風狂人。これは名古屋から同行して芭蕉庵に滞在していた越人と思われる。名をおぼめかす言い方は既出（Ⅱ *267*）。「酔翁狂客月にうかれて来れり」（「堅田十六夜之弁」―『芭蕉庵小文庫』）。〇**しらゝ吹上とかたり出ければ**　「白良吹上と語り出でければ」。「しらゝ」は、今の和歌山県西牟婁郡白浜町の海岸。「吹上」は、同じく和歌山県紀の川河口と雑賀の間の浜。何れも月の名所の歌枕である。『平家物語』巻五、月見の章に、「或はしらら・吹上・和歌の浦、住吉・難波・高砂・尾上の月のあけぼのをながめてかへる人もあり」とあり、ここはその一節を平曲として語り出したことをいう。後述「二人見し」（Ⅱ *442*）の句の条で述べるように、酒好きの越人は、酔うと平曲を語り出すのが常だったので、ここの「狂客」は彼のことと推定されよう。なお、芭蕉は「更科姨捨月之弁」の冒頭をも、「あるひはしらゝ吹

上ときくにうちさそはれて、ことし姨捨の月みむことしきりなりければ」（『芭蕉庵小文庫』）と書き出している。「この行長入道平家物語を作りて、生仏といひける盲目に教へてかたらせけり」（『徒然草』二百二十六段）。○**一きははへあるやうにて**　「一際栄えあるやうにて」。一段と引き立って光彩があるようで、の意。「夜に入て物のはえなしといふ人、いと口をし。……にほひも、ものの音も、たゞ夜ぞひときはめでたき」（『徒然草』百九十一段）「Fitoqiua.」（『日葡辞書』）。○**中〳〵をかしきあそびなりけらし**　「中〳〵をかしき遊びなりけらし」。相当に面白い（趣のある）月見の遊びであったようだ、の意。この「中〳〵」は「却って」ではなく、現代の用法にも通ずる「相当に」の意と解される。「けらし」に推量の意はなく、語調を和らげる為に添える芭蕉独得の言い方である。「やあ中〳〵よふござる」（狂言記「蛭子大黒殿」）「いろ〳〵のかたちおかしや月の雲　湍水」（『あら野』巻六）「やがてばら〳〵に立わかれて、いつか此あそびにおなじからむ」（支考「今宵賦」―『続猿蓑』上）「Asobi.」（『日葡辞書』）。

大意　木曾の旅での身の痩せもまだなおらないのに、後の月だといっては又月見の遊びをする。酔興なことだ。

考　この句には珍しく長文の後書が付いているが、『笈日記』下巻雲水部には、芭蕉の発句の前に当夜同席した人人の左のような句文が収められている。

芭蕉庵

十三夜

ばせをの庵に月をもてあそびて只月をいふ。越の人あり、つくしの僧あり。まことにうき艸のこらず水にあへるがごとし。あるじも浮雲流水の身として、石山のほたるにさまよひ、さらしなの月にうそぶきて、庵にかへる。いまだいくかもあらず、菊に月にもよほされて、吟身いそがしい哉。花月も此為に暇あらじ。おもふに今宵を賞する事、みつればあふるゝの悔あればなり。中華の詩人わすれたるににたり。ましてくだら・しらぎにしらず。わが国の風月にとめるなるべし

もろこしに富士あらばけふの月見せよ　素堂

かげふた夜たらぬ程照る月見哉　杉風

後の月たとへば宇治の巻ならん　越人
あかつきの闇もゆかりや十三夜　友五
行先へ文やるはての月見かな　岱水
後の月名にも我名は似ざりけり　路通
我身には木魚に似たる月見哉　僧 宗波
十三夜まだ宵ながら宬中哉　石菊

素堂の前書に「あるじも……石山のほたるにさまよひ、さらしなの月にうそぶきて庵にかへる。いまだいくかもあらず」とあるのによって、これらの句が貞享五年後の月見の雅会に於ける吟であることは疑いを容れない。なお、芭蕉の後書の次に、

貞享五戊辰菊月仲旬　蚊足書

物しりに心とひたし後の月

とあるのは、蚊足が当夜の執筆としてこれらの句文を清書し、句を書き添えたことを示すものである。この雅会での句文は、桃隣の『陸奥衛』にも収められている。蓼太の『むさし野三歌仙』（天明三年刊）には、竺蘭亭珍蔵の芭蕉真蹟として「中秋の月は更科姨捨にうかれありきて、猶その哀さのめにもはなれずながら、又十三夜になりぬ。こよひは菅公のむかしをゝふとも云、あるは延喜聖帝のはじめてながめさせ給ふなどゝも伝へうけ給り侍しかば、他の国にまさりたる風流もめでたき事におもひ、かつは旅寐のあはれもわすれがたうて、ひとゞゝを草の莚にまねきて、月を見るまねびをなんしけるならし」という文を収め、素堂の前書と共に小異のあるのは、初稿の文案かと思われる。『木曾の谿』や寛政板『更科紀行』所載の句形は、初案かとも考えられないではないが、杜撰誤伝の可能性も否定し難く、

『笈日記』の句形が唯一の信頼し得るものである。

「木曾の痩」の語について、加藤楸邨氏が、

「旅の痩せ」といわず、「木曾の痩せ」といったところに用意が見られる。すなわち、八月十五夜の月を見るのが目的だった更科の旅だから、「木曾の痩せ」といえば、月にあこがれた旅痩せの意味になるのである。（『芭蕉全句』）

と言っておられるのは良い。嶮路を冒して更科の名月を賞してからも、江戸に帰って残菊の宴、後の月見と忙しい日日が続いた。素堂の文にもある通り、まことに「吟身いそがしい哉」で、当人としても扨々酔興なと苦笑したくなるような思いがあったろう。「まだなをらぬに」のあたりに、そうした気持を読み取りたい。

434　あの雲は稲妻を待たより哉　（あら野）

いつを昔・陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集

秋季（稲妻）。

語釈　○**稲妻を待たより**　「稲妻（いなづま）を待つたより」。「たより」は、手がかりという程の意。雲の様子を手がかりに、稲妻を期待するのである。「稲妻」は秋の季語。既出（Ⅱ306）。「今のこのむ所の一筋に便あらん」（『続猿蓑』下、芭蕉名月発句文考評語）「Tayori.」（『日葡辞書』）。

大意　遠くの空の雲行がただならない。あの雲の様子は、今にも稲妻を走らせそうで、見る者が稲妻を期待する手がかりであるよ。

考　元禄二年春の『あら野』初出の句なので、貞享五年秋までには成っていた筈である。『蕉翁句集』は元禄二年とし、『一葉集』の前書にも「宿敦賀」などとあるが、何れもあり得ないことになる。

初秋の夕暮、端居の即興であろう。「稲妻のはかなきを、はかなき雲にて待つも、をかしみの一つ也」（杉雨『芭蕉翁発句評林』）といったところで、こうした句に無常の観相などの寓意を見るのは余計なことである。

……あの雲はと云詞、是遠く望たる眼前の気色、余情あり。亦、稲妻を待便と云、名誉也。電などは、雲のなき時は空にのみ光を顕す。雲覆ふ時は水気満るが故に、別て其影美光也。是村雲有て光を移す成れば、則水精を待便とも云べし。何れにも、陳頭雨など過る跡の山端に残る雲間の閃電の景色、今見るが如き吟也。不思議の詞を以て其風景を述たる、奇妙と云べし。（信天翁『笈の底』）

という説は、句の内容をなす自然をよく見ている。それを自らの心の動きとして表現したところに、面白味があろう。

435 菊鶏頭切盡しけりおめいこう　忘梅

（極月五日付尚白宛書簡）

きく鶏頭きりつくしけり御影講　千鳥の恩

（芭蕉翁真跡集）

冬季（おめいこう）。

語釈 **○鶏頭**　「ケイトウ」。ヒユ科の一年草。熱帯アジア原産で、古くから観賞用に栽培された。高さ約六十センチ。茎が太く、夏の終り頃からその先端が鶏のとさかのように変形して、下の部分に小花が密生する。花柄は赤・黄・橙・紫紅等さまざまの色を呈して極めて美しく、妖艶な感じである。秋の季語。「鶏頭の雪になる迄紅かな　市山」（『あら野』巻六）「Qeitô. Niuatorino atama. l, Qeitôgue.」（『日葡辞書』）。**○切尽しけり**　「切り尽しけり」。仏壇に供える為に切るのである。「Qiritçucuxi, su, uita.」（『日葡辞書』）。**○おめいこう**　「御命講」。「御影講」とも書く。法華宗の開祖日蓮の忌日。弘安五（一二八二）年十月十三日に示寂した。「日蓮上人御影講　自今日至明日日蓮宗寺院修御影講。又号会式。今明日多風烈。俗称日蓮御影講荒。……日蓮御影講当日　弘安五年今日寂。宗門寺院有説法読経」（『日次紀事』十月十二日、十三日条）「当代に及て、日蓮宗門の僧俗、毎十月十三日御影講とて祖像を祭る。種々の好菓及餅麪等、其外島台造花など巧手を絶す。御影講とて盛物を称して、

他宗の男女迄見物羣をなす。近年寺観坊舎に限らず、在家の民屋また祖像を安置し、饌具盛物美尽せり」（『滑稽雑談』）「柚も柿もおがまれにけり御影講　沾圃」（『続猿蓑』下）。

大意 御命講に供える為に、冬まで咲き残った菊や鶏頭をすべて切り尽してしまったよ。

考 元禄元年（貞享五年九月三十日改元）と推定される極月五日付尚白宛書簡に披露されており、その年十月十三日に詠まれたものと推定される。『芭蕉翁真跡集』には、編者松村桃鏡蔵の芭蕉自画賛の筆蹟を摸刻してあり、『千鳥の恩』（千梅・梅尺撰、寛保三年刊）は、千梅家珍の芭蕉真蹟画賛によって収めている。これらは表記の異同に過ぎない。

冬に入って間もなく迎える日蓮の忌日に、法会などが盛んに営まれるさまは、〔語釈〕に引いた諸書の記事にも明らかである。芭蕉の家は真言宗で、本人は禅なども修めたから、芭蕉庵で修したわけではなく、これは世間の有様を言ったのであろう。江戸あたりは法華宗のかなりひろがった処であった。「菊」「鶏頭」は何れも秋の季語で、十月の御命講に供えるのは、冬まで咲き残った趣になる。そうしたこの行事の頃の季節感を、句は巧みにとらえており、「切尽しけり」にはユーモアも感ぜられるのである。尚白宛に、

句はあしく候へ共、五十年来人の見出ぬ季節、愚老が描き口にかゝり、若(もし)上人真灵(しんれい)あらば我名ヲしれとぞわらひ候。

とあって、「おめいこう」を季語とした作がはじめてであることを自賛している。「あしく」は謙辞に過ぎず、相当の自信作だったのである。

大通庵の主道圓居士、芳名をきくことしたしきまゝに、ま見えむことをちぎりて、つゐにその日をまたず、初冬一夜の霜と降ぬ。けふはなをひとめぐりにあたれりといふをきゝて

436

其かたち見ばや枯木の杖の長　（芭蕉庵小文庫）

泊船集・蕉翁句集

冬季（枯木）。

語釈 ○**大通庵の主道円居士**　「大通庵の主道円居士」。出自経歴等未詳の人物。「居士」というから、在家の禅修行者だったのであろう。「大通庵」は、その庵号。「今昔、天竺ノ毗舎離城ノ中ニ浄名居士ト申ス翁在マシケリ」（『今昔物語集』巻三ノ一）「Coji.」（『日葡辞書』）。○**芳名をきくことしたしきまゝに**　「芳名を聞くこと親しきまゝに」。「芳名」は、道円居士の名を褒めていう。「まゝに」は、理由をあらわす語法。その人のよき名を馴染深く聞いていたので、の意。「遠流二芳名一、慈悲之徳長存二美誉一也」（遠く芳名を流へ、慈悲の徳長へに美き誉を存す。『日本霊異記』上ノ二十六）「我にも友のあるべきに、余りになればわび人の親しきだにも疎くして」（謡曲「敦盛」）「東風〻に糞のいきれを吹まはし　芭蕉　たゞ居るまゝに肱わづらふ　野坡」（『炭俵』上）「Fŏmei. Cŏbaxij na.」「Xitaxij.」（『日葡辞書』）。○**ま見えむことをちぎりて**　「ま見えむことを契りて」。お目にかかることを約束して。「ま見ゆ」は、「会ふ」の謙譲語。「む」は婉曲語法である。『泊船集』には、「ちぎりて」が「ちぎりしに」となっている。「その夜の夢に正しくま見えて悦るけしき有」（『猿蓑』巻四、嵐蘭発句「夢さつて」前書）「芭蕉旅行の首途に、やつがれが手を携へて再会の期を契り」（『炭俵』素龍序）「Mamiye. uru, eta.」「Chiguiri, u, itta.」（『日葡辞書』）。○**つゐにその日をまたず**　「終に其の日を待たず」。とうとうその約束の日を待たずに。「つゐ」は「つひ」と書くのが正しい。「終に無能無才にして此一筋につながる」（「幻住庵記」）「Tçuini.」（『日葡辞書』）。○**初冬一夜の霜と降ぬ**　「初冬一夜の霜と降りぬ」。陰暦十月の一夜、はかない霜と降って亡くなった、の意。「霜」は、はかなく消えるものとして、人の死を象徴する。「霜と降ぬ」のところが『蕉翁句集』では「霜ときえぬ」となっている。「元禄辛酉之初冬九日」（『続猿蓑』下、芭蕉発句「菊の香や」前書）「花の本の半日の客、月のまへの一夜のとも」（謡曲「鞍馬天狗」）「葦

辺行く鴨の羽がひに霜零りて寒き夕べは大和し思ほゆ」(『万葉集』巻一、志貴皇子)。○**けふ**　「今日」。○**なを**　「猶」。「もはや」に通ずるような用法である。「を」は「ほ」の仮名ちがい。○**ひとめぐりにあたれり**　「一周りに当れり」。一周忌に相当する、の意。何丸の『句解大成』に「けふは猶一七日にあたりぬと出せるは非なり。初冬一夜の霜とあるは更に翌年の事なるは眼前の事なり」とあるように、初七日の事とは考えられない。「一めぐりの仏事に亀山殿へをはしまして」(『増鏡』老のなみ)「五月五日にぞ五十日にはあたるらむと、人しれずかずへ給ひて」(『源氏物語』澪標)「Meguri.」「Natalno xǒnichini ataru.」(『日葡辞書』)。○**いふをきゝて**　「云ふを聞きて」。○**其かたち**　「其の容姿」。「かたち」は既出(Ⅱ270)。○**枯木の杖の長**　「枯木の杖の長」。枯木の長い杖。道円居士のついていた物であろう。「長」といってその長さを強調した表現である。加藤楸邨氏の『芭蕉全句』には、「当時「枯木」は冬の季語として十分確立していなかったようだが、ここでは冬の季感が意識されているものと考えられる」と見える。『御傘』には「かれ木　植物也。冬にはあらず」とあって、冬季と定めていないが、この句に於いては季感を持つ物はこれだけである。もとより「枯木」を材としたわけではなく、「枯」の字を入れることによって冬の句としたに過ぎない。「寒月や枯木の中の竹三竿」(『蕪村句集』)「くれの月横に負来る古柱　野坡　ずいきの長のあまるこつてい　孤屋」(『炭俵』上)「Careqi.」「Taqeno tacai fito.」(『日葡辞書』)。

大意　故人遺愛の長い枯木の杖によって、せめて生前の姿かたちを偲びたいものだ。

考　『幽蘭集』(暁台・臥央編、寛政十一年刊)には、「大通菴道円追善」と題して、この発句に始まる歌仙一巻を収めるが、連衆は芭蕉の外、夕菊・苔翠・友五・素堂・曾良らの江戸連衆に路通が加わっている。路通が江戸に来ていた元禄元年十月の興行と推定され、九月十日の残菊の宴や同十三日の後の月見に彼が顔を出しているのも思い合わされよう。路通が芭蕉の生前、冬江戸に居たのはこの時だけであった。従って道円居士の歿したのは、貞享四年十月のことと見られる。『芭蕉句選』が初五を「其方を」としているのは杜撰に過ぎない。

道円遺愛の杖によって、生前の俤を偲ぼうというのである。「杖の長」と強調することによって長い杖だったことが思われるし、それをついた枯痩の人の姿もおのずから浮んで来る。「枯木寒巌に倚る」という語もあり、元来「枯木」は無心の境地を象徴する禅語なのである。楸邨氏は、「芭蕉の心中に『伝燈録』に伝える石霜禅司の会下の僧を

枯木衆と称えた故事などが働いていたかもしれぬ」（『芭蕉全句』）と見ておられる。

437 冬籠リ又よりそはん此はしら　（極月三日付益光宛書簡）

極月五日付尚白宛書簡・真蹟短冊・あら野・蓮の実・泊船集・蕉翁句集・続寒菊

冬季（冬籠リ）。

語釈 ○**冬籠リ**　既出（Ⅱ *325*）。○**よりそはん**　「寄り添はん」。「よりそふ」は、背をもたせて坐るさまをいう。「或時楚王ノ夫人、鉄ノ柱ニ倚傍テスヾミ給ケルガ」（『太平記』巻十三）「**Yorisoi, sô, ôta.**」（『日葡辞書』）。○**此はしら**　「此の柱」。「はしら」は、芭蕉庵の居室の柱である。「貧家の玉祭／玉まつり柱にむかふ夕かな　越人」（『はるの日』）「**Aratani qezzuritatetaru faxirani ixxuno muxicuino vta ari.**」（『日葡辞書』）。

大意 長旅から帰って、漸く草庵に落着いた。冬籠りには、又庵の柱に寄りかかって過すことにしよう。

考 元禄元年と推定される書簡に載る句で、十二月三日までには成っていた筈である。『続寒菊』（杏廬撰、安永九年刊）には、この句の返しとして「冬籠けふは其角や参るらめ」という野坡の発句が見え、また芭蕉一周忌追善集『翁草』（里圃撰、元禄八年刊）には、左の如き沾圃の句文が載っている。

翁冬籠りの句に、又よりそはん此柱と詠じて、いくばくの年をもかさねず、ことし庵を出て難波津の冬籠ころ、彼津に籠合てこもりもはてず、無神月（マヽ）中の二日に終りたまひぬ。よつて彼よりそひし柱もなつかしくて、庵を吊ひ見るに、庭草は霜に埋れ、軒端は素堂隠士のいひけんやうに、おもひしほどにあれはてゝ、蓑虫ももるばかり也。さすがによりそひし柱は朽もやらず、昔此柱にゐかくれて茶をあまなひし帋ぎぬの姿みるがごとくにて、まきのはしらよ我をわするなとよみけんふるめきたることぐさ迄とりそへて、なみだ落やまず。やうやく此句ひねり出して、香花に替るものならし

冬籠今はいづちの柱ぞや　沾圃

句は長旅を終えて久しぶりに芭蕉庵に戻った作者の安らぎを思わせる呟きのような趣がある。柱に寄り添うといえば、右の沾圃の句の前書にも引合に出された鬚黒大将の姫真木柱の君の歌「いまはとて宿かれぬともなれきつるまきのはしらは我をわするな」（『源氏物語』真木柱）や、白楽天の「閑居賦」の一節「閑居復倚二此柱一」（閑居復た此の柱に倚る）等が思われるが、それらは詩人が詩嚢から取り出す詞の、来歴無きは無い底のことで、必ずしもそれを踏まえたわけではあるまい。無所住を期して旅に出ても、古巣に帰ればまた其処がなつかしいのが人情である。「よりそふ」には、身をじかに柱につけて親しむ気持があり、「又」「此」にも同じ情があろう。「倚子・脇息もむつかし。只柱に背中をまかせて心を存し性を養ふ。冬籠の本意、柱一本にいゝ得たり」（東海呑吐『句解』）という鑑賞はよく、加藤楸邨氏も「旅にひかれつつも住むところに愛着を感ずるこの姿に、かえって芭蕉の真の姿があるのであろう」（『芭蕉全句』）と述べておられる。閑居の境涯からおのずから滲み出したような「寂び」の味は、殊更目立つ言葉を用いていないだけに、却って深みが感ぜられるのである。

七賢四皓五老の□處、三笑寒拾の契り、皆こゝろざしの類するものをもて友とす。西行が寂然にしたしく、兼好は頓阿に因む。是風雅にるいするものか。東野深川の八子貧にるいす。老杜の貧交の句にならひて、管鮑のまじはり忘るゝ事なかれ。

雪の夜の戯に題を探て、米買の二字を得たり

438

米買に雪の袋や投頭巾　（伝路通筆懐紙）

深川八貧

米買て雪の袋やなげ頭巾　（今日の昔）

浮世の北・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・雪まるげ・雪の薄

冬季（雪・頭巾）。

語釈　○**七賢**　「シチケン」。竹林の七賢をいう。竹林に於いて清談に耽ったという中国晋代の隠者阮籍・嵆康・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎の七人である。「藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに団の隙なかりけむ」（『鶉衣』百虫譜）「**Qennaru fito mare nari.**」（『日葡辞書』）。○**四皓**　「シカウ」。漢の高祖の時、商山に隠遁した四老人、東園公・綺里季・夏黄公・角里先生を指す。「皓」は白い意で、眉や髭が白いところからこの称が出た。「ちくりんの七けん、しやうざんに入し四こうも、是にはいかでまさるべき」（『曾我物語』巻十二）「**Xicó.**」（『日葡辞書』）。○**五老**　「ゴラウ」。宋の太子少師杜衍が致仕して睢陽に居た時、王渙・畢世長・朱貫・馮平の致仕した四老人と会して五老会と称し、白楽天の香山九老の故事に倣って五老堂を作り、詩を酬唱したことを指す。五人皆八十余、康寧爽健であったという。これを金・木・水・火・土五星の精霊とする説はこの場合に相応しくなく、誤りであろう。○□**処**　空白にした二字分ほどは底本の磨損によって判読し難い。「処」の字も、赤羽学博士らの『芭蕉俳文句文集』では「衆」の字と見ている。最後の字をどう読むか決めかねるが、この部分を、

七賢・四皓・五老の□、
□衆・三笑・寒拾の契り、

と数詞を並べた対句形式と見る赤羽博士の説は、可能性の高い見方と思われる。ただ空白部分に入るべき字については、今の処なお確説を得ない。○**三笑**　「サンセウ」。所謂「虎渓三笑」の故事。晋の代、廬山の慧遠法師が、訪ねて来た陶淵明と陸修静の二人を送りがてら、話に夢中になって、日頃渡るのを避けていた虎渓を過ぎてしまい、虎の声に気づいて主客三人大笑したという。水墨画の画題として馴染みの話である。「あはれ虎渓近くは三笑の仲間にも加はり」（『風流志道軒伝』跋）。○**寒拾の契り**　「寒拾の契り」。「寒拾」は、寒山と拾得。共に初唐の頃、天台山国清寺の豊干禅師の弟子で、親交があった。『寒山詩』で名高く、屢々画題にもなる。「契り」は、親しい交わりをいい、上の「三笑」をも承ける。「あさからぬちぎりの程ぞくまれぬるかめ井の水にかげうつしつゝ」（『山家集』中）「Chiguiri.」（『日葡辞書』）。○**こゝろざしの類するものをもて友とす**　「志の類する者を以て友とす」。考え方の同じような者を友とする、の意。「飽言細語為ㇾ喜ㇾ同ㇾ志」（『猿蓑』丈艸跋）「心花にあらざる時は鳥獣に類ス」（『笈の小文』）「この心もて宜しう序書てよ」（『炭俵』素龍序）「Cocorozaxiuo tçuzuru.」「Rui. Tagu-i.」（『日葡辞書』）。○**西行が寂然にしたしく**　「西行が寂然に親しく」。寂然は平安末期、西行と同時代の歌僧で、「大原の三寂」の一人。西行とは親交があり、屢々和歌を唱和したことが二人の家集に見えている。○**兼好は頓阿に因む**　「兼好は頓阿に因む」。「因む」は、縁を結ぶ意。『徒然草』の作者兼好は、鎌倉末期から南北朝時代にかけての代表的歌人の一人であって、同時代の頓阿・慶運・浄弁と共に和歌四天王と称された。兼好と頓阿の交わりは、兼好の方から米銭を乞うたのに、頓阿が銭のみを贈り、折句の和歌の贈答があったことが有名である。「予とちなむ事十とせあまり九とせにや」（芭蕉「悼松倉嵐蘭」―『笈日記』）「Fitoni chinamu.」（『日葡辞書』）。○**是風雅にるいするものか**　「是風雅に類するものか」。西行・兼好らの交わりは、風雅の道に於いて同じ仲間になったものであろうか、の意。「るい」は「るゐ」とあるべきところ。「風雅」は、詩歌の道をいう。既出（Ⅱ*416*）。○**東野深川の八子**　「東野深川の八子」。「東野」は、東国武蔵野の意。「子」は、軽い敬称。武蔵野の深川に住む八人とは、芭蕉・依水・苔翠・泥芹・夕菊・友五・曾良・路通らの俳人を指す。〔考〕参照。○**貧にるいす**　「貧に類す」。貧しさにおいて同類である、の意。「影法のあかつきさむく火を焼て　芭蕉
あるじはひんにたえし虚家　杜国」（『冬の日』）「Finni qiuamaru.」（『日葡辞書』）。○**老杜の貧交の句にならひて**　「老杜の貧交の句に倣ひて」。「老杜」は、盛唐の詩人杜甫のこと。既出（Ⅰ*163*）。「貧交の句」は杜甫「貧交行」の詩、即ち「翻ㇾ手作ㇾ雲覆ㇾ手雨、

紛紛軽薄何須ㇾ数、君不ㇾ見管鮑貧時交、此道今人棄如ㇾ土」（手を翻せば雲と作り手を覆へば雨。紛紛たる軽薄何ぞ数ふるを須ゐん。君見ずや管鮑が貧しき時の交はり。此の道今の人棄てて土の如し）を指す。「山家集の題に習ふ」（『続猿蓑』下、芭蕉発句「一露も」前書）。○**管鮑のまじはり忘るゝ事なかれ**　中国春秋時代、斉の宰相管仲は、貧しかった若い頃から同じ境遇の鮑叔と交わり、立身して後も友との親交を変えることがなかった。右の杜甫の詩句にもあるように、終生かわらない友情を「管鮑の交はり」という（『史記』管晏列伝参照）。深川に住む八人に対して、古人の親交を忘れることなく、終生かわらぬ友情を持ち続けよう、と呼び掛けたのである。「其細き一筋をたどりうしなふる（ママ）事なかれ」（芭蕉「許六離別詞」―『韻塞』）「Ayete xirizoqu coto nacare.」（『日葡辞書』）。○**雪の夜の戯**　「雪の夜の戯れ」。「夜遊の戯れなし給ふ」（謡曲「寝覚」）「Tauamure.」（『日葡辞書』）。○**題を探て**　「題を探りて」。発句の題を幾つかの中から探り取って、それを題に句を詠もうとするのである。もとは漢詩や和歌の会で行われたことで、「探題」ともいう。「題をさぐりて、これかれ歌よみけるに、しのだのもりの秋風をよめる」（『新古今集』巻四、経衡歌「日をへつゝ」詞書）「Vtano dai.」「Saguri u, utta.」（『日葡辞書』）。○**米買の二字を得たり**　「米買の二字を得たり」。「米買」という題を探り得た、というのである。○**米買に**　「米買ひに」。ここは「米買」という名詞でなく、「米を買う為に」「米を買うべく」の意と見られる。○**雪の袋**　「袋」は、買った米を入れる為のもの。「雪」は折柄降っていたものでもあるが、古くからの説にあるように、「雪」に「行き」（往き）を掛けた洒落と見たい。そうでも考えないと、余りにも拙い表現になってしまう。「一袋これや鳥羽田のことし麦之道」（『猿蓑』巻六）「Fucuro.」（『日葡辞書』）。○**投頭巾**　「ナゲヅキン」。頭巾の一種。四角に縫った布の上端を扁平のまま後に投げたように折り掛けて被る。男女何れも用いた。「頭巾」は冬の季語。「頭巾の製旧し。和俗冬月に戴きて寒霜朔風を禦ぐ者は別製なるべし。其製、角頭巾・丸頭巾・投頭巾・焙烙頭巾・兎毛角毛頭巾等也。是老若に不ㇾ限防ㇾ寒具也。故に冬に許す」（『滑稽雑談』）「なげ頭巾や横折ふせる紗綾の山　不障」（『俳諧雑巾』）「Zzuqin.」（『日葡辞書』）。

大意　米を買いに行くのに折柄の雪、往きには空の袋を被って、投頭巾と洒落よう。

考　「むかし深川にて米買といへる題を置て」（『浮世の北』）「深川八貧　文は今畧之」（『泊船集』）「深川八貧」（『蕉翁句集』）「深川八貧のうち」（『雪まるげ』）「深川の八貧のうち　題雪」（『雪の薄』）等の前書がある。伝路通筆懐紙には、はじめに掲出した芭蕉の句の後に、

同真木買　　　　　　　　　　依水
雪の夜やとりわき佐のゝ真木買はむ
同酒買　　　　　　　　　　　苔翠
さけやよき雪ふみ立し門の前
同炭買　　　　　　　　　　　泥芹
すみ一升雪にかざすや山折敷
同茶買　　　　　　　　　　　夕菊
雪にかふはやしごとせよ奠じ物
同豆腐買　　　　　　　　　　友五
手にすへしたうふをてらせ雪の月
同水汲　　　　　　　　　　　曾良
雪にみよ払ふもをしきつるべさほ
同めしたき　　　　　　　　　路通
はつ雪や菜食一釜たき出す
　右元禄(ママ)元年季冬仲七

と書かれてあり、八人の顔触れと、元禄元年十二月十七日になったことが知られる。なお右の懐紙は、作者名の「依水」が「流水」、「友五」が「友正」とよめる字体になっていて、当座の筆とは思われず、恐らくは後人の写しであろう。『今日の昔』（朱拙撰、元禄十二年刊）の異形は杜撰に過ぎない。

草庵に貧しい隣人達と会して菜飯など炊こうという時、戯れに役割分担を決めて逸興としたのであって、前の文章

にも隠逸味が横溢している。米を入れる袋を頭巾代りに被って行こうというのも、実際にするかどうかは兎も角、その風狂の姿は、久しぶりに深川に帰った作者の安らいだ心境から自然に流露した風狂の軽みといってもよかろう。被った頭巾を米袋にするという解釈もあり、陶淵明が頭巾で酒を漉したという話も思い合わされるけれども、やはり前解の軽快さには及ばない。

ある人の追善に

439 埋火もきゆやなみだの烹る音 （あら野）

埋火や涙の落て煮る音 （有也無也関）

笈日記・泊船集・蕉翁句集

冬季（埋火）。

語釈 ○**ある人** これが岐阜の安川落梧の夭折した子を指すと思われることは〔考〕の条で述べる。○**追善** 「ツキゼン」。死者の冥福を祈って善根を修める意の仏語。「いもうとの追善に」（『あら野』巻七、去来発句「手のうへに」前書）「Tçuijen.」（『日葡辞書』）。○**埋火もきゆや** 「埋火も消ゆや」。「埋火」は炉や火鉢のよくおこった炭火に灰を覆って、ぬくもりを長持ちさせること。「や」は詠嘆の切字。「埋火 夜分也。冬也」（『御傘』）「うづみ火は。ゆるりと足をあぶるとも。みつがなわにゐてあたるなどもいひ。こたつの火のしをかけて。わが寒やみの身のちゞみ。顔のしはをのばすけしき。又口きりのていたらく。ひらくいろりの火花をめで。しろずみと雪のまがふをあやしみ炭とりを鳥に取なして。羽箒を羽がひといひ。火ばしをはしに用ひなす心ばへ猶孫もたぬ姥御前は。火桶を伽にだいていね。老の友なきおほぢごは。ぜうになりたるすみがしらをも憐む心などすべし」（『山之井』）「まだ埋火の消やらず」（『俳諧勧進牒』所収正月五日付曲水宛芭蕉書簡）「Vzzumibiuo caqivocosu.」（『日葡辞書』）。○**なみだの烹る音** 「涙の烹ゆる音」。死を悲しんでこぼす涙が埋み火に熱せられて煮える音を想像した。「烹」は「煮」と同義の字である。「うづみ火や終には煮る鍋のもの」（『蕪村句集』）「Niye, uru, eta. ……Cono camaua yô niyuru.」（『日葡辞書』）。

大意　はふり落ちる貴方の悲しみの涙が煮えて音を立て、埋み火も消えてしまう程でしょう。

考　「少年を失へる人の心を思ひやりて」（『笈日記』）「追善に」（『泊船集』）「ある人ゑの追善」（『蕉翁句集』）等の前書がある。『笈日記』の前書は、岐阜の落梧の遺編にかかる「瓜畠集」を抄出した中に見え、これが成立の事情についてはは精しいものであろう。すなわち、この年の夏岐阜滞在中に、落梧が幼児を失ったのに対して芭蕉は悼句を贈っており（Ⅱ408参照）、江戸に帰ってから再び親の気持を思い遣って、この句を贈ったものと思われる。『あら野』の前書は、このような事情をよく知らなかった為か、極く大まかな内容になってしまったのである。二度悼句を与えたことを不審とし、「追善」の意を厳密に取ろうとする見方も嘗てはあったが、落梧への書信の序でにその哀情を察して句を贈ることは有り得るし、それもまた「追善」といってよいものであろう。こう見れば、『あら野』初出のこの句は、元禄元年冬の作と推定される。『有也無也関』（撰者未詳、明和元年刊）の異形は、「伝云、是は花咲老人の忌日に我翁の綴れる句也」として収められているが、貞徳忌に詠んだ裏付けもなく、古俳書の前書と矛盾するので信じ難い。また、『一葉集』には「にえるおと」となっているが、『泊船集』が「煮ゆる」であるから、これも杜撰とすべきである。

まだ年端も行かぬ男の子を失った親の心を思い遣った句で、亡児の思い出にこぼす涙が埋み火に落ちて音を立て、火も消えてしまうさまを想像している。亡き人を思い遣るのではなく、その親の気持なので、間接的ではあるが、作者の痛切な心情は、『野ざらし紀行』の「手にとらば消んなみだぞあつき秋の霜」（Ⅰ195）を思わせる激情的な表現によって甚だ印象が深い。「手にとらば」の句とちがうところは、それが奔溢する感情に任せて「心余りて言葉足らず」の趣だったのに対して、この句では心も言葉も十全に整い、些の破綻も見せていない点であろう。涙で埋火が消えるのは、なお尋常であるとしても、涙の烹える音とまで言ったのは、激情の表現の至れるもので、しかもこの句の俳諧の存するところでもある。また堀信夫氏が「きゆ」について、「追善に縁のものとして注意深くあしらわれた言葉」（『古典文学全集・松尾芭蕉集』）といわれたのも精しい説であった。

仁徳天皇
高き屋にのぼりてみればとの御製の有がたさを今も猶

440 叡慮にて賑ふ民の庭竈　（庭竈集）

春季（庭竈）。

語釈　○**仁徳天皇**　「ニントクテンワウ」。第十六代の天皇。まだ伝説時代であるが、民の生活が苦しいのを見て、三年間賦税を免除し、自らも質素な日常であったという。中国の史書『宋書』に見える倭王讃に比定される。○**高き屋にのぼりてみればとの御製**　「たかき屋にのぼりてみればけぶりたつ民のかまどはにぎはひにけり」（『新古今集』巻七賀歌の巻頭歌）を指す。古く『和漢朗詠集』に収めるが、そこでは作者名を記さず、『俊頼髄脳』や『古来風体抄』（俊成）あたりから仁徳天皇の御歌として引かれている。高殿に登って眺めると、炊煙が盛んに立ちのぼっている。民のくらしは豊かになったのだなあ、の意。「御製」は、天皇の作られた詩歌をいう。「時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり　凡兆」（『猿蓑』巻一）「かたじけなくも御門の御製に、御調物ゆるされて国富るを御覧じて、仁徳天王の歌也」（狂言「鍋八撥」）「Ya. i, Iye.」「Guioxei. Von vta.」（『日葡辞書』）。○**有がたさを今も猶**　「有り難さを今も猶」。下に「身にしみて覚えて」等の語を補って解する。○**叡慮**　「エイリョ」。天皇のお考え。「父子共に叡慮に背候ぬる事、今にをいて面目を失ふ」（『平家物語』巻三）「Yeirio. Micadono micocoro.」（『日葡辞書』）。○**賑ふ**　「賑ふ」。富み栄え豊かになる。「米を出して糠に替しかば、国中にぎはひてよろこびけり」（『浮世物語』巻三ノ七）「Niguiuai, ô, ôta.」（『日葡辞書』）。○**民の庭竈**　「民の庭竈」。「庭竈」は、農家の庭に面した土間に造りつけた竈をいう。その竈から飯を炊く煙が盛んに立つのは、民衆の生活が豊かになったことを示すわけである。ここは、正月の民間行事の「庭竈」をかけて、春季の句に仕立てたものであろう。地方で正月に庭に竈を造り、莚を敷いて一家が共処で食事もし、人をもてなす風習があり、特に奈良のが有名であった。これを庭竈といい、『増山井』に初春の季語として見える。普通の意味では雑の句になるから、ここはその意を掛けていると思われる。「置二火炉於庭上一合家鋪レ席而団坐。是謂二庭竈一」（『日次紀事』）「此事、公家武家など有し事不レ聞。京都の地下にも昔は有け

るにや、当世沙汰なし。田舎には正月注連の間、尋常の竈の外に庭上に囲炉裏を構へ、新しき筵をのべ、戸口に清き筵を暖簾のごとくかこひ、家来の男女、出入の者など参りつどひ、火を焼て、薬酒又は餅をほこらかしなど、食飽て遊ぶ事侍る。是をにはがまといふ。いかなる遺意にや。聖代に民賑ふと云心にや」（『滑稽雑談』）「小伝次は数百年こゝにすみて、民の数ながら刀ゆるし」（『春雨物語』捨石丸）「庭竈（にはかまど）の前に円座（わらうだ）敷て茶を啜（すゝ）り居る」（『雨月物語』浅茅が宿）「Tami.」「Niua.」「Camado.」（『日葡辞書』）。

大意　天皇の思し召しによって民の生活が豊かになって、今も庭竈の習俗が行われている。有り難いことだ。

考　越人の『庭竈集』（享保十三年刊）に、彼の深川芭蕉庵滞在中の事を記した左の文は、この句の成立についても委しい事情を語っている。

往昔芭蕉菴に旅寐せし比、一日其角・嵐雪・挙白・宗和（ママ）、其外も二人リ三人リ吸筒を袖にして来り、酔て終日遊びかへれる人も有。其外斛くらべして初夜過る程に目を開キ、そこはかとなく昔今のこと共屈し出て、世にむまれ人はきたなき心なく清きわざこそ、古へを今聞ても耳涼しと云イもて行に、唐土の聖リの御代賢キ臣など数ゆるを、我も傍に侍りて、それはしらぬ事也。我日の本にはなき事にかはと、うめき侍れば、翁の、いなや、我国の賢キ君まめなる臣、他の国になじかはおとるべき。さらば句のよしあしはしらず、いひ出給へと、おの〳〵物し給へる発句共は、此始に書付る所也。是むかしのこと成けり。其時我は深川に秋至りて冬帰りぬるに、芭蕉菴にて来る人毎に何ンのかのといへる言ども、我申スよしなしごとなど、反古の裏に書もて来けるに、半は句帳などにも出たり。猶残れる中に是を見出て侍るに、其時の人々ははや中ば過ギ泉下の鬼となりぬ。おのれひとり生残り侍れば、いと心細し。……

秋か冬かは書かれていないが、元禄元年の越人の深川滞在中の一夜、芭蕉庵に集うた人々と共に、史上の人物を題材に作られた句なのである。この芭蕉の発句は、「聖君」の題下に巻頭に収められ、集の名の基づく所ともなっている。中七の異形として「賑ふ民や」（『芭蕉句選』）「にぎはふ春の」（『一葉集』）等が伝えられるが、何れも基づく所が明らかで

なく、信じ難い。切字はあるに越したことはないが、この句は「庭竈」のすわりが良いので、下五に切字があるのと同じである。季節が当季でないのは題詠だからであろう。

御代の栄えをことほぐ型通りの句ではあるが、「民のかまどはにぎはひにけり」から脱化して、新年の「庭竈」の習俗に結びつけたところが俳諧の新味である。今氏の『芭蕉句集』は、謡曲「難波」の一節「高き屋にのぼりて見ればけむりたつ民のかまどはにぎはひにけりと叡慮にかけまくもかたじけなくぞ聞えける」による表現としている。用語からして、確かに謡曲の影響は考えられて然るべきである。

武蔵守泰時

仁愛を先とし、政以レ去レ欲爲レ先

441 明月の出るや五十一ヶ条 （庭竈集）

秋季（明月）。

語釈 ○**武蔵守泰時** 「ムサシノカミヤストキ」。鎌倉幕府の第三代執権北条泰時。承久元（一二一九）年武蔵守になった。仁治三（一二四二）年六月十五日歿、享年六十。○**仁愛を先とし** 「仁愛を先とし」。政治の心構えとして、民をいつくしむことを何よりも優先させたことをいう。「たいこもちはむだ口をだいとし、茶やはじんあいをもつてす」（『青楼夜世界闇明月』附言）「夫、人ノトモトアルモノハ、トメルヲタウトミ、ネムゴロナルヲサキトス」（『方丈記』）「Iin.……Mizzucarauo vasure, tauo aixite, ayauqiuo sucui, quamareruuo tasuqe, subete mononi nasaqeuo saqito xi, cotoni furete auaremino cocoro aruuo jinto yŭ.」（『日葡辞書』）。○**政以レ去レ欲為レ先** 「政ハ欲ヲ去ルヲ以テ先ト為ス」。政治をするに当っては、私欲を離れることを第一とした、の意。泰時は御家人の地位を保障し、民生の安定に努め、当時の人々から堯舜の再来とまで賞賛された。「かゝるに、いま、すべらぎの、……よろづのまつりごとをきこしめすいとま」（『古今集』仮名序）「よくにいたゞきなし」（『毛吹草』巻二）「Matçurigoto.」「Yocu.」

「Tocorouo saru.」（『日葡辞書』）。**○明月の出るや**　「明月の出づるや」。「明月」は、さわやかに良く晴れた秋の夜の月をいう。八月十五夜の月を指す「名月」（Ⅱ258）よりは意味が広いのである。許六の『篇突』に「名の字を容易に置ける事は、元来末練の至り也。古人名の一字に腸を断てる事は、たやすからず。名月　けふの月　月見、此かはりいさゝか有べし。名ノ字に近代明ノ字書人あり。覚束なし」とあり、去来も「許六は、明月と八月十五夜とは和歌の題各別也。明月は良夜の月の事也。名月に明の字書は未練といへり。是論至極也。若、明月の題を得て、中秋の月を作せば放題ならん。名月に明の字書まじき事必せり」（『去来抄』故実）と賛成している。同じ去来が『旅寝論』では「明の字用る事は、和漢共に三五の清光をことに賞し来るゆへに、明と名とかよひたるを以て通用すなるべし。かやうの事はまゝ侍る也」と述べていて、必ずしも許六に同じてはいないが、蕉門では許六のような考え方が主流だったと見てよかろう。ただ、蕉門に於いても、『猿蓑』巻三の十五夜の句群の続きに「明月や処は寺の茶の木はら」という昌房の句が出ていたりして、明確にはなっていない。当面の句の場合、芭蕉がどう書いたかに確証はないが、意味からすれば中秋の名月に限定する必要はない。泰時の政治の公明さを、秋の良夜の月に譬えたのである。「や」は詠嘆の切字。**○五十一ヶ条**　「五十一箇条」。「ケ」は「个」（「箇」に同じ）の略体。泰時の制定した鎌倉幕府の基本法「御成敗式目」（貞永元（一二三二）年に公布されたので「貞永式目」とも呼ばれる）を指す。刑法・家族法・訴訟法等の内容を含む五十一条から成っていた。「御随身近友が自讃とて、七箇条書とゞめたる事あり」（『徒然草』二百三十八段）「Ichigió, nigió, iccagió, nicagió」（『日葡辞書』）。

大意　泰時の制定した五十一箇条の「御成敗式目」は、あたかも秋の良夜の月が出る趣がある。

考　前の「叡慮にて」の句と同じ時の吟として『庭竈集』に「賢臣」の題下に収められており、元禄元年秋冬の間の作と推定される。

古人を材とした題詠であって、月の季節感を生かそうとしたものではないが、若し「明月」の用字に意有りとすれば、それによって泰時の政治の公明正大さを暗示しようとしたものであろう。

尾張十藏、越人と號す。越路の人なればなり。粟飯柴薪のたよりに市中に隠れ、二日つとめて二日遊び(ママ)、三日つとめて三日あそぶ。性酒をこのみ、酔和する時は平家をうたふ。これ我友なり

442 二人見し雪は今年もふりけるか　（庭竈集）

笈日記・泊船集・蕉翁句集

冬季（雪）。

語釈 ○**尾張十蔵**　「尾張の十蔵」。尾張に住む十蔵。越人は延宝初年頃故郷を出て名古屋に来たと伝えられる。越智氏、十蔵（重蔵とも）がその名である。「尾張」は今の愛知県中心部の旧国名。○**越人と号す**　「越人と号す」。俳号を越人と称していた。「号す」は、古くは清音で、『日葡辞書』でも「**Cóxi, suru, ita.**」となっている。ここでは慣用によって濁音によんでおく。「柳原の辺に強盗法印と号する僧ありけり」（『徒然草』四十六段）。○**越路の人なればなり**　「越路の人」は、今の北陸地方出身の人の意。北陸には越前・越中・越後等の旧国名があり、古代の「越の国」なので、その地方を「越路」という。「越人」の号の由来を述べたのである。「いにしへは名にのみ聞し越路の旅におもむき」（『平家物語』巻十二）「**Coxigiye vomomuqu.**」（『日葡辞書』）。○**粟飯柴薪のたよりに**　「粟飯」は粟の飯で、粗末な食事をいう。「柴薪」は、その飯を炊ぐための薪。「たより」は、方便。要するに、生活の為の方便として、の意である。「たより」は既出（Ⅱ*434*）。「此花蜀中にて柴薪とするよし」（『胆大小心録』）。○**市中に隠れ**　「市中」は、名古屋の町中をいう。隠者扱いにして「隠れ」といった。越人は野水らの世話で、染物屋を営んで生計を立てていたという。「市中ひそかに引入て、あやしの小家に」（『おくのほそ道』）「**Xichǔ.**」（『日葡辞書』）。○**二日つとめて二日遊び、三日つとめて三日あそぶ**　「二日勤めて」は、生活の為に二日働く意。それで生活の資を得れば、あとの二日は遊んでしまう。次の「三日つとめて三日あそぶ」と共に、目前の事が足りていればよしとする越人の無慾な生活態度をいうのである。「高橋泪ながら、勤る身の悲しさは、先まいりて断を申て」（『好色一代男』巻七）「**Yacuuo tçutomuru.**」（『日葡辞書』）。○**性酒をこのみ**　「性酒を好み」。生まれつき酒好きで。同じ言い方は、前の「君火をたけ」（Ⅱ*267*）の句の前書にもあった。○**酔和する時は**　「酔和」の「和」は、なごむ

意であろう。酔って好い気持になると、の意。○平家をうたふ　「平家を謡ふ」。琵琶の音にのせて『平家物語』を謡う平曲のこと。越人がこれを得意としたことは、前の「木曾の痩も」（Ⅱ433）の句の後書にも見えた。「平家にもあらず舞にもあらず、ひなびたる調子うち上て」（『おくのほそ道』）「Feiqe, Taira vgino iye.」（『日葡辞書』）。○我友　「我が友」。○二人見し雪　「二人」は、「二人で」の意の副詞。一年前、杜国を伊良湖崎に訪ねた時、越人と同行した旅を思っている表現である。「寒けれど」（Ⅱ316）の句、及び後述〔考〕参照。○今年もふりけるか　「今年も降りけるか」。「か」は疑問で、切字になる。去年二人で旅をした時と同様に今年も降ったか、と越人に尋ねる体。「はつ雪のことしも袴きてかへる　埜水」（『冬の日』）「Cotoxi.」（『日葡辞書』）。

大意　去年旅の途次に二人で見たあの雪は、今年も降ったかね。何ともなつかしいことだ。

考　「次のとしならん、越人が方へつかはすとて」（『笈日記』）「其後越人かたへ申遣はされし句」（『泊船集』）等の前書がある。これらは芭蕉の文ではないが、何れも「寒けれど」の句の次に出しており、貞享四年冬の杜国訪問の「次のとし」とする『笈日記』の所伝は信じて可い。前述の如く、越人は芭蕉と行を共にして八月下旬江戸に入り、冬まで芭蕉庵に滞在したが、年内に名古屋に帰った。従ってこの句は元禄元年の冬、越人が名古屋へ帰ってから彼に贈られたもので、尾張・三河辺の雪を思い遣った作意であることが分る。『庭竈集』下巻には、標出した前書と発句の後に、

昔ばせを老人此ことば書に此発句をおくられ侍るを見出て、彼老は松下の土となり、此蓬頭は生残りけるよと、恋慕のなみだ紙衣のつぎめをひたし、折ふし人の来りけるにみせて、やらむかたなきこゝろを、かく申侍りぬ。

として、「胸のしのぶも枯よ草の戸」という越人の脇以下、一巻の歌仙が収められている。『芭蕉句選』に下五が「降にけり」となっているのは信じ難い。

江戸の雪によって一年前に伊良湖崎への旅で見た雪を思い、旅を共にした越人をなつかしんでいるのである。ことさら趣向を弄せずに、「ふりけるか」と話し掛けるような調子に仕立ててあり、二人の親密な交情が偲ばれる。前書は簡潔に越人の平生を述べ、その浮世ばなれした人柄を髣髴させる名文である。

木曾の秋に痩ほそり、芭蕉菴に籠り居給ひし冬

443

五つむつ茶の子にならぶ圍爐裏哉 （茶の草子）

冬季（囲炉裏）。

語釈 **○木曾の秋に痩ほそり** 「木曾の秋に痩せ細り」。貞享五年八月の木曾路の旅の苦労で、芭蕉の身が痩せ細ったことをいう。「木曾の秋」（Ⅱ*419*）「木曾の痩」（Ⅱ*433*）参照。「こよなうやせほそり給へれど」（『源氏物語』御法）。**○芭蕉菴に籠り居給ひし冬** 「芭蕉菴に籠り居給ひし冬」。芭蕉が深川の芭蕉庵に籠っていた元禄元年（貞享五年九月三十日改元）の冬を指す。敬語を用いているのは、『茶の草子』（雪丸・桃先撰、元禄十二年刊）に見える路通の文だからである。「菴」は「庵」と同じ。「一とせみちのく行脚おもひ立て、芭蕉庵既破れむとすれば」（「芭蕉を移詞」）「よろづなつかしさに、あれたるやどにこもりゐ給ふ」（『小伏見物語』中）「Comori, oru, otta.」（『日葡辞書』）。**○五つむつ** 「五つ六つ」。囲炉裏のまわりに集うた人数をいい、「茶の子」の数にもかけてユーモラスな趣がある。「Itçutçu.」「Mutçu.」（『日葡辞書』）。**○茶の子にならぶ** 「茶の子に並ぶ」。「茶の子」は、茶を飲む時に添える菓子や果物類。それを前にして人が並んでいるのである。「いつもの茶のこ出るやと亭主待共更に出ず」（『醒睡笑』巻八）「紫蘇の実をかますに入るゝ夕ま暮　珍碩　親子ならびて月に物くふ　同」（『ひさご』）「Chanoco.」「Narabi, u, ôda.」（『日葡辞書』）。**○囲炉裏** 「ヰロリ」。床の一部を切りあけ掘り窪めて火を焚く装置。炊事をし、寒い時は煖をとる。芭蕉庵のような一般の家では生活の中心であるが、上流の家の客間などにはなく、居間と台所にあるのが普通で、田舎では薪も焚くが、都会では炭である。「このはたく跡は淋しき囲炉裏哉　一髪」（『あら野』巻五）「Irori.」（『日葡辞書』）。

大意 囲炉裏のまわりに五、六人、茶菓子を前にして神妙に並んでいるよ。

考 冒頭に掲げた路通の前書に疑わしい点はなく、元禄元年冬の作とすべきである。

……冬の夜などに知人が幾人か炉を囲みて談話をしてゐる、炉には茶が沸き立ち、茶の子として菓子など取よせてあるといふ冬夜の即事で、五六人が炉に並ぶといふ処を茶の子の関係より故らに五ツ六ツと言ひて、人数と菓

子の数とを同時に現はした位の心持であらう。（内藤鳴雪『評釈』）という解が的確である。草庵での茶の振舞に、門人達がかしこまっているさまが思われ、翁を中心にした団欒が何ともなつかしい。

寛政板鹿島紀行

444 さしこもる葎の友かふゆなうり（雪まるげ）

さしこむる葎の友や冬菜賣（老のたのしみ）

冬季（ふゆな）。

語釈　○さしこもる葎の友か　「葎（むぐら）」（Ⅰ247、Ⅱ346）は雑草の類であるが、ここは「葎の宿」の意で、荒れ果てた貧しげな家をいい、芭蕉庵の形容である。戸を閉じて其処に籠ることが「さしこもる」。そういう庵住生活の友なのかなあ、の意。「か」は、疑問に詠嘆を含み、切字の役割を持つ。「さしこもりかくろへ給べきもの〻くまだになき御すまゐなれば」（『源氏物語』総角）。○ふゆなうり「冬菜売り（ふゆなうり）」。「ふゆな」は、漬物にする白菜・小松菜の類をいう。秋に種を蒔いて、冬から春にかけて取入れるからである。それを売る行商人。「菜売」（Ⅰ74）参照。「雪の冬菜男鍬ついて立りける」（『常盤屋の句合』）。

大意　たまさか庵を訪ねて来る冬菜売り。これが、訪い寄る人もなく戸をさして籠るこの侘住居の友なのかなあ。

考　曾良の遺稿を中心に編まれた『雪まるげ』（周徳・闌更編、天明三年刊）には、前掲深川八貧の句の次に出し、この後に元禄二年二月七日の歌仙を収めているので、当面の句は元禄元年冬中の作と推定される。『老のたのしみ』（柏莚著、享和二年成）の異形、及び『一葉集』に「さし籠る葎の友や」とあるの等は、根拠が明らかでなく、時代の下るものだけに信じ難い。

訪れる門人も途絶えて寂寥をおぼえる或る日、冬菜売りが訪れて来た。深川の近くには、小松菜の称の由来にもな

った小松川村もあり、農民が菜を携えて売りに来ることもあったのである。人恋しい気分になっていた折柄、そんな人にもふと親しみを感ずる。その心の動きが、「葎の友か」という呟きになって漏れ出たのであろう。閑寂を求める気持の裏に、人恋しさの気分が動くのも、人間の偽らぬ実際である。呟きか吐息のようなこの句の調子は、全き「寂び」の世界といってもよく、漬物用の菜を買う草庵生活の実情も窺われる。

李下が妻の悼

445 被き伏鋪團や寒き夜やすごき （寛政板鹿島紀行）

冬季（鋪団・寒き）。

語釈 **○李下が妻の悼** 「李下が妻の悼み」。「李下」は、深川の草庵に芭蕉を贈った蕉門俳人。「ばせを植て」（I *134*）「いなづまを」（II *306*）等の句の条に既出。その妻は元禄元年冬に歿し、俳諧もたしなんだことが知られている。〔考〕参照。「悼」は既出（II *309*）。**○被き伏鋪団や寒き** 「被き伏す鋪団や寒き」。「被き伏」は、頭からかぶって横になる意。従って「鋪団」は今いう掛け蒲団である。「蒲団」の語はもと坐禅の際に敷いた蒲の葉を編んで作る円座をいい、それが夜具を指すようになったという。敷き蒲団もあるところから、「鋪団」のような書き方も生じたのであろうが、正しい用字ではない。「や」は疑問の係助詞で、「寒き」で結び、ここで句切れ。下に「さぞ寒いだろう」という余意がある。なお、「被ぐ」の語を『日葡辞書』では「**Catçugui, gu, uida.**」と標出し、正しい言い方は「**Cazzuqi, qu**」であるとしている。「和製の者、綾羅錦綉より始て絹布木綿に及、旧制の者也。蒲団常用の者なれども、寒を禦ぐ具なれば、冬に許用也。猶可レ考。昔は秋蒲葉を編て、蒲穂を包て席とす。仍而有レ名」（『滑稽雑談』）「くろき物をかづきて、このきみのふし給へる」（『源氏物語』手習）「雪の跡吹はがしたる朧月　孤屋　ふとん丸げてものおもひ居る　芭蕉」（『炭俵』上）「**Fuxi, su, xita, uita.**」「**Futon, i, Xiqimono.**」（『日葡辞書』）。**○夜やすごき** 「夜や凄き」。「すごき」は既出（I *141*）。「や」は疑問。「さぞ寂しさ極まることだろう」という余意がある。

大意　妻亡き後、ひとり被って寝る蒲団は、さぞ寒々としていよう。そういう夜は、さぞ寂しく凄まじいものだろう。

考　この句は出典が寛政期のもので、杉風関係の資料として信憑性に疑いはないが、年代考定の根拠としては不足であった。元禄二年三月に成った『あら野』巻七に、「李下が妻のみまかりしをいたみて」と前書した「ねられずやかたへひえゆく北おろし」という去来の句が見えるところから、李下の妻の死が元禄元年冬以前とは推定されていたが、今栄蔵氏はこれに加えて、元禄元年嵐雪撰の『辰のとし歳旦』に、

御覧ぜよ今朝見る春の富士高し　李下婦ゆき

という句が載っていることを指摘され、李下の妻は元禄元年（貞享五年）正月にはまだ健在だったと推定された。すると当然ゆきの死は悼句の季節からして元禄元年冬と確定することになる（今氏稿「芭蕉句「李下が妻の悼」の作年次」—『近世文芸資料と考証』Ⅵ—）。

「夜やさむき衣やうすきかたそぎのゆきあひのまより霜やおくらん」（『新古今集』巻十九、神祇歌、住吉御歌）の歌の口調を摸している。妻を喪った人の寂寥を思い遣って、その衷情は哀切を極めるが、作者の同情が露わに出過ぎて、やや空廻りの感を否めない。詩的表現として言葉を句中に定着させるには、激情だけでは足りない見本である。

446　皆拝め二見の七五三をとしの暮　（幽蘭集）

冬季（としの暮）。

語釈　○**二見の七五三**　「二見の七五三」。「二見」は、今の三重県度会郡二見町。古くからの伊勢神宮領で、その海岸二見が浦の夫婦岩に張り渡された注連縄をいう。これは神聖な場所と外界を区別する為に、神前や神事の場に張りめぐらすものであるが、二見でも年末には若者達が新しい縄に掛け替える行事がある。稲藁を左綯いにし、藁の端を八寸位ごとに三筋・五筋・七筋と出して垂

らし、その間に紙四手（しで）を挿んで下げるので、「七五三」の宛字を用いるのである。注連飾は初春の季題。「しめ縄と云物は、左縄によりて縄の端をそろへぬ物也。卜部説などに、うたぬ縄稾を左に綯て端を出す事、七五三とわかつて天道十五にして成る義、左縄は天道左旋する義也。当世俗に、正月のかざり縄一五三とわかつ事、是九は陽数の極也。神代〔巻〕に云、天照太神天の磐戸を出給ひし時、端出の縄をひかれたる也。是浄不浄をわかつ物なれば、神事にはかならず引事侍り。正月も神を祝ひ祭る心より製するならし。是を注連かざり或はかざり縄・かざり稾などいへり。尤十五日迄門戸に置て、今朝左義長に焚侍る。故に十五日迄を注連のうち、飾の内などいへり」（『滑稽雑談』）「月の夜は二見が景（けい）かいせざくら　昌意」（『毛吹草』巻五）「世界をや年徳の神のしめの内　通教」（『毛吹草』巻五）「Xime. l, ximenaua. ……Ximeuo faru, l, fiqu.」（『日葡辞書』）。

大意　まだ年の暮ながら、二見が浦にはもう新年のために真新しい注連縄が張られている。さあ皆んな、この神々しい二見の夫婦岩の注連縄を拝みなさい。

考　寛政期の芭蕉俳諧集『幽蘭集』に、この句を発句として岱水・曾良・嵐竹・宗波・路通・友五・泥芹・夕菊らとの三十句の付合が見える。江戸深川辺の連衆に路通が加わっており、出典の年代はかなり降るものの、信憑性は高いであろう。路通が深川に居た元禄元年十二月の作と認められる。注連飾は初春の季題であるが、この句では「としの暮」の方が季語として働くのである。

注連縄を張った二見の夫婦岩に初日の出をあしらった絵を掛物にしたのを見ての作らしい。次冊の始めの方で扱う句、

　　二見の図を拝み侍りて

　うたがふな潮の花も浦の春　　翁（『いつを昔』）

が参考になる。この趣からしても、「七五三」は古い縄ではなく、新年を迎えるための新しいものでなければならない。句は俳席に集うた人々に呼び掛ける体に仕立て、発句としての形を整えたまでである。

深川雪夜

447　酒のめばいとゞ寐られね夜の雪　（俳諧勧進牒）

葛の松原・泊船集・蕉翁句集草稿・本朝文鑑

酒呑ばいとゞ寐られぬ夜の雪　（蕉翁句集）

冬季（雪）。

語釈　**○深川雪夜**　「フカガハセツヤ」。「深川」は芭蕉庵を指す。その雪の夜の意。「筆を江上の潮にそゝぎて、つゐに蕉庵雪夜のともし火に対す」（『続の原』句合跋）「**Xetya.　Yuqino　yo.**」（『日葡辞書』）。**○いとゞ寐られね**　ますます寝られないことだ。上に「こそ」がないのに「寐られね」と、打ち消しの助動詞の已然形で結んだのは、それだけ籠められた感情が強いのである。穎原博士が『新講』で蕪村の「大文字や近江の空もたゞならね」の例を引き、「ぬ」「ず」等では余意を尽すに足りないからで、「こそ」の略ではないとされたのも同じ立場であろう。当面の句の場合、「寐られず」では尋常に過ぎ、「寐られぬ」では下に続く感じもあって、句切れがはっきりしない。「ね」が選ばれた所以である。「日比は人の詣ざりければ、いとゞ神さび物しづかなる傍に」（『幻住庵記』）「ねられずやかたへひえゆく北おろし　去来」（『あら野』巻七）「**Itodo.**」（『日葡辞書』）。**○夜の雪**　「夜の雪」。

大意　憂さを晴らす為に酒を飲むと、一層寝られないことだ。寂しい夜の雪は、しんしんと降り積る。

考　『泊船集』に「深川夜雪」と前書があり、支考の編んだ『本朝文鑑』（享保三年刊）には「閑居ノ箴」と題した左のような文と共に句を出している。

あら物ぐさの翁や。日比は人のとひ来るもうるさく、人にもまみえじ、人をもまねかじと、あまたゝび心にちかふなれど、月の夜、雪のあしたのみ、友のしたはるゝもわりなしや。物をもいはず、ひとり酒のみて、心にとひ心にかたる。庵の戸おしあけて雪をながめ、又は盃をとりて筆をそめ筆をすつ。あら物ぐるおしの翁や。

初出の『俳諧勧進牒』（路通撰、元禄四年春跋）成立以前深川に居た冬の作であるから、元禄元年冬までには成っていた筈

で、路通の撰著に初出するところからして、彼が江戸に居た元禄元年の冬が就中有力であろう。土芳の『蕉翁句集』が貞享三年とする根拠は明らかでない。その異形「寐られぬ」も、同じ土芳の『蕉翁句集草稿』が「寐られね」なので、恐らくは伝写の間の誤りと思われる。

『本朝文鑑』所載の文章は、「閑居ノ箴」という題は支考の付したものらしいが、この句の時の芭蕉の心境をよく悉したものといえよう。草庵に独居して人を謝し、閑に住するのは隠者本来のあり方であるが、雪月花の佳興には友もがなと人を慕う心が動くのも人情である。ところが訪い来る友とてないので、寂寥に堪えず「ひとり酒のみて、心にとひ心にかたる」ことになり、頭が冴えていよいよ寝られない。そういう気持を託したのがこの句である。加藤楸邨氏が、

> これは徹底した独詠の句である。自らもてあました嘆息が聴かれるようである。「酒を飲むと思いがわきあがっていよいよ眠れない」というので、「夜の雪」は眼前の景である。「酒を飲むといよいよ眠れないが、夜の雪を見るとなぐさめられる」というのではない。
> 「深川八貧」の如き興じた作品に、芭蕉庵生活の俳交の面を見ると共に、この句などに、孤独の面を見て、あの逸興の姿も、実は、こうした孤独の上に立っているのだと感じないではいられない。（『芭蕉全句』）

と述べられた通りで、「寐られね」の深い詠嘆が生じて来る由来も、その点にあろう。支考の『葛の松原』（元禄五年成）に、「世に切字の発句といふ叓あるべし」としてこの句を挙げたのも、「寐られね」の詠嘆の深さを、形式の面から言ったものであった。

索引

凡例

一　語句索引には本位句として注釈を加えた発句と前書の中の語句のみを標出した。

一　活用語は原則として終止形で標出し、排列は発音に準じて、仮名遣にはこだわらない。

初句索引

あ行

か行

さ行

た　行

な　行

は　行

ま　行

や　行

ら行

わ行

語句索引

あ行

か 行

さ行

た　行

な行

は 行

ま行

や　行

ら 行

わ 行

阿部正美（あべまさみ）
昭和7年　東京生。
現在　専修大学教授。
著書『芭蕉連句抄』（1～12）
『芭蕉伝記考説』（行実篇・
作品篇）等。

芭蕉発句全講Ⅱ　定価一〇、〇〇〇円
（九七〇九円）

平成七年十一月十日発行

著者　阿部正美

発行者　明治書院　三樹譲

印刷者　大日本法令印刷　田中忠

発行所　株式会社　明治書院
東京都千代田区神田錦町一-一六
振替口座　〇〇一三〇-七-四九九一
電話（〇三）三二九二-三七四一（代）

　ISBN 4-625-51065-1　製本星共社